
超次元ゲーム ネプテューヌmk2 OG

ME-GA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲーム ネプテューヌmk2 OG

【Nコード】

N2700W

【作者名】

ME-GA

【あらすじ】

プラネテューヌに住む平凡な少年、キラは風評もいい老若男女問わずの人気者。

しかし、とある出会いで少年キラは女神様を救うという少女、ネプギアと旅をすることになる。

自分を知るために。

あの人のため――。

物語の幕はとうの昔に上げられていた。

『俺達が女神様を助けます!!』

前作『超次元ゲームネプテューヌ OG』の続編です。

前作はあまりにストーリー順次しすぎたので（台詞もほぼまんまだし）今回はオリジナル多めで頑張ります！

新たなOGに刮目せよっ！

CHARACTER DATA (前書き)

※新キャラ・情報が出次第、随時更新

CHARACTER DATA

キラ

超次元ゲームネプテューヌmk2 OGの主人公。（オリ主）

プラネテューヌに住む少年。

困っている人を放っておけないお人好し。

アンチ犯罪組織のため、トラブルに巻き込まれることは日常茶飯事。

イメージはフロップीडィスク？

>i30151—623<

ネプギア

原作主人公。

プラネテューヌの女神候補生『パープルシスター』で守護女神『パープルハート』の実妹。

しっかり者で優等生。

ユニ

ラストイションで出会った少女。

重火器を扱う比較的危ない娘だが実はラストイションの女神候補生である『ブラックシスター』。

キラに一目惚れした模様。

アイエフ

プラネテューヌの諜報部員。

ネプギアの友人と言っているが果たして……？

コンパ

プラネテューヌ政府立病院に勤める新人ナース。

ネプギアやアイエフと幼馴染みというが……？

パープルハート。

プラネテューヌの守護女神でネプギアの実姉。

現在はマジエコンヌに敗北し、ギョウカイ墓場に囚われている。

グリーンハート

リーンボックスの守護女神。

現在はマジエコンヌに敗北し、ギョウカイ墓場に囚われている。

ブラックハート

ラストেশヨンの守護女神。

現在はマジエコンヌに敗北し、ギョウカイ墓場に囚われている。

ホワイトハート

ルウィーの守護女神。

現在はマジエコンヌに敗北し、ギョウカイ墓場に囚われている。

マジエコンヌ

犯罪神と呼ばれる謎の存在。

女神4人相手に苦戦することなく勝利するなど、強大な力の持ち主。

マジック・ザ・ハード

マジエコノヌに仕える女性。

犯罪神に似た残虐な性格でモンスターを生み出す謎の能力を持つ。

ジャッジ・ザ・ハード

マジエコノヌに仕える黒い機体。

理性を持たず凶暴な性格——だが時には落ち着いていることも。

トリック・ザ・ハード

マジエコノヌに仕える黄色の機体。

重度のロリコンのようでしばしば誘拐してくることも。

ブレイブ・ザ・ハード

マジエコノヌに仕えるトリコロールの機体。

正々堂々とした犯罪組織にしては珍しい存在。

下っ端

犯罪組織に組する少女。

ガサツで乱暴な行動をとり、マジック・ザ・ハードを敬愛している。

ネズミ

プラネテューヌで倒れていた大型のネズミ。

随分と挙動不審。

青年

黒いコートを纏った謎の青年。

執拗にネプギア達を尾け回る。

実力はかなりのもので、候補生二人を相手にしても圧勝できるほど。
目的は――？

PROLOGUE k2—TUTERIAL

異世界『ゲイムギョウ界』――。

巨大な一つの浮遊大陸の上に4つの大都市を所有する確立された次元の世界――。

この大陸は、本来は一つではなく、4つの大陸に分かれていた。

それがなぜ、こうして一つの大陸になっているのかと言えば、それは今から2年ほど前に起きた大陸変動がその始まりであった。

こうして4大陸全てを同時に襲った大地震、それは次第に4つの大陸を引き合わせてやがては一つの巨大な大陸を作り上げた。

大陸が繋がった直後は多くの人々が混乱を喫していたが、それも一週間を過ぎれば収まり、そこから目まぐるしいほどに各大陸――現在には『都市』として機能しているが、ともかく各都市は様々な発展を遂げていった。

技術水準の高い『プラネテューヌ』はラステイションの技術だけでなく、遂にはルウィーの魔法技術までも吸収し、更なる発展を目指した。

発展率の高い『ラステイション』はプラネテューヌの技術を取り込み、独自の方法と貿易で更なる発展を目指していった。

緑多き『リーンボックス』はここ数年で驚くほどに発展を見せ、中世風の町並みはいつかからかプラネテューヌを然とした建物が建ち並

び、軍事国家として栄えていった。

雪が覆いし『ルウィー』は変動により様々な気候の見られる地域に変貌したが、魔法文化は衰えを見せず、かつての風習を残しつつ新たな技術を生み出していった。

こうして4大陸、今では4都市は様々な交流を経て、新たな姿へと変わっていった……。

しかし、その中で問題とするべきことも多岐にわたってある。

各国の交流が始まったことで起きる貿易問題や風習の違いからのいがみ合いや衝突、領土問題、ギルド問題などもある。

人々は日々争い、血で血を洗うような抗争の毎日——人々が出会えばそれだけ争いが生まれていった。

その問題はじきに収まることとなる。

守護女神、各大陸を守護していた女神達の権力もいまだ健在。かつて先代の女神にして世界の終焉を望んだ『マジエコヌ』を共に打ち破った仲間として互いに手を取り合い、共存していくことを誓った。

しかし、光が照らしたように思えた事態も急変することとなる。
かつて永遠の彼方に封じ込めたと思われていたモンスターの再来。
たちまち大陸はモンスターに覆われて人々は居住区を奪われていった。

そして、犯罪組織『マジエコンヌ』と呼ばれる謎の組織の出現。
違法ディスクと呼ばれる奇妙なアイテムを大陸全土にばらまき、
それによりショップは枯れ、クリエイターは飢え、あらゆるギョウ
カイ人が全滅したかに思えた。

無法世界とは縁遠いゲームギョウ界も、マジエコンヌの登場以来、
人々のモラルは低下の一途をたどるばかりで、もはや大陸人口の大
半はマジエコンヌを崇めつつある。

取り締まるべき政府も何故かスルーしまくりで、とにかくゲームギ
ョウ界は滅茶苦茶に、そこらの民度の低い無法世界になりつつあつ
た。

やがて、力尽きた者は『ギョウカイ墓場』へと送られて、永遠の暗
闇をさ迷うことになるのである。

ゲームギョウ界は、再びマジエコンヌの脅威に晒されようとしていた――。

PROLOGUE_mk2-TUTERIAL (後書き)

始まりました、新しいOGです

原作を一通りしていない&忙しくなるので更新頻度は遅くなると思います
ますが、付き合っていただけると幸いです

EP. 1 [BOY MEETS GIRL]

荒廃した大地。

その大地の上に佇む5人の少女と一人の女性。

——その光景はあまりに恐ろしく、神秘的で、そして美しかった。
何もかもが非現実的のしか思えないような、そんな情景。

紅き大地も、黒雲に飲まれた空も、おどろおどろしい色を放つオブ
ジェクトもそれら全てが劣るように、彼女たちが放つ雰囲気は尋常
ならざるモノであった。

そんな中に白いGパンに黒いTシャツを着込んだ一人の少年の姿が
あった。

いや、姿ではなく『影』か。

微妙に白みを帯びたその存在は、臃気^{ホログラム}で、まるで立体映像のように
薄い色素のように映し出されていた。

その姿は決して視認することの出来ない、言うなれば『意志』だけ
が存在している状態であった。

そんな臃気な存在の少年は、その光景をただ、ただ臃気に見つめて
いた。

「マジエコンヌ……」

これでもかと言うほどに伸ばされた紫の三つ編みを携えた少女は憎
らしげに彼女たちの目の前に立ちはだかる女性を睨んでいた。

まるでスィムウェアのように彼女の無駄のない身体に張り付いた漆
黒とも言える衣装。

背後、周辺に聳え、そして彼女を保護するように浮遊しているユニ
ット。

何より、異質を感じさせる蒼き双眸が女性を捕らえていた。

まるで数十年、数百年に渡り募らせてきた恨みをそのまま表しているかのように少女は恐らく女性のモノであらう名をそつとその唇から吐き出した

彼女の右手に握られた太太刀がゆらり、と彼女の動きに合わせて揺れる。まるで靡くように、見た目とは裏腹に重量を感じさせないその動きはどう取ってもこの世のものではないことをそのまま表しているかのように思えた。

「フン……」

マジエコンヌと呼ばれた女性は静かに鼻を鳴らし、まるで全てを見下すように、ただ視線を彼女たちに向けていた。まるで邪惡な何かに取り憑かれたように。

どこか物憂げな表情を見せつつも、やはり憎惡の念を映すように。それだけではなく、ありとあらゆる感情が入り交じったような、そんな曖昧な表情を浮かべて女性は優雅に椅子に座るように空中に腰掛けて艶やかしげに足を組んだ。

そして、今まできゅつと噤んでいた唇をそつと開いて全てを否定するような声色で静かに告げた。

「貴様達は邪魔だ」

その一言で、全てを理解したように少女達は一斉に険しい表情を更に険しくさせた。

しかし、それすらも愉しむようにマジエコンヌは静かに喉を鳴らし、笑い、そしてその端にいた一人の桃髪の一際幼げな少女に視線を向けた。

「……まさか候補生の娘を連れてくとは思わなかったな」

その一言に呼ばれた少女はビクと肩を震わせて物怖じする。その傍

らにいた三つ編みの少女はそつと彼女の右手に自分の左手を重ねた。まるで全てを包むように、優しい表情で言葉を投げかけた。

「大丈夫」

「お姉ちゃん……」

彼女を姉と呼んだと言うことは彼女がその妹だと言うことだろうか。

まだ不安げな表色を映しつつも幾分か安心したような表情を浮かべて握っていた武器にそつと力を込めた。

それを見て安心したようにそつと頷き、また表情を険しくさせてマジエコンヌを睨む。

そんな状態を、それすらも、狂ったように歓喜に染まる瞳で見下すようにマジエコンヌは見つめていた。

それ程までに、その世界は壊れていた。

「マジエコンヌ、もう諦めた方がよろしいのではなくて……?」

上品な言葉で、長い緑の髪をポニーテールに結わえた少女はそつと告げた。

それに続くように――

「そうよ、貴女は私達に一度敗れている。勝ち目がないことくらい分かってるでしょ?」

勝ち気な態度で煌めく銀の髪をした少女が問い掛けた。

「もう二度とテメエの好き勝手にはやらせない……」

小柄な体躯の少女はそう言って静かに巨大な武器を構えた。

それに呼応するが如く、少女達もそれぞれの武器を構えてマジエコンヌを見る。

薄く、冷ややかな表情でマジエコンヌは目を瞑り、いつの間に右手に握られていた杖を揺らした。シャラン、と鈴のような音を発した後、空気が静かに揺れてその衝撃に少女達は思わず目を瞑る。

「……もう一度、闇に還りなさい」

三つ編みの少女は小さく、しかし力強くマジエコンヌに告げた。それすらも嘲笑うかのように、マジエコンヌは不敵に笑いそして小

さく呟いた。

「還るのは、お前達さ」

今までとは違う。

まるで地獄の底から聞こえてきたようにマジエコンの妖艶な声とは違う、悪魔のように、魔人のように――しかし、『鬼』とは違うとてつもない邪悪なオーラが、彼女を渦巻いていた。

背筋の凍る思い、とはこのことだろう。

そう少年は直感した。

恐ろしいほどまでに感じる神秘的な美しさ。

彼女たちが放つ妖しげな、危険な雰囲気すらも見る者を魅了するような、そんなオーラを少年は感じ取っていた。

ただ、何もかも――。

少女達は、それぞれが持っていた武器をもう一度構え直して女性へと突っ込んでいく。

それはまるで、『終わり』を表しているようで――。

＊

たった一瞬、とも言える。

彼方への時が流れたようにも見える。

まるで永遠の刹那のようなどっちともつかない、そんなごく曖昧な時間の後に少女達は地に倒れ伏していた。

呻き、痛み、苦しんでいた。

そんな彼女たちの中心に、マジエコンは居た。

たった一度も崩すことの無かった微笑を相も変わらず浮かべて、地に転がる少女達を一瞥してまるで快楽に溺れるように身を震わせた。

「ククク……それが貴様達の力か……」

抑えきれない衝動に身を震わせて小さく、そんな声を上げた。

まるで何もかもを飲み込まんとするように。全てを消し去ってしま
いそうなそんな危険な香り。

なおも立ち上がりとうとする紫の少女に杖で一撃を叩き込み、ギリギ
リと押さえつける。

「う……」

目を瞑り、苦痛に耐えるように小さく声を漏らす。

そんな彼女を見て、マジエコンヌはより一層の嘲笑を浮かべて少女
を見る。

「ハハハ……無様だな！　これがお前達と私の力の差だ！」

ひとしきりに高笑いを木霊かせた後に、マジエコンヌは少女達を一
瞥して考え込むように顎に手をやる。

「ふむ……どうせなら残る女神信仰者共に絶望を与えてやるのも悪
くない、か……」

マジエコンヌはチラと一際切りだった崖の上に視線を向ける。

そこにはいつからこの光景を見ていたのかは分からない、どこかマ
ジエコンヌに似た雰囲気放つ女性がそれを見下ろしていた。

「マジック！」

マジエコンヌは彼女に呼びかける。

マジックと呼ばれた女性はそっとその崖から降り立ち、そしてマジ
エコンヌの脇まで寄り、そしてそっと頭を垂れる。

「見せしめにしろ。私に逆らう愚か者共を黙らせるには十分だろう
？」

「了解いたしました」

『マジック・ザ・ハード』は淡々と彼女の指示に従い、ゆっくりと
彼女たちに歩み寄る。

未だ失せることのない意識の中で三つ編みの少女は傍らに倒れる彼
女の妹に視線を向ける。

「お前達は邪魔……。本来ならば命を奪うところではあるが、お前
達には少し働いて貰うでしょう」

にやり、とマジックは不適に笑みを零す。邪悪きったその笑みに桃髪はなの少女は動かない身体をビクリと恐怖に揺るがす。

「お前達を贄ひにして、更に『犯罪神』様の信者を募る。女神が囚とらわれたとなれば、最早あの世界に救世主など居るわけもない……」

カツン、と彼女のヒールが音を立てる。その瞬間、彼女の足下から黒雲が渦巻く。次第に勢いを増し、強大な影を作り出して彼女たちに恐怖心を植え付けた。

「ッ……！」

「すぐにはやらん。たつぷりとお前達に恐怖と痛みを与えてから殺してやろう」

マジックはパチン、と指を鳴らした。そしてそれを皮切りに黒雲の化け物は次々と少女を拘束し、飲み込んでいく。まるで連行されるように。

「ッ!？」

「ぐ……!」

「っあ……!」

少女達の呻うめきが途切れて、黒雲が晴れる。

何も居ない。恐らく連れて行かれたのだろう。

その状況に桃髪はなの少女は戦慄する。

(殺される……!)

内心、既に恐怖で一杯だった。

しかし、彼女たちが消えていくのを目にして、沸々と彼女の中に怒りとも言えるそんな感情が溜まりつつあった。

「なんで……!」

「何を言ったところでもう遅い。さらばだ、犯罪神様に逆らうという愚行を侵した自分たちを呪うことだな」

マジックは左手を降ろし、黒雲の化け物に指示を下した。

二人の少女に化け物が襲いかかる。

『や め ろ ! !』

叫び。

少年は叫ぶ。

少年は走る。

届くことはない。

そうどこかで理解しているはずだというのに。

黒雲が二人を飲み込もうとした瞬間だった。

「ッ！ 逃げて！！」

三つ編みの少女が桃髪の少女を押しつけた。

化け物はただ一人、三つ編みの少女を飲み込んだ。

その中で苦しい表情を浮かべる少女は次第に闇に飲まれていく中で叫んだ。

「逃げて……！ 貴女だけでも……！！」

その光景を目の当たりにして、少女は目を剥く。

まだロクに動かせない身体をヨロヨロと立ち上がらせて、ゆっくりと。

「お、姉……ちゃん……？」

がくん、と力が抜けて地に膝をつく。

未だに現状を理解できていないのか、呆けたような声で姉を呼ぶ。

マジックは忌々しそうに表情を歪めて、もう一度化け物に指示を出した。

「行け！ 逃すわけにはいかない！！」

化け物は大きく咆吼を上げて勢いを付けて少女に突っ込む。

もう力を使い果たしたのか、はたまたはまだ呆けているのか少女はそこから一步も動こうとしない。

『ッ！』

少年が彼女に手を伸ばそうとした瞬間だ。

まるで何かに喰われたように、地面にぽっかりと大きな穴が開く。
そこに座り込んでいた少女は何の抵抗をすることもなく重力に任せ
て地面を落下する。

『な——！？』

あまりの出来事に少年の意識は目を剥く。

しかし、すぐに淵に立ちそして少女に向かって手を伸ばす。

届かない。

触れない。

見えない。

そう、理解しているはずなのに手を伸ばさずには居られなかったのだ。

互いの薄れる意識の中で、少年と少女の手は、静かに重なった——。

☆ ☆ ☆

気分、最悪に近し——。

少年は日光の差し込むベッドの上でそう感じた。

ほとんど悪夢に近い夢を強制的に見せられた挙げ句、オマケにその
内容はあまりに中二臭い痛々しい設定内容のモノであった。

美少女軍団が世界滅亡（？）を企む美女に勝負をけしかけるという
何ともな内容。

しかも、善戦することもなくあっさりと敗北し、そして敵に捕らわ
れるという最早エロゲーを喫するほどの末期な内容だ。

微妙に疲労感の漂う、まるで『全速力で走った後のような』気怠さ

と『全力で腹の底から声を出したときのような』喉の痛みを感じつつ、そしてそれに首を捻りつつ少年は上体を起こした。

全身に嫌な汗が噴き出している。そんな嫌悪感を纏いつつ、少年は傍らに放置してあった携帯に手を伸ばして時刻を確認しようと開く。時刻9・00。少年にとっては十分に遅い時刻だ。

本日は特に予定がないと言っても、早起きは三文の得というらしく、彼にとっては少しばかり気の削がれる出来事だ。

縮みきった全身を伸びをすることでまた元に近い形に戻してふとベッドに視線を移す。

「……？」

少年はそこまでしてようやく違和感に気付いた。

自分が眠っていた真横に不自然な盛り上がりが形成されているのではないかと。

布団の類ではないと断言できる。

何故なら、その盛り上がりは紛うこと無い『人間』の形に不自然な形を作っていたからだ。

少年の表情に次第に動揺ともとれる色が浮かぶ。

恐る恐る伸ばす手はブルブルと震えている。

そっと物怖じするように布団の端に手を伸ばして、そしてひと思いにはね除ける。

「……ふわ」

思わずそんな阿保みたいな声を漏らした。

見る者すべてを魅了してしまうような艶やかな桃髪、幼さを残したそれでいてどこかしっかりしているような顔つき、まるでシルクのように柔らかそうな肌、まだ発展途上とも思われる小振りな乳房――。そんな少女が、全裸で、少年と同じベッドの上で、安らかに、寝息

を立てていた。

「……」

恐らく、そんな感じの無言で数分が流れただろう。

少年はみるみる顔面を紅く染め上げてバサツと布団をもう一度少女の上に被せた。

「な、なななな、な！ ……な！？」

相当混乱を来しているのだろう、まるで壊れたラジカセのように何度も同じ言葉を繰り返す。

全身を混乱と興奮に揺らして頭を抱えて床に座り込む。

「なな、なんで……！？」

ようやく言葉を発するがまだ混乱が続いているらしかった。

少年は何度も少女の顔と部屋のあちこちを見回して、そして頭を抱える。

彼からすれば、身に覚えの全くない不可解な現状である。しかし、こうした現状を何も知らない第三者が見れば少年は最悪警察のお世話となることだろう。

少年はゆっくりと立ち上がり、兎も角と静かに部屋の中を不審者の如く探し回り始めた。

何処かに彼女の服が無いかと思いついて行動に立ったわけだが、どういうわけか彼女の服らしきモノはこの家の何処にも見当たらない。

そのことに不審を抱き、眉をしかめる。しかし、そうなると彼女が目覚めたときに目のやり場に困る。仕方なく少年は棚から自分には小さくなった服上下一式を揃えて彼女の傍らに置く。ここであれば目を覚ましたときに着てくれるだろうと思い、とりあえず少年は椅子に腰掛ける。

「ツツツ！ どうしてこんなことになってんだ？ 昨日は――」

少年の記憶では昨日は通常通りに起床、簡単な朝食を済ませて畳にしている商店の手伝いと少々のクエストをこなし、帰路について軽めの夕食を取った後に簡単な身支度を済ませてそのまま就寝した

はずだ。

ならば、どうしてこんなことになっている――？

そんな思いが何度も思考する。もうこれで何巡目だ、と少年は心中で己自身に突っ込みを入れてチラと少女に視線を戻す。

そこで少年は違和感に駆られた。

どこか見覚えのある顔だ、と。

もちろん、彼と同じほどの年代の知り合いは数多いが、それでも彼女のように異彩を放つ神秘的な知り合いはいないし、持ち合わせたこともない。

それでも何か懐かしいような、そんな雰囲気放つ少女だった。

「……！」

しばらくそんな思いにふける中で少年はピクと眉を動かした。

それは、つい先程までに見ていた少女――。

「夢の……！」

夢の中で唯一、逃げ延びた少女。いや、あれは逃げ切れたのかとは定かではない。

しかし、彼女の姿はあまりにもあの時の少女と酷似していた。

あの時、自分が手を伸ばした少女――。

「なん、で……？」

少年の上ずった声が静かに部屋の中に響く。

まさか夢の中から具現化してきた、なんて馬鹿馬鹿しい考えが一瞬、少年の脳裏をよぎる。

いや、あまりに馬鹿げた話だと少年は首を振る。そんなどこぞのアニメであるような展開があるものかと自分の思考を嘲笑う。

しかし、とてもではないが偶然とは考えにくい。

ならば、どうして――？

思わずぐくりと唾を飲む。何も考えられない。

ただそれを見た瞬間から目を離すことの出来ない、奇跡のように。

悪戯か、運命か。

己の見えない空間で、時間で、一体何が動いているというのか。

そのことに思わず身の毛がよだつ思いを感じて、少年は暫しの間だけ少女を見つめ続ける。

震える右手を彼女の頬に添える。

彼女が起きる気配はない、しかし彼女は今にも目覚めてしまいそうなそんな雰囲気纏っていた。

次第に息が荒くなっていく。動揺？ いや、それとも戦慄？ だから気づけなかった。

——彼女が覚醒していることに。

「……」

「……」

視線が交じる。

先程とは違う意味で息が荒くなる。これこそが動揺だ、と思ってもそんなことは今の彼には全くもってどうでもいい事柄だ。

何故なら、今の彼は彼女の上に跨っていたのだから。いつ、こんなことをしたのかは分からない。気づけば少年は少女の上にいた。

『もう……言い訳できない……』

少年は破滅を感じた。

「——ッ！」

「キャ————ッ!!」

少女は可愛らしい悲鳴を上げて、少年の右頬に鉄拳を叩き込んだ。

少年の身体が宙を舞う。そして、落下。

『よし、いい朝だ……』

少年は、薄れる意識の奥でヤケクソ気味にそう感じた。

少年、『キラ』は自嘲気味た笑みを浮かべてそのままそっと目を閉じた――。

EP. 2 [BOY MEETS GIRL 2] (前書き)

投票募集!

http://ncode.syosetu.com/n4730v/3/

EP. 2 [BOY MEETS GIRL 2]

キラは日光の差し込むベッドの上で目を覚ました。

ほとんど悪夢に近い夢を見ていた気がする——と未だ醒めない頭でそう感じた。

世に存在するのも奇跡に近いような美少女が自分の隣で眠っていたというモノだ。

そして、自分はそのまま彼女に殴り飛ばされて昏倒するという最悪のシナリオである。

微妙に痛みの走る、まるで『誰かに思いきり殴られたような』鈍痛と『宙から落下したような』軽痛を感じつつ、そしてそれを訝しみつつ、キラは上体を起こした。

全身に嫌な汗が噴き出している。そんな嫌悪感を纏いつつ、キラは傍らに放置してあった携帯に手を伸ばして時刻を確認しようと開く。時刻10…30。キラにとってはかなり遅い時刻だ。

本日は特に予定がないと言っても、早起きは三文の得というらしく、キラにとっては少しばかり気の削がれる出来事だ。

縮みきった全身を伸びをすることでまた元に近い形に戻してふと周りを見渡した。

「……？」

キラはそこまでしてようやく違和感に気付いた。

昨日まで多少散らかっていたはずの部屋がすっかり見違えるほどに綺麗になっているではないか、と。

キラの表情が次第に曇っていく。

そして、再び違和感を捕らえた。

「…♪…♪…♪…♪…」

妙な音、いや声、歌か。

キッチンの方面から、恐らく若い女性のモノであろう鼻歌がキラの耳を突いた。

キラは瞬時に理解した。不審者だ、と。

何故なら、キラは一人暮らし。誰もいないはずなのに誰かが居るということはその選択肢以外には有り得ない。

物怖じしつつ、立てかけてあった己の武装である太刀に手を伸ばす。そつと静かにキッチンの扉の脇に隠れて、そして一思いに扉を開け放つ。

「……ふわ」

思わずそんな阿保みたいな声を漏らした。

見る者すべてを魅了してしまうような艶やかな桃髪、幼さを残したそれでいてどこかしっかりしていそうな顔つき、まるでシルクのように柔らかそうな肌、まだ発展途上とも思われる小振りな乳房――。そんな少女が、全裸にエプロン姿で、満足げに、キッチンで、料理をしていた。

「……」

恐らく、そんな感じの無言で数分が流れただろう。

キラはみるみる顔面を紅く染め上げて、右手に握っていた太刀をカシャンと地面に落とす。

その音で少女もキラの存在に気付いたのか、少しばかり恥ずかしそうに頬を朱に染めて微笑を浮かべる。

「こ、こんにちは」

「……（ガスッ）」

キラは無言で強かに己の額部を壁に叩き付けた。

「!？」

少女はそのあまりにもいきなりの光景に驚く。

いや、普通は壁に勢いよく額をぶつけている人間を見たら驚くモノなのだが。

少女は慌てたような表情ですぐさまキラに駆け寄り、声を掛ける。

「だ、大丈夫ですか!？」

「ダイジョウブ、マツタクモンダイナイヨ」

「全然大丈夫じゃない!？」

明らかに異常なキラを見て少女はますます衝撃を受ける。

ケタケタと虚無的な、いやどちらかといえどロボットのようにかくカクと堅い動きでキラはぎこちない笑顔で答える。

「マサカソソナワケナイジャナイカ。コノオレガドウヨウダナンテソソナバカナ……」

「あの……ホントに大丈夫ですか？」

少女は少し引き気味にキラにそう問い掛けた。

しばらくそんな動作を続けた後にキラは『ハッ!？』とか言って通常の表情に戻る。

「え、えーと、スマン。少し驚いた」

「あ、いえ、私の方こそスイマセン。勝手にキッチン借りちゃって……」

少女は申し訳なさそうに肩をすぼめる。

「あ、ああ、気にしないでくれ。だからとりあえず服着ようか」

キラはそこまで言って視線を少女から外した。

少女も気付いたか、少し居心地の悪そうに苦笑を浮かべる。

キラは視線を外したまま、自分が今し方出てきたドアを差して声を上げた。

「とりあえずベッドの脇に俺の古いのがあるからさ、それ着てよ。

嫌だろうけど」

「あ、そんなことないです。有り難いです」

少女は両手を振って否定の色を見せる。

キラはできるだけ少女を視界に映さないようにして、少女はその間にリビングに消えていった。

「……ハァ」

助かった、とばかりにキラは溜息を吐く。

流石にあれ以上美少女、しかも半裸を見続けていれば何をするか分からなかったのがキラの心情であった。

湧き出た邪心を振り払うようにキラはブルブルと首を横に振る。

そしてそれと同時に先程まで感じることの無かった芳ばしい香りにはたと気付く。

そつと腰を上げてキラはキッチンテーブルの上を覗き込む。

豪勢、とは呼べずも一人暮らしで多忙な彼にとってはかなり嬉しい手料理の数々だ。

そして、彼女がキッチンに立っていた。

ようやくキラは得心がいった。

彼女は朝食を作っていたのだ。

まあ、とは言ってもこの時刻では早すぎる昼食と言える気もするがそこは深くは考えない。

少し嬉しいような、照れくさいようなそんな感情がキラの中に生まれた。

少しばかり彼女の存在が気に掛かるところではあった。

しかし、この時、キラは心中で思った。

『飯くらい、一緒に食ってもいいよな……』

それは、数年来の彼の小さな願いでもあった――。

＊

キラと少女は互いに見つめ合ったまま動かない。

いや、というよりはキラは少女から少しばかり視線を外しているが、一応、彼女に丁度合いそうな衣装を選んだつもりではあったが、やはりキラの服装では大きかったらしい。

彼女が息をし、揺れる度に彼女の胸元がTシャツの襟元からチラチラと見えてしまう。

そうして結局目のやり場に困るまま、こうして食卓を囲んでいるのである。

キラは視線を下の料理の元に向けて微笑を浮かべる。

「う、美味そうじゃないか。食ってもいいか？」

「はい、どうぞ」

少女は満面の笑みでそう指示してきた。

キラはその料理の数々に舌鼓を打って、とりあえず手近のオムレツにフォークを伸ばす。ふわっと広がる甘く、芳ばしい匂いがキラの鼻を撫でる。

「あ……」

一口、食べやすそうな大きさにカットしてぱくりと口に放り込む。

その瞬間、口の中に先程に感じた香りが広がっていく。

思わずそんな声を漏らしたのだった。

「ど、どうですか？」

少女は、そう問い掛ける。

キラは咀嚼してから、ゆっくりと頷き口を開く。

「美味い……」

なんて素っ気ない——と、キラは己で感じた。

しかし、これ以外に言葉が見当たらないのだ。

これは単なる感動だったのかそれともっと別の意志だったのか——、なんて分からない。

ただ浮かんだ言葉をそのまま言い放ったようなそんなモノだった。

それでも少女は嬉しそうに頬を染めていた。

それを見て、自然とキラの頬も緩む。

「って！」

そこまで行っただころでキラはバンと勢いよく机を叩く。

もちろん、料理が零れないよう最低限の配慮はしたつもりだ。

少女はキョトンとした表情で首を捻る。

「色々聞きたいことがあるんだけど……」

「はい？」

その少女の表情を見て小さく溜息を漏らしたキラはいま一度、椅子に腰掛けて頬杖を付きながら少女に問う。

「俺の名前はキラね。君は？」

己の名を少女に教え、彼女にも問う。

『そういうことか』という風に少女は納得した表情をして胸元に手を当てる。

「ネプギア、です」

「ネプギアね……。それで何で俺の家にいるわけ？」

決して不機嫌なわけではなかった。

しかし、寝起きというのもありキラの表情は幾分険しいモノになっており、少女・ネプギアは少し身体を強張らせた。

「え、ええと……」

視線を外し、少し震えるネプギアにキラは後頭部を掻きながら答える。

「大丈夫。別に怒ってるわけじゃないからさ、ただ単に気になっただけだから」

「……」

と言うキラの言葉に安心したのか、ネプギアは深い安堵の息を吐き、記憶を探っているのだろうか腕を組んで何やらブツブツと呟いている。

それを暫く眺めていたが、急激に襲ってきた空腹感に押されてキラは並べられている料理の数々に再び手を伸ばし始めた。

「……う」

答えが浮かび上がったようである——が、何やら納得しがたいモノがあるようなそんな表情を浮かべてネプギアは冷や汗を垂らしている。

それに気付いたキラは少し不穏な表情で尋ねる。

「何だ？」

「えと……お、お……」

「お？」

何を言おうとしているのか、とキラは小首を傾げる。

まさか、重大な理由があるのではないかと少しキラにも動揺が走る。しかし、答えは意外にも——いや果たして意外と言えるのかではあるが答えは予想外のモノであった。

「覚えてないんです……」

ネプギアは申し訳なさそうに肩をすくめながらキラにそう言い放った。

「覚えてない？」

「はい……」

再確認するようにキラはネプギアに問い掛けるが、やはり彼女の答えは変わっていなかった。

キラは顎に手をやり、「ふむ……」と声を上げて思考を廻らせる。

（互いが覚えてないってコトは何もなかったんだよね……。誰かそうだと言ってくれ!!）

暫くそんな思考を悶々と繰り返していたキラは目の前のネプギアの異変に気付かない。

その表情は次第に曇り始め、まるで何事かを苦悩するように後悔するようにその小さな顔は俯き始める。

その可愛らしい唇は小さく開き、何かを呟く。何度も——。

+

そうだ……

私、ギョウカイ墓場にいたんだ……
それで、お姉ちゃんが、ううん……お姉ちゃんだけじゃない
女神様はみんな……みんな……！

私が弱かったから……
弱かったから、助けられなかったんだ……

ごめんなさい……
ごめんなさい……

十

「ごめんなさい……」
ネプギアの呟きで、キラは思考の中から意識を外界に向けた。
少女は小さな雫を目から流し、そしてポタポタと小さな雨を降らせて
いる。

「ッ！？」 だ、大丈夫か！？ 俺やっぱ何かした！？
自分の記憶にないうちに妙なことになるってすればそれは大変
だとしても言う風にキラは身を乗りだしてネプギアに矢継ぎ早に問い
掛ける。

それに対するネプギアはひたすらに涙を流し否定をの色を見せる。
「ううん……違うの……。そうじゃないの……」
口先では「違う」とは言っているモノの、キラは気が気ではない。
己、ではなく——今、目の前で少女が泣いているという事実こそが
キラの胸を締め付けた。

それだけではない、もしかすれば己のしでかしてしまったことで泣
いているかもしれないのであれば尚更放っておけるコトでもない。
「本当か？ どこか痛いとか……違うか？」

「うん、違うの……。ただ、凄く後悔してるんだ……」

「後悔……?」

一体何に——と言葉を紡ごうとしたが、しかしそれはネプギアの言葉に遮られる。

「だって、あの時私が動いていれば……こんな運命も、変わっていただかもしれないのに……」

ネプギアは視線を外してそう、悲しそうに呟いた……。

しかし、対するキラと言えば表情をもう青というか、もう白に近いんじゃないかと言うほどに青ざめて、唇も何もかも全身震えまくっていた。

そして震える腕をそっとネプギアの肩に回して

「運命ってことは……アレだよな?」

「うん……。こんな運命、受け入れるしかないよね……」

ネプギアは自嘲気味の笑顔でキラに答えた。

「ま、マジで……?」

キラは上ずった声で再度、ネプギアに問う。

だが、何度聞こうと答えが変わるはずもなく、ネプギアはただ無言で首を縦に振った。

Orzの格好でキラは項垂れていた。

（マジでか……。やっぱり昨日の夜に間違いが起こっていたってのか……!?!?）

キラは絶望的な感情の中で、チラとネプギアに視線を向けた。

彼女は落ち着きを取り戻しているモノの、頬はうっすらと朱に染まっており（泣いていた所為なのだが）、また何だかわけありげに下腹部に手を当てて（負傷した傷が痛んでいる）、何というかもうキラにとって絶望的な状況なのであった（10割ほど勘違いの成分が含まれております）。

視線を床に戻し、キラは小さく息を吐いた。

一度、気を落ち着かせようと心の中で陽気なステップを踏んでキラはネプギアと向き合う形に座り直す。

「えーと、まあ……なんだ。俺も覚えていないとはいえ、しゃーないか……」

と、一人で勝手に話を進めている。この時点で少し混乱を来していると言えなくもない。

その間、ネプギアはずっと頭上に？マークを浮かべていたわけであるが。

「ネプギアはそれでいいのか……？」

「はい。もうどうやってもこの事実を変えられませんから……」

二人とも話の内容には多分な誤解が含まれているというのに話があっていること自体、神の見えざる手が働いているような感じさえする。

キラは視線を落として、ずっとネプギアの前に自分の右手を差し出した。

「これからよろしく」

「ふえ……？ あ、よろしくお願いします……？」

ワケも分からぬまま、ネプギアも右手を差し出し握手を交わす。それから誤解が解けたのは数分の後である――。

「ま、何にせよ何もなくてよかったって話だな……」
「あはは……」

二人は酷くぐったりしたような表情でそう発言した。キラは心から安堵したような表情でコップを傾ける。しかしながら問題は未だ解決していないわけで――。

「と、とりあえず飯食い終わったら服見に行こうか」
キラはそつとネプギアから視線を外す。さっきから彼女が動きたびに見えそうで見えない一番もどかしい状態に陥っているのでキラと

しても気が気でない。

ネプギアも思い出したように顔を赤らめながら胸元を押さえた。

＊

「ネプギア、これ」

キラは自分がいつも着用している黒いコートをネプギアに差し出す。

「え？」

いかにも不思議そうにネプギアが声を上げる。

軽く差し出されたコートを見てネプギアは小さく小首を傾げる。

「これ、羽織っとけ」

「でも暑いし、大丈夫ですよ」

「お前はその状態で外を出歩くつもりか」

キラに呆れたような視線を送られて『ああそうか』と苦笑を浮かべてネプギアは快くコートを受け取る。

ネプギアには多少大きめだが、これくらいでまあ大丈夫だろうとキラは解釈して彼女を連れて早々に家を出る。

外は雲一つ無い晴天——とは言えずともそれなりに気持ちのよい青空が広がっており、キラは思わずその太陽光に目を瞑った。

（今日は一段と眩しいな……）

なんて他愛のないことを思いながら傍らを歩む少女をチラと見る。何故だかご機嫌のような、鼻歌を交えながら軽快なステップでゆっくりと自分の一歩前を歩くネプギアを見てキラは少し微笑ましい感情を抱く。

まるで太陽が、花が、木が、全てが彼女を祝福しているようなそんな雰囲気醸し出す少女に何故だかキラは心を強く惹かれたのだ。そんな彼女を呆然と見つめていたキラに、ネプギアは屈託のない笑顔を向けながら声を発した。

「いい天気でよかったですね」

「ッ、あ、ああ。洗濯物、干してくればよかったかもな」

いきなり彼女にそう声を掛けられて、キラはドギマギしつつそう答えた。

「ホントですね〜」と言ってネプギアは気持ちよさそうに天を仰ぐ。そんな彼女が限りなく——美しい。

キラはまるで勝利の美酒に酔いしれるように、今、この時に彼女と共にいられることがとてつもなく幸せ、まるで天から使わされた優しき運命のように受け入れられた。

——心臓の音さえも、五月蠅く感じる。

まだ、彼女の声を聞いていたい。

彼女の姿を捉えていたい。

彼女の全てを包んでいたい。

そう、思えるモノだった。

けれど——

「その仲のいいお二人さん♪」

それは、一人の女性の声で掻き消された。

「ッ！」

まるで憤怒するように、理不尽な怒りをぶつけるつもりでキラは鋭い視線を声の方に向ける。

そこには黒いネズミをあしらったフード付きのコートを羽織った、一見少年のような雰囲気纏う少女がにこやかな笑顔で二人に向いていた。

肩には物騒にも少しばかりひん曲がった鉄棒を担ぎ、いかにも『悪』というのを絵に描いたような出で立ちの少女だ。

「何か？」

少しばかり不機嫌そうな声でキラは少女に問い掛ける。

しかし、そんな彼とは裏腹に少女は無邪気なように笑いながら言葉を続ける。

「まあまあ、そう時間はとらせないからサ。聞くだけでも聞いていてよ」

ネプギアもそれに興味を示したのか、いつの間にかキラの隣に立って少女の言葉を聞き入っていた。

キラは小さく溜息を漏らしつつも、彼女の言葉に耳を傾ける。

「最近は何価も高いだろう？　そのクセ、給料や報奨金は右下がりになる一方だ」

「まあ、そうだな」

というか、最近では物価も徐々に下がりとあるのだがその分収入の方も下がっていくので大して変わらない状況にあると言うことはキラも重々理解している。

（この手の商法の奴らは早めに追っ払った方がいいんだがなあ……）
見た限りこの少女はかなりしつこそうだ、と直感し、どうしたモノかと彼女の言葉半分、キラは思考を廻らせていた。

「君達くらいの年齢だと、やっぱりゲームとかでたくさん遊びたいだろう？」

「まあ、そうかもな」

「うんうん」

キラはともかくとして、ネプギアは賛同するように頷いている。

「そこでだ、実は出費しなくともゲームを遊べる方法があるんだなあ、コレが」

その瞬間にキラは一気に表情を厳しくさせて強引にネプギアの手首を掴んだ。

そして先程よりもっと低い声音で目の前の少女に告げる。

「間に合ってます、どうもありがとうございます。行くぞ、ネプギア」

「ふえ？　ちょ、痛いよ！」

そう声を掛けるネプギアを無視してキラはさっさと彼女を連れてその場を去っていく。

「あ、おおい！　まだ終わってないよ！！」

背後から先程の少女がそう声を掛けているが、キラはあくまでそれを無視して聞きたくないと言わんばかりに足早に街中を突き進んで

いく。

それから数分、歩いたところで

「い、痛い！　痛いよキラ！！」

と、ネプギアはあまりに悲痛な声を上げたところでキラはそっと彼女の手首から手を離れた。

「悪かったな、手荒な真似して」

「で、でもいくら何でもお話の途中で抜けるのは……」

ネプギアは先程の少女に申し訳なさそうに肩をすくめている。

キラはそんな彼女を見て小さく溜息を漏らし、口を開く。

「ネプギア、お前はもしかしたら知らないと思うがアレは犯罪組織の独特の勧誘方法だよ」

キラの言葉にネプギアは小さく声を発する。

「あんな奴らの言うことなんて聞かなくていい。ほら、さっさと服買いに行くぞ」

くる、と踵を帰してキラは手近のブランドショップへと歩んでいく。その背後で、ネプギアは肩を震わせていた。

「犯罪組織……マジエ、コンヌ……」

まるで深い因縁のように、ネプギアは恐ろしげに恐怖するように、何度もその言葉を呟っていた。

EP. 3 「DATE AND TREMBLE」

「キラ、これはどうかな？」

ふわりとブレザーと黒いスカートを浮かせてネプギアは試着室から姿を覗かせる。

「ん、可愛いんじゃない？」

「こっちもいいと思うんだけど」

白いドレス調の衣装を、社交界の挨拶のように軽く裾をつまみ上げてネプギアは「どう？」とキラに問う。

「うん、俺もいいと思う」

「これとかいいんじゃない？」

ショートデニムパンツとジャケットを組み合わせ、ネプギアはキラに問う。

「お、可愛い可愛い」

「むゝ……」

ネプギアは可愛らしげに不満そうな声で頬を膨らませている。

キラはしばらく周辺に視線を泳がせていたが、彼女の様子がおかしいことに気付き、視線を戻す。

「どした？」

いかにも不思議そうにキラはネプギアに問う。

「真剣に選んでくれない……」

「えゝ、選んでるんだけどなあ……」

キラはやりにくそうに頬を掻き、冷や汗を垂らす。

実際のところ、キラは流行には疎い方であった。一人暮らしのために生活費などに収入が飛ぶためにあまり流行の服などは購入したこ

とがないし、そもそもキラのようにクエストを受けて生活するよう
な者は大抵専用の装備店を利用するので流行とかそういうのはあま
りなく、実用性のみなのである。

「じゃあ、キラが選んでよ」

「え、俺？」

何故に彼女がそこまで不機嫌なのかキラには想像も付かなかったが、
あまりの負のオーラを叩きだしているためにキラは仕方なく店内を
軽く見て回り、これだと思ったものをチョイスしてみる。

数分してキラはセーラー服調のワンピースを携えてネプギアの元に
持ってくる。

「これとかよさそうじゃね？」

「そうかな？ それじゃあちよつと着てみるね」

と言って、ネプギアはその服を受け取りカーテンを閉める。

小さく溜息を吐いて、キラは壁にもたれ掛かる。

ぶっちゃけて――

（居心地悪っ！）

キラは心中でそんなことを叫んだ。

ざっと見る限り、男性客はなくどこもかしこも女性客ばかりでキラ
は目立って仕様がなない。

小さく縮こまってネプギアが出てきてくれることを祈りつつ、キラ
は天井を仰ぐ。

そしてゆっくりと目を閉じ思考を廻らせる。

こんなに楽しいのはまるで初めて――いや『久しぶり』ではないか、
と。

遙か遠き昔に感じていた感情が、いままた振り返る。まるで『あの
時』のように――。

（そうか……。もう五年も経ちまったのか）

キラは年月の流れる早さを改めて痛感させられた。

知れずのうちに溜息が漏れる。まるで、何かを忘れてきてしまった
ように後悔と自責の念が入り交じる深い息。

「キラ？」

「つぬおあ!？」

深い思考に囚われていたキラの目の前にネプギアは顔を突き出して、キラの顔を覗いていた。

目の前に彼女の姿を確認してキラは驚きの声で思わず後ろに仰け反って壁に強かに後頭部を打ち付けた。

「ッ~~~~！」

「だ、大丈夫……？」

申し訳なかった、という風に苦笑を浮かべてネプギアはキラの肩に手を掛ける。

「たぶん……」

キラは痛打した後頭部を抑えながら壁を支えにして立ち上がる。目尻に薄く水分が浮かんでいるがキラは泣かない。

「それで、どう？ 似合うかな？」

ネプギアはくると回転して全身をキラに披露目る。

白いワンピースもそれに合わせた靴も、まるで彼女のために作られたかのように違和感なく彼女の一部となっている。

「お、なかなか似合ってるな。それにするか？」

「ああ、でもお金……」

「いって。俺が払うから遠慮するな」

キラはひらひらと財布を揺らす。

しかし、ネプギアは腑に落ちなさそうに視線を背ける。

「ほれ、いいから行くぞ」

未だ渋るネプギアを無理矢理連れてキラはレジへと向かっていく。

「キラ、ごめんね」

ネプギアは顔の前で両手を合わせて謝罪のポーズをとっている。そんな彼女に微笑を浮かべながらキラは言葉を発する。

「いいってば。これくらいの出費、別に痛くないし」

キラは受け取った釣り銭を財布に流し込んでパチンと閉じた。

実際のところ、最近は特にこれといった大きな出費もなくこれくらいの出費で困るほどでもなかった。

「それに――」

と、その先までは言わなかった。

ネプギアは理解できない風に小首を傾げていたが、キラは何でもないからと諭して視線を外す。

（あのままだったら俺が社会的に抹殺されるところだった……！）
よくぞ持った俺の理性！と心中で自画自賛していたのであった。

「ホントにゴメンね……。ちゃんと身体で返すから」

「ぶっ！」

キラはゲホゲホと胸を叩いて呼吸を整える。

何を言っているんだこの小娘は！という風な視線を彼女に向けて顔をしかめる。

「あ、あのさ……自分で何言ってるか分かってるのか？」

「は、はい！　ちゃんとクエストとかいっぱいやってこの分稼ぐから……！」

「……あ、ああ。そういうことね……」

何だか酷く安心したようなガツカリしたような気持ちを抱えてキラは非常に疲れ切った表情を浮かべた。

「……キラはどんなことだと思ったの？」

「ナンデモナイデス」

無垢な視線が痛い、とキラは目を背けた。ここら辺はやはり年頃の少年と言うべきか、どっちにしても何というか……という感じである。

＊

ショップを出て暫く歩いたところでキラは思い出したように声を上げる。

「あ、ネプギア。ちょっと店に寄っていいか？」

「うん。どこのお店？」

「食料店だよ。夕飯の買い物してこねえと」

実は最近、キラはろくな食事もとっておらず買い出しもままならなかったために今日の朝食（昼食？）で材料が切れてしまっていたことを思い出し、買出しついでに出ていたのだったと今更ながらに思い出したのである。

ネプギアは何の疑いもなく了承し、二人揃って食料店へと足を向ける。

「そーいやネプギア？」

「何？」

「お前、ずっと俺と居るけど家に帰らなくても大丈夫なのか？」

キラの言葉に少し驚いたようにネプギアは表情を変化させる。俯き加減が少し大きくなり、その次には少し無理したような笑顔を作って見せた。

「だ、大丈夫だよ。たぶんお家に誰もいないし……」

「……そうか」

キラはその些細な変化は見逃せなかった。

しかし、彼女の密とする領域に踏み入るのは諦めて、たったそれだけを彼女に向けた。これも、彼なりの心遣いだ。

一人の辛さは、誰よりも彼が知っているから――。

空はすでに紅蓮に染まり、日が落ちようとしている。そんな空を寂しそうに見上げるネプギアは周囲の異変に気付かない。

もちろん、キラも――。

☆ ☆ ☆

肌で感じる空気は恐ろしく、張りつめたモノに変わっていた。

時折、撫でるように傍を駆け抜けていく風がサラリと少年にしては少しばかり長めに伸ばされた前髪を揺らしていた。

それは、まるで何もかもを映してしまいそうなほどに美しい頭髪。到底、男性とは思えないほどに美麗で、きつく紡がれている唇を薄く開き、青年はハアと深く吐息した。

その表情は目深に被ったフードで定かには出来ないが、それでも彼が憂いの感情を帯びていることは何となくではあるが感じ取れるだろう。

街中——それも結構な大通りの中に青年は独り、立っていた。

この時間帯であれば、昼間と比べて人通りこそ少ないモノの住民がこの通りを闊歩しているはずである。

しかしながら、今はそんな住民も見当たらず、ぽつんと世界に取り残されたように青年はその中に佇んでいた。

ジ……と軽く音を立ててジッパーが少し開かれる。漆黒にも似た色を持つコートの内側からはまるで雪のように白い肌が覗いていた。

そしてフードの所為で隠れていた青年の素顔がじわじわと紅蓮の日を浴びて晒されようとしていた。

しかし、その手は途中で止まる。

何か、見えない力が彼の動きを阻害しているような——いや、彼の意志がそれを止めさせようとしているかのようにも伺えた。

彼の胸元まで降ろされたジッパーが再び口元の位置まで上げられた。青年は、虚空に向かって何かを告げようと口を開く。しかし、戸惑ったようにそれは成されず、もう一度青年は深く吐息した——。

そして、人気のない街中を颯爽と歩いていく。陽の光に当てられて煌めく髪を揺らして……。

☆ ☆ ☆

「……？」

キラは不穏な空気に思わず顔をしかめた。

そして目線のみで周囲を確認するように、忙しく眼球を動かしている。

いつものような街ではない。

いや、自分たちは決してこの街からは出ていない。だが、まるで自分たちが全く見知らぬ土地に放り出されてしまったかのようなそんな異質感が漂っていた。

当たり前のことであることすらも、この空間では疑いを持ってしまふほどにこの空間は異質であったのだ。

地面に伸びる己の影法師も、しっかりと手入れされた街路樹も、何も言わずただそこに佇んでいるだけのハズの街灯も――その全てが世界を拒絶し、孤立しているかのように。

「キラ？」

ネプギアは見たことのないキラの表情に、心配そうな声を掛ける。

「いや……何でも」

彼女はこの異変に気付いていないのだろうか、キラはそんなコトを思い自分の感じている違和感も気のせいかと思う。

しかし、この肌にまとわりつくような嫌な気配は決して気のせいではない、とは思えた。

キラは腰に差している愛刀をチラと盗み見る。いつ何時、何があっても手を伸ばせるように抱えている袋の位置を調整する。

コツン……コツン……と二人の靴の音だけが紅蓮の空に響いている。まるで隔離された空間の中にいるかのように、その音はいつもよりも木霊しているかのようにも感じられる。

キラの視線が鋭く尖る。警戒の色を強めてできるだけネプギアと距離を詰める。いつでも彼女を連れて逃げ出すことが出来るように。

そして――。

「ッ！」

キラは袋を投げ捨てて目の前のネプギアを抱えて大きく飛び退いた。
「キヤ——！」

そして、その途端に先程まで二人が居た位置から濛々と砂煙が上がっていた。そしてそれに混じって石片がパラパラと飛んでくる。跳躍を終えて地面に降りる。キラは刀にそつと手を伸ばし居合の構えをとる。

「何——」

二人の視線の先に晴れ掛けた砂煙の先に巨体の影がある。無骨な体躯を持ち、禍々しい羽根のような装飾を持った人型。

キラは刀を持つ手に力を込める。

ブウン、と空を裂く音と共にキラの鼻先を何か、光る刃状のモノが通り、それに思わず身を引く。

自分を狙ったわけではない、恐らく武器を振るっただけ——キラは顔をしかめる。

砂煙は晴れ、人型の姿が露わになる。

黒い、漆黒に近い鋼鉄の身体を持つまるで機械のような身体に大きな槍のような武器を構えたモノがこちらを見据えていた。

「クク……グハハハハッ！ 本当にいたぞ……まさかこんな場所に潜んでいたとはなあ……！！！」

黒い機体は歓喜に酔いしれるようにそう小さく漏らした。

キラはまるでソイツの言うことが理解できない。表情を歪めて状況を見届ける。

しかし、ネプギアは違った。

「ジャツ、ジ……ザ・ハー、ド……」

途切れ途切れにネプギアは震える声で恐らくその機体の名前なのであろう言葉を零した。

その声に黒い機体、『ジャツジ・ザ・ハード』は肩を揺らしながら小さく答えた。

「ああ……そうだぜえ！ 俺はもう我慢出来ねえ！ 全てぶち壊す！ お前を殺す！！ 3年も待たされたんだ、せいぜい足？ いて見

せろおおお!!」

ジャッジは槍を振るい、震い猛る。

咆吼のみで衝撃波を発生させる、それにキラは両手で顔をガードしながらも視線をジャッジから外さない。

(マズイ……アイツの一撃は受けきれない……!!)

今までの流れからして、既に相手の力量を感じ取ったキラは内心でそう感じた。刀に添えていた手を離し、傍らでしゃがみ込んでいるネプギアに小声でそつと声を掛ける。

『おい……俺が合図したら――、ネプギア?』

「あ……ああ………」

しかし、キラの声は届いていないのかネプギアは肩を抱いて小さく震えている。つう、と彼女の色白の頬に涙が流れる。

「ッ!」

眼前に猛然と迫るジャッジが映る。

キラはネプギアを抱えて横に跳ぶ。少し地面を滑り、何とかジャッジの一撃を避けきる。

「フン……人間のクセにやってくれる……!」

忌々しそうにジャッジはキラを睨む。

しかし、キラは悟っていた。

(勝てる勝負じゃ、ない――!)

今のだってキラには避けるのも手一杯だ。ネプギアを抱えてというハンデもある。負けるのは目に見えている。

キラはもう一度、足に力を込める。ジャッジが突っ込んでくると同時に横に避け、そして細い道に逃げよう――そう考えた。

ジャッジは武器を構えて跳躍、頭上から二人を狙う。

「――!」

キラは一瞬の判断でその場を避ける。しかし、その直後に襲う衝撃波にキラとネプギアはゴロゴロと地面を転がる。

「ッ!」

キラは頭部を抑えてネプギアに視線を向ける。

まだショック状態なのか、呆然と虚空を見たまま動かない。
しかし、ボーッとしている場合ではない。すぐにネプギアを抱えて
細い路地に向かって走る。

「チィ……小癪な……」

ジャッジはそう毒づく。

グイ、と地面に深く突き刺さった槍を引き抜いてキラが逃げた方向
に身体の向きを変える。

深く息を吐くような素振りをとった後にゆっくりとそちらに向かっ
て前進する。

「まあいい……俺は鬼ごっこは好きだぜえ……」

「ジャッジ、ここにいたのか」

直後、ジャッジの背後から女性の声が掛かる。

「む……マジックか」

マジックと呼ばれた、紅い髪をツインテールにまとめた女性が落ち
着いた声音でジャッジに告げた。

「何を遊んでいる」

「遊んじゃあいねえさ。貴様だけ守護女神と戦ったと聞いて、俺も
少しばかり暴れたいと思ってな」

「お前の悪い癖だな」

マジックは半ば呆れたように嘆息しながら呟いた。

「だが、どうやら俺の思い違いだったらしい。あの小娘、本当に『
そう』なのか？ 俺には寧ろ連れていた男の方が強く思えた」

ジャッジは先程の様子とはまるで違う、冷静な物言いでマジックに
そう問い掛けていた。

「どうやら一時的なショックで戦闘の出来ぬ身体になっていたよう
だな。これは都合がいい」

「何が良いのだ。俺の娯楽が一つ減ってしまっただろう」

「何を言う。我々の目的を忘れたか？」

マジックにそう持ち出され、ジャッジはやりにくそうな声を上げた。

「いくら俺とて忘れぬさ。全ては……」

「犯罪神様のため、だ」

マジックは再確認させるようにジャッジの言葉を遮って言葉を続けた。

「そうだな。だが、いくら俺とて気になることもあってな……」

「何？」

マジックはあまり感情を出さないが、この時ばかりは表情を少しばかり歪めた。思えばこうしてジャッジが落ち着いているのもおかしい話だと感じたのだった。

「この空間に異質……いや妙な気を感じる。『俺と同じ』ようなモノが、な」

「同じ……？ 私は何も感じぬが……」

マジックはクイと空を仰いで眉をしかめる。確かにピリピリと肌を刺すような不穏な空気は流れているが、ジャッジのように『彼と同じ』という空気は感じ取れない。彼の気に隠れているのか、気配を消しているのか――それはマジックには定かに出来ないが。

「俺も気になるところではあるがな、今回は少しばかり興が削がれた」

「それで私に調べる――と？」

「そもそも俺はこのような細かい仕事をするようには作られていない。寧ろお前の方が適任だろう」

「お前に言われるのは癪だが……確かに私も気になるな。邪魔者の排除のついでに搜索をするでしょう」

マジックはパチンと指を鳴らす。すると彼女の足下の影からむくむくとモンスターが湧き出る。

「ほう……モンスターを使うか」

「違法ディスクに収められている連中よりは何倍も優秀だ。これならば日が落ちるまでに生け捕りにでも出来る」

マジックはモンスターが二十体ほど出現したところでもう一度指を鳴らす。すると先程まで特に何をするでもなく辺りを好き勝手に歩き回っていたモンスター達が目の色を変えて散開していく。

「では、ここは頼んだぞ」

「分かっている。貴様もさっさと己の仕事をしろ」

マジックは眼力を強めてジャッジを睨んだ。

しかし、さして気にした風もなくジャッジは鼻を鳴らして出現した闇の中に消えていった。

「しぶとく生き残る……まるで虫だな」

マジックは嘲笑を浮かべて、まるで宙に腰掛けるように優雅に足を組んだ。

☆ ☆ ☆

青年は空を仰いだ。

紅蓮の空は相も変わらず禍々しく映っている。

「気が……消えた」

青年はようやく物を発した。

今までに感じていた嫌な気配が途端に消えたのを感じて青年は不信感を抱く。

しかし、青年の『目的』は幸いか、なくなっではいなかった。

妙だとは思いつつも、少し安堵しまた歩を進める。

「いや、寧ろアイツの方が厄介だな。俺の仕事が増える……」

青年は疲れ切った声でボソリと呟く。

「あまり目立つ動きは避けたいんだが……。仕方がないこと、か」
青年は呆れたような声を発して背後に視線を向けた。

『グゲゲッ！』

『ギャギャッ、ギャッ！！』

二匹のモンスターが下卑た声で鳴き喚いている。

まるで青年を見つけたことを歓喜するようにぴよんぴよんとはね回り、今にも飛びかかってきそうな勢いでいる。

「あまり構っているヒマは無いんだが……」

青年はそつと背中に携えている布巻きにされた巨大な武器に手を伸ばす。

「邪魔、しないでくれ」

口調こそ、まるで幼子に語りかけるような優しいものであった。

しかし、彼が背後からおびき出すオーラは、それはただ一つ——純粹な殺気だけだった。

「フン……強くもないのに時間ばかりとらせやがって」

青年はそう毒づき、紅く広がる地面を踏みしめる。

パシヤ、と水分の跳ねる音が鳴り、青年は武器を背後に収める。

「さて……」

青年は気を入れ替えるように声を掛けて沈み掛ける夕日に視線を送る。

「もう少し、か……」

声音からは少しばかり焦ったようなモノであったが、しかしゆったりとした足取りで夕日に向かってその道を歩んでいく。

「あとの目標は、女神候補生——か」

青年の背後には本来ならば消え去るはずのモンスターの死体が、四肢をバラバラに切断されて横たわっていた。

EP. 3 「DATE AND TREMBLE」(後書き)

自分の設定としてはジャッジ・ザ・ハードは二重人格っぽいモノと見てください……

戦闘では見境無くなるけれど、普段は冷静な性格……という設定です

読んで「あれ、おかしくね？」と感じた方への補足です

そのうち理性のない凶暴な性格に戻りますので何卒よろしく
お願いします……

EP. 4 [NOT SCARY]

「あんの小僧……！」

ネズミをあしらった装飾のなされた黒地のコートに身を包む少女はそう毒づいた。

怒りにまかせて右手に握っていた鉄パイプで近くの自販機を殴りつける。

ピー、と電子音を発して自販機からガタガタと幾つもの缶ジュースが転がり出ていた。

それを一つ引っ掴み、プルトップを開ける。プシュツと空気の抜ける音と共に、ふわっと香る果実の甘酸っぱい香りも、今では少女の気を逆撫でた。

「もう少しで信者を増やせるところだったのに邪魔しやがって！」

二、三口で全てを飲み干してぱいと適当に空缶を投げ捨てる。

が、そうしていても虚しいと悟ったのか神妙に黙り込んで足下に転がっているディスクに視線を移した。

「にしても、あんな奴らをディスクに閉じ込めてどうする気だ……？」

丁寧に少女はディスクをつまみ上げて物珍しいような目付きで見ている。

「マジック様もあんな奴らを追いかけて回して何がしたいんだろうなあ……？」

しかし、そんなことを独りごちていても答えが返ってくるわけもなく少女の声は風に乗って掻き消された。

☆ ☆ ☆

「ハッ……ハッ……!!」

キラは紅蓮の空の下を疾駆していた。脇にはネプギアを抱えて、段々と乱れていく呼吸の中でキラはそれでも走り続けていた。

彼の上空ではギアギアと鳥型のモンスター達が下卑た声で鳴きながら二人を追跡していた。

背後からも、同じような鳴き声を発しながら一回り大きなトカゲの姿のモンスターが素早い動きで追いかけてきていた。

「ッー!!」

ゴクリ、と喉を鳴らして唾を飲む。

何度も石段に足を引っかけて転びそうになるのも何とか耐えてまた一歩、素早く足を前に出す。

進まなければ殺される。

今はもう、その思いしかキラの中には存在していなかった。

もう、自分でもどこに向かっているのかなんて認識できない。ただ、背後から迫る死の予言から目を背けるように走っているだけ。

しかし、モンスターもバカではなかったらしい。キラが曲がり角を進んだところで先回りをしていたのかにやにやと笑っているような表情をして二人に向かって飛びかかる。

「クソ!」

やむを得ない、という表情をしてネプギアを抱えたまま腰の刀に手を掛ける。

ザン——、と刀の軌跡が走り、飛びかかってきた三匹のモンスターはキラの遙か背後に堕ち、ブブツと姿がぶれてから消える。それを尻目に刀を鞘から抜いたまま、再び街中を疾走する。

「せめて空の追っ手だけでも何とかできれば——!」

キラは思わずそう毒づいた。

先程から上空でけたたましく鳴き喚くモンスター達は時折、爆弾のように地面に落下した途端に爆発するモノを放り投げている。

これで幾つの逃げ道が塞がれたかと歯噛みして忌々しそうに上空を見上げた。

バコッ、とキラの右サイドの地面が爆発する。

飛び散る破片から顔を護りながらその一帯を抜ける。

「ッ！」

どうやら大きめの広場に出てしまったらしい。

見回す限り、そこにはトカゲ型のモンスター、鳥型のモンスターがざっと見回しただけでも100体ほどが集結していた。

「ハハッ……これは何の冗談だ……？」

キラは半笑いでそう小さく呟いた。

こちらはすでに疲弊している上に一般人であるネプギアを保護している。加えてあちらは恐らく数は無制限、倒しても次から次へと湧き出てくる。

「こりゃ……勝ち目なんかねえ……」

ズルッとキラの足から力が抜ける。どうやら限界らしく、息も切れ切れに地面に膝を突いてしまった。

いや、最初から勝ち目など無い。これは最初から決められた謂わば出来レースだ。そんなものに今更、『絶望』なんてしようがない。

「なあ、ネプギア……」

「なあに……？」

ネプギアは掠れた声でキラの呼びかけに答える。

キラは、憔悴しきったような表情で目の前に広がるモンスターの群れに向き直る。

「見ろよ、このモンスターの群れ」

「あ……」

ネプギアもその先に視線を向けて声を漏らす。

「もう、終わっちゃもうんだ」

「……」

今までに聞けなかった彼の絶望にまみれた声にネプギアも終わりを悟った。

キラはそつとネプギアの手己の手を重ねる。

「ゴメンな……お前のこと、守れなかった……」

「ッ——！」

ネプギアは心臓を掴まれるような思いでキラの横顔を見た。

こんな絶望の最中で、それでも彼は自分のことを思っている。

自分の身に起こる絶望に何もかも投げだそうとしているのではない、最後まで自分を守ってくれている、その心さえも——。

「キラ……」

「ゴメン……俺、俺——！」

悔しそうに、キラはきゅつと口を紡ぐ。

目前のモンスターは既に待ちきれないと言う風に二人に飛びかかっている。

キラは終わりを覚悟した。

思わず目を背ける。己の死、からも——。

『ギャアアアアッ!!』

『グゲッ!!』

『ガアアアッ!!』

モンスターの悲鳴が幾つも響く。

ザン、と武器を振るう音が聞こえるが、それを認識するまでに多少の時間を要した。

「ッ——！」

恐る恐るキラは瞳を開く。

目の前にはモンスターの死骸が倒れていた。

いつものように倒した後、消えるのではなくその身体からベチャベチャと異様なほどの紅い液体を撒き散らして紅血の海を作っていた。

「ふえ……?」

ネプギアもまるで意外そうに呆けた表情でその現状に甘んじていた。

「な、ん——」

声が出せない——。

キラは上手く働かない思考でそんなことを思った。もう、目の前に起こった現状すらも理解できない——それほどに奇怪で、異様な光景だった。

そして、もっと目を疑ったのがネプギアの目の前に一つの白い剣が地面に突き刺さっていたことだ。

神秘的なオーラを放つ白剣からネプギアは目を離せなくなっていた。

「ッ！」

しかし、キラは再び眼前に迫るモンスター群にそれは阻まれた。

（マズイ——ッ！）

キラはロクに力の籠もらない右手で刀を握り、群れに向かう。

だが、彼の脇をかすめる影は——

何者をも魅了する、

美しきロングの桃髪、

剣を携えて向かうその姿は、

——戦乙女。

瞬く間に、目の前に群がっていたモンスター達の姿は吹き飛び次々と消失していく。

「ッ——！」

地上だけでない、空の敵も次々と視認できぬうちに撃ち落とされて——世界は、たった二人だけの空間に成り上がっていた。

夕日をバックに、ネプギアはキラに視線を向ける。

「君、は——？」

途切れ途切れでキラは、ネプギアに問い掛けた。

「ゴメンね、キラ……」

物悲しそうに、ネプギアは微笑を浮かべてそう言葉を発した。

彼女はそう謝っている、けれどそれはいったい何に対しての謝罪なのか、キラは分からない。

「私、普通じゃないんだ――」

＊

「ふむ……」

マジックは顎に手をやり、まるで今までの現状をリアルタイムで見ていたかのように納得したように首肯する。

「ジャッジの感じていた妙な気配というのは分かんが、アイツの言い分は理解できるな……」

マジックは心中で先程、ジャッジから聞いた言葉を繰り返す。

（『男の方が強いように思えた』か、あながち間違っているとも言えんな……）

ネプギアの強さこそ、マジックにとって恐れるともとれるものであったがしかし、今この状況ではネプギアはマジックにとって何の驚異にも成り得なかった。

しかし、彼女の瞳に映るキラは――

「む、考え事をしている内に全滅か……」

マジックは顔を上げて現状を見る。

フンと鼻を鳴らし、見下したように視線を送る。

「まあ、この程度なら何の驚異にもなるまい。もう少し泳がせておいても構わんか」

そつとその場を立ち去ろうとしたが、マジックは妙な違和感に駆られてその動きを止める。

「む……」

まるで誰かに見られているような不快感か。ざっと周囲を見回してみるのが、その元は見つけられない。

気のせいではないとマジックは疑問感を抱きながら少しばかり上昇し、街中の様子を探る。

「いない……」

しかし、いくら見てもこの中にはキラとネプギアの二人以外、姿を捉えることは出来ない。

もうこの街には居ないのか、そんなことを考えながらキラとネプギアの二人に視線を移す。

そして、ニヤリと笑みを浮かべた。

（何者かは分らんが……目的がアイツならば……）

＊

「普通じゃ、ないって——？」

キラは眉をしかめてそう問い掛ける。

彼女の言うことが理解できない、いったい何に置いて普通ではないのか。

「うん——」

物憂げな表情を浮かべて、ネプギアはただそれだけを答えた。

それは夕日の所為なのか、何も分からない。しかし、キラの位置からは彼女の真の表情は読み取れない。

いつの間にか息が荒ぐ。何故、どうして——？

心中でそんな問いかけを何度も繰り返す。しかし、所詮答えなんて返ってくるはずもなくその疑問はキラの心に巢食っているだけだ。

「私——」

ネプギアは言葉を紡ぐ。
けれど——

バカッ！

石段が爆ぜる。

「ッ——！？」

突然の出来事に防ぐことも出来ずにその紅く燃えたぎる炎を見つめていた。

どこからの炎なのか、キラもネプギアも炎の出所を探る。

目的の『者』はすぐに見つかった。

頭上に重力に逆らうように浮遊している女性。その右手には巨大な鎌が握られ、対する左手には夕日に負けない紅蓮の炎が揺らめいていた。

最早、認識の範疇を越える出来事にキラは絶句する。

しかし、対する女性としてはぴくりとも表情を動かすことなくもう一度、左手の炎をちらつかせた。

その炎を掲げると同時に彼女の頭上に赤黒い火球が浮かび上がる。

「——マジック・ザ・ハード！？」

ネプギアは驚嘆の声を上げて女性を見る。

その言葉に女性、マジックはにやりと嘲笑を浮かべてネプギアに視線を向ける。

「フン、ようやく思い出したか。だが、もう遅い」

スッと左手を降ろし、それと同時に火球が地面に向かって来る。

「ッ！」

キラは動かない足にムチを打って無理矢理動かす。

ギリギリのところで大地进行蹴って大きく飛び退き、直後に地面が爆発を起こす。

ゴロゴロと地面を転がりながらキラは手を地面に突いて上体を起こす。

「ネプツ——」

瞬間、キラは視線を移してネプギアの姿を探す。

爆煙の中、跳躍してネプギアはマジックに向かい、剣を突き立てる。バキン、と剣と鎌のぶつかる金属音が街中に響き渡り、衝撃波を生み出す。

「く、ううう……！」

「その程度か……」

つまらなそうにマジックは吐息し、鎌を強く振るう。

「ツキヤ！」

「ネプギア……！」

身体を動かして弾き飛ばされたネプギアを地面に落ちる前にキャッチする。

「つてえ……！」

「キラ！？ 大丈夫……？」

心配そうにその表情を覗き込むネプギア。

無理したような声を上げてキラは「大丈夫……」と答える。

「放っておいても得なことなどあるまい。ここで葬って——」

マジックは鎌を頭上に掲げると、それに呼応するように周囲からどす黒いオーラのようなモノが鎌の切っ先に収束していき、巨大な刃を作り上げる。

「——！」

マジックはその鎌からガードするように黒い霧状の防御壁を展開させた。

ガツン、と鈍い音と共にマジックの身体がふらりと揺らぐ。

防いだとはいえダメージがあったのか、少し表情を歪めて周囲を見渡す。

「新手……？ ジャッジの言っていた者か？」

ブツブツと独り言を漏らしてマジックは眉をしかめる。

鎌に風を纏わせてマジックはその場所に斬撃波を飛ばす。

爆音と共に街の一角が崩れ落ち、濛々と煙を上げているが一向に何

者かが姿を現す気配は見られない。

「……逃げたか」

マジックは珍しく表情を陰しくさせてジロリとキラとネプギアの二人を睨む。

「さあ、次こそがトドメだ」

☆☆☆

すっかり紅蓮の陽は落ち、辺りは闇と静寂だけが支配していた。だがその中で、とある一角だけは違った。

「ッッ、クソ！ ジツとしてんのは性にあわネエな……」

ガッン！と足下の小石を蹴り上げて少女は呟き、やりにくそうに後頭部を掻く。

「つか、マジック様もアタシにここを見張ってろって言ったキリ、ディスクの中に行っちゃったし……どうすりゃいんだよ」

足下に転がしてあったディスクを再度確認するようにつまみ上げる。

宵闇の中、駆ける影が一つ――

「ハア……腹減ったなあ。少しくらい飯食いに行ってもいいかなあ……」

とは言うものの決心のつかない風にウロチョロと辺りを動き回ってあれこれと呟いている。

迷い無く、ただ目指す場所が始めから分かっているというように――

「それともモンスター使って飯でも取りに行かせた方が早いかな？」

少女は思い出したように懷から一枚のディスクを取り出してどうし

ようやく目の前に掲げて唸っている。

大きく跳躍、武器を袖口から構えて振りかぶる――！

「んなっ!？」

少女は頭上から一对の武器を構える少女の姿を視認して慌ててその場を飛び退いた。

「つぶねえな、コンチクショー! どこ中だテメエ!」

しかし、そんな彼女の問いに答えることなく、対する少女はふわりとコートを揺らして武器を握り直す。

「いけ好かネエ態度だなあ、チビのクセに……」

「……チビ?」

少女はすらりと伸びる茶髪を靡かせてそう呟いた。

「ああ、そーだよ。自分の身長見やがれ」

少女はバカにしたような笑いを含みながら少女を指す。
対する少女は腰に手をやってむくれたような声を発する。

「失礼ね。それでも去年から2cmは伸びただけど」

「たった2cmかよ……成長期にしては随分と遅くネエか?」

「成長期……?」

少女はピクリと眉を動かす。

その声音が先程よりも違うことに少女ははたと気付く。

(何だ……?)

思わず身の毛がよだつのではないかと言うほどに凄まじい気を放つ
眼前の少女。

刹那、2mほど先にいたと思われた少女の顔が目の前にあった。

「ッ――!」

バキッ!と嫌な音を立てて頬に拳が叩き込まれる。

慌てて体勢を立て直し、武器である鉄パイプを構えるが対する少女
の蹴りでそれは宙に浮く。

「っだ!」

少女は右手の武器を叩き込み、地面に少女を叩き付ける。

「ッ！ な、何モンだぁ、テメェ……！！」

青いコートを羽織った少女は黒の少女の胸を足で押さえつけて低い
声で告げた。

「ガキじゃない……」

「ッ……」

その言葉には酷く、憎悪のような、禍々しい何かが感じ取れ、思わ
ずそんな圧迫感に恐怖する。

背筋に冷たいモノが走るのが感じられた。

「私はもう立派なオトナよ、オトナ！！」

「……はい？」

予想外の答えに少女は眉をしかめる。

「アンタよりはオトナだってーの。意味分かんないの？」

「ぐえ！ わ、分かります分かります！！」

グリグリと足を押されて少女は慌てて言葉を紡ぐ。

「それより、アンタここで何してるの？」

「おいおい、相手に聞く前にまず自分から物を言うのがオトナの礼
儀ってヤツだろ？」

少女の勝ち誇ったような言葉に、茶髪の少女はむくれた表情をより
一層不機嫌にさせてゆつくりと口を開いた。

「私は――」

☆ ☆ ☆

キラは思わず目を瞑った。

トドメ——それじゃ終わりを意味する。

ネプギアも、必至にキラの服にしがみつき、恐怖に耐えるようにその瞳を噤んでいる。

「これで——」

マジックの持つ鎌から斬撃波が飛ぶ。

「ッ！！」

しかし、それは大きく二人の左右に反れて地面を大きく抉った。

「何……？」

予想外のコースにマジックは目を見張る。

そして空間全体が揺れていることに気付くのにそう時間は掛からなかった。

「チィ！ リンダの奴め、しくじったな！」

マジックは忌々しそうに天に向かってそう叫んだ。

空と思われていた紅蓮はガラガラと崩壊し、地面に消えていく。

まるで世界の終焉を表しているかのようなそんな恐ろしげな光景だった。

マジックは一度、二人を一瞥する。

「フン、捨て置くのは癪だが……今はこうするしかあるまい。次はない、覚えておけ！」

それだけを言い残し、闇の中に消えていく。

「ッ……！」

死ぬ——。直感的に、キラはそう感じた。

段々と立つことの出来るスペースも限られてきている。じわじわと迫り来る恐怖をキラは愕然とした表情で見届けていた。

「キラ……」

「ネプギア……助かったみたいだが、結局は意味のないことだったみたいだな」

このまま、死ぬんだ——。キラは心中でそう思った。

（ハア……散々な人生だったな……。まだ『あの人』にも会えてな

いのに……)

キラはそつと心の中で毒づいた。

しかし、そんな彼の手をネプギアがぎゅっと握る。

「怖くないよ……」

「え？」

突然、発せられた言葉にキラは問い返す。

「私は、キラと一緒になら死ぬのも怖くないよ……。キラは、怖いかも……だけど」

ぎゅっとより一層強くキラの手を握る。

その手から、ゆっくりと暖かいものが流れてくるように思えた。

コワクナイ――

『私が居るから、コワクナイ――』

「ッ！」

キラも、ネプギアの手を握り直す。

「俺も……俺も怖くないよ」

ネプギアの全身を包むように、優しく抱き寄せる。

小さく、柔らかくて、暖かい――。そんなことしか思いつかなかった。

それでも、キラはもう恐怖などは感じていなかった。

その途端、視界が一気にクリアになり、段々と白く濁っていく。

「え……？」

「これは……」

白い靄のようなモノが視界にまとわりつく。

けれど、キラもネプギアもそれを鬱陶しいとは思わなかった。
次の瞬間、身体にとてつもない重力が掛かる。

「っうわ！」

「つきゃあー!!」

身体のバランスが崩れる。

まるで落ちたような――。

キラは背中に鈍痛を感じた。そして直後に腹部に強烈なダメージを受ける。

「っぐは！」

背よりも寧ろ腹部のダメージが精神的に辛い。

痛みに歪んだ表情からゆっくりと瞼を開ける。

そこには満月をバックにこちらの見下ろす茶髪の少女の姿があった。

「よかった、無事みたいね」

不思議と怖い、とは思えないモノだった。

勝ち気な笑顔を浮かべて少女は月光の反射する青いコートをたなびかせている。

「アナタは……?」

「ん、……まさか一日にこう短時間で二回も自己紹介することになるなんて」

呆れたように少女は額に手をやる。

「私はアイエフ。プラネテューヌ政府の諜報部員よ」

少女、アイエフは自信満々に答える。

それから――そして、と言葉を紡ぐ。

「ネプギアの友人でもあるわ」

EP. 5 「IF COMPA AND NEPGEAR」

「痛ッ！」

キラは思わず眉を動かして右手を引いた。

しかし、逃げた右手は目の前の少女によって引き戻される。

「ダメです、ちゃんと手当てしないと痕になっちゃうですからちゃんと手当てするです！」

と、少女は半ば強引にキラの右手の傷口に消毒液を塗り込む。

少女はしばらくキラの傷口に傷薬や包帯等の処置を施してにっこりと微笑んだ。

「はい、これで大丈夫です！」

「ありがと、コンパちゃん」

「だから、『コンパちゃん』って呼ぶのはやめて欲しいですう……」

『コンパ』は可愛らしく両手を振って講義する。

政府立の病院に今年から勤務することになった新人ナース・コンパは外見、仕草等の愛くるしさながら周囲からは『コンパちゃん』と呼ばれてしまう。

キラもまたその一人で彼女は年上だと思っていても何故だか年下に見えてしまうため、こうした呼び方をしてしまうのである。

「ところで……」

先程の雰囲気とは一変して、キラは真剣な表情でコンパを見る。

「あの、政府の方……アイエフ、さん？ は一体……？」

キラは先程から抱いていた疑問をコンパに投げかけた。

あの後、アイエフとこのコンパが合流し、一度彼女の自宅であるこの場所に招かれた事態にキラは全く状況が把握できなかった。

「それに、ネプギアと友人というのも気になりますし」

キラの淡々とした、それでいて威勢のある質問にコンパは冷や汗を垂らしながら微笑を絶やさずに答えた。

「えっと、そのコトについてはあいちゃん本人から——」

「こんぱー、手当終わった？」

と、そこまで言おうとしたところでアイエフが扉の隙間から顔を覗かせている。

「あ、今終わったです」

「それにしてもこそ話してたみたいだね……」

アイエフが微笑を携えてコンパに視線を送る。

『うきゅっ』と、アザラシのような可愛らしい声を上げてコンパはわたわたと取り繕うように弁護する。

「ち、違うですよ！？ そんなにお話なんて――」

「そんな失敗ばかりしてるから『コンパちゃん』なんて可愛い渾名付けられるのよ？」

「失敗ばかりしてないですよ！ たまに、です……」

「たまに、で済む数だといいけどね」

アイエフは腕を組んで苦笑いを送った後にキラに視線を移した。

一瞬鋭い視線にドキリとキラの心臓が跳ねたが、すぐに何か寂しそうな色を映す瞳にキラは訝しむような視線に変わった。

「さて“キラ”だったかしら？」

「あ、はい」

刹那、心ここにあらずだったキラは取り繕うようにそう返答する。

「とりあえず、積もる話はゆっくりしながらね。こんぱ、お茶淹れて貰える？」

「了解ですう」

アイエフはコンパとそんなやりとりを終えた後にクイクイと片手でキラは入室するように促した。

「さて、と……。じゃあ、まず聞きたいことその？ なんだけど」

「はい」

アイエフは一度、チラとネプギアに視線を送ってから再びキラに戻した。

そして重々しげに口を開く。

「この娘とはいつ、何処で知り合ったの？」

表情、声音その他全ての要素からだだ単に興味本位ではなく、やけに真剣な質問だと言うことが伺えた。

思わずぐくりと喉を鳴らして唾を飲み、ゆっくりとキラは口を開いた。

「今朝、自宅ですが……？」

「自宅……？」

アイエフは怪訝な表情でキラを睨む。

本人はと言えば『それもそうか』と行った表情で首筋をポリポリと掻いた。

「まあ、いつの間にか家にいたといえますか……」

「……………そう。ま、いいわ」

『その間は何だろう』と気になったが、横やりを入れることが可能な雰囲気でもない。そこら辺はやはり空気の読めるというか何というかである。

だが、一つ確実なのはアイエフのキラに向ける視線が先程よりも目に見えて冷たくなったと言うことだけで、キラは泣きそうになった。

「あ、あのね、アイエフさん。別に変な意味じゃないんだよ？ 私も気付かないうちにキラの家について……」

「……分かってる。アンタらの言いたいことは大体分かってるから」「分かってない!？」

キラとネプギアはアイエフの虚ろな笑顔を見て衝撃を受けた。

変な表情で自身を睨むキラとネプギアを一瞥して、フツと息を吐きアイエフは手元のメモ帳に何事かを書きこんで再び目線を上げた。

「じゃ、次の質問ね。アンタ、犯罪組織との関係は？」

意図を濁している、かのように思わせて大体的を得ている質問にキラは思わず眉をひそめる。

アイエフの言っていることは理解できるのだ。でも、だからこそ癪に障る。

「ありません」

少し、むくれたような声でキラはきっぱりと返す。

「……本当に？」

アイエフは念押しのようにもう一度問い掛ける。

「本当に無いです」

キラは先程よりも不機嫌そうな声音で返す。

暫く二人の睨み合いが続く中で、ネプギアは突如大声を上げる。

「あ、アイエフさん！　いくら何でも失礼ですよ！！」

「ネプギア、そうは言うけど、もしコイツが犯罪組織に手を貸してたらどうするの？　アンタは許せるの？」

「ッ！」

アイエフの言葉に、ネプギアは身を引く。その状況を訝しむように見ていたキラだが、意を決したように大きく息を吸ってハッキリとした口調で告げた。

「俺は犯罪組織に加担したことは一度もない」

その言葉に鋭い視線を送るアイエフだったが、数秒経つと穏やかな笑みを浮かべてメモ帳をテーブルに置いた。

「そう、ならいいわ。疑って悪かったわね」

その雰囲気の変わりように少し度肝を抜かれたキラだが、ほんのり鼻孔を突く穏やかな香りに意識が移った。

「お茶が出来たですよ？」

背後でコンパが扉を開けて人数分のティーカップとケーキを持って入室してきていた。

それにアイエフも穏やかな笑顔を浮かべて姿勢を直して座り直す。

「あ、美味しそうね」

「近所にできた新しいお店のを買ってみました。少し奮発しちゃったです」

「わああ……美味しそう……」

女性陣三人はとくにケーキに目移りしていた。

しかし、取り残された黒一点のキラはしばらくポカンとした表情を

見せたまま動かなくなっていた。

＊

「あの、アイエフさんとコンパちゃんはお知り合いですか？」

先程から見えていれば、初めて会ったでもない。それでいて生半可な友人関係でもなさそうだと言うことが見て取れた。

キラの質問にコンパとアイエフは顔を見合わせていたが、二人して苦笑を浮かべて

「そうね、幼馴染みよ」

「そうです。あいちゃんとは小さい頃からの友達なんですよ？」と、とてつもなくぎこちない表情で答えていた。

訝しむような表情で二人を見るキラだが、アイエフの慌てたような声での話題変換によってその考えは一時的に記憶の彼方へと吹き飛んでいった。

「そ、それより、ネプギアに聞きたいことがあったのよ！」

「ふも？」

いきなり名指しされてケーキを頬張っていたネプギアがぐもった声を上げてそちらに視線を向けた。

「ふぁに？」

「飲み込みなさい」

ごっくんとケーキを飲み込み、ついでに口周りに付着していたクリームをキラが拭き取ってからアイエフに向き直る。

「ねぷ子は何処にいるの？」

「ッ!？」

今まで惚けたような表情をしていたネプギアが直後、強張った表情を見せて思わずむせた。

「大丈夫か？」

「う、うん……」

そう言ってキラからカティーツプを受け取る。

口ではそう言っているが、何処からどうみても彼女は大丈夫そうには見えない。意識的に――。

「知ってるの？」

「お、お姉ちゃんは……」

目を伏せて、震える声でネプギアは口を開く。

「ギョウカイ墓場に……マジエコンヌに、捕まっちゃったの……」

「――!?」

その名前にコンパやアイエフだけでない、キラまでもが衝撃に表情を染める。

「マジエコンヌ、ですって？ 彼女は消滅したんじゃないの!？」

アイエフはテーブルから身を乗りだしてネプギアに問い掛ける。コンパもいつもの彼女からは想像も出来ないような真剣な表情で食い入るようにネプギアを見つめている。

「マジエコンヌは……生きてるんだよ……」

「――、」

ネプギアのその悲壮きった表情にアイエフは表情を苦くして腰を落とす。

「どういうことですか？ マジエコンヌさんは確か……」

「そうよね……。私達の記憶じゃそういうことになってるハズよ」

コンパは信じられないという風に、アイエフに事実の確認を求める。そんな中、キラは他三人とは違う意味で衝撃を受けていた。

『マジエコンヌ……夢に出てきた女性と同じ……!？ 捕まってる

って、あの女の子達……、それにネプギア……! あまりに出来過ぎてる!』

彼の夢に出現したマジエコンヌと呼ばれる、恐らく彼女たちが敵視しているであろう女性、そして捕らえられた少女達、夢に出てきた少女と瓜二つの少女ネプギア――否定する要素がキラには見当たらなかった。

間違いない、あの夢は――『現実』

キラは、そう確信した。

「あ、あの……！」

「……何？」

「ねぷ子さん、ってもしかして銀色の髪の女の子ですか？」

三人は暫く顔を見合わせていたが、首を横に振る。

「じゃ、じゃあ、緑髪ですか？」

また答えはNO。

「薄水色！」

また、NO。

「じゃあ……紫髪、ですか？」

「……そう、だけど」

アイエフはコクリと小さく頷く。

キラはいつの間にか乗り出していた身を戻して額を押さえる。

「アンタは何処まで知ってるの？」

「……これだけです」

アイエフは眉間にシワを寄せてキラを睨む。

暫し、そのような睨み合いが続きアイエフは背後のベッドにゆつくりと背をもたれる。

「これは政府内で最重要機密事項なの。あまり他言はオススメしないわ」

アイエフはテーブルに肘を突いて声音を低くして喋り出す。

「現在、大陸上に存在する4都市の『守護女神』が同時に姿を消すという事件が起こっているわ」

その言葉にキラは眉をひそめる。

^{ハンド}守護女神。

現在、ここゲームギョウ界に存在するプラネテューヌ、ラステイション、リーンボックス、ルウィーの4都市のトップを務める、そして都市を、大陸を守護するとされる存在。

プラネテューヌを守護するパールハート。

ラステイションを守護するブラックハート。

リーンボックスを守護するグリーンハート。

ルウィーを守護するホワイトハート。

この次元に置いて彼女たちに敵う者など存在しないとされる最高の存在。

それが守護女神の言い伝えだ。

「神界に帰ったなんてことを言う輩もいるけど、その線は薄いわ。だって神界に行くための専用の道が使われた形跡がないの。だから、ネプギアの言う通りに囚われたと考える方が可能性としては高い……」

アイエフはこつんと指でテーブルを叩き、顔をクイと上げる。

「それで私達諜報部が現在動いているってワケ。ここまではオツケし？」

「へえ、あいちゃんもちゃんとお仕事してたですか」

『どういう意味よ』とアイエフはコンパを軽く小突く。実際のところは最近仕事が無くてダラダラしているところを突かれたような感じがしてアイエフは一瞬ひやっとしたのだがここではどうでもいい。「それで！　今回、ネプギアの力を借りようとして搜索してたの」

「ちょっと待ってください。気になることが」

アイエフはキラに奇異の視線を送る。しかし、キラはそれをモノともしない。何故なら気になることだらけだからだ。

「どうしてネプギアの力を？　いや、確かにコイツが強いのは認めますよ？　でもだからって――」

そこまで言ったところでアイエフは「ハア」と大きな溜息でキラの言葉を遮った。

それに気付いて目の前の三人を見てみれば

ネプギア―苦笑

コンパ―同じく苦笑

アイエフ―呆れ顔

となっている。

ますます疑問符を浮かべるキラに、見かねたコンパがネプギアに声

を掛ける。

「説明しづらかったら私達が言うですけど、どうするですか？」

「え、えーと……私から、言おうかな？」

ネプギアはコホン、と咳払いを一つ。そしてキラと向き合うような形で座り、重々しく口を開いた。

「私ね、プラネテューヌの守護女神候補生なの。お姉ちゃんは女神のパープルハートなんだけど……」

+

――『世の中には信じられることと、その範疇を越えていることが存在する』

なんてことを少年は思っていた。

実際、そうであるのだが何にしても物事に対して色々と面倒くさい後付が必要なのである。

思えば、彼が久々に訪れた地もそうであった。

ただ、それでも信じたくないこともある。

きつと、それは誰にだって

幾つでも――。

+

誰が言ったかは記憶にない。

何処で聞いたかなんて分からない。

けれど、キラはまさしくそうだと思った。

「『世の中には信じられることと、その範疇を越えていることが存在する』」

キラは額に手をやって、嫌なことを思い出すように表情を苦くして

そう答えた。それを見てネプギアもコンパもアイエフも、皆が皆、苦笑を浮かべるしか出来なくなっていた。

「仮に君が候補生であることを認めたでしょう。だが、君の姉が女神様だなんてそんな、そんなバカな……」

「……全部ホントのコトよ」

アイエフはカップに残った紅茶を全て飲み干して、半ば呆れたような表情と口調でそう答えた。

「ギアちゃんはここプラネテューヌの女神候補生で、お姉ちゃんはねぶねぶ……パープルハート様なんですう」

「いやいやまさか……マジで？」

「「マジで」」

どこかおかしな笑顔を浮かべたまま、キラは硬直した。

そしてその後に「ハァ〜」と盛大な溜息を吐いて、くしゃくしゃと頭を掻いてスツと頭を垂れた。

「何かスイマセンでした。色々と失礼な事しまして」

「あ、顔を上げてよ。私だってそんな偉いワケじゃないんだから。

今まで通りに、ね？」

ネプギアは慌ててキラを諭す。

数分、そんなやりとりを終えてキラはゆっくりと頭を上げた。

「そっか、だから『普通じゃない』ってことか。何か納得した」

「それは、良かった」

そんな二人を一瞥して、アイエフはパンパンと両手を打って話の軸を戻す。

「それで、ネプギア。力を貸して欲しいの、頼める？」

アイエフは真剣な顔つきでネプギアに問い掛ける。

しかし、彼女は一層に顔を伏せてまるで答えを出すことを嫌がっているように口を噤んでいる。

「ネプギア！」

「ちょ、アイエフさん！ 無理強いは良くないですよ！！」
迫るアイエフとネプギアの間に割ってキラは入る。

「……！」

「ネプギアはまだ怪我也ロクに治ってないんです。それに、色々と落ち着ける時間も必要だと思いますし……」

その言葉にアイエフは少しだけ身を引く。

それに呼応するようにコンパもアイエフの肩に自身の手を添える。

「キラ君の言うとおりです。ギアちゃんにもゆつくりできる時間が必要です……」

アイエフは少し考えるような素振りを見せた後に、ふいと視線を外して口を開く。

「そうね、私が悪かったわ。頃合いを見てこっちから連絡を入れると思うからその時は……」

「……はい」

キラは小さく頷いて背後で小さくなっているネプギアを連れてコンパの自宅を後にした。

残ったコンパとアイエフ。

コンパは心配そうにアイエフに視線を送っておずおずと口を開く。

「何だかあいちゃんらしくなかったですよ？　少し焦りすぎです」

アイエフはベッドに腰掛けて額に手をやって目を瞑り辛そうに答えた。

「ゴメン。最近、余裕がないのよ。ただでさえネプ子が不在で政府も混乱しているって言うのに……」

そう言ってアイエフは小さく溜息を漏らした。

「こんな時にアイツが居てくれたら——なんて思っちゃうワケ」

何度も両手を組んだり放したりを繰り返してカーペットの敷かれた床に視線を泳がせる。

その意図を察したようにコンパも視線を外して壁にもたれ掛かる。

「そうですね……。もう、三年……ですか？」

「そうね、もうそんなに経つんだっけ」

二人は遠く近い過去に静かに思いを馳せた――。

※

「っく！ もう、アイツらどこまで行ってるのかしら……」
アイエフは宙に向かって恫喝する。

もちろん目的である人物、いや人物達が目の前にいるわけではなく、言葉の意味から察するに目的の者達は彼女たちから離れて行動していることになる。

懷からピンクの色をした携帯を取りだして何やらカチカチとキーを叩いてまた閉じる。

「ねぶねぶはともかく……遅刻なんて珍しいですう」

傍らに立っていたコンパも眼前に広がる鬱蒼とした森林に視線を向ける。

時折、ギャアギャアとモンスター特有の鳴き声が響いており、ここがただの森林ではなくダンジョンであることが伺える。

「ちゃんとこの時間にここに集合って言うておいたのに……」

アイエフは携帯を閉じて腰に手をやって文句を垂れる。

しかし、その声色から完全に憤怒しているわけではなく、どちらかと言えば呆れの色の方が強いようにも思える。

しばらく顎に手をやって鬱蒼と茂る森林の方へと視線を向けていたアイエフだが、答えに行き着いたように小さく溜息を吐いてコンパに声を掛けた。

「迎えに行くわよ。どうせ、どこかで道草でも食ってるんでしょ」

「そ、その可能性は低いとは思いますが……確かに心配です」

コンパも首肯して先に行くアイエフの後を追っていく。

それから数分ほど、その中を歩いたところで――

「ん？ アレはねぶねぶですか？」

コンパは額に手を当ててよく目を凝らしてから、歓喜を帯びた声色でもう一度声を発した。

「やっぱりねぶねぶです。ねぶねぶ〜！」

コンパは恐らく目当ての『少女』の――渾名だろうか。それを叫び、彼女を呼び戻すように手を振る。

そんなコンパに対し、ねぶねぶと呼ばれる少女はだいぶ切羽詰まったような表情で何やら助けを乞うているらしかった。

「た、助けて〜！ あいちゃん〜、こんぱあ〜〜〜！！！」

一応、彼女の手の内にはほどよい長さの刀が握られているのではあるが既に戦闘する意志はないらしく、その切っ先がモンスターに向けられることはない。

対する彼女の背後では、推定でも20mくらいはありそうな、巨大な牛型のモンスターが今にもこちらに突進しようとするかのようにざしざしと土を抉っている。

「ななな……何やったのよアンタ!？」

「か、帰ろうとしたら何か巢に突っ込んだじゃったみたいでえ！」

「ハア!？」

アイエフは『有り得ない』とでも言いたげな表情を見せて先に見えるモンスターに視線を向けた。

鼻息荒く、万全の体制を整えようとするように、機会をうかがっている。

「ていうか、アイツはどこ行っただの！ アンタと一緒にじゃなかった!？」

アイエフは傍らで情けない表情で涙を流す少女にビシと人差し指を突きつけた。

少女はキョロキョロと周囲を見回した後、「アハッ」と言って後頭部に手をやった。

「はぐれちゃった☆」

「『はぐれちゃった☆』じゃないでしょ!？」

「あわわわっ! 来たですう!!」

そんな絶体絶命の中、そんな会話を交わしていたアイエフと少女にコンパは泣きそうな声で呼びかけた。

「——ッ!」

アイエフは静かに目を剥いた。

——終わる。

直感的に感じる恐怖。

それから目を背けるようにきゅっときつく目を閉じた。

——が。

彼女の頭上で爆発音が鳴り響く。

そしてその後に、『ギャアアアアア』というモンスターの悲痛な鳴き声が響いた。

アイエフは閉じていた瞼を恐る恐る開く。

そこには先程まで自分たちに猛然と襲いかかってきていたモンスターの頭部から濛々と黒煙が上がっていた。

しかも、それから次々とモンスターの身体のうちこちらから爆発が起き始めている。

突然の出来事に上手く脳が機能しない。

アイエフは暫くその出来事を呆然と眺めていた。

そして、自分のすぐ上を掠めて飛んでいく影が視界に映る。

「——!」

すぐに気付いた。

アイエフは、心底安堵したような表情を浮かべてその影に声を掛けた。

「遅いわよ!」

「悪い!!」

風のように軽く投げられた声。

影は木漏れ日に当てられてその姿を現す。

しかし、まるで捕らえられないように素早い動きで樹木を蹴ってモンスターの身長よりも遥かに高い位置へとその身を飛ばしていた。

『グガアアアアアアアア！！』

己の身の危険を感じ取ったのか、モンスターは咆吼と共に空気を揺るがし、何とか進行を防ごうと足？ いている。

しかし、対する少年はさして気にした風もなく、左手に構えていた銃に新たに弾丸を装填してモンスターに向けて引き金を引く。

『ツゲエ！！』

爆撃弾が見事、モンスターの頭頂部にヒットしてモンスターの足が崩れる。

そしてその間に少年は銃を腰のホルダーに収めてすぐさまその傍にある小ナイフに持ち変える。

「おらあ！！」

ザン、と小気味のいい音と共にモンスターの身体がズシンと大地を揺らして崩れ落ちる。

その後、小さな悲鳴を上げながら次第にその姿はブレて何もない大地だけが視界に映し出される。

「ふう……」

少年は小さく吐息して三人に視線を向けた。

対するアイエフもひとまずの安息と安堵の息を漏らして少年と視線を交わした。

「助かったわ、相変わらずの手際ね」

「そういうお前は動きにキレがなかった」

皮肉っぽく少年はアイエフにそう投げかけて笑っていた。

「ねぷ子が余計な話を持ってくるから油断してたのよ」

「えー、私の所為？」

少女は不満げな声を上げて自身を指した。

「そうでしょ！？ だいたいこうなってるのだってアンタが集合に遅れるからで——」

アイエフが我慢できない怒りを吐くように少女に向けてそんな言葉

をぶつける。

少女も居心地の悪そうに肩をすくめてショボーンと意気消沈している。

「と、とにかく無事で良かったです。とりあえずはここを離れるですう」

いい加減、この先の行動に支障が出ると思ったのか思わなかったのかは理解しかねるが、コンパが慌てて声を上げる。

「そうだな。ここで騒いで、モンスターに目付けられても面倒だ」少年も賛同するように首筋を掻きながらそう首肯した。

そんな二人に少しばかり視線を送っていたアイエフだが、それもそうかと思ひ直しひとまず少女を連れてそのダンジョンを抜けようと出口を目指し歩いていく――。

＊

ボロボロの身体を椅子に腰掛けさせて少女はアハハと屈託なく笑う。

「いやー、こんぼとあいちゃんがいてくれて助かったよ！あのままだったらきつと私は今頃あのモンスターに食べられちゃってたねえ」

と、最早他人事のようにしみじみと先程の場面を思い浮かべている少女に対してアイエフは既に怒りとかそういう類を通り越して呆れすら感じていた。

「はあ、ホントネプ子のそういう性格が羨ましく思うわ……」

「見習ってもいいよ！」

「馬鹿にされてんだよ……」

少年は少女に苦笑を浮かべて補足した。

「それで？ネプ子はよしとしてアンタの方は何してたの？」

アイエフはもう少女の方は咎める気は無いようで、とりあえず傍らの少年の方に向きを変えて問い掛けた。

少年は「あー……」と言って頬を掻く。

「まあ……はぐれたネプ子を探してたら、って感じで……」

「アンタも迷ったワケね……」

アイエフはぐったりとした表情で肩を落とす。

すっかり苦労人色が漂っており、少年は微苦笑を携えて謝るように両手を顔の前で合わせた。

「もう……毎度毎度こうクエストに出かける度に迷子になられてちゃ、こっちの身が持たないんだから勝手な行動は慎んでよね」

アイエフは諭すように少女にそう語りかけた。

「うーん……一応心がけてはいるんだけどねー」

「でも、ねぶねぶは気になったことがあるとそっちに注意が行っちゃうですからいつの間にかいなくなってるです」

「あはは、善処するね」

少女は口ではそう言っているが、まるで反省の色が見えないように笑っている。

それを見てアイエフはますます大きな溜息を吐いてこの先に自分の苦労が見えてきてしまうようで落胆の色を見せた。

「まあいいじゃねえか。こうしてまた集まれたんだし」

少年はまとめるようにそう答えた。

アイエフは相変わらず表情を変えぬまま少年に向けて声を発した。

「アンタ、妙なところでねちっこいのに大事なところは雑破よねえ

……」

「そうか？」

少年は自覚の無いようで、不思議そうな表情を浮かべて首を傾げた。

「ホント、勝手にどこかに行くのは心臓に悪いんだからやめてよね……」

アイエフは、嫌味ぽく少女と少年二人に言葉を投げかけた。

二人は暫く顔を見合わせていたが、その後に二人して笑顔を浮かべて答えた。

「当前だろ？」

「流石に私でも一人で知らないところには行かないよー」

✱

「嘘つき……」

アイエフは泣きそうな声で顔を伏せた。

EP. 6 [SCARY PAINFUL AND LONELY]

すっかり夜の帷が街を覆い尽くしていた。

青白い街灯の光だけがその世界を照らしており、視界に映るモノのほとんどに影が落ちていた。

空の彼方には、いつもと変わらない表情を浮かべたままの満月が静かに世界に光を落としている。

青白い光が射す中で、その光に顔を照らされている少女は淋しげな表情のまま、何を言うでもない、時折抱えた紙袋の位置を調整してまた視線をやや低く戻す。その繰り返し。

居心地の悪そうに、キラはネプギアの少し斜め後方に位置をとって彼女の後を追うようにして夜道を歩いている。

ネプギアも、そんな彼の鬱屈とした視線に気付いているのだろう。

チラチラと、盗み見ではあるが、キラに視線を送ってまた前方を見据える。

居心地の悪い——というのも無理はない。

その場の雰囲気そうさせている理由は彼女には充分すぎるほどに用意されていた。

それでも彼女が悪いと言うわけではない。誰も悪くないのだ。

けれど、そう考えるからこそ——とキラは思う。

彼女が女神候補生であると言うことも、今この時も女神は、世界は危機に瀕していると言うことも——、

もう何もかもがキラの足取りを重くさせる。

——見たくない。

——彼女のそんな辛そうな表情なんて見たくないのに。

キラは、心の中で切実に念じる。

——力になってあげたい、と思う。

——けれど……、その力がない。

初めて、キラは壁の前に立たされたような感情を抱いた。

今まで、力には申し分ないと感じていたからこそなのか。

クエストを一人でこなしているときも、街で暴れているチンピラを叩きのめしたときだって、自分には力があるから出来ることなんだ
と、思っていたからだ。

だが、今こうした状況の中で必要とされているのはそういった身体的な力、だけじゃない。

——そんなこと分かっているのに。

いや、分かっているからこそ。

何もしてやれないという自分が情けない、と思うのか。きゅっとキラの右拳に力が籠もっていた。

——ずっと昔に『決めていた』ことだというのに。

こんなもどかしい空間が、感情が、キラに焦りを募らせる。強くな
ったはずなのに、守れるようになったはずなのに、と。

いつしかキラの手は、足は、身体は、動いていた——。

一瞬、前に行くネプギアの方に触れようとすんでのところで手の動きが止まる。

何かが、思いが、それを阻害した。けれど、もう止めようもなかった。

肩を掴んで、キラはぐると半ば強引に彼女の身体を回転させて己の方を向かせていた。

戸惑った表情を浮かべたままのネプギアなど、気に留めようともせ

ずにキラの両手は彼女を抱え込むようにして、ネプギアの背に回っていた。

ネプギアの抱えていた紙袋が地面に落ちる。

何かが割れたような、深い音が響いた気がするがそれでもキラはそれを気にしなかった。

ネプギアも、あまりの出来事に心ここに在らずか、何を言うでもなくただ為されるままにキラの腕の内に収まっていた。

何も出来ない、それでも出来ないなりに何かしてやりたいという思いからか、キラはそんな行動に出ていた。

淡い月光だけが、二人を照らしていた。

「き、ら——」

動揺のあまりか、声にならない声でネプギアは彼の名を呼んでいた。けれど、そんな彼女の声に耳を貸す様子など一切無く、キラはひっそりと黙り込んで、より一層彼女を抱きしめる力を強めた。

——意志の表れ、か。救って貰ったコトへの感謝、か。

「ネプギア——」

キラはゆっくりと、噛みしめるように彼女の名を呼ぶ。

ネプギアは、それにはただゆっくりと頷くのみで返答した。

青白い月光の上からでも分かるほどに、ネプギアの頬は朱く染まっている。けれど、そんなことはキラには分からない。

ゆっくりとネプギアの小さな唇が動く。

「なん、で——？」

至極、もったもな問い掛けだった。

フツと口元をつり上げてキラは出来うる限りに微笑を浮かべて答えた。

「何でだろうな……。今、こうしないとお前が、消えて失くなってしまいそうだったから、かな？」

それだというのに、キラは曖昧な答えを叩きだした。

直感で感じた、というのがあるかもしれない。

「それに、俺がこうしたかったから、じゃあダメか……？」

寂しそうに、悲しそうに――。

キラはそつとネプギアに告げた。

贖罪――？ 何に對して？

それとも同情――？ 一体どうして？

自己満足――、……？

けれど、ネプギアは笑っていた。

無理をしたような笑顔ではあったけれど――

「ダメ、じゃないよ……？」

確かに、そう答えた。

満月だけが二人を見ていた。

二人は暫く微動だにすることもなく、その場で、その体勢のまま、ずっと在り続けた。

＊

「ほい」

「ん、ありがとう」

キラはベンチに腰掛けているネプギアに缶ジュースを手渡した。對するネプギアの方も、なんて事もなくそれを受け取る。

適当に選んできてしまったモノだが大丈夫だろうかとキラは危惧したが、いらぬ世話だったらしくネプギアは嬉しそうに缶ジュースを傾けていた。

その姿に安堵してキラはその隣、といっても30cmほど間をとって同じくベンチに腰掛ける。

今更ながらに空を見上げて、雲一つ無い月夜に感嘆たる感情に浸っていた。

暫くそうして無言の時を刻んでいたが、不意にネプギアは慌てたような声を上げてキラに視線を向ける。

「で、でもアレだね！ 折角買った食品……無駄になっちゃったね」
「……ハハッ、確かにそうだな」

参ったような表情でキラはポリポリと頬を掻く。それから今更ながらに問題が浮上することとなるのだが。

「あー、でも明日の朝食はどうすっかな。ネプギアが良ければコンビニ弁当か何かで済みますか」

「うん、私は何でもいいよ？」

ネプギアの答えにキラは「そうか」と短く答えて、自分の缶コーヒを開く。ほどよい苦みが喉を通り、深く身体の芯まで行き渡る。

——そういえば喉が渴いていたんだった、とキラはふと思う。忘れるほどに、キラは彼女しか、ネプギアしか見えていなかったらしく、その事に今更ながらに頬が熱くなるのを感じた。

すっかり体内に溜め込んでしまっていた二酸化炭素を吐き出して、キラはもう一度、青黒く広がる月夜空を仰いだ。

（俺の『心』と同じ色、か……）

鬱屈とした表情でキラはそう心中で呟いた。

十

ネプギアといると凄く安心できる

今まで感じられなかったのが悔しいほどに、安堵できるけど、何故だろう——

とても寂しい気持ちになるのは？

痛くて、辛い気持ちになるのはどうして？

そんな、自問自答

誰も答えてなんてくれるワケないけど

この心のモヤモヤを晴らしたいと思う気持ちもある

苦い

コーヒーの所為か？

気分を変えてブラックに手を伸ばしたから？

いや、違う――

歯がゆくて、寂しくて、苦しくて、痛くて、
懐かしくて、嬉しくて――

この気持ち、誰か教えてくれるかな――？

+

「――ラ、キラ――？」

キラの顔を覗き込んでネプギアが心配そうな声で彼に呼びかけていた。

いつの間にかボーッとしていたらしく、キラはハッと声を発して目の前の淡い少女の姿に動悸を加速させた。

「――、な、なんだ？」

一瞬、彼の慌てた声にネプギアは一層心配そうな表情を浮かべてきたが、特に潜とすることもなく、ネプギアは先程も吐いたであろう言葉をもう一度繰り返した。

「えっと、実は今朝からずっと聞きたいことがあったんだけど――」
「何？」

キラの問いに、ネプギアは一度、溜めるように息を呑み、そして口を開いた。

「どうして、私のためにこんなに骨を折ってくれるの？」

「――あ、その……こと？」

「うん。凄く優しくしてくれて、護ってくれて――格好いいって思っちゃった」

ネプギアは恥じるように、頬を赤く染めてえへへと笑った。

そんな彼女を見ることが出来て、少し安堵したキラは視線を正面に向けてから、やけに重々しく語り始めた。

「俺さ、困ってる人を見たら放っておけないお節介なわけ」

「お、お節介……？」

度肝を抜かれたように、ネプギアは目を点にして問い返した。

それに対してキラはどこかしら悟ったような表情をして続きを語る。

「つい手を差し伸べちゃうって言うか、迷惑同然に踏み込んだり、色々な」

遠い目をして、キラはふっと自嘲するような笑顔のまま――。

「だから、かもな。特にお前は今まで見た中で――一番、寂しそうだったから」

下心で惹かれたワケじゃない、とキラは付け足してから少しだけ笑う。

「だから、どうしても放っておけなかったんだ。そういう風に言われてきたからさ」

「言われてきた――？」

不可解な言葉に、ネプギアは少し表情を変える。

それに気付いたキラが「ああ」と思い出すように、懐かしむように声を上げて笑う。

「そう。ずっと前から言われてきたことだから――」

ふわ、と二人の頬を心地よい夜風が撫でる。

そんな彼の横顔はあまりに辛くて、苦しそうで、何より——後悔の色が浮かんでいた。

そっと目を伏せて、キラは苦しい表情のままそっと口を開く。

「もう、後悔したくないから——」

次の瞬間には、キラの瞳は決意に満ち満ちたものに変わっていた。

あまりの変貌に、ネプギアは少しだけ恐怖した。

しかし、その感情は刹那の後には掻き消されることになる。

「後、悔……」

その言葉が、深く彼女の心を抉った。

女神を、姉を、闇から救うことが出来なかった——そんな、後悔がネプギアの心の中でのたうち回っていた。

自分はいかに弱くてちっぽけな存在であるかを悟ってしまった、自分とは対照的な彼にこそこの力があるべきであったとネプギアはきゅつと奥歯を噛む。

「キラは、凄いな……」

ネプギアはいつしかそんな言葉を吐き出していた。

そんな彼女の様子が突如、変わったことを不審に思ったキラが眉をひそめて彼女を見る。

「ネプギア——？」

「私なんて、何も出来ないのに……でも、キラには『何かをしよう』っていう意志がある。それは、とっても凄いこと——だよね」

目を伏せて、ネプギアは肩を縮こませる。

「私は何も出来なかったんじゃない……。何もしようとしなかったんだ、だからお姉ちゃんも、女神様も——みんな……」

つう、と彼女の両目から頬を伝って涙が零れる。

けれど、キラは立ち上がっていた。

激昂した感情なんて、抑えようのない——どうしようもない行動。大きく息を吸って、否定するように叫ぶ。

「そんなことない！」

いや、ハッキリと否定した。

ネプギアの表情が驚きの色のに染められていることなど、容易くに視認することが出来た。

真夜中、こんな場所で大声を出しては近所迷惑になり得るかも知れない。

けれど、それでもキラにはそんな彼女の言葉を否定せざるを得なかったのだ。

「ネプギア、お前は向かっていったじゃないか！ マジック・ザ・ハードに！！」

恐らく、彼女の姉の、女神の敵の一人であるだろうマジック・ザ・ハードに、確かに彼女は一度ではあるが勝負を挑んでいる。

結果はどうであれ、確かにネプギアはマジック・ザ・ハード武器を交えた。

——何もしようとしなかった、なんてキラには思えなかった。

「お前は、立派に行動したじゃないか……！」

もう、興奮のあまり声が出ていないことにもキラは気付けなかった。そんなことなんてどうでもよく思えたのだ。

「そんなこと……っ、言うな……！！」

——理不尽、分かってる。

キラは、何に対して怒っているのかも分からずに心の中でぶっきらぼうにそう答えた。

ネプギアは、微動だにすることなくただそこに座って、キラの怒声を全身に浴びていた。まるで親から叱られている子供のように、肩をすくめてジッと足下に視線を送っている。

何もかも否定したい——、そう思うように。

「ッ！」

絶句。

けれど、キラには言葉を止めてはいけないように思えた。

何でもいい、彼女に語りかけなければ——と、もうロクに働きもしない頭でそう思った。

「お前は、まだ——ッ！」

「もうやめて!!」

ネプギアは悲壮切った声で、立ち上がり、そう言っていた。

「私は、何も出来ないの!! だから——」

「ッ——！」

パン、と乾いた音と共にネプギアの顔は少し傾いていた。

頬がじんじんと痛んでいる。一瞬の出来事、何が起こったのか理解できない。

ただ、後から泉のように湧き出る痛みのことにはしか思考が向かない。ネプギアはそっと頬を押さえて、眼前のキラにそっと視線を向けた。

——泣きそうだった。

それでも必死に堪えて、留めようとして。

彼の纏うコートに、これ以上なのではないかと言えるほどにシワが走っている。

まるで彼の怒りを、感情をそのまま表したように右拳が震えている。

「何も出来ないはず、ないだろ」

縫るように、キラの両手はネプギアの肩に伸びていた。

全て力を使い切ってしまったかのように、キラは両膝を地面に突いて、息を荒げて肩を揺らしている。

「それは、私が女神だから——？」

皮肉のように、ネプギアは小さな声でキラにそう問い掛けた。

キラは、齒を食いしばって——

「お前が、まだ意志を持ってるからだ——」

クイ、を顔を上げてネプギアにそう言い放つ。

『意志』――。

そんなもの、

「そんなの、もう折れちゃったよ……？ あの時から……」

彼女の肩を捕まえている両手にグツと力が籠もる。

「まだ、諦めんじゃねえ。お前は、まだ――」

一度、躊躇ったように表情を歪める。

しかし、大きく息を吸って決意を秘めた瞳でネプギアと視線を交える。

「まだ、諦められないんだろ？」

「ッ」

ネプギアは身を引く。しかし、キラの両手が逃れることを許してくれない。

クン、と小さく動いた身体が彼の手によって抑えられる。

「分かるんだ、俺と――俺と同じだから」

ネプギアは小さく、目を剥いた。

同じ――その言葉を何度も何度も口の中で繰り返す。

いったい何が――、彼は何を――。

そんな疑問がネプギアの心を弄ぶ。

しかし、そんな疑問を投げかける前にキラは言葉を紡いだ。

「取り戻そうと足？ いているのが分かるんだ！ 表面ではダメだって諦めてるのに、心の奥底では何とか取り戻したいって、手に入れないって思ってる！ そうだろ！？」

――違う、とは言い切れなかった。

言い切ったらその時点で何もかもが崩壊してしまうような、そんな恐怖心に駆られる。

「それを無駄にして欲しくないんだ――。お前の決意を、お前のやろうとしてる意志を……ッ」

後半の声はほとんど聞き取ることの出来ない、押し殺したような声

に変わっていた。

それ故に、その言葉はネプギアの心を深く決る。

意志、まだ己のあるのか——そう思う。きゅっと唇を結んで自分自身に問い掛けた。

「——私、できるの……？」

サアア、と風が流れる。

彼女の表情は、まるで愛情を求める幼子のように頼りなく、脆く、危なげな存在だった。

一度、キラは留まったような声を漏らす。けれど、全てを振り切ったようにキラはもう一度、ネプギアのその小さな身体を抱き寄せる。
「当然、だろ……ッ！」

——もう、嗚咽も涙も止まらない。

次から次へと溢れ出る涙、決壊した涙腺を今更どうしようなんて、ネプギアにはもう考えられなかった。

ただ、涙が止まらない。彼の優しさに触れたから——。

後悔——？ 違う。

これは、きつと『決意』だとネプギアは思う。

——もう何もかも諦めたくない、と。出来うる限りに足？いてやる、と。

そんな乱暴な考えだったのかもしれない。

満月の夜に、彼女は泣いた。

少年は、信じた——。

☆ ☆ ☆

黒き大地を踏みしめる一人の女性。

悔しそうに、足音荒く――しかし、どこか妖艶な雰囲気落とさずにいる女性は表情を険しいモノから崩すことなく前だけを向いていた。

時折、激しい雷電が大地に注ぎ、耐えることの出来ないような轟音を撒き散らす。がそれにはさして注意も行かない様子で女性はクイと顔を上げて中央に聳える高き塔の頂上を望むように仰ぐ。

「犯罪神様……」

悲しそうに、小さく声を漏らした。

まるで、愛し子のように。彼女の望みはただ一つだけだった。それ故にもどかしい、忌まわしい。

「私の望みは犯罪神様がこの次元を統べること、なのに――」

マジック・ザ・ハードはきゅっと口を噤む。

まだ、まだ――。そう高望みでもするように上を目指す。まだ足りない、もっともっと――！

既に理不尽ささえも感じ取れるような彼女の近付きがたいオーラにしかし、そんなことは気にした風もなく巨大な機影が二つほど、彼女に歩み寄る。

「帰っていたか……」

「遅かったなあ、何をしていた？」

一人は、まるでロボットアニメの主人公が搭乗するような風貌を備えたトリコロールカラーの機影、対するは頭部に一對の黒角を備えてずんぐりむっくりの体格を持った黄色い機影だ。

そんな二つの機影を、彼女はさも鬱陶しそうに視線を送ってからゆっくりと言葉を紡いだ。

「少しばかりあちらの世界に行っていた」

「ほう？」

不思議そうに、トリコロールの機体は声色を変えた。

「珍しいな、お前がここを離れるとは」

黄色の機影は言葉の意こそ驚いているモノの、さして驚いた風もなく答える。

依然、表情は変えないモノのいくらか雰囲気のとらいたマジックは腕を組んで二つの機影に身体の向きをかえる。

「なに、暴走したジャッジを止めに行ったのだ。ついでに女神候補生を追って、な……」

「それでも取り逃がした、と？」

「ッ」

黄色の機影はさぞかし愉快そうに含み笑いを交えながらマジックにそう問い掛けた。それに対してはマジックは絶句して言葉を探すように視線を宙に泳がせる。

「そう言っただけでやるな、トリック。だが、まあ確かにお前が相手を取り逃がすとは珍しい……」

「お前はいつも相手を見逃すからなあ、ブレイブ」

「む……」

ブレイブと呼ばれたトリコロールの機体はメカのため表情は変えないがたじろいだのような声を上げて先程トリックと呼んでいた黄色の機体に視線を向けた。

「そう言うが、相手が幼い少女というだけでお前は攫ってくる。もう少し正々堂々としたことはできんのか？」

「何を言うか。少女は世界の宝、それを――」

「……いい加減にしろ」

マジックは不機嫌そうな表情をより一層に不機嫌にさせて発言した。「おー怖い」とでも言うようにブレイブとトリックの二人は肩をすくめるようにして言い争いの声を留める。

「今、我々のすべきことはここでも何になるでもない口論をするのではなく、一刻も早く犯罪神様を完全に復活させることだ。無駄口を叩いているヒマがあるのなら一人でも多く、犯罪神様に仇為す敵を殺してこい」

何の感情も帯びない声でマジックは二人にそう命じた。

ブレイブの方は同意するように何度も頷く。

「確かに、この間の女神との戦いでああ見えても犯罪神様は消耗しておられた。長い休眠が必要だろうな」

トリックの方も乗り気のようでもあった。

「幼女は？ 幼女は殺さなくてもいいな？」

語尾の方が段々とつり上がっているところを見るとこのトリックという男（？）、相当なロリコンであることが見て取れるのだが、大して気にもせずにマジックは深々と吐息して、今までとは想像も付かないような低い声音で呟いた。

「――殺せ」

今までおどけた様子だったトリックも流石にその殺気を感じ取ったのか、ビクと小さく身を引いてから「分かった」と不満そうな声で返答した。

「それはそうと、今日は少し――いや、だいぶジャッジの様子がおかしかったが、何か知らないか？」

ブレイブは腕を組んだまま、マジックに問うた。

マジックは今まで忘れていたが、夕刻あたりにも彼と同じ事を感じたことを思い出し、顎に手をやって小さく頷いた。

「確かに――。いつものアイツらしくなく落ち着いていたな……」

普段ならば――今のように遠くで轟音を響かせて退屈と殺害欲に餓えているというのに、今日のジャッジはいつになく冷静だった。

しかし、トリックは

「まあ、彼が一時でも落ち着いていたのならそれは良いことじゃないか」

と、のんびりとした口調で答えた。

だが、マジックはどうにも気になった様子で深く思考に浸っている。

「ふ……案外、彼に何かしらのウイルスでも感染したのではないかな？」

ブレイブは嘲笑うようにそう茶化した。

対するマジックはと言うと「ウイルス……」と小さく呟いて視線をあちらこちらと落ち着かない様子で相変わらず思考に浸っていた。

「まあ、推測だがな。では俺は五月蠅くならないうちに退散させて貰おうか」

ブレイブはひらりと、その巨体からは考えられないような素早い動きで踵を帰して赤黒い大地の奥地へと消えていく。

トリックもゆったりとした足取りでブレイブとはまったく逆の方向に向きを変えて去っていく。

一人、残されたマジックは

(まさか——な……)

一つの可能性を思い浮かべていた。

しかし、それはあまりに低いモノであった。到底、考えられもしないような——。

☆ ☆ ☆

「——」

青年は深く吐息した。

まるで緊張の糸から解かれたように、ゆっくりと肩を落としてクイと落としていた視線を正面に向けた。

時刻はすっかり丑三つ時を迎えて、辺りにはひっそりと恐ろしいまでの静寂が支配していた。

青年は、それに甘んじるようにして決してその静寂を壊すことなく、寧ろ同化したいと切実に願うように何の行動を起こすでもなく全てを視ていた。

眼下に広がる薄暗いプラネテューヌの街をまるで侮蔑の視線を送るように、酷く冷たい目で見下ろしていた。

プラネテューヌ、ひいてはゲームギョウ界の中でもっとも高いとされる人口建造物であるプラネタワー、その最上階に位置するテラス——よりもっと上、電波を収束する電針の上にまるでバランス遊びでもするように青年はその上に立っていた。

静寂の所為か、彼の息を呑む音すらも響いてしまいそんな中で、よく通る声で青年は呟いた。

「紫の、大地——か」

そして、遙か昔の名を呟いた。

数年前、プラネテューヌが持っていたもう一つの名。

『革新する紫の大地』プラネテューヌ。

最早、その面影はプラネテューヌ領の中心とするこの都市には何一つ見られなかった。その名残は、すでに隅へと追いやられてそのことに深く悲観するように青年は眉を寄せた。

そのまま、嘲笑の色を秘めた微笑で青年はふわとフードを払いのけた。

月光を弾く、美しい頭髮が月夜の中で光り輝いていた。異彩を放つのはそれだけではない。薄暗い闇の中でも蒼い光を放つ瞳はこれでもかと言うほどにきつく研ぎ澄まされて、そして何もかもを見抜いていた。

「女神候補生——取り逃がしたな……」

物騒な言葉を吐いて、青年は落胆するような素振りを見せたまま体重を移動してごく自然な動きで地面へと落下していく。

何の動きを見せることなく、青年は地面に、重力に習って落下していく。

「俺は——」

意味ありげに、青年はそつと言葉を紡ぐ。

地面まで僅か2m、青年は今まで地面を向いていた頭部を天に向けて、あれほどの高度から落下したというのに音もなく、羽根のように舞い降りる。

視線を更にきつくさせて青年はコツ、と高い音を立てて一歩前に足

を出す。

「今度こそ、約束は違わない——」

ふわ、と風もないというのにコートの裾を舞い上げて青年は闇の中に姿を消していく。

決意に満ち満ちた表情を変えることなく、夜空の真ん中にぽっかりと浮かぶ満月を忌々しげに睨みつけて。

「俺は——」

EP. 7 [KIRA]

ネプギアは小さく息を呑む。

まるで、何かについて決意を秘めたような表情で、ジッと何かに耐えるようにその場に立っていた。

ただそこに在るという事実だけでも奇跡のようでさえ思える。しかし、キラはそれには動じることなく目の前に微動だにすることなく存在するネプギアに視線を送っていた。

静寂——、それだけが全てを奪い去っていく。

まるでこれからの未来を恐怖するように、辺りの空気は全て隅に追いやられてしまったのではないかと言うほどに息苦しくて、辛い。けれどしなければならぬ、と究極の選択のように迫られる。

もう逃げられないのか、と悟る。ネプギアは意を決したように口元を嚙んで、クイと視線を上げる。

すう、と息を吸って深く吐息——それを数度繰り返してネプギアは声高らかに叫んだ。

「はぁーい☆ 女神候補生のネプギアだよ☆ みんな、ヨロシクねッ☆」

きやるーん☆

と、辺りに☆が散らばってしまうほどに妙に甘ったるい声でネプギアはまるでくるくると舞うようにステップを踏んでからトドメとばかりにウィンクを放った。

——沈黙。

Orzの格好でネプギアは自責の念を抑え込むように小さく唸っている。

その時点で彼女の下着が丸見えになってしまっているわけだが、キラは何も言わないでそっと視線を外す。幸い、ここは彼の自宅だし他人の目もないので思う存分はやらせておこうとキラは窓の外を眺めながらそう思った。

「なんか、違うな……」

「うん……わたしもそう思う……」

主に精神的なダメージが酷かったのか、ネプギアはか細い声でキラの意見に賛同するような言葉を発した。

さも気の毒そうな視線をネプギアに送るキラであつたが、何とか——発言を憚られるような雰囲気飲まれてキラは敢えて黙殺した……。

✱

そもそも元凶としては、昨夜、ネプギアはひとしきり泣き喚いた後のこと——

「女神様を助けるには、まず力の根源たるシエアを集めないといけないんだ」

「シエア？」

キラは聞き慣れない単語に眉を寄せて聞き返す。

そうか、とネプギアは気付いたような表情でコホンと咳払いを一つして口を開く。

「えっと、シエアって言うのは大陸の人達の信仰心のことで、守護女神の力の根源のことなの」

「ほう」

納得したような声でキラは首肯する。その話なら多少は聞いたこと

がある、と。

守護女神とは、下界に住まう人々の信仰心を力とする。

——つまり信仰心がなければ女神達は力を得ることが出来ない、ということにもなる。

「けど——、一つ気になるんだが」

「何？」

気になること、と言って首を傾げるキラにネプギアは問い掛ける。

「一応、とはいえネプギアだって女神様だろ？ 何故ネプギアは力を発揮できるんだ？」

前日、キラとネプギアが犯罪組織の手先の者に違法ディスクの中に閉じ込められ、そしてモンスターに襲われたときは、まるで全ての生物を凌駕するが如くの力を発揮してモンスター達を退けていた。それは、到底『信仰心がなく力を発揮できない状態』だとは考えにくいほどのモノであった。

「えっと……私も昨日のは結構セーブされていた方なだけだね？」

「アレでか!？」

アレだけでもかなり強かったというのに、それでもまだ上があるというのかという事実にはキラは衝撃を受ける。

「それだけじゃないんだけど……」

繋ぐようにネプギアが話を続ける。

「私みたいな女神候補生はお姉ちゃん、女神様より信仰の影響を受けにくいんだ。……それでもあまりに信仰心が無さ過ぎれば上手く力を出せなかったりもするんだけどね」

「ふうん……女神様事情にも色々あるんだなあ」

『己の知らないところでそんなにも複雑な事情があったなんて——』とキラは内心で感心した。

しかし、己の無知の所為で話がずれてしまったと思い直してキラは少し申し訳なく思いながら話の軸を戻す。

「それで、その信仰心とやらはどうすれば取り戻せるんだ？」

「ううん……いつもは政府、教会の人達が広報活動をしてくれるか

ら大概それで信仰心は賄えるんだけど、今はそうもいかないし……」
そうか、とキラは再び頷く。

現在は政府も犯罪組織に対してあまり動きを見せていないことがキラにも充分に理解できていた。

1年ほど前までは、政府も躍起になって違法ディスクの取り締まりやらを行っていたが女神が不在になってからとんと動きを見せなくなっていた。

そんなことも知らずに、自分のことしか考えずに生きていた自分に腹が立つ——とキラは拳を強く握った。

「……だとすれば、信仰心を取り戻すには自分たちでどうにかしないといけない、ってことだよな」

教会が動けない以上自ずから動かなければ事態は一向に好転しない、それどころかどんどん悪化の一途をたどるのみだと言うことは容易に予想が付くことだ。

深く考え込むキラの横顔を一瞥してネプギアは呼びかけるようにして発声する。

「えっと、昔はお姉ちゃん達は自分たちでクエストをやってシェアを集めてたみたいなの」

「クエストか……。まあ、そのくらいなら何とかなるかもしれないけどやっぱりたかが知れてるよなあ……」

簡単に人の心は変えられない、それも堕ちた心を引き戻すとなれば尚更のことだ。ひっそりとクエストをこなしていたところで犯罪組織の信仰と釣り合いが取れるのかと問われれば迷わずNOと答えられる。

「だとすると、やっぱり直接的にみんなの心を驚掴みにしないといけないわけだよなあ……」

キラはそこまで発言してからキラとネプギアに視線を送る。

キラとしてもあまり乗り気ではないのだが、しかし仕方のないコト——だとは思ってもやはりどこかしらに抵抗はあるわけで。そんな曖昧な狭間の感情の中でキラの心は低迷していた。

その間、何も分かっていない風のネプギアが（・△・）みたいな顔で頭上に疑問符を浮かべていたわけであるが。

✱

そして冒頭に至るワケである。

題して『みんなから好かれそうなキャラを演じて信仰心を集めちゃおう大作戦！』（キラ命名）であった。

しかしながらまだ練習の時点でここまで不発感が滲み出ており、『もうこれ確実に失敗するんじゃない？』感満載である。

先程まで微動だにせずにorzのままで居続けたネプギアが溜息を吐いてキラが頬杖を突いているテーブルの近くに身を寄せて腰を下ろした。

「うう……恥ずかしい……」

「ゴメンな。見てて俺も恥ずかしいと思った、ホントにゴメン」

涙目でそう訴えるネプギアの頭をよしよしと撫でながらキラは深く罪悪感に苛まれた。

しかも、もしかするとこういった甘いキャラはあまり受け付けないという人もいるだろうし、この作戦は見送りがとキラは思考する。だとすると、やはりネプギアの言うとおりの地道にクエストをやって信仰心を稼がなければならないと言うことになる。

気の遠くなるであろう時間を要する活動にキラは軽く目眩を覚えた。しかし、暗澹とした感傷に浸っている場合ではない。今、こうしている間にも女神達は命の危機に瀕しているのだ。

「塵も積もれば山となる——か……」

キラはよっこいしょ、と腰を上げて掛けてあったコートに手を掛けた。

ミルクココアを傾けていたネプギアはキラに視線を向けて何事かと

首を傾げている。キラはそんな彼女に半ば疲れてしまったような口調で告げた。

「仕方がねえ、こうなりやもうクエストをやりまくるしかねえよ。他に方法もないしな」

次に、壁にもたれ掛けてあった愛用の黒い刀を担いでキラは入り口のドアノブに手を掛けた。

ネプギアも理解したようにこくんと頷いて刀の隣に掛けてある白い剣を持ってキラの隣に並び、部屋を後にした。

☆ ☆ ☆

外は雲一つない——とは言えずもそれなりに気の抜けるような晴れ空が一面に広がっており、寧ろぽつりぽつりと天のように浮かぶ雲が余計にまったりとした空間を形成して居るとも言える空であった。比較的、温暖な地域であるプラネテューヌではあるがそれでもここまでに状態のよい日はあまりなく、なかなかよい日和である。

しかし、一つ奇怪な点を上げるとすれば——それは道行く人々の表情である。

誰も彼もが光のない、悲壮にまみれた目つきでその先に見据えるモノはといったい何なのか、思わず問いたくなるほどに、その目つきは虚ろであった。

そんな彼らに思わず身を引くように、ネプギアはこそそとキラの影に隠れながら街ゆく人々をチラチラと盗み見ている。

『ね、ねえ……キラ？ 何か皆さん怖いよ？』

ネプギアは少し震えながらボソボソと小声でキラに声を掛ける。キラもざっと周囲を見回して小さく嘆息、ネプギアと同じようにこそそと小さな声で耳打ちする。

『ああ……たぶん、この人達は失業者の人達だろうな……』

――失業者。

犯罪組織の生み出した違法アイテムの一つ、『マジエコ』。

これは、使用することによって全てのデータをコピーすることの出来る万能ツールであるが、当然の如くこれは法律によって禁止されている類の物だ。

しかし、世界の現状を見る限りではそれほど取り締まりが為されているわけでもなく、市場は混乱、商品価格も急落し、こういった失業者の人々が増えている。

恐らく、ここを歩いている人々もその一握りだろうと推測できる。キラの話聞いて、ネプギアは気の毒そうな表情となって俯いてしまった。

そんな彼女を見て、キラはポンと彼女の肩に手を置いて諭すように声を掛ける。

『大丈夫だ、そんな人達を救うためにも俺達がこうして動こうとしてるんだから、な?』

少しの間、表情を曇らせていたネプギアであったがそれでもキラの言葉を聞いて薄く笑みを浮かべてこくと小さく頷いた。

「よし！ 元気出たところでさっさと行くか！」

「おおー！ ……ってどこに？」

途中まではノってくれたネプギアであるが、急に惚けたような口調で問い掛けた。キラは出鼻を挫かれた思いで冷や汗を垂らし、ネプギアに向き直った。

「どこって……ギルドだよ、ギルド」

「ぎるど……?」

ネプギアは小さく首を傾げた。

+

――ギルド。

異端者、背徳者集団……他にも色々と呼ばれてきたその名の通り、

『背いた者達』が集結して結成された組織だ。

その存在が確定したのは今から約10年と少し前だ。

事の始まりは、リーンボックスと呼ばれる『大陸』から始まった。その時代、『協会』と呼ばれる現在の政府と同じ役割を果たす機関、そのうちの一つである女神信仰の手助けを為す『教院』の長を務めていた者が、異端者——その『大陸』に住みながら他の『大陸』の女神を信仰する者達を粛清した。

しかし、その際にルウィーという『大陸』に逃げ延びた異端者の集団が、自分たちの道を確立するためにギルドを組織した。

表だった動きはしない。自分たちの信仰を隠しながら普通の人々同じように生きていた。

しかし、今は——

+

一見して、近未来のような白く厳正な雰囲気を持った建物である。

その入り口には高々に『ギルド』と掲げられている。ネプギアはそれに感心したように「わぁ」と言った風な声を上げていた。

「ここがギルド？」

「そうだよ。まあ、クエスト受付所とも言うけど」

と、キラの言い分ももつともなように入り口からは見た限り、どうも傭兵やら戦闘員ソルジャーといった風貌の人々が出入りしている。

「とにかく入るか。話はそこからだし」

キラはグイとネプギアの手を引いて、ガラス張りの扉を押し開けた。
(ギルド——って確か……?)

ネプギアは心の中でそんな考えを掲げたが、しかしそれはすぐにギルド内に響く轟音の下に掻き消された。

——ガシャア！

盛大な音を撒き散らして見た感じ20代半ばほどのギルドの制服を纏った職員のような男性がソファなどを巻き込んで壁に叩き付けられた。

そして、その視線の先には無精髭を携えた30代前半ほどの屈強な肉体を持った男性が拳を振り切っていた。

「これは……」

ネプギアは少しばかり吃驚したように啞然として口元を抑えている。見た限りではどうも喧嘩らしく、無精髭の男が若い男性を殴り飛ばしたようだ。

しかし、周りの人々はなるべくトラブルには巻き込まれたくないと言う風に彼らから視線を外して業務やらクエストの受注やらに戻っていた。

まだ怒りは晴れないという風に、無精髭の男性はガシャガシャと鎧を鳴らして若い男性の元に歩み寄り、グイと彼の胸倉を掴み上げる。

「おいテメエ……話が違うぞ！ 報酬金がこんなに少ないってどういうこった!？」

「で、ですから……説明したように依頼主が報酬金の減金を求めています——」

「ッざけんなあ！ 何のために死にそうになってまでクエストを達成してきたと思ってんだ、ああ!？」

「お客様……落ち着いてください!」

若い男性の方は必死に彼を宥めているようだが、向かう方はそれでも納得がいかないらしく、大声を張り上げて己の意見を主張している。

しかも、最後の言葉がどうも彼の癪に障ったらしく、ビキリと額に青筋を立てて拳を振りかぶった。

「ッ——!」

若い男性はギュッと目を閉じて、何とか拳を防ごうと両手を前に出す。

――バシッ！

空気が揺れて、キラは二人の間に割って入り男性の拳を受け流していた。

「あーん、なんだガキ？」

「なーオッサン、この人もこれだけ言ってるし、それに依頼主の方が減金を求めたんなら文句の付けようもないだろ？」

キラはあくまで『笑顔』でおどけるように男性にそう呼びかけている。

しかし、向かう男性はそれにますます怒りを煮えたぎらせたらしく、大声を張り上げてキラに言葉を返す。

「うるせえ！ テメエには分かんねえだろうが俺は必死の思いで馬鳥共を掃討してきたんだ、これがこの程度の報酬で納得できるわけねえだろうが！！」

男性はそう叫ぶと同時にもう片方の拳を振り上げてキラに叩き込もうとしていた。

「……へえ、馬鳥……」

キラは何やら思考するように目を細めてから、ニツと口の端をつり上げた。

それから掴んでいた腕を突き飛ばしてから、右足で男性の両足をかけて転倒させる。

「なッ！？」

あまりの出来事に状況を掴めていないのであろう男性は間拔けな声を上げて、地面に後頭部を強かに強打した。

そしてその上に仁王立ちするように立って、キラは大層嬉しそうに声を発する。

「悪いな。そのクエストなら俺は先月に楽勝でクリアしたんだ」

「ッ！？」

「そっちが先に殴りかかってきたんだから、これも正当防衛ってことだよな？」

キラはバキボキと拳を鳴らしながら、ニツコリと黒い笑顔のまま右拳を男性の顔面に叩き落とした。

「まったく、最近は治安が悪くて困るな……」

キラは面倒くさそうに吐息してネプギアの元にゆったりとした足取りで歩み寄る。

チラと視線を向ければ、男性は数人のギルド職員に取り押さえられて奥の方まで連行されていた。

キラはもう既にくたびれたような表情でいたが、ネプギアはそれを見て俯き加減を強くする。

「やっぱりここにも犯罪組織の影響が出ているんだね……。早く何とかしないと……」

その前台詞に『ダメだコイツ……』と入れたくなるのは人としての性なのだろうか。キラは心の隅で1%くらい思考した。

それはさておき、流石にあれほどの事をしたのであるからしてやはりキラはギルド内で注目の的だ。男性をあゝ喧嘩を割って止めに入ったことや何よりもあの身のこなしは目を惹かないわけもなく、キラはやりにくそうに備えてあるソファに腰掛けた。

キラがネプギアに指示するようにソファの自分の横を軽くポンポンと叩く。意図することが分かったのか、ネプギアも嬉しそうにキラにならって横に腰掛ける。

「キラ凄かったねえ、あんな大きな人も転ばせて」

ネプギアは少し悲壮の色を秘めてはいたが、それでも彼の活躍に心底驚いた様子でややテンション高くそう声を掛けていた。

彼女までその話をするのか……とキラは苦笑を禁じ得なかった。

「ま、その程度の能力ってことだよ……」

キラは悲しそうに表情を変えて地面に視線を落とす。

——例えこの程度の問題を解決したところで世界が変わるわけでもない。せいぜい変えられることと言ったら自分の手が届く範囲の平和だけ……。いやそれすらも叶わない、と言うことを充分に悟ってしまっていたのであろう瞳をキラはそつと伏せる。

「やあ……」

キラは頭上から掛かった声に、クイを顔を上げてその声の主を見る。それは先程にあの男に絡まれていたギルドの職員だった。

薄く笑みを浮かべてフレンドリーにキラに右手を出して挨拶をする。キラもそれにならって小さく頷く。

顔やら腕やらに包帯を巻いて、その姿は少し痛々しいものであったが男性は気にした風もなく、柔和な雰囲気纏っていた。

「いつもいつもトラブルに巻き込んでしまつて済まないな」

「いえ、こっちもいつも世話になってますから」

「……どういふこと？」

ネプギアは話についていけないと小首を傾げる。それを見て、男性は小さく笑ってキラに視線を向けた。

「君はいつから心変わりしたのかな？」

「……」

キラは何とも言わずに視線を明後日の方向へ向けた。それに対してネプギアはワケも分らない表情でいる。

「なに、この子はあまり人と連むということをしないものだから……いきなり女の子を連れていたら嫌でもそう思うだろう？」

「ツ——！」

流石に彼の言い分には黙っていられないという風にキラは勢いよく立ち上がった。しかし、長身の彼には届くはずもなく、寧ろ軽くあしらわれているようにも見えた。

「ふわ……」

ネプギアは両手を両頬にあててみると顔面を朱に染めていく。しかし、それに気付かずによりまだ攻撃してきているキラにますます

笑いがこみ上げて男性は小さく笑みを零す。

「にしても、君は本当に強いね。いっそのこと用心棒でもやらないか？ 君がいてくれたらきつとみんな安心すると思うんだけどね」
『やらないか？』のあたりでキラは猛烈に寒気を感じたのだが、それを意とするところはよく分からなかった。

さておき、キラはフンと嘆息してポリポリと後頭部を掻きながらそれに答える。

「だから何度も言うように俺はそういうのはやらないって」

「残念だね。これでお断りを受けたのは二十回目だよ」

口ではそう言っているものの、男性はさして残念そうでもないように答えていた。

「お断り……？」

「まあね、このご時世だから色々と危ないことがあるだろう？ 用心棒のお誘いをしているんだが何度聞いても答えが変わらなくて困っているんだ」

ネプギアの問いに男性はそう答える。ネプギアもそれには納得できることだった。

「キラ、折角だしやってあげればいいのに」

「なんでだよ」

ぶっきらぼうにキラはそう答えた。

それを見て男性は小さく声を漏らすとネプギアにそっと声を掛ける。
「さつき、あの子は人と連むと言うことをしないって言っただろう？」

「あ、はい」

「それはね、自分といるとトラブルに巻き込んでしまうから嫌がっているんだよ。自分の所為で他人が傷ついてしまうからね」

「うおい！！」

キラはいつの間にか顔面を真っ赤にして男性に飛びかかっていたが、例の如く簡単にあしらわれていた。

「やっぱりキラは優しいねえ」

「っくくく！！」

ネプギアにそう言われてキラはますます顔を熱くさせた。

＊

クエストを受けて街へと繰り出した二人はひとまず準備を整えようと戦闘用具店に向かっていった。

「何がいるかな？」

「そこまで大変なクエストでもないし、傷薬がいくつかあれば足りるんじゃないか？」

キラはまだ少し照れているらしく、顔の火照りが抜けきれないままでいた。そんな彼が少しばかり可笑しく思えてネプギアは小さく笑みを零す。

そんな彼女にジッと渋い視線を送りつつ、キラは目的である戦闘具店の看板を一瞥してすっかり年季の入った扉を押し開ける。

むわっ、と一瞬さび付いたような匂いが二人の鼻を突く。しかしキラの方は慣れたものでそれに対して特に何の感慨を抱くこともなく、カウンターで頬杖を突いてこくりこくりと船を漕いでいる中年ほどの男性に声を掛けた。

ネプギアも壁に掲げられた手入れの届いていない鉄剣やら穴あきになった商品を陳列してある棚を見て、少しだけ落ち込んだような表情をしてからキラの後を追ってカウンターに歩み寄った。

「オッサン？　起きろー」

キラはゆさゆさと店主であろう男性の肩を揺り動かして覚醒を促す。暫し「むにゃむにゃ……」などとテンプレな寝言を零してから、男性はハッと上体を起こして寝起き声で答えた。

「お、おお……キラか」

「危ねえぞ、オッサン。ただでさえ今は物騒なんだから」

キラは呆れたように中年男性に注意する。

『悪い悪い』と言いながら中年男性はガッハッハと豪快に笑う。

「いやいや、来てくれたのがキラで助かった。お前じゃなかったら

今頃は俺もどうなっていたか分からんな」

「……ったく、チョーシいいこと言いやがって」

キラは後頭部をポリポリと掻きながら嘆息を交えて小さく声を漏らした。

しかし、それに対しても男性は豪快に笑い飛ばした。

「いやいや、最近の若いのはやれ犯罪組織だなんだとモラルが悪くてなあ。最早、お前だけが頼りに出来るって言っても過言じゃねーよ。最近は警邏や政府もあまり当てにならんしなあ……」

「す、すいません……」

男性の言葉にネプギアは申し訳なさそうに肩をすくめた。

その反応に『いやいや、お嬢ちゃんが謝る事じゃないがな!』と言ってまた笑っていたが、如何せん事情を知ってしまっているキラとしてはそれを例え作り笑いでも笑い飛ばせるほど図太い神経は持ち合わせていなかった。

それに前日にアイエフの姿を見ていたので、政府が動いていないとも断言できないんじゃないかとも思った。

「しかし、最近じゃ物価も上がっちゃってなあ……世知辛いねえ」

男性は苦々しい表情で唾を吐くように答えた。

こんな場末の店にも影響が及んでいるのかと、失礼なことを思う反面キラはこの先の未来を思うと暗澹たる感情を抱かずにはいられなかった。

「それで、今日は何を買いに来たんだ? それとも刀でも研ぐか?」

「今日は簡単な傷薬を買いに來ただけ。いつも買ってるヤツ、まだ在庫ある?」

キラの発言から、彼はここの常連であることが見て取れる。男性は『ちょっと待ってな』と言って、店の奥に消えていった。

ネプギアはそんな男性の背中を見送ってからまた少しだけ寂しそうな声を発した。

「やっぱりここも大変なんだね……」

「そうだな……」

キラは腕を組んでやりきれなさそうに目を閉じた。

数分して、男性は店の奥から傷薬の入ったボトルを数本持ってくる。「もうこの程度しか残ってねえな……。あと数日したら入荷できるんだが」

「いや、これで充分だ。ネプギアもこれくらいでいいか？」

「あ、私はいくつでもいいよ？」

ネプギアの返答を聞いてキラは首肯してから財布を開く。

「……これくらいなら200クレジットでいいや」

「ッー、安くないか？」

キラは一瞬だけ言葉に詰まってから男性に問い掛けた。

しかし、男性は少しだけ悲しそうな表情をしてから

「なに、お前には世話になってるからなあ。特別サービスだ」

と無理をしているような笑みを浮かべて答えた。

キラは少しむすっとしたような表情になって無理矢理に男性に定額通りのクレジットを手渡した。

「サービスなんてしてられる状況じゃねえだろ。受け取っとけ」

などというキラのしんみりとした怒号に男性は面食らったような表情でいたが、すぐに吹き出し気味に笑い出す。

「ハハハ……。そうだな。お前はそういう卑怯なことは嫌いだったからなあ」

「フン」

キラはそっぽを向きながらもカウンターに置かれたボトルを鞆にしまい込む。

しかし、それはそれとして男性ははたと気付いたようにジッとネプギアに視線を送っていた。

それに気付いたネプギアは小首を傾げて

「どうかしましたか？」

と、問い掛けた。

男性は、『あ、ああ……。』と何とも挙動不審のような声で返答した。

「何だよ？」

気になった様子でキラも男性に問い掛ける。

男性はポリポリと頬を掻きながら、薄く微笑を浮かべてキラに答える。

「いやいや、お前も随分と色気づいてきたなあと思ってな」

『またそれか……』とでも言う風にキラは額を押さえて嘆息した。
ネプギアは苦笑を浮かべながら男性に話を振る。

「キラってそんなに一匹狼なイメージなんですか？」

「おうとも。こう……ビンビンとしたオーラじゃあねえが近寄り
たい雰囲気ってのは確かだな、俺ら大人から見れば」

『近寄りがたかったのか……』とキラは何となく周囲の大人達に申
し訳なく思った。

「それでも、子供達はコイツのことを慕っているよ。間違いない、
な」

「へえ」

ネプギアが瞳をキラキラと輝かせて食い入るように男性の話に耳を
傾ける。

いったいどこに彼女の興味を惹く要素があるのかとキラはジッとネ
プギアに奇異の視線を送ったが当然それにネプギアが気付くことは
なかった。

「もういいだろ……。さっさと行くぞ」

これ以上無駄足を食っては日が暮れてしまうと言わんばかりに
キラはグイとネプギアの襟を引いて店の扉に手を掛ける。

「おっと、お急ぎだったのかい？ また来いよ」

男性は人の良さそうな笑顔を浮かべて右手を軽く振った。

ネプギアはそれに同じくして右手を振る。キラは少し機嫌の悪そう
な視線を送ってから、ネプギアを掴んでいない方の手を二、三度軽
くふって古い扉を押し開けた。

＊

浮かんだ太陽はすっかり南の方に天高く浮上していた。

この調子でやっているとクエストもロクな数をこなせたものじゃないかとキラは人知れず嘆息した。

しかし、そんな彼の気持ちを汲むこともなくネプギアはうつとりと――というよりは尊敬の色を秘めてキラに視線を送っていた。

「凄いねえ、キラはいろんな人達に信頼されてて……」

語尾の方が段々と下がっていつているのは恐らく自責の波が押し寄せてきてしまっているからだろう。

キラはそんな彼女に心配そうな視線を送って、優しげな声で語りかけた。

「そんなんじゃないよ、それを言ったらお前の方が立派じゃないか。俺に出来るのはごくごくちっぽけなこと、けどお前にはもっと大きなことをできるだけの力があるんだから」

少し照れ気味にキラはそう言っただけのけた。

ネプギアは微笑を浮かべて、小さく首肯する。

「そっか……、そうだね。今からでもいいから私に出来ることをやればいいんだよね」

「そうそう、その意気だ」

キラがよしよしとネプギアの頭を撫でる。

「あと、これから少しでも鬱モードに入ったらデコピンかますから」

「酷い!?」

キラの面倒くさげな言葉にネプギアは激しくショックを受けた。流石にここまで鬱屈とした態度を見せられてはキラの精神も限界だったらしい。

隣であわあわと言っているネプギアを余所にキラはクエスト用紙に目を落として目的とその目的地を確認する。

「キラ――!」

「キラ兄――!」

しかし、そこで元気な少年達の声がキラに飛びかかる。そして数秒おいて、元気な少年達の身体がキラに飛びかかる。

「むー！」

キラはすんでのところで半身をずらして4人の少年の攻撃を避ける。幸い、その先は芝地帯であったために大したダメージも受けずに小寝んったいは地面に突っ込んでいく。

「えーと……、今度は何？」

そろそろ脳の処理が追いつかなくなってきたのか、ネプギアは（△・）みたいな顔で頭上に疑問符を浮かべていた。

キラは嘆息しながら面倒くさそうに答える。

「近所の悪ガキだよ」

「悪ガキじゃねーよ！」

「そーだ！」

「てゆーか避けるなよー！！」

「避けるなよー！！」

少年達は口々にそう講義していたが、キラは溜息混じりに後頭部を搔く。

しかし、そんな彼の心情など知らぬが如し。少年達はキラの服を掴んで引っ張っている。

「なーなー、遊ぼうぜー！」

「俺、鬼ごっこやりてえ！」

「……あのな、俺はこれからクエストに行くの。お前らに構ってられねえから」

「ぶぷっ、クエストだって！　だっせー！！」

少年達はなおもキラをそう茶化している。

キラはほっと溜息を吐き、目を伏せる。それからカッと両目を見開いてから

「うるせえ！」

半ばキレたようにキラは少年達を追いつ回す。少年達は「わあーキレたー！！」と、嬉しそうにキラから逃げている。

そんな攻防をネプギアはニコニコと微笑を浮かべてそれを見届けていた。

数分後、そんな少年達を追い払ってキラはネプギアの元に戻ってくる。

「まったく、アイツら……」

キラは言葉でこそそんな事を漏らしているが大して不満があるようでもなく、寧ろ少しばかり嬉しそうでさえあった。

「やっぱりキラはみんなから好かれてるんだね」

「どう見てもからかっているようにしか見えないけどな……アイツらは」

キラは照れたようにそっぽを向いて頬を掻いている。

そんな彼に慈愛に満ちた笑顔を向けるネプギアの姿を見てキラの心臓は大きく跳ね上がることとなる。

「ッー」

「どうしたの？」

「……何でも」

しかし、そんな『邪念』を振り払うようにブルブルと首を振った。彼女は『女神』、自分は『人間』。釣り合う存在ではない、ということ十分に理解した結果だった。

「と、とつとと行くぞ！ このままじゃ日が暮れちゃう！」

キラはずんずんと振り捨てるように足音荒くクエストの目的地のダンジョンへと歩みを進めていく。

そんな彼の後をネプギアは急いで追っていく。

ネプギアはまた、少しだけキラという人物が分かったような気がしてほんのりと嬉しい感情を抱いた。

EP. 8 [FIRST MISSION] (前書き)

最近チヨース悪い…

EP. 8 [FIRST MISSION]

プラネテューヌ領。

ゲイムギョウ界に存在する巨大な大陸の中で西方を治める4つの国の内の一つ。

その中心部に位置する中央都市『プラネテューヌ』。

大陸上のあちこちらのぼつぼつと存在する小都市ではない。プラネテューヌ領の全てを統治し、他国との貿易の中枢を押さえる大都市であった。

そこから北西の位置に当たる場所に存在するダンジョン『バーチャフォレスト』。

ダンジョンにしては珍しく平原地帯の姿を残した美しく、近年までは観光名所としても機能していた場所だ。

しかし、やはりごく最近になってモンスターが蔓延るようになってきた。だまだレベルの低いモンスター達が集まっており駆け出しの冒険者や戦闘員にはうってつけの狩り場であった。

それ故にあちこちにモンスターを狩ろうとするのであろう、まだまだ装備の浅い者達の姿が見える。革製の鎧を纏った若い男性、指定のブレザー調の衣装を身につけた士官生達の姿がちらほらと見えている。

時折吹く風が平原に広がる木々や花々を揺らして心地よい音を奏でている。

しかし、そのなかに銃や剣のものと云った不快音が風に乗って流れていた。

少年の持つ日光を弾く黒い刀身が鞘から解き放たれる。

まるで何もかもを覆い尽くしてしまいたいようなほどにその刀身は黒く、禍々しい殺気すらも帯びているように感じられた。

しかしそれに怖気づくこともなく、いやそもそも感情という類の物を持ち合わせてなどいないのか、うつすらと青く透明なゲル状の身体を持つモンスター『スライヌ』はぴよこぴよこと跳ねながら少年にゆっくりと近付いていく。

『ヌラッ』

『ヌラッ』

意味も不明な擬音を発しながら、スライヌの集団は迷うことなく少年に接近する。

少年は戸惑うことなく、長刀を両手で構える。刹那、その瞳に一筋の純粹な殺気が走る。

それには流石に身の危険を感じたのかスライヌ達は身を引いて逃げ出そうと試みるもすでにその行動は遅いとしか言いようがなかった。サァー、とまるで空気が抜けるように淡く優しい音が平原の中に響き、スライヌ達の身体は真つ二つに切り裂かれる。

どぶん、と液体が地面に溶ける音と共にスライヌ達の姿はブレて一斉に消えた。それを確認してから少年はそつと目を伏せてから黒の刀を鞘に収めた。

チン、と金具の音が異様に響く中、少年はふっと吐息して刀を定位置である腰に戻す。

その手際に見惚れるように、周囲に行く人々は目を剥いて少年に視線を送っていた。しかし少年はそれに気にした風もなく颯爽と自身の纏う黒のコートを風に靡かせて木陰にいる連れの少女に声を掛ける。

「こっちは済んだぞ」

「うん、後は奥にいるモンスターを幾つか討伐したら終わりかな？」少女…ネプギアはクエスト用紙に目を落として内容を確認する。対する少年…キラの方も先程のまるで背筋を凍るほどの殺気を放っていた彼とは違う、無邪気そうに笑みを浮かべたまま自身も樹木に体

重を預ける。

さわさわと頭上で木枝が揺れるのを感じながら、心地のよい風が吹きつけるのをキラはどこか不思議な感触に思いながら傍らの少女に視線を送る。

青い平原をバックに、その長い桃色の髪を靡かせてそつと正面を見据える彼女の姿はまるで絵画にでも残しておきたくなるほどに美しく、儚い存在であった。

——そんなことを考えるような人間ではないのに、とキラは一瞬だけ自分の思考に疑問を持った。だとすれば彼女がそうさせているのか、と。彼女という存在は己にそれだけの多的なえいきょうを与える存在なのかと彼女の存在がますます気に掛かってしまうのが己自身よく分かっていた。

しかし、そんな彼の視線に気付くこともなくネプギアは邪気のない笑顔を向けてキラに問い掛ける。

「そろそろ行こっか？」

「ん、あ、おお。そうだな」

心ここにあらずだったキラが、ネプギアの呼びかけに慌てたように返答する。

ネプギアは自分が背を預けていた木の幹に手を突いて腰を上げる。彼女が歩き出すと同時にキラもスツともたれていた背を起こしてネプギアの後を追うように歩みを進める。

☆ ☆ ☆

大都市『プラネテューヌ』の中央街に位置する政府立の大病院。治安の悪化の所為か、ここには軽傷やら重傷やらの人々が常に出入りをしていた。腕や足に包帯を巻いた男性、車椅子で病院内を進む少女、と様々だが分かるのはここにいる人々の目に生氣はほとんど

灯っていなかった。

その中で少女、コンパはいつものようになだれ込むように押しかける患者の相手を一人ずつこなしていく中で見知った顔が入室してくることに気付いた。

「あ、あいちゃん。どうしたのですか？」

彼女の顔見知りであるアイエフが扉を押し開けて彼女の元に歩み寄っていた。

「ちょっと緊急の患者がいるの。受付に頼んだらこんばに預けてって言われたから連れてきたわ」

アイエフがチラと扉の方に視線を向けるとそれに繋ぐように二人の政府員が、恐らく冒険者と思われる男性を担いで入室する。

出血こそないものの、それでも全身に走る打撲が目立ちその出で立ちはどうも痛々しかった。

コンパは一瞬、慌てたように口元を押さえたがすぐに医療キットを揃えて男性の身体を見て回る。

「結構な重傷です……。何があったのですか？」

「分かんないわ、ダンジョンのど真ん中に倒れてたんだもの。この人が目覚めてから事情を聞くしかないわね」

アイエフは訝しむような目つきで男性を見る。

『バーチャフォレスト』で倒れていたこの男性にアイエフは少しだけ見覚えがあった。確か以前に政府の元を尋ねてきた国外の冒険者であったはずだった。彼が身に纏う武装もさることながら決して駆け出しの冒険者とも言えず、それなりに経験を積んだやり手の冒険者であることが伺えるのだが、そんな彼がこうして重傷を負ってあまつさえ気を失っていることにアイエフは少なからず戦慄した。

そして、あの地帯にいったい何が起こっているのかと危惧していた――。

＊

コンパの治療が終わって三十分ほどが経過した後、

男性は「う、う……」と呻き声を上げてゆっくりと顔を上げた。

それからキョロキョロと周囲を見回して、自分がいったいどういう状況に置かれているのかを確認してからほっと安堵の息を吐いた。

「ここは……病院、か……」

「ええ、政府立の病院よ。それより聞きたいことがあるの」

アイエフは男性に怪訝な顔つきで迫る。コンパの力を借りてゆっくりと上体を起こした男性は訝しむようにアイエフの顔を覗いてから首肯した。

「あなたが気絶する前、いったい何が起きたの？」

「……俺は」

男性はぼつりぼつりと語り始めた。

言い分によると、男性はプラネテューヌに到着したばかりの冒険者で政府の中枢建物である『プラネタワー』に顔を出し、軽く情報を得た後にギルドへと赴いたらしい。

その後、資金稼ぎのために幾つかの簡単なクエストを受注してから、まずひとまずの目的地としてバーチャフォレストに繰り出したらしい。

彼の腕前をもってすれば、なかなか簡単なクエストであった。次々と目標であるモンスターを討伐していき、残り目標が一体を切ったところで背後にとてつもない衝撃を感じて意識が途切れたという。「何のモンスターにやられたか、分かる？」

アイエフの問いに、男性は思考を廻らせるようにして腕を組む。

しかし、暫くした後には力無く首を横に振ってしまった。

「何のモンスターか分かれば、まだ対策のしようがあったんだけどね……」

アイエフが残念そうにそう呟くのに対して男性は「すみません……」と肩をすくめて謝罪したが、アイエフは右手でそれを制す。

「あなたが謝る事じゃないけど……それよりもすぐに休んだ方がいいわ。こんぱ、とにかく病室に送ってあげましょう」

「分かったです」

コンパとアイエフは男性の両肩を担いで彼のはいる病室の方を目指していく。

☆ ☆ ☆

ずぼっ、と小気味のよい音と共にスライヌがまた一匹切り伏せられた。

しかしその瞬間にも己の周囲を塞ぐ集団のスライヌの波が衰えることはなく、じわじわと自分たちを狙ってきていることが分かる。

ぽよんっ、と可愛らしげな音を立ててまた一匹、スライヌがキラに向かつて跳んでくる。刀の軌道が間に合わない、キラは右足でスライヌを蹴り飛ばし、びちゃびちゃと音を立ててスライヌが四散するのを確認してから足下に迫ってくるスライヌ達を新たに切った。

『ヌラッ』

『ヌラッ』

ふっとネプギアの方に視線を向けると既に何匹かのスライヌがネプギアの身体にまとわりついていた。

「チッ」

キラは小さく舌打ちして、自分と彼女の間にいるスライヌ達を切り捨てて彼女に付いているスライヌ達を次々と引っ剥がす。

ぽよんっ、ぽよんっ、とまるで神経を逆撫でにでもするようにスライヌ達は地面を爆ぜて転がっていく。

「ううう……」

ネプギアは既に軽く涙目になってすっかりびちょびちょになって色白の肌が透けて見えてしまっているワンピースに視線を向けてキラは軽く赤面してから咄嗟に視線を正面のスライヌの軍勢に反らした。

「ベトベトだよ……」

「我慢しろ！」

キラはネプギアにそう叱咤して寄ってくるスライヌ三匹を斬る。

——おかしい、とキラは思う。

今まで何度もここに足を踏み入れてきてはいるが、こんなにもスライヌが大量発生することは一度もなかった。それどころか遠くの方に視線を向ければ、むくむくとまるでソフトクリームが出来上がる時のようにスライヌ達が地面から湧き出してきている。

こんなことは初めてだった。

またしてもキラは小さく舌打ちして、ネプギアを脇に抱えて背後に聳える巨木の幹を蹴ってスライヌの軍勢を跳び越える。

『ヌラッ？』

『ヌラヌラッ？』

予想外というようにスライヌ達は慌てている。その隙にキラはネプギアを地面に降ろして手を引いて疾走する。

「ねえねえキラあ、このスライヌってこんなに多いの！？」

半ば涙目涙声でネプギアは嫌悪きった表情でキラに問うたが、キラは怒声を張り上げて答える。

「なワケないだろ！　こんなに多いのは初めてだ！」

確かに討伐する戦闘員達が長らくここを開けてモンスターが大量発生したことはあったがそれでも数十単位が増えたのみで、こうしてざっと見ただけでも数百単位、しかもスライヌ単種のみが増えているとなるとこれは明らかに異常事態であることは容易に察しが付くことだった。

とはいえ、こんな緊急事態を見逃しておけるはずもなくましてやスライヌ達は自分たちを追ってきている。このまま街に逃げたところで彼らを引き連れて余計な混乱を招くだけだ。

キラは再び、小さく舌打ちする。

急ブレーキを掛けて刀に手を掛けて居合の形を作り、そこから目にもとまらぬスピードで刀を振るう。直後、跳ねていたスライヌ達の動きが止まり、刹那、激しい水音を立てて四散した。

今ので片付けられたのも精々数十匹程度だろう。刀を鞘に収めてキラはそう推測する。

『ヌラッ』

『ヌラ〜〜ッ』

対する彼らは、何を思うでもなく至って涼しげな表情でじりじりと迫ってきている。

――違和感。

何を待っている？

何をしたい？

何を起こそうとしている？

いや、そもそも――『何故自分たちを狙う？』

今ではスライヌの軍勢の驚き、逃げてしまっているがここ辺りにはまだ結構な数の人間がいた。ならば手当たり次第でもいいはずだ。

しかし何故、彼らは執拗に自分たちを狙うのか、スライヌ達が出現してからただ一つ、自分たちを狙うのはどうして？

キラはそう思いながらまた一匹、スライヌを切り伏せた。

チラ、と背後のネプギアに視線を向けると彼女の方もまたスライヌに剣を立てていた。トン、と背中を合わせて守り合う形になる。

「キラ……早く抜けないとこっちも限界になっちゃうよ」

「分かっている。けど、このままにもしておけないだろ」

どのみち今ここを抜け出したとしてもどうせ戦うことになる。それに最早、この状態で逃げ出すことなど不可能だった。

彼らの周りには無数のスライヌ達が、二人を囲うようにじわりじわりとゆっくりと歩み寄っている。

たかがスライヌ、しかしモンスターだ。人間に危害を加えるなど重々承知、その上でキラはここに来た。

ぎゅう、と刀を握る手に自然と力が籠もる。

（これまで、か……）

いや、まだ――。

生にすがりたい。まだ、まだ生きていたい――。

そんなみつともない考えがキラの思考を駆けめぐる。

自嘲したような笑みが自然と浮かぶ。己はこんなにも卑しく、そして悲しい存在であったことに対する嘲笑。

スライヌ達が飛び上がる。自分たちに襲い掛かろうと瞳をぎらつかせて。

「ッー！」

ネプギアが目を伏せているのが分かった。

キラもそれにならうように、そっと終わりを覚悟して目を伏せ――

「ゴメン……『姉さん』……」

その言葉を、そっと、静かに告げた――。

ザン、と鋭利な刃物で何かを斬る音がした。

スライヌ達はこんな鋭利な攻撃はしない。ならば、救援か。

キラはそっと瞳を開く。

サイドアップにされた茶髪と青いコートが風に吹かれて靡いていた。その手を覗くことが出来ない、大きめの袖から黒い特異な形状の武器『カタール』が一对、伸びていた。

風に乗ってよく通る、心強い声がキラの耳を刺激した。

「間一髪ね。もう大丈夫よ」

「ッーアイ、エフ……さん？」

アイエフはキラに横顔を見せてニツと口の端をつり上げた。

どこからともなく現れた彼女の姿に驚いていたのはキラ達だけじゃない。スライヌ達の方も、いきなりの彼女の出現に戸惑っていたらしく動きを止めていた。が、すぐに新たな敵を見つけたとばかりに瞳の色を変えて飛びかかった。

数にして恐らく15匹くらいか。アイエフは両手を左右に突き出した状態でくるっとターン。それによってまず4匹のスライヌが四散した。続いてカタールに内蔵された銃弾で更に3匹を撃墜。回転を止めて直線上に並ぶ3匹をキックで葬り、残る5匹を回し蹴りで墜

とす。

実力差をモロに見せつけられてスライヌ達もじりじりと身を引いていた。アイエフが一步踏み出す度に向こうもゆっくりと距離をとる。先程とはまったく逆、まさに形勢逆転だ。

それを横目に、コンパが医療器具を携えて二人の元に駆け寄る。

「お待ちです」

「あ……コンパさん」

ネプギアは安心したように彼女の名を呼んだ。

「た、助かったのか……」

キラは安堵の息を盛大に漏らしてがくりと地面に膝を突いた。

スライヌ達に睨みをきかせつつも、アイエフはクイと顔を半分だけ覗かせてキラ達に言った。

「つーか、なんでアンタらはこんなところにいるワケ？」

「え？ あー……なんつーか、その……」

キラは言葉に詰まる。

先日と言われたことを思い出したからだ。

『そうね、私が悪かったわ。頃合いを見てこっちから連絡を入れると思うからその時は……』

つまり、アレはこちらの準備ができ次第、という意味だ。

先に彼女たちに何かを言うておくべきだったかとキラは苦い表情を俯かせた。

「ま、無事だったから許してあげるわ」

「でも、これからはそういう無茶はやめてほしいです」

「はあい……」

ネプギアは疲れ切った声でそう答えた。

彼女の身体がへなへなと崩れ落ちる。それを慌ててキラは支えてや

った。

「とにかく、今はこいつらを片付けて……」

アイエフはスツと眼前のスライヌ達に視線を落とす。

が、その視界に映るのはただの青。いや、水色の方が限りなく近いような気もするがそんなことは極めてどうでもいい事柄だ。

本来『それ』が発するはずの可愛らしげな音はこの状態では決して有り得ない。ぼよんっぼよんっ、と超特大級の水風船を跳ねさせたら恐らくこんな音がするんじゃないか、みたいな音を発してそれは4人を見下ろしていた。

「――」

アイエフは言葉を詰まらせた。いや、声を発せなかった。

何かを言おうとした瞬間に身体を襲う浮遊感と激痛。もしかしたら骨の一本や二本折れたんじゃないかという音と共にアイエフのその小柄な身体が吹き飛ばされたのだった。

キラは何も言えなかった。目の前に存在する圧倒的なモノに戦慄した。

形状は、何の変哲もない至って普通のスライヌだ。ベスでもメタルでもない。

けれど、圧倒的な存在感を醸し出しているのは紛れもなくそのサイズだ。

縦は恐らくキラを二人並べてやっとつり合うくらい、横はもう街道をせき止めてしまうほどに特大サイズ、言うなれば『ビッグスライヌ』の様相を呈していた。

「いッー！」

声を上げようとしたがそれよりも早くにビッグスライヌの身体が、決してその図体からは想像も出来ないようなまさに閃光のスピードでキラに突進を仕掛けてきた。

キラの背中に大きな衝撃が走る。どうやら樹木に叩き付けられたらしい。

「つてえ……」

しかし、痛みに悶えるヒマもなくビッグスライヌは跳躍してキラを踏みつぶした。

「ッ——！」

息が出来ない。

キラは必死にもがくがそれに相高まるようにしてビッグスライヌも押さえつける力を強める。

キラの視界がぼやけて、意識も朦朧とする。

「ッ！ コンパさん、援護お願いします！！！」

「りよ、了解です！」

ネプギアは剣を構えてビッグスライヌに突進。コンパが特大注射器を構えて放射、ビッグスライヌの耳の辺りに命中して爆発が起きる。
『ヌラッ？』

野太い声でビッグスライヌがこちらに視線を向ける。ネプギアは剣を逆手に構えてビッグスライヌの額に当たる部分に突き立てた。剣を引っこ抜くと中からびゅっと奇妙な液体が噴き出す。

「やった……？」

ネプギアは距離をとってその様子を眺める。吹き出した液体はやがて一つの小粒となり、スライヌが生み出された。

「うええ！？」

あまりに衝撃的だったか、コンパがそう声を漏らした。ネプギアの方は既に声も出ないかただただ驚いた表情でそれを見ていた。

そしてスライヌは二人を一瞥するとぼよんっぼよんっと跳ねてビッグスライヌと同化した。

たらりとネプギアの頬に冷や汗が流れる。

「あの……あれ、何なんでしょうか？」

「わ、分からないですう……」

その時、ビッグスライヌの瞳が光った。

ぐりんっ、と身体の向きを変えて二人に突進を繰り返す。

「ッ——！」

ネプギアは咄嗟にコンパ諸共、近くの茂みに突っ込む。

的を外して背後に聳えていた巨木にビッグスライヌの身体が突っ込む。ミシミシ……と音を立てて巨木が倒れた。

癪に障ったようで、ビッグスライヌがぐぐぐとゆっくりと身体を二人の方へ向けて怒りに視線を向けていた。

直後、ビッグスライヌの身体は二人の眼前に迫っていた。

「ッ！」

痛みに表情を歪めた。

けれど、今度こそキラは足に力を込めた。

全身の骨が、筋肉が軋むのが分かった。けれど、ここで折れるわけにはいかない。ぐっと両足に力を込めて鞘から抜きはなった黒い刀身でビッグスライヌを止めていた。

「キラ——！」

「退け！ 早く——！」

キラの怒号にネプギアとコンパはたと気付いた風にその場を離れた。

（よし！ あとはこのまま——！！）

しかし、そこでまた脳が揺らいだ。

まだ完全に回復しきっていないらしく、目眩が襲う。

その隙を襲ってビッグスライヌが力を込める。

「しまっ——！？」

——ガスッ、太い音と共にビッグスライヌの身体が吹き飛んだ。

アイエフがハイキックを放ち、ビッグスライヌに一撃与えていた。

「助かりました……」

「まだ早いわよ」

アイエフの額から出血しているのが見て取れたが今は気にしている場合ではないという風にアイエフは乱暴に額の傷を拭っていた。

バキバキと木々の折れる音がしてのっそりとビッグスライヌの巨体を持ち上がる。

『ヌラ——』

「コンパは援護射撃！ ネプギアは右から、キラは左から攻めなさ

い!!」

アイエフの指示にコンパは再び爆撃弾を装填して放射。ヒットした部分から爆炎があがり、ビッグスライヌの動きが止まる。

できるだけ姿勢を屈めてキラは刀を構えてスライヌに斬りかかる。先程と同じようにビッグスライヌの身体から液体が爆ぜ、スライヌが生み出される。同化される前にキラは一匹を叩き潰してもう一匹を斬る。

ネプギアはキラよりも大きくビッグスライヌの身体をえぐり取る。分離したスライヌを一撃で叩き斬って葬る。

アイエフは牽制射撃をしながら本体に接近、右のカタールで額に突き立ててもう片方でスライヌ達を切り伏せる。

大きさが半分程度になったところでスライヌ達は分離した。

トドメとばかりにコンパの爆撃弾が地面を抉り、数匹が消し飛ぶ。

『ヌラッ!?!』

『ヌラヌラッ!?!!!』

危険を感じ取って、スライヌ達は一目散に茂みの中に消えていく。

「――終わっ、た……?」

ネプギアはへなへなと地面にへたり込む。キラも安堵の息を漏らし、刀を地面に突き、体重を預ける。

＊

「チッ……アイツら……」

少女は忌々しそうに奥歯を噛んだ。

バーチャフォレスト、ネプギア達から暫く離れた場所でその少女は悔しそうな表情のまま4人を睨んでいた。

身を隠すように、木々の陰に隠れてその少女はそこにいた。

「まさかビッグスライヌを撃退するなんて……」

少女としてもキラ達がビッグスライヌを撃退することは予想することが出来ないことであつたらしく、憎々しげに唾を吐いた。

『ヌラッ』

『ヌラッ』

「けっ、うるせえなデメェら」

少女が何やら異様なディスクを前につき出すとスライヌ達の身体がそのディスクに吸い込まれるようにして消えた。

「にしたって、マジパネェ奴らだな……。マジック様が目えつけんのも分かる気がするな……」

最早、感心したような素振りです少女は顎に手をやって暫く彼女らを眺めていた。

しかし、そこから少女は不適に口元をつり上げる。

「ってえことは……アイツらを殺れば、アタシは……！」

ゾクゾクと身体が歓喜に震えるのが分かった。

彼らを殺せば、自分は間違いなく有能だと認められる。そう、認めて貰えるのだ――。

そう考えるとこの興奮を抑えてなどいられるはずもない。

『クッククク……』と抑えきれない衝動をそのまま笑い声として吐く。

「いや、焦っちゃダメだな。しっかりと準備して……」

とは言うモノの、少女は既に成功した姿を思い描いているようで不適な笑みを途絶えさせることもなく、ゆっくりとその場を立ち去る。

＊

「よかったぁ……」

ネプギアは目元に涙を溜めてキラに抱きついてそう言った。

彼女の端正な作りの顔が急接近したことに対してキラは自分の動悸が速くなることを感じつつ、彼女の華奢な身体を抱き留めた。

彼自身も、自分が生存していることをようやく実感して安堵の息を盛大に漏らす。

「助かった……」

消え入りそうな声と共にキラはふうと吐息した。

目の前に感じる少女のほんのりと暖かい体温が、自分が生きていることがよく実感させてくれる。

しかし、すぐにそんな彼の表情に陰が掛かる。

「――（ニコッ）」

「――（ゾクッ）」

アイエフが至ってにこやかに笑うのに対し、キラは背中に悪寒が走るのがよく分かった。

つう、と額に冷や汗が垂れる。ひくついた表情が浮かぶ。

ネプギアの方もそんなアイエフの表情に気付いたのか、キラと同じように恐ろしい表情でアイエフを見ていた。

「まあ、色々と言いたいことはあるんだけど――」

「「すいませんでしたー！！」」

土下座×2。

見かねたコンパの方は少し遠慮がちに横から話に入る。

「あ、あの、もういいんじゃないですか？」

「ダメよ、あと少しで死んでたかもしれないんだから。ここは厳しくいかなきゃ」

その言葉に二人の表情が更に青ざめる。

そんな二人を一瞥してアイエフは嘆息した後に腰に手をやってから声を発した。

「とにかく面倒な説教は一時中断ね。とりあえずここを離れましょ」
アイエフはピッとダンジョンの出口の方角を指してそう言った。

「ですね。怪我の方もゆっくり治療したいですし、早く帰るです」

コンパの言葉にキラはひとまずゆっくり首を縦に振った。

まだ少し軋む身体を起こしてキラはふと空を仰いだ。

――何かが起きそうな、そんな一雨来そうな黒雲が迫っていた。

キラはきゅつと口を噤み、先を行く三人の後を追った。

EP. 9 [SWORD AND DARKNESS] (前書き)

2連投下！

…今までの自分から考えたら普通の話でした

EP. 9 [SWORD AND DARKNESS]

ポツリ、と青年のフードから軽く覗いた頬に雨粒が当たる。

つう、と頬の曲線に沿って流れ落ちる水滴を右手で軽く撫でてからふいっと青年は天を仰いだ。

どうやら降り出したらしい。

青年の、よもや男性のものとは思いがたい淡い色の唇から吐息が漏れた。それがいったいどんな感情を帯びていたのかは知る由もないが。

人混みの中で青年はピタリと足を止める。

その異様な出で立ち、振る舞いは全て人の目を惹くものであった。

しかし道行く人々はまるで青年を存在していない者のように特に気にした様子もなく立ち去っていく。

「雨、か……」

低い声で青年は呟いた。

暫くそう佇んでいた後に、ふっと瞳を伏せてゆっくりとまた一つ吐息を漏らす。

次第に雨は勢いを増していく。

プラネテューヌで久しぶりの土砂降りと言ったところか。道行く人々は鞆やら何やらを一時しのぎで雨除けにしているがそれは無駄な努力とばかりに雨粒は人々を濡らしていく。

空に浮かぶ黒雲がまるでそれらの人々を嘲笑うかのようにゴロゴロと雷まで鳴らしていた。

しかし、そんな中で。

青年はそれに対して怯えることも焦ることもなくその針のような雨の中に立っていた。

ただ一人――。

雨にその衣装がまわりつこうとも、ピクリとも表情を変えずにただ空に漂う黒雲を睨んでいた。

人々は彼の存在を気にすることはない。いや、気にはしていた。

誰もその目を惹く威圧的な雰囲気。異様な佇まい。不可思議な衣装。どれもこれも目を惹かないわけがない。けれど、人々は彼に関わらない。

当然だ。

けれど、彼女は惹かれた。

少女・コンパは。

彼のその何もかもが浮世離れた青年に惹かれた。

いや、彼女の良心が働いた所為でもあったかもしれない。

使いで近所の店まで出向いた帰りだった。コンパはそんな彼が目についた。

どうして、こんな雨の中に――？

コンパはそう思い、少し遠慮がちにゆっくりと彼に歩み寄った。

ただ、彼女のブーツの音だけが妙に甲高く響いていたかもしれない。ゆっくりと己の持つカサを差し出して彼に当たる雨粒の進行を防いだ。

コートを着用していたためにそのことに気付くまで数分の時間を要した。雨粒が自分に触れなくなったことに気付いた青年がくるとコンパの方に顔を向けた。

けれど、コンパの位置からは目深に被ったフードの所為でその人相は伺えないが極めて若いのだろう。青年はこくりと首を傾けて口を開いた。

「ありがとう」

「いいえ、雨に濡れている人は放っておけなかつたです。当然のことですよ」

コンパはいつものように屈託のない笑顔で応えた。

青年は口元の筋肉を緩めて、微笑を作った。そこで何かを言おうとしたのか青年が少しばかり口を開いたが、すぐに噤んだ。

フードの隙間からでもそれが覗けたのか、コンパが不思議そうな表情で問い掛けた。

「どうかしたですか？」

「いや……可愛らしい人だな、と思って」

青年はごくごく紳士的にコンパに接した。

しかし、対するコンパの方はやはりというかやりなれた感があり、少し顔を赤らめて返答した。

「もう、おだてたって何もでないですよ」

「いや、凄く……可愛いよ」

果たして狙っているのだろうか、青年は決してその事実が間違っていないとでも言うように何度もそう返した。

コンパは気付かない。彼の口調が、少しずつ『変化』していることに――。

「それはそうと、どうしてこんなところに立っていたのですか？」

コンパはそう疑問に思ったことを口にした。

物好きでもなければ、雨に打たれようとは思はない。ならばどうして、聞くのは人間の心理でもあるだろう。

その質問が最初から投げかけられることを分かっていた、とでも言うように青年はフツと笑ってから答えた。

「……、少し考え事でもしていたんだよ」

「考え事、ですか？」

「ん、とっても大事な――考え事な」

コンパはキョトンとした表情をしていた。

それを見て青年は口元を押さえてフツとまた笑う。

「まだ知らなくてもいいことだ」

「そう、なんですか？」

コンパの問いに青年はコクリと小さく頷く。その、たったそれだけの仕草のハズなのに。それでも、コンパの心臓は跳ね上がった。

内側から滲み出るその異質な雰囲気なのか、それとも彼に何か人を引きつける何かがあったのかは分からない。

それでも自分はこれを知っている——コンパは胸元を押さえてそう思った。

「どうか、したか？」

会ってまだほんの数分、それでもこんな風にフレンドリーに語りかける彼を直視できずにコンパはそっと視線を外した。

頬が紅いのも見られているだろうか、そう思うとますます頬が火照るのを感じて俯き加減を増した。

「……どこが悪いのか？」

心配そうにそう尋ねる彼の声にコンパはハッとなって慌てて笑顔を作る。

「そ、そんなことないです！ 元氣元氣、コンパちゃんはとっても元氣です！」

「……」

『外した……』とコンパはorzで項垂れた。しかしその後には頭上で発せられた堪えた笑い声に顔を上げる。

「ぶっ……くく……」

「な、なんで笑うんですかあ……？」

コンパは半分涙目でそう抗議した。

それから暫く腹を抱えて小さく笑う青年の肩をポカポカと叩くコンパという何だか比較的恋人っぽい絵面が構築されていた。

「——はー、コンパは本当に面白いな」

笑い涙を拭うように青年は目元を擦った。

「むうー、笑うなんてヒドイですう……」

コンパの方はぷりぷりと可愛らしく腹を立てていたが、それすらも

可笑しく思えたように青年はよしよしと彼女の頭を撫でた。

「……もう少し、時間はあるか？」

「ふえ？ まだ大丈夫だと思うですけど……」

コンパは腕時計に目をやって曖昧に頷く。

「そうか。じゃあさ、少し話さないか？ もう少しお前とゆっくり話がしたくてさ」

「……それって、デートのお誘いですか？」

「ツー、ったく。チョーシいいこと言いやがって……」

青年は少し恥ずかしそうにフードの上から後頭部をかく。口ではそう言いつつも、満更でもないらしい。

少し迷った風な素振りを取った後にコンパはゆっくりと頷く。

「いいですよ。私ももう少しお話ししたいって思ってたです」

「――そうか」

その時、青年のフードの奥の瞳が妖しく光った――ような気がした。

☆ ☆ ☆

雨。

部屋に立て付けられている大きめの窓に雨粒がへばり付く。

それをチラと視界の端に入れて、キラは大きめの溜息を吐く。

（雨は嫌いだ――）

キラはそう心中で呟いた。

雨は嫌い。

嫌なことばかり思い出す。楽しいことも嬉しいことも、辛いことも悲しいことも――。

雨を見ていると陰鬱な気持ちになる。

何もかもが蘇る。忘れようとしたことも、思い出したくないことも――。

落ち着かない――。

部屋に備え付けられてあるベッドに腰を落したり、すぐに立ち上がってウロチヨロと室内を不用意に歩き回ったり、何度も何度も意味もなく足を組み替えたり、景色が変わるわけでもないのに窓の外を覗き込んでみたり。何をしていても落ち着かないのだ。

「ネプギア……」

きつく結ばれていた唇からそう声が漏れる。

＊

遡ること約一時間半前――。

バーチャフォレストから無事にプラネテューヌ本都市へと帰還したキラ達は何というか、とてつもなく近寄りがたい雰囲気放っていた。

特にその元凶であるアイエフが最早、背景が歪んで見えてしまうほどに蜃気楼を彷彿とさせるどす黒いオーラを放出していたのだから誰も近寄れるはずもなかった。

「……あの、アイエフ……さん？」

キラは遠慮がちに口を開いた。

「なにかしら？」

口調こそ、いつもの彼女であった。

けれど、そんな彼女が纏うオーラは到底、何かを突っ込めるような

勢いを削り取っているようにも思えた。

そこでネプギアはおずおずと口を開く。

「す、すいません。私が勝手な事したからお二人にも心配かけちゃって……」

段々と尻すぼみになっていく彼女を暫く見つめていたアイエフが盛大な溜息を吐いて両手を腰に当てて言った。

「まあいいわ。アンタなりに何かをしようとしていたんだろうし、この件に関して私からはもうお咎めなしよ」

アイエフは半ば諦めた感じでそう言っていた。

「私も二人が反省しているならいいと思うです」

コンパの方は初めからそういう気がなかったとは思うのだが、突っ込むよりも先に安堵の息が出るというモノで、キラとネプギアの二人はほっと胸をなで下ろした。

「私からのお咎めは、ね……」

アイエフは誰にも聞こえないようにそっと呟いた。

しかし、それはさして重要な問題でもない風でアイエフはその思考を無理矢理蹴散らした。

「ともかく、こっちとしてもできるだけ楽な方法でシェアを上げたいわね」

携帯をいじりながらアイエフはそう言った。

「そうですね。効率の悪い方法じゃ、いつまで経っても女神様を助けられないでしょうし……」

キラは顎に手をやって考え込むが、元よりそのことに精通していない自分が考えても仕方のないことだと溜息を吐く。

「昔の私達は何も考えずにクエストをやってそれで事は足りてたですけど……」

「昔？」

「何でもないわ！ それより効率のいいシェアの集め方を考えましょ」

コンパの言葉に疑問を抱いてキラは問い掛けるが、アイエフは誤魔

化するように話を反らした。彼女らしくない、とキラは眉を寄せるが比較的弱い立場なのでキラは大人しく彼女の言い分に従った。『むく……』と喉を唸らせて腕を組む。しかしながらキラに思い浮かぶ案と言えばせいぜい他人から好まれるキャラを演じることであり（EP・7 「KIRA」参照）、既にダメな気がしたのでその考えは記憶の彼方に吹き飛ばした。

「そうね……まあ仕方ない、か」

アイエフは少し面倒くさそうに口を開く。

そんな彼女の様子を不審に感じたか、キラは小首を傾げて彼女に問う。

「あの……仕方ない、って何がですか？」

「ん？ あー、まあ苦肉の策ってところかしらね……」

アイエフは頬を掻きながらたらりと冷や汗を垂らす。その様は明らかにいつもの彼女とは異なる。

「そうね。まあ色々と準備もあるだろうし、それにアンタは一応でも顔を出しておかないとねえ……」

チラ、とアイエフはネプギアに視線を送る。

それで彼女の方もその意図に気付いたのか、肩をすくめて小さく首肯する。

「……？」

キラはきょとんとした表情でネプギアを見る。

そんな彼に呆れたようにアイエフは視線を送ってからゆっくりと口を開いた。

「だから、この子は女神でしょ？ つまり『教会』に顔を出さなきゃいけないってことよ」

「ああ……」

教会。

数年前まで『協会』と呼ばれ、各大陸を統治していた組織だ。しかし、ゲームギョウ界が現在の形になったとき、大陸協定により『政府』として機能するようになった際の組織の中樞になった機関だ。

そこでは主に都市の経済や情報管理、女神及び候補生の保護なども行っており、謂わば女神達の居場所である。そこに顔を出すのは当然のことかとキラは首肯する。

「それに教会ならたくさんさんの情報や広報活動も行っているですから、きつと効率のいいシェアの向上の方法も分かるです」

コンパの言葉にキラは理解したように何度も頷く。

プラネタワー。

教会の機能の中心となる建物であり、天高くそびえるそれを一瞥してキラはそのドアをくぐる。

キラは近場のギルドを利用するので分からなかったが、結構冒険者達がクエストなどを求めて訪れるのかと納得したように周囲を眺めて感心したような声を漏らす。

前方を歩くアイエフが遅れてしまっているキラにクイクイと右手で指示するのを見て慌てて彼女の後を追う。

と、そこでコンパの姿が見えないことに気付く。

「あの……コンパちゃんはどちらに？」

「あの娘なら政府の医療員の娘に言われて足りない備品の補充に行ったわよ？」

「……そうなんですか」

どうもパシリみたいな感じだなとキラは後頭部を掻く。

そして、そこまで言って彼女から視線を外したところで自分を取り巻く違和感に気付く。

自分たち三人を囲うようにして佇んでいるサングラスに黒スーツを纏った女性達。どうにも機能的な外見をした女性達から発せられるのは何の色も帯びないただの無機質なオーラだけ。

「来たわね」

「へ？」

キラは背後のアイエフを見てそう声を漏らす。

アイエフは女性の内の一人に何事かを話しかけてからこちらを見た。
「ふえ!？」

突如、キラの真横からネプギアの慌てたような声が漏れる。

「ネプギア!？」

それに驚いて、腰の刀に手を掛けながらそちらを向く。

視線の先には数人の女性に担ぎ上げられたネプギアが奥の部屋に担ぎ込まれて行っていた。

それにポカンとした表情を浮かべるしかできないキラがようやく何らかのアクションを取れるようになったのは肩に掛かる妙に強い力を感じてからだった。

「貴方様はこちらへ」

先程のスーツ姿の女性の一人がキラの肩に手を掛けていた。

「ま、待て! アンタらネプギアをどこに連れて——ッ!」

と、そこまで言ったところでキラは言葉を詰まらせた。あとのその場に残った女性達がキラに向かって銃口を向けていたからだ。

「ッ、アイエフさん!」

彼女は政府の中でも顔の知れた人物だろうと踏んで、キラはアイエフに怒声を投げた。

彼女ならばこの状況をどうにかしてくれると思い出た行動だったが、どうやら考えは甘かったらしい。

「……連れて行きなさい」

「な——ッ!？」

彼女の言葉で数人の女性がキラを抑え込む。

それなりに力のある方だと自負していたキラだが、たった数人とはいえ女性。それを払いのけられないのかと背後の女性達を睨む。

「安心しなさい、アンタもあの娘も酷い目に遭わせるワケじゃない。大人しくしていれば、ね……」

キラを見下ろす形でアイエフはそう言い放った。

「ッ——!!」

キラはワケの分からないと言った風に表情を歪めてそのまま女性達

に連れられて教会の一室に軟禁させられることになったのである――。

＊

「クソッ！」

力任せにキラは壁を殴った。

刀も没収されてしまったし、自分には為す術がない。

せめて刀があればすぐにでもこの扉を叩き斬ってネプギアの元に急ぐのに、それができないのはもどかしい。

それなりに力を込めて扉を殴る。しかし、ビクともしないと鍵に手を伸ばすが外側からロックされているようで反応はない。

「この――ッ！」

もう一度、力を込めて扉を殴るが結果は同じ。

仕方がない――とキラは拳を握って全力を乗せて扉にぶつけようとしたところで自動ドアが開き、そこにアイエフの姿が映る。

「……」

「……何、してるの？」

アイエフは極めて呆れたような表情をしてキラを睨んでいた。一方で当のキラの方はすごすごと拳を仕舞ってアイエフから視線を外す。

「何してたのよ」

「何でもねーです……」

今更、扉を壊そうとしていたなんて言えるはずもなくキラは答えを濁した。

『ふうん……』といかにも訝しげな表情でキラを一瞥するが、すぐに大して気にした風もなく部屋を出るように指示する。

「アンタに話があるそうよ」

「……誰がですか？」

「イストワール様が」

「……！」

その名は知っている。

いや、恐らくプラネテューヌで知らない者はいないだろう。

現在この国を治めている『教祖』であり、今まで幾度となくこの国の情勢を立て直してきたやり手の元首、というのが専らの噂だった。どちらにしてもこの国のピンチを救ってきた英雄であるということに変わりはない。

そんな人物が自分に何の用か、とキラは訝しむがやはりお偉いさんの考えは分らないというようにキラは思考を放棄してアイエフの後を追う。

コツコツ、とアイエフがブーツをならしながら前に行く。そしてそんな中でアイエフは視線だけを背後に向けてキラに言った。

「そんなにかしこまらなくてもいいわよ。いつも通り、ゆったりとしてもらっていいわ」

「で、でも教祖様ですよ？」

彼女はそう言うが仮にも国を治める、謂わばこの国のナンバー2だ。そんな相手に緊張するなど言う方が無茶であるのだが。

アイエフは『あー……』と思い出したように声を出して後頭部を掻く。

「ま、とにかくそんなに気を張る必要はないって事ね……」

「？」

彼女の言いたいことはよく分からないが、リラックスしろと言ってくれているのだろうと思い、キラは小さく深呼吸する。

そしてタイミングを見計らったように教祖が控えているという『第03応接室』というプレートが掲げられた部屋に行き着く。

キラができるだけ服装を整えている内にアイエフはコンコンとドアをノックして声を掛ける。

「イストワール様、例の少年をお連れしました」

『どうぞ』

掛かった声は少女のモノだった。

キラは訝しみつつも、恐らくイストワールの側近か何かだろうと思

いながらアイエフの指示に従って扉をくぐる。

豪勢な作りの応接間に、ソファが向かい合う形で二つありそしてキラから見ると左側のソファの上にちょこんと、おそらく5、6歳程度と思われる少女が腰掛けていた。

「あの……」

「初めまして。私がプラネテューヌの教祖、イストワールです」
キラを沈黙が襲う。

彼の創造としては厳とした雰囲気醸し出す二十、三十代ほどの男性と言ったイメージがあつたのだが、どうもその姿はあまりにイメージとかけ離れていた。

「イスト、ワール様……?」

「はい♪」

屈託のない笑顔でイストワールは何故か嬉しそうに返事をした。

背後で苦笑を浮かべるアイエフに視線を向けてキラはパクパクと口を開閉させている。その意図を汲んだのか、アイエフは相変わらず苦笑いのまま答える。

「そうね……。最初に会う人は大概そんなリアクションなのよね」

「や、あの……へ?」

ロクな言葉を発せずにキラは何度もアイエフに問う。

しかし、いくら何をしたところで目の前に映る事実が変わるわけでもなく、キラはイストワールに奇異の視線を送っていた。

「現実よ。受け止めなさい」

「は、はあ……」

「まあ、どうぞお掛けになってください」

イストワールは右手で自分の前のソファを指してにこやかな笑顔を浮かべる。

とりあえず言われるがままにキラはゆっくりと歩み寄ってソファに腰掛ける。

「キラさん」

「は、はい!」

ピンと背筋を張ってキラは返事をする。

いったいどんな質問が来るのかとキラはドギマギしつつ、全神経を聴覚に集中させるが。

「キラさんはコーヒー派ですか？ それとも紅茶派ですか？」

「……はい？」

それはキラの期待を大きく裏切るモノで、まさかコーヒーか紅茶の好みを聞かれるとは夢にも思わなかったので答えが出ない。

「自分が飲みたい方でいいですよ」

「えと……じゃあ……、コーヒーで」

キラの答えを聞いてイストワールは横に立っていたアイエフに指示を出してから、アイエフは一度、部屋を退室した。

「先日、リーンボックスから美味しい豆と茶葉を頂いたんですよ。」

どうせならキラさんも如何でしょうと思ひまして♪」

「は、はあ……ありがとうございます」

『この人、ホントにあのイストワール様か？』とそろそろキラは彼女を疑い始めていた。

数分後、アイエフが一式を取りそろえて入室、キラとイストワールの前にカップを置く。

「ありがとうございます」

「いいわよ。私がやったワケじゃないしね……」

フツと自嘲したような笑みを浮かべて答えた。

何故だか納得できるような気がして、キラは『ああ……』と言ったらグーで殴られた。

ひりひりと痛む頬をさすりながらキラはカップに口を付ける。

ふわっと香る淡く芳ばしい香りがキラの荒ぶっていた心を落ち着かせてくれるようでゆっくりと思考する余裕を与えてくれた。

思えばここは教会、女神を保護するための場所だ。そんなところでネプギアが手荒な真似をされるはずがないと思ひ直したのだった。

（少し焦りすぎかもな……）

頬を搔きながらまた一口。

いや、寧ろ子供のような考えであつたかもしれない。

——彼女を横取られたという我が儘であつたかもしれない。

そんな幼じみた考えを嘲笑うようにふつと笑みを零す。

「なに笑ってんのよ？」

「いえ、なにも」

カップを目の前に置いてからキラは真剣な表情をつくって問う。

「あの、それでイストワール様はいったい俺に何の用が？」

どうもそのことで気が気ではないキラだったが、イストワールの方は特に表情を変えることなく紅茶の香りを楽しみつつ、カップを傾けていた。

流石に答えなければならなかったのか、イストワールは首を傾けて不思議そうに問い返す。

「何か用がなければお呼び立てしてはいけないでしょうか？」

「ぐ……いえ、そういうわけでは……。でも話があるって」

「イストワール様、あまり時間もないですし早めに本題に……」

アイエフが呆れたように横からイストワールに声を掛ける。

渋々といった表情でイストワールがカップを置いてからコホンと咳払い。

「まずはプラネテューヌの教祖として礼を言いたいと思います。ありがとうございます」

「え、ええ？」

いったい何のことかとキラは首を傾げる。

「たった二日間ですが、ネプギアさんを保護していただき、何とお礼を言えばよいのか……」

『そのことか』とキラは首肯する。

「いえ、気にしないでいいですよ」

しかしながら、彼としては当然のことをしたという意識しかないの

で寧ろ感謝されるのはむしろ痒い感覚とも言えた。

「ていうか、その情報は既にお持ちなんですね」

「まあ、そこは諜報部の力というか、ね？」

アイエフの言葉に納得するキラはその横でイストワールの吐いた「まあそれだけじゃないんですけど……」という呟きは聞こえなかった。

「そのついでに色々調べさせて貰ったんだけど」

アイエフはチラとキラの傍らに置かれている彼の装備であった黒い刀に視線を送る。

それからピッとその刀を指してから口を開いた。

「その刀はね、プラネテューヌの府立博物館に厳重に保管されていたはずの世界最古の刀なのよ。『いつ』、『どこ』で、『手に入れた』の？」

「——ッ！」

そこから温厚な笑みを浮かべていたキラが突如、目の色を変えて刀を抱き寄せた。

「そんなハズない!!」

「！」

「……」

絶対に渡すまいと、キラは両手に全力を込めて刀を握っている。

「これは……俺が貰ったんだ！俺のモノなんだ！」

「待ってください。話を——」

イストワールがそう言ったところでアイエフがその脇を抜けてキラを押さえつける。

「ぎッ——!？」

「アイエフさん！」

「大丈夫ですよ、押さえつけているだけです。……さあ、答えて。誰に貰ったの？」

しかし、その問いにはキラは睨みで返すのみだった。

イストワールの指示で嘆息しつつ、アイエフはキラの上から立ち退

く。

「キラさん」

「……」

「その刀、とても大事なモノなんですね？」

イストワールの問い掛けにキラは無言でこくりと頷く。

それを見て彼女の方も納得したようにゆっくりと首肯した。

「では、それは差し上げましょう」

「……イストワール様？ いいんですか？」

「ええ、彼の大事なモノを取り上げるのは忍びないですし……。これは先程の礼とでも言っておきましょう」

キラは一瞬、戸惑ったように発言を押しとどめた。けれどゆっくりと、弱々しく声を上げる。

「ありがとうございます……」

「いいえ」

イストワールはニッコリと微笑を浮かべて小さく頷く。

「とはいえ、それだけではこちらも恩を返せたとは思っておりませんし……。今日は教会のパーティにどうぞご参加なさってください」

イストワールはキラにそう声を掛ける。

キラは少し、状況の掴めないような表情をしていたがすぐに小さく頷く。

イストワールの指示で数人の女性がキラを連れてどこぞへと消えていく。

部屋に残されたアイエフはチラとイストワールに視線を向けてから口を開いた。

「よろしいので？」

「はい。折角のパーティですし、楽しんで貰いましょう♪」

「いえ、そのことではなくて……」

半ば呆れた風にアイエフは額に手を当てて嘆息した。

くろがたな
「黒刀のことですよ」

「……ええ」

イストワールは口調をやけに真剣なモノにしてから小さく頷いた。
しかし、アイエフは納得しかねるように少し声を荒げてイストワールに向かって言葉を放つ。

「けど、アレは――！」

「いいんですよ。きっと彼には必要なモノでしょうから……」

イストワールは既に姿の見えぬ彼を見据えるようにして目を細めた。
その声色からはいつものゆったりとした彼女のモノではなく、何手先をも見据える知将のような面持ちさえ感じ取れた。

「ですが、最後にアレを手に使っていたのは……」

「分かっています」

イストワールはフツと瞼を閉じる。

それから深く吐息してその名を吐き出した。

「パープルハート……」

☆ ☆ ☆

「ハハハ……コンパは本当に面白いな」

青年は到底、その纏った雰囲気からは考えられもしないような陽気な声でそう漏らした。

人気のない公園の中心にある休憩所。そこにコンパと青年の姿があ

った。

ベンチに腰掛けて、病院で起こしてしまったミスやトラブルを語ったところでそんな彼のリアクションが返ってきたのだった。

「そ、そんな悠長に言えないですう！ その時はホントに大変でえ……」

コンパは口でこそそう言っていたが、この時間が楽しいと思えていた。

なんだかんだと言って彼女と親しい仲であるアイエフとはこの数日によくやく時間が取れたのみで以前まではお互いに都合が取れず、こんな談笑の時間もなかったのだ。

そんなことを思っているコンパの横でひとしきり大爆笑を終えた青年がフードの奥に浮かべた笑い涙を拭ってから吐息する。

「はー……コンパは本当に今が楽しそうだなあ」

「ふえ？ た、確かに楽しいですけど」

いきなりそんなことを言われたコンパが慌てたように答えた。

その様子をまるで優しく包む母親のように、青年は彼女をその双眸で捕らえる。

「コンパ」

そっと彼女の頭に手を添えてくしゃくしゃと撫でる。

片目を閉じたくすぐったそうな表情をしてからコンパは顔を赤らめる。

「い、いきなり何するんですかあ？」

「……何でも」

なおも彼女の頭を撫でたまま、青年は答える。

一瞬だけ悲しそうな感情をむき出しにして、青年はそっとフードに手を掛ける。

影に隠れた彼の輪郭が露わになったとき、コンパは目を剥いた。

「ッー！」

その時、青年の右手がコンパの顔を鷲掴みにした。

優しくあやすような口調で青年はコンパに語りかける。

「大丈夫、眠るだけだ。次に起きたときにはもう……忘れているだろうから」

——ズシン、とコンパの身体に重力が付加されたようにも感じられた。

青年の位置からでもコンパの動悸が伝わるように、コンパはとろんとゆっくり目を閉じ、そして前のめりに倒れようとしたところを青年が受け止める。

ゆっくりと彼女の身体をベンチに横たえる。

その安らかな寝顔を暫く眺めて、青年はフツと息を漏らした。

「楽しかったよ、コンパ。これで俺は——」

青年はフードを目深に被り直して雨の中を進んでいく。

やがて、その姿は針のような雨の中に消えていった——。

EP. 10 [LONELINESS]

キラは自らが身につけている衣服の襟元を掴んで変な顔をした。

いや、正しくは『身につけさせられた』衣服だが。

「あの、ホントにこれ着ないといけませんかね……？」

恐らくコーディネーターであろう男性にキラは問い掛ける。しかし、当然というか男性は小さく頷いて「ええ」と短く答えるのみだった。もう何度目かも分からない溜息を吐いてキラはゆっくりと立ち上がる。

今、彼が身に纏っているのは燕尾服だ。

やはりパーティとは言ってもそれなりに格調高いモノなのだろうか
とキラは思い直す。

自分のパーティのイメージとしては一ヶ月ごとにギルドの方で催される焼き肉大会のようなものなのでキラはだいぶ所帯染みているとも言える。そんなものだからどうにもこのようなパリッとした服は落ち着かない。

おかしいところはないかと確認しながらレッドカーペットの敷かれた廊下を歩く。

目の前を歩く女性に指示されてキラは一枚の扉の前に立つ。少しばかり年季の入ったこんな最新鋭の建物にしては珍しい構造の扉だが、ともかくにもキラは扉を押し開けて入室した。

そこには恐らく数十人単位の人間がにこやかに、とは言えないがそれなりに楽しそうに談笑していた。それを横目に自分はどうしたらいいんだろうかと思いつながらキラは端に避ける。

「ッ……」

そっと吐息。

なんだかんだ言っただのままネプギアとは会えず終いだっただとキラは壁に背を持たれてそう思う。

——心配だ。

その後、彼女はとうなったのだろうかとか自分のようにイストワールと話をしているのだろうかとか色々と思うところはあったがせめて、せめて最後に彼女と話したかったのだ。きっとこれが最後になっってしまうのだろうか。

そう思うとやはりどこか思うところがある、とキラは吐息する。色々トラブルもあったが彼女と過ごした時間はキラにとって何よりも楽しいモノだった。だからこそ、彼女がいなくなってしまうえばその時間も終わりになってしまいうから。

「キラさん」

「っうわ!？」

突如として右手側から掛けられた声にキラはビクリと身を震わせる。視線を向けるとそこにはイストワールが立っていた。

「び、吃驚させないでくださいよ……」

「すみません」

動悸を鎮めるように胸に手を当てるキラにイストワールは申し訳なさそうに苦笑した。

それはそれとして、とイストワールは背後でもたついているらしい『少女』に言葉を投げかけた。

「もう、いつまでも恥ずかしがっていないでください」

「だ、だけど……」

もじもじと白い夜会服の腰部を握って少女はそう返答した。そして、その姿にキラは息を呑んだ。

今まで感じられなかった上品さ、大人っぽさが纏われている。衣服のみでこんなにも変わるモノなのかと言うほどに。

「ネプ、ギア……?」

「う、うん」

顔を赤らめてネプギアは答えた。

さっきとは別の意味で動悸が激しくなっていた。ごくりと唾を飲み込んでキラはネプギアの姿に釘付けになってしまふ。いや、もう外

界全てのことがどうでもよくなってしまうのだ。

「ど、どうかな？」

きっと似合っているかどうかを聞きたいんだろう。キラはその意図を認識するまでに数分を要した。

「き、綺麗だと思う……」

キラ自身も『可愛い』ではなく、『綺麗』が出たのは上出来だと上手く働かない頭でそう思った。

ネプギアはほっとした表情をして胸元を押さえる。

「よかった。キラも格好いいよ」

「そ、そうか。……まあ借り物だし、当たり前かな」

照れくさそうにキラは後頭部をポリポリと掻く。

初々しいやりとりだ、とイストワールは微笑ましくそんな二人を見つめていたがそろそろ頃合いかと時計に視線を移して二人に声を掛ける。

「では、主役も集まったことですしそろそろ挨拶をしましょうか」

「へ？」

キラは素っ頓狂な声を上げる。

「今日のパーティはネプギアさん帰還を祝して、それにキラさんへの御礼のためのものでもあるのでもちろん主役なんですよ？」

「しゅ、主役！？ 俺はそんなの聞いてな——！」

駄々をこねるキラを数人の女性SP達を取り囲んで無理矢理に壇上に上がらせた。

「それでは皆さん、盛り上がってきたところで主役の登場ですよ！」
イストワールが壇上のマイクを使ってキラとネプギアを指した。

二人とも恥ずかしそうに連れてれと頬を朱に染めて微笑を振りまいていたが、どうにもそこら辺がメンバーに受けたらしく

『うおおおおおおッ！ ネプギア様あ——ッ！——！』

『キャ————ッ！！ キラくん——！！！！』

などと男女入り交じった声が会場に響いていた。

それに対してもう笑うしかなかった二人の人氣が更に上がっていたのだがここでは割愛させて頂く。

とりあえずいつまでも壇上に上がっていてもなんだと言うことで二人はしずしずと階段から下りる。キラとしてはネプギアとゆっくり話したい思いもあったので彼女を連れてバルコニーに出た。

ふわっと夜の涼しい風がネプギアの髪を揺らす。

キラは手すりに肘を置いて星空を眺める。その横にネプギアもゆっくりと歩み寄ってそつと手すりに両手を添える。

暫しの沈黙。それを破ったのはキラだった。

「……どうだった？ 教会に戻ってきて」

「え？」

風に揺れる髪を押さえながらネプギアはキラの言葉を確認するように問うた。

星空をバックにする彼の横顔はあまりに悲しそうでネプギアは、なんとなく彼の意図するところが分かったように視線を落とした。

「あんまり、変わらないかな……」

「そうか……」

頬杖についてキラはそう返した。

「出迎えてくれる人もあんまりいなかったし……よく話す人だってお姉ちゃんやアイエフさんとかいーすんさんとかしかいなかったよ？」

「……いーすん？」

そんな人いたかなとキラは小首を捻るが、ネプギアの方は慌てたように修正した。

「えと、イストワールさんの……渾名、かな？ お姉ちゃんがそう呼んでたから私も知らないうちにそう呼ぶようになって」

「ふうん……」

それはそれとして、寧ろキラの方が気になるのは先程のネプギアの発言だった。

（出迎えてくれる人もあんまりいなかった……か）
それは寂しいな、と思う。キラも、その思いは十分に理解できた。
孤独の辛さ、寂しさ――それら全て。

夜空に浮かぶ満月だけが、全てを照らしているように思えた。

「俺もだよ……」

「……そう、なんだ」

不意に発した答えにもネプギアは驚きつつ答えた。

満月の夜の密談はこうして終わりを告げていく――。

＊

同時刻――。

壇上に用意されたテーブルで暢気に料理を口に運んでいたイストワールに声が掛かる。

何事だろうとそちらに視線を向けると、そこにはアイエフが神妙な面持ちでいた。

「何かありましたか？」

イストワールはアイエフの属する諜報部の管理も行っているために、精々その報告か何かだろうとたかを括っていたが、しかしアイエフの方はできるだけ穏便に、けれど切羽詰まった様子でイストワールに耳打ちする。

「こんぱが帰ってきてないんです」

「……あれから、ですか？」

あれからというのは昼にコンパが備品の購入に赴いたときからだ。アイエフはこくりと頷く。

「おかしいですね。今日はパーティをするとメールを送っておいたのですが……」

顎に手をやって考え込むような仕草を取るイストワール。アイエフの方も携帯を出してコンパの番号に掛けてみるがコール音が響くのみで出る気配はなかった。

「もしかして、何かに巻き込まれたとか……？」

「昨日の今日ですし、可能性もなくはないですね」

「ッ——！ 探してきますッ——！」

「あ、アイエフさん！」

イストワールの制止も横に流してアイエフは足音荒くパーティ会場を後にする。

「コンパさんは無事なのに……」

まるで確信を得ているかのように、イストワールはそう呟いたのだった。

夜の闇の中に駆ける影が一つ。

それは、あまりに頼りなくそして悲しげだった。

雨に打たれようともし、それを何とも思わずにただただ疾駆する。

アイエフはごくりと息を呑む。

「こんぱ……！」

ずり落ちるコートを引き上げて泣きそうに声を漏らす。

「アンタだけはいなくならないでよ……でないと私……わたし……！！」

アイエフは心の底からの願いを、ただただ——吐き出した。

☆ ☆ ☆

パーティを終えてキラは再びレッドカーペットが伸びる廊下を歩いていた。

今回はSPの女性ではなく、ネプギアと共にそこを進んでいる。

豪華な料理の数々でそれなりに満ちた腹をさすりながらキラは傍らを歩むネプギアに視線を向けてから口を開いた。

「パーティ、楽しかったな」

「そうだね。まあ、色々と疲れたこともあったけど」

「ハハッ、それは同感」

その後、バルコニーから戻った二人を待っていたのは会場の人々で、数十人単位の人間にもみくちゃにされて二人が料理にありつけたのはパーティ終了三十分前だった。

そんなわけだから腹満ちもそこにパーティは切り上げられていたのであった。

「そう言えば、結局最後までアイエフさんもコンパちゃんも来なかったな」

「……そうだね」

何故か不機嫌なオーラを放つネプギアにその横で妙な悪寒を感じるキラ。しかしながらそのことについてはネプギアとしても心配な様子で不安そうな表情で俯く。

「でも、確かに心配だよね。変なことに巻き込まれてないといいけど……」

『そんなことない』と、キラは否定しようとした。けどあの性格なら何らかのトラブルに巻き込まれてもおかしくないな……と思い直した。そう考えると次第に心配になってくるから不思議だ。

「む……そうだな。少し周辺を見てくるか？」

キラの問いにネプギアはこくりと頷く。

着替えて雨の刺す街中に二人は繰り出す。

教会の人に聞いてコンパが向かったという店に赴くが、そこには寄ってはいたという。

「てことは、帰り道で何かあったのかな？」

「まあ、普通に考えればそうだな」

帰り道でキラとネプギアはそんな会話を交わす。

二人の差す傘に雨粒が当たる音だけが響いているようにも思えた。

それはまるで、不幸の前兆のように不穏な空気だけが流れているようにも思えてキラはぶるっと震えた。

——いや、きつと冷え込んでいる所為だ。

と、思いたかった。不幸の予言なんて御免だとキラはぶるぶると首を横に振った。

——パシャ……と地面に広がった水が爆ぜる。

「もしかして寄り道してるのかも……」

「それはそれでこんな遅くなるのなら連絡の一つでも入れるだろう、普通は」

天然か、この娘……とキラが少しネプギアの性格を疑い始めた。

——パシャパシャと走るように、そして一方はゆつくりと一步一步を踏みしめるように。

「やっぱり事件とか妥当だろ？ コンパちゃん可愛いし——ぐえっ！」

キラの語尾が変なのはネプギアの掌底が脇腹にクリティカルヒットしたためである。

しばらく痛みに悶えて蹲るキラの横でネプギアは心配そうにキョロキョロと辺りを見回す。

「でも誘拐とかだったら心配だよね……。アイエフさんに連絡した方がいいのかなぁ……？」

どうにかダメージから回復したキラが力無く立ち上がったところでとん、と軽いモノではあったがキラの身体に衝撃が走る。

気になってそちらに視線を向けるとやや下方に見慣れた姿の少女が尻もちをついていた。

「ッ——！」

「アイエフさん？ ——って、ずぶ濡れじゃないですか!？」

キラは慌てて自身のコートを脱いで彼女に羽織らせる。

彼女の肩がカタカタと小刻みに震えている。もしかして風邪でもひいてしまったんだろうかとキラは心配そうに眉を寄せる。

「アイエフさん、大丈夫ですか？」

「――、」

しかしアイエフはそれに答えることはなくヨロヨロと立ち上がる。

「何でもないから、アンタ達はさっさと帰ってなさい……」

「……もしかしてアイエフさんもコンパさんを探しに来たんですか？」

ネプギアがそう問うた時にアイエフはカッと両目を見開いていた。

「……そう、よ」

消え入りそうな声でアイエフは答えた。それに納得したような表情になってネプギアが声を掛ける。

「それなら一緒に探しましょうよ。みんなで探した方が早いですよ」

「いい……これは、私だけの問題だから……」

水滴のついた顔を拭うことなく、アイエフは背を向けたまま答えた。それに対してネプギアは心底不思議そうな表情になる。当然、キラもだ。

「どうしてですか？ 一人よりはきつと効率もいいですよ？ だから……」

「ツ――！ 私が見つけないって言ってるの！ 邪魔しないで！！」
アイエフはキラの言葉を遮って恫喝した。

キラだけでなく、ネプギアの方もビクツとアイエフの剣幕に身を引く。アイエフの方は少し戸惑ったように唇をきつく結んでからふいとまた視線を目の前に戻した。

「……私が見つけてあげないといけないのよ。あの子も、『アイツ』も……！」

アイエフが両拳を固める。

後悔の波が押し寄せるように、だからこそ背後からでもその表情は容易く分かった。何かに耐えるようにギリと歯を食いしばって、瞳

の端に涙を溜めている。

キラが一瞬、動きを止める。それからアイエフに声を掛けようとしたときに携帯のコール音がその空間の中に木霊する。

「……わ、私の携帯じゃないみたい」

ネプギアはポケットから彼女の携帯を取り出して液晶画面を見つめてそう答えた。キラも自分の携帯を確認するが着信はない。

アイエフのモノだろう。彼女が懐からピンク色の携帯を取りだして耳に当てていた。

「……はい」

アイエフの表情は依然として浮かないモノだった。しかし、次の瞬間にアイエフの表情は驚愕に満ちたモノに変わっていた。

「こんぱ……？」

＊

「こんぱ！」

アイエフはいの一番に彼女の姿を見つけて飛びついていた。

身長差のせいか姉妹、悪くても母子に見えてしまう感じではあったがそこは口出しするところではないし、どうでもいい事柄なのでキラは黙した。

それはそれとして、彼女はそんな表情を見せるのかとキラは少し呆然としていた。

「心配、掛けてーッ！」

「ご、ごめんなさいです……」

どうやらコンパはこの公園の休憩場のベンチで眠ってしまっていたらしい。幸い屋根のある大きめの場所だったので彼女の身体に雨は当たっていなかった。

コンパの胸の中で小さく嗚咽を漏らすアイエフの姿を、見てはいけない気がしてキラは視線を外しつつ、傍らのネプギアに小さく問い掛けた。

『アイエフさんってあんなキャラだったっけ……?』

『わ、私も初めて見たけど……』

ネプギアの方もだいぶ衝撃的だった様子で表情は崩さないモノの声は震えていた。

それはそうとして兎も角は一安心、と言う感じでキラはホッと胸をなで下ろす。実際のところ、キラは表面上では落ち着きつつも内心では結構に焦っていた。だからこそ、こうして彼女が無事でいたことに対する安堵が彼の胸を満たしていた。

「それはそうとコンパちゃんはいったいどうしてこんな場所に寝たの? ここ、通り道じゃないよね?」

ひとしきりアイエフが落ち着いたところでキラは抱いていた疑問を口にした。

言われてみれば、とネプギアが声を漏らす。ここは中心部から少し離れた人気のない公園。タワーに向かうにはあまりにコースを外れ過ぎていた。

記憶を探るようにコンパはうゝむ、と唸る。

「なんで、ですかね……? あんまり覚えがないんです……」

ぐりぐりとこめかみを押さえながら彼女にしては珍しい難しい顔でそう言っていた。

その言葉にキラは眉根を寄せる。簡単な記憶喪失だろうかとキラが奸計を巡らせる。

「気になるな……。一旦教会の方に戻って詳しい話w「ぶえくし!」……アイエフさん?」

おおそ女性にしては随分と豪快な囃をかましてずびーとアイエフが鼻をすすった。ネプギアは微苦笑を浮かべ、冷や汗を垂らす。

「流石に濡れたままっていうのはダメですよ。戻って着替えましょうか」

アイエフはその言葉にはずびーと鼻をすすって答えるのみだった。

☆ ☆ ☆

プラネタワー一室の前。

そつと壁に背を持たれてキラは真つ白な天井を仰いだ。所在なさにぶら下げていた両手を頭の背後に回してふうと溜息を吐く。

一室とはアイエフの自室であり、現在キラの周りにいる女性達が着替えを済ませているために男性であるキラのみがこうして閉め出された次第だった。

ごく最近まで一人でいたというのにたった数日でもう一人が怖くなってしまうなとキラは自嘲気味の笑みを零し、そつと目を伏せる。今まで視覚に使っていた神経がその他の感覚を更に研ぎ澄まさせた。そこは当然ながら若い少女であるからして黄色い声がキラの耳を突くのだが――。

「あ、コンパさんの服可愛いですね！」

「そ、そうですかあ？」

「それ、この間雑誌に載ってたヤツよね。やっぱりコンパは流行『には』鋭いわね」

アイエフがやたらと『には』を強調していた。

「流行『には』って何ですかあ……？」

それだけのことなのにコンパは軽く涙声だった。

「ごめんごめん。……って、ネプギア？ 何見てるのよ」

ネプギアの熱い視線がギーッと何かに向かって伸びていた。それを見てアイエフとコンパの二人は首を傾げる。次の瞬間にネプギアはがばつと背後からコンパの豊満な膨らみを鷲掴んでいた。

「きゃ……！？ ぎ、ギアちゃん？」

「凄い……何を食べたらこんなになるんでしょうか……」

敗北感すら感じないようで感嘆の声を上げるネプギア。

それに対して『何を今更……』というようにアイエフが吐息するが、

やはり彼女も寺取りの少女と言うべきか気になるところではあるらしく。

「ま、確かにコンパは凄いわね。やっぱり看護師ってところも関係あるのかしら」

「もお、あいちゃんまで……」

ネプギアの魔の手から抜け出したコンパが恥ずかしそうに赤面して胸元を押さえた。しかしながら彼女の腕に収まりきるはずもなく、たゆんと揺れるそれを見てネプギアとアイエフの二人の額にビキリと青筋が走る。

「傲慢か！」

「コンパさんは私達の気持ちなんて分からないんですね！」

ビシ、とコンパを鋭く指して二人はそう言った。

「ふええ！？ 二人ともどうしちゃったんですかあ……？」

しかしコンパの言葉など通るはずもなく二人は暴走を続ける。

それを何とも言えない気持ちでキラは聞き流していた。

どうでもいいが、せめて扉の向こうに男がいるという認識だけは最低限してほしいなあ……という彼の儚い願いなど悩める少女達には届くはずもなくぎゃあぎゃあと騒ぎ立てていた。

なんとなく居たたまれない気持ちになり、そっとキラはその場を離れる。

やはり勤務時間外だからだろうか。ふと周りを見回しても職員はおらず、ひっそりとした雰囲気だけが蔓延っていた。

そんなゆったりとした時間を流していたキラの背後から声が掛かった。

「キラさん？」

ビクとキラの身体が一瞬だけ浮く。動悸を押さえながらキラはゆっくりと振り向くとそこにはイストワールの姿があった。

「脅かさないでくださいよ……」

「す、すいません。一応、気をつけてはいたんですが」

イストワールが申し訳なさそうに頭を垂れる。なんとなく罪悪感を覚えて頭を上げるように言った。

「それより、帰っていたんですね」

「はあ……まあコンパちゃんも見つかりましたし」

チラと遠くに見える一室に視線を送る。それを追ってイストワールの方も視線を送ってから再びキラに向き直る。

と、そこでキラは思い出したように声を上げた。

「あの、イストワール様。聞きたいことがあるのですが……よろしいですか？」

「ええ、どうぞ」

そう言えばすっかり当初の目的を忘れていたとキラは思い直す。ここに来た目的はゆったりとパーティを楽しむためではない。

幸い、彼女は教祖だ。女神ほどではないにせよ、きっとその道にも精通しているだろう。

キラは思い切って口を開く。

「実は、シェアの効率のよい上昇の仕方をご教授願えないかと思って今日は伺ったのですが……ご存じでしょうか？」

「効率のよいシェアの上昇の仕方……ですか？」

イストワールは顎に手をやって考え込む。それからスツと視線をキラに送ってからやけに重々しく口を開く。

「それは……女神救出のため、でしょうか？」

「……そう、ですが？」

何かいけないのだろうか、と思うほどにイストワールの表情は険しいモノだった。キラは不安を抱きながらゆっくりと口を開く。

「あの……それはいけないこと、でしょうか？」

「……いえ、そうではないですが」

イストワールは「ふむ……」と声を漏らしてからスツとキラを見据える。

「そのことについては、また明日にお話しましょう。今日はもう遅いですし、明日は時間の方はよろしいでしょうか？」

「え？ ……まあ、俺の方は問題はありませんが」
キラの返答を聞き、イストワールは明日の日時などを伝えると同時に三人が着替えを終えて部屋から退室していた。

☆ ☆ ☆

「ッ」

がくん、とマジック・ザ・ハードの身体が揺らいだ。

それを横目に見ていたブレイブ・ザ・ハードが不思議そうな声音で尋ねる。

「どうした？ らしくないが」

「……なに、少し考え事をしていてな」

額部を押さえながらマジックはそう答えた。しかしそうであったとしても彼女がそこまで気を取られる事柄があるのかとブレイブは疑問に思ったわけではあるのだが。

「気になること、か。お前がそう言うということは結構なことなのか」

「いや……現時点では驚異には成り得まい。しかし、放っておけばいずれ我々の動きを妨害する種にならない、とも言えん」

「ほう」

しかしながらブレイブの方はさして気にする風もなく、寧ろ感心したような声を上げる。

「お前がそこまで言うとは……、ジャッジのヤツが喜びそうだな」

「そうも言ってられん相手だ」

「む……？」

彼女の常に険しい表情がまた一段と険しくなつたとブレイブは不思議そうな声で返す。

「ヤツが動くとき、決まって犯罪神様の力が弱まるのだ。まるでそ

の者に力を奪われるように、な……」

「それは……どういうことだ？」

ブレイブの方も、流石に自分の対象となる人物に多大なる影響を与える者のことは気になるらしく、姿勢を変えてまた問い掛ける。

「犯罪神様に類似する者、あるいは犯罪神様『そのもの』たる存在か……」

「仮に後者が真実だとして、何故そんなことをする必要がある？」

「思想など、存在の数だけある。その数は無限だ……。だが、犯罪神様と同となる存在ならば、純粹に力を欲しているだけ、とも考えられるが……」

しかし、それは早計だ。何故ならその何とも知れぬ存在の活動はそれだけに留まっていけないからだ。

「犯罪神様の復活を食い止めようとしている……か？」

「なるほど……それはつまり我々に仇為す存在、ということか」

「そういうことになる」

マジックはこくりと頷く。

「正体は分かんが、実に惜しいな。あの實力ならば、犯罪神様の力と成り得るといいうのにな」

「……だがもう仕方ないことだろう」

「そうだな……ヤツの始末は任せる」

「おいおい……正体も分かっている者をどう探し出せと言うのだ？」

ブレイブの方は参ったように声を上げるが、マジックの方は鼻を鳴らして答える。

「簡単な話だ。……犯罪神様に刃向かう者は殺してしまえば、全て事は済む」

「む……だがな」

何故かブレイブは渋々と言った風でマジックの言葉を受ける。

「我々の存在意義を忘れたか。いつまでも駄々をこねているヒマはないのだぞ」

「……分かった」

ブレイブはその巨体を翻して大地の果てに消えていく。
それを見送ったマジックはボソリと呟く。

「さて、そろそろ計画の第2段階に移るとするか……」

マジックはふわりとその紅黒い髪を靡かせて颯爽とその場を立ち去っていった――。

EP. 11 「PASSING EACH OTHER」(前書き)

12000PV&amp,2000ユニークありがとうございます！

感謝絵うp中！

http://623.mitemin.net/i31673/

EP. 11 [PASSING EACH OTHER]

「ん、んう……」

妙な寝苦しさか、それとも他の何かか。ネプギアはゆっくりと閉じられていた瞼を開く。むくりと上体を起こして傍らに避けていた十字型の髪留めをまさぐって元の位置にセットする。グイと伸びをすると段々と自分の脳が覚醒していくことを感じながら、朝日の差し込むカーテンの方に視線を向ける。淡い色のカーテンから燦々と振り込む日光を見て今日は昨日と違い、爽やかな晴天であるということが分かった。

たった三日だが、すっかり見慣れてしまった部屋を一瞥してから両足を床に降ろす。

淡く日光を纏う彼女の桃色の頭髮と白く透き通った肌が、彼女の小柄な身体を絶妙にマッチしていて、見る者全てを魅了するように軽く靡く。

未だぼやける瞳を擦ってクリアにしていく。そして部屋の時計の方に視線を移せばまだ時計は7の位置を示していた。早すぎたかと思うが、同室の少年はいつもこの時間帯には起床しているという。まあ早く起きたところで損なことはないのでまあいいかとネプギアは自分の着替えに手を伸ばす。

「あれ……?」

そういえば、とネプギアは思う。スカーフを結び直してからふと部屋の中央部に配置されているソファに目をやった。

そこにはまだすうすうと寝息を立てているキラの姿があったからだ。彼にしては珍しい、とは思うのだがしかし昨日は散々走り回ったこともある。やはり疲れているんだろうかと疑問に思いながらネプギアはひよこひよここと彼に歩み寄る。

この年の少年にしてはだいぶ幼さを残したような無邪気とも思える寝顔がネプギアの心臓をドキリと跳ね上げた。

彼の顔の位置に合わせるようにネプギアはストンと腰を下ろした。ごろん、と狭いソファの上で寝返りを打つ彼の寝顔は比較的安らかなモノである。そういえば、最近は自分のことで随分と骨を折ってくれていたなとネプギアは申し訳ない気持ちになると同時に、この少年に対する深い感謝の情が浮かび上がる。

それなら、せめてもう少しだけ眠らせてあげようとネプギアはふつと微笑を浮かべた。

「ん……」

彼の手が、ネプギアの長い髪を捕らえた。

もしかして起きているのではないかと、ネプギアは少しだけ不安な気持ちになる。

でも、それでもいいと。せめてこの瞬間だけでも彼のことをたった独り占めに出来るのなら、と。

せめて彼が気付かない程度に、ネプギアは顔を接近させる。まさしく、息がかかるほどの距離とも言えるだろう。端正な顔立ちがネプギアの瞳に映し出される。これが本当に少年だというのだろうか、と疑問を抱くほどに美しい。

動悸が激しくなる、とネプギアは思う。心臓の音がうるさい、とも。彼の姿を直視できない、しかし今、彼の姿を捉えていなければもう何もかもを後悔してしまう、とも感じられる。

そこで今まで緩く紡がれていた彼の唇が僅かに開く。

「あ……」

「ん？」

寝言だろうか。

ネプギアは首を傾げて、次の言葉を待つ。

「ネプ——」

そこまで、そこまで言った。

キラはもぞもぞと頭部を動かしてその身体を丸めて、また安らかな寝息を立てた。

「キラ……」

名前を、呼ぶ。愛おしげに。

そっと伸びかけの長い髪の上から彼の額をそっとなぞる。心なしか彼の表情が揺らいだような気がしないでもなかったがネプギアはそれでも彼をなで続けた。

彼女の唇は、そっと――。

＊

『この盗人め！』

『待て！』

『……クソ、忌々しい小僧め！』

知らない大人達が叫んでいる。

それが自分に向けられている言葉だと言うことは、幼かったキラにも十分に理解できていた。

物心の付く頃には、既にそんなことしか言われなくなっていた。

けれど、そんなことはどうでもよかった。

生きるから、しないといけないんだと。しなければ生きられないんだ、と。

いや、そんな思いもなかったのかもしれない。

彼はずっと小さい頃からそうだった。だから自分が悪い、なんて思いも抱かなかったのかもしれない。

ただ、自分のために――自分のためだけにやったことなのだ。他人というシステムが彼の中には存在していなかったのだ。

彼らはただ、自分が生きるための標的でしかない。それ以外の感情なんて持ち合わせるはずもなかった。

世界は自分だけのモノで、自分しか世界がなかった。それ以外はすべて踏み台なのだ。自分が生きるための――。

死にかけた。

死ぬと思った。

世界の中で、自分しか生きることのないと思っていた世界で死ぬと。自分が踏み台と罵り、何の感情も抱かなかった存在に対して、怖い、と。殺される、と思った。

死にたくなかった。

世界に希望なんてなかった。自分が存在する価値なんてないと思っていた。

だけど、死にたくなかった。死ぬのは怖いから。苦しいから。

『ぶっ殺してやる！』

『おう、やっちまえ！！』

『そんなヤツが死んだところで喜ぶヤツがいても悲しむヤツがいるか！！』

いやだ。

死にたくない。

終わりたいくない。

怖い。怖い。

『ころさないで……』

掠れた声で答えた。

だけど、聞いて貰えなかった。周りの大人達は誰一人、自分の言葉なんて聞いてくれなかった。

死にたくないよ。

誰か助けてよ。

少年が初めて他人に助けを求めたかも知れなかった。

誰でもいい、この苦しみを知らない世界から救ってくれるのなら誰でもよかった。

いやだ、助けないで。

誰も、俺を助けないで。

俺は世界にいちやいけないんだ。だから、助けないで。

助けて。

誰か俺を助けて。

こんな苦しい世界から助けて。もうこんな世界いやだ。

矛盾が、叫ぶ。

助けて欲しいのか、それともこのまま終わりたいのか分からない。
彼自身も自分の心が分からない。

死にたくないはずなのに、終わりを望む自分がいることに少年は恐怖した。

今、目の前に迫っている死の恐怖よりも、だ。

だから、手を伸ばした。

誰でもいい。だから――

＊

キラはゆっくりと瞼を開いた。

目の前にあったのは少女の顔だった。美しい彼女の顔がほとんど零距离と言ってもいいほどに、いやまさに零距离で接近していた。

一瞬、何が起こっているのかが理解できなかった。

しかし次の瞬間、全てを理解したときにキラの全身に電流が走ったような刺激が鳴り響いた。

「ッ――」

声が出せない。

それは、ただ単に絶句しているワケじゃない。物理的に声が出せない状態になっていたからだ。

「むっ……」

息を吸うことさえも忘れるほどに、けれど少女の方はそんなキラのことは気付いていない様子で必死に『彼の唇を求めている』。

「ん……」

少女は瞳を閉じたまま、乱暴に彼に食らいついている。それに対して、もう何もかも分からない、『分かりたくない』というように少年は動けないでいた。

いや、動いてしまえばこの時間何もかもが雲散霧消してしまうように思えたからだった。彼もまた、必死に彼女を求めた結果——とも言えるだろう。

キラは全身の力が抜かれていってしまうように感じられた。けれど、自分の内の中に沸々と暖かな力のようなモノが注ぎ込まれているようにも感じる。そんなごく曖昧な感情の中で、まだ幸せの中に浸っているように、求めている。

「ん、ちゅ……っ」

「!？」

『踏み入られる』。

嫌な感じ。まるで胸を抉られるような鋭い衝撃にキラはビクリと大きく身体が震えた。

流石に、ネプギアの方もそれに気付いたのかスッと迅速に身体を強張らせてキラから距離をとった。

「——、き……ら？」

「ッ」

キラは熱く火照った顔を覆うように腕を添えている。申し訳なささと恥ずかしさが入り交じって何も思考できなくなる。泣きそうになって、自分が何を言いたいのかも分からないほどに彼の感情はあまりに高ぶっていた。

「ねぷ、ぎあ……なんで……」

答えを、聞きたくないと。

きつと、その答えを聞いてしまえばこの関係は崩れてしまうのでは

ないかと分かってしまった。しかし、それでもキラはそれを聞かすにはいられなかった。

真実を知りたい、と。

ネプギアは、先程から表情を崩さない。いや、崩したままでいた。だからそれが変わることはない。

彼女の小さな唇が、震えながら開かれる。

「それは——ッ」

まるで躊躇するように、ネプギアはふっと目を閉じる。

瞳に涙を溜めて、狼狽するようにネプギアはチラと不安げな視線をキラに向けた。

「だって、私——」

☆ ☆ ☆

プラネタワールの中に応接室の一室。

そこには神妙な面持ちのキラ、ネプギア、アイエフ、コンパ、イストワールの5人の姿があった。

役職柄、なかなか時間の取れなかったイストワールが扉を開けて入室してきた直後だった。

「申し訳ありません。遅れてしまいました」

「いえ、やはりお忙しいんですね」

それに対してアイエフとコンパは端の方で苦笑しきっていたがやはり端なのでキラの視界にそれは映らなかった。

イストワールはキラとネプギアの腰掛けているソファの向かいに腰掛けてこほんと咳払いを一つしてから口火を切った。

「まず……シエアの向上の話、でしたね？」

「はい」

「……女神に対するシエアというのは基本的にモンスターを討伐す

るクエストをこなしていれば自然と上昇するモノです。依頼者が困っていればそれ相応に上昇するしくみとなっているんです」

キラは首肯する。

つまりやり方は今までと大して変わらないということだが、しかしイストワールの言った『基本的』という言葉が妙に引っかかった。「イストワール様、『基本的』というのはいったいどういうことでしょうか？」

「クエストをしなくても上げる方法がある、ってことじゃないのかな」

ネプギアの言葉にイストワールは頷く。

「はい。シェアとは女神様に対する信仰力、ですから人々が女神様を信仰すればシェアは上昇します……けれど、今の情勢ではそれは難しいでしょう」

イストワールはそつと目を伏せる。

彼女の意図は言わずとも理解できた。最早、世界の大半の人間が犯罪組織を信仰するような世界。今更、女神を信仰させることなど無理難題である。

「ですが、まだ手はあります」

「……？」

その言葉にネプギアの様子が変わったような気がした。それを横目にキラはふっと口を開く。

「どういうことでしょうか……？」

「女神様を助けるために、『あの方々』に力を貸してもらおうのです」

「あの、方々……？」

ネプギアの問いにイストワールは首肯する。

「はい……。世界のバランスを保つために存在する『ゲームキャラ』と呼ばれる者達です」

「『ゲームキャラ』……？」

「彼女たちの居場所は各都市の教祖達が把握しています。プラネテューヌのゲームキャラは……バーチャフォレストの奥地に存在する

遺跡です」

バーチャフォレストの奥地。

キラは記憶をまさぐる。確か境界の規定でそこには一般人は踏み入ることが出来ないと言われていたがまさかそんな理由があったなんてとキラは思う。

「普段、ゲームキャラ達は表に現れることはなく、謂わば休眠状態となっています」

「それって……大丈夫なんですか？」

ネプギアが冷や汗を垂らしながらイストワールに問い掛ける。

休眠状態と言うことは訪ねても起きていない可能性の方が高いので無駄足じゃないのかなと思う。

「ですが、ゲームキャラ達は女神達の身に異変が起こった場合に女神の変わりにその地を守護する役割があるのです」

「……つまり、女神様がない場合の応急処置ってことですか？」

「言い方は悪いですが、つまりはそういうことです」

イストワールは頷く。

しかし、結局のところでキラは素朴な疑問を抱く。

「けど、そのゲームキャラ達と会ってどうするんですか？ そんなことより一刻も早くシェアを上昇させる方が先決でしょう？」

「ゲームキャラ達にはシェアの向上を促す力が与えられています。

それに、彼女たちの力があれば少なからず女神達を救う手だてにも成り得ます。会ってみる価値は十分にあると思いますよ？」

『なるほど……』とアイエフが感心して手を顎にやってうんうんと二、三度頷く。

「とにかく、ゲームキャラに会えばいいのね？ それならすぐにも出発しましょう。日が落ちてからじゃ危険だわ」

アイエフはすぐにでも駆け出していってしまいそうに身体を揺らしているが、イストワールの方は首を横に振っている。

「いいえ。今はまだゲームキャラが目覚めている可能性が低いです。一度、私の方で呼びかけてみますから反応があり次第、皆さんが出

発してください」

アイエフは渋々といった感じで頷いた。しかしながらキラとしては少しでも時間的余裕が出来たのでほんと胸をなで下ろす。

色々と落ち着きたいこともあるのでキラはまずとネプギアに視線を移す。

「……」

「……！」

バチリと目が合う。しかし、ネプギアはカアと赤面して顔を背ける。けれど、キラはそれを無視して少し荒くネプギアの手首を掴み、部屋扉の扉に手を掛ける。

「あ、どこに行くですか？」

「少し話があるので席を外します」

キラはそれだけ言って早々に部屋を出た。アイエフとコンパは互いに見合って首を捻ったのだが。

＊

周りには結構な数の職員の姿が見える。

しかし、誰もキラとネプギアの姿に目を留めることなく目まぐるしく動き回っていた。

少し人目のない場所でネプギアの手を離してキラは彼女と向かい合う形となる。

「……あのさ、ネプギア」

「……なに？」

ネプギアとて、キラの言いたいことは理解していたつもりであった。けれど聞かずにはいらなかったのだろう。

もじもじと両手の人差し指を突いて離れてを繰り返してそっと目線を外す。

「……どうして、あんなことを？」

「……」

それは、今朝のキスのことだろう。

ネプギアは一度、きゅっと口を噤んでからそっと開いた。

「後悔、したくないって思ったから……」

「後悔……?」

「そう」

ネプギアはゆっくりと首肯する。

彼女の暗い表情がより一層に映えてしまう。

「後悔したって、きつといい事なんてないと思うから……もう、自分の心に嘘はつきたくないって思ったんだ」

キラはそこで何かを言おうとしたがぐっと堪えた。彼の瞳に映る彼女の姿があまりに悲しそうで何かを発することを阻害したからだ。

「ネプギア……」

「迷惑、だよね……ごめんね」

ネプギアはそっとその場を立ち去る。

彼女のあまりに悲し過ぎる背中にキラはもう何を発することも憚られた。

今はただ、彼の胸の周りを覆っているもやもやとした感情を握りしめることしか、できなかった――。

☆ ☆ ☆

バーチャフォレスト最深部。

話では汚染区域の指定がされており、一般人の侵入は許される場所ではない。

――『汚染』。

モンスターに起こる現象であり、現在で有力なのは犯罪神への信仰の影響とされている。

犯罪神への信仰がモンスターに影響し、モンスターのステータスを

跳ね上げ、凶暴な姿にしてしまう。それがいわゆる『汚染』とされている。故の汚染区域だ。

ふと辺りを見てみれば、確かに姿形はどこにでもいるモンスターの姿だ。しかし、それらが纏う色は漆黒に近い禍々しいモノであり、普段なら集団を組んで行動しているモンスター達もどういうわけか自らの仲間たちを襲い、共食いの光景すらも見えた。

「……ヒドイですね」

キラは口元を押さえてそう言った。モンスターの死臭が鼻孔を突く。アイエフも眉根を寄せてその光景を遠目から眺めていた。

「今回ばかりはモンスターさんに同情しちゃうです。これも犯罪神の影響なんですね……」

コンパは悲しそうにそう呟いた。

キラとしても同感で、それに答えるように頷く。

「初めてみました……『汚染』ってこんなに酷いんですね」

「いつまでも突っ立ってる時間はないわよ。早くゲームキャラに会わないとどうなるか分からないわ」

アイエフの先導で残る3人も彼女の後を追う。

そんな彼女たちが去って数分後。

その場所には一つの影があった。

「へへッ、マジック様直々の命令だ。絶対に失敗できネエぜ……」
少女は不敵に笑みを零し、堪えるような笑いを辺りに振りまいていた……。

＊

「いい？ ここのモンスターとは絶対に戦っちゃダメよ。汚染したモンスターは元のモンスターとは段違いだからね」
アイエフは背後を進む三人にそう注意した。

しかし、そんなことを言われなくても三人は十分に理解していた。周りを見るだけです。ここのモンスター達の恐ろしさ、彼らの放つ殺気とも言うのだろうか。そんなものがビリビリと肌を刺すように感じられたからだ。

しかし、どうも見た限り汚染したモンスターというのは凶暴性が上昇し、理性を失った存在のようにも思える。それが、キラがモンスター達を見て素直に感じた意見だった。

「……けど、それはそれとして凄い場所ですよ、ここ」

キラは周囲を見回してそう漏らした。

まるで空中庭園のようにあちらこちらに道が延びており、まさかプラネテューヌでもこんな技術はないだろうと、いったいこの遺跡はどんな人々がどんな技術を駆使して建造したのかと疑問を抱く。

「そうね……。今までたくさんの方が研究していたようですが結局は分からず終いになって……」

「今はモンスターの巣窟、ですね」

コンパの言葉にアイエフはこくりと頷いた。

「最下層まで落ちたら一溜まりもないですね、きつと……」

ネプギアは遙か下方を見下ろしてそう声を発した。

アイエフはそんな彼女に呆れたような視線を送る。

「そうよ、だからあんまり乗り出さない方がいいわ」

と、手で指示を出す。ネプギアはぶるっと肩を震わせてから覗くのをやめた。

――が、そこでネプギアは一つ階下にいた危険種モンスター・ウルフ（汚染）とバッチリと目が合ってしまう。

「あ」

「へ？」

ウルフはその巨体を風のように動かしてトントンとあちこちを乗り継いで4人の前に降り立った。

「「「……」」」

三人がネプギアに『やってくれたな……』みたいな視線を送る。

「しっ、仕方ないもん！」

両手をブンブンと振って抗議するネプギアを横目に三人はいち早く武器を構える。

「ともかく、説教は後回し！　まずはコイツをやるわよ！」

アイエフは言うが早いのか、ウルフに向かって走り右手のカタールを横薙ぎしてから回しハイキックを叩き込む。

危険種のしかも汚染状態となると手が付けられない。せめて逃げる時間が稼げればと思い、キラも刀を構えて振りかぶる。

『ギャオオオオオオオオッ！！！！』

ウルフの右前足から鋭い薙ぎが繰り出される。

間一髪でそれを避けてキラは更に一閃、左前足に斬撃を叩き込む。

しかし、次の瞬間にウルフは身体を回転させて左後ろ足で跳躍したアイエフを狙う。

「ッー！」

「アイエフさんッ！！！」

キラが庇うように跳んでアイエフの前に立ちはだかる。

しかし、それで勢いが止まるはずもなく二人の身体は遥か遠く、足場を抜けてそのまま落下していく。

「ッ、キラ、アイエフさん！！！！」

ネプギアは咄嗟に手を伸ばす。それに呼応するようにキラも右手を伸ばすが届くことなく二人は遥か下方に姿を消した。

「ッ、キラあ——————ッ！！！！！」

ネプギアは叫んだ。

しかし、答えは返ってくることなく、その言葉は宙に消えていく。ウルフは、与えた傷が功を為したのかぐらりと身体を揺らしてズシンと地面に伏した。

けれど、ネプギアにとってそんなことはさしたる問題ではない。

ネプギアは言葉を失ったまま、ただただ下方を見つめることしかで

きなかつた。

静寂だけが、辺りを支配していた。

EP. 12 「AWAKING」

「きら……」

ネプギアはへなへなと地面に腰を落とした。

手が、肩が、身体全体が、震えている。立ち上がることが出来ない、と。

恐ろしくて、下を覗くことが出来ない。

何もかもが壊れてしまいそうだった。

「きらあ……」

「ギアちゃん……」

コンパの方も、涙声でネプギアの肩に手を添えていた。

直後、RRRと携帯のコール音が鳴り響く。その音にビクと顔を上げてコンパは彼女の衣服のポケットに手を入れた。

「はい……」

涙声のまま、コンパは連絡の応じた。

しかし、その瞬間に彼女の表情は明るくなるのである。

「あいちゃんっ……!!」

「ふえ……?」

ネプギアは涙に濡れた顔を上げてコンパの方を見た。

コンパは必死に携帯を耳に当てて彼女の声を聞いている。

「はい……はい……、分かったですう」

コンパは何やら指示を受けているように何度も頷いている。それからコンパはそつとネプギアの方に携帯を渡す。何も考えずに、ネプギアはバツと携帯を受け取る。

「もしもし?」

『……ネプギアか』

「キラ……! 大丈夫……?」

『おう、身体は問題なく動くぜ』

「よかった……」

ネプギアは安心しきったように声を漏らす。

『こっちは俺もアイエフさんも大丈夫だから、手分けしてゲームキヤラを探そう。見つけたらまた連絡だ、いいな?』

キラの言葉にネプギアはこくりと頷く。

『それから……』

と、ここでキラの声音が変わった。

今まであやすように優しい口調だったモノが、一変して妙に神妙なモノに変わっていた。

『戻ったら、またちゃんと話そうな……』

「……うん」

ネプギアは、電話越しにそう答えた。

＊

キラはふっと頭上を見上げる。

結構な高さから落下したらしく、ネプギア達の姿を望むことは出来ない。

携帯が通じたのが幸いだったとキラは吐息してから傍らに腰を下ろすアイエフに携帯を渡す。

アイエフはそれを受け取って懷にしまい込んでから呆れたような声を上げる。

「まったく、よくもあの状況であんな嘘が吐けたモノねえ……」

「ハハハ……」

キラは答えにくそうに後頭部をポリポリと掻く。それから近くの堀に手を突いて身体を起こす。しかし、次の瞬間にキラの右足にまるで針で刺されたような鋭い痛みが走る。

「痛ッ——!」

いつ負傷したかは分からない。落下したときか、或いはウルフにやられたときかもしれない。

ぐらりと身体が揺らぐ。地面に倒れ込もうとしたところでアイエフ

が肩を貸した。

「あ、ありがとうございます……」

「無理しない方がいいわよ。アンタが無理すれば、悲しむのはあの娘だしね……」

アイエフは遠くにいるはずの少女をまるで目の前にいるかのように答えた。

キラとしてもアイエフが言っている少女というのが誰かぐらいは分かっている。

しかし、そこでアイエフは半眼になってキラを見る。

「ところで気になっていたんだけど……『ちゃんと話す』って何を？」

アイエフの問いにキラはブツと吹き出す。

ゲホゲホと胸を拳で叩きながらキラはアイエフに視線を移す。

「……っーか、そこを気にします？」

「え？ ……まあ気になったから」

「……」

『この人、しっかりしてるけど存外天然なのかも』とキラは呆れたような視線をアイエフに注いでいたが当の本人はただ首を傾げて疑問符を浮かべていた。

そんな感じの視線を送っていたキラを見て特に話してくれるような様子もないように感じ取ったアイエフが「ま、いいわ」と言って一蹴した。が、まだ気になることもあったようでアイエフは口を開く。「それよりも、なんでアンタはわざわざこんなところまで来たの？」

特にあの娘に付き合うような義理もないと思うけど……」

彼女なりに心配しているのだろう。

あまりに彼女の目的は危険を伴っているからこそ、そんな問いを送ってきたのであろう。

そう言えば前にもそんなこと聞かれたなとキラが遠い目をして思った。

「俺、お節介なんですよ」

「……お節介で命まで懸けられるの？」

アイエフは半眼でキラを睨む。

キラはそれに対してハハッと笑いながら視線を前方に向けて答える。
「何ですかね……困っている人を放っておいてもいいことない、って思ったからですよ」

「嘘言わないで」

アイエフの鋭い言葉にキラは動きを止める。それから両目をぱちくりと瞬かせてからアイエフを見た。

「別に嘘というわけでは……」

「分かるのよ。アンタ、結局は別のところを見る。『直接的』にあの娘を見てないわ」

「……」

キラはやりにくそうに後頭部を搔いてから嘆息した。

キラとアイエフは止めた足を再び進めてから重圧の掛かる雰囲気の中で肩を並べて歩いていた。

「……最初はそうでしたけどね」

不意にキラが口を開いた。

アイエフは顔を向けることなく、視線だけを彼に向けてから次の言葉を待った。

「今は、ちゃんとアイツを見ようって思ってますよ。それだけは、本当です」

「……そう。なら、いいけど」

アイエフは再び視線を前に移してからそう言った。

たぶん、気をつかってくれているのだろうなと申し訳なさとし難さが入り交じって妙な感情を生み出してしまう。

その後は、黙々と歩みを進めるのみだった。

しかし、そこでキラはピンと引っかかることを思い出した。けれど今更聞くことじゃないなと思うが、今聞かずに次にどのタイミングで尋ねられるかも分からないのでキラは意を決して口を開く。

「アイエフさん、一つ聞いてもいいですか？」

「答えられることならね」

「……」

アイエフが意地悪めいた笑みを浮かべてキラを見た。

『ああ……じゃあ答えないんだな』と思ったキラは苦笑で返してシヨボーンと頭を垂れた。

その様子を見てくくと堪え笑いをしてからアイエフは目元に溜まった笑い涙を拭き取りながら口を開く。

「冗談よ。何でも聞きなさい」

ホントかな……とさっきの冗談もあり、若干アイエフという人間を信じられなくなりつつあるキラが半眼になってアイエフを見る。が、あまりダラダラしていてもタイミングを逃しそうなのでキラは口火を切った。

「アイエフさんとコンパちゃんって幼馴染みなんですよね？」

「ん……そうね。もうだいぶ小さい頃からの付き合いよ？」

「へえ……」

アイエフはキラの問いに難なく受け答える。それを見てキラは目を細める。

普通の人間ならば気付かないほどの些細な『変化』。鍛え上げられたキラの眼力にそれが映らないはずがなかったのだ。

キラは口元をつり上げてにやりと笑う。

「ほおー、幼馴染み……」

「何よ？」

半ばからかうような口調のキラを訝しむようにアイエフが視線を向ける。

キラはにやにやと不敵に笑いながら言った。『真実』を。

「嘘、ですね？」

「ハア？」

さっきとは立場が逆転し、今度はアイエフが両目をぱくりとさせる側に回った。小さく笑いを堪えるようにキラはにやけた面でアイエフに言葉を投げる。

「アイエフさんは他人の感情には鋭いみたいですけど、自分の感情には随分と疎いみたいですわね」

「……どういう意味よ」

気分を害したらしく、不機嫌そうな声でアイエフが答える。

しかし、それほどに悠長なことを言っている場合ではない。段々と彼女を纏うオーラというモノが灰色になりつつあった。

キラは未だにあふれ出る笑いをぐっと堪えてさっきとは打って変わった真剣な表情へと成り代わる。

「……嘘を言う顔に出るんですよ、貴女はね。普通の人間なら気付かないでしょうが、或いはそういう分野に長けている人ならば気付かれる可能性も高いですよ？」

「ぐ……」

キラの指摘にアイエフは狼狽える。

しかし、すぐにキラはニコツと人のよい笑顔を浮かべて、声音もやや高めにして言葉を紡ぐ。

「まあそうそう気付かれることもないでしょうし、どうぞその嘘で頑張ってください」

「……いちいち癪に障る言い方ね」

「すいません。さっきの仕返しがしたくて」

まあ、キラの方も自分のキャラではないと鼻で笑う。

いや、『昔の自分』なら或いは……と淡い可能性を模索するがたればの話などは以ての外だとキラは一蹴した。

キラの腕を肩に掛けたまま、アイエフは嘆息してからそつと唇を開く。

「ええ、嘘よ。私とこんぱは幼馴染みなんかじゃない」

「やっぱりですか」

「聞かないの？ どうしてあんな嘘をついているのかって」

アイエフが微妙に意外そうな表情をしてキラを見る。あんなことを言っておきながらそのことについて聞かないのはおかしいかとキラは思う。しかし、やはりそこには何らかの理由があるんだろうなと

思ってた黙っていたのであるが。

「聞かれましたか？」

「まー、あんなこと言っておいて聞かないっていうのはおかしいと思っただけだけど」

「じゃあ聞きたいです」

アイエフのキラを掴む腕にギリギリと力が込められる。それに対して表情を歪めるキラであったがここは耐えた。

珍しく相手のペースに持って行かれて疲れたのか、アイエフが嘆息してから口を開く。

「私はね、元々ギルドの人間なのよ」

「へえ……」

キラが意外そうに小さく声を漏らす。

しかしながら疑問も生まれたわけであって、何故にギルドに所属していたからと言ってわざわざコンパと幼馴染みという嘘をつかなければならないのかと思った。

「別にギルド所属でもいいじゃないですか」

「アンタらが思ってるギルドじゃなくて、それ以前のギルドよ」

「……ていうと、要は異端者達の集まりのことですか？」

「そうねっ！」

アイエフの語尾が妙に力んでいるのはアイエフがキラを掴む腕にギリギリと力を込めたからだ。それに対してキラは何とか耐えた。

「なるほど……確かに言っちゃ悪いですがそれは体裁が悪いですね」

「そういうこと。個人情報なんかも裏で情報操作してすっかりプラネテューヌ育ちの一課報部員って事になっているけどね」

政府に勤める役人がそんなことでいいのかとキラは冷や汗を垂らす。やはりそこらへんも気になるところなのでキラは尋ねる。

「いいんですか？ 政府にばれたらとんでもないことになるんじゃない？」

「……」

「その偽造も政府の方がやってくれたんだけどね」

「は！？」 政府がアイエフさんを保護しているんですか？」

「ん……まあそういうことになるかしら？」

「ただ凄いなだろうこの人は……とキラのアイエフを見る目が少し変わった。」

「ま、色々とあんのよ。こっちにも事情がね」

「はあ……」

「イマイチ納得しがたいモノがあるのだが、これ以上聞いたところできつとこの人は答えないんだろうなと妙に達観しているキラはそれ以上の詮索を諦めた。」

それはそれとして、とキラは視線を前方に向けつつ口を開く。

「……にしても、そろそろゲームキャラが見えてきてもいいんじゃないですかね？ 結構な時間歩いていると思いますけど」

「簡単に見つかったら意味ないでしょ？ 女神の変わりに守護する存在なのに」

「ああ……」

「それもそうかとキラは納得する。しかしいくら何でも政府と深く関わるほどの存在である。しかし、せめてもの秘密の近道とか抜け道とかあっても良さそうなモノだが、とキラは思考するがアイエフの方も知らないようだし本当に存在しないらしい。」

だが、やはり散々歩き回った事もあるせいか妙に開けた場所に二人は出た。

そこには神々しさすら放つようなそんな台座がぼつねんと一つ、据えられてあるのみだった。いや、その台座の上に、一つの――ディスクだろうか？ 円盤状の金属のような物体がまるでレコードのようにセットされていた。

遠巻きにアイエフはそれを見据えてから口を開く。

「アレがゲームキャラ……プラネテューヌ領を守護する『パープルディスク』よ」

「……とりあえずネプギア達に連絡しましょうか」

「そうね。コンパの携帯に連絡を入れて……」

アイエフは懷からピンク色の携帯を取りだしてメールを打つ。

それが終わるとまた携帯をしまい込んでゆつくりと台座に歩み寄る。近付けば近づくほどに、圧倒されそうになるのをどうにか堪えながら台座の前に立つ。

「……アナタがゲームキャラね。悪いけど、私達に力を貸して貰えないかしら？」

アイエフがそう声を掛ける。

しかしながら、反応はない様子でアイエフの言葉は宙に消える。

訝しむように眉を寄せてキラは口を開く。

「まだ目覚めていないんでしょうかね？」

「そうみたいね。イストワール様はホントにもう……」

呆れた様子でアイエフは額に手をやる。

その様子からあまりに苦労人臭が流れ出ており、キラは同情の念を帯びた視線をアイエフに送る。

ともかく、ここまでキラを支え続けてアイエフの方にも疲労の色が見えているため、一度目の前の台座に背を預けてアイエフはぐいと背伸びする。どうでもいいが、結構神聖そうなモノなのにいいのだろうかとキラは不安になった。

が、別段触れてみればそれはなんて事ないただの台座であり、特別な感じはしない。

しかし、そこでキラの頭上よりやや後方、つまり台座の丁度上の辺りから声があった。

「……何やら騒がしいと思って起きてみれば、あなた方でしたか」まるで少女のような、それでいてどこか凜としたよく通る声がやけに丁寧な言葉遣いでキラとアイエフの両名に投げかけられていた。アイエフはぴしと背筋を立てて真剣な表情でそれに受け答える。

「プラネテューヌ政府より派遣されました、アイエフという者です。こちらはキラ、負傷した身のためこのような姿で申し訳ありません」アイエフがキラを指してそう言った。せめて形だけでもしっかりしておいた方がイイかとキラはゆつくりとその身体を台座から離そうと動かすが、パープルディスクの方はクスリと笑い声を漏らしてか

らまた音を奏でる。

「大丈夫ですよ……寧ろ、台座に触れてください」

「え……？」

一瞬、何を言っているのかとキラは眉根を寄せる。しかし背後からアイエフが小声で『言うとおりに』と言っている。不承不承といった感じでキラはそっと右手を台座に添えた。

次の瞬間にキラの身体は妙な浮遊感に包まれる。そして次に意識を取り戻したときにキラの身体にはどこにも異常が見当たらなかった。ゆっくりと身体を起こしてびよんぴよんと跳ねてみるが、さっきまで襲っていた足の激痛も全身打撲の鈍痛もなくなっていた。

これがゲームキャラの力なのだろうかとキラは訝しむように目の前のディスクを見る。

「……どうしました？」

その視線に気付いたようでパープルディスクはキョトンとしたような声音でキラに尋ねた。もし、彼女が自分の怪我を治してくれたのならば札を言っておかねばと思い、思い切ってキラは口を開く。

「君が……俺の怪我を治してくれたのか？」

「ええ、ですが所詮その程度の力ですよ」

「あのー、パープルディスク様？ そろそろこちらの話をしてもよろしいでしょうか？」

アイエフはどうも介入するポイントを探っていたらしく遠慮がちに声を掛ける。

「言わずとも分かっています。今回の守護女神の反応の消失^{ロスト}のことですね？」

「……話が早くて助かります」

アイエフは申し訳なさそうに一礼してからそう答えた。その光景にまたパープルディスクは小さな笑みを零す。

「そう畏まらなくてもいいですよ？ 元々私はそのように崇められる存在ではないですし……」

パープルディスクが言葉を紡ぐごとに段々とその声音が悲しみを帯

びているということにキラはすぐに気が付いた。

けれど、それはキラが言葉を紡ぐヒマもなく注がれる。

「いいえ、あくまでパープルディスク様は崇高な存在でおられます。本来なら私めが口をきいてよい存在ではないでしょう」

アイエフの言い分とて理解は出来る。彼女は控えとはいえ大陸を治める存在だ。だからこそ、人々から崇拜されるべき存在でもある。けれど、だからといって『どうしてこんな寂れた場所に、たった一人で存在する意味がある？』

ネプギアはどうだ？ 自分の思うように動き、世界を見てそして感動できる。なのにこの存在はあまりに悲しすぎる。

いや、それは彼女にも言えたことだということにキラは胸を打たれる。彼女は世界を見ることが出来る。なのに、彼女はそれを制限されている。当然のことではないか。彼女は国を治めるための大事な存在なのだ。だから――理屈は分かる。だけど、ただどうしてなにもすることができない？

沸々と理不尽な怒りがキラの中に立ち込める。

キラの表情が次第に険しいモノへと変わっていく。何かを発しようと、キラの唇が揺らぐ。

けれど、それは一つの声によって掻き消された。

「――取り込み中、悪いんだけどよお」

やけに嬉しそうで、それでいて下卑いた笑いを含んだ声。しかし、それはあまりに高くまるで少女のようで。

キラは、アイエフは自分たちの背後に視線を向ける。

そこには、ネズミをあしらったコートに鉄パイプという装備――数日前にキラとネプギアが会ったあの犯罪組織への勧誘を行った少女だった。

「アンタ……」

アイエフは怪訝な顔つきをして少女を睨む。

そういえば、彼女も数日前に彼女と武器を交えていたことを思い出す。あの時は月夜であり顔を覗くことは出来なかったが、この風

貌は間違いなく彼女そのものだ。

アイエフは出来るだけ、武器を交えないように警戒した、しかし論
すような口調で答える。

「アンタ、ここは汚染区域よ。危険だわ、帰りなさい」

「ヘッ！ 言ってるタコ！ 犯罪組織に刃向かうからだよ」

「……余地無し、ですね」

キラが呆れたように腰の刀に手を伸ばす。聞く気がないのなら力尽
くにでも、とキラは考える。アイエフの方も、もうそれしかないか
と嘆息して袖口から愛用のカッターを構える。

「まー、そう殺気立つなよ。アタシやここにいるゲームキャラをぶ
っ壊しに來ただけだからよ」

「悪いけど、そうはさせられねえんだよなあ」

刹那、キラの身体は少女の元に急接近していた。辛うじて少女はそ
れを鉄パイプで防いでいたが、連として叩き込まれたキラのハイキ
ックでその身体が後退る。

「ツテエ……！」

「……なかなか強いな」

キラが意外そうに声を上げる。

それに対して少女はまるで勝ち誇ったようにない胸を張ってフツと
笑みを零す。

「まあな！ 犯罪組織が誇るマジパネエ構成員、リンダ様とはアタ
シのこも「構成員って事は……要は『下っ端』って事か？」……」
彼女の言葉を遮ってキラは発言した。しかも発言する内容がないよ
うである。例えば相手が悪人でも言っているいいことと悪いことがあるよ
うな気がするが。

「し、下っ端だとお……！」

「あー、なんか地雷踏んだみたいよ？」

アイエフが『やっちゃったなー……』みたいな視線をキラに注いで
いた。続いて『え？ 俺？』みたいな顔でアイエフに視線を送って
いるキラの姿があった。

少女は額に青筋を浮かべて声高らかに激昂する。

「許さネエ……アタシを下っ端呼ばわりしたことを後悔させてやる！！」

言うが早いのか、少女は懷から漆黒を思わせるディスクを一枚取り出してそこら辺を闊歩していたまだ汚染されていないモンスターにそのディスクを滑り込むように『挿入』させた。だが見た感じでは、ディスクがモンスターの肌を水面のように揺らして内部に『侵入』したという方が正しいようにも思える。

「違法ディスクね……。まったく、厄介なモノをお持ちね」

「アレも犯罪組織のツールの一つなんですか？」

「ええ……。でもそうそう持ってるヤツなんていないわよ。精々幹部クラスのヤツしか所持していないと思ってたんだけど、構成員程度も持つようになったのね」

アイエフが少々忌々しげに額を押さえながらそう漏らす。

「下っ端だからアイテム頼りなんじゃないですか？」

キラの心ない言葉が癪に障ったのか少女は『キィッ！！』とか奇声を張り上げて右手の人差し指を突きだしてキラに向けてから怒号を張り上げる。

「もう許さネエ！ 行け、モンスター！」

『ギャアアアアアッ！！』

少女の叫びに呼応するかのようにモンスターがまるで心臓にまで届きそうな咆吼で辺りの空気を揺るがす。耐えるようにキラとアイエフは半眼で相手の出方を窺う。瞬間、モンスターの右前足から斬撃波が飛ぶ。

「危ない！」

「ッ！」

アイエフの一瞬の判断がなければ、きっと今頃キラは肉塊となっていただろう。放たれた斬撃波は壁にぶち当たってその辺りを半壊させた。それを見てキラは顔を蒼白させる。

「コレが違法ディスクの力……。侮れないわね」

アイエフが冷や汗を垂らしながら、視線をそちらに向けてそう呟いた。キラの方も同じ事を思う。

モンスターを命令下に置き、更には身体能力、魔法能力を急上昇させるまさに術者にとっては都合のいいツールだ。

故に、腹が立つ。キラはグイと頬に付着した汚れを乱暴に袖で拭い取ってモンスターと視線を交える。直後、棒立ちとなっていたモンスターは突進の姿勢となり、二人に向かって突っ込んでくる。

キラはすぐさま大地を蹴って真上へと跳躍、アイエフはモンスターの右脇へと跳び銃弾を発砲する。身体硬質により、大したダメージには至っていないがそれでも牽制には丁度いい具合だろう。キラは腰の刀を引き抜いて逆手に構えてモンスターの首筋に突き立てる。

例えばステータスの全てが跳ね上がっていたとしても急所を狙えば一溜まりもないはずだ。二、三度肉を抉り、トドメとばかりには振りかぶってまた一突き。モンスターは悲痛な叫びと共に身体を揺らす。それを見届けてからキラは跳びすさって地面に着地する。

「なッ……まさか強化モンスターを倒すなんて……！」

下っ端は信じられない光景を目の当たりにした様子で狼狽えて後退る。それを追うようにキラは一步、下っ端が引き下がるのと同時に歩む。

「例えばモンスターでも、生きてるんだ。それを思い通りにしようとするなんて間違ってる」

キラの胸の内に沸々と静かな怒りが沸き上がっていた。

『何故、モンスターに対してそんな感情を抱く必要がある？』と自分自身に問い掛けたくなるけれど、もうその怒りは彼の心には収まらない。世界を、全てを思い通りにしようとする犯罪組織の横暴をこれ以上、見過ごしておけなかったのだ。だから、キラは刀をぶら下げたまま、また一步一步と彼女に歩み寄る。

じりじりとキラが距離を詰める。けれどそれに合わせるように少女もまた一步後退る。

——少女が、不敵に笑った。

「かかったな！」

「……！」

刹那、キラの右肩に鋭い痛みが走る。次は左足。

頬、左脇腹、爪先、左下腕——まるで全身が痛みの渦の中にいるかのように、軋み、叫びを上げていた。

『何故、どうしてこんな事になっている？』痛みで上手く働かない頭で思考し、薄く瞳を開けて周りを見回す。

キラの周りを何か、風のようなモノが纏っているように見えた。それは一枚一枚が鋭く尖り、まるで切り刻むようにキラの身体にヒツトしている。

「ッ——！」

キラの右脛の辺りに激痛が走る。立っていられない、ぐらりとキラは膝を突くが攻撃が止む気配はなく、なおもキラの身体を襲い続けている。

「アイ、エフさんッ……！！！」

「分かってる！」

キラの意志を汲んでアイエフはカタールを構えて少女に、いや少女の影に隠れているモンスターにカタールを振り下ろす。

どうやら魔法型のモンスターだったらしい。それならこの風刃も納得できる。アイエフが少女を射撃で威嚇、回し蹴りで吹き飛ばしモンスターに向かって振り下ろす——ところでアイエフの華奢な身体が容易く吹き飛んだ。

どうやら魔法波らしく、アイエフが壁に叩き付けられた。

「ぐ……！！」

アイエフが左脇腹を押さえながら苦痛に表情を歪ませる。それに対して少女の方はニヤニヤと勝ち誇った笑みを浮かべてそれを眺めていた。

助けに行こうと身を乗り出す。しかし、その瞬間にはまたキラの身

体に傷が走る。どんどん刃は鋭くなって、対には肉をえぐり出した。キラの周りに広がる鮮血が痛々しい。けれど、それ以上にキラは一つの思いに心を昂ぶらせていた。

——『そう』しなければ気が収まらない。

ギリと奥歯を噛んで地に足を張る。決して倒れないように。まるで彼の意志の強さをそのまま表しているかのように。

「キラ……、私がアイツを撃つ！ 少しでも魔法の勢いが衰えたら私を置いて逃げなさい！！」

「で、も……！」

顔を覆いながらキラは返事をする。彼女を置いていく、などキラに出来るはずもない。したくもない。そんな思いを込めて力強く返答する。

「巫山戯ないでく、ださい……！ アイエフさんを置いて逃げるなんて、そんなことッ……！！」

「今は我が儘言っている場合じゃないでしょ！？ このままじゃここで死ぬ必要もないアンタが死ぬことになるわ！！」

アイエフはまだ痛む身体にムチを打ってカタールから簡易弾を発砲する。弾丸はそのまま吸い込まれるようにモンスターの左脇腹へ命中。がくんと大きく身を揺らして、その後に倒れる。魔法の能力はあるが耐久値には問題があったようでその一撃だけで倒れてくれたらしかった。が、こちらは既に満身創痍で向こうはまだ大将は無傷だ。勝ち目など見いだせない。いや、初めからなかったのだ。勝率など、存在していなかったのだ。

攻撃が止んだはいいが、キラの身体には動かすのに十分な力が残されていなかった。いや、力は十分に残されている。問題はその力を発揮できるに足るだけの肉体が存在したかと言えばその答えはNOだ。

「ハッ……ハッ……！！」

肩で大きく息をしているのに、肺に十分な酸素が満たない。いや、それもそのはずとキラは思う。

既に出血のせいで上手く思考も働かないはずなのに、やけに彼の脳内はすっきりとしていた。いや、それ故に『燃えたぎっていた』。何も感じない真っ白な意識の中に一つ、紅黒いハッキリとした意識だけがキラの意識を奪おうとしていた。

「余計なことしやがって!!」

「ッー!」

少女がアイエフの頭を鉄パイプで殴りつける。疲弊した彼女に防御する術などあるはずもなく、アイエフの頭部から流れ出た出血が紅い水たまりを作っていた。

「――、」

「……チィ、まだ生きてやがる。コイツら人間じゃネエんじゃネエのか?」

次の瞬間にキラの足は到底、考えられもしないような『全ての生物をも凌駕するような迅速な動きで』少女に接近して彼女の右頬に拳の一撃を叩き込んでいた。

果たして本当に人間の力なのだろうか、と思うほどに彼女の身体は激しい力で壁に叩き付けられていた。パラパラと壁が崩れて石片が彼女に降り注いでいる。

一瞬、何が起こったのか把握できない様子で少女は視線を向ける。

「な、な……!」

「今のは……アイエフさんの分だ」

キラが拳を握って小さく答える。それに少女は怪訝な顔つきになって返す。

「い、意味わかんねえ事をぬかすな!」

「次は……女神様と、ネプギアの分だ!」

先程よりも強い一撃で少女の脳天に叩き込む。だが、少女は半身をずらしてその一撃をかわす。地面に叩き込まれたキラの一撃は地面に食い込んで細かい亀裂を走らせる。

「て、テメェ……人間じゃネエ……!」

既に、恐怖するような顔つきで少女はキラを睨んでいた。

その言葉が、キラの神経を逆撫でした。

地面に転がっている彼女の襟首を掴んで自分の目線と同じ高さまで掴み上げ、そして唾を飛ばす勢いで怒号を張り上げる。

「お前達が言うのか！？　今まで女神様の守護の中で暮らして、そんなことも知らないで犯罪組織に組して、そんな女神様を裏切ったお前が言うのか！？　お前達が言うのか！？」

彼女は必死にキラの腕を引きはがそうともがいている。しかし、そんな彼女が何かをしようとする度に、再び、更に強くキラは握る力を強めてまだ、まだ叫ぶ。

「俺はお前達を許さない！　アイツを、ネプギアを泣かせるヤツは許さない！　例え誰だろうが、犯罪神だろうがぶっ潰す！！　女神様を侮辱するようなヤツは俺がぶち殺す！！　俺がどこに堕ちようと関係ねえ、全力でお前らに痛みを与えてやる！　女神様が、アイツらが与えられた痛みと同じ分だけ！！」

直後、キラの身体が横に飛ぶ。何か見えないモノに当てられて、まるで巨大な杭で打たれたような衝撃。キラの脇からミシミシと軋む音が鳴る。しかし、そんな思考をする間もなくキラの身体は壁に叩き付けられた。

「ゲホ……ッ！　ふ、フザケンじゃねえ！　犯罪神様を、マジック・ザ・ハードを侮辱するなんてそれこそアタシがぶっ殺してやる！！」少女は額に青筋を浮かべてディスクを腕に掲げていた。先程のモンスターを操る類のディスクではなくモンスターを召喚するためのディスクだ。その証拠に彼女の足下から次々とモンスター達が湧き出ている。

「ッ……！」

ざっと見ただけで十数体程度だろう。しかし、キラを仕留めるには十分な数だった。いや、十分すぎるほどに。

しかも、種類は全てキラの苦手とする魔法タイプだ。完全に勝機がなくなった、とも考えられる。

キラは逃亡を図ろうかと、チラとアイエフに視線を移す。さっきの

位置から動いていない。どうやら完全に意識を失ってしまったらしい。このまま放っておけば命にも関わる。

だが――

「とつとと、終われッ!!!」

少女の声。

終焉の響き。

モンスター達は瞬時に魔法陣を発動させる。

それら全ての魔法陣は、キラに向けられている。

まるで、それは未来を予知しているかのようにどす黒い漆黒の槍。

(ネプギア……、『姉さん』……、……ゴメン……ッ!)

刹那、キラの左下腹部、右肩、右太股、左脛、右左腕部、計5カ所に鋭く尖った闇色の槍が、彼の身体を貫いていた。

つう、とキラの口の端から赤色の液体が零れ落ちる。

それは次第に地面に伝い、小さな丸印を形成していく。

彼が『最も』大事にしていた刀を地面に落として、ガクリと膝を突く。

槍が無造作に彼の身体から引き抜かれて、その場所からまるで滝のような紅い水流が流れ落ちる。

「けほ……ッ!」

もう、身体も動かない。

彼の身体が完全に地面に伏す。

(もう、瞳も開けていられない……)

ぼやける視界の端に一人の少女の姿を映す。

少女は叫んだ。
啼いた。

『あ あ あ あ あ
悲壮切った声で、ただ、啼く。
あ あ !
』

キラの薄く閉じられようとしている視界の中に彼女が、

漆黒のドレスを纏おうとしているのを、キラは最期まで見届けていた。

覺 守

醒 護

女

神

暴

走

EP. 12 「AWAKING？」（後書き）

オリ設定

【邪神化】

別称…守護女神暴走覚醒

女神に変身する際に使用する力（神力）が、使用者のある一定の感情の暴走にともなって使用者の意識を深く取り込んで理性を剥がした状態の女神化。

普段、このような形態が起こることはなく何か重要な切欠があるのではないかとイストワールは推測している。

EP. 13 [DEVIATION SILENCE]

空が。

『あ あ あ あ あ あ !
』

大地が。

『あ あ あ あ あ あ !
』

空気が。

『あ あ あ あ あ あ !
』

全てが、啼く。

彼女の声に、叫びに呼応するように。

まるで世界を彼女が掌握したかのように。

ざわざわと鳴る。

何かが、鳴る。

耳障りなほどに、鳴る。

啼いている。

彼女が、ネプギアが、災厄が、『泣いている』

否定、否定、否定、否定否定否定否定否定否定否定否定否定否定
定————ッ!!!!

『邪神化』

たった、それだけを。

彼女は呟いた。

彼女ではない声で。地の底から這いずりだしたまさに文字通り『化

物』のような声でネプギアは小さく言った。

世界を騙す微笑。

全てを揺るがすその姿態。

ただ、何もかもが劣って見える。

「な、あ……」

下っ端はただ喉を震わせ、絶句した。

それだけに彼女の存在は圧倒的で、暴力的で、威圧的で、絶対的だった。

何をせずとも地面を抉る。彼女が歩くだけで世界が死ぬ。

そんな中で、コツン……とネプギアが、ネプギア『だった者』が一步、足を前に出した。ヒールの音だけが、甲高く響いた。

「殺してあげよう」

魅力的で狂氣的な微笑と共に、彼女はそう小さな唇から吐き出した。下っ端の瞳が、大きく見開かれる。

恐怖感、それしか存在し得ない。存在することを許されない。

けれど、ネプギアはまた紡がれた唇をもう一度、小さく開く。それでも彼女の音を届けるには十分過ぎた。

「だって、アナタが

キラを殺したん

だもの。

私のこのとを認め

くられた大事な人

を殺したんだもの

。

だから、殺されて

当然たり前だよね。

殺して殺して殺

て殺して尽くすん

だよ」

——嗚呼、彼女はあまりに狂ってる。

彼女は気がトチ狂ってしまったのだ。

彼女の遙か後方を歩んでいたコンパはネプギアを見てそう思った。
思ってしまった。

ネプギアが急に走り出したかと思えば、彼女が急に叫び声を上げた
と思っただけだ。

きっと、彼女はおかしくなってしまったのだ。

彼女の声を聞いているだけで、そんな思いが強くなってしまう。

『聞きたくない』と。

コンパは両目を強く瞑って、耳を塞いだ。

これ以上、この声を聞き続けていればきっと自分もおかしくなってしまう。

それが怖くて、恐ろしい。

そうだ、世界は完全に壊れてしまったのだ。

☆ ☆ ☆

青年は震える空気に少し長めに揃えられた髪を揺らしてその状況を見下ろすようにやや上方で眺めていた。

抉られる大地も、削られる風の刃も、まるでそこに障壁でも存在しているかのように青年の身体の手前で全てが弾かれていた。

そんな状況を見れば、誰もが動揺を起こすことだろう。しかし、青年は特に取り乱すこともなくそれどころか何のアクションを起こすことなく、冷ややかにその状況を見下していた。

「始まったか……」

ざわざわと胸が震える感覚。

しかし、彼が最も感じ取り、そして長きに渡り『共に過ごしてきた』

感覚でもあった。

「違和感はあったんだ」

少年は、まるで虚空に話しかけるように何度も頷きながら低い声でそう答えた。

少年の言うとおり、違和感はあった。

そうそう常人が気付きそうもない、いや達人でさえもそれを感じ取れることは『不可能』かもしれない今までのネプギアと、今日までのネプギアの違い。

鋭い、光る視線を下方のネプギアへと向けてしかし何の感情もこもらない表情で青年は微動だにしない。

「けど――」

青年は、ニヤリと今まで変えることのなかった表情を、変えた。

『待っていた』とばかりに、青年は肩を小さく揺らして笑いを堪えていた。

「これで終わるお前じゃ、ないだろ？」

彼の視線の先には血溜まりの中に横たわるキラの姿があった。

「自分でやったことだ。なら、自分で落とし前は付けるんだな」

いつの間に、『キラの身体から完全に傷がなくなっていた』のだろうか――？

しかし、それに答える者はいない。

タイミングを見計らったように、キラの身体は小さく揺れ動き、その右手が大地に突き立てられた。

☆ ☆ ☆

「――う」

キラは右手で自分の上体を支え、起こしながら小さく呻き声を上げた。

スツと自分の腰を大地に置いて、ぺたぺたと自分の身体のあちこちを探ってみる。

けれど違和感がある。いや、違和感しか見当たらない。

自分はさっき、確実に『死んだ』はずなのだ。

それは地面に広がる確実に致死量を超えている鮮血がそれを証明しているはずなのだ。

『それなのに、どうして自分は生きている――？』キラはなおも自分の身体を探りながらそんなことを思考する。

そこでキラは違和感に気付く。

彼の身体の表面に、よく目を凝らさなければ見えないくらいの白い――装甲だろうか。そんなものが彼の身体を覆っていた。

気になってグイッと服の内を覗いてみるがやはり同じ。微弱な薄い装甲が身体を覆っていた。

訝しむように眉根を寄せる。しかし、そんな彼の疑問はとある轟音と共に掻き消された。

「ッ――！？」

思わずそちらに視線を向ける。

濛々と砂煙の巻き起こる中に二つのシルエットが浮かび上がる。片方はネズミのようなやや小柄な人型のシルエット、もう片方は長い髪を揺らすシルエット。

――間違いない、ネプギアだ。

キラは、ならば自分も加勢をと身体を起こす。この地響きはもしかすると強いモンスターがいるのだろうかなどと思いながら地面に転がっている刀に手を伸ばす。

刹那、もの凄い勢いの風圧が掛かってキラは思わず目を瞑った。

次の瞬間に、キラは、戦慄した――。

「ねぶ、ぎあ……？」

『それ』は、彼女であって彼女じゃない。

全身が総毛立つような感覚に陥って、キラは目を大きく見開いた。それは、攻防なんてレベルじゃない。

一方的な暴力だ。

逃げる下っ端、それを狂氣的に笑いながら何度も剣を振り下ろし、大地を扶る少女。

その少女の姿はあまりに異様すぎる。

それがかつての少女なのか。それすらも疑ってしまうほどに。

ぐにやりと禍々しく彼女のこめかみの辺りから伸びた一對の角。

両頬に走る黒い稲妻を模した刺青。

彼女が纏うその衣装は、漆黒を思わせるような生地薄のドレス。

彼女の大きな双眸に映るのは絶対的な白だけ。

あれが本当にネプギアなのか、とキラは眉をひそめる。

彼女が本当に、ここ数日間て共に過ごしてきたあの心優しい少女なのかと。

——邪神、まさしくそれだった。

状況がまったく掴めない。

そこでキラははたと気付く。彼女がいるということは彼女を連れていたコンパもいると言うことになる。視線を周囲に泳がせて、目的の人物を捜し当てた。

彼女は遙か後方、壁に背を持たれて小さく蹲っていた。いや震えていた。

それに眉根を寄せつつも、轟音を背に受けながら歩み寄る。

「コンパちゃん？」

心配そうな表情で膝を突いて視線を落とす。

けれど、コンパはそんな彼の存在に気付かない様子で――いや、完全に耳を塞いでいる。これでは気付きようがない。

意を決したようにキラは唇を紡いでコンパの肩を揺らした。

彼女の肩が尋常でなくらいに大きく震えて、その涙を溜めた瞳がキラを捕らえる。

「きら、君……？」

ほとんど消えてしまいそうな声で、彼女はそう吐き出した。

キラは表情を崩さないまま、こくと小さく頷く。彼の存在を確認して幾分か安心したらしいコンパが自分の肩に添えられているキラの両手に触れる。

「コンパちゃん、ネプギアはいたい――？」

恐らく彼女はこの状況を見ていただろう。

だとすれば、どうして彼女がああなってしまったのかも分かるはずだ。そんな思いを抱いて質問を投げた。

けれど、コンパはなおも小さな声で肩を震わせながら答えた。

「私……ギアちゃんの声を聞いて、こっちに来たときにはもう……もう……！」

「……見てないの？」

キラの問いにコンパはゆっくりと頷く。

それに対してキラは表情を更に険しくさせてから背後で暴れ回るネプギアに視線を回した。

それから目の前のコンパの戻してゆっくりと語りかけるように口を開く。

「コンパちゃん、アイエフさんが今死にかけてるんだ。だから彼女を連れてここを逃げて。ネプギアの方は俺が何とかするから」

そう言ってキラは倒れているアイエフの方を指す。

コンパは今まで気付かなかった様子で口元を押さえて表情を驚愕に染めている。

キラの意志を汲んでコンパは小さく頷く。が、やはりここに二人を置いていくことには抵抗のある様子で心配そうな表情を掲げる。

それにキラはにっこりと柔らかな微笑を浮かべてから答えた。

「大丈夫。俺も、ネプギアもちやんと二人で帰るから。心配しないだよ」

その言葉の中に確信を秘めたような色を含んでいることにコンパは不承不承と言った様子で頷く。

コンパがアイエフの元に駆け寄ってゆっくりと優しく彼女の身体を抱き起こしてできるだけ衝撃を与えないようにしてこの空間を脱した。

それを見送ってからキラはスッと視線をネプギア達の方に送る。

未だ狂気的な笑いを周囲に撒き散らして世界を破壊している少女。

それを捨て置けるわけがない。

何より、これ以上、あの少女が悲しんでいる姿なんて見たくない。キラは大地を踏みしめて全速力で彼女の元へと走る。

段々と鋭さを増した風の刃が再びキラの肉を抉る。けれど、今はそれ以上に彼女が心配だ。その思いだけがキラの中にある。自分の傷のことなど知ったことかと言うように。

腕を盾にしてどうにか顔だけは護る。そうしながらゆっくりと、しかし確実に彼女へと距離を詰める。

既に下っ端は壁際へと追い込まれている。その事実が更にキラの中に焦りを生み出す。

見たくない。

世界を愛した少女が、世界を殺すところなんて見たくない。

人殺しなんてさせたくない、と。

無機質に、ネプギアの武器を持った右手が振り上げられる。それにビクリと身体を揺らして下っ端は思わず両手を前につき出す。

まるで質量を持っているかのように剣が振り降ろされる。

ズガッ、と音を立てて下っ端の真横に剣が突き刺さる。

下っ端は薄く瞳を開いてネプギアを見る。そこには微かに彼女の右

手に両手を添えて軌道をずらしているキラの姿があったからだ。

好機、とばかりに下っ端はそこを抜け出す。しかし、キラはさして気にした風もなく後ろからネプギアを包み込むように抱き寄せる。

「もう、いいんだ——」

この声が彼女に聞こえているかどうかなんてキラには判別できない。しかし言ってやるしかない、言っていれば必ず彼女は元に戻ってくれると、そう信じていたのだ。彼なりに。

こんな状況下にあってもなお、彼女から甘くくすぐるような匂いがキラの鼻を突く。絹のような滑らかな肌触りがキラの腕の中にあつた。

けれど——

「殺　　さ　　な　　い　　と　　。

キ　　ラ　　を　　苦　　し　　め　　る　　モ

ノ　　は　　全　　部　　全　　部　　壊

し　　て　　あ　　げ　　な　　い　　と　　。

そ　　う　　じ　　ゃ　　な　　い　　と　　キ

ラ　　は　　幸　　せ　　に　　な　　れ

な　　い　　ん　　だ」

キラは泣きそうになった。

今にも泣き出してしまいそうなのは彼女なのに、それでもなお自分のことを憂いていてくれる彼女のその健気さがキラの心を抉った。

ネプギアに触れるキラの両手に更に力が籠もった。

——もういやだ、自分の所為で誰かが不幸になるなんて、そんな思いは二度とゴメンだ。

キラは両手に力を込めてネプギアを自分と向き合わせる形にした。

しかし、依然として白く光る彼女の瞳は何も捕らえていない。ただ、絶望だけを残して。

「いいんだよ……！　　もう殺さなくていいんだ……ッ！」

押し殺したような声でキラはネプギアの耳元で唱えるように呟いた。がくがくとキラが身体を揺り動かすのに対して無機質に彼の腕の中

に収まる少女は何を思うでもない虚空を見つめたままだ力の流れに身体を委ねていた。

薄く開かれていた彼女の唇が小さく上下する。

「だ　っ　て　、　キ　ラ　が　痛

い　思　い　を　す　る　の

は　見　て　い　ら　れ　な　い

ん　だ　よ　。

だ　か　ら　殺　す　ん　だ　よ　。

だ　っ　て　、　だ　っ　て――」

「ッ――！」

その瞬間に、キラの中で何かが弾けた。

「俺のこと見ろッ！！！」

彼の叫びに、今まで何も反応しなかった少女の表情が一瞬だけ揺らいだ。まるで怪訝なモノを見る顔つきで。

しかし、キラは気にせずに続ける。

「俺はお前に人殺しなんかになって欲しくない！　俺はお前に汚れて欲しくない！　俺のことを見ろ！　俺に痛い思いをして欲しくないのなら――」

そこまで言って、キラはグツと言葉を詰ませた。

今まで堪えていた感情の全てが逆流してしまいそうになるのを我慢してキラはきつく唇を紡ぐ。

「頼むから……ッ、元に戻ってくれ……！」

後半はもう掠れて声にもなっていなかった。

しかしその時に、旋風がキラとネプギアの二人を中心にして激しく舞い上がる。それに呼応するようにばさばさとネプギアの纏うドレスがただ鳴くように揺れていた。

刹那、彼女を身体を覆っていた装甲、ドレス、その全てが光を発していた。それは初めはどす黒く、次第に明るく目を開いていることすらも困難になるほどの目映く白い光に変わっていく。

「ッ——」

キラは、もう言葉も出なかった。

それはもう、言葉では言い表せないくらいに美しくて圧倒的だった。一瞬、彼女の身体に純白のドレスが浮かび上がったかと思うと次に瞬きをしたときには何もなかった。

そう、何もなかった。

真っ白な空間の中にたった『二人』だけが取り残された状態。

キラは恐る恐る腕の中に収まる少女を見た。

そこには、いつもの格好で、変わらない表情で、ネプギアがそこに存在していた。

「キラ——」

無機質だった表情に驚愕の色が広がる。途端に彼女の瞳の端に大粒の涙が溢れて小さく嗚咽を上げる。

「キラ！」

トン、とキラの身体に軽い衝撃が当たる。

彼の胸に顔を埋めるようにネプギアが必死に彼の服を掴んでいる。

自分まで泣きそうになってしまいうのを堪えてキラはゆっくりと彼女の腰に手を回す。

「ばかやろ……ッ！」

「ん……、ごめんなさい……ッ」

ネプギアの服を握る力が更に強まる。それに呼応するようにキラも彼女を抱きしめる力を強めてやる。

もう二度と離したくない、とでも言うように――。

「見えるよ……キラのこと、今なら見えるよ……」

「ああ……」

キラはそっと右手を彼女の後頭部に回す。

彼女の目線がキラの目線と交差する。そんな彼女の愛らしい瞳にドキリとキラの心臓が飛び跳ねた。

「キラ……」

「……何だ？」

ネプギアは無言で目とを閉じるように指示していた。それを訝しみつつもキラは言われたとおりにゆっくりと瞳を閉じる。

ふわりと、まるで綿のように、しかししっとりとした感触がキラの唇から全身へと駆けめぐる。

薄目を開けて見るとそこには真ん前にネプギアの顔があった。その瞬間にキラの心臓はもう熱烈なビートを刻んでいた。

――キス。

もう、二度目か。ネプギアが不意にキラに口付けを落としたのは。食らい付くように、離れたくないと思いの強さをそのままを表しているかのように。ネプギアは夢中で食い付いていた。

「む……ッ！」

キラは全身から力の抜けるような感覚に陥った。少しでも気を緩めてしまえば倒れてしまいたいそうになるほどに。

けれど、どこか暖かい――。

「ぷはっ……」

「ッ――」

ネプギアがその唇を離れた。

キラは口元に触れながら自分自身でも分かるほどに紅く火照った顔でネプギアに問うた。

「何で……」

前にも言ったかもしれない。

キラはそう思う。しかし聞かずにはいられない。

ネプギアは一瞬、キョトンとした表情を浮かべるがすぐに柔和な微笑になってその唇を動かした。

「……きだから、……な――」?

「ッ――!？」

刹那、空間に広がっていた白い霧が轟音と共に消えた。

『彼女は何といったのだろうか?』そんな思いをキラに植え付けて、周囲の風景は先程まで二人が足っていたあの場所が変わっていた。

「ネプギア……」

「うん……」

ネプギアは決意を秘めた瞳で正面の下っ端に視線を移して、キラの呼びかけに応じた。

力強い声でネプギアはゆっくりと声を上げる。

「私、もう逃げないよ——」

ネプギアの右手がゆっくりと掲げられる。

その瞬間にネプギアの足下からどこか暖かさを感じられる風が巻き起こる。キラは胸に手を当ててその感覚を堪能する。

『ごく最近まで身近に感じていたこの感覚』を、まるで——。

「女神化!!」

声高らかに、ネプギアはそう告げた。

彼が最も期待する言葉を、下っ端が最も恐れる言葉を、そして青年が最も『聞きたくなかった』言葉を。

青年は遥か上方で大きく目を剥いた。

「女神……覚醒するか!」

今までの、落ち着いた印象を与えていた青年の発した言葉には動揺が多分に含まれていただろう。

忌々しげに、狂おしげに、そして何より後悔するように青年は、その光景をただ見下ろすことしかできなかった。

純白の輝きを模した白き装甲。

彼女の周りに浮かぶまるで守護するようなプロセスサと呼ばれる女神の証。

女神、パープルシスター降臨。

「私は、この力でキラを護ります!!」

彼女の右手に握られていた白銀の剣から光が迸る。

振動する空気に怪訝な顔つきになりながら下っ端は右手に持っていたディスクを構えながら言う。

「ウルセェ! コレで終わりだ!!」

あれほどの敗北を喫しながらもまだ戦闘の意志を垣間見せる下っ端に、しかしネプギアは表情を変えることなく武器を構える。

「残念です……」

直後、ディスクから生み出された数十体のモンスター達が一瞬にして消し去られた。ネプギアは剣から銃弾を発して狂うことなく、一撃一撃を全てのモンスターにヒットさせていた。

下っ端は狼狽しつつも、新たにディスクを使ってモンスターを召喚しようとする。ネプギアの視線が光り、そのディスクに焦点を合わせる。

大地を蹴って一気に距離を殺して下っ端の持つディスクだけを真っ二つに切り裂く。

「なッー！」

「まだ、続けますか？」

下っ端は肩を震わせてその場に立ちつくした。恐らく負けを認めたのだろう。

ネプギアはそれを見届けて武器を降ろす。

「見逃してあげます。早くここを立ち去ってください」

「――！」

癪に障ったのか、下っ端は持っていた鉄パイプを背後のネプギアに叩き込む。しかし、そんなことは初めから見切っていたとでも言うようにネプギアは剣でそれを受けきっていた。

「もう一度言います。見逃してあげます。早くここを立ち去りなさい」

さっきとは違う、強い口調。心なしか瞳の鋭さも増しているように思える。

下っ端は小さく舌打ちをして足早に空間の出口に立つ。

「つ、次はネエぞ！ 覚えてやがれ！」

振り向きざまに下っ端はそう吐き捨てて、曲がり角を曲がってその姿を消した。

そんな彼女の後ろ姿を見届けてから、ネプギアはスッと瞳を閉じる。

彼女を覆っていた白の装甲が空気に溶けるように消えてまた彼女が纏っていた衣服が現れる。

「……よかったのか？」

キラは心配そうな表情をしてキラは問い掛ける。それを見てネプギアは即座にこくと首を縦に振った。

「うん、だってキラが『人殺し』なんかになるなって」
そうか、とキラは首肯する。

きつと、彼女の強大すぎる力を3割でも使ってしまった下っ端など一瞬で肉塊に変えることが出来る。それを見越して、彼女を逃がしたのだろう。

数秒の後、彼らにとある人物の言葉が投げかけられる。

「素晴らしいですね」

パープルディスクだった。

二人は台座の方に視線を送って背筋を張る。それを見て微笑むような声を発してパープルディスクは再び声を発する。

「貴女とは初めてですね。この地を守護する『パープルディスク』です」

「あ、私はプラネテューヌの女神候補生のネプギアです」

「ええ、言わずとも分かっています。目的も既に承知しています……。守護女神のこと、ですよネ？」

「はい」

パープルディスクの問いにネプギアは首肯して答える。

一問置いて、パープルディスクは重々しい声で言葉を紡ぐ。

「私にはそれに協力できるだけの力があるかは分かりません。けれど、私の力が少しでもあなた達の力となるのなら……受け取ってください」

台座の直上に光が集まる。次第にそれは大きさを増していき、ふわふわと浮遊してネプギアの正面に移動する。

おずおずとネプギアが両手を出してそれを受け取る。それはパープルディスクよりも一回り小さな紫色のディスクだった。

「これは……？」

「私の力の一部を、そのディスクに移しました。何かの役に立つはずです」

「……ありがとうございます」

代表してキラが礼を言う。

「いえ、……寧ろこの程度しかできない私を許してください」

「……そんなこと」

見えはしないが、きっと彼女は頭を下げていることだろう。そう思うとキラもネプギアも申し訳なさで胸がいっぱいになる。

それに――。

「……パープルディスク、俺達と一緒に行こう」

「え？」

予想しない呼びかけに対してパープルディスクはそんな声を漏らした。

意外にもキラの表情が真剣なモノであったために、パープルディスクの方も神妙な声で答える。

「ありがとうございます……。けれど、私にはこの大地を守護する大切な役割があるのです。だから……」

「……だから、ずっとここにいますか？ 一人で……」

ネプギアも、心配そうにパープルディスクの言葉を遮った。

「はい……」

「でも……！」

「問題はありません。いずれ、私もここを離れることでしょう。そう遠くない未来に……」

まるで確信を秘めているような声でパープルディスクはそう言った。

「そう、なんですか？」

「はい。今は移動の術式を組んでいる途中です。きっといつかここを離れられるときが来るでしょう。その時は……」

「いつでも、歓迎しますね」

ネプギアがそう答えた。それに納得するように、パープルディスク

は押しとどめるような声で零す。

「さあ、もう行った方がいいでしょう。いつまでもここで時間を取られてはいるわけにはいきませんからね」

「はい」

「じゃあ、また」

キラは右手を小さく挙げて声を上げる。

ネプギアもそれにならうように小さく右手を振る。名残惜しげに二人は彼女の姿を視界に入れながらゆっくりとその場を立ち去り、やがてその姿は曲がり角に差し掛かって見えなくなっていく。

それを見届けたパープルディスクの傍らから、ダンと地面に着地する音が響いた。

「貴方……ですか」

「パープルディスク……」

青年は、どこか迫力を込めた声色で告げた。

「――お前はここで壊れろ」

＊

「キラ」

「んー？」

ネプギアは、どこか照れたような声でキラに呼びかけた。その声にキラは視線を前にしたまま応じた。

「ありがとうね」

「何が？」

キラとネプギアを盗み見てキラはそう問い掛けた。

エヘへと頬を掻いてネプギアは薄く笑ってから答えた。

「だってキラがいなかったら私、きっと人殺しになってたもん」

「ああ……」

その事か、とキラは首肯する。それからこつんとネプギアの額より少し上の辺りを叩いてから言った。

「きつと、お前は俺がいなければああはなってなかっただろうよ」
呆れるようにそう答えた。

叩かれた辺りを押さえながらネプギアはキョトンとした表情でキラの横顔を眺めていた。

それでも、とネプギアは続ける。

「キラがいてくれたから、私は今の自分があると思ってるから——だからありがとう」

小さく頭を下げてネプギアはそう言った。

「……俺も」

「え？ 何か言った？」

クイと顔を上げてネプギアはそう問い掛けた。

それに対してキラは「何でもない」と答えて、また足を動かす。

「気になるよ」

「何でもねえって」

右手では鬱陶しそうに払いのけながらも、しっかりと左手では彼女を掴んでいた。それに応じてネプギアも右手を握り返す。

深く、絡みつくように。

ただ、二人の心は、ひっそり——。

EP. 13 [DEVIATION SILENCE] (後書き)

http://623.mitemin.net/i31152/
邪神化ネプギア設定画です。

EPILOGUE 一ソノ日常、崩壊シセリ（前書き）

今回は珍しく日本語のタイトルで行くよ！

EPILOGUE 一ソノ日常、崩壊シセリ

「酷い目にあったわ……」

手入れの行き届いた腰まである茶色の髪を揺らして少女は嘆息した。包帯の晒された頭部に右手をそっと添えるような形で目を伏せてから半眼を作って正面を見る。

しかし彼女の視界に映るのはすっかり機能的に手入れされたうっすらと青みの掛かった白色の壁だけだった。

そんな彼女の傍らでもう一人の少女は微苦笑を浮かべてそうしている彼女の小言に耳を傾けていた。

「でも、無事でよかったです」

すっかり安心しきった表情をしてコンパが自分の胸に両手を添えた。しかし、そんなやんわりとした彼女とは打って変わって少女、アイエフはジトツとコンパに半眼を向ける。

「無事、なんてモンじゃないわよ。こっちとしては身体中は痛いわ、挙げ句には謹慎まで食らう始末だし」

再び大きめの嘆息をしてアイエフはコンパが向いてくれた兎型の林檎を躊躇いなく囓り食った。

彼女が不機嫌なのもそのはず、先のゲームキャラとの接触の際に敵の攻撃を受けて死にかけ、そして候補生といえど女神と一般人を現場に残し離脱してしまったことにより一時謹慎の身となってしまっていた。まあ、それはコンパにも言える話だったのだが。

しかしまあ、これでも十分に看過された方でありイストワールの慈悲がなければ最悪、政府職を降ろされていただろうから事なきを得たとも言えなくもない。

しゃくしゃくと口の中で林檎の柔らかな食感を楽しむわけでもなく、さっさと咀嚼して喉の奥に流し込んだ。

珍しく全てが降ろされた長い髪を鬱陶しそうに払ってアイエフはまた嘆息した。

「で？ 結局、あの二人はどうだったの？ 成功した？」

アイエフはチラとコンパを視界の端に入れてそう質問した。

なんやかんやと言うこともあってアイエフが目覚めたのは今朝。状況を知らずとも当たり前かもしれない。

コンパはふふつと笑いを零してから答えた。

「成功ですよ。無事にゲームキャラさんの力を貰えたらしいです」

「そう……。でも、これでまだ第一の通過点よねえ……」

遠い目をしてアイエフがそう言った。

それに頷くようにコンパも目を伏せてから口を開く。

「そうですね……」

「いつぞやもあつたわね、こんなこと」

まるで、遠い昔を懐かしむようにアイエフはしみじみと言葉を零した。その中にどんな感情が含まれていたのかは彼女のみぞ知るところではあつたのだが。

しかしそれはそうとして、アイエフには気になることがもう一つあった。

自分の目に届いていない時での状態。キラから聞いただけの情報で何らとして彼女自身がその光景を見ていたわけではないのだ。

「それより、あの娘のことについて教えてくれる？ 私が気を失っている間に何があつたの？」

今まで苦い表情を浮かべていたアイエフがスツと視線を横に流してコンパに向けた。

コンパはそれに対してきゅつと口を噤んでから吐息した。

それから重々しく口を開く。

「ギアちゃんの姿に異常があつたんです」

「異常……？」

その言葉にアイエフは眉を寄せる。

「はい……まるでドレスみたいでした。それこそ『ユニット』のよう……」

「ふうん。でも、あの子はしっかりと覚醒したんでしょ？ なら問

題はないじゃない」

アイエフの言葉にコンパはふるふると首を横に振る。

まるで思い出したいくないようなそんな過去を思い出すように。

「そうじゃないです。もっとこう……禍々しいというか、凄く怖かったんです」

「怖い……？」

コンパの言葉にアイエフは顎に手をやって考え込むような仕草を取る。

「『ユニット』とは違う力、っていうことね？」

「はい」

「気になるわね……」

言葉ではそう言うもののアイエフはもう頭を抱えるようにして深く嘆息する。

彼女としても、いやプラネテューヌ政府としてもまだ問題は山積みなようでそれこそ肩の荷が重くなるような気持ちではあるのだが。

「で？ 当の本人達はどうしてるわけ？」

「それが――」

☆ ☆ ☆

「……ハア」

ゲームキャラとの接触から二日後。

キラは嘆息しながらプラネタワ―の自動ドアの前に立って、それが開くことを確認してからふっと嘆息した。

ゲームキャラの力を得て、こうして無事にプラネテューヌに帰ってきたはよいモノの政府における入念なメディカルチェックを受けていた次第だった。そんな今日もチェックを終えて自宅への道を歩む途中であった。

ポリポリと後頭部を搔きながらクイと青く広がる空に視線を向ける。それを見ていると次第にキラの心の中に沸々とした思いが浮かび上がる。

「なんだかんだ言っ、結局ネプギアと会えてねえんだよなあ……」そんな言葉を彼方の青い大空に投げつける。

二日、二日も彼女の姿を見ていないのだ。

ここ数日、毎日と言うほどに彼女の姿を見ていたキラとしては起床したときに自宅に彼女の姿がないというのも既に非常にむず痒い感覚になっていた。

しかし、そんな淡い思いも届くはずもなく今日もいつもと変わらなはずの時間が流れていく――ハズだった。

だけど、ただ一つキラの中で違うモノがあるとすればそれは妙な気怠さというか奇妙な脱力感が身体の中を駆けめぐっていたことだ。

ここ数日はもう何をするでもない、政府からの呼び出しに応じてチェックを受けた後は早々に自宅に戻り一日中ベッドの上で天井を仰いでいた。それ程までに何をする気も起きない。こんなことは初めてだとキラは思う。

しかし、そう思っていなければとも思っていた。その程度のことでも思っていなければ思考することすらも止めてしまいうだったからだ。

嘆息して視線を伏せる。

と、そこで視線を空から地面に落とす途中に見覚えのあるモノを見た気がする。そう思っ、キラはクイと顔を前方に向けた。

そこには、圧倒的な存在感を放つ少女がいた。

キラが、今、最も存在を欲していた少女の姿が目の前に、在った。

「ネプギア……？」

「う、うん……」

顔を赤らめてネプギアはキラの問い掛けに首肯してから答えた。

純白のような素地の薄いワンピースを着て、ネプギアは恥ずかしそうに顔を赤らめた。

そんな彼女の表情を見ていると思い出す。あの時、互いに触れた唇の感触を。そんな女々しいことを考える自分が恥ずかしくなってスツと視線を外す。

ごくりと喉を鳴らして唾を飲み込んでからキラは口を開く。

「お、お前……出歩いてもいいのか？」

その問いにネプギアはまた小さく頷く。

「チェックも済んだから、少しくらいなら出かけてもいいって医者様が言ってくれて……」

「そ、そうか……」

何だか照れくさい、とキラは思う。

ネプギアの方も、視線が泳いでいてチラチラとキラの方を盗み見ることくらいしかできないようで気まずい空間が形成される。

しかし、そうは言えどここは通りのど真ん中。通行人達から見ればまだ初々しい成り立てのカップル、という感じに映っていたのだろう。ニヤニヤと面白いモノを見る目つきで遠巻きに二人を見ていた。それを面倒くさそうに一瞥してからキラはクシャクシャと頭を掻きむしってからネプギアの手を掴んでそそくさとその場を離れていく。

「キラ？」

「ここじゃ目立つ。移動するぞ」

「あ、うん……？」

しかし、ネプギアの方は吉良が何を言っているのか分からないと言った様子で首を傾げたままキラに連れられてその場を離れていった。数分ほど歩いたところにある広場の一角、そこにあるベンチにキラは腰掛けてからトントンと自分の横を叩いて座るように指示する。それに躊躇うことなくネプギアは腰を落とし、そしてぴったりとキラの真横に寄り添った。

「……」

色々と突っ込みたいところはあったのだが、どうも彼女を見ているとその言葉も出なくなってしまうようでキラは小さく吐息してから会話の糸口を探す。

「……あの後、結局はどうなった？」

「何が？」

「だから……身体に異常とかはなかったのか？」

キラの問い掛けを咀嚼するように暫く思考した後にネプギアは首肯する。それを見てキラはホッと安堵するが、寧ろ彼女の方は心配そうに眉をハの字してキラの顔を覗き込むような体勢になっていた。

「それを言うなら、キラの方が心配だよ」

「え……ッ」

キラがネプギアの方に顔を向ける。しかしこの位置からだとな風にそよぐワンピースの隙間からチラチラと彼女の胸元が覗けてしまうのでキラはすぐにまた視線を明後日の方向に泳がせた。

「怪我、今はもう治ってるけど……あの時は凄く酷かったし、ホントに大丈夫？」

そつと、撫でるような優しい指使いで彼女の指がキラの胸版を服越しに撫でる。その瞬間にキラの心を蹂躪する感情。切ないような、心苦しいような、それでいて軽くなるような感覚。

震えるような声でキラは答えた。

「大丈夫、だと思っ……」

実際、大怪我を負った後日。先程もあったような違和感と心の中に住み着いているモノの身体的に異常はどこにも見当たらない。

コンパどころか自分さえもそれに驚く始末だ。今までそんなことは体験したことがない。例えば、どんなに彼が今までどんなに『死にかけようとも』だ。

そうだと思えば、キラの身体に異常が見られた、とも言えなくもなかったのだが。

キラの言葉では、まだ安心しきれていないのかまだ不安げな表情でキラの顔を覗き込んでいる。

そんな彼女の頭に右手を添えてくしゃくしゃと撫でる。

「どこにも悪いところはないからさ。……俺のことより、お前は自分のことを心配しろよな」

「……」

「ゲームキャラはまだ他に3人もいるんだろ？　これで何もかも終わったワケじゃないんだぜ？」

キラの言葉にネプギアは首肯する。

けれど、どこか彼女の姿は悲しげであった。まるで名残を惜しむように。

最期の時を、少しでも心に留めておきたいと思うように――。

そうか、とキラは眉を寄せる。

終わりなのだ。彼女との生活も……。

プラネテューヌのゲームキャラの協力を無事に仰ぎ、そして目的はそれだけじゃない。各地方に存在する全てのゲームキャラの力を得て、そして女神を助けるという重要な任務がある。この、少女に。

きつと、ここ数日、会えなかったのはその準備のためだったのだろうか。そんなことを思いながら視線を伏せる。

そんな忙しい時間の合間を縫って、わざわざ会いに来てくれたのだろうか。そう思うとキラの心はほんのりと暖くなる。

そうか、この少女はこんなにも優しいんだと。改めて実感させられる。この程度の自分に、わざわざ時間を浪費してくれる。こんな優しい少女のことを――

『放っておけない』と。

「ネプギア」

「何？」

ネプギアはキラの呼びかけに、瞳を明るくさせて答える。

「頼みがあるんだ――」

☆ ☆ ☆

「ネプギアさんと共に、ですか？」

イストワールは訝しむように眉を寄せた。

それにキラは力強く首肯する。

暫くイストワールはその大きな双眸をぱちくりと開閉させてからお
ずおずと口を開いた。

「といいますと……」

「そのままの意味です。俺をネプギアの旅に同行させてください」

「……危険ですよ？」

「構いません」

イストワールが何と言おうとも、キラは意志を曲げるつもりはない
ように力強くそれに答える。

「命の保証はしかねます」

「はい」

「旅の先でどんなことがあっても、それでも構いませんね？」

「分かっています。その上で言っていますから」

イストワールは今度こそ、何を言っても無駄だと悟ったのか小さく
嘆息してから自分の机の横に配置されていた据え置き電話の受話器
を取ってダイヤルを押す。

数回のコールの後に一人の女性が応対に出る。どうやら受付の女性
のようだ。

「はい……はい。では管理部の方に、はい……よろしく願いま
す」

イストワールはそんなやりとりを電話越しにしてまた元の位置に戻
してからキラの方にもう一度視線を送る。

「キラさんには一応、手続きをしていただきます」

「何の、でしょうか？」

「政府職員のための手続きです。そちらの方が何かと便利でしょう
から」

「なるほど……」

キラはうんうんと相づちを打つ。

確かに一般の人間よりは他国の者とは言えど政府関係者なら待遇もよいだろう。イストワールなりの心遣いだろうとキラはペコリと頭を下げた。

「出発の方はお二人のタイミングにお任せします。ですが、あの調子ですと明日明後日にも発ってしまうのでは？」

「まあ……アイツのことですし有り得ますね」
ハハハとキラは力無く笑う。

既にネプギアの方は準備万端なようで今にも旅立ちが待ちきれない様子にも見えた。

やはり、彼が付いていくことを決めたからだろうか。イストワールは視線を送るがきつと彼は気付いていないんだろうなと思いきなりと半ば呆れ気味の微笑を送った。

しかし、それとは別にイストワールの心の中にある疑念が浮かぶ。今まで何かおかしいと思っていた。しかし、どうも確信が持てずに踏みとどまっていたがこの機を逃しては次にいつ聞けるかは分からない。意を決するように唇を締めてからイストワールはキラに呼びかけた。

「あの……」

「はい？」

ドアノブに手を掛けようとしていたところで背後から声を掛けられたことにキラは訝しむような視線を送る。

「一つ、聞いてもよろしいですか？」

「え？　まあ……構いませんが」

『そうですか……』とイストワールは呟いてからスツと息を吸った。それから視線を再びキラに向けて、まるで何かを覚悟するかのような力強い意志が瞳に灯った。

「貴方は……両親がいますか？」

「ッ——」

途端、さっきまでささやかな微笑が映っていた彼の表情から余裕がいっさい無くなっていた。見る間に彼の表情は険しく、いかにも邪

険にしたいオーラが漂い出ていた。

「……両親は物心付く前から居ませんでした。何か？」

「……そうですか。失礼なことを聞いて申し訳ありません」

「いえ、それでは」

キラはペコリと一礼してからゆっくりとその扉を閉める。

一人、取り残されたイストワールは椅子の背もたれに身を預けてふうと吐息した。まるで緊張の糸から解かれるように目を伏せてから。

「そうですか……。貴方には両親が居ないんですね……」

天井に走る機能的な模様を目で追いながら虚空に話しかけるようにイストワールは再びその小さな唇を上下に動かした。

「これも、私の『罪』でしょうか……？」

ただ、遠い昔に名を連ねた友人へと、その思いは届くことなく霧散した。

☆ ☆ ☆

「キラ」

「ん？」

突然、背後から呼び止められてキラはそちらの方向へと身体を捻る。そこには恐らく支給されたものであろう入院服を着込んだ小柄な、しかし確実にキラよりも年嵩であるアイエフがこちらに向けてその言葉を放っていた。

自分に何のようだろうか訝しみながらキラはアイエフの元に歩み寄る。その途中にキラは彼女が身体のアちこちに包帯を巻いているという痛々しい姿をしていることに気付いて第一声を上げる。

「大丈夫ですか？」

「ん……まあ満足に動けるって程でもないけど、普通に生活している分には問題はないってことくらいかしら？」

その言葉を聞いてキラはほっと胸をなで下ろす。

彼女を見たときは結構重傷のように見えたのだが、どうやらそれは杞憂に終わったらしく怪我は負ったものの命に別状はない様子でひとまずは安心と言ったところか。

「話は聞いたんだけど、行くそうね。ネプギアと一緒に」

『ああ、そのことか』とキラは頷く。恐らくネプギアからでも聞いたのだろう。

しかしどこことなく彼女の表情は憂いを帯びているようにもキラの目には映ったのだがそれは気のせいなのだろうかと眉根を寄せる。

「それでさ、……ちよつとお願いがあるのよ」

彼女にしては珍しい低姿勢の様子にキラは神妙な顔つきでアイエフを見る。

「……あの娘はね、小さい頃から一人も同然だったのよ」

一瞬、キラは彼女がいったい何を自分に教えようとしているのかが分からなかった。

けれど、間をおいて考えるとすぐに答えに行き着いた。

きっと、ネプギアのことだろうと。

「パープルハート様とイストワール様があの娘を連れてきて……最初は今のあの娘からは考えられないくらいに真っ暗な子だったわ。周りの人間が何を話しかけても対応もしないし、本当の無感情ってこんな状態なんだろうなって思えるくらいにね」

まさか彼女の過去にそんなことがあったなんて、とキラは肩を落とす。

「そんな折にあの娘のことを助けてくれたのがパープルハート様……あの娘の実姉なの。パープルハート様はね、あの娘を闇の中から救い出してくれたのよ。……でも、彼女の光は奪われた。私は心配したわ。もしかしたらあの娘はまた昔に逆戻りしちゃうんじゃないかってね。でも、そんな心配は無用だった。あの娘がそんな風にならずに済んだのはアンタのお陰だって思うから」

そんなアイエフの表情には、深い後悔の念が伺える。

自分は彼女のために何もしてあげられなかったと、どんなに努力しても彼女の力にはなれないと悟ってしまったかのようなそんな瞳だった。

「そんなことは、ないですよ」

言ってやりたかった。彼女の思いを。

「ネプギアは、いつも言っていました。アイエフさんが、コンパチやんがいるからきつと今のパープルハート様があるって。今のパープルハート様があるから今の自分があるんだって。だから、アイエフさんにもとても感謝してるって——毎日、言っていましたよ」

実際、彼女の話聞かされたときはどういうことかは分からなかった。というか、今も分からない。どうしてアイエフやコンパの存在でパープルハートが救われたのかとか、疑問に思うことも多岐にある。

しかし、そんなことはどうでもいい。ネプギアが言いたかったことをアイエフに伝えてそしてこの少女の気持ちが少しでも軽くなるのならどうだってよかった。

「あの娘……」

アイエフは涙を零して笑うようにそう言っていた。

潤んだ瞳がキラの姿を捉える。それから、ゆっくりと優しくにアイエフは口を開いた。

「護ってやって、あの娘のこと」

「……！」

キラの心が激しく揺さぶられた。

あの日、護れなかった思いが。己自身の心が。何もかもが吹き返すようなそんな感情が渦巻いた。

決意するように、きゅっと唇を紡ぐ。

「……護ります」

「そう、よかった」

キラの答えに心底安堵するようにアイエフは吐息した。

その笑顔は、あまりに安らかでまるで『慈母』のようだときラの瞳

には映った。

アイエフがスツと左手を突き出す。キラもそれにならうように己の手を差し出し、きゅっと握手を交わした。

これが、約束。

契約。

今言ったこと、それは堅き誓約の下に決定づけられた絶対的な使命。そう、自分は彼女を護るために拔擢されたのだと、キラはこの時にそう感じた。

☆ ☆ ☆

晴天。

旅立ちにはもってこいとも言える実に気分のよい天候だった。

ふっと天を仰げば、そこにはどこにも水を差すものはない。ただ、気の遠くなるような青だけが広がっていた。

そんな中に、佇む二人の少年と少女。

「んじゃ、行くか」

「うん♪」

眩しいほどの笑顔を浮かべて、ネプギアはキラの呼びかけに応じた。一瞬、一瞬だけキラの心の中に名残惜しさというものが浮かび上がる。

スツと身体を背後に捻ってプラネテューヌの街並みを一瞥する。己が小さな頃、『覚えている頃』からずっと住み慣れてきた故郷。そこを離れるというのはやはり寂しいものなんだなとキラは吐息しながらそんなことを思う。

——ここに居れば、もしかすればもう一度、出会えたかもしれない。

キラの思考に、そんな言葉が走る。

けれど、すぐにぷるぷると首を横に振ってそんな思いを吹き飛ばす。もう決めたこと、彼女と共に行く事なんて既に決定したことなのだ。だから、いつまでも引きずってなどいられない。

「行ってきます……」

キラは力無く、聞こえないくらいの音量でそう告げた……。

——こうして。

彼と、そして彼女の物語は始まった。

空前絶後の出会い、それは『誰にも予期することが出来なかった最悪の仮想』。

少年は何も知らない。己の過去も。

それは何を意味するのか、きっとそれは彼女たちのみが知ることだろう。

しかし、その彼女たちですらも気付けていない。

何故なら彼が、それを覚えていないからだ。

彼は何で、世界は何で、そこはどこなのか。

そんな疑問はうねりを上げて、やがては巨大な災厄をもたらす。今回のことなど比ではない。

その時、彼は重大な選択を迫られるであろう。

けれど、彼はまだ知らない。知らなくてもよいことなのだ——。

EPILOGUEーソノ日常、崩壊シセリ（後書き）

というわけでチャプター1終了！

EPILOGUEと見てドキッとしてくれた方、ありがとうございます！

まだまだ終わりませんよー！

〵〵〵

プラネテューヌを発ったキラとネプギア。

そんな二人を待ち受けるのはかつて『重厚なる黒の大地』と呼ばれたラストেশヨン――

次回、『ラストেশヨンの女神候補生』――乞うご期待！！

EP. 15 「TRAIN JACK!!」

そこは昔、黒の大地と呼ばれていた。

数年前までは産業先進国として、発展を成し遂げていた。

しかし、今となってはゲームギョウ界の東方を治める都市へと成り代わり、立地条件から各都市との貿易の中枢を担う中継点としても栄えていた。

そんな都市を守護するのはブラックハート。

しかし、そんな彼女もいまや『ギョウカイ墓場』にて深き眠りに落ちていた――。

＊

ラストেশヨン領、遙か西方。

に、差し掛かろうとする国境付近にて比較的小柄な人間、二人の影が確認できた。

腰までありそうな桃色の髪を風に吹かせて暗澹としたような感情をまるできつく映しているように半眼になって天を仰ぐ少女。

「うう……暑い……」

とびきり疲れ切った声でそう呻いた。

対するは少女と比べてもまだまだ余裕のありそうな表情でそんな彼女を横目に映していた。

やや青みの掛かった宵闇のような色をした髪の上にぴよこんと伸びた太めの頭髮がそよいで見る者の視線を集めていた。

「まあ、流石にこんな日差しの中で歩いてりゃそうもなるか……」
仕方のないといった風な表情をして肩掛けのバッグから水分の入ったペットボトルを少女に手渡した。

躊躇いなく少女はそれを受け取って早々にキャップを外しごくごく

と貪るようにそれを飲み下していた。

「――ぷはっ！」

先程とはまるで正反対の爽快極まるいい笑顔で少女、ネプギアはペットボトルから口を離して息を継いだ。

口元に残る水分を拭き取る姿までもがどこかなまめかしいような印象を与えつつも、生命線を得たことによってぴよこぴよこと跳ね回る姿はどこか幼さを残しているようにも思えた。

そんな彼女を微笑ましく見つめる少年、キラもまたバッグから水分を取りだしてグイと小さく傾けて喉に落とした。

二人がプラネテューヌを旅立ってから二日が経過していた。

本人達としてはどうにも急ぎたい事柄ではあったのだがラスティションを指摘すのには幾つかの理由があった。

一つは、交通の便がよいことだ。

比較的、立地が中心寄りのラスティションは貿易国としても非常に栄えているために各国への交通も通っている。

二つ目は、治安の問題だ。

ラスティションは他の二国、『ルウィー』や『リーンボックス』よりも治安維持に少なからず力が入られている。いくら二人が腕が立つとはいえ女神と一般人。早々、事件に巻き込まれることはお断りしたいと言うことでもあるらしい。

その他、諸々の理由がありとりあえずイストワールが白羽の矢を刺したのがラスティションと言うわけだ。

だからこそ、多少時間を要してでも行き着く価値があるというわけだ。

そんなことを頭の片隅で思い返しながら、キラはふと思い出したように小さく「あ」と声を上げてから右腰のポケットから掌サイズの

黒い端末を取り出した。

二人が旅立つ直前に、キラがイストワールから受け取っていた『Gギア』と呼ばれる小型万能携帯端末だ。話によるといっぱしの携帯の機能はもちろん、その回線は政府用の守秘回線が通っており、また電波の通りにくい山奥でも通じるという優れもの。オマケにただの携帯機能だけじゃなく、彼らが現在必要とする大陸に住まう人々の信仰力、つまり『シェア』の勢力の確認やというわけか娯楽用にゲーム機能まで付いているという半ばチートアイテムだった。

こんなものをいとも簡単に製造してしまうとはイストワールはいたい何者なんだろうかとキラは冷や汗が頬を伝うのを感じたが、もしかしたらこれは単なる汗なのかもしれないも思っていた。ややこしいな。

最新式のタッチパネルの画面を叩いて、メールの画面を開く。そこからアドレス帳を開きイストワールの番号を確認してメールを打つ。「つと、『ラストイション領に入ります。あと少し歩けばラグーンシティの方に着くと思います』……これでいいかな？」

ラストイションに着くときに連絡を入れて欲しいとイストワールに頼まれていたのを思い出してキラはメールの内容を確認してから送信ボタンを押してからふと思いついたように端末のマップのアプリを開く。

一瞬、読み込みのために動作が遅れて、それからゲームギョウ界を見下ろした形の画面が映る。いま現在、ゲームギョウ界で話題のマップアプリ『GAME EARTH』だ。そしてGPS機能で自分たちのいる場所が紅く点滅する。

ちょうどゲームギョウ界の東西を分断する高山を大きく迂回してやラストイション寄りの位置とでも言うべきか。

目的地が近いことに旅の順調さを実感しながらキラはアプリを閉じて端末をポケットにしまい込んだ。

と、そこで傍らにいたネプギアがクイクイとキラの服の裾を掴んで注意を引かせた。

「ん、どした？」

「あれ、なんだろう？」

ネプギアがそう言って遠巻きにうつすらと見える建物を指した。

一見すると廃工場、だろうか。簡単な作りの外観だが所々に煙突が立ち、そこから浅黒い煙が吐き出されている。そこからそれがまだ廃棄された工場でないことが確認できる。

流石、工業国は違うなあなどとキラは思いながら顎に手をやった。

「アレは工場だろ。ラステイションならそれくらいあってもおかしくないし」

「ふうん……」

ネプギアは腑に落ちなそうな表情をして、それでもなおその工場を見ていた。

どこか違和感でもあるのだろうかと思い、キラは声を掛ける。

「どした？」

「……格好いい」

「え？」

直後、彼女の瞳がキラキラと光っている——ような気がした。

両手を胸の前でウツトリとまるで酔いしれるように、口元をつり上げてまるで背景にキラキラと光った菱形の何かが浮かんでいるような感じ。

訝しむようにキラは眉を寄せてから冷や汗を流した。

「格好いいって、何が？」

一応、念のためにキラは問うてみる。

「工場だよ！　はあゝ……いいなあ、いいなあ」

「工場……好きなのか？」

「工場、ていうか物作りが好きなんだよね。だからその延長かなあ？」

と、ネプギアがそう言ってキラは感嘆の声を上げる。

まさか彼女にそんな趣味があったのかと感心する反面、どうも彼女らしからぬような雰囲気もあるなあと思ってしまうキラであったの

だがそんな彼を差し置いてネプギアは続ける。

「実はね、これも自分で作ったんだよね」

ネプギアはぱちりと自分の左頭部に装着していた十字型の髪留めを外して自分の前につき出す。

キラは驚いた表情を見せてそれを眺める。精巧に作られたそれほど見てもどこかの店で売られていてもおかしくないほどに端整な作りだった。

「凄いな……。困ったときはこれで荒稼ぎできるんじゃないか？」

「エヘヘ……言い過ぎだよ」

照れくさそうに頬を掻いてからネプギアは再び髪留めを元の位置に戻した。

「小さい頃にね、お姉ちゃんがこれと同じものを付けてるのを見て『いいな』と思ったから作ってみたんだよね」

そう言われてキラはハツとなる。

旅立つ直前に、アイエフに言われた言葉を思い出したからだ。

『パープルハート様とイストワール様があの娘を連れてきて……。最初は今のあの娘からは考えられないくらいに真っ暗な子だったわ。周りの人間が何を話しかけても対応もしないし、本当の無感情ってこんな状態なんだろうなって思えるくらいにね』

『そんな折にあの娘のことを助けてくれたのがパープルハート様……。あの娘の実姉なの。パープルハート様はね、あの娘を闇の中から救い出してくれたのよ』

彼女が初めて抱いた感情だとも言うのだろうか。

例え、何でもよかったのだ。それが彼女を救ってくれるものならば。しかし、それでも彼女との出会いは必然、因果の中で定められていた事項なのかは分からない。けれどキラも思っていた。

『彼女がパープルハートと出会えて本当によかった』と……。

『彼女との出会いがあるから、いまのネプギアの姿があるのだ』と

……。

そんな会話を交わしてから数時間の後。

二人はラステイションの西方の街『ラグーンシティ』へと遂に辿り着くことが出来た。

プラネテューヌの近未来的な建造物の街並みとは違い、どこか無骨なイメージを強調させるような建物が多いのはやはり工場などそういった類の物が多いからだろうか。

しかし、それは町の中心部の話でやや南方の方に下っていった見れば海に面した港や海岸がキラキラと日光を目映く反射していた。

街の入り口は北方、結構な高台の上にありそんな街並みを一望できる形となっていて、そこから覗き込むようにネプギアは額に手を当てて感嘆の声を漏らしていた。

「すごい！ 私、海って初めて見るよ！」

「そうなのか？」

意外そうにキラはふっとネプギアに横目を流した。

キラの問いにこくこくと頭を傾かせてからややトーンを抑えて悲しそうな声音で言葉を紡いだ。

「小さい頃から教会の中でしか生活しなかったし……」

「そう、なのか……」

聞いてはいけないことを聞いてしまったかなあとキラは自分の浅はかさを呪った。ポリポリと頬を掻きながら視線を明後日の方向へと飛ばし、暫く思考を廻らせてから状況を打破すべく言葉を続けた。

「まあ、しゃーないよな」

「だよね。凄い良作だったし」

「……何が？」

おおよそ今の会話の流れから出てこなさそうな言葉がネプギアの口から発せられたことにキラは眉を寄せて彼女の方に顔を向ける。

「キラは知らない？ 数年前からやってるMMORPGの『四女神オンライン』ってヤツ」

「知ってるけど……」

聞いたことはあった。

テレビなんかを見ているとCMとかでよくちよく流れていることだけはよく知っている。けれどやったことはないし、何故これが会話に上がるのかも分からなかった。

「アレは凄く面白いんだよねー。だから外に出るのも億劫になっちゃって」

「……」

後頭部を掻いてアハハと苦笑いを浮かべるネプギアの横でキラは絶句した。

この娘、さては女神の仕事をほっぽかしてゲームで遊んでいやがったんだな、と。

しかしながら流石にそんなことを言うのは失礼に当たるかなと思ったので口の中に押しとどめる。

「よくお姉ちゃんと一緒に狩りにも行ってたし」

「姉妹揃って何やつとるんじゃああああああッ！！」

今度ばかりは突っ込まずにいらなかったので大声を張り上げた。そのため周囲にいた人々の奇妙な視線を向けられたのでキラはとりあえず気を落ち着かせるべく咳払いを一つしてネプギアに向き直る。

「それでお前は数年間外出しなかったのか？」

「まー、大半の理由はそうだね」

キラは半眼を作ってネプギアを見た。

と、そこで二人の前に立っていた一組の男女が前に進んだ。慌ててキラはネプギアの背を押して前に進む。

「次、両手を上げろ」

検問だった。

やはり、これは犯罪組織対策と言うべきか数人掛かりが二人の身体

を丹念に調べている。

そして、そこでキラは思い出したように短く声を上げた。

「どうした？」

それに気付いた検問の男性の一人がキラに声を掛ける。

「ちょっといいスか？」

「……分かった」

キラは男性の許可を得て両手を降ろしてからGギアを突っ込んでいるポケットとは別のポケットに手を突っ込んでその中にあるものを取り出す。

それは手帳だった。革製の外装をした黒い手帳。

Gギアと共に手渡されたものでキラはそれを開いて検問の男性の前につき出した。

「プラネテューヌの政府から使わされた者です。ラステーションの教会の方に連絡をお願いしますか？」

「……！」

男性は驚いたような表情をした後、背後にいた一人の女性に何事かを指示してから二人を列から外して待機するように言った。

それから数分、先程男性に指示を出されたいらしい女性が小走りの二人の元に駆け寄ってくる。

「えっと、ネプギア様にキラ様ですね？」

「はい」

「確認したところ、今日の午後に教会の方へ向かわれるのなら時間の方は大丈夫だそうです……」

キラはキラとネプギアに視線を送る。

ネプギアは無言の頷きで返す。

「分かりました。中央の方への電車はいつ頃になるでしょうか？」

「ええと……今日の13時半になっております」

「てことは……約三時間後か」

キラは腕時計に目を落としてからそう零した。

やはり正午を挟むとなると昼食も必要だろうか。そんなことを思い

ながらその女性に礼を言ってから二人はその場を抜けて街の方へと踏み出していく。

☆ ☆ ☆

それから昼食やウィンドーショッピング等を済まし、二人は急ぎ足で駅へと向かっていた。

ラグーンシティのちょうど中央にある駅、そこには浅黒色の電車が6つほど連結して停止していた。

「急げ！ アレ乗り過ぎしたら一日ここで無駄にすることになる！」
「わ、分かってる！」

とは言うものの、既にこの街で1時間ほど歩き回っていたために彼女の表情にはうつすらと疲労の色が見える。

無理からぬ事かもしれない。ただでさえ、ここ二日はプラネテューヌを発ってほぼ一日中歩いていたも同然、休んだと言っても精々日が落ちてから数時間とここで過ごした三時間程度だ。到底、少女の体力を回復させるに足りる時間ではなかった。

キラは一度、速度を落としてネプギアと並ぶようにする。それからグイと彼女の腕と腰を掴んで力を込めて引き上げた。

「きゃー！？」

一瞬、ネプギアの身体が浮いてそれからストンとキラの両手の上に収まった。要するにお姫様抱っこの状態だ。

政府からの連絡を受けていたこともあり、改札員はすんなり二人を通してくれたが流石にその姿には驚愕の色を隠せないで居たが、キラはそれを気にも留めずに一気に階段を駆け下りて閉まり掛ける電車の扉に自分の身体を押し込んだ。

「ふう……」

ほっと安堵の息を漏らす。

気持ちが悪く落ちていたと言うところでキラははたと、何か自分の周りに漂う違和感のようなものに気付いた。

妙に周囲の人々の視線が自分たちに集まっているのだ。

怪訝な顔つきで周囲に目を向けるが、その人々の表情はうつすらと笑みを含んでおり、どこか微笑ましいようなものを見る顔つきになっていた。

「き、きらあ……」

と、そこで彼の腕の中からネプギアがどこか困ったような声を掛けてきた。

「ん、どした？」

キラが視線を向けるとそこには顔を朱に染めたネプギアが服の裾に手を当てながらもじもじと腕の中でうごめいていた。

「その……ぱんつ見えちゃう……」

「へ？」

キラと彼女の服の裾の方を見やるとネプギアの右手から鋭いパンチが繰り出されて、キラの頬を抉った。

「見ちゃダメっ！」

「ごはっ！」

彼女をそっと降ろしてキラは地面に膝を突いて殴られた頬を押さえる。

思えば、彼女のスカートは短いので無理からぬ事だったのだ。

気の回らぬ自分の馬鹿さ加減をひしひしと身に受けながらキラはのっそりと立ち上がる。

「まー、なんだ。悪かった……」

「あ、うん……。殴ってゴメンね」

「……おう」

キラはやりにくそうに後頭部を掻いてから視線を明後日の方向に向けた。

それと同時に周囲からの視線がさらに集まっていることに気が付き、どうにも居心地の悪さを感じたキラは彼女の手を引いて遙か後方、

電車の最後尾である6号車へと向かっていくのだった。

最後尾に辿り着いたキラがどかっと乱暴に自らの身を椅子の上に投げた。

ちょうど向かい合わせ式の作りとなっており、個々の空間を作り出すには最適の作りとも呼べるのでキラはほっと吐息した。

そこから遅れるようにネプギアもキラと向かい合わせになるように座る。

暫く窓の外などを眺めていたネプギアがふと口を開いた。

「あとどれくらいで着くのかな？」

「んー、まあ予定で行けばあと2時間くらいか？」

直線で進めばもっと早いのだろうが、途中にはモンスターが大量にわき出す地点もあるため、線路はそこを迂回して作られている。安全のことを考えれば仕方のないことかもしれない。

ともかくは暫くゆったりとした旅を楽しめるかとキラはふっと目を閉じてそんなことを思った。

暫くそんな時間が過ぎたところで沈黙に耐えかねたらしいネプギアが短く声を上げてからキラに声を掛ける。

「ところでさ、キラって剣術凄いいよね。どこかで習ってたの？」

首を傾げてそう尋ねるネプギアを一瞥してからキラは窓際に突いていた腕を戻してから背もたれに身を預けて答えた。

「別に、独学だけど？」

「え、独学!？」

衝撃を隠しきれないようにネプギアが口元を押さえてそう声を漏らす。

ネプギアの反応を余所にキラはこくりと静かに頷いた。

「んー、でも何ヶ月か簡単に教わったことはあるかな」

「あ、そ、そうだよね」

「その人も無流派でさ、型が滅茶苦茶なわけ。だからものにするま

でに時間食っちゃってさ」

キラは参ったように言葉を漏らすもののその表情はどこか嬉しそうなものだった。

「その上、結局その話は有耶無耶になったまま無くなっちゃったんだ。だから大体は独学って言ってもあながち間違ってるわけでもないしな」

「へええ」

「ネプギアも結構強いけど、そっちはどうなんだ？」

ネプギアはうーんと唸ってから、曖昧に頷いて答える。

「私は……半分はお姉ちゃんに教えて貰ってたかな」

「ってことは女神様直々だな。やっぱりスゲェな」

キラが感心した風に声を漏らす。ネプギアは顎に手をやってから複雑そうな表情を浮かべて続ける。

「でも、私とお姉ちゃんじゃ扱う武器も違うから最低限のことしか教えて貰ってないんだよね」

「ああ、そっか。やっぱり武器によって使い方も異なってくるからな」

なんて言葉を交わしていた、瞬間。

前方に立て付けられているドアが荒々しく開け放たれる。

その音に驚いてか、やはり周りの乗客達も身を出してそちらの方を向いていた。

「なんだ……？」

キラは小声でそう呟いた。

そこには体格のよい男性二人、片方は坊主頭でもう片方は肩を撫でるくらいに髪を伸ばした見るからにガラの悪い二人組だった。

いや、単にガラの悪い乗客であればどんなによかったか。

おもむろに、前を歩いていた坊主頭の男が小型のアサルトライフルの銃口を天井に向けて数発発射した。

これは恐らく威嚇だろう。キラは眉をひそめて二人を睨む。

間違いない——ジャックだ。

「いいかテメエ等、今からはいっさい騒ぐんじゃねえ。少しでも喚き散らすヤツが居るなら即行で撃ち殺すからな」

そんな男の言葉で騒然となりかけた車内も水を打ったようにシーンと静まりかえる。

その様を見て後ろの男が納得したようにうんうんと二、三度頷いてから口を開いた。

「いいか、まずお前らが持っている武装と金目の物を渡せ。妙な動きしたら殺す」

鋭い目つきをさらに鋭くさせて男は言った。

キラは少しばかり身を乗りだして二人を見る。

キラとネプギアが座っている位置は前から左四番目。その二人は左右交互に乗客の元を回っている。

現在、二人が相手にしているのは前から左二番目の子連れの家族を相手にしている。ということは二人の元を訪れるのはあと三組が済んでからと言うことか。

キラはネプギアに視線を向けて無言で言葉を交わす。

『ネプギア、できるだけそっちに寄れ』

『うん』

できるだけ音を立てないようにして、キラはネプギアが座っていた位置の方へと移動する。ここならばちょうどあの二人からは死角になって見えないようになっていく。

たった一瞬でいい。あの二人の隙を作り出せるのなら。

右三番目の組が終わる。

先に坊主頭の男がゆっくりと歩み寄る。

「おい、次はお前らの――」

「だあっ!!」

キラは椅子の影から男の顎に膝打ちを入れる。

バキッと嫌な音が鳴って男の身体が宙を浮く。恐らく歯でも折れたのだろうか。

その状況に、一瞬唖然としていたもう一人の男が慌ててアサルトラ

イフルをキラに向ける。

続いてネプギアが椅子の影から飛び出してキラの脇をすり抜け、男の首筋にハイキックを叩き込む。しっかりとサービスショットも入っていたが不思議な光に邪魔されてそれを覗くことは不可能であったが。

通路の真ん中に倒れ込む男。それを見下ろすキラの背後に倒れていた坊主頭の男がナイフを構えてキラに斬りかかろうとしたところで、何者かの肘鉄が脳天に叩き込まれた。

男が白目を剥いて倒れた後にキラは呆然とそこに佇む女性を見た。

「間一髪、ってところだね」

軽い口調で、女性はふうと吐息してから人の良さそうな笑みをニツコリと浮かべた。

キラが訝しむような視線を送っていることに気付いたのか、敵意のないことをアピールしたいのかヒラヒラと両手を肩の位置で揺らして言葉を紡いだ。

「まあ、そう警戒しないで——っていうのも難しいよね。アタシは『ファルコム』っていうしがない冒険家だよ」

見た感じ、悪い雰囲気はない。

とりあえず信用しても良さそうだとキラはこほんと咳払いをしてから口を開いた。

「キラと言います。疑って申し訳ありません」

「いやいや、まあしょうがないよね。で、そっちのお嬢さんは？」

ファルコムはチラとネプギアの方に視線を向けた。

「私はネプギアと言います。えっと、一応キラのお供です」

「逆ね。俺がお前のお供だから」

まあそんなことはどうでもよく、とりあえず実行すべきはこの二人の処理だ。

車掌にでもお願いするかとキラは吐息してから前の車両に移動しようとしたところでファルコムがキラの肩を掴んだ。

きょんとした表情を向けるキラに対してファルコムはどこか真剣

な表情をして答えた。

「安易に動かない方がいいよ」

「でも、車掌さんにでも頼めば次の駅でどうにかできますよ?」

「……犯人がコイツらだけとは限らないからね」

ファルコムの一言でキラはハツとなる。

確かに彼女の言うとおり、ジャックの犯人がこの二人だけとは考えにくい。いや、寧ろこんな少人数という方が不自然だ。

何といっても、この電車は六つの車両がある。この二人だけでどうにかできるような事態じゃない。やはり他にも数名の協力者が居るという可能性の方が高いだろう。

「次の駅まで約一時間半……他の連中がこの二人に連絡が付かないことに気付くはず。だとすればこれも危ないし……」

「おお、このシチュエーション『ハズレン』で見たことあります!」
ネプギアが驚いたような、嬉しそうな声音で答えた。

ちなみに『ハズレン』というのは『外れの錬金術師』の略で、ゲームギョウ界の端っこにある小さな村に住む少女・ガストがゲームギョウ界中をその持ち前の錬金術で救ったり救わなかったりするような最近ブームのマンガだったりそうでなかったりするヤツだ。現在十三巻まで発売中。(大嘘)

そんな彼女のキラッキラした瞳を横目にキラは苦笑いを浮かべてから声を掛けた。

「いやいや……これマンガとかと比にならないくらいヤバイ状況だから」

「電車の屋根の上を伝って運転車両まで行くんですよね?」

「落ちる!」

ゲームギョウ界を走る電車は時速100kmを越えるので窓を開けたら大惨事になる。

ちなみに言うならネプギアの発言も『ハズレン』のシチュエーションの中の一つなのだが、実際は汽車だったのでそこまでスピードはなかった。

「まー、とりあえず何とかしたい状況ではあるんだけどねー……」
ファルコムは腰に手を当てて苦い表情でそう零した。

「どうします？」

「とりあえず一車両ずつ安全を確保していくのが妥当かな。それもあまり時間を掛けずに」

キラはファルコムの提案に首肯する。

幸い、この車両は最後尾だから背後からの襲撃はないし、運転車両まで進んでいけば何とかなるはずである。

しかし、やはり問題もあると言えはある。

「ですが、乗客はどうします？ 彼らがいる以上は人質も同然でしょうから」

「そう何度も奇襲が成功するワケでもないしね……」
ファルコムは肩をすくめて苦い表情で答える。

できるならば乗客への被害はないようにしたいが、やはり相手の人数の関係もある。掃討に困難なことではあるだろう。

けれど、ネプギアは意を決したように口を開く。

「でも、このまま中央まで無事な保証ありません。進む価値はあると思います！」

ファルコムが、ネプギアの言葉に驚いた風な表情を作った。

「私は、もう後悔したくないんです。進めるのなら進みたいんです！」

暫く考え込むような仕草を取った後にファルコムは口の端をニツとつり上げて威勢のよい笑顔になった。

「いいね。私もそんな考えは嫌いじゃないよ」

ファルコムは両手を拳にしてぶつけ合う。どうやら意思表示らしく、やる気満々のようだった。

グイッと二人の肩を抱いてファルコムは声高らかに叫んだ。

「では、今から私達はこの電車にいるジャック共を掃討するよー!!」

「ちょ、声でかいです！ もう少し静かにー!!」

いくら防音してあるとは言え精々一般のもの。完璧に音を遮断して

いるとは考えにくいし、倒れている二人が通信機を持っている可能性も否めないのでキラが慌ててファルコムに注意を促す。
出鼻を挫かれたようでファルコムがブツブツと不服そうにしていたが、ともかくとして三人はキラを先頭に前方車両の乗客の救出及び敵の殲滅へと向かうのであった――。

＊

『どう？』

『中に……三人ほど確認できます』

キラは車両に取り付けられているドアのガラスから出来るだけ見えないように中の様子を伺っていた。

ざっと見回してキラ達のいるドアの少し先に二人。向こう側のドアの近くに一人、と言った具合だ。

手前の方はともかく、前方の方の男までは結構な距離がある。手前の男達は二人に任せるにしても果たしてその奥に辿り着くまでに間が持つだろうか。

そんな事を考えながら、少しでも状況が有利にならないかとキラは暫くその様子を伺い続ける。

刹那、動いた。

前方部にいた男性が、何か指示を出そうとしたのだろう。後方部の二人の男性に近付き何やら耳打ちをしている。

好機、とキラは瞳を光らせた。

一思いに扉を開け放ち、床を蹴って一気に距離を縮める。数秒置いてから三人の男性は驚愕に表情を染めて銃口をキラの方に向ける。姿勢を低くして下から右足で蹴り上げる。見事、一番手前の男性の顎部にヒット、屈強な身体が宙を舞う。しかし油断無くキラは次にその右手にいる男性の鳩尾に掌底を叩き込む。

「がはっ……！」

苦痛に表情を歪める男性の顔面に更に拳を入れる。感触からして鼻

が折れただろう。

しかし、そこでキラは大幅にタイムロスを生じさせていた。

「死ねッ！」

一人残った男性が引き金を引く。

キラの脳天にヒットする、ように見えただかと思うとファルコムがキラを抱えて転がり最悪の状況は間一髪で免れた。

幸いにも弾丸の軌道に乗客の姿はなかった。ファルコムはすぐさま身体を男性の方に向けてその頭を抱え込むように両手を回して固定、膝打ちを入れる。

キラは通路に腰を突いたままその手際を呆然と見ていた。

直後に、ネプギアが小走りでキラの元に歩み寄る。

「大丈夫？ 怪我とかない？」

「あ、ああ……」

そう答えるも、キラの視線は目の前のファルコムに注がれていた。

彼女は、見るも不機嫌なような表情で鋭い視線をキラに送っていた。どこか背筋が凍るようなそんな思いを感じつつ、キラは何を発せずにいた。

「危ないでしょ！ 勝手な行動は！」

「は、はい！」

突如、ファルコムがそんな怒声を浴びせてきたことに対してキラはピンと背筋を張って返事をした。

「もう少ししたら死んでたんだよ！ 私達は一応こうやってパーティを組んでるワケなんだからせめて作戦くらいは言い渡してから先行して！ 分かった！？」

「分かりました！」

言い終わった後にファルコムはニツと口元をつり上げてイイ笑顔を作った。

「分かればよろしい」

そう言った直後に周囲から称賛の声が浴びせられる。

が、すぐに三人がしーっと口元に人差し指を当てて静かにするよう

に指示する。乗客達もそれを意図するところが分かったのか波を打ったように沈黙する。

――が既に遅かった。

「……いよう、随分な事してくれたじゃねえか」

その声に三人は前方に視線を向ける。

そこには、黒髪をオールバックにした男性が不敵な笑みをつくって立っていた。

「アンタは……？」

「俺はコイツらのリーダーってところだ。よくも仲間をそんな目に遭わせてくれたな」

「……」

キラは無言で立ち上がる。それからキツと視線を鋭くしてその男を睨んだ。

「乗客をそんな目に遭わせた人が、よくそんなことを言えますね」

「フン……別に俺達もお前らみてえなのがいなけりや危害を加えるつもりもねえんだよ」

「……その様子だと、貴方達は犯罪組織の一員ですね？」

キラは鋭い視線のまま男性の問う。

男性は驚いたような表情になってからニヤツと笑いを浮かべて陽気な声で問い返す。

「よく分かったな？」

「こんな馬鹿げた事するのは犯罪組織くらいですからね」

「ほう……まだ状況が分かってねえみたいだな」

男性は傍らに座っていた少女に側頭部に銃口をあてがった。

キラがグツと両足に力を入れたときに男性は下卑た声で告げた。

「動くなよ？ お前が俺に飛びかかるよりも俺が撃つ方が早い」

「……汚ねえな」

キラは小さく舌打ちしてまた男性を睨む。

ネプギアが一步前に出てから不安そうな表情をして口を開いた。

「その娘は関係ないです。だから巻き込まないであげてください」

「目的の前に犠牲はやむなしだ。乗客共を無傷で俺達を制圧できるとでも思ってたのか？」

ファルコムは苦い表情をして額を押さえた。

「まさか……アンタ」

「へっ、そう怖い顔するな。心配しなくとも前の乗客は無事だぜ？」

一部を除いてな」

「どういう意味だ？」

「我ら犯罪組織を受け入れるのなら生かしてやった。拒絶するのなら排除した。それだけのことさ」

「ッ——！」

キラはきゅっと拳を握った。

ダン、と床に右足を落として人間の力では到底不可能な現象、その床がまるでごっそりとえぐり取られたように5cmほど陥没していたのである。

男性はその様子にたじろぐがそれを気にも留めずにキラは大声を張り上げる。

「それだけなのに殺したのか！？」

「な——！」

「人の思考は自由だ！ それを思い通りにならないからってその命を奪っていいと思ってるのか！？」

キラは表情を険しくさせて怒鳴る。

しかし、男性は表情を変えないまま少し上ずった声で反論する。

「う、ウルセエ！ テメエも同じだろうが！」

「一緒にするな！」

「いや、一緒だ！ お前も結局俺達犯罪組織に組する者の思考を思い通りにしたいと思ってるんだろ？ その信仰を犯罪神様から女神に戻そうとな！」

「それは……」

「テメエが言ってるのはただの偽善だ！ 全部矛盾してんだよ！」

「いいじゃないか！ 矛盾でも、偽善でもっ！！」

直後、ファルコムが怒号がその空間を凌駕した。

「ルールってのはみんながよりよく生活していくために設けられた規約だよ！ それを犯して自分たちだけ楽しようなんてそんなのは卑怯だ！ それを外側から強制的にねじ曲げようってのはただの我が儘だ！ そうしなければ本当に世界は壊れていってしまうんだよ！！」

男性はグツと言葉を詰まらせて一歩後ろに下がった。

「アンタらだけが悪いとは言わない！ けど、それでも犯罪組織の言いなりになったヤツは『自分』に負けたんだ！ それほど恥ずかしいことはないよ！ 自分に負けることが悪いこととは言わない、けどそれでルールを破ろうってんならそれは立派に悪いことだよ！ それこそが一番恥ずかしいことだよ！」

キラは激しく心が揺さぶられる思いだった。

彼女の言葉が、いやそれよりも——彼女の信念にだ。

例え、どんなことでも悪事を見捨てることは出来ない。それがどんな手段を用いても必ずそれを変えてみせる。

キラの心に生まれたのは、それは——『懐かしさ』でもあった。

「だ、黙れ！」

男は、言い返す言葉も見つからなかったのか銃の引き金に指を伸ばす。

瞬間、ファルコムは時計のポケットから小石のようなものを投擲、それは見事男性の銃を持っている方の手にヒットして銃が地面を滑る。

ファルコムが距離を詰めて蹴りを入れて男性は昏倒した。

「ふう……一丁上がりっ」と

☆☆☆

その後、三人の働きによりジャック達は全員が拘束された。

死亡者は十数名。どれも先の男性が言っていたように犯罪組織に反抗した人々だった。

しかし負傷者は幸いにも出なかった。

ラストイシヨンの中央ターミナルにてキラ、ネプギア、ファルコムは微妙な心持ちで集まっていた。

「結局、全員は助けられなかったですね……」

キラの表情には溢れんばかりに後悔が浮かんでいた。

そして、それと同時にどこか自責の念が見え隠れしているようにも思えた。

「俺、何となく気付いていたんです。犯罪組織の連中をどうにかして元の道に戻したいって思うのは、俺の意志を無理矢理押しつけているだけなんじゃないかって……」

ネプギアはやりにくそうに視線を外して俯いてしまう。

「信仰は自由だなんて言っただけ、やっぱり犯罪神を信仰するのだから自由だってことに気付いて……自分でも矛盾してるなって思っただけです。でも、女神様の話を聞いたなら尚更犯罪神を信仰するのは間違ってるんじゃないかなんて思えてきて……」

ファルコムは肩をすくめて吐息する。

それからどこか達観したような表情で口を開く。

「確かにそうかもね……。女神様達を信仰する人達がそれを当たり前に思うように、犯罪神を信仰する人達もそれが普通だっと思っっちゃうって事だろうしね」

「難しいですよ……人の心って」

「そうだね。でも、私達だって人間だからこそそれを変える術だってきつと持っているはずだよ。犯罪神が完全に復活してしまえば、

いずれ世界が崩壊してしまうんだからね」

ファルコムという言葉に二人は目を剥く。

それから焦ったような口調でキラはファルコムに問う。

「犯罪神が復活したら……世界が壊れるんですか？」

「風の噂に聞いた話だけどね。ただ信憑性は高いと思うよ？」

「私もそう思います」

ネプギアが鋭い表情でそう言った。

「お姉ちゃんが言ってました。犯罪神の望みはゲームギョウ界の破壊だって」

「ふうん……ネプギアちゃんのお姉さんが何者かを問う気はないけど、だいぶ犯罪神と関わりの深い人なんだね」

ネプギアは無言で小さく頷いた。

「詮索はしないよ。ただ、二人ともまだ若いからね。あんな事の後でこう言うのも何だけど、あまり危ないことに首を突っ込まない方がいいよ」

諭すようにファルコムは二人の頭に手を乗せてそう言った。

けれど、キラの瞳の中には先程よりも強い灯火が宿っていたようにも思える。

「いいんです。俺は、必ず女神様を助けるんです」

「ハハッ、大きく出たね。頑張ってるね」

恐らく本気にはしていないんだろうな……などとキラは思いながらファルコムと握手を交わす。

手を振って去っていく彼女の背中を見送りながらネプギアがふと口を開いた。

「ずっと違和感があったんだよね」

「何が？」

「ファルコムさんのこと……誰かに似てるって思ってたんだけど、お姉ちゃんに似てたんだ」

キラは一度、少し見にくくなってきたファルコムの背中を見ながら小さく頷いた。

「そうなのか……」

「うん」

確かに、どこか姉貴分のようなところはあるかもしれない。けれど、この時キラもまた思っていた。

——そっくりだ、と。

EP. 15 「TRAIN JACK!!」 (後書き)

何故かここでファルコムさんが登場しました！

：なんか彼女のイメージは迷惑を掛けない○○○○さんって感じがします、MEーGA的に

EP. 16 [NEGOTIATION AND ENCOUNTER]

あちらこちらにこれ見よがしに立てられている煙突の数々。

バラボラ型の恐らく太陽光発電のパネルと思しきものが幾つも間隔を開けて立てられている。

流石は工業大国、とでも言うべきか。

ラグーンシティの街並みとは比にもならないほどに工場やら何やらが建築されているラステーションの中央部はどこかゴテゴテしい印象も与えられた。

故に、あまり女の子が食いつきそうなイメージではないのだが少年、キラの傍らにいる少女、ネプギアは瞳を爛々と輝かせてその景色を見回していた。

「嗚呼……夢の街ラステーション……！ 今なら私幸福で死ねる！」

「死ぬな」

他の大陸の女神（候補生）が他の大陸に憧れるのはどうかと思うのだがキラは突っ込んだら負けな気がしたので敢えてそれに関してはコメントは控えた。

さて、まあラステーションの中央に到着したはよいがぶっちゃけたところ、この2人にも何をしたらいいのかはよく分からなかった。

どうしたものか、と後頭部を掻きながらキラが嘆息してスツと周囲を見回す。

その途中で、キラはピタリと視線を一点に射止めた。

視界の端でネプギアがきゃあきゃあ機械仕掛けの街並みに歓喜していたが、その事ではない。ただ一点、どうも不可解な空間——いや不可解な群衆が我が物顔で大きめの通りを横断してきていたのだ。

「……？」

眉を寄せてキラはその一団を凝視した。

それは、真っ黒なスーツとサングラスを身に纏い機能的な外見にセ

ツティングされた、言うなればS Pのような、どこか無機質な印象を周囲に撒き散らしている女性達の集団だった。

そういえば以前に見たことがある、とキラは口元に手を当ててそれを見る。どこだったかと記憶を探っている間にもズンズンと彼女たちの集団はキラ達に向けて距離を縮めてきていた。

通行の邪魔かとキラがスツとネプギアを促して道の端に寄るが、まるでその女性達は二人を追いかけるようにその軌道を変更してきた。

「キラ、あの人達何かな？」

「……分かん」

ネプギアは不思議そうな表情を向けてそう問うてきたが、頬に冷や汗を垂らしてキラは有耶無耶にそう答えた。

そんなやりとりをしている間に二人と彼女らの距離は4、5 m程になっていた。

ふと、キラはその妙な靄が晴れたような――キラの脳味噌に幾つもの弦が張り巡らされていたとしよう。だとすればその弦がいきなり弾かれたような感覚に陥った。

見覚えがあったのはほんの数日前。

プラネテューヌでネプギアと共に初クエストに発った日の午後にはプラネテューヌの教会にいた教会お抱えのS pの女性達と外見があまりに酷似していた。

――だとすれば、教会関連だろうか。

しかし、キラはそれは無いかと首を振る。何故なら、いまこの状況の中でネプギアや自分の正体を知っている者は誰もいないはずなのである。

それもそのはず、ネプギアはこの姿ならどこにでもいる至って普通の少女だ。これだけで女神だと判別できるはずもない。

だとすれば、何だろうか。そんなことを思いながら女性達を一睨みする。

ピタリと女性達がちょうど二人の1 m程手前で立ち止まった。

正面に立っている女性がやや後方にいるもう一人の女性と何やらボ

ソボソと会話をしている。

それからスツとその一団が割け、その中心にいた『少女』が颯爽とその集団から抜け出て二人の前に立つ。

それからフツと柔らかな笑みを浮かべて右手をスツと差し出した。

「やあ……初めまして、だろーうね」

恐らく少女だろう。

黒い燕尾服のような、それでいてスーツのようなどっちともつかない衣装に短パンを拵えて、切りそろえられたショートカットがどうにも少年ぽさを醸し出していた。

そんな少女が、呆然とするキラとネプギアを差し置いて淡々と話を続ける。

「自己紹介がまだだったね。僕はこのラスティションの教祖をやっている『神宮寺ケイ』だ」

ハツとなってキラは姿勢を整えてから口を開く。

「えっと、俺はキラと言います。実は――」

「大体のことは分かっているよ。長話はくつろぎながらもしょうか？」

ケイはフツと小さく微笑むと周囲の女性達に何かを指示した後に颯爽と踵を帰して、恐らく教会に向かうのだろう。灰色の建造物を背景にスタスタと先行していつてしまう。

どうにも腑に落ちない感じになっていたキラが嘆息してネプギアに声を掛ける。

「……どう思う？」

「……悪い人じゃないとは思うんだけど」

ネプギアは苦笑して、キラの言葉にそう返す。

直後、ザツと二人の周りを先程のSPの女性達が囲う。

何事だとキラとネプギアが揃って眉をしかめるといきなりその女性達が御神輿よろしく二人の身体を担ぎ上げた。

もちろん、街中でそんなことをしているわけで二人は注目の的であったが。

「な——ッ!?!」

「ちょ、ちょ——!」

ロクに状況を分析できることもなく二人はSP達の手によって強制的に連行されていくことになるのである。

「ま、前にもあったぞこんなこと————ッ!?!」

キラの言葉はラスティションの空に霧散していくわけではあったが。

☆ ☆ ☆

「お楽しみ頂けたかな？」

「ええ、まったく……」

キラは肩で息をしながら皮肉めいた口調で、涼しい顔をして椅子に腰掛けているケイにそう言い放った。

そんな様子をクスクスと面白いものを見るように（実際のところ第三者であれば結構面白い状況ではあると思うのだが）ケイは小さく笑みを零してからニヤリと笑った。

「まあ、プラネテューヌの女神候補生とその従者のお出迎えとしては少々こぢんまりとしてしまっただけだと思っただけだね」

「……私の正体のことはご存知なんですか？」

ネプギアが小さく首を傾げる。

ケイは小さく首を縦に振ってから自分の正面の椅子に腰掛けるように促した。

二人は互いに見合った後、そっとその椅子に腰を落とした。

「まあ、とある筋でごく最近に入れた情報だったからね。準備の方も間に合わなかったんだよ」

ヤバイ筋じゃないだろうな、とキラは半眼になってケイを見る。

旅に出る直前にイストワールやアイエフから各国の現状や教祖達のことについて幾つかの情報を得ていたキラであったがこの神宮寺ケ

イという少女、聞いた話では随分なビジネス精神を持っているとのことらしかった。

それならばそういった類の筋と幾つかの関わりがあってもおかしくはないだろうと思うのだが口に出せるような場面ではない。

「では、私達についての情報も幾つかは入手していると言うことでしょうか？」

「まあね、君達がこうしてプラネテューヌを出て何をしようとしているのかということくらいは概ね把握しているよ」

余裕のような、まるでその質問をすること自体を分かっていたとも言える風にケイはそう答えた。

足を組んで机上に両手を絡ませてその上に顎を乗せる形になってケイは不敵に笑う。

その様子に、まるで心の神まで見透かされてしまうのではないかという観念に駆られながらもキラは発言する。

「それならば話は早いです。神宮寺さん、俺達にラストেশヨンのゲームキャラの居場所を教えてくださいませんか？」

キラの質問に、しかしケイは笑みを含んだ表情を陰くさせて吐息するような小さな声を漏らした。

「……答えはNOだね」

「「ええッ!？」」

ケイの言葉に二人は驚愕した。

一瞬、呆気にとられて絶句する。それからネプギアがおずおずと小さな声でそれに対しての言葉を吐く。

「えっと……、どうしてですか？」

「ギブアンドテイク、って知っているかい？」

「……情報を得たいのならそれ相応のものを差し出せってことですか？」

キラの言葉にケイはニツコリと微笑んでから拍手をする。

「正解。等価交換とも言えるね」

「オレ等にそっちが満足するような情報はありませんか？」

「別に情報に対して情報を差し出さなければならぬというルールはないよ。とにかくこちらに利益の出ることであれば相応の情報を渡そうじゃないか」

それに、とケイは言葉を付け加える。

「ネプギアさんにはギョウカイ墓場で見た情報がある。僕はそれも聞きたいと思っているんだけど……どうかな？」

急な話を振られたこと、そして自身のトラウマである『ギョウカイ墓場』でのことを問われたことに対してネプギアの身体が大きく跳ね上がった。

「その……えと……」

「ギブアンドテイク、ですよ」

キラが頬杖を突いてから皮肉っぽくそう言った。
少し面食らったような表情になってからケイがクスリと小さく笑みを零す。

「そうだね、ではこちらから条件を指定しよう。君達には『宝玉』と『血昌』と呼ばれる素材を収集して欲しいんだ」

「待ってくださいよ……それってどっちもレアもの素材じゃないですか？」

「君達が欲している情報の価値に値を付けるとすればこの程度じゃないのかな？　まだ異論があるのならこの交渉は無かったことにしてもいいけれど」

その、情のいっさいも見受けられないケイの態度にキラとネプギアはグツと言葉を詰まらせる。

およそ、守護女神の変わりのその土地を守護する者達の在処など闇雲に探し出せるものではない。やはり教祖の力を仰ぐのが一番ではあるのだろうか……。

キラはくしゃくしゃと頭を掻きむしってからチラと傍らのネプギアに視線を向けてから口を開いた。

「どう思う？」

「ん……、やっぱりケイさんに居場所を聞くのが確実だとは思うん

だよね……」

「だよな……」

キラは嘆息して肩をすくめる。

それからニヤニヤと笑みを浮かべるケイの方に視線を戻してからやや呆れ気味に口を開く。

「分かりました……。その条件、吞みます」

「君達ならそう言うってくれると思っていたよ。……不安なら証書でも作っておくかい？」

「いえ……お互いに知りたい情報があるのは確かですから、それを破談させるようなことは貴女はしないのでは？」

「それもそうだね。期限はこう言うつもりはないから、ゆったりとこの事案に取り組んで貰って結構だよ」

果たして本当なのだろうか、キラは怪訝な表情でケイを見るがいまいち真の表情が読み取れないと眉をひそめる。

面倒な女性だなとキラが再び大きな溜息を吐いてからゆっくりと椅子から腰を持ち上げた。

それに続くようにネプギアも腰を上げて軽くケイに対して会釈してから教会の扉を押し開けて去って行った。

「こんな感じで、よかったのかな？」

含み笑いを浮かべながら、視線だけを背後のカーテンで仕切られた空間に向かってケイは言葉を放った。

「……」

その人物は、その問いには言葉を発することなくただ無言で小さく首肯をするのみであった。

それからくると椅子を回転させてケイは続ける。

「しかし、いくら何でもこの条件は厳しすぎたんじゃないのかな？ どう考えても彼女たちが求める情報とは不釣り合いだよ？」

やはりこの辺りもビジネス精神というか、そこら辺はやはりしっか

りとした商人であることが伺えたのではあるのだがしかしケイは肩をすくめてその人物に問い掛ける。

「そこまでして、あの二人にゲームキャラの居場所を知られたくないのかな？」

ケイの問いに、人物は小さく首を横に振る。

「なら、いったいどうしてだい？」

暫く、そんな無言の時間が流れる。

それから、人物はカシャンと小さな金属音を発生させて身体の向きを変えてから唇を上下させた。

「女神を救出させるわけにはいかないからな」

不可解な言葉に、ケイは眉を寄せてからフツと吐息してから唇を動かす。

「どうしてだい？」

やはり、教祖か。守護女神を救出させるわけにはいかないなどというアンチじみた言葉には敏感らしかった。

「知らなくても、いいことだ——」

闇色のコートの隙間から零れる、神秘的な銀髪が窓から覗く日光を淡く弾いてふわりと揺れていた。

☆ ☆ ☆

「どーっすっかなー……」

キラは深い溜息を吐きつつ、後頭部をくしゃくしゃと掻いて行き詰まったようにそう愚痴を零した。

教会を出て暫く先を行ったホテル、その一室でキラはソファに腰を落としてからそんな言葉を呟いていた。

無論、この言葉には様々な意味が含まれていることは明確である。

一つは、先程教会で教祖であるケイに出されたゲームキャラとの対

面のための素材である『宝玉』と『血昌』を探し出すこと。

この二つの素材、レア中のレア素材でキラとしてもお目に掛かったことはなく、せいぜい小耳に挟んだことのある程度のものだ。これを探すとなると相当な時間がある。

そしてもう一つは……。

「ん？」

キラが半ば呆れ気味に視線を送る。

それを向けられた少女はきよとした表情と共にその顔をこくんと傾かせて、まるでどこにおかしな状況があるのだと言わんばかりの雰囲気を感じていた。

「な・ん・で！ 俺とお前で同室なんだよ！！」

バン、と目の前のテーブルに両手をついてから叫んだ。

そう、ネプギアとキラは現在、このホテルの一室に二人仲良く滞在することになったわけである。もちろんながらそれがキラの悩みの種のもう一つであるのだが。

「だって、イースンさんから貰った金子も少ないし」

「ぐ……」

そう言われるとキラは言葉を詰まらせる。

別にイストワールから貰った軍資金も少ないわけではなく、寧ろ二人で旅するにはあまりに膨大すぎる金額だ。

しかし何事も無限ではなく、それこそ金は有限だ。だからこそ限られた範囲で少しでも節約していかなければならないことは重々承知の上だったのだがそれでも何か腑に落ちないものを感じてキラは口を開く。

「だからって年頃の男女が同部屋っつーのもさあ……」

「でもプラネテューヌでだって私はキラの家になりたいし」

「……」

そう言われると返す言葉もなかった。

先程よりも大きく更に深い溜息を吐いてどっかりとキラはソファにもう一度腰を落とす。

お会いしたことは一度たりとも無いが、この娘の姉であるパープルハートは失礼ではあるが随分と常識を逸脱した御方らしい。この娘の教育を間違えていやしないかと少しばかり自分の国の行く末が心配になったキラではあるが、ともかくそんな些細な問題は後回しだと首をフルフルと振った。

それからコンコンとテーブルを叩いてネプギアの顔をこちらに向けさせる。スツと自分の目の前にソファを指して座るように促す。

彼女が腰掛けるのを見届けてからキラは重々しく口を開いた。

「んで、これからの方針はどうする？」

「んー、どうしようかなあ……」

ネプギアは顎に手をやってから思案顔になる。

しかし、当然の如くネプギアもキラと同時にこの街に来たばかりで事情などはまるで知らないのだ。こんなことを聞くのもおかしい話かとキラはフツと盛大な溜息を吐いてからソファに体重を預ける。

「ともかくはギルドでクエストをこなしつつ、宝玉と血昌の情報を集めていくくらいしかできない、か……」

半ば諦めムードでキラはそう言った。

それに同意するようにネプギアもこくこくと首を縦に振っていた。

それから、更に数時間後。

旅の疲れや、ようやく立派なホテルに宿泊することが出来たという安心感があるせいか、二人の疲労はマックスまで滲み出ていた。

高級レストランで出されるような涎の零れる料理の数々を腹一杯に堪能した後にキラはバフツとベッドに倒れるように寝転がった。

「ハア……疲れたな」

知らずの内にキラの口からそんな言葉が漏れる。

現在、どういうワケかその一室はキラ一人だけの空間に成り上がっている。ネプギアは一体どこに行ったのだろうか和一瞬思考したキラであったが、女性にも色々事情はあるだろうし、それに常に一

緒にしなければならぬという決まりもない。きっと一人になりたいのだろうと結論づけてキラはあまり深くは追求しなかった。天井の模様を何気なく眺めながら、キラはふと眉をしかめる。

「なんだ、この臭い……」

汗くさいというか、何というかとにかく不快感を煽る臭いがキラの鼻孔を突いた。

そしてそれはごくごく身近から発せられていることに気付くのに時間も掛からなかった。

そっと、自分の身に纏っているコートを鼻に近づけて臭いを嗅いでみる。

「くさ……」

キラはより一層に眉をしかめた。

そう言えばここ数日、ロクに洗濯もしていなかったと今更ながらに思い出したのである。

流石にコレではみつともないし、周囲に迷惑が掛かる。

「洗っておくか……。あ、ついでに風呂でも入るか」

確か部屋に洗濯機も風呂も備え付けてあったはず、とキラはベッドから身を起こして荷物の中から適当に着替えを取り出してからバスルームの方へと向かう。

特に気にすることもなく、キラはバスルームの扉を押し開ける。

目の前に配置されている洗濯機にコートを放り込んでからスイッチを入れる。その脇の扉のノブに手を掛けてぐるっと回して入室する。シャツに手を掛けてバツと豪快に脱ぐ。それから脱衣籠にそれを放り込もうと視線を移したときにハタと気付いた。

「これ……服？」

キラの服とはまた別の、これは恐らく女物だろうか。とにかくそれが脱衣籠の中に先に放り込まれていた。

眉を寄せてそれをつまみ上げる。

どこかで見たことのある衣装だとキラは暫くそれを眺める。それからまたスツと脱衣籠に視線を戻すとそこには幾つかの装飾が置かれ

ていた。

黄色のスカーフ、白いホルダー、ピンクと白のニーソックス。はて、どこか身近で見たことがある気がする。そしてそれと同時に背後のバスルームで水の弾ける音が聞こえた。

「……！」

ここでキラはようやく事態に気が付いた。

そして、キラが振り向くとのバスルームと脱衣所を隔てる扉が開けられたのはほとんど同時のことであった。

「……ッ！」

「……………きら？」

たった一人で入浴していたのだ。もちろんその姿を隠すものなど存在するはずもない。

幼さを残しながら、一步大人の女性へと階段を上っている途中である彼女のその発展途上の身体がキラの瞳に鮮明に映し出されたのである。

どうして、ネプギアの姿が見えなかったのか。

それはキラよりも一足先に部屋へと戻り、そして入浴をしていたからである。

暫く、無言の時間が続いた。お互いに微動だにすることもなく。

そして、ピクと彼女の肩が小さく動いた。

その瞬間にキラは何かの糸が切れたようにバツと身体ごと背後に向き直って頭を覆うようにしてその場に蹲った。

「すすすすすす、スマン！ 別に覗こうとかそんな意志があったわけじゃないんだッ！」

必死に弁明するもまあ、拳の一つ程度でも飛んできそうなものだったがキラはゆっくりと閉じていた瞳を開く。

「ね、ネプギアさん……？」

恐る恐る背後に向けて言葉を放ってみる。

直後、キラの視界の右端に淡い肌色の足が映っていた。

「ッー！」

バツとすぐに俯く。何となく少しでも彼女の身体を視界に入れるのは悪いような気がしてしまっていることが出来ない。

そんなキラの頭上から声が掛かる。

「ご、ゴメンね！ 先に言っておけばよかったね！」

急いで着替えを持って出て行くこうとするネプギア。

少しドアを開いた状態で、俯いたままのキラに視線を向けているのであろうネプギアが優しい口調で言った。

「あ、あの……気にしてないから」

「お、おう……」

とは言うものの、やはり女の子の身体を見てしまったという背徳感があるためか暫くキラはその場に蹲ったまま、そう返事をした。

その一方で、へなへなと壁に背を持たれてネプギアは全裸のまま床に座り込んだ。

彼女自身でも、顔が真っ赤に染まっていると言うことは十分に理解できた。しかし、それには羞恥の色は薄かった。

どちらかと言えば――それは。

「嫌じゃ、なかったよ……」

ネプギアは届くことのない声で、扉を隔てた向こう側にいる少年へとその言葉を投げかけた。

＊

「ううん……」

キラは呻いて、ごろんとベッドの上で寝返りを打った。

直後、ふにっと柔らかなものが自分の腕を通した感触に伝わるのが分かった。

なんだろうか、と思いながらそれをまさぐる。

布団特有の柔らかさではない。どこか水分を含んでいるようなしっとり感がある。すべすべとしていて暖かい。

それでもまだその正体が分からない。ふにふにと触り続けてみる。どうやら縦に長いようだ。手を動かしてみると所々に布の感触がある。

上の方に手を動かしてみるとそこには山のような大きな膨らみがある。

流石におかしい、と思ったのかキラがゆっくりと瞳を開くと最初に見えたのは肌色の何か。

ガバツと身体を起こして真相を確かめる。

そこには――。

「にゅ……」

と、可愛らしい声が発せられた。

小さく唇が上下している。

そしてその美しい美貌が、無防備にもベッドの上に投げ出されていた。

そう、キラのベッドの上に。

「ネプ、ギア……?」

ピシッとキラの身体に亀裂が走ったような感じがした。

なぜ、どうして――なんて疑問が真っ先に浮かぶ。

おかしい、明らかにおかしい。

何故ならこの部屋にはベッドが二つあるのだから。そして何より昨日の夜もこうしてお互いのベッドで寝ていたはずなのだから。

だから、これは明らかに異常事態だ。

が、そんな思考が追いつかなくなっている状態、キラはベッドの上にネプギアに視線を落としたまま完全に硬直してしまっていた。

「ふにゃ……」

そして、ネプギアが寝惚け眼を擦りながらゆったりとその大きな瞳を開いた。

数回、瞳をぱちくりと開閉させた後に目の前で固まっているキラと自分の身体と周囲を何度か確認してからゆっくりと身体を起こした。それから乱れている自分の衣服を見てからみるみると頬を朱に染め

ていく。

そしてそれと同時にキラが後退ってベッドから転倒、後頭部を痛打したのであった。

「き、きらってば大胆……！」

「ち、違う！ 断じて誤解だあ……！」

後頭部を押さえながらキラは弁明した。

――が、次の瞬間にその思考は記憶の彼方へと吹き飛んでいくことになるのである。

パリン、と大きな音を立ててキラ達の上部にあった大窓が粉々に碎かれた。

いや、それだけではない。その大窓を碎いて『一人の少女』が部屋の中に転がり込んできたのである。

そしてそれに次いで外からけたたましい銃撃音が響き、ガラスを撃ち破って壁におびただしい量の銃痕を刻んでいく。

まるで映画の中のような光景である。

「チッ！」

少女は忌々しく舌打ちを零すとおもむろに腰のポーチから手榴弾を取り出してピンを口にくわえてそれを引き抜き、窓から外に投げ捨てた。

「あんた達、直ぐに伏せなさい！」

「え……ええ！？」

キラが眉を寄せてそう聞き返す。

しかし、少女はそれには二度と答えることはなく半ば強引にキラとネプギアの頭を押さええて無理矢理に伏せさせた。

その直後、外からとてつもない爆発音が耳を襲う。

キラはそろそろと顔を上げてから頬に冷や汗を垂らした。

「な、何だってんだよいきなり……」

「あんた達、40秒で支度しなさい」

「え、え？」

少女はバツと右手を振り下ろしてから強引にそう命じる。

無論、ネプギアもキラもそれに対しては呆氣にとられまくりだ。

「な、意味わかんねえ！　いきなり飛びこんできて何言ってるんだ？」

「二度も同じ事を言うのは嫌いなもの！　さっさと準備する！」

眉を寄せてキラとネプギアは互いに見合う。

少女の剣幕はちよつとやそつとじゃ収まりそうにないと思ったのか
急いで着替えに手を伸ばして武装を確認する。

「ふうん……ま、様にはなっているわね」

少女は満足そうに頷く。

しかし、キラにとっては腑に落ちないことだらけだ。腕を組んで少女
女に向かって声を掛ける。

「なあ、アンタは一体何なんだ？　いきなり俺達を巻き込んでおい
て……」

「ん？　まあ説明は走りながらもできるわ、行きましょう」

左手で指示して少女は乱暴に扉を蹴って開け放つ。

どうにも納得しがたいものを感じながらも二人は少女の後を追って
走る。

「ね、ねえ、貴女は何をしていたの？」

「ん、アイツらは犯罪組織の一員よ。目障りな私に喧嘩をふっかけ
てきたってワケ」

「いやいや、喧嘩ってレベルじゃねーぞ！？　ほとんど抗争みたい
になってたじゃねーか！！」

キラのツツコミに少女は眉をしかめてからむすつとした声で答える。

「仕方ないでしょ！　こっちが応戦してたらあっちもどんどんレベ
ル上げていくんだから！」

そんな言い合いを繰り返しながら、ホテルのエントランスに辿り着
く。

外の騒ぎを知ってか、宿泊者達が不安げな表情で集まっていた。
そんな横を駆け抜けて少女はドアを蹴り開ける。

日柄もよい。覗く朝日がキラの瞳を突く。

そんな日光を遮りながらキラは切羽詰まったような声で少女に問い掛けた。

「で、お前は一体誰なんだ!？」

少女はくるっと身体の向きを変える。

それから両腕を腰に当てて仁王立ちになってから瞳を強く光らせて答えた。

「私は、『ユニ』よ!!」

彼女の黒いツインテールが風に靡いていた。

EP. 17 [SLIGHT REST]

「は、ハアッ!？」

キラはワケが分からないと言った風に眉を寄せてそう声を張り上げる。

「二度は言わないわよ」

フンと少女、ユニは鼻を鳴らしてからそう言った。

どうにも腑に落ちないというか、かなりペースに持って行かれているような感じであったがともかくとしてキラは啞然とした。

「それで、あんた達の名前は？」

腕を組んで偉そうにそう尋ねるユニに対してキラは頬を掻いてから傍らの少女と視線を交わす。ネプギアの方も苦笑しきった様子でおずおずと唇を動かす。

「えっと、私はネプギアって言います」

「……俺はキラだ」

「そう、ネプギアにキラね」

二人を指さしながらユニがそう呟いた。

それから「ふむ……」と声を出してから思考するように顎に手をやってしばらく黙りこくってしまった。

キラとしては面倒な事態はなるべく避けたいなと心の中で切実に願っていたわけであるが、ネプギアの方がどうやらそこから動く気配がなくキラは大きな溜息を吐いた。

「まあいいわ。武装を見る限りは、アンタらも結構な腕前だろうし」

「あ? いきなり何を……」

と、言った瞬間にキラの頬を銃弾が掠めた。

怪訝な表情で恐らく銃弾が飛んできたであろう方向に首だけを捻って視線を向ける。

そこには数名の男性達が銃口をこちらに向けて引き金に指をかけていた。

「おい……」

「もう、まだ懲りてなかったのね！」

ユニは二人を促してホテルの陰に身を隠す。

「待て待て待て！　もしかしてアイツらと戦うための戦力探してたんじゃないだろうな！」

「だったらどうするの！」

ユニが腰からアサルトライフルを抜き取って射撃する。

恐らく威嚇だろう。その後にもう一度手榴弾を取り出して向こうに放る。

「俺達が巻き込まれる理由なんざねえだろ！」

「アンタら犯罪組織をここで放っておけるわけ！？」

ユニの言葉にキラが眉間にシワを寄せた。

「……できるわけないだろ」

「でしょ？」

ニヤリとユニは微笑を浮かべた。

ネプギアはつうと頬に冷や汗を垂らしつつ、そっと影から顔を覗かせて相手方を見る。

「でも……危ないよ？　銃持ってるし」

「なに、魔法型モンスターに比べりゃ楽なモンだろ」

グイとキラはコートを羽織り直して腰の刀に手を伸ばす。

先日、イストワールから正式に譲り受けたキラの思い出の品だ。

キラが刀を構える様を見てユニが眉を寄せてから心配そうな声を出す。

「大丈夫なの？　この距離よ？」

「心配すんなって」

瞬間、キラが大地を蹴って距離を縮める。

ちょうど集団と半分程度か、呆気にとられて行動が遅れた集団達が銃を向ける。しかし、時間は十分にありすぎた。

カチッと刀を回してから銃身を叩き斬る。バラバラと碎け落ちる銃を捨てて男達は腰からピストルを抜く。

キラは地面に手を突いて左足を軸にして右足を外に出し下段回し蹴りを繰り出す。ヒットした男の身体が地面に叩き付けられる。その左足を掴んで二人の男性にぶつける。

体勢を崩したところを見計らって跳躍、膝打ちを入れて昏倒させる。背後に回った最期の一人を鞘を使って殴打して気絶させる。

その間、僅か四十秒。

「やるわね」

ユニが感心しきった様子で口笛を吹く。

キラは溜息を吐きつつ、後頭部を搔いて二人の元に歩み寄ってくる。

「『やるわね』じゃねーだろ、ったくアブねー目に遭わせやがってよ」

「人の褒め言葉は素直に受け取っておくのが吉よ。ふむ……」

ユニは何やら考え込む様子で腕を組む。

それからニヤツと笑ってからユニはキラに指を突きつけてきた。

「キラ、わたしのパーティになりなさい!!」

有無を言わさない圧倒的な態度で、ユニはビシリと言いつつ放った。

背後で警邏のサイレンの音、それを背景にキラは渾身の叫びを腹の底からかき出した。

「はああああああああああああああああああッ!？」

☆ ☆ ☆

「ハア……ハア……」

ネプギアは脇腹を押さえながら大きく肩で息をしていた。

あの後、警邏のサイレンの音を聞きつけた三人はキラ筆頭の下、何故かこうして逃亡を図っていた。

そして、それから数分経った後のラステーションの街のどこかの路地裏である。

「思えば逃げる必要性も無かったんじゃ……」

「そうよね……。相手が犯罪組織なら感謝はされても捕まったりなんかしないわよ……」

ユニが皮肉っぽくキラに半眼を向けてからそう言った。

しかしキラの方はくわっと目を見開いてからユニの腰の辺りを指した。

「お前がライフルやら重火器なんかを大量に持ち歩いていなければな！」

キラの指摘にユニは小さく舌打ちをする。

ゲームギョウ界は確かに物騒で銃やら武装の携帯は基本的には認められている。しかし、大陸協定の一つで武装の数、重量は細かく指定されておりユニのそれは規定を遥かに超えてしまっていた。そうとなれば、こちらも犯罪組織の一員と思われかねない。

「ったく、ねちっこい男は嫌われるわよ？」

「この程度で『ねちっこい』と言えるのならお前は相当図太い神経をお持ちのようだな」

少なくとも軽犯罪に触れている。

たく……と零してからキラはゆっくりと立ち上がる。

それから、ユニは『まだ諦めていないわよ』とばかりにそっと自分の身体をキラの左腕に這わせ始めた。

「なッ!？」

「で? キラ、さっきの答えを聞いていないんだけど」

ニコツと屈託のない笑顔でユニがこくりと首を傾げてそう尋ねた。しかしこんな体勢だと彼女の胸がキラの腕にこれぞとばかりに密着してくる。キラは思わず生唾を飲み込む。

が、すぐに背後からとてつもなく冷たいオーラを感じ取ってハツとなる。

ぎぎぎ……とゆっくりと首を背後に回してキラはつうと冷や汗を流

す。

「ネプギア……さん？」

「……」

ネプギアが絶対零度の視線をキラに浴びせていた。背中に大量の嫌な汗が流れるような感じがしたキラが慌てて弁明する。

「や、そのだな……これは何というか、俺としてもまったく状況の飲み込めないことであって……」

なんてキラの言葉を見無視してネプギアはつかつかとキラとユニの元へと歩み寄り、そしておもむろにキラの右腕を両手で抱え込む。

それから両頬を真っ赤にしてから口を開いた。

「き、キラは私のだもん！」

と。

キラはポカンと口を開いて己の耳を疑った。

自分が、ネプギアの、もの——と。

しかし、そんなキラを差し置いてユニは目を細めると口元をつり上げてからハッと笑う。

「何それ？ 勝手に所有権振りかざしてるけど、本人の口から聞いてみたの？」

「む……、しっ、してない、けど……」

ネプギアの言葉の後、ユニはくっくと押し殺した声で笑い、それから勝ち誇った笑みを浮かべてから言う。

「じゃあ、こう思われていても仕方ないかもね。——『アンタはもう要らない子』ってね」

「ッ——！」

ビクとネプギアの肩が大きく揺れた。

カタカタと小刻みに身体を震わせて、その瞳が虚空を睨んだままひどく空ろのものに変わろうとしている。

「お、おい！」

キラはユニの方に顔を向けてからそう声を掛けた。

しかし、ユニは何食わぬ顔で更に自分の身体をキラに押しつける。

「別にいいでしょ？ これくらいただの脅しで——」

「要らないわけないだろ！？」

「ッ！」

ユニがたじろいで、一方後ろに後退った。

それを一瞥してからキラはスツとネプギアの方に視線を向ける。

「な、何よ……」

ユニは状況の理解ができない様子で腕を組んでそっぽを向く。

瞬間、空気が揺れる。

今まで険悪であった空気は張りつめたものへと変化し、ビリビリと空間を揺るがした。

ネプギアの震えていた身体が少しずつ色素を薄めていき、やがて半透明のドレスが纏われようとしていた。

「……！」

キラは目を剥いた。

間違いない——、『邪神化』だ。

詳しい情報は何一つ掴めてはいないが、しかしこの身を揺るがすほどの圧倒的なオーラとこのドレスは間違いなく事前にイストワールから話を聞いていた。

邪神化——こういった経緯でそれが発動するのかは分からない。しかし、それは女神化以上に彼女の持つ力を際限なく引き出し、そして耐えることのない破壊衝動と殺人衝動を植え付ける、と聞いていた。

ユニも流石に状況がただ事ではないと悟ったらしく啞然とした表情を見せていた。

「な、何よこれ……」

「だあー、もう！」

キラはくしゃくしゃと頭を掻きむしってからズンズンとネプギアの元に歩み寄る。

近付くごとに空気が鋭くなっていくのを感じながらも足を止めない。

ただ、一点に彼女の存在を見据えながら。

「ネプギア……ッ！」

『いらなくなかない……ッ、私は、要らない子じゃ、ないもん……ッ！』

「分かってる！ 分かってるから！」

グイとネプギアの身体を抱き寄せてから背中をさする。

次第に、その波が衰えていくようにネプギアの身体にずしっと重さが加わった。

とりあえず邪神化は食い止めたらしい。

息を吐いてからキラはスツと背後のユニに視線を向ける。

「ユニ……」

「な、何よ……」

むくれたような声でユニはそう返した。

そして、次の瞬間にスツとキラの右手が上げられる。

ぶたれるのだろうか、そう思ったユニがきゅっと瞳を閉じた。

しかし、当たった感触は優しく暖かなものだった。

恐る恐るユニが瞳を開けると、キラが多少険しい表情ではあったものの先程のような切羽詰まった様子は見られない。

「ユニ、いくらなんでも言っていないことと悪いことがある。今のは間違いなく後者だ」

「……」

ユニはスツと視線を降ろす。しかしそれを追うようにキラがすいと顔を近づけてきた。

「お前だって、人から『要らない』って言われたら悲しいだろ？」

自分が言われて嫌なことは相手にしたらダメだ」

「わ、分かったわよ……！」

腑に落ちない、といった様子ではあったがユニはそう言った。

満足そうにキラは頷いてからスツとネプギアを指した。

「じゃあ、言うことあるだろ？」

「む……、わ、悪かったわよ。謝るわ」

キラはニツコリと微笑むと、傍らにいたネプギアに視線を動かした。涙目であるものの、しっかりと意識を保っているようでホッと安堵の息を吐いてからキラは尋ねる。

「ネプギアも、許してやれるな？」

ネプギアは無言で小さく首を縦に振った。

その様子を見て満足そうに頷いたキラが二人の肩を抱き寄せてから言った。

「じゃ、これから遊ぶか！」

「は、ハア？」

ユニが眉を寄せてそう簡潔にキラに問うた。

それもそうだが、あまりにも突発的すぎる。ユニが怪訝な顔つきになるのに対して、ネプギアの方は目を丸くさせていた。

「ちょ、意味分かんない。なんで今の流れから遊ぼうなんて言えるわけ？」

「ん、だって仲直りは一緒に遊んで改善、ってな。これ常識だぞ？」
「いったいどこの国の常識なんだろうかとユニが半眼になってキラを見る。

「それに、見たところユニはこの街にも詳しそうだしさ。俺達、昨日ラステイションに着いたばかりであんまりこの国のことも分かんないからさ、教えて貰いたいんだ」

キラの言葉にネプギアはこくこくと首を振る。

確かに、ラステイションの大体のことは知っている。しかしあくまで事情やら何やら国単位のこととで街のことについては何も知らないし勝手も分らない。

彼女がこの街に詳しいのであれば、教えて貰いたいという思いもあった。

「ん……、まあそういうことなら」

ユニはふわっとツインテールを揺らしてから視線をそらし気味にそう答えた。

☆ ☆ ☆

同時刻、プラネテューヌ

その中心であるプラネタワーで、一人の少女はパラパラと分厚い書物に視線を落としていた。

一枚また一枚と、ページを捲る手がどんどんと重くなっていくように、そして最終的にその手の動きは完全に停止してしまっていた。ほっと小さく息を吐いてイストワールは椅子の背もたれに体重を乗せた。

天井に走る機能的な模様を目で追いながらイストワールはパタンと本を閉じて暫く椅子を揺らす。心地のよい揺れがイストワールの身体を包み、そしてそれと同時に今まで抑えていた疲労が急激に彼女の身体に猛威を振るってきたのだった。

「ネプギアさん……」

周囲の人影はない。

だから、そんなイストワールの眩きを気に留める者はいない。その筈なのに、何やらどこかで見られているような感覚がイストワールを蹂躪する。

疲労の所為で妙な感覚ができてしまっているのだろうと思い、せめて眠気を軽くしようと椅子から腰を上げて棚からコーヒークップに手を伸ばした。

ふと、ガラスに映った自分の姿を見てイストワールがふうと嘆息した。

「少し、老けましたね……」

頬に手をやってまたふうと溜息。

およそ彼女の年代からは漏らされもしないような、言ってしまったえば実に不謹慎な言葉であるし、彼女の外観からしてみれば老けた、というよりは成長したという方が妥当であろう。

多忙な職に就いているのだから当然のことかとイストワールは肩をすくめるが、やはりそこは少女、気になるところではあるようだ。た。

芳ばしい香りが鼻孔を突く。香りを楽しみつつ、イストワールはカップを傾けた。

「……年を取ったのは、外見だけじゃないみたいです」

どこか自嘲するように鼻を鳴らしてイストワールは再び椅子に腰掛けた。

それから仕事でほったらかしにしていた携帯に手を伸ばして連絡事項を確認する。

「……ああ、ネプギアさんもキラさんもラステイションに到着したんですね」

それから数件のメールに目を通してから携帯を閉じて目を瞑る。

彼女の脳裏を掛ける記憶の数々。

ここ数日はいやにそれを思い出してしまうのだった。

何故か、『キラ』と出会ったあの日から。

彼を見た瞬間に感じた懐かしい——いや、というよりは何なのであろうか。

言いしれぬ感情がイストワールの心を弄び、そして様々な情報を煽っていく。

ただ、一つだけ言えるのは彼からは他人ならざる空気が漏れていたと言うことだけ。

「どこで間違ってしまったのでしょうか……マジエコンヌ？」

イストワールは、居るはずのない人物に、語るべきではない人物に、語りかけるように、その言葉を虚空へと投げかけた。

☆ ☆ ☆

かたやラストেশヨンの中央通りにある洋服店

「ねえねえキラ。この服、どう思う？」

「ん、可愛いしネプギアに似合うんじゃないか？」

キラは顎に手をやってからうんうんと頷いてそう返した。

続いてユニがとんとんとキラの肩を叩いて幾つかの服をコーディネートしてキラに見せる。

「私のはどう？」

「お、可愛い可愛い」

瞬間、がちんこつとネプギアとユニが額を擦りつけるようにしてお互いに睨み合う。

周囲に火花を散らして何とも近寄りがたい雰囲気を出している。

「キラは私の方が可愛いっていつてくれるもん！」

「微妙に私の方が声が喜んでたわ！」

等と、最早言いがかりにも近い論争を繰り広げる。

かたや隠れた名店と噂の喫茶店

キラに向かい合うようにして腰掛けた二人。

ネプギアはチョコレートパフェを、ユニはショートケーキを注文してそれに舌鼓を打っている。

それをボーッと眺めていたキラにほぼ同時に二人の声が掛かる。

「キラ！」

「はい？」

二人の顔が妙に朱いのが気になるところではあったが、キラはとりあえず返事をして首を傾げる。

「どした？」

「……あーん」

ほぼ、タイミングが同時だ。

二人が、同じような動きでスプーンとフォークをつき出してくる。その先っちょにそれぞれパフェとケーキが乗せられており、キラが

一瞬だけ考え込んだ後、もしかして貰えるのだろうかという結論に行き着いたわけであるが……。

「……」

「……」

——どっちを食べても地獄を見るような気がする。

キラがそう思っているとひとしきり無言で睨み合ったネプギアとユニががたんと席を立てってから再び額を擦り合わせての論争を始める。

「ハア……」

そんな感じが既に何十回にわたって繰り返されて、キラの精神をご機嫌な様子で削り取っていくのである。

額に手をやって大きな溜息を吐く。

今朝の占いを見そびれたが、もしかして自分は今日の運勢は最下ランクなんじゃないかとでも言う風にキラの心は今日一日でズタボロにされていた。

しかし、そんなキラの様子を知ったことではないように前方ではネプギアとユニの二人が今日何度目かも分からない、というか分かったくもないし十回を超えた辺りからカウントすることを放棄した小競り合いがまた繰り返られていた。

こちらにも、もう何度目かも分からない呻きを上げてキラはゆったりとした足取りで二人の間に入る。

「はいはい、喧嘩やめろ」

「むー！ やめてよ！」

「こらっ、キラ離して！」

両手に花とはよく言ったものだとかキラは嘆息する。

確かに傍目からすれば、まさしく両手に花。ネプギアの綺麗な様は十分に理解していたし、ユニだってその態度や雰囲気は気圧されていたがよくよく見直してみれば結構な美少女である。

だがしかし、それはあくまで被害を被らない場合によるのである。

いくら綺麗な女性であつてもそれが自分の精神を削り取っていくのであれば、それが厄介以外の何者でもない。ましてや、それで二人を相手にしなければならぬのだからキラの気苦労も二倍である。明日の朝、鏡を見たときには髪の手半分の白髪になっているんじゃないだろうかなんて非現実的な様子を頭に浮かべながらキラは二人を宥める。

「それはそうと、そろそろ大丈夫なのか？」

キラがユニの方を見ながら言う。

「何が？」

「何って……時間だろ」

どつぷりと闇色に染まった空を見てからキラが力無くそう言った。やはりこんな遅い時間に少女が出歩いているとなれば、親御さんの方も相当心配するんじゃないか、なんてことを考えて。

「む……た、確かにちよつとヤバイかも」

「どうする？ 送っていいとか？」

「ん……別に大丈夫だと思うけど」

「そうか？」

キラとしてはどうにも心配であるのだが、ユニの奉加しきりに大丈夫だと言っている。

それに今朝の戦いようを見ていれば、或いはそんじょそこらの変質者程度なら返り討ちにできるなとキラは苦笑を漏らした。

「あ、ならメアド交換しておかない？ 暇なときに会いたいし」

「そうだな」

「じゃあ私のも」

キラはポケットからGギアを、ネプギアもイストワールから受け取った端末『Nギア』を取り出す。

ユニがそれに呆然とした表情を見せる。

「二人のそれ……携帯？」

「そんなとこかな。普通のよりはだいぶ高性能だけど」

「ふうん……」

少々訝しむような表情を見せた後に三人はそれぞれのアドレスを交換する。

ユニが携帯をポケットに仕舞って立ち去ろうとしたところでキラは短く声を上げる。

「ユニ、頼みがあるんだけど」

「何よ？」

上半身をこちらに向けてユニがゆっくりと首を傾けた。

「俺達さ、『宝玉』と『血昌』っていうアイテムを探してるんだけど、もしそれを見つけたらその場所を教えてくださいませんか？」

「宝玉と、血昌……？」

ユニが眉をひそめてそれを繰り返す。

何を思ったか、表情は伺えないがユニは暫くしてから首肯する。

「分かったわ。見つけたら連絡すればいいのね？」

「うん、お願いね」

「はいはい」

そのままユニの姿は夜の闇の中に消えていく。

「まさか、ね……」

ユニの小さな呟きは、二人の耳に届くことはなかった――。

「楽しかったね」

「俺はかなり疲れたけどな……」

もしかするとクエストをやっていた日よりも疲労の色が濃いのではないかとキラは嘆息する。

しかし、ネプギアはんー、と小さく声を上げてから腕を組む。

「でも、こうやって同年代の女の子と話すのも初めての気がするなあ」

「……そうか」

思えば、この少女は物心の付いた頃から大人だけの世界に生まれてきたのだ。

唯一、歳の近いと言ってもアイエフとコンパとの二人とも歳は結構離れているし滅多に話す機会もなかっただろう。

だとすれば、彼女の傷ついた心の癒すのにはとてもいい滋養になったのだろうとキラはフツと微笑を零す。

「でもまあ……協力は仰いだものの目処は立たない状況、か」

キラは後頭部を掻きながらまた一つ嘆息する。

とりあえず今、早急にしたいことはゲームキャラの居場所を突き止めること。そのためにはケイの指定した二つの素材が必要であることは分かってはいるのだが、どうしようもない状況にキラはどうにもどかしさを感じてしまう。

夜の闇が、まるで二人を嘲笑うが如く、暗く鬱屈とそれら全てを見下ろしていた――。

☆ ☆ ☆

ツカツカと女性、マジック・ザ・ハードは不機嫌な様子でその大地を踏みしめていた。

「随分とご立腹だなあ」

ふと、彼女の背後からのっそりとした口調で声が掛かる。

ピクリと眉を動かしてからスツと身体を声の方向に向ける。

「トリックか……」

「どうした？ 計画に不都合でもあったのか？」

まるで冷やかすような態度でトリックはそう問うた。

直後、ガツンとマジックが地面を蹴ると、まるで巨大な顎で噛み砕かれたようにその大地がマジックを中心に抉り取られた。

「怖いなあ。触らぬマジックに祟りは無し、だ」

トリックがひよいと巨大を動かしてマジックから暫く距離をとった。

「プラネテューヌの候補生がゲームキャラの力を手に入れた」

「……ほう？」

トリックは興味深そうに短く問い返した。

マジックは腕を組んで、目を伏せる。落ち着きこそ見えているモノの彼女からはどこか焦ったような色が見えた。

「そこまではよい。ゲームキャラ程度の力を得たところでどうにもならん。だが……」

「だが？」

「妙なことがあったらしい」

伏せられていた瞳が開かれて鋭い双眸がトリックの姿を捉えた。

眉を寄せて（実際は機械なのでそれはないのだが、なんとなく雰囲気）トリックは怪訝な声を上げた。

「妙なこと、だと？」

「ああ、犯罪神様の力が漏れ出てしまっていたらしい」

「……結界に不備でもあったか？ ジャッジか、それとも俺か？」
ニヤニヤとした口調でトリックが言う。

しかし、マジックはふるふると小さく首を横に振る。

「いや、結界に不備はない。驚くべくはその力が候補生の身体から漏れ出していたことだ」

「……と、言うത്？」

「分からん、現段階ではな。ただ一つ、言えるのはあまりに強力すぎる力の漏出のために犯罪神様に集まっていた力が分散してしまっているということだ」

今までおどけていた様子のトリックが声のトーンを抑えてやけに真剣な声音で返す。

「つまり、犯罪神様の復活がまた一步遅れる、と？」

「そうなるな……。ただでさえ妨害があり、犯罪神様への信仰が集まりにくくなっているというのにな」

「もっと信仰を集める必要がある、ということだな？」

「そうだな……」

まったく面倒くさい、とマジックは小さく漏らしてまた歩みを戻す。

トリックも、一大事とは言わないがそれなりに焦った様子で踵を歸してどこぞへと向かっていく。

期限は、刻一刻と迫りつつあった――。

EP. 18 [SPREADING AGITATION]

「なんじゃこりやああああああああああああああああああああああああああああああああッ!!!」

キラがユニと出会った日の翌日。

その早朝、昨日はあんなにも疲労が見えていたにも関わらずキラは通常通りに就寝し、そして通常通りに起床した。

破壊された部屋を退室し、新たに割り当てられたホテルの一室で目覚めたキラは、身支度をしようと洗面所に向かい、さあまずは寝癖の付いた髪型を元に戻そうと櫛を持って目の前の鏡に視線を動かしたところでキラはホテル全体を揺るがするようなそんな大絶叫を張り上げた。

流石に飛び起きたのだろう、ネプギアが寝惚け眼を擦りながらゆったりとした足取りで洗面所の扉を開ける。

「ん……どしたの、キラ……？」

と、そこまでゆったりと寝惚けたような口調で語りかけていたネプギアの動きがピタリと停止した。

先程まで半分ほどしか開かれていた瞳が極限まで見開かれて額に冷や汗が浮かんでいた。

その反応も当然、か。

何故なら、キラの漆黒にも似たその髪色が、下半分から綺麗に『白髪』へと変貌していたからだ。

「な、な、な……！」

キラはブルブルと唇を振るわせて声を出そうとするが漏れるのはそんな狼狽に満ちた言葉だけだった。

ぺたぺたと触れてみる。案の定、至って普通の頭髮の触り心地だった。

眉を寄せてただ目の前の鏡面に釘付けになる。

——まさか、まさかとは思うが、本当に心労で白髪が浮かんでしま

ったのだろうかなんて考えながら。

それからブルブルと首を横に振る。まさか、そんな――ほんの一本二本なら分かるがこんなにも多くの頭髮が、しかも一晩の内に白髪になるなんてどう考えても有り得ない。

あまり、あまりにも非現実すぎる。

例えば何気ない日常の中のある朝、目が覚めると絶世の美少女が自分のベッドで全裸で眠っていることより、突然知り合った少女が実は女神様であったり、そんなことよりも遥かに非現実的すぎる。

キラは頭を抱えて座り込んだ。

「どーなってるんだ……」

動揺から復帰したネプギアがそろそろとキラの背後に歩み寄ってくる。

それから先程、キラがしたようにゆつくりとその頭髮に手を伸ばしてぺたぺたと感触を確かめている。が、やはり異常を感じ取ることにはなかつたらしく難しい顔をして首を傾げていた。

もう一度、腰を上げて鏡の中に映った姿を確認する。しかしどう見直そうとも、どの角度から見ようとも、それが完璧に『白髪』であることには変わりはないかった。

「マジでどうするんだこれ……」

ポリポリと頬を掻きながらそうキラが一人でに呟いた。

その隣でネプギアが心配そうにキラの表情を覗き込んでいる。それに気付いたキラがスッと視線を向けた。

「どした？」

「うん……身体に異常はない？」

「……まあ、ないな」

チラチラと身体のうちこちを触ったりしてみたが、キラの身体に異常は見当たらない。頭部を除けば。

何か病気の症状であれば、その一環でこんなことになったとも考えられるがどうにも身体に不調はない。

……となるといったい何なのだろうか、キラはますます眉間にシワ

を寄せた。

「病気じゃないだけマシだよな」

「……そういう問題なのか？」

とは言うものの、体調なんかを崩して一日身動きが取れないという事態よりは遥かにマシだろうと思うと何となく気が軽くなる感じがした。

今一度、大きめの溜息を吐いてからキラはすっかり忘れかけていた身支度を始めようと傍らの櫛に手を伸ばした。

☆ ☆ ☆

晴れやかな青空の下、その存在は明らかに異質だった。

清々しいほどまでに澄み切り、そして雲一つ無いまるで絵の具を零してしまったかのような青空の中で、それとは対照的にその姿は表すならそれは『漆黒』だった。

しかし、その目を惹く光景にスツと水を差す魔の手が忍び寄っていた。

ぐわっと豪快にそのフードをかき上げて少年はフツと吐息した。

額に滲む汗が日光を反射してキラキラと光っていた。その姿は圧倒的で、それでいて魅力的でもあった。

「暑い……」

「我慢する！」

ぺしっと軽い力ではあるが、ネプギアが傍らのコートを纏った少年・キラを小突いた。

グイッと袖で額の汗を拭い取ってから、キラが不承不承と言った様子でまたフードを被りなおした。

「我慢って言ったって……黒は熱を吸収しやすいんだぞ……」

「仕方ないでしょ、それくらいしかなかったんだから」

半眼になってネプギアがキラをジトツと睨む。

どうしてキラがこんな格好をしているかと言えば――、それは数分ほど前、ケイに指定された素材の情報を集めに行こうとネプギアが言った直後にキラはひくつと口の端をつり上げた。

それでネプギアがいったいどうしたと問い掛けるとこんな頭で外を出歩けないとキラが駄々を捏ね出したのだ。

『身体に異常が見られなくて助かった』などと言っておきながら今更……、と呆れかえるネプギアであったがキラの方は結構本気だった様子で折衷案として何故かネプギアが所持していたこのコートを羽織り、出かけることで何とか他人の目はごまかせるのではないかと言うことであつた。

が、打開案と言うことでキラも考え無しにその条件を呑んでしまつたが寧ろ今の状態の方が遥かに周囲の視線を集めていることに気付いた。

それもその筈、頭部から足下まで真っ黒、ついでに腰には刀を引っ提げている――どう考えても変質者にしか見えない。

キラが額を押さえてから嘆息する。

「なあ……この格好の方が注目されてる気がするんだが……」

「大丈夫だよ、ほら」

と、ネプギアの指示で前方に視線を遣るとそこにはキラと同じようにすっぽりと漆黒のコートを纏い、キラよりも数十倍雰囲気を出して颯爽と街中を歩いている人物の姿があつたからだ。

妙なものを見る視線を向けながらキラはもう一度大きく吐息した。

「ね？」

ニッコニコと満面の笑みを向けられてキラはもう何も言えず、がっくりと肩を落とした。

数分後、

結局、暑さに耐えきれないとキラがコートを脱ぎ捨ててみたが、や

はりあの衣装でいるよりも遥かに感じる視線の数が少なくなった。流石ゲームギョウ界、どんな人物が居てもおかしくないと周囲から思われているのだろうか、理解のよい世界である。

だが、それでも全身真っ黒コートはあまり見慣れないと言うことでもあったのだが。

そんなどうでもいい事案はさておき、二人は情報収集の基本として冒険者達が集うギルドへと足を向けていた。

大陸協定でギルドの建物は外観が指定されているためにとても探しやすかった。

自動ドアをくぐってギルドに足を踏み入れる。それから受付はどこだろうとキョロキョロと周囲を確認するがプラネテューヌと違う箇所がはつきりと見て取れた。

「人……少ないね」

「そう、だな……。ラステイションの方はこれが普通なのか？」

キラは腰に手を当てて首を傾げた。

プラネテューヌの方はまあ、多いとは言えないが少ないとも言えない。まあハッキリ言えば丁度よくらいに賑わっているのだがラステイションのはそうでもないらしい。

そんな彼の様子を見かねたらしい職員らしき男性がゆっくりと二人の元にやってくる。

「初めまして、ラステイションのギルドは初めてでしょうか？」

初めは声を掛けられて驚いたが、随分と親切そうな人だとキラがお辞儀する。

「ええ、まあ……」

「どちらからいらっしゃったのでしょうか？」

「プラネテューヌから、ですが……」

そう言った瞬間に男性の顔色が微妙に陰しくなったような気がしてキラは眉をひそめる。何事だろうと心配になったのだろうネプギアがおずおずと口を開く。

「あの……何か？」

「ああ、いえ……お二人は冒険家か何かで？」

「……まあ、そんなところです」

流石に正体をばらすのはいけないだろうと思い直してキラがそう答える。

男性が感心した風に何度も頷いてから声を出す。

「いやはや、若いのに大変ですねえ」

「そうでもないですよ」

紳士的な人物だなとキラが少し和やかな気分になる。

「ここラステイションは早くから犯罪組織やモンスターへの対策が施されているんですよ。他の都市よりも、ね」

まるで先程の二人の心を覗いていたのではないかという風に、男性は的確に二人に疑問に対する答えを投げかけてきた。

「ですから、あまりモンスター被害に関する依頼も少なく、そういうことで冒険者や戦闘員の方々もあまり立ち寄らないのです」

「なるほど」

と、話を聞く傍らでネプギアがちよんちよんとキラの脇を小突く。

『どした？』

小声でキラがネプギアに問い掛ける。ネプギアは視線だけをキラに向けてから小さく唇を上下させる。

『この人ならもしかしたら素材について知ってるかも』

『……そうだな。聞くだけしてみるか』

キラが小さく咳払いをしてから目の前に立つ男性に問い掛ける。

「あの、ちよつといいですか？」

「ええ」

「その……俺達、宝玉と血昌っていうアイテムを探しているんですけどで入手できるとか、そういう情報はお持ちでしょうか？」

「宝玉と血昌……？」

男性が今まで穏やかな笑みを浮かべていたが、その言葉を聞いた直後に表情を陰しくさせて小さく呟いた。

それからスッと手を顎にやってから先程よりも低い声音でキラ達に

問い返した。

「……あのレア素材のことですね？」

ただならぬ凄味というか、気迫を感じ取ってキラはぶるっと小さく震えた。

なんだろうか、もしかしてまずいことでも聞いてしまったのだろうかとかキラは冷や汗を流す。

「残念ですが……こちらでも入手場所については存じておりません」

「そうですか……」

ネプギアがしゅんと目を伏せ、肩を落とす。

男性の方も肩をすくめてから参ったような口調で続けた。

「ごくたまに報告に来る方がお持ちしていることもあるんですが……素材がレアなだけに教えて貰えないのです」

まあそれもそうだろう。

折角見つけた宝を他人に明け渡そうとする人間などそういないのだから。

ただ、一つそれで分かるのはここ周辺でそれらの素材を手に入れることができると言うことだ。それが分かっているからこそケイもそんな条件を出してきたのではないだろうか、なんてことを思いながらキラは男性に礼を言った。

「まあ、こちらに情報が入り次第、お二人にもお教えいたしましょう」

「いいんですか？」

「皆様のお役に立つのも、ギルドの仕事の内ですよ」

にっこりと笑みを浮かべて男性がそう言った。

とそこまで言って、男性が思い出した風に小さく声を上げた。

「申し遅れましたね、私はここラステーション中央ギルドの局長を務めさせていただいております、『ガナッシュ』と言う者です」

「俺はキラです」

「私はネプギアです」

「……ネプ、ギア？」

ガナツシュが驚いた風な声を上げてから険しい表情になる。

ネプギアがこくりと首を傾けて不思議そうな表情を浮かべているのを見てからガナツシュは取り繕うように大きめの咳払いを零した。

「い、いえ……申し訳ありません。少し、似たような名前の方とお会いしたことがあるので」

「はあ……？」

などと言うもののやはりガナツシュの態度は先程までとまるで違う。悠然とした雰囲気とは一変してどこか焦りのようなものまで垣間見えていたが、事情も何も分からないキラとネプギアは首を捻るばかりであった。

「で、では……私は仕事の続きがありますので――これにて」

スツとガナツシュはその場を立ち去って受付の脇に供えてある扉からその姿を消した。

彼の挙動不審な態度にどうも腑に落ちないものを感じてはいたが、深く詮索するのもどうかと思い、キラはネプギアを促して早々と掲示板の方へと足を運んだ。

ガナツシュの言っていたとおり、全体的にクエストの依頼用紙が少なくその内容も材料となるモンスターの素材を集めて欲しいとか所々に見えるモンスター討伐の依頼も軍隊すら手に負えないような強力なモンスターの討伐依頼のみだった。

「やっぱり難易度高いねえ……」

「そうだな」

キラはピツと素材収集の用紙を一枚抜き取ってから受付に向かう。こういった面倒な依頼はなるべくならやりたくないのだが、仕方がない。

受付に用紙を提出しようとザツと見回すが休憩中なのか職員の姿が見えない。

「「すいません、クエスト受けたいんですけど」」

一言一句、違わずに隣接する受付から少女の声が聞こえてキラはふとそちらの方向に視線をやる。

声からすると少女のものだ。

しかし、キラはそれ以上に驚くものがあった。

それは――

「ユニ!？」

その姿が、あまりに見知った顔の少女・ユニであったからだ。

名前を呼ばれて振り向かないわけがない。何事だときよとした表情でユニがくると顔の向きをこちらに変えた。

何故か動悸が激しくなっていたが、それを収めるようにキラは小さく深呼吸をしてからフレンドリーに笑顔を浮かべてから右手をひらひらと振った。

「昨日ぶり」

「誰？」

グサツとキラの心臓に矢が刺さった（ような気がした）。

あくまでユニの方は普通の対応であったのだが、キラとしてはそれくらいにダメージが酷かった。

口元をひくつかせながらキラが苦笑で言葉を続ける。

「お、俺だよ……キラだ」

「……嘘？」

眉を寄せてユニがそう言った。

まあそうかもしれない、とキラが後頭部をポリポリと掻く。流石にこう見た目が変わっていても判断するのも難しいなと嘆息して。

「なんか私が思い描いてたキラの姿と違うんだけど」

「まあ……色々とな」

事情が分からないので説明することもできずにキラは目線を反らしてから苦笑した。

分からないことを詮索していてもどうにもならないので話を反らし気味にキラは微笑を交えて会話を探す。

「ゆ、ユニは何をしてたんだ？」

「見りゃ分かるでしょ？ クエストを受けに来たのよ」

「ですよねー……」

その切り口はあまりに浅はかだったとキラが頭を抱えた。
と、そこでキラはたと気付く。

ユニの周りに人物が見当たらない。いや、もしかしたらロビーの方にパーティがいるのかもしれないがどうもそう思えないところが、キラにはあった。

「ユニ、お前……一人でクエスト受けるつもりなのか？」

「そうだけど？」

特に何を思うでもなくユニは平然とそう答えた。

刹那、キラの心臓にちくりと針をさされたような刺激が襲い掛かった。

たった一人で――？

きゅつと唇を嚙み、ごくりと生唾を飲む。

何故だろうか、どうして自分は彼女のことをこんなにも見捨てておけないのだろうか。

そんな、ひどく不合理的な感情がキラの心を揺るがす。

「ずっと……か？」

「何よ、いきなり……」

怪訝な表情でユニがそう問い返す。

それもそうだろうと、頭では分かっていた。けれどもそれを止めることができなかった。

キラは真剣な表情のまま、ジッとユニの瞳に視線を向けていた。

一瞬、ユニが悲しそうな表情を見せた後にハアと吐息して

「そうよ……」

と、小さく答えた。

直後、ちくちくとごく微々たる刺激だったものがいきなり心臓を握り掴み上げられたような衝撃に変わった。

悲しすぎる――、この少女はあまりに悲しすぎる。

自分が孤独であることに気付いていない。いや、孤独であるからこ

そ、孤独であることを異常でないと意識をすり替えられ、そして時を過ごしてしまっている。

ギリと奥歯を噛んでキラは表情を歪めた。

自分が手を出すべきではないのかもしれない、そんなことは分かっている。

けれど、キラはそんな少女をそのまま、見捨てておくことなどはできなかったのだ。

爪痕がくつきりと残ってしまうほどにキラは拳を握っていた。

いつの間にか頬に浮かんだ汗を袖で拭い取ってから、再び唾液を飲み下した。

それから意を決したように視線を鋭くさせてから目の前の少女に声を掛けた。

「ユニ」

「な、何？」

突如、声を掛けられたことに動揺を隠せないユニがビクツと方を振るわせてからそう言った。

「俺達のパーティにならないか？」

ユニの瞳が、一際大きく見開かれた——ような気がした。

☆ ☆ ☆

ギルド職員休憩室——

ガナツシュは首のネクタイを緩めてふうと小さく吐息した。

耳にかけられている眼鏡を外してスツと汚れを拭き取ってからまたそれを定位置へと戻す。

この職に就いてから随分と溜息の回数が鰻登りになっていったよう

な気がするなどと思いながら休憩室の端に配置されているベンチに腰を落とした。

いつの間にか額に汗が滲んでいる、胸ポケットからハンカチを取り出してそれを優しく拭い取り、再びそれをポケットに戻す。彼の胸をえぐり取るような、そんな感覚。

それはまるで、あの時に出会った『あの少女』と同じ衝撃。

『彼女』がそうだと知ったときと、全く同じような感覚。

ふうともう一度吐息してからガナッシュはフツと口元をつり上げるが、そこには余裕の笑みはなくどこか自嘲を含めたようなものであった。

「いやはや……因果な運命ですねえ」

それは果たして己の人生を形容していたのだろうか。

しかし、それを知る術は第三者には微塵たりとも存在しなかった。少なくとも『彼』を除いて。

カシヤカシヤと金属音のような甲高い響きが、彼の元に近付いてくるのが分かる。

その音に眉をひそめてガナッシュはスツと懐の銃に手を伸ばす。

この時間帯、この休憩所に足を運ぶ職員はいない。ほとんどの職員達は受付付近の休憩所を利用するからだ。

ならば――、誰だろうか。

ガナッシュは物陰から飛び出して音の方向へと銃口を向ける。

直後、ガナッシュの身体にとてつもない威圧感が文字通り襲い掛かった。

「ッ!？」

そして呆気にとられている内にその手から銃が叩き落とされる。ビリビリと痛みの走る手首を押さえてガナッシュはその方向を見た。背丈は、ガナッシュよりも少しばかり低い程度だろう。すっぽりとフードを被っているのと、薄暗い廊下の中でその顔を望むことができない。しかし、確実にガナッシュは生物としての本能で悟った。

「――殺気が、とてつもないですねえ」

などと口調こそおどけるようなものであったが、彼の中の生存本能が『逃げろ』と危険信号をけたたましく放っていた。

「……」

しかし、その人物はフツと鼻で笑うような音を立ててスツとガナッシュが落とした銃を拾い上げる。

「殺すのならどうぞお好きなように」

思えば、自分はいつ殺されてもおかしくない世界を歩いていた。何もかもを『偽って』生きてきた。人から恨まれていたもおかしくなかったらう。

自嘲した笑みを押し出してガナッシュは無駄なあがきをやめた。

しかし、その人物はスツと銃を降ろしてガナッシュの前に差し出した。

その状況に目を剥いて眉をひそめる。

「よろしいので？」

「……できることなら、命を奪うことはしたくない」

声音が低い、ということは男だろう。

ガナッシュは訝しみつつもその拳銃を受け取って懷にしまい込む。

「こちらとしても面倒な事態は避けたいので、交換条件としては成立でしょうか」

「……流石は産業大国だな」

経済的な思考が大きいのかと、青年はフツと笑う。

「こちらに乗り込んできたのは、何か情報でもお求めで？」

いくら端的機関とはいえ、一応は政府の後ろ立てが為されているギルド。こういった不審者が乗り込んでくることもおかしくなかった。ガナッシュは至って慣れた風に対応してみせるが、青年はふるふると小さく首を横に振った。

「情報なら、十分に得た」

「そうですね……、ならば何故？」

「……久しいな」

スツと青年は軽くフードを押し上げた。

影が掛かって一瞬、その姿は見えなかったが、すぐにガナツシュは表情を驚きへと変貌させた。

それからフツと笑みを浮かばせて言った。

「なるほど……話は聞いていましたよ」

「理解が早くて何よりだ」

スツと青年はフードを戻し、顔を隠す。

ガナツシュは腕を組んでから感心した風な態度で続ける。

「なるほど……それで、貴方が活動している理由は？」

「……どうでもいいことだ」

「ふふ……それも『災厄』としての仕事でしょうか？」

「好きに解釈しろ」

先程とは打って変わってガナツシュが嫌に含み笑いを浮かべてやけに青年と親しげに会話を交わしている。

「こちらに顔を出した理由は？」

「……気まぐれだ。一応、お前には世話になったからな。色々な意味で」

ジツとフードの奥から憎らしげな視線を向けられてガナツシュは思わず苦笑した。

「言いつこなしですよ。あなた方のお陰でこちらも随分と苦労したのですから……」

「……だろうな」

スツと視線を落として青年は言う。

「お前は随分とよさげな役職を与えられたらしいな」

「まあ、ああ見えて彼女も慈悲深い方ですからね。あとは私の腕前を買われてのことでしょう」

「……確かに、お前は仕事の腕だけはよかったからな。使いどころを誤らなければ、だが」

「彼女らは一緒ではないの？」

「……分かってるだろ」

フツとガナツシュは微笑を浮かべて『そうでしたね……』と言葉を

零す。

奇妙な会話が、二人の間で繰り広げられていた――。

☆ ☆ ☆

「……」

「……」

「……」

キラは居心地の悪さに肩をすくめて冷や汗を流していた。

ついと右方に視線を流してみると、頬をぷくつと膨らませて大きな瞳を可能な限り鋭くさせてはいるもののあまり恐怖は感じない、がそれなりに雰囲気のあるネプギア。

左方に視線を飛ばすと、胸の前で両腕を組んでジロリと視線を突きつけている見た目かなり不機嫌そうなユニの姿がある。

そしてその間に挟まれるようにして、キラがまるで仏のように佇んでいた。

いや、というよりは――仏になりたいという一心を抱えたキラがそこに突っ立っていた。

いったいどこで選択肢を間違えてしまったのだろうか、と内心でとてつもなく悶絶しながら。

しかし間違っていると言えば最初から間違っておりこの状況はある意味、最悪と言えた。

――遡ること数分前。

「俺達のパーティにならないか？」

キラがバツとユニの前に己の右手を差し出した。

その様子を、妙なものを見る目つきでユニが一瞥してからぷいっと視線を飛ばした。

「い、いいわよ別に。私はずっと小さい頃からこのスタイルでやってきたんだから」

「だからって――」

ユニの頬に朱が射している。しかしそれに気付くことなくキラは言葉が続ける。

「別にいいじゃねえか。たまには別のことやってみろよ、スツゲエ楽しいぞ」

「……わ、分かったわよ。言っておくけど仕方なく、なんだからね！？」

ビツとユニがキラを指してそう言った。

対するキラの方は屈託無くさぞかし嬉しそうにパツと表情を歓喜に染めた。

「じゃあ行こう！」

「ちょ――！？」

キラがグイッとユニの手を引いて控えるネプギアの方へと駆け出していく。

事情を説明されたネプギアがうんうんと何度も頷きながらチラッとユニを見る。

ユニの方はネプギアのふわふわしたオーラを感じ取るなり、『そんな感じで大丈夫か？』とでも言うように半眼でジロリとネプギアを睨むが、対するネプギアの方は『大丈夫だ、問題ない』とでも言いたげに瞳をキラッキラ光らせてむふーと鼻息を漏らしていた。

「……そんなんで大丈夫なの？」

「！？」

ユニは思ったことは口に出すタイプだったようだ。

ガーン、とショックを受けたネプギアが少し涙目になった。

そして今に至る。

そもそも昨日のやりとりから分かるように二人は結構衝突する方であるのは重々分かっているはずだったのだが、何というかキラはそ

のことについて失念していた。

頬に流れる冷や汗を拭い取ってからキラがおずおずと口を開く。

「ま、まあ……仲良くしようぜ、な？」

キラがそう言っているとユニは不承不承と言った様子で肩をすくめてから鋭い視線を外した。

ネプギアも腑に落ちないものを感じた風な表情のままスツと身を引く。

——明日辺り、髪全体が真っ白になってるんじゃないかと思わずにはいられなかったキラだった。

EP. 18 [SPREADING AGITATION] (後書き)

なつかしいキャラ達が出てきます

EP. 19 [WHOM]

「依頼先はここね……」

ユニはスツと眼前にある一つのやや大きめの工場に視線を向けた。それからするとやや下方に向けるとその工場の前に一人の少年とも少女とも付かぬような人物が立っていた。

キヨロキヨロと周囲を見回しているところを見ると恐らく人捜しだろうか。

自分たちの待ち合わせの場所がここ『パッセ工場』の前、ということもありアレが依頼主だろうと推測した三人だったが、どうも不安だった。

「あの人が依頼主の社長さんかなあ……？　社長って言うからものと怖い人想像してただけだ」

「まあ……うん」

その件に関してはキラの方も同意見だが、とりあえず言葉を濁して答える。

しかし、ここで立ち往生しててもどうしようもないので恥を捨ててキラはその人物に歩み寄っていく。

「こんにちは、依頼主のシアンさんですよ？」

「ん、確かにアタシがシアンだが……もしかして依頼を受けてくれた人達か？」

どうやら間違いなかったらしい。

フツと吐息してから後方に控えている二人を手招く。

その間、シアンはジロジロとキラ達を頭頂部から爪先までジロジロと眺めていた。

「大丈夫かねえ……」

顎に手をやってからシアンはだいぶ率直な意見を述べてきた。

キラは苦笑しきりだったが、ユニはむすっと頬を膨らませてからスツと胸に手を当ててから言った。

「確かに、ネプギアとかは頼りないけど私はちゃんとできるわよ」

「む……ユニちゃん、それどういう意味？」

「そのままの意味だけど」

再び衝突。

既に数えることを諦めた溜息を再度吐き、キラがその二人のあいだに割って入ってそれを制止する。

額を押さえながらキラが呆れ気味に言った。

「ホントにもう……少しくらい仲良くできないのかよ？」

「私は仲良くしたいのに……」

「ホントかよ……」

果たして本当にその意志があるのかはキラとしては遥かに疑問なところであるのだが、確かにこの少女はあまり争いごとは好まないし、そうなのだろう。

対するユニの方は随分と昔から一人でいたようだから、他人との接し方がイマイチ理解できていないのだろう。

二人とも、単に不器用なだけなのだ。だから、衝突は仕方のないことかもしれない。

けれども、こんな二人をいっぺんにお守りをしなければならぬキラとしては心労の種は少しでも軽くしておきたいという部分もあった。

そんな悩みにキラが頭を抱える最中で背後のシアンはブツと口元を押さえて何やら吹き出していた。

「……？」

「ん、悪い悪い。ちょっと前に似たような奴らと知り合ってさ、その時のこと思い出しちゃったんだ」

「はあ……？」

ワケの分からないと言った風にキラが首を傾げる中でシアンは取り繕うようにこほんと咳払いを一つ零してから言葉を紡ぐ。

「で、依頼の話なんだが……アンタらにちょっと取ってきて欲しい素材があるんだ」

「依頼書にあったものですね？」

ネプギアが尋ねるとシアンはこくりと鷹揚に頷いた。

「ま、うちも普通ならこんなことをクエストで頼まないんだけどな」

「確かにこんだけの工場だもの。普通に発注するでしょうね」

「そうなんだが……最近、その素材を頼んでいる会社の方が潰れちゃってな。供給元がないんだ。けど、急ぎの依頼が入ってどうしようもなかったからギルドに頼んで依頼を出させて貰ったのさ」

「なるほど」

キラがゆっくり頷く。

確かに最近は何物だし、素材を落とす対象がモンスターとなれば一般人にはそれを手に入れることは不可能だろう。専門的なことは分からないが、やはり材料の発注は契約などを行って上でのことだろうからそれをするにも面倒な手続きが必要なのわけだ。

納得するようにキラがうんうんと一人で頷く。

「取り急ぎだからなあ……そうだな、遅くても明後日くらいにはこちらに届けて貰えると助かるな。制作期間も考えるとそれくらいしか猶予がない」

「了解です」

「ヒマになったらたまに立ち寄ってくれ。ウチは武器なんかを扱っているから、冒険者のアンタらには結構役立つ品を揃えてる自身があるよ」

そう言ったシアンにぺこりとお辞儀をしてから三人はスツとその場を立ち去る。

急ぎの依頼、キラ達としても一刻も早く完了させたいという思いもあったので、少し足早に目的地であるダンジョンを目指した。

＊

ラストイション中心部から少し離れたリピートリゾート――
数年前まで有名な海水浴場としても利用され、多くの観光客で賑わ

っていたがほんの1年ほど前だろうか。突然現れたモンスターよってこの土地も荒らされて今やモンスター達の住み着くダンジョンの一つと化してしまっていた。

香る潮風がふわっとネプギアのさらさらの桃髪を揺らして、その光景はあまりに神秘的に見えた。

しかしキラの前を行くユニの姿もまた、どこかこの場に随分と慣れ、そして景色の全てが彼女の魅力を引き立てているような感じもあった。

（見た目だけはいいからなあ……）

聞こえないようにフツと吐息してから、キラはポリポリと後頭部を二、三度搔いた。

内心だけの呟きではあるものの、異常に『だけ』が強調されていたのは気のせいではないだろう。

そんなことを思っても何になるわけでもない、キラはスツと視線を周囲に向ける。

青い海原の中に通っている白い通路。そしてそこに『いるはずの者達』の姿がないことに気付いて、キラは眉をひそめる。

ここはダンジョン、モンスターなら幾らいようとも何ら不思議ではない。

しかし、モンスターがいるなら必然的にそれらを狙うハンターや平和維持のための討伐隊などがいるはずなのである。

それなのに、ここにはそんな人々の影も形も見当たらない、少ないと言っても一人もいないというのはあまりに不自然すぎる。

「……」

「キラ、どうしたの？ 怖い顔してるけど」

そろそろとネプギアがキラの顔を覗き込んでくる。

どれほどそうしていたのだろうか、キラが小さく肩を揺らしてから苦笑する。

「い、いや……何でもない」

「さては、海を見て『楽しそうだなー』とか『泳いでみたいなー』」

とか思ってたんでしょ？」

ニヤニヤと面白いものを見るような目つきでユニが前方でそう言っていた。

それに対してむっと表情を強張らせてから口を開いた。

「こ、子供じゃあるまいし、そんなこと思つかよっ」

「えー？ 顔赤いわよー？」

ユニが身体を密着させてから、キラの頬を人さし指でぷにぷにと何度も突き刺してくる。

あまり強い力ではないので痛くはないのだが、何となく気恥ずかしいのでキラがやめるように手で指示する。

「や、やめろよ」

「連れないわねー……」

不承不承と言った様子でユニが半眼になりながら、その身をスツとキラの身体から引き離す。

「連れないも何も……俺達、男と女だろ」

「そうよ？」

しかし、ユニの方は別段、気に留める様子もなく平然と言っていた。

キラは今度こそ大きめの溜息を堂々と吐いてから額に手をやった。

「まあ今に始まったことでもないか……」

「あ、キラ。アレじゃない？ シアンさんが言ってた目標のモンスターー」

ネプギアの言葉でスツとキラは視線を向ける。

やや前方に見える広めの――恐らく休憩所跡地か何かだろうか。

そこに、事前にシアンから指定されていた獣の小型モンスターが数匹、思い思いのように動き回っていた。

やけにあっさりと発見できたなとキラはフツと吐息してから、モンスターに気付かれないように物陰に身を隠す。

それにならうようにしてネプギア、ユニと順にキラの背後に並ぶ。

『いいか、俺が先に出るからその後について――』

「よっこいしょつと……」

何を思ったか、ユニがおもむろにM72—LAWを取り出して、モンスターの小群めがけて砲門を向けていた。半眼になってキラは小さく口を開く。

「ちよつと……何してんだ」

「発射」

ぼふつと大きめの音が響いた。

それに気付いたららしいモンスター達が一目散にその場を駆け抜けていったが既に時遅し。

弾頭が地面に着弾、瞬間に轟音を周囲に撒き散らしながら地面をえぐり取ってモンスター達を消し去っていく。

その凄惨な（というか悲惨としか言いようがない）光景を目の当たりにしながら、キラとネプギアはただ眉をしかめて、口元をひくつかせた。

「はい終了。簡単だったわね」

ぽいっと使い捨てのバズーカを投げ捨ててからにんまりと、ユニがやけに誇らしげにそう言った。

キラとしては何ともコメントのしにくい状況ではあったものの、ユニが何やら『褒めて褒めて』とでもいうように瞳をキラッキラさせていたのでやや視線を外し気味にして彼女の頭をわしわしと撫でた。
「……ていうかコレ、素材も残ってないんじゃないの？」

爆心地（？）を見ながらネプギアがやや呆れ気味にそう言った。

キラとユニが同時にネプギアの方を向いて「あ……」と小さく声を漏らした。

☆ ☆ ☆

数日前、プラネテューヌ中央都市――

「ん、んー……」

アイエフはグイッと背を伸ばしてからそんな呻きを発した。彼女が謹慎から解かれて二日。

しかし、怪我の方は未だ回復の兆しを見せていないものの、彼女としては既に簡単なクエスト程度はこなせるまでに調子を整えることができていた。

そして、そんな日々のクエストの帰り道であった。

ギルドへの道のりを歩む途中に、アイエフは見慣れた少女の姿を視界に捉えた。

「こんぱ？ どうしたのよ、そんなに慌てて……」

彼女の目の前に駆け寄ったコンパが、ふうふうと肩を大きく揺らしながら息を吐いていた。

その慌て様があまりにテンパったもの、とは言うものの彼女は些細なトラブルでもこんな感じになるのではあるが、何となく口出しするのを憚られた感じがしたのでアイエフはきゅっと口を噤んだ。

「あいちゃん……何で勝手に出歩いてるんですか？」

「へ？ ……そりゃ、謹慎解けたし……身体も鈍ってるかなーと思ってクエストやってきたんだけど」

その言葉にコンパの瞳がカッと見開かれたような感じになって、アイエフがビクッと大きく肩を揺らして後退る。

「ダメですよ！ あいちゃんはまだ怪我也完治してないですから、無理をしたら危ないです！」

「そんなこと言われても……ここ数日はなんともなかったし」

ポリポリと頬を搔きながらアイエフはそう答えた。

実際、ここ数日間のクエストの中でもアイエフは特に困ったことはなかった。

強いて言うとすれば、あまり身体が脳の命令に付いてこなかったと言うことだけだろうか。

ふふっと小さく微笑を零してアイエフがあやすような口調でコンパに声を掛ける。

「もう、コンパってば心配しすぎ。私は大丈夫なんだから……」
「でも……」

そこまで言ってから、コンパは地面に視線を這わせた。

今までの彼女の様子ではない、どこか悲しみを帯びたような——そんな雰囲気は彼女は纏っていた。

「そう言って……ねぷねぷは……」

「……！」

瞬間、アイエフの表情が強張った。

ずっと思ってきた後悔——それら全てが押し寄せるようなそんな感情が、アイエフの心を弄び、そして焦らせる。

唇を強く紡ぎ、そしてそっとコンパの手を握る。

「そっか……、コンパはずっと不安だったのね……。ゴメンね」
まるで、幼い子供を慰めるように、優しい口調でアイエフは語りかける。

コンパは言葉もなく、ただこくこくと首を上下に揺らしている。
「大丈夫……、私だけは絶対に……どこにも行かないから……」
確信があるわけではない。

こんなご時世、そんな保証があるわけでもない。

それでも、自分はこの少女の傍にしよう、と。

せめて、彼女がその不安から解き放たれるまでは、せめて傍で支えてあげよう、と。

アイエフはそ思いながら、コンパの頭に自分の手を添えた。

と、そこで数分の時間を要し、コンパはようやく復帰した。

「とにかく、あんまり心配を掛けないで欲しいですう」

「はいはい、悪かったわ」

おどけた調子で、しかしアイエフは強い口調でそう答えた。

ようやく、コンパの方にも安堵の色が見え始めた。

そして、コンパの強い押しでとりあえず療養をしようとアイエフの

自宅に足を向けようとしたところで――

「……?」

コンパの瞳が妙なものの姿を捉えた。

姿は――ネズミ、だろうか。

しかし、それは頭でつかちのずんぐりむっくり、二頭身のいかにも何かのマスコットキャラクターのような、言うなればぬいぐるみのようなものだった。

刹那、コンパの瞳がキラリーンと輝いた。

コンパという少女、やはり少女か。ぬいぐるみが嫌いというわけではないし、寧ろ好きな部類であった。

アイエフの背中を押す手を離してスッスツとそのネズミの元に駆け寄る。

不思議に思ったアイエフが半眼になってからコンパの方に視線を向ける。

「ちょっと、何してるの?」

「ネズミさんですう」

「汚いものに触るんじゃないの。ばい菌でもついたらどうするの――ってデカッ!」

コンパの背後から覗き込んでからアイエフはあまりの巨大さに驚愕した。

だいたい、コンパの膝元辺りまであるだろうか。

それくらいいのネズミ(?)が地面に横たわっていた。

そのままであれば、恐らくコンパもアイエフも単なるぬいぐるみだと思っただろう。

しかし、それはあまりに突発的に『蠢いた』。

「!?!」

その瞬間に、二人はバツと身を引く。

別に、身の危険を感じただとかそう言うことでは決して無く、ただ単に驚いただけだがそれにしただって少しばかりオーバーリアクションではないかと言うほどに二人は後退った。

「ちゅ、ちゅ……」

どこか、弱々しい声でそのぬいぐるみ——というか、ネズミがそう声を発した。

眉を寄せて、アイエフが再びそのネズミを覗き込む。

「何コレ……生きてるの？」

つん、と人さし指の先端で軽く触れてみる。

ぷにぷにとしていて、それでいて綿のような触り心地の良さそうな、本当にぬいぐるみそのものと言ったようか感じた。

コンパがまじまじとそれを眺めていると、ぴたりと一点に目がとまった。

ネズミの左足、そこに一筋——紅い線が伸びていたのだ。

「ネズミさん……怪我してるです」

スツとコンパが腰のポーチから救急キットを取り出して、スツとそのネズミの傍らに腰を落とす。

「ちょっと、何する気？」

「このままじゃ可哀想ですよ」

お節介もここまで来ると筋金入りか……とでも言いたげな表情でアイエフが小さく嘆息してからスツと体勢を元に戻した。

コンパがネズミの足に包帯ぐるぐるを巻き終えたタイミングで、ネズミの身体がもぞもぞと蠢いた。

「ちゅ……」

ごしごしと短い手（前足？）で目元を擦り、それから暫くの間、横たわった姿のまま微動だにしなくなる。

それから、ぴたっとその視線がコンパの顔面に移り、それからそこを見つめたまま動かなくなる。

「……？」

「ちゅ、ちゅ……あ、あのー、お名前は何というちゅか？」

「へ？」

いきなり、そのネズミがももごと口らしき部分を動かしながらやや上ずった声でコンパに向かってとう問い掛けてきた。

その様子がどうにも勢いを含んでいたもので辟易しつつもコンパがゆっくりと口を開く。

「えっと、私はコンパっていうです。よろしくです」

「コンパちゃん……ちゅー!!」

などと言うなり、ネズミは風のようなスピードでどこかへと去っていったしまった。

それをその場でポカンと見届けるコンパとアイエフの二人という妙な空間が展開され、なんか『どうするの、この雰囲気?』みたいな微妙な空気が流れ始めた。

若干、状況を把握したらしいアイエフがつうと頬に大粒の冷や汗を垂らしながら苦笑を浮かべて何とか言葉を発する。

「えー、と……まあ、こんなことも……あるわよね」

こんなことあったたまるかど誰かがいれば言いそうなものだが、生憎そんな彼女たちにツツコミを入れる人材は残念ながらここにはいなかった。

コンパの方は少々気になるようずっとネズミが去っていった方角を眺めていたが、じきにアイエフに促されて不承不承その場を離れていった。

ネズミは、ひとしきりの距離を疾走した後にフツと息を吐いた。

それから身体を捻ってスツと背後に見えるプラネテューヌの街並みを眺めてから両の手を身体の前で組んでから小さく声を漏らす。

「て……天使……コンパちゃん、マジ天使!!」

不穏な影は、以外にも身近に潜んでいた――。

☆ ☆ ☆

「だあっ！」

ネプギアが、白銀の剣を目標であるモンスターに振り下ろして対象を消去させる。

ころん、とモンスターの身体があつた位置から一つの石片のような物体が転がり出る。

腰を折ってそれを拾い、ネプギアがそれをバッグへと仕舞う。

「これでノルマは達成だね」

「そうね、疲れたわ……」

肩を揉みながらユニがフツと吐息する。

それをチラリと横目に入れてから、キラがやや皮肉めいた口調で小さく呟く。

「お前は特に何もしてないだろ……」

「むう……」

ユニが唇を尖らせてから、そう唸った。

小一時間ほど前、ユニが高火力バズーカによってモンスターを素材ごと消し去ってしまったためにユニは前線から外されたので別段、仕事をしていたわけではない。精々援護射撃程度だ。

ユニの方も大した仕事をしていないという自覚があつた所為か、もごと口ごもる。

「ま、まあ……色々と肩こりの原因もあるだろうしね」

「……悩むような胸でもないだろ」

バキッ、とキラの右頬にユニのハイキックが、綺麗なフォームで弧を描いて躊躇いなく叩き込まれた。

「……っ……！」

地面に転がってもんどり打つキラ。

その間、ネプギアはどうコメントをしたものかと言葉を探していたが、敢えて口を出すべきではないだろうという考えに至って口を閉ざした。

ようやく痛みから脱しきれたキラが地面に手を突いて、半ば力無い感じで自分の身体を支えながら立ち上がる。

「いてて……容赦ねえなあ」

「当然でしょっ！」

『ここまでしないでいいだろう』と考えるキラと、『こうまでしても気が済まない』のユニの何とも言えない感じの気がぶつかり合って、更に妙な空間を形成していた。

見かねたネプギアの方が、苦笑混じりに場を宥めるようにして口を開いた。

「と、とりあえず、早く街に戻ろうよ。シアンさんもきっと待ってるよ？」

「む……確かにそうね」

「そうだな。何事も早いにこしたことはないしな」

くるりと踵を帰して街の方角へと歩みを進める――、とそこでキラ達の前に以前にどこかで見たことあるなあ……あ、いやもしかしたら見間違いかな、くらい見覚えがあるような無いような感じの曖昧な人物の姿が現れた。

「ようやく見つけたぜッ！」

「……どちら様で？」

キラが割と本気な感じの表情で問い掛けたので、謎の人物・下っ端が割と本気な感じでショックを受けた。

「て、テメェ！ アタシとの激闘を忘れたワケじゃネェだろうな！
！」

「……覚えてるか？」

「ううん」

ネプギアと顔を見合わせてから、キラがそう問い掛ける。

彼女の方もあまり覚えがないらしく、ふるふると首を横に振っていた。やはり結構なマジ顔で。

癪に障ったらしい下っ端は、顔面を真っ赤に、怒りの瞳に拳をぶるぶると小刻みに振るわせて、背景に炎が見えるほど激怒していた。

「許さネェ……アタシを忘れやがったことを後悔させてやるぜ！」
下っ端が、自分の服の懷に手をつ突っ込んで、こっちは下っ端よりも

見覚えがあるディスクを取り出した。

「違法ディスク、か……」

「おうよ、行け！」

下っ端が格好良く、右手を前につき出してから、違法ディスクによって生み出されたモンスター達にそう指示を出した。

『グガアアアアアアアアアアアッ!!』

モンスター達は、低い咆吼を轟かせてキラ達に照準を合わせ、ざりと後ろ足で地面を抉っている。

瞬間、ビリビリと大地を揺るがしてモンスター達が向かってくる。

グッと地面に立てる両足に力を込め、それを一気に解き放つように地面を蹴る。

直下に並ぶモンスターの姿を確認し、キラは両手に力を込めて刀を、一体の目標目指して一思いに振り下ろす。

ザン、と刀の軌跡が描かれて、モンスターの一体が胴体から真つ二つに切断、その姿が消えていく。

ネプギアもモンスターの一体を剣にて葬り、ユニも数発の銃弾をモンスターへ撃ち込んでそれを消滅させた。

そうして、数体のモンスターを消し去り、その場に静寂が訪れようとしていた。

「チィ、使えネェ……」

そんな下っ端の呟きが、風に乗ってキラの耳に運ばれる。

トン、と軽い音を響かせ、キラは飛ぶように下っ端との距離を詰める。

「！」

下っ端に、あと僅かで刃が届くというところで、右手に持たれていた鉄パイプが刀の進行を塞いだ。

スッと刀身を引き戻し、再び叩き込む。

下っ端が鉄パイプを両手に構えて、刀の連撃を防いでいくも、それはどう見ても防戦一方の状況だ。

バツと下っ端の体勢が崩れる。

キラが、刀を両手持ちに組み替えて、大きく横に薙ぐ。

文字通り、一刀両断——下っ端の服を少し斬り、そのまま鉄パイプを真っ二つに切り伏せた。

カラン、と金属音を響かせて、鉄パイプの先端部が地面へと落下する。

勢いのまま、地面に腰を付いた下っ端の首筋に黒い刀身が当てられる。

「勝負アリだ」

「……！」

キラは、勝ち誇った瞳で下っ端を見下ろす。

しかし、その瞬間に下っ端の口元がニヤリと不適につり上がるのが見て取れた。

「「キラ……！」」

「——ッ」

ネプギアとユニ、二人の叫びが耳を突いた瞬間——キラの身体にとつもない衝撃が襲う。

ゴロゴロと地面を転がり、壁に叩き付けられる。

いったい何が起きた——、とキラが頭部を抑えながらスツと上体を起こす。

『グウウウウウウウ……』

そこにいたのは巨大狼型のモンスターだった。

「お前らを相手にするのに保険を掛けておかネエわけがネエだろ！影に潜ませてチャンスを窺わせてたんだよ！」

いやらしく笑う下っ端の姿をキツと睨んでから、キラは刀を杖にしてヨロヨロと身体を起こす。

——と。

目前に、二人の影が映る。

「……ネプギア？ ユニ？」

二人の表情は、強く——そして揺るがないように思えた。

スツと彼女たちの柔らかく、暖かな手がキラの両頬に当たる。

「大丈夫——」

「待ってて——」

どこか——、似ていた。

「『女神化!!』」

瞬間、彼女たちの身体を光が包み、その姿を顕現させた。

『守護女神』を——。

「は……」

圧倒的な、存在力。

全てを凌駕する、違反的な姿も。

それら全てが——『二人』。

「ユニ……?」

それは、紛れない。

黒の力を放つ——女神。

ユニの身体を、黒いプロセッサパーツが守護するように浮遊している。それは、何を言うでもない本当の『女神の証』だからだ。

「な……女神が、二人!？」

下っ端が狼狽えた表情を浮かべながら、一步また一步と後退っていく。

それをゆっくりと見据えながら、二人で武器を構えて下っ端の前に立ち塞がるモンスターを切り刻み、銃弾を浴びせる。

モンスターの姿が消え、圧倒的に不利だと悟ったらしい下っ端が小さく舌打ちをしてからくるっと身を翻す。

「き、今日はこれくらいにしてやらあ! 次はネエぞ!!」

そう捨て台詞を吐き、バツと一目散に駆け抜けていく。

それを一瞥し、ユニとネプギアがお互いに向き合う形となり、それから暫しの苦しい静寂が周囲を取り巻く。

「候補生……だったのね」

ユニがぼつりと、その静寂を静かに破った。

どこか、威圧感を含めたような物言いに、ネプギアが眉を寄せつつそれに対して首肯する。

「ユニちゃんこそ……」

「そうね……それよりも、ネプギア。アンタに聞きたいことがあるの」

スツと、自分の髪を揺らしてからユニがそう言った。

「アンタ……ギョウカイ墓場に行ったのね？」

「ッ——！」

大きく動揺の色を見せて、ネプギアが恐る恐る首を縦に振る。

それを見てから、ユニは小さく顔を俯かせるとスツと瞳を閉じ、それからバツと勢いよく瞳を開き、ネプギアの姿を捉えた。

「——それ、なら」

ブン、と右手に構えた巨銃に装備されている厚刃ブレードを光らせてネプギアの脳天めがけて振り落とす。

その行動に目を剥いたネプギアだが、直ぐに右手に持っているソードを防御へと回してその一撃を受け止める。

「ユニ——ちゃん!？」

ネプギアはバツとソードを薙いで、ブレードを振り払う。

ユニの姿を捉えて、ネプギアがつうと頬に冷や汗を流す。

「アンタの力——見せて貰うわ」

冷酷な瞳で、ユニはそう——告げた。

EP. 20 [MONOCHROME]

「おかしいだろ……?」

キラは、目の前に起こるネプギアとユニの攻防を、まるで絶望したような瞳でそれを呆然と眺めていた。

——それもそうだろう。

「何で二人が戦うことになってんだよ……」

拳から血が出るのではないか、というほどにキラはグッと拳を握っていた。

かたや、プラネテューヌの女神候補生。

かたや、ラストイションの女神候補生。

いったい、争う理由が何処にある——?

自分なんかでは理解できない、それぞれの国の事情があるのかもしれない。

しかし、それでもキラにとってあの二人が争うなんて考えられない。理由がない。

いや、それよりも——争って欲しくないのだ。

ネプギアは、行動を共にしたのがたった一ヶ月程度とはいえ大事な仲間だ。ユニも出会ったのはほんの数日前、しかしそれでももう十分にキラにとって大切な、その不幸を見捨ててなどおけない大切な少女なのだ。

それなのに、どうしてそんな二人が争わなければならないのか。

ギリッと奥歯を噛んで、キラは苦悩の表情を浮かべる。

——途端に、世界の色が失せたように見えた。

モノクロームのような単一の世界。

そして全てがおかしい。

だって、『時が止まってしまったかのような』世界に、キラは一人

取り残されていたのだから。

「ッ!？」

バツと身を引き、それからキョロキョロと忙しく両目を動かして周囲の様子を探ってみる。

数メートル先に、それぞれの武器を交え、荒い表情で睨み合うネプギアとユニの姿があったが、それは一切の行動を起こそうとしない。まるで、『死体』のようだった。

「な、ん——」

上手く、声が出せなかった。

戸惑いと狼狽に満ちた、キラの表情が次第に曇り、そして焦りの色を浮かべ始めた。

——ここに居たくない、と。

ぞくぞくして、ドロドロで、むかむかして、吐き気がする。

キラは思わず自分の口元を覆った。

先程まで感じていた潮の臭いが全く感じられず、思わず不快感を煽るような——煙の臭いに近いだろう。そんな臭気が、いやに敏感になったキラの鼻孔を刺す。

ネプギアと旅をするようになってから、様々な現象に立ち会った。

しかし、これは明らかに他の事象とは群を抜いて『嫌になる』。

さっきと変わらない、そんな風景のハズなのに、何故だかとてもない焦燥感が心に襲い掛かる。

「何だよ……これ!」

まるで、それをぶつけるようにキラはグッと、喉の奥から無理矢理に言葉をひねり出した。

何か、思考を動かしていなければ、この嫌な感じに吞まれてしまいそうになる。正気を保っていられなくなる。狂気に吞まれてしまいそうになる。

そんな、そんな感じだ。

けれど、それは終わってしまふ。

スツと、キラの目の前——ネプギアとユニの真横に、なんだろうか。何か黒い靄のようなものが浮遊している。

目を凝らして、キラは恐る恐るその靄を見つめる。

キラの脳内では、近寄ってはいけない、見てはいけないとでも言うように、けたたましくアラート音が鳴り響いている。しかし、それはまるで一度見れば決して忘れられそうもない、『恐怖』の対象のような——そんな感じだ。

靄は次第に、その形を大きく変えていく。

初めはほんの握り拳程度に大きさだったものが、ふと一瞬だけ目を離れた隙に、既にキラの上半身と同じくらいまで広がっていた。

空気が、『啼く』。

いや、ここには空気なんて存在していないのかもしれない。どこか——まるで全身が揺さぶられるような。

靄は、既にキラを覆い尽くしてしまえるほどに大きさを増していた。

そして——それは奇跡となる。

ぞくり、と背筋を舐め取られたような嫌な感じがキラの全身に広がった。

思わず、生唾を飲む。

目が離せない。

頬を伝う汗も、乱れる呼吸も、何もかも頭の中でグチャグチャに混ざり合って、もう何が何だか分からない。

ただ、『それ』は異様なまでに神秘的で、妖艶で、気高くて、そして恐ろしい。

ふわりと揺れる銀髪も、禍々しく頬に伸びる雷のような刺青も、バトルスーツを思わせる薄手の鎧も、全てを見透かしてしまいそうな蒼い瞳も。

——何もかもが、キラを睨めるように見つめていた。

そして、その姿は、あまりに——キラと酷似していた。

「……」

言葉が出せない。

まるで、金縛りにでも遭ってしまったかのように、指一本も動かすことができなくなってしまった。

たった一つ、上下する唇からはもう吐息しか発することができず、目の前に映るのは、ただの『終わり』。

コン、と眼前の少年が足音を鳴らして一歩、前に踏み入る。

妖艶な笑みを絶やさず、少年は一歩、また一歩とキラの元に歩み寄ってくる。

（に、逃げ——）

『殺される』。

そう、本能で感じ取った。しかし、からだが言うことを聞かない。何だろうか、この感覚は。

スウ、とキラが小さく息を吸った。

以前にも感じた、こんな感覚。

そう、まるでネプギアと初めて出会ったときのように——片時をも目を離したくないような神秘的な光景。

ごくりと唾液を飲む。

スツと、少年の顔がキラの顔に近付く。僅か、息が届く程度まで。

少年の、小さな唇が僅かに揺らぐ。

そして、脳内に響くような、そんな不可思議な声が届いた。

『——久しぶり』

瞬間、キラは目を剥いた。

彼の言うことが理解できなかったからだ。

久しぶり、とはどういう事だろうか——と、キラが眉を寄せる。

しかし、少年は大して気にした風もなく、寧ろ嬉しそうにニヤリと口元をつり上げて笑った。

『ずっと待っていたんだ。お前が、闇に入る瞬間を——』

「や、み——？」

『そう——』

キラの問い掛けに、少年は小さく首肯した。

「な、にを——？」

『混乱しているみたいだな。ほら、深呼吸——』

スツと少年が右手の人さし指を上げた瞬間に、キラの身体に掛かっていた拘束が緩む。

ガクツと身体が揺れ、前のめりに倒れそうになるところで少年がそれを受け止めてくれた。

『大丈夫か——？』

「——」

キラは、それには答えずにゆっくりと足を地面について、小さく息を吐く。

大きく息を吸い、それをくり返していく内に段々と、脳内がクリアになっていく。

胸に手を当てて、キラは怪訝な顔つきのまま、少年のその美麗な顔を睨んだ。

「アンタは……？」

『俺？』

少年は自分に向けて指を向けて、こくりと小さく首を傾げる。

その動作、全てが何となく子供っぽい。

それがますますキラの中にある警戒心を煽る。これは演技なのだろうか、それとも本性なのか、と。

『俺は——何だろうね？』

フツと悪戯っぽく笑みを浮かべて、少年は愉快そうに笑った。

「巫山戯るな」

『酷いな、こっちだって色々と順序があるんだ』

少年が腰に手を当てて、憤慨した風に息を吐く。

『今は知るべきじゃない。そして、そんな状況でもないって事は分かるだろ』

クイツと顎で、少年は背後を見るように指示してきた。

それから、キラはハッと表情を固まらせる。

そう、未だネプギアとユニは武器を交えた姿のままで固まっていたからだ。

「どういう事だ？」

『ここはお前の精神世界——みたいなのところかな？ だから周り全ての時間は止めてある。俺の話を真剣に聞いて欲しいからね』

キラはなおも表情を厳しくさせて、目の前の少年を睨んだ。

「それは、俺の意識の中で時間が止まっていると感覚しているだけで、外界では時が流れているんじゃないのか？」

『そんなことはない。本当に、一時的の世界の活動を停止させている』

「そんなことができるのか？」

『できるとも。俺が『世界と繋がっているから』こそだけどね』

その言葉に、キラはふむと唸り、暫くしてからハッと鼻で笑い飛ばした。

「冗談言うなよ」

『本当だぞ？ だったら今から世界の人間を全員殺してやろうか？』

「あ？」

『ほんの一捻りさ。俺がほんの少し力を使えば、この世界全ての住人の心を壊し、殺すことだってできる』

それに、キラはごくりと生唾を飲む。

不思議そうに少年が小首を傾げて、妙な声でキラに尋ねる。

『やってみろ、とか言わないの？』

「ホントに殺されたら溜まったモンじゃない」

『甘いなあ、キラは』

ふふっと、微笑ましいものをみるような態度で、少年が笑った。

キラはますます表情を険しくさせてから、再び少年と向き合う形になる。

「で？ お前は俺に何の用があるんだ」

『順応早いな』

「疑ってちゃ、いつまで経っても話が進まない気がしてな」

くしゃくしゃと後頭部を掻きむしってから、既に何事かを諦めたような態度でキラがそう言った。

納得しかねるものがあるようにも見えたが、ともかくとして少年は咳払いを一つしてから不敵な笑みをつくる。

『この状況、どうにかしたいと思わないか?』

背後のネプギアとユニを指して、少年は静かにそう尋ねた。

雷に打たれたように、キラの身体が大きく浮き上がり、それからスツと目つきを鋭くさせる。

「当然だ」

『ふうん……』

「それが何だ?」

クスリと少年は笑ってから、ピツと右手の人さし指を一本、キラに向けて突きつけてきた。

戸惑った表情をしつつ、キラはその指を凝視する。

『お前にはこれを止められるだけの力がある』

「……嘘だろ?」

『俺は嘘はつかないよ、たぶんね』

それじゃあまるっきり信用できないな、とでも言いたげにキラは少年を睨む。

その反応に満足したらしい少年がくつくと笑いを零してから更に続ける。

『どう? 力が、欲しくない?』

「……!」

力――。

欲を言えば、欲しい。

それは傷つけるためじゃない、護るための力が欲しかった。

しかし、そんなにもうまい話があるのかと、一瞬だけキラの思考に

『光』が掛かった。

けれど――

「欲しい」

と、答えた。

少年は、何度も頷き、嬉しそうな声で答えていた。

『そうだな、力は欲しいよなあ……。でも、なんか勘違いしてない？』

「は……？」

『お前はいったいどんな力が欲しいんだ？』

その質問に、キラは眉を寄せる。

おかしい——この少年はいったい何を言っているんだ、と。

さっき、この少年は『止めるための力』と言っていたはずだ。

「だから、あの二人を止める力で——」

『んー、たぶんだけど、俺とお前の中で随分と語弊があるみたいなんだよなあ』

キラの言葉を遮って、少年がそんな声を零す。

『お前は、あの二人の争いを止めて何とか二人を和解させるためのキッカケになる力、って意味だろうけど。俺の言う『止める力』ってのは違うんだよね』

「は——？」

『今は教えない』

フツと、悪戯っぽく笑って少年はずいっとキラの顔に自分の顔を近づける。

それに思わず、キラは小さく仰け反って少年をまじまじと見る。

『力が欲しいか？ でも、まだやらない』

「——ッ!？」

キラは思わず息を呑んだ。

一瞬、たった一瞬だが——目の前の少年からとてつもない『殺気』が放たれたように感じだからだ。

『保険を掛けておくのさ。そうすれば、次に力が必要になったとき、お前は躊躇いなく俺に力を求める。例え、それが悪魔の契約だと分かっている、な……』

「悪魔の、契約……」

復唱、キラが小さく呟く。

それ見てから、少年はフツと息を漏らし、姿勢を元に戻して踵を帰した。

『そろそろ起きる時間だ。お前が力を手に入れたとき、それは俺が自由になるときでもある……。覚えとけ』

少年は、スツと右手を掲げると、目の前に黒い霧を発生させた。

そしてそれは次第に空間を裂き、その中に踏み入れるようにゆったりとした足取りでそこへ向かっていく。

『じゃあ、またな——キラ』

少年がそう言った瞬間、キラの身体に一筋の光が流れる。

それは次第に渦を巻き、そしてキラの身体全体を覆って、その光が晴れたとき、キラの姿は跡形もなくなっていた。

それを見送ってから、少年はきゅっと目を細めて低い声音で言った。

『あの女——、あの女と会ってからキラは変わった……』

忌々しいものを見据えるように、少年の目つきは鋭くなる。

『昔のお前の瞳は、闇の中で蠢いていたんだ。いつから、『世界を憎まなくなった』んだ——？』

それだけを吐き捨てて、少年は霧の中に消えていく——。

十

頬を掠める石片の感覚に気付いて、ようやくキラは意識を『自分の身体に引き戻す』ことができた。

まるで地震の余波のように、ビリビリと地面がゆれていた。

何だろう、何か大切な何かを忘れてしまった気がする。思考を廻らせて、そして目の前で繰り広げられる戦闘でキラはハツと我を取り戻した。

「ッ、ネプギア！ ユニ！」

直後、再び圧倒的な衝撃波がキラの身体を襲う。思わず両手で顔を覆った。

「――！」

力が、あれば。

意識の中でそう感じた。

ギリッと奥歯を噛みしめて、キラは小さく呻き、両膝を地面に突いた。

「ユニちゃん！ ユニちゃん、もうやめて！」

ユニが横薙ぎに繰り出した一撃を、ネプギアは手に持った剣で何とか受けきった。

ビリビリと刀身が啼いている。それを見てから、ネプギアはスッと姿勢を低くして左手の平に魔力を収束する。

女神化によって一時的に得ることができる魔力。しかし、ネプギアではそうそう連発はできない。貴重な一撃を、ユニへ向けて放射した。

バツと、ユニの持つ大銃剣がネプギアの剣から離される。

それを確認してから、ネプギアは大地を蹴って大きく後退する。

威力は殺していたから、大したダメージにはなっていないだろう。

爆煙の広がる一帯を、目を凝らして確認する。

刹那、煙を掻き分けてユニが突撃を仕掛けてきた。

「ッ！」

いきなりすぎる故、動きが鈍った。

ユニは武器の引き金に手を伸ばし、銃口をネプギアに向け、魔法弾を放射した。

勢いに習い、ネプギアの身体が後ろへと吹き飛ぶ。

続いて、追撃。5つの球体型魔法弾がネプギアに向かって飛んでくる。

（追尾型！？）
ホーミング

ネプギアは武器に魔力を込める。剣の形状が、中型銃剣形に変化し、銃口の部分に魔力が収束する。

「これでッ！」

光が5つに分かれ、ユニが放った魔法弾全てを相殺する。

距離をとって、互いに向き合う形になる。

ネプギアは意を決したように、表情を固めてからゆっくりと唇を下させる。

「ユニちゃん……、なんでこんな事を？ 私達が戦う理由なんてないよ」

その言葉に、ユニは眉を寄せた後にスッと目を伏せてから吐息する。

「そう、ね……。私達が争う理由なんてないのかもしれないわ」

「だよね？ だから――」

「でも……」

ネプギアの言葉を遮り、ユニは冷ややかな視線をネプギアに向けたまま小さく声を漏らす。

「私は、アンタの力を見ないままじゃ納得できないの」

「何で……？」

「このままじゃ、私は何もかも分かんなくなっちゃうから――」

ギュッとユニが武器を握る拳に力を込める。

ゆっくりと大地を蹴って加速。

そして、それを迎え撃つためにネプギアもまた、武器を構えて突撃する。

「やめろ――――ッ！！」

ネプギアとユニの武器が、また交わる――

ガキンッ！

かに思えた。

しかし、それは途中で、何者かによって進行が阻まれた。漆黒を思わせるコートを纏い、表情を窺うことのできないフードを目深に被った、青年——だろうか。

「プラネテューヌの女神とラストেশヨンの女神が争う……。これも、因果——か」

ネプギアとユニの間で、青年はぼつりと小さな声を零す。

「そして、俺も——」

それから、悲しそうな言葉でそう続ける。しかしその声はあまりに小さく、誰の耳に届くこともなかった。

それよりも、意識を奪われることがあったからだ。

何故なら、女神二人分の力を受けてもおおその場に、そのままの姿で存在することができていたからだ。

「な——！」

「嘘……」

ネプギアとユニが同時に、そう狼狽に満ちた声を漏らす。

直後、青年はスツと身を揺らし、それから二人の顔面を驚掴みにしてから、強かに地面へと叩き付けた。

「ぐ……！」

「きゃッ……！」

「ネプギア、ユニ！」

その事態に気付いたキラが、何とか割り込もうとするも、既に遅い。青年が、両拳を腰の辺りで構えグツと力を込める。

それから、力の臨界点に達したように、一際大きく拳が震え、そして両拳が二人の身体に容赦なく叩き込まれた。

地面に波紋状の亀裂が大きく走り、その中心にネプギアとユニの二人の身体が、力無く横たわっていた。

スツと青年は腰を上げ、それからフツと吐息を漏らす。

そして、――世界が揺れる。

「何してんだよ……ッ、お前ッ!!!!」

「……!」

青年はフードの奥で目を剥く。

キラを中心に、暗黒のような旋風が取り巻いて、その姿を揺らしていた。

そして、彼の両手には、いつの間に握られていたのか――漆黒を思わせる一対の双剣が圧倒的な存在感を漂わせていた。

キラは双剣を握り直し、グッと両足に力を込め、大きく大地を蹴った。

その瞬間に、大地が大きく啼く。

双剣をクロスさせて、キラが青年へと特攻。空気が揺れて青年が深く切り刻まれ――

「!」

なかった。

キラの双剣を、たった腕一本で防ぎきっていた。

「な……!」

バツと双剣でそれを弾き、距離を置く。

ギロリと青年を睨みながら、上手く働かなくなっている思考を無理矢理に浮き動かして思う。

（手甲でも装備してやがるのか……？ ふざけやがって）

双剣と地面を擦り合わせて、キラは再び突撃をかける。

青年の直前で身体を捻り、左に持つ小剣を青年に左手にヒットさせ、右に持つ剣で追い打ちを仕掛ける。

「だあッ!!」

キン、と金属音が響き、瞬間にキラの意識は一時的に遮断された。そして、気が付いたときに、キラの身体は宙を舞っていた。

「がっ！」

どうやら打ち上げられたらしい。

嫌に浮遊感が身体を襲い、地上10メートル程まで上昇する。

「ッ！」

「……」

上を見た瞬間に、青年の姿があった。

右拳を構え、今にも振り下ろそうとしているのが、目に見えて分かる。

（クソ、身動きが……！）

そして、その思考を中断させるように、青年がキラの下腹部に拳を叩き込んだ。

キラの身体が強かに地面に打ち付けられて、先程のように波紋状の亀裂が、地面に走る。

対する青年は、ふわっと、まるで羽根のように音もなく地面に降り立ち、冷ややかな視線をキラに送っている。

「げほっ……」

殴られた箇所を抑えながら、キラがヨロヨロとその身体を起こす。そして、ギロツと青年を一睨みしてから再び双剣を構える。

それを一瞥してから、青年はフツと溜息を吐いてから面倒くさそうに唇を上下させた。

「まだ、やる気か——？」

「当然だろ」

——殴ってやらなきゃ、気が済まない。

と、キラの思考には、それだけが浮かんでいた。

仕方のないものを見るように、青年がふるふると首を横に振った。それが、ますますキラの癪に障る。

「——！」

持てる全力を、両足に込めて思いきり大地を蹴る。先程よりも大きな衝撃が大地を揺るがし、キラの身体と青年の身体が徐々に近付いていく。

「ッおらあ!!」

右手の剣を振り下ろす。

しかし、それは青年の鼻先ギリギリの位置で停止した。

「!?!」

グツと力を込めて押し込む。だが、それから先に進むような手応えがない。

よく目を凝らしてみると、何だろうか。薄い、膜のようなものが剣の進行を大きく阻んでいた。

（魔法か……?）

そう睨んだ瞬間、青年に動きが見えた。

スツと右手を振り、そこに闇色の剣が浮かぶ。

「!?!」

咄嗟に左に持つ小剣でそれを防ぐ。

恐らく魔力を高密度に収束させたエネルギー状の剣だろう。それでも十分すぎるほどに威力を持っていた。

「もう終われ。これから先は目に見えた戦いだ。それに――」

スツと、見えないはずの瞳がキラを捕らえて拘束した。

一瞬、フードの奥に蒼い光が灯り、キラの思考を奪っていく。

「お前は、『まだ』死ぬべきじゃない」

青年が、一際大きな殺気を放ち、次の瞬間にキラとの距離を一思いに縮めた。

ガツとキラの頭を鷲掴みにして、青年がそつと片方の手でキラの頬を撫でる。

「『まだ』、な……」

ドン、とキラの身体に深く重力が加わる。

しかし、何だろうか。これは重力が加わったと言うよりは、全身の力を抜かれた感覚に近いだろう。

自然に、瞼が落ちていく。

ダメだ、眠ってはいけない――と、分かっているはずなのに。

世界の摂理に乗っ取って、キラの身体がゆっくりと地面に倒れてい

く。

今まで握っていた双剣の姿が、霧のように消えていく。

「むやみにその力を使うべきじゃない。無理に力を引き出すべきでもない。俺のようになりたくなければ――な」

薄れゆく意識の奥で、キラは青年の顔を見た気がした。

それは、淡い銀髪の――

＊

同時刻、プラネテューヌ

「……！」

アイエフはふいっと顔を上げた。

『何か』を感じたのだ。言葉にはできない、がしかしいやに心に引っかかる妙な感覚を。

しかし、嫌悪するようなものはない。どこか『懐かしい』、感じたことのある感覚だった。

だが、いったいどこでだっただろうか。

「あいちゃん？」

コンパが心配そうに、アイエフの顔を覗き込んでくる。

「あ、何でも……」

とは言うものの、アイエフの調子はいつものものではない。

なおも表情を曇らせるコンパに、アイエフはフツと吐息してから柔らかな微笑を向ける。

「大丈夫よ。ちょっと、変な感じがしたただけだから」

「そうですか？」

「うん……」

アイエフはそっと目を伏せた。

不意に裏に浮かんだのは、たった一人の思い人だった――。

＊

「分かっているさ……」

青年はポツリと呟く。

「俺にはこれくらいしかできないからな……」
ふっと目を伏せて、悲しげに。

「けど、これだけは必ず……」

決意に満ち満ちた表情で、青年は口元を結む。

「待ってろ……」

青年は、昼間の闇の中に姿を消していく。

EP. 21 [MAD CONVERSATION] (前書き)

Lyceeってカードゲームにネプさん達が参戦らしいですよ♪
カードゲームギョウ界も救っちゃうらしいです

EP. 21 [MAD CONVERSATION]

「う……」

数回、両目を瞬かせてキラは額を押さえながら、大地に手を突いて状態をゆっくりと起こした。

頭がくらくらと揺れていて、気分が安定しなかった。

ぼやける視界をなんとかしようと、ごしごしと両目を擦ってからキラはまた瞬きをする。

ここは――リピートリゾートだ。

先程まで見ていた青い海に、そこに伸びる白い通路は、間違いなくリピートリゾートの形状である。

キラは眉をひそめて、思考にふける。

何故、自分はこんなところに倒れていたのか――と。

何故だか、ひどく記憶が曖昧で、意識を失う直前に何があったのか、思い出せなかった。

ただ、身に覚えのない身体の痛みと、目の前に広がるおびただしい痕が、ここで戦闘があったことが伺える。

しかし、いったい誰が……

と、思ったところでキラはハッとなり、それから周囲に視線を走らせる。

「ユニ……ネプギア……？」

そうだ。

確かに、少し前にここで二人が戦闘を行っていた。女神同士のぶつかり合いが。

言いも知れぬ感情がキラの中を駆けめぐる。何故だか、酷く気持ちが悪かった。キラは思わずぐくりと生唾を飲む。

それから、視界の端に見えた一人の影を見つけて腰を持ち上げる。

「ネプギア……！」

桃色の髪を地面に投げ出して、ネプギアが倒れていた。

そつと駆け寄って、その頭を抱え込んで覗き込む。

どこか怪我でもしているだろうかと心配したが、幸い浅い打撲のみで済んでいる。キラはふっと吐息して再びネプギアを見た。

それから、周囲に視線を泳がせてあることを思った。

(ユニ……)

水平線を眺めながら、キラはスツと目を細めて、一人の少女へと向けて思いを馳せた。

ラストেশヨンの、女神候補生である少女。

いや、そうである前に——たった一人の、少し気が強いだけの、何も変わらないはずのか弱い少女。

何故、何故なのだ。

どうして、この二人が争わなければならない、と。

思わず、キラは自分の右手を盗み見た。

歯がゆさか、守れなかった拳を表すように、ギリとキラは奥歯を噛みしめて、表情を歪ませた。

そして——

「あ……？」

そつと、キラの頬に暖かい何かが触れた。

それは、柔らかな肌の感触で、キラは視線を下に落とす。

今まで、自分の膝に頭を乗せていたネプギアが、薄くその両目を開き、右手をキラの頬に添えていた。

その美貌に微笑を浮かべ、まるで——まるで天使のように、キラはその姿に視線を奪われた。

何故だか、ひどくネプギアの姿が——『歪』に見えたからだ。

思わず目元をこしこしと擦る。

それから、自然と頬に涙が流れたのが分かった。

どうして、だろうか？

悲しい、とか怖い、とかそんな感情は何も感じていなかった。それなのに、自然と涙が伝う。何の色も秘めない無色の涙が。

「ッ……」

「泣いてるの……？」

「……ッ、……」

ネプギアが、その顔をキラの顔に近づけてくる。
どうしてか、その顔を直視できなくてキラはグイッと右手を目元に当てて小さく呻きを発した。

心配そうな表情をしたネプギアが、スッとその両手をキラの顔に近づける。

それに対して、キラは大きく肩を震わせた。

「だ、……！」

「え……？」

思わず、キラはその両手をはね除けた。

面食らった表情をして、ネプギアの大きな両の瞳が、より一層に大きく見開かれた。

それから、ハッとキラがネプギアを見る。

それは、見ていて苦しくなるほどに悲しそうな瞳をした少女の姿だった。

「ち、違うんだ……」

「え、と……」

「拒絶したんじゃない……ただ……分からないんだ……」

フツとキラは両目を伏せる。

申し訳なさと、ワケの分からない気持ちの悪い感情がぐちゃぐちゃのごちゃごちゃで、何かもう意味の分からない変な感じになってネプギアの姿を直視できずに目を背けてしまった。

けれど、ネプギアは

「そっ、か……」

とだけ答え、スッとその腰を上げた。

思わず、視線がそれを追う。

日光に遮られて、よくネプギアの姿を視認することができず、キラは目を細めた。

「そうだよね……」

「え……?」

キラは小さな声を上げた。

いったい何が――、そう訊ねようとしたところで不意にネプギアの後方、キラから見れば正面の方からやけに甲高い声が、一帯に響き渡った。

「そこで何をしているツチュか?」

やけに癪に障るような語尾、そして何より子供のような声。

キラは思わず眉を寄せて、前方に視線を泳がせた。

照りつける日光の下、いやに黒い色をした、ずんぐりむっくりの体型の――ネズミ。

決して夢の国の住人のようなファンシーな姿ではなく、どこか悪びれたような雰囲気のあるネズミだ。あと、夢の国の住人の方は世辞にもあまりファンシーとは呼べない。

ネプギアの方もポカンとした表情になってそのネズミを凝視していた。

もう、先程のような焦燥を帯びた雰囲気はなくなっていた。

「……ちようどいいタイミングツチュ」

ぽむ、とネズミは自分の腹の前で両手を打って、ニツと口の端をつり上げて笑った。

「お前達、この近辺で妙なディスクを見なかったチュか?」

「ディスク……?」

キラはその言葉を繰り返した。何故なら、キラ達の目的とあまりに酷似していたからだ。

しかし、そんなキラの感情の変化をものともしない様子で、ネズミは腰（と思われる位置）に手をやって仁王立ちのようなポーズをとる。

「そうツチュ。それは『ゲームキャラ』と呼ばれるこの世界に悪意をもたらす存在ツチュ。だからそれを破壊するためにやって来たツチュ」

ぽん、とネズミが自分の胸に手をやって、そう言った。

そして、キラとネプギアが同時に眉をひそめる。

「ゲイムキャラは……女神様を助けるために必要な存在だって聞いている」

「それが間違いッチュ。犯罪神様を信仰すれば、きっと君達も救われるッチュ」

「……フザケンな」

刀に手を伸ばしてキラが一直線に斬り込む。

その時、たった一瞬だけネズミがたじろぎ、それから右手に黒く光るディスクを召喚した。恐らく違法ディスクだろう。

召喚されたモンスターを斬り込み、消滅させる。

トン、とネズミは大きく後ろの飛び退き、小さく身構える。

ジロリとその姿を睨んでから、キラは目を細めた。

「なるほど……お前、モンスターか？」

「正解ッチュ。普通のモンスターとはかなり仕様が異なっているッチュ」

「へえ……」

もう一度、キラは刀を握り直してその切っ先をネズミの方へと向けた。

意識を一点に集中させ、そして――、一気に放つ。

ザン、と刀が軌跡を描き、一帯を一思いに切り伏せる。線上にいたモンスター達の姿が一斉に消し飛び、今まで余裕を帯びていたネズミの顔色が少し悪くなる。

「チュー……」

ネズミは、チラリと固まっているネプギアの方に視線を向けた。

それから左手で指示を下し、待機しているモンスターの一匹を動かす。

『グオオオオオオオオッ!!』

「――ッ！」

バツとネプギアが剣を構えるが、しかし一步及ばない。

モンスターの前足が、ネプギアに振り下ろされ――

「ッ！！！！」

キラがネプギアを突き飛ばし、その一撃を方に浴びた。

ブシュッとキラの傷口から鮮血が迸り、辺りの大地を濡らしていく。

「痛ッ……」

そのまま、キラは肩を押さえて倒れ込む。

それは、それは――あまりに不可思議な現象だ。

キラは、先程までネプギアよりも遥か数m先にいた。到底、一瞬で移動できるような距離ではない、どんな技術でも。

しかし、それよりも先に、ネプギアはキラの元に駆け寄っていた。

「キラ！」

「ッ痛……」

キラが肩を押さえて蹲る。

幸い、命に関わるほどではないがそれにしても小さな傷とは言えなかった。

ネプギアが思わずその表情を、怒りに染め、そして大地が裂けた。

「チュッ……！」

その時に、ネズミが思わず首を上げた。

ネズミが、モンスターであるからこそ感じ取れる『母体』の波長。

それは――犯罪神の気、である。

ネプギアの右手に闇色の魔力が収束する。それが次第に質量を帯び、そして大きな剣を生み出した。

ネプギアは、依然として表情を怒らせたまま、無言でその剣を横に薙いだ。

辺りが、それはもう、見事としか言い表せないほどに、周りにあった全てが同じ高さに斬り揃えられてしまった。

ネズミは悔しそうな表情を作ると、バツとその小さな身を跳ねさせた。

「やっぱり下っ端の言ったとおりに手強いッチュね……。今日はこれくらいにしておくッチュ」

そしてぴよんぴよんと跳ねながら、その場からネズミは撤退してい

った。

ネプギアの手握られていた闇色の剣が、空気に溶けるようにその姿を無くして、ネプギアを覆っていた、妙な気配もなくなった。

それから遠慮がちにネプギアはキラに視線を送った。
それからスツと腰を落とし、ポケットから救急医療具を取り出してキラの衣服を脱がしに掛かる。

「ちょ……！」

「大丈夫だよ、変なことしないから」

寧ろ心配なのはそこではないのだが、キラはそれが言えずに口の中に押しとどめてしまう。それに、そんなことを言われては返って意識してしまって何とも恥ずかしい感じがした。

ぐるぐると包帯を巻く最中で、背後でネプギアが小さく声を発した。

「ゴメンね……」

「え……」

キラの位置からは、ネプギアの表情は窺うことはできないが――泣いているのだろうか。小さく声が震えていた。

何だか、見てはいけないような気がしてキラはそのまま俯いた。

「き、気にするなよ……怪我なんていつも……」

「そうじゃなくて……」

キラは心臓を鷲掴みされたような感覚になった。

「私……キラに拒絶されるのが、すごく怖くなったんだ……」

「あ……」

というと、先程のアレだろうか。

キラが思わず、ネプギアの手をはね除けてしまった、あの瞬間、だろう。

「あの、俺……」

「迷惑、だよね……」

「――ッ！」

そんなこと――、あるものか。

ぎゅっとキラは唇を噛んだ。それは、やり場のない憤りを自分にぶ

つけた結果かもしれない。

「私は、覚えてる頃からお姉ちゃんしかなくて……でも、そんなお姉ちゃんもいなくなつて……、そんなときに優しくしてくれたキラが、だけど……」

震える声でネプギアがそう言った。

爪が肉に食い込むほどにキラは拳を握って、奥歯を噛んだ。

「だから……」

「そんなこと、ない……！」

ネプギアは、その小さな顔をバツと上げた。

「俺は……ずっと一人だった。大事な人も失って、何もかもが分からなくなつて……けど、そんな寂しいときにお前が来てくれて、凄く嬉しかったんだ……。だから、拒絶する理由なんて、ない……！」
キラは押し殺したような声を絞り出し、一拍おいてからまた言葉を続ける。

「あの時は、ワケが分かんなかったんだ……。お前とユニが戦つて、俺はそんな二人を止められなくて……止めたのは……、止めた、のは……？」

そこでキラの中にある矛盾、いや、疑問が浮かぶ。

あの後、結局、二人の決着はどうなったのか、と。

キラは眉を寄せて、ネプギアを振り返る。いきなり、やけに真剣で凛々しい表情をしたキラが視線を向けてきたのでネプギアがドキリとしつつも、何だか視線を合わせづらく、スツとやや下方にずらした。

しかし、キラはそれを気にした様子はなく口を開く。

「ネプギア……、あの戦い、誰が止めた？ どうやって決着がついた？」

キラの中に浮かんだ疑問、戦いが終わっているということとはつまり何らかの方法で決着がついたことになる。しかし、その決定的瞬間が、『記憶にない』のだ。

「それ、は……？」

ネプギアがそこまで言って、こくんと首を傾げる。

それはまるでキラの言わんとしていることが分かっているという風に。

「あ、あれ……？」

それからあたふたと、落ち着かない様子でキョロキョロと周囲を見回し始めた。

それにつられて、キラも周囲の様子に視線を送り、そして目を剥く。何故なら、先程まで広がっていた戦闘の痕が、跡形もなくなっていたからだ。

ネズミとの戦闘のものだけでない、それ以前にキラが確かに視界に入れていたはずの、地面に広がる波紋状の亀裂も、鋭い刃物で抉り取られたような大地の傷も、その何もかもが無くなっていた。

そして、その中に見覚えのない――赤黒いカケラが落ちていた。

不審に思い、ネプギアと顔を見合わせてから、キラがゆっくりと腰を上げてそのカケラをつまみ上げる。

その表面が鈍く、太陽光を反射している。

血のような色をした、結晶――。

「これ……血晶か」

「そうなの？」

ネプギアが横からそれを覗き込む。

キラは小さく首肯して、落とさないようにそれをポケットにしまい込んだ。

「とにかく、不幸中の幸いってことかな……」

頬を掻きながら、チラリとネプギアを見る。

視線に気付いたらしく、ネプギアがふっと顔を伏せて悲しそうな表情を作った。

一瞬、逡巡するようにキラが視線を周囲に泳がせたが、すぐに唇を結うと、バツとその頭を垂れた。

「ごめん」

「え……？」

キラに視線を向けながら、ネプギアがきよとした表情になる。

「言い訳だよな。俺が悪かった、だから……そんな悲しそうな顔しないでくれ。……俺にできることなら、何でもするから」

この、この娘は、拒絶されることが何よりも怖いのだ。

世界に対して何も感じない、感じられない。その中でたった一つ見つけた光、必要とされることが何よりの幸福であることを知った彼女が、それを拒絶されることが何より辛いということを分かっているのは、知っていたのに。

それなのに、そのことを聞いたときに、決めたはずだったのに。

ギリと奥歯を噛んで、そうしなければ、もう耐えることが出来そうになかったからだ。

「俺には……お前が必要なんだ……ッ」

「……」

「お前の笑顔が、見たいんだよ……ッ！」

こんなことを、自分が言うのはおかしいということくらいはキラにも十分に分かっている。

一時の静寂、風がながれる音だけが妙にリアルに感じられた。

ネプギアがすうっと大きく息を吸う音が聞こえる。

それから、

「ていッ」

ぺしッとキラの脳天に軽いチョップが落とされた。

面食らったような表情で、キラが顔を上げる。

そこには、柔らかな笑みを浮かべたネプギアがキラのことを見ていた。

「怒ってないよ」

「え……」

「私も混乱してたんだ。ユニちゃんといきなり戦うことになって、私も何が何だか分からなくなって、そんな時にキラがあんなことをしたから……」

苦笑を交えてネプギアがそう言葉を紡ぐ。

「だから、キラが悪いワケじゃないよ。私も、ね……」

「……そう、か」

スツとキラが頭を上げる。

後頭部を掻きながら、やけに申し訳なさそうに視線を外している。

「何か、すっげー惨めだな、俺ら……」

ハハツと苦笑混じりにキラがそう言う。

それに呼応するように、ネプギアもクスクスと笑いを零す。

ただ、この瞬間だけは――、

☆ ☆ ☆

「あー、すっかり遅くなったな……」

キラはすっかり黒く染まった空を見上げながらそうぼやいた。

パッセ工場から数分歩いたこの場所で、キラはフツと息を吐いて大仰に肩をすくめた。

それから、先刻までのシアンとの『不可解な』会話を思い出す。

「依頼が完了した……?」

「おう、少し前にな」

キラは眉をひそめた。

何故なら、このクエストはキラ達しか受けていない。故に、他の誰かがそれを達成することはないはずなのだ。それなのに。

「黒いコートをを来た……男か? フードのせいで顔は見えなかったけど、お前達の変わりに持ってきたとか言うから、てっきりそっちの伝達係か何かだと思ったんだが……」

作業を止めてシアンはそう言った。

しかし、キラは首を横に振る。何故ならキラ達の身内にそんな人物はいないからだ。

「いえ、第一、俺達は素材を入手できませんでしたし……」
「ふうん……ま、いいや。ソイツがお前達が来たら渡してやれとか言うし、有り難く貰っとけよ」
ポンとキラの手にクレジットを握らせて、シアンが二カツと笑う。
流石に仕事もしていないのに報酬を貰うのに気が引けたキラは何度もそれを返そうとしたのだが、シアンが無理矢理に押しつけたので結局、キラは流されるままにそれを受け取ってしまった。

「どーゆう事かねえ……」
空を見上げながらキラはそう零した。

何だか、自分の分からないところでとんでもない事態が動いている気がすると思うのだが、それは果たして杞憂だろうか。

しかし、そんなことを考えていても仕方のないことかと一蹴してキラは夕食の使いを頼まれていたことを思い出して近隣のスーパーへと足を向けた。

そして数分歩いたところ、

キラは目を細めて、一人の少女に注目した。

黒く艶やかな、肩まであるツインテールに勝ち気な瞳——アレは、ユニだ。

思わずぐくりと唾を飲む。

またとないチャンス、だろうか。

意を決して、キラは足早に少女の元に駆け寄る。

「ユニ！」

「ッ……！」

ユニが驚愕に染まった瞳を向けて、キラの姿を確認するなりバツと背を向けて走り出した。

「何で逃げんだよッ！」

しかし、キラの叫びも虚しくユニはどんどんスピードを上げて逃走する。

向こうがそう来るのなら、と負けじとキラもスピードを上げてユニ

に追いつき、そしてバツとその手を掴んだ。

「は、放して！」

「誰が放すか！！」

キラの声にユニがビクツと肩を大きく揺らした。

それによって長い髪がふわりと夜の闇に揺れたが、キラはそれに対して何の感慨も抱けなかった。

「お前な……」

呆れた風にユニを見る。

彼女はふいつと視線をそらしてむすつとした表情になる。

何とも言えないどうしたモンかな、的な感じを纏うキラが大きく息を吐いてからスツと広場のベンチを指す。

「少し話さないか？」

「いや」

「少しでいいから」

「やだ」

「頼むから」

「絶対にいや」

べしつとキラがユニの脳天に軽くチョップをお見舞いした。

「痛ッ、何するのよ！」

「五月蠅え、いいから話すぞ！」

流石にやりとりが面倒くさくなったらしいキラが無理矢理にユニを引きずってベンチに座らせた。

何かもう色々と諦めたらしいユニが大人しくベンチに腰を落として、足をブラブラさせている。

どかっとベンチに腰を下ろし、キラが横目でユニを見ながらやや声のトーンを下げて訊ねる。

「ユニ、どうしてあんなことを？」

「……」

ユニは唇を結ったまま、何も答えない。

「教えてくれ、お前がどうしてあの時にネプギアと剣を交えたのか

を」

「……」

大きな溜息を吐いてキラは後頭部をくしゃくしゃと搔いた。
この様子だと答えてくれなさそうだなと、なんかもう諦めるしかない空気が流れ始めたところでユニが小さな声を上げた。

「……あの娘、ギョウカイ墓場に行ったのよ」

「……ああ、知ってる」

その話は既に本人から聞いていた。

しかし、それがいったい何の関係があるのだろうかときらは次のユニの言葉を待つ。

「私は連れて行って貰えなかった」

「……そうなのか」

いや、本当はキラも分かっていた。

キラが見た夢には、それぞれの都市を守護する女神4人と、ネプギアの姿しかなかったからだ。

けれど、ここで話の腰を折るのも躊躇われたためにキラは押し黙る。

「私が、弱かったから……」

きゅつとベンチに添えて拳が握られるのが見て取れた。

表情は伺えないが、きつと悔しそうな表情になっていることだろう。何を言ったものか、キラは空を仰いでからゆっくりと言葉を紡ぐ。

本当の、自分のままの、意志を。

「俺は、違うと思うけどな」

「え……?」

ユニは間の抜けたような声を上げて、バツとキラを見る。

「きつと、ブラックハート様はすごい優しい人なんだと思う」

「……?」

「ブラックハート様は、きつとユニのことを大事に思ってる。だからこそ、連れて行かなかったんだと思う。ギョウカイ墓場ってのは、話を聞いただけでも凄く危ない場所らしいからさ。きつとユニに危険な目にあって欲しくなかったんだ」

ユニが視線を地面に落とす。

「俺だったら、きつとそう思うから」

「そう、なのかな……」

「分かんねえよ、俺がそう思っただけだ」

わしわしとユニの頭を撫でて、キラは二カツと笑う。

「だから、ユニは弱くなんか無い。凄く強いし、優しいよ」

「ッ——！」

顔を真っ赤にしてユニが俯いてしまった。

キラはずっと頭上に疑問符を浮かべて、チラチラとユニの顔色を覗く。

「ユニ？ 大丈夫か？」

「な、何でもないわよ……」

必死に表情を隠そうとしているのがやけに気になったが、本人が言うのならまあそうだろうかと妙なところでぞんざいなキラは姿勢を戻した。

ユニは相変わらずチラチラとキラに視線を送っていたが、後にすうっと深呼吸をしてからキラと向き合う形に身体を捻る。

「ね、ねえ……キラ」

「ん、何？」

「あ、あのね……」

もしかして言いにくい話なんだろうかと、ただ話を聞くだけなのにユニの緊張が伝わってくるようでキラはぐくりと生唾を飲む。

「もしかしたら怒るかもしれないんだけど……」

「う、うん……」

スッとユニが瞳を閉じて、顔を寄せてきた。

そして――

「むぐっ!？」

一気にキラの脳内がパニック状態に陥った。

何だろうこの柔らかい感触は、なんて感じたときにはすでにキラの目の前ゼロ距離にユニの整った顔があって、全身の神経にビビビッ

とまるで電撃でも浴びせられたような感覚が駆け巡って、リピートリゾートで感じていたものとはまた違ったグチャグチャ感が沸き上がって何コレ怖いみたいな感じになった。

身体中を駆け回る熱く柔らかな感覚が脳に到達したとき、ありとあらゆる感覚がようやくキラに現状の認識を開始させた。

女の子特有の香りだとか、しつとりと水分を含んだ唇の感覚だとか、もう色々とごった返しになって今にも身体が疼いてしまいそうだった。

「――ぷはっ」

ユニがそつと唇を、身体を離す。

名残惜しそうな表情と、少し乱れた息継ぎも、何故だから妙にいやらしく見える。

心臓の周りが暖かくて、動悸が収まらない。キラは胸に手を当ててさっきの感触を思い出した。それを思うと何だか自分でも分かるほどに赤面している感じだった。

「何、を……」

「わ、私は……」

ユニの声は震えていた。

「分かっているけど……でも、これだけは伝えておかなくちゃって、思ったから……」

スツと背を向けて、ユニは颯爽とその場を去ろうとする。

呆然とベンチに腰掛けるキラは、そつと唇に手を添えてユニが去った方向に視線を向けていた。

これは、いったい、どういう意味だったのだろうか――、と。

EP. 22 [CONFUSION, SETTLEMENT]

「……………はふう」

キラは溜息とも何ともつかぬ息を吐いた。

翌日の朝、キラはどうともつかない面持ちで目を覚ました。

——いや、朝を迎えた。

ぶっちゃけたところ、一睡もできなかったのがキラの正直な現状である。

あの後、結局、どうやってこのホテルにたどり着いたかは分からないし、確か夕食を買ってきて欲しいと頼まれていた気がするが、買ってこなくてネプギアに怒られたつけ、どーだったつけとか思考する前に、まず浮かんできたのが、ユニの顔だった。

無機質なホテルの天井、何の模様も彫られていない故に自分の心が深く反映されてしまうのかもしれない。

キラは未だ動こうとせず、ボーッと天井を眺めていた。

——結局、アレはどう意味だったのだろうか。

フツとキラの脳内にそんな疑問が浮かび上がった。

一度、瞼を瞬かせてから深く吐息し、すっかり停止してしまった脳を働かせるように、新鮮な酸素を肺に取り留めた。

まだ、一晚経過したというのに、その感触を思い出すことができる。キラはそつと唇に手を当てた。

(キス、だよな……)

昨日の行為、アレは間違いなく——『キス』だ。

既に何巡もこの思考を廻らせているが、やはり自分の認識は間違っていないかと、キラは両手をベッドの上に投げ出す。

それがどういった意味を表すかと言うことくらいは、キラも分かっていた。

しかも、それは貴族達が挨拶をするようなものではなく、純粹に、相手に捧げるための、大切な、とても大切なもの、だろう。

つまり、それは――

（『そういう感情』って、ことなのか……？）

そういう感情、ということくらいは容易に察しが付く。

だが、果たしてそれに対してユニはどういった答えを求めているのだろうか。

（どうもこういう事は苦手だな……）

大きな溜息を一つ。

キラはこういった事に関してはかなり無頓着だった。

昔、似たような話を友人に持ちかけられたことがあった。けれど、それに対してキラは何の助言もしてやることはできなかった。

そういった感情に、どう対処してよいかが分からなかったからだ。もちろん、それは今も変わらないのだが。

今更ながら襲ってきた眠気を振り払うようにキラはごしごしと目元を擦って上体を力無く起こす。

隣のベッドでは未だネプギアがすやすやと安らかな寝息を立てていた。

それを横目に流してキラはスツとベッドから腰を上げ、何か飲み物でも買ってこようと思い、軽く身支度をして自室を後にした。

ホテルのロビーに備え付けてある自動販売機にめばしい飲み物が無いことを確認して、面倒くさげに呻いてからキラは自動ドアをくぐって外に出る。

眩しいくらいに朝日がキラを容赦なく照りつけて思わず目を細める。ホテルから数分歩いた位置にある自販機のボタンをプッシュして取りだし口からコーヒーを取り出す。

朝一番、眠気のまとわりつく気分を晴らす如くコーヒーのほどよい苦みが全身を駆けめぐり、キラの眠り掛けていた脳味噌を覚醒させていく。

フツと吐息して帰還しようとホテルの方に身体を向ける。

と、そこで見慣れた男性がキラの視界に映る。

「ガナッシュさん」

「おや、おはようございます」

ギルドの局長を務めるガナッシュだ。

キラが会釈するとそれにならない、向こうも軽く頭を下げた。相変わらず微笑を浮かべた表情は人の良さそうな印象を与える。

紙袋を抱えているところを見ると、恐らく買い物帰りだろう。

キラがそんなことを思っていると、ガナッシュは思い出したように短く声を上げてピッと指を一本立てた。

「そうそう……貴方が探しているという『宝玉』ですが、目撃情報がありましたよ」

「……本当ですか？」

「ええ。信用はできると思いますが？」

逡巡のようなものを見せたキラだが、少しでも可能性があるのなら載らない手はないかと考えて、深く首肯する。

意図が分かったらしいガナッシュは顎に手をやって口を開く。

「ここより南方にあるダンジョンの……ミッドカンパニーという廢地に済むモンスターが落とすと聞いています」

「ミッドカンパニー……」

確かキラが聞いた話ではそこは3年ほど前にアヴニールという会社が使っていた廢工場だという。すっかり人の出入りが無くなりモンスターが住み着くことはよくある話だった。

ともかく、入手場所は意外にも近くにあったことに安堵しつつ、キラはガナッシュに礼を言っておネプギアを回収するべくホテルへの道のりを駆けていった。

そんなキラの背中を見送るガナッシュの脇、路地裏の影から黒いコートを纏った青年が姿を覗かせる。

「お前が宝玉と血晶を必要としていると言うから探してやったのに、アイツらの手助けをすることになったんだが……」

憎らしげに、青年はフードの奥からガナッシュを鋭く睨む。

おどけた様子で肩をすくめてガナッシュは唇を動かした。

「いいではないですか。若い世代に望みを託してみるのもなかなか面白いことですよ？」

「……そんな簡単な話じゃない。お前如きが割り込むな」

「申し訳ないですね」

「それに……俺はアイツらに協力するつもりはない。寧ろ——」

そこまで口を開いたところで、青年は迷いのようなものを見せてからスッと背を向けた。

「おや、どうしたんですか？」

「何でもない。このことは他の誰にも話すんじゃないぞ」

「……分かっていますよ」

ガナツシュは小さく首肯すると、うつすらと不敵な笑みを浮かべて青年に視線を向けた。

それを肩越しに睨むと、青年はトンと小さく大地を蹴って、ふわっと空中に舞い上がる。

「俺は——」

☆ ☆ ☆

ネプギア、ユニ、——そして、キラ。

二人が睨み合う中で、キラはたらりと冷や汗を流した。

遡ること、数十分前。

たたき起こされたネプギアは眠い目を擦ってミッドカンパニーの地面を踏みしめた。

今まで半眼で「眠い」だの何だのをぼやいていたネプギアだが、廃れているとはいえ工場、しかも何故か数年放置されていたはずなのにまるで廃棄された当時の姿を映しているが如き工場であったので

ネプギアのテンションは一気に有頂天になった。

「工場……工場だあ!!」

「あー、うん……」

一方で、一時的に目は冷めていたがやはり一晚眠らなかつただけのダメージは抜けきらず再び睡魔が襲ってくるキラが、ネプギアの言葉に対して曖昧な返事を送った。

どたばたと走り回るネプギアを背後から見据えてキラはごしごしと目元を擦る。またしても、ネプギアの姿が妙に見えたのだ。

何故か一部だけブレて映ってしまう。

これは流石に眠気のせいではないだろう。怪訝な顔つきで一点を睨む。

それに気付いたらしいネプギアが心配そうに駆け寄ってくる。

「キラ、怖いよ?」

「え、そうか……」

しかし、次に見た瞬間にはネプギアの姿に異常は見られなかった。やはり寝惚けていたのだろうか。

キラは力無く笑いを返すと気を引き締めるために両頬を叩いて何とか睡魔を追い出した。

それから歩いて数分――、

「あ、キラ。アレじゃない?」

「ん……」

視線を向けるとそこにはガナッシュから情報を受けたモンスターの姿があった。

こんなに早く見つけれられるとは好機と言わんばかりにキラは刀を握ってネプギアを見た。

「うし、行くか」

「うん!」

ネプギアも返事と共に剣を構える。

やはり、ネプギアは元気でなくては――そう思いながらキラはモンスターへと突っ込み

「覚悟しろッ！」

「覚悟しなさい！！」

「覚悟してください！！！！」

綺麗にハモった。

全員が全員、表情を驚愕に染めて互いを何度も見返していた。

「「ユニ（ちゃん）！？」」

「キラ、ネプギア！？」

ビシィッとお互いを指さして、相変わらず驚きの声を木霊かせた。

（（（な、何でこんなところに……！）））

全員が全員、表情を驚愕に染めながら心の中で同じ事を思った。

そして何より驚きのレベルが段違いなのがユニだった。

「あ、あんた達、何でこんなところにいるのよ！」

理不尽なことを言われて思わずキラとネプギアがお互いを見て苦笑しきった。

「そう言われても……」

「私達は宝玉を取りに来たんだよ」

「ほう……、そういえばそんなこと言ってたわね」

ジロリとユニが二人を睨む。

バチッとユニがキラと視線があった。何だか気恥ずかしくなってキラはスッと視線をそらした。

ユニも少し赤面してから腰に手を当てて仁王立ちになる。

「悪いけど、私も宝玉を取りに来たの。あんた達に渡す気はないから」

「えー！？ ヒドイよユニちゃん！」

「何よ、私がどうしようと勝手でしょ！！」
「がちんこっ」と額を擦りつけて二人が呻る。

そして、時間は基本軸へと戻った。

二人の間で仏のように、いや、仏になりたい一心で佇んでいるキラは『あ、なんか久しぶりだなあ』と、当人達が聞いたら確実に憤慨するであろう事をマイペースに思いながら目の前で繰り広げられる言い争いを半ば諦めたような感じで見ていた。

「と、とにかく私はアンタなんかには渡さないんだから！」

「ゆ、ユニちゃんも……！　で、でも、私も負けないもん……！」

二人がジャキリと武器を構えて今にもバトルTAKK2をおっ始めようとしていたので、我に返ったキラが二人の武器を構える手を押さえて諭すように言葉を紡ぐ。

「ダメだ、いくらこれ以上話をするのが嫌になったからって手を出したら」

「ぐ……」

「ほら、しっかり話し合いをしようぜ」

何だろう、例えるなら学級委員長かなと武器を構えたままネプギアがマイペースなことを思った。

ユニは顔を俯かせてチラチラとネプギアを盗み見る。

「わ、私……」

ユニが口を開いたところで――

「雁首揃ってやがるなッ！」

ダンジョン内に響き渡る声が全員の視線を集めさせた。

そこには鉄パイプを担いだ、すっかり見慣れてしまった下っ端の姿があった。

「また出た……」

厄介だ、とでも言う風にキラは額を押さえた。

「またコイツ？　懲りないわね……」

「下っ端だから労働条件も厳しいんじゃない……？」

「だから下っ端って呼ぶんじゃないネエ！」

キイツと怒る下っ端が鉄パイプで地面を叩くと、懷からディスクを取り出して今し方倒そうとしていた目標のモンスターにディスクを挿入した。

途端に、特にキラ達を気にもしていない風だったモンスターが目の色を変えて飛びかかる。

中型モンスターならではの鈍重な一撃と俊敏さを持ったモンスターではあるが、しかしあちらに勝機はないようにも思われた。

何故なら――

「「ええええええええいっ!!」」

ネプギアとユニが同時に放つ魔法弾でモンスターを吹き飛ばし、ネプギアが剣を一閃、文字通りモンスターを一刀両断した。

「女神二人相手に喧嘩売ろうなんてアホだなー」

キラが最早、感心しきった風に下っ端に視線を送った。

ギリと歯を食いしぼる下っ端は悔しそうに表情を歪めて捨て台詞を吐くとその場を立ち去っていった。

「追いかけないの？」

「別にいいだろ。それにあっちより重要なこともあるしな」

スツと井崎ほど二人が倒したモンスターがたおれていた位置に視線を向ける・

そこには宝石のように透き通った拳ほどの大きさの石片があった。

コレが宝玉だ。

スツとそれを拾い上げる、がどうしたものかと思い、ユニの方を向く。

しかし、ユニはふいっと視線をそらした後に踵を帰してダンジョンを去ろうとする。

「……いいのか？」

「貸しよ。次はないんだから」

ぶっきらぼうに言っただけのけるユニの背中を見送りながらキラはフツと口元の筋肉を緩めた。

――と。

そこで妙なモノが見えた。

ユニが通ろうとしている入り口の脇に、黒い影が。よく目を凝らしてみる。それは、汚染モンスターだ。

「ッ——！」

そしてその奥に、下卑た笑みを浮かべる下っ端の姿があった。

まさか、今までののは、全て、下っ端の作戦だったのだ。

考えるよりも先に、キラの身体は動いていた。

「ユニ——————ッ！！」

ユニが目を剥くのが見える。

そして、その背後から振り下ろされるモンスターの鋭く尖った爪——。

ザン、とその爪が弧を描いて振り下ろされた。

それはやがて、キラの背中、肩から腰までを切り裂き、あろうことか追撃、横一線に振られた。

「ガッ……！！」

「ッ——！」

ドサツとキラのユニの身体が地面に叩き付けられる。

ユニは慌てて身体を起こしてキラの身体を見た。

傷が深すぎる。

ぱっくりと傷口が開き、そこから肉が見えていた。

苦しい呻きを上げていたキラだが、やがてそれは小さくなり震えていた肩も微動だにしなくなった。

「き、ら——」

震える声でユニが言葉をひねり出した。

何もかもがカタカタと震えて、その瞳の焦点が合わなくなる。

そして、絞り出す。渾身の、最悪の言葉を。

『邪神化——』

ネプギアは思わず顔を覆った。

周囲に積んであった段ボールの箱が音を立てて地面に崩れ、そして吹き飛び破損していく。

次に目を開けた瞬間に、ネプギアが、絶望を見ることになる――。

ユニの身体を中心に、旋風が、いや黒いオーラがまとわりついていった。

「あ、あ……あ、ああ、ああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああッ！！」

「」

ユニは頭を抱え込んで、絶叫した。

艶やかな黒の髪は、渦を巻き白く、無機質に。

鋭い眼光が、柔らかく、まるで失つたように力無く半眼になり、その瞳が色を灯さなくなる。

纏っていた衣服が綺麗さっぱり無くなって、ユニが纏っていたのはまるで甲冑を思わせる巨大な、騎士のような鎧。

これは――

ネプギアは小さく口を開いた。

これが悪夢でなければ、何なのだろうか――と。

思わずごくりと唾を飲んでしまう。

咆吼を上げて、モンスターがユニへと突っ込む。

ユニが右手を握った瞬間、そこにユニの等身の2倍はあろうかという巨大な銃剣がそこに存在した。

それを軽々と片手で構えて、ブンと空へ向かって横薙ぎに放つ。

瞬間、黒いオーラが閃を描いた空中から沸き上がり、斬撃波がモンスターを襲う。

『ギャアッ!!』

悲痛に叫んでモンスターはドサツと二つの音を立てて姿を消した。しかしユニはそれに一瞥もくれることもなく、スツと下っ端の方に足を向ける。

「チィ……!」

舌打ちをして、下っ端はそこから逃走しようと駆ける。しかし、ユニがもう一度、銃剣を振り落とすと工場の壁が裂けていき、下っ端の行く手を阻んだ。

「ッ……!」

腰を突いて下っ端がガクガクと震えている。

ツカツカと音を鳴らしてユニが下っ端に歩み寄る。

「――」

言葉を発しない。

しかし、彼女が何といったのかは十分に理解できてしまった。

ただ――

『終わらせてあげる――』と。

ユニが銃剣を大上段に振りかぶった。

思わず下っ端が両手を前につき出す。

次の瞬間、ユニの左手が真横に突き出され、それから遅れて爆音が響き、ユニの左手からブスブスと煙が上がっていた。

瞳だけを真横に向けると、そこには武器を構えたネプギアが女神化した姿で立っていた。

ぴくりとも表情を動かさずにユニはスツと姿勢を戻した。

「ユニちゃん……ダメだよ」

「――」

「こんなことをしたってキラが悲しむだけだよ!」

「――、」

揺らがなかったユニの表情が微かに変化した。

スツと武器を降ろしてネプギアは諭すようにユニへ語りかける。

「キラが言ってたんだ。『人殺しなんかになるな』って……。きつと、ユニちゃんにも同じ事を言うはずだよ」

ユニが、今までネプギアを収めていた視線をスツと下に落として、向こうに倒れているキラを見据えた。

恐らくネプギアが治療を施したのだろう。しっかりとした応急処置がされており、幸いにも命を落とす危険性はなさそうだった。

しかし、それをユニが認識できたかは――

『キラが死んだのよ。コイツのせいだ。』
で。だからだ。』

「違うよ……キラは、ちゃんと生きてる。だから、やめよう？」
スツとユニが武器から力を抜いた、ように思えた。

が、すぐに武器を握り直して大地を蹴って、あろうことかネプギアに斬りかかる。

「ッ――！」

今まで感じたことの無いような衝撃が、ネプギアの全身を襲う。
ビリビリと空気さえもが揺れていて、一撃が重い。

「く、うう……！」

『偉そうなこと言わないでよ』

バツと剣を弾いて更に一撃、辛うじて体勢を立て直してネプギアは後方に跳ぶ。

弾き飛ばされた剣を拾い上げて魔力を収束させて放つ。

剣でそれを斬りつけて、お返しとばかりにユニは銃剣から多段エネルギー砲を放射する。

「きゃ……ッ！」

それ程まで力の差が出るのか。

ネプギアが紙切れのように吹き飛ばされて、後方の壁に強かに叩き付けられた。

「ッ……！」

表情を歪めて、ドサリと地面に落下する。

無表情でネプギアに歩み寄ろうとユニが一步、また一步と足を進める。

そこで

「ゆ、に……」

『――』

意識を取り戻したキラが、背後からユニを抱きしめる形で立っていた。

息遣いも荒く、今にも倒れてしまいそうな佇まいである。しかし、それでもどこか決意したような表情でキラは優しく包んでいる。

「大丈夫だよ……。俺は、ちゃんと生きてるから……」

息も絶え絶えに、キラはそっとユニの手に自分の手を重ねた。

「だから……ユニ、もう止まってくれ……」

あの時と、同じだった。

キラとユニの身体を中心にして、勢いのある旋風が巻き起こり、そしてユニの身体を覆っていた装甲が光を発して一度、黒く光ったかと思うと、次の瞬間には白い甲冑に替わり、淡く空気に溶けていく。

「あ……」

目を開けていられないほどに発光し、キラは目を覆った。

そしてゆっくりと目を開くと、そこには見慣れたユニの姿と、真っ白な背景の空間だけが映し出されていた。

『二人』だけが取り残された、絶対的な孤立空間。

ゆっくりとキラは真下のユニに視線を落とすと、恐る恐るその表情を覗き込んだ。

「ユニ……？」

「ッ……」

ユニはバツと顔を上げた。

そこには、頬を紅くさせて目尻には涙を溜めた、なんて事はない、ただの、普通のどこにでもいるたった一人の少女の表情をしていた。

「キラ……私……!」

「うん、大丈夫だから……」

そっと抱き寄せてポンポンと頭を軽く撫でてやると、ユニは何も言わずにただそこに収まっていた。

「……キラが死んじゃうかもって思ったら」

「うん？」

ユニが突然、キラの腕の中で言葉を発した。

いきなりということで状況把握ができないキラが問い返したが、少し言葉を詰まらせてからユニは口を開く。

「キラが死んじゃうかもって思ったら……私、いつの間にか、あんなこと……ッ!」

押し殺したような声。まるで、悲しみを抑え込んでいるような細かい声。

自分は、自分はこんなにもこの少女に思われていたんだと、――後悔だろうか。

スツと目を伏せて、こつんと自分のこめかみに拳を当ててから、キラはスツと大きく息を吸った。

「俺は、死なない――」

「え……?」

「お前が望むのなら、俺は絶対に、死なないから……」

根拠はない。

そうできる確証も、或いは方法もない。

我ながら、なんて虚言だろうかと嘲笑う。

けれど、キラは咄嗟にそう言っていた。自身に満ち満ちた表情で。

「だから――」

キラが言葉を発し掛けたところで周りの白い背景が解けていく。

先程まで映っていたダンジョンの風景、そして戦闘の痕。

どうやら下っ端はいなくなったらしい。

しかし、それよりも、キラはとてつもない事実に、たった今、気付いてしまった。

「え……?」

力が抜けてしまった。

リラックスなんてモンじゃない、完全に自分の身体の中から力という力が抜け出てしまったような感覚が、キラの身体を襲った。

「わたッ……!?!」

当然、身体を支えきる事なんて不可能である。

キラの身体が大きく揺れて、ユニ諸共地面へと叩き付けられて――

「ん……」

薄く目を開ける。

そこには、精一杯見開かれた両目と、やけに可愛らしい顔立ちをした少女がいて。

唇が、少し痛かった。

「――!?!」

その時、キラの顔が一瞬で真っ赤になった。

キラとユニの唇が重なって、キス、をしてしまったのだ。

「ッ、わわ、――!?!」

混乱しきってキラが慌てて身体を起こす。

今までしたこともない機敏な動きを見せてキラがその場を飛び退く。

「ゆ、ゆ、ゆ――! ハッ!?!」

直後、背中にとてつもない悪寒が駆けめぐった。

ぎぎぎ……、と恐る恐る背後を振り返ると、そこには氷河よりも冷たい瞳をしたネプギアがうつすらと微笑を携えてそこに佇んでいた。

「キラ……」

「や、あの、これは、だな――」

しかし、キラの弁解虚しくネプギアがニコツと満面の笑みを浮かべると、躊躇いなく拳をキラの脳天に叩き落とした。

「ぎゃふっ……!」

妙な呻きを上げて、キラはドシャツと地面に倒れ伏した。

「あれだけ心配させておいて……!」

「ずびばぜん……」

地面に倒れたままキラが呻きとも言葉ともつかない微妙な感じで返事をした。

ひとしきりネプギアがキラに制裁を加えてから、スッと腰を上げて静かにユニの元に歩み寄る。

「ユニちゃん……」

「ッ……」

思わずユニは顔を背けた。

けれど、チラチラとネプギアの姿をのぞき見てからフツと大きく息を吐いて、小さく唇を上下させる。

「あ、あのね、ネプギア……」

「なあに？」

「一回しか言わないから、よく聞いて」

ネプギアはキョトンとした表情でいたが、ユニは妙に強張らせた顔つきになってから数回深呼吸を繰り返して両頬をパチンと叩いた。それからもしもじと視線を外し気味に口を開く。

「あの……この前は悪かったわ……。いきなり襲い掛かったりして……」

「……」

「私……どうしてもアンタの強さが知リたかったから……。アンタがギョウカイ墓場に連れて行って貰えたワケをどうしても……」

ネプギアは数回、両目をぱちくりと瞬かせると、ニコツと笑ってから答えた。

「なんだ、そのことかぁ」

「な！」

ユニとしては一世一代の大決心をして挑んだというのにネプギアと来たらそんなことを言い出したのでユニが衝撃を受けた。

「そのことなら私、全然怒ってないよ？」

「ぐ……けど、私は……」

「ぶつかって分かることもあるもん。私は、きっとそういうことだろうって思ってたから」

そんなネプギアの調子に、ユニは何も言えなくなつてグツと口を閉じた。

「そして、これからもぶつかるとも、あるかもね」

チラリと向こうで未だに地面に倒れ伏しているキラに視線を送つてから、ネプギアがニコツとユニに微笑みかけた。

一度、むっとした表情になりかけたが、ユニはスツとまた深呼吸をしてからそれに微笑を返した。

「そうかもね……」

ユニは地面に落としていた腰を上げて、ネプギアと並んでキラの元へと駆け寄った。

虚ろな瞳をしているキラをたたき起こして、ネプギアとユニは同時にキラへと飛びつき、その衝撃で後方に吹っ飛んだキラは後頭部を強打してそのまま昏倒したが、それはまた別のお話――。

EP. 22 [CONFUSION, SETTLEMENT] (後書き)

http://623.mitemin.net/i33415/

恐らくたぶんけっこうネタバレがあるような無いようなやっぱり無

いような気がします。

見たい方だけでもどうぞ。

結構汚いですが

EP. 23 ソンナノ絶対認メナイ

ラステイション中央協会本部――

その応接室の一室には、三人の人物がいた。

キラ、ネプギア、ケイの3人である。

昨日、無事にケイから指定されていた素材、宝玉と血昌の二つを回収し、こうして教会へと赴いていた次第であった。

「素材回収、お疲れさまだね」

一番に口を開いたのはケイだった。

ニコツと彼女にしてはかなり珍しく労いの言葉を掛けられたことに身震いしつつ、キラは姿勢を崩して口を開く。

「相変わらずこちらの情報は既にお持ちなんですね……」

「優秀な監視者を雇っているからね」

フツと笑ってケイは目の前のコーヒークップに手をのぼし、それをかたむけて喉を湿らせる。

待ちきれない様子のネプギアが身を乗りだしてケイに問い掛ける。

「それより、早くゲームキャラの居場所を教えてください!」

「まあ、少しゆっくりしたらどうかな? これから暫く長旅になるだろうしね」

カップを置いて、ケイがそう言った。

確かに彼女の言うことももっともではあるのだが、如何せんレアとはいえたった二つの素材を見つけるだけに時間を掛けすぎた。二人としては少しでも急ぎたい事案ではあったのだが。

「それよりも、交渉の件がまだ済んでいたかっただろう?」

「……ギョウカイ墓場のことについて、ですよね」

「もちろん」

ネプギアがごくりと

息を呑んでからおずおずと話し始めた。

マジエコンヌのこと。

守護女神のこと――。

ひとしきり話を終えたところで、ケイはフツと吐息してからソファの背もたれに体重を乗せた。

ポーカーフェイスの彼女にしては珍しく感情を動かして、大きく安堵したような顔つきだった。

「そうか、ノワールは無事なんだね」

「そう思うのならもう少し協力的でもよかったのでは……？」

ジトツとキラが半眼でケイを睨むが、当の彼女はニツと口元をつり上げてから嫌みたらしく答えた。

「一方的な妥協は、ビジネスとして成立しないからね」

「……そーですか」

何かもう色々コメントするのも疲れてきたキラが力無くそう返した。

「まあ、とにかく君達が集めてくれた素材のお陰でこちらの仕事も何とか予定に間に合いそうだ。その事については感謝するよ」

「あの素材で何かするんですか？」

素材を取ってきた以上、それで何かをするのは明白ではあると思うのだが、やはりそう聞いてしまうのだが人間の性なのかもしれない。ケイは「ふむ……」と小さく呻ってから顎に手をやる。

「まあ、その事くらいなら明かしてもいいかな。実はこちらである機械を製作中なんだ」

「ある機械……？」

勿体ぶるような言い回しにキラが眉をひそめる。

「まあね、それはシェアを増幅させる機能があって、少量の信仰力で膨大な力を持つシェアクリスタルを生成しようと言うわけさ

「しえあくりすたる……？」

キラが頭上に疑問符を大量に浮かべた。

ネプギアがそうだった、とばかりに額を押さえてからキラの方に顔を向けて口を開いた。

「ええと、シェアクリスタルって言うのは、人々の信仰力、つまりシェアを物質化させたもののことなんだ」

「へえ」

「それがあれば直接的な信仰が無くても女神に力を与えることができるという優れたものなんだけど、どうもそれを作るには大量のシェアが必要みたいでね」

ポンとキラが閃いたように掌を打つ。

「こんな状況ですから、少ない信仰心でもそのシェアクリスタルが出来上がるようになってことですか」

「ご名答、頭の回転がいい人は嫌いじゃないよ」

ケイがフツツと笑うのに対してネプギアがバツとキラの前に右手を差し出した。

あと、ケイの背後からとてつもない邪悪なオーラが放たれている気がしたが、キラは何一つ気付いていない様子で困惑に満ちた表情になっていた。

「冗談はさておき、次はゲームキャラについての情報だね」
待ってましたとばかりにキラとネプギアが耳を傾ける。

「ラストイシヨンのゲームキャラはセプトトリゾートというダンジョンの奥地にいる。詳しい道のりは地図をあげるからそれを見て行くといい」

「助かります」

「ま、あの頑固者に言うことを聞かせるのは大変だと思うけど、頑張ってるね」

似つかわしくない言葉に背中に変な汗が出てきた。

しかし、ケイはそれを気にした風はなく、短く声を上げた後にピツとキラとネプギアを指して口を開く。

「君達はこの後、何処へ向かうつもりだい？」

「……一応、ルウィーへ」

「そうか……」

小さく呻ってからケイは考え込むように視線を下に落とす。

どうも様子がおかしいようで怪訝な顔つきになりつつ、キラが問い掛ける。

「何か？」

「いや、あそこは少し大変だろうと思うけど、頑張ってくれ」

「心にもない応援ありがとうございます……」

キラはそう言うのと重い腰を上げて応接室の扉を押し開ける。ネプギアも後に続き、そして一瞬、動きが止まった。

「ユニ？」

そこに、一人の少女――ユニが壁に背を預けて立っていたからだ。バチツと目が合って、何故だか気まずくてふいっとお互いに反らしってしまった。

しばらくそんな無言の一時が流れ、不意にユニが口を開いた。

「行っちゃうの……？」

「あ……？」

それが何を意図するのか、キラは言葉を詰まらせた。

ユニの表情がひどく悲しげに見えてしまったからだ。

戸惑いと狼狽に満ちた表情になって、やがてキラが小さく首を達に振った。

そう言ったとき、ユニの視線が少しだけ下がった気がした。

「そう……」

スツと音も立てずにユニはその場を離れて教会の奥に行こうとする。

「ユ――」

「あんた達と遊んだとき、凄く楽しかった」

「へ……？」

キラが呼び止めようとしたとき、ユニが不意に言葉を発し、思わず間拔けな声を上げてしまった。

「そんな時間が凄く嬉しくて、ずっと頭から離れなくて……だから」
ユニがくるっと身体を捻ってこちらに表情を向けた。

それは先程とは打って変わって、どこか吹っ切れたような表情をしていた。

「だから、また……遊んでくれる？」

キラが面食らったような表情になった。

横にいるネプギアも同様だ。

それから恐る恐る顔を見合わせてからフツと力の抜けたような笑顔になる。

「もちろん!!」

満面の笑みで、キラとネプギアは、ユニに対してそう答えた。

☆☆☆

セプテントリゾート――

ダンジョンの中を突き進む中で、ふとキラのGギアがコール音を発した。

最近、連絡を怠っていたからもしかしてお怒りの連絡でも来ただろうかとキラが恐る恐る端末のメールボックスを開く。

そこには一通、アイエフからのメールが届いていた。

「どれどれ……」

そのメールの内容を確認するために端末の画面を叩く。

内容は――

『差出人…アイエフ

件名…無題

内容…許可が出ました（＊、▽、＊）そっちの状況はどう？』

何かやけにリアルの性格と文面状の性格が異なっているのが気になるところだったが、なんかそこをツツコンだら後で色々と言われそうな感じがしたので特にそこには触れず、キラは

『内容…これからゲームキャラに会いに行きます。この後はルウイ

」に向かおうと思うのでそちらで合流しましょう』
と、特にボケた感じもなく、普通の文章を返信した。

それから更に数分歩き、ゲームキャラがいるという奥地にたどり着いた。

キヨロキヨロと周囲を確認し、プラネテューヌのときと同じように大きな広間の真ん中にぽつんと台座が佇んでいるのみだった。そしてその上に黒いレコードのような物体が鎮座している。

これが、ラストেশヨンのゲームキャラである『ブラックディスク』だろう。

キラはスツと大きく深呼吸してから口を開いた。

「初めまして、貴女がブラックディスクですね？」

「……む、なんだ騒がしい」

この程度で騒がしいなんていつもとんだ静かな空間で過ごしているんだろうかという疑問が浮かんだがどうでもいいのでそれは切り捨てた。

「プラネテューヌの女神候補生のネプギアです。ブラックディスクさん、貴女にお願いがあって来ました」

「……ほう？」

面倒くさそうに答えていたブラックディスクの口調が少し変わった。

「……なるほど、少し前からラストেশヨンに妙な者が侵入してきたかと思えば、プラネテューヌの女神か……」

「はい」

「話は大体察しが付く……。守護女神のことだな？」

問い掛ける声にネプギアが深く首肯する。

「守護女神を助けるために、私の力が欲しい……と？」

「できるのならば同行を願いたいんですが」

キラの言葉にブラックディスクのオーラが変わる。

睨まれているわけでもないのに、ビクツと体が震えて心臓を鷲掴み

にされているような気分だった。

「何も知らぬ小僧が舐めた口を……。私がこの地を離れることが何を意味するのか分かっているのか？」

ブラックディスクの言葉にキラは必死で記憶を辿る。

ゲームキャラとは、女神の身に異変が起こったときに発動する、女神の代わりにその地を守護する存在。

だが女神は不在、それにゲームキャラまでがいなくなったとしたら……

「土地の崩落、ってことですか……？」

「よく分かっているな……。そういうことだ。私がこの地を離れるわけにはいかん」

それに、とブラックディスクはネプギアに向けて言葉を放った。

「私の使命はこの地を守護すること。本来の役割に女神の救出は含まれてはいない、力を貸す義理もない……」

「「な……！」」

キラとネプギアは揃って衝撃の声を上げた。

それもそのはず、力を貸してもらうつもりで訪れたのにそれを拒否されたからだ。

「でも、パープルディスクはちゃんと協力してくれたんですよ？」

「他のゲームキャラ達がどうしようと私は知らん……。奴らの好きにさせればいい」

キラはようやく、ケイが言っていた『頑固者』の意味が分かった気がした。

確かにコレを説得するのは骨が折れそうだと、聞こえないように溜息を漏らした。

「で、でも……」

「何と言われようと、私は考えを曲げるつもりはない……。分かったらとつとここを去れ、付き合っているヒマはない」

ブラックディスクはそれっきり黙りこくってしまった。

それを見てから、キラは意を決するように大きく深呼吸をしてから

口を開く。

「そうやって逃げるのか？」

「……なんだと」

ブラックディスクのむっとした声が響いた。

しかしキラはそれに構わず言葉を続ける。

「できる力があるのに、それをやらないなんて逃げているだけじゃないか」

「世界にはルール、規約というものがある。それを破っての行動をするなどあまりに馬鹿げていることだ」

「それだけか？ 護ることができる力を持ちながらそれをルールだ何だって割り切って振るわないのか？ そんなだったら……、俺はそんなルールを認めない！ そんなことで得られる名誉があるとすれば、俺はそんな名誉は要らない！ そんな決まりは俺がぶち壊してやるよ！」

キラは渾身の言葉を叫んだ。嘘、偽りのない、キラの本当の心の内からの言葉をさらけ出して、吐き出した。

ブラックディスクは黙ったままだった。

それから吐息するような声を零してから、ピッとまるでキラを見据えるようにしてから言葉を発した。

「そんなルールは認めない、か……」

どこか納得した風な、感心した風な声を零してブラックディスクは続ける。

「フン、小僧がまたしても舐めた口を……」

そうは言うものの、先程のような圧倒的な威圧感はなく、まるで毒気を抜かれたような穏やかな口調となっていた。

「その言葉、本当に偽りはないか？」

「ツ——、当たり前だ」

キラの言葉を聞いて数分間が開き、ブラックディスクがおもむろに言葉を紡ぎ始めた。

「なるほど、どうやらお前には何か特別な力があるらしい……」

「え……?」

思わずキラは自分の耳を疑った。今、ブラックディスクは何を言ったのかと。

自分は、何の変哲もないたった一人の人間のハズ『だった』。けれど、ブラックディスクはいったい何を感じ取ったというのだろうか、キラは恐る恐る目の前に台座に視線を向けた。

「お前は、人を引き寄せる力があるらしい……。私だけじゃない、プラネテューヌの候補生の娘も、ラストেশヨンの候補生の娘も、な……」

その言葉に、今度はネプギアが同様を受ける番だった。

その反応に満足がいったのか、ブラックディスクはどこか嬉しそうな声で答えた。

「いいだろう、私はお前を信じよう……。名は?」

「キラ、です」

「うむ。では、キラ、そしてパープルシスター……。私の力を授けよう」

キラが両手を前に出すと、その上に黒いディスクが現れた。

これがゲームキャラの力を集約したディスクだろう。

「本当なら私が付いて行ってもよいのだが……。やはり守護が働かなくなるのはマズイ事態だろう。それで我慢をしてくれ」

「いや、助かるよ」

「ありがとうございます!」

ネプギアに習ってキラも頭を下げる。

その様子を微笑ましく見つめていたブラックディスクは思考の片隅で（我らのルールの何もかもを超越した世界……。それを見てもみるのも、なかなか面白いことかもしれんな……）

そんなことを思っていた。

その視線に気付いたかどうかは分からないが、キラはフツとブラックディスクに微笑みかけてから言った。

「お前はどうするんだ?」

「うむ？ ……むう、そうだな、後に術式を組みここを離れようと思う。犯罪組織の連中も躍起になってここを探しているようだし、直に危険になるだろう」

「そうですか……」

「なに、すぐにまた相見えることだろう。そのときまでにブラックハートの姿が見えることを期待しよう」

なんかももの凄い重圧を掛けてきたなー、とキラが苦笑でそれに返した。

「まあ、まずはお前達二人の無事を祈ることとしようか」

「どーも」

「さあ、いつまでもここで足を引っ張られておくワケにはいかないだろう？ 少しでも早く女神達を救出したいのであれば、な」

ブラックディスクの言葉にキラとネプギアは浅く首肯して別れを告げた。

それを見送ってブラックディスクは満足そうにすると不意に襲う違和感を感じた。

「ふむ……、アレは……？」

しかし、その答えは浮かばない。

ブラックディスクは心中で小首を傾げて、自分の記憶を深くまさぐった。

＊

「これでゲームキャラ二人目と協力完了だな」

キラはディスクを専用のケースに収めてネプギアに手渡す。

「そうだね、ブラックディスクさんも初めは凄く怖そうだったけど、優しかったし」

その事についてはキラも同感というか、あまりにも変わりすぎだろ感満載で少しだけ戸惑っていた。

それはともかくとしてスツと遠くに見えるラストেশヨンの街を視

「な——！」

冷たい感触、

「ん——」

後頭部に衝撃が走る。

冷たい感触の中に、痛打した後頭部だけが妙にじんじんと熱くなる。視界に紅い液体が見えた。

これは——

（ここ——、）

それを認識する前に、キラの意識は闇の中へと消えていった——。

『何でこんな役割——ッ！？』

意識を失う直前、そんな甲高い声がキラの耳に届いたような気がするが、そんなことはどうでもよかった……。

☆ ☆ ☆

同時刻——

ギョウカイ墓場。

「クソ、クソッ!!」

忌々しげにマジック・ザ・ハードは呻き、力任せに大地を蹴った。べこん、とまるで鉄球を上から落としたときのように丸く地面が陥没していき、赤黒い大地に亀裂が走る。

このところマジックはずっと不機嫌だった。

理由はもちろん、犯罪神の復活の時期の遅延についてだった。

（ここまで完璧な布陣を立てているというのに何故、犯罪神様の力が抜け出る！？ 結界は完璧のハズなのに!!）

そう。

以前にもあったように、どこからか犯罪神のエネルギーが漏れ出てしまっていたのだった。

前回なら、まだ誤差の修正の範囲内だった。しかし、立て続けに二回も、しかもこんな短いペースで怒ってしまっていては流石に修正はきかない。

つまり犯罪神の復活を先延ばしにしなければならなくなってしまったのだ。

そのことがマジックの怒りを募らせると同時に、彼女としてはもう一つの原因もあった。

それは、このところゲームギョウ界に放っていたモンスターの激減についてだった。

彼女らにとってモンスターは大変重要な計画の一つで、ゲームギョウ界の人々はモンスターに襲われるとそれだけ女神への信仰力が薄くなり、代わりに犯罪神への新効力が高くなる。犯罪神を完全に復活させる以上、モンスターの存在は必要不可欠で、犯罪組織に広報活動をさせるより遥かに効率的だからだ。

定期的に組織の人間にモンスターを召喚するように命令を下しているが、そもそも組織の人間の行方が分からなくなることが多岐にわたってあるのだ。それが例えば居場所が分かってもモンスターを召喚するディスクを壊されていたり、ヒドイものは完全に精神を破壊されていたりもした。

これは確実に裏で犯罪神復活を食い止めようとしている人物がいる。それも、強大な力を持った者が。

ギリッと奥歯を噛んでマジックは苦悩に表情を歪める。

それを阻止しようにも尻尾がまるで掴めないのも、マジックを苛立たせる要因の一つでもあった。

「モンスターよりも先に、こちらを優先すべきか……」

幾らモンスターの体制が整っているようだが、それを邪魔されては本末転倒というものだ。

再度、荒々しく地面を蹴りつけるとマジックは再び闇の中へと消えていった。

☆ ☆ ☆

時は流れて数時間後――、

すっかり日も傾き掛けた川辺で二つの影が、片方は非常に楽しそうに、もう片方はやや心配そうに身を震わせていた。

さらさらと水の流れる音が川辺に木霊して、少女達が踏みしめる雪の音がやけに大きく聞こえるのは果たして気のせいであろうか。

配色こそ違えども全く同じデザインの衣服を、道行く人々の目を惹く大きな帽子も、肩から提げた小さなバッグもそっくりだった。

しかし、何よりも、少女達の姿が瓜二つであった。

しかしながら違うところを上げるとすれば、それは少女達の佇まいで、それこそまさしく正反対とも言えたかもしれない。

青い服を纏った少女はやや控えめに、一方のピンクの服を纏った少女は活発に、川辺へと降りていった。

「ねえねえ、そろそろ暗くなっちゃうよ……？」

青い服の少女が、小さな声で片方の少女にそう呼びかけた。

しかし対するピンクの服を着た少女は人さし指をピツと立てて左右に揺らした。

「だいいょーぶ！」

「それに、二人だけで河に近寄ったらダメだって……」

「ばれなきゃいいのよ！」

そんな青い少女の忠告も聞かずに、ピンクの少女はととっと川縁の方へと向かっていく。

少し戸惑いの色を見せた青い少女、河に近付くのは怖いけど、一人になるのも怖いとでも言う風におどおどと正面と背後を交互に身な

がらやがてぴよこぴよこと先行したピンクの少女を追い始めた。

それから暫く歩き、先を行っていたピンクの少女がくるっと背後を見てから大きな声を出す。

「ねえねえー、コレ見て!!」

「ふえ……?」

ようやく後方の少女が追いついて、差指さす方を覗き込み……少女は腰を抜かした。

「ひゃ……」

そこには酷く青い顔をした少年が倒れ伏していた。うつ伏せになり、後頭部から紅い液体が白い地面を染めていき、どう見ても河から流れ着いてきたような体勢でいた。

「誰だろう?」

ピンクの少女が青い少女を助け起こしてからツンツンと少年の頭をつつきながらそう問い掛けたが、当然ながら問い掛けられた少女の方も何を知っているわけでもなくふるふると小さく首を横に振るのみであった。

「もしかして、河童さん……?」

少し前に絵本で読んだ『河童』という生き物が少女達の脳裏を掛けたが、すぐに目の前の少年の容姿がそれと異なっていることが理解できて、安心したようなガッカリしたようなどっちともつかない息を吐いた。

さておき、少女達はどうしたものだろうと思ってから、ピンクの少女がぼむと両手を叩き、小さなバッグからいそいそお携帯を取り出した。

「どうするの……?」

「ミナちゃんに連絡して、迎えに来て貰うの!」

「わぁ……」

それは名案、とでも言いたげに青い少女は顔をほころばせた。恐らく彼女たちの保護者のことだろう。しかし彼女たちは忘れていた。

『川辺には近付いていけない』という約束を破ってしまっているということに――。

EP. 24 「LOST」

「あ……?」

少年はぱちりと目を覚ました。

何故だか酷く頭痛がして、身体がとても怠かった。

数回、両目を瞬かせた後に瞳だけを動かしてキョロキョロと周囲を視界に入れてみる。

見たこともないような、とても不思議な空間――部屋だろうか。

だが、所詮は瞳を動かしているだけ。見える範囲など、たかが知れている。

むくりと上体を、起こそうと力を入れたところで針を刺したような痛みが少年の後頭部を的確に襲った。

「ッ――!」

思わず力を抜いてぼふっとベッドに倒れ込んでしまう。

そしてゆっくりと自分の両手が動くことを確認してから後頭部に触れてみる。

触った箇所がズキズキと痛む。もしかして怪我をしてしまっているのだろうか。

それから、初めて自分が包帯を巻かれていることに気付いた。

頭部、それから手首、あとは感触で腹と足。

できるだけ傷口を

刺激しないように細心の注意を払いつつ、少年がベッドに手をついて身体を起こした。

それでようやく、部屋の全貌を見て取れるようになった。

部屋の構造は至ってシンプルだった。少年が寝かされているベッドに、ソファとテーブル、テレビにクローゼット、そしてドアが一つと窓が計4つ。

少年は無機質な様子で数回瞬きをしてからもぞもぞと布団を払って足を出す。

何だかここはやけに暑い気がする、周囲を見回してから頭上で暖房が効いていることに気付く。

リモコンはどこだろうかと目を泳がせると、自分が眠っていたベッドの脇に放置してあった。それを引き寄せて設定温度に目を落とすとなんと30℃に設定されていた。通りで暑いはずだ。少年は暖房の電源を落としてから、また周囲を見回す。

「ここは……？」

虚空へと疑問を放つ。しかし、当然ながらその答えが返ってくるわけでもなく、その言葉はやがて軽く室内に反響するとそのまま空気に溶けていってしまう。

少年は半眼のまま、ベッドから降りて近くにあった靴に手を伸ばす。やけにしっくりくることに疑問を覚えつつ、それに履き替えて少年は腰を上げた。

そのまま、もう室内には一瞥もくれることなくドアに手を伸ばす。スライド式のドアが音を立てて開かれる。

外に出ると、一瞬むわっとした熱気が頬を撫でる。どうやらこっちにも暖房が効いているらしい。

ということはここは寒いのだろうか、そんなことを考えながら少年は部屋を出る。

少年が三人ほど肩を並べて歩けるくらいのやや広めの通路を歩みながらあちこちに目をやる。

窓が幾つも並び、そこから望む風景は一言で言うなら、白だった。

さんさんと降り注ぐ真っ白の雪が絶えることなく地面に落ちて、どこか幻想的な風景を形成していた。

けれど、少年はそれに対して何の感慨も抱かない様子でフツと視線をそらして背後の方へと向き直る。

初めて気付いたが、先程少年が出てきた部屋と同じような扉が幾つか並んでいた。

そしてそれぞれの扉にプレートが掛かり、恐らく名前だろうか。それが記されているところを見るとここはどこかの施設の生活スぺー

スなのだろうか。

そんなことを思いながら少年はまた歩み始める。

――それから更に数分、施設の中を歩き回ったときだった。

「あれ？」

「あ……」

「……？」

少年がフツと声の方向に顔を向けた。

二人の少女の声、何となく幼い少女のものであることが分かる。

視線を向けられた少女達は、一言特徴を表すとすればその二人の姿はあまりに酷似していると言うことだ。

少年は思わず目を細めて二人を睨めるように見回す。

身長は、恐らく少年よりかなり小さいだろう。小さな顔にくりくりとした大きな双眸が特徴的で、二人の違うところと言えば精々髪の長さと着ている服の色程度だろうか。

しかし、少年はその二人を眺める内に妙な頭痛が酷くなっていることに気付いてしまった。

表情を歪め、思わず額を押さえる。

それに驚いたのか、二人の少女の内、髪の短い方の少女がビクツと大きく震えてもう一人の髪の長い少女の影に隠れてしまった。

それを見て、初めて自分が視線を鋭くさせていることに気付いた少年がフツと筋肉を緩めてからゆっくりとその二人に歩み寄る。

「……二人は、ここに住んでいる子かな？」

優しく語りかけるように少年は声音を高くして問うた。

少女達が数秒、互いに顔を見合わせてから鷹揚に頷く。その仕草すらも同調しているように思える。

「二人は、姉妹か何かかな？」

「そうだよ？」

髪の長い方の少女がニコツと笑顔を向ける。

頬が熱くなる感じがして、少年は思わず肩に力を込めた。

——何故だか懐かしいような感じがしたからだ。

「そっか。二人は、仲良し？」

「うん！」

「うん……」

対照的な二人ではあるが、それもやはりどこか均衡を保っているように思えて、少年はフツと口の端をつり上げた。

「それはそうと、大丈夫？」

髪の毛の長い方の少女がすいっと右手を少年の額に当ててきた。

その仕草に驚きを覚えつつ、その言い分に少年は眉をしかめる。

「何が大丈夫なの？」

「……お兄さん、倒れてたから」

髪の毛の短い方の少女が小さな声でそう教えてくれた。
倒れていた——。

少年は口の中でそれを呟いてから眉根を寄せ上げた。いったい、どうして自分は倒れていたのだろうか。そして、何故この少女達がそれを知っているのか。

色々聞きたいことはあったが、それよりも少年はもっと問い掛けたいことがあった。

心の中にぽっかりと開いてしまった、大きな穴——。

「少し聞いてもいいかな？」

「いいよ！」

少女の言葉に胸の熱くなる思いを感じ取りながら、不安に表情を染めて少年はスツと口を開いた。

「俺の名前、知ってる——？」

少年には、自分が目覚める以前の記憶が、何もかもなくなってしまっていた——。

☆ ☆ ☆

「んー、頭を打って記憶が抜け落ちるって事はよくある話なんですけどねえ……」

白衣を着込んだ、見た感じまんま医師の男性が頬を掻きながら、苦笑気味にそう答えた。

その目の前には少年と、その横にまるで付き人のように佇んでいる女性が心配そうな面持ちで少年に視線を送っていた。

医師はスツとカルテを机に置き、ギシツと音を立てて椅子の背もたれに体重を掛けてから口を開く。

「まあ、記憶に關しましては時間を掛けて自力で取り戻すしかなさそうですね……。できるだけストレスを与えないようにしてください」

女性は「そうですか……」と呟き、少年の背を押して退室した。

数十分後、

少年は女性、フィナンシェから説明された『教会』という場所にいた。

いや、戻ってきた。

ドアを開けるとまず、先程の病院の待合室のような場所が目映る。チラチラと周囲を見回すと何やら鎧を装備した者やスーツのようなものを着用した職員だろうか、そんな人々が行き交っていた。

どうにも所在が無く、仕方なく少年は近くのベンチに腰を下ろす。

何とも居心地の悪い空間ではあるが、少年にとってこの世界は何も知らない土地。居心地のよい空間なんてないのかもしれない。

空っぽのほとんど『人形』のような少年がボーッと一点を見据えていると、視界の端、丁度、通路がある位置だ。

そこは奥に繋がる通路になっていて、そこから見覚えのある少女達がこちらに熱烈な視線を送っていた。

少年は穏やかな笑みを浮かべてから少女達に小さく手を振る。

記憶を失ってから初めて会話をした自分にとって害がないと確信を

持てる相手、ということもあるだろう。何故だかあの少女達には心を開いてもいいような感じがした。

そんな少年の姿を確認してから少女達は小走りにこちらに向かって走ってきた。

――と。

ずべっ

「は……」

髪の短い方の少女が強かに身体を地面に打ち付けた。

一瞬、呆氣にとられていたが少年は直ぐに立ち上がって少女の元に駆け寄る。

室内だから怪我の可能性は低いだろうが、それにしたって放っておけるような事態でもない。

ゆっくりと少女の身体を抱え込み、近くのベンチに座らせる。

膝元や腕を見て怪我がないことを確認してから、少女の表情を覗き込む。

その大きな瞳からじわっと大粒の涙が溢れ出る。

それから小さく嗚咽を上げて泣き始めてしまった。

もう一人の、髪の長い方の少女が心配そうに少女に駆け寄っている。少年はスッと少女の頭に手を置いてわしわしと撫でてやる。

「ほら、泣かない泣かない。可愛い顔が台無しだよ？」

薄く微笑を浮かべながらそう言ってやると、少女が瞬時にボンツと顔を紅くさせてから口をパクパクと開閉させる。

何かを言いたそうだが、言葉に出ないような、どうも動揺しているような感じだ。

自分が何かマズイことを言っただろうか、なんてことを考えながら少年はなおもわしわしと腕を止めない。

そこで、それを見ていたもう一人の少女が「むう」と呻ってからがばっと少年に飛びついてきた。

「もうー、ロムちゃんだけズルイー！」

「あ……」

そうだった、とばかりに少年は苦笑してから開いている左手でその少女の頭を撫でる。

すると、その途端にほにゃんと表情が緩んでしまった。

それから、少年はたと気付く。

まだ、この二人の名前を聞いていなかった、と。

「え、と……こっちの子がラムちゃん、かな？」

髪の短い方の少女を身ながら少年が問うと、二人はこくりと頷いた。

「じゃあ、君は？」

「私はね、ラムちゃんだよ！」

似たような名前だが、これも姉妹故のことだろうか、少年は納得するようにうんうんと頷く。

「お兄さんのお名前は何て言うの？」

そんな、そんな他愛もない、ごく当たり前の問い掛け。

それなのに、それだけで少年はちくんと胸が痛んだ。

答えられる名前がない——それはひどく惨めな感じがして、自分がこの世界に必要なとされていないようなそんな思いに駆られた。

きゅつと唇を噛んで、表情が陰しくなる。

とん、と肩に感覚が走る。

考え込んでいたが故に気配に気付くことができず、不意にかけられたそれに少年はビクツと大きく震える。

「あ、すいません……。驚かせてしまいましたか」

「あ……」

後方を向くとそこにはさっきの女性、フィナンシェが申し訳なさそうな表情をして、そこに立っていた。

申し訳なくなり、笑みを浮かべて腰を上げる。

「いえ、大丈夫です」

「えと、少しお時間をよろしいでしょうか？」

「？ はい……」

フィナンシェの言いにくそうな言葉に顔をしかめつつ少年は承諾した。

他よりも一際豪勢な装飾の入った扉の前、フィナンシェの直ぐ後ろに立って少年は密かに心を震わせていた。

あの物言い、どうにも心に引つかかるような、胸騒ぎがするというかとにかくいても立ってもいられないような感じだった。

フィナンシェがドアをノックして何事かを告げてからその扉を押し開け、少年に入室するように促す。

中は、少年が寝かされていた部屋の2倍ほどはある大きな部屋だった。

そして扉から真っ直ぐの言った先に大きな机があり、そこに眼鏡を掛けた知的なイメージを与える女性がそこで何かの作業をしていた。フィナンシェは女性に一つお辞儀をしてから口を開く。

「教祖様、例の少年をお連れしました」

「ああ、ありがとうございます」

女性はフツと顔を上げてにっこりと笑みを見せる。

どうやらとても穏やかな人柄のようだ。

この人々は皆そうなのだろうか、ということを考えながら少年も小さく頭を下げる。

女性は椅子から腰を上げて少年の前へ歩み、右手を差し出す。

握手を求めているのだろう、少年もそれに右手を差し出す。

「私は、ルウィーの教祖を務めさせていただいています、西沢ミナと言う者です」

「俺は……」

と、そこまで言うってから女性がスツと掌を出して、制止を出してきた。

「分かっています。貴方の事情はフィナンシェから聞いていますから」

慈愛に満ちた表情でミナはそう言った。

少年は一度、躊躇うような素振りを見せた後にきゅっと唇結うと、

意を決したように口を開いた。

「あの……俺のことは、ご存知なんですか？」

「いえ、私は貴方と知己を得てはいませんが……」

少年は残念そうに肩を落として俯く。

ミナは「しまった」というような顔つきになった後に苦笑を見せてから両手をパタパタと振った。

「ですが、これを」

ミナは部屋の脇に設えてあるクローゼットの中から一つの肩掛けタイプの白いバッグと黒い細身の刀を取り出した。

訝しむような目つきでそれを眺めていると、ミナがそれを自分の前に置き、それからこう言った。

「これは貴方が倒れているときに身につけていたものらしいですよ？」

「……？」

当然と言えば当然だが、どうも少年にはこのバッグや刀に見覚えはなかったし、彼女の言うこともどうしてか理解できなかった。

と、それを補ってくれるように背後でフィナンシェが両手を打って、感心した風な声を上げた。

「なるほど、持ち物で素性が割り出せるかもしれませんね」

「そういうことです」

「ああ……」

確かに持ち物の中に素性を割り出せる何かがあるかもしれない、彼女はそう言いたかったのだろう。

確かにそれなら確実だが、どうも躊躇いというか――言うなれば他人のものを勝手に覗いてしまったいいのか、と言うときに感じるような思いが、少年の中にあった。

それもそうだ。身につけていた覚えもないもの、すなわちそれは他人のものだ。それを躊躇する思いもあっただろう。

けれど、それ以上に少年には自分を知りたいという思いも、少なからずあった。

ミナにそれを手渡されて恐る恐る中身を確認する。

携帯食料に飲料水、数着の着替えと財布に簡単な娯楽用具、野宿用品一式、それから黒い端末のような物が入っているだけだった。

「随分、持ち物が少ないですね」

横から覗き込んでいたフィナンシェがそんな感想を漏らす。

「ですが、冒険家であるなら基本装備だと思いますが……」

ミナもやや遠慮がちに後方からそれを見ていた。

少年は端末を手に取り、電源を入れて起動させる。

画面には『PRANETUNE』と文字が躍り、それから数秒してから画面が浮かび上がった。

「携帯端末ならプロフィールとかも記録されているのでは？」

「なるほど……」

タッチ式の端末を操作してプロフィールページを確認する。

「……『キラ』……」

名前。

己の、名前。

何度もその言葉を呟いて、しっかりと確認させる。

けれど、けれど――何故かしつくり来ないのだ。

まるで自分の名前ではないような、どこかの誰か、他人の持っている名前のようなそんな、不快感、だろうか。そんなものがあるような気がしてならなかった。

そんな些細な表情の変化を見せるものの、ミナとフィナンシェの二人は気付いていない様子でキラの背後で何事かを話し込んでいた。記憶の片隅に焼き付いた思いを探るように、キラはきつく眉を寄せた――。

十

「き、ら……」

「そう」

少年、それとかなり幼い容姿の少年は曖昧に唇を動かして、ようやくその言葉を吐き出した。

そして、それに向かい合うようにして腰を屈めて、少年と同じ目線に立っている少女はまるで母親のようににっこりと微笑を浮かべてその言葉に対して深く頷いた。

少女はそっと少年の手に、自分の指を這わせてそっとそれを持ち上げた。

まるで、壊れ物を扱うように、ゆっくりと、優しく――。

しかし、少年は何も感じることはなかった。

暗く、闇を映した双眸は、もう前をまっすぐ見ることすらも困難かもしれない。薄く半開きになった唇からは乱れた息が吐き出されるのみで、まるで世界そのものに恐怖しているようにも見えた。きゅっと少年が己の服の裾を握って唇を震わせた。

「きら……おれの、名前――？」

信じられない、とでも言うように。

何もない見えない暗闇の中から、一筋の光を見出したように。

けれど、何故だかそれがひどく不快で、

しかし、存在を与えられたことが嬉しくて、

なのに、まわりつく嫌悪感を捨てすることはできなくて、

だから、目の前の光にすがりたくて、

「う、あ、っ……」

何を言っているのかも分からない。

それは、幼い子供が発する、何の意味もないただの言葉であつたのかもしれない。

いや、嗚咽か。

鼻をすする音と、少年のその声だけが響いて何もかもを占領していく。

ただ、ただ――。

ゆっくりと、恐れるように目の前の少女の手に自分の両手を添える。少女は、驚いた風もなく、寧ろ全て分かっていたという風にフツと笑ってから両手を軽く広げた。

それが、何を意味するかと言うことくらいは分かっていた。

躊躇うことなく、少年はそれに飛びついて、大きな声を上げて涙を流し始めた。

存在を得たことの嬉しさだとか、暗闇の中で溜め込んでいた恐怖だとか、そんなたくさんの十の感情と一の感情がぐちゃぐちゃにシェイクされて、もう何が無だか分からなくて、幼い少年には耐え難い苦悩であっただろう。

ただ、それを全て投げ出してしまいたくなるほどに。

ただ、その日から、少年の名前は、『キラ』となった――。

十

自分の身体が、軽く揺さぶられていることに気付くのに、キラは数分を要した。

肩に何かの感触がある。ふとその方向に視線をやると、そこには二人の少女――ロムとラムが嬉しそうに笑みを浮かべてキラのことを見ていた。

思わず周りに目を向ける。ミナとフィナンシェはどこに行ってしまったのだろうか、などと考えながらも穏やかな笑みを二人に向けて口を開く。

「えっと、ロムちゃんにラムちゃんだっけ。どうしてここに？」

「おやつ時間だから来たの！」

「……けど、ミナちゃんがないから」

どういふことだろうか。キラは思わず首を傾げた。彼女らの言い分からして、この二人はここに住んでいるということであろうか。それにミナのことをこんな風に呼ぶということはやはり親しい間柄、というか保護者的な立ち位置であるということなのだろうか。

そんな悶々とした思考を廻らせる中で、

「……お兄さんはどうしてここにいるの？」

ロムがそう質問を投げかけてきた。

あまり難しいことは分からないだろう。顎に手をやって、数秒考えを巡らせてからいかにも単純明快の答えを導き出す。

「少しミナさんとフィナンシェさんの二人とお話をね」

「へえ、何の？」

「それはちよつと……」

苦笑を見せてキラが両手を胸の前に出した。

やけに話の内容を聞きたがる二人の対処に困惑していると、後方の扉からひよこつとミナが顔を覗かせてから「しまった！」と言う風に口を押さえてから入室してきた。

「もう、二人とも！　あまりキラさんを困らせないであげてくださ
い！」

「あ、ミナちゃんだ！」

「……ミナちゃん、おやつ」

「二人ともたまには私の話を……、すいませんキラさん」
額に手を当ててから、ミナは深々と礼儀正しく頭を垂れた。
しかしキラは両手を振ってから否定の声を上げる。

「い、いいですよ。あんまり困っているわけでもないですし……」
というか、この二人のお陰でだいぶ心労が軽くなっていることも否めなかったし、謝られるのは寧ろ悪い気がする。
ひとしきりキラがそう言ったところで、なおも申し訳なさそうな表

情をしていたミナがようやく頭を上げた。

「てゆーか、この人キラさんって言うの？」

「……いい名前」

「……ありがとう」

キラはわしわしと二人の頭を撫でる。

今の言葉、二人からすれば特に何でもない、他愛もない言葉であったかもしれない。

しかし、それでも今の言葉で何となく、『キラ』というのが自分の名前であることが少なからず実感できたような感じがした。

何だろうか、共にいると妙に安心できるというか、それはキラの中に同じような存在達と共に過ごしてきた記憶を曖昧に覚えていたからなのかもしれないが、とにかくキラの心がこの二人の存在によって救われたことには違いなかった。

「それでですね……キラさんに少しお話があるのですが」

「はい……？」

何事だ、と首を傾げてキラがミナの方に向き直る。

「ルウィー、この都市の住民記録を確認してきたのですが、キラさんはどうやらこの都市にお住まいではないようですね……」

「そうですか……ということは、その……他の、都市？　でしたっけ。そこに住んでいたってことですよ？」

「そういうことになります」

ミナがこくりと深く首肯する。

「残念ですが、他の都市の住民記録はこちらでは確認できませんので……結局、素性は分からず終いです……、申し訳ありません」

「あ、いえ……いいんです。寧ろそこまでしてもらって有り難いですから」

頭を下げるミナに対してキラも慌ててそれを制止する。

しかしそうなるや後に生きていくための手段が危ういのだが、どうにかなるだろうと甘い考えを持ち合わせていたところで足下から声が掛かる。

「それならここに住んじやえばいいんだよ！」

「……うんうん」

ロムとラムがそう言ってきた。

暫し、キラとミナの二人の動きがピタリと停止する。

何だろう、この二人はいったい何を宣っているのだろうか。などと
言う風に表情を歪めて暫く硬直していた。

「で、でも……この人達に悪いでしょ？ 俺なら大丈夫だから――」

「……でも、心配」

スツとロムがキラの表情を覗き込んできた。

不安げな顔でもしていたのだろうか、慌てて取り繕うように笑みを
作って見せたが二人は最早止まることを知らない暴走牛のように考
えをねじ曲げなかった。

「よし、決定！！」

「わー」

「ちょ、ちょっと、二人とも！ キラさんにも事情があるんですか
ら無理矢理は……」

それを半ば置いてけぼりで眺めていたキラに二人がチラチラと視線
を向けてくる。まるで答えを期待しているような瞳で。

小さく呻ってからキラはポリポリと頬を掻く。

何だかこれからすることがひどく凶々しく感じてしまう。というか、
凄く凶々しい。

意を決するように大きく息を吸ってからミナの前に立ってバツと頭
を下げた。

「お願いします！ 俺をここに住ませてください！」
キラの行いに三人がポカンとしてしまう。

やってしまった……と言うようにキラがだらだらと冷や汗を流す。
それから数分、無言の時間が流れ、それからミナがフツと息を吐く。

「……分かりました」

「あ……」

思わずキラは顔を上げる。

にっこりと笑みを浮かべたミナが驚愕の表情を浮かべるキラを見てから続ける。

「困っている方を見過ごすのは、教会としてもあまりよろしくないことかもしれないですね」

「やったー！」

「……よかった」

ロムとラムが同時にキラに飛びついてくる。

そしてそのまま地面へとダイブ。後頭部を強かに打ち付けた。

「ツ~~~~~！」

痛みに悶絶するキラの横でロムとラムは嬉しそうにぴよこぴよこと飛び跳ねていた。

天井を見上げながらキラは思った。

（ヒモ街道まっしぐら……？）

それだけは何とか避けたいな、なんて思いながらキラはゆっくりと上体を起こした。

「ふう……」

キラは雪かきを手に、小さく溜息を吐く。

口から漏れる白い息が、ふわふわと宙を舞い、やがてどこへともなく空気の中へと霧散していく。

それを眺めながら額に流れる汗を袖口で拭い取り、再び雪かきを握る両手に力を込めた。

キラが正式にルウィーの教会に世話になることが決まってから翌日。ルウィーというのはキラが現在、駐留している都市の名前らしかった。

ミナの説明では、一年中雪に覆われ、この大地——ゲイムギョウ界の北方の領土を統治する国家であり、話を聞くところの守護女神、ホワイトハートが治める4国家の中で唯一、魔法文化が栄える珍しい国らしい。それについてはキラはあまり理解はできなかったのはあるが。

しかし、周りを見回してみてもそこまで魔法という文化が表に出ることはないらしく、その文化も今や衰退の一途を辿るばかりであるらしい。

だが、キラと同じくここに住んでいる双子の少女、ロムとラムは数年来に見る強大な魔法素質を持った娘達であるらしかった。

傍目から見てもなかなかに分からないものだな、と感心しつつ教会お抱えの庭の雪かきを終えてフツと一息吐く。

相変わらずどんよりとした空が広がっているが、ルウィーではこれが当たり前らしい。少し寂しいような、悲しいような面持ちになつてキラが大股で施設の扉の前に立つ。

そして――

「ぶっ!!」

顔を強打した。

ゴロゴロと地面を転がって悶絶するキラの横で、年季の入った扉がギィ……と音を立ててゆっくりと開かれた。

顔を押しえながら、涙目でそちらの方に視線を向ける。

「キラ何やってるのー？」

「……変」

噂のロムラム姉妹だった。

たった今二人が開けたドアに当たって凄く痛かったんだよ、と言いたい気分になったが二人の屈託のない笑顔を見ているとそんな言葉も口の中で消えてしまう。

我ながら甘いな……、と自嘲するような笑みをみせてからキラはスツと腰を下ろし、二人と同じ目線になって微笑みを作る。

「もう起きたんだ」

「うん！」

「今日は早起き……」

時計を見るとまだ7時だ。この二人の年齢から見ると少し早くないかと思うのだが、自分が口を出すのはおかしいし、早起きなら何も言うことはないだろう。

二人がキラキラと輝いた瞳を向けてくるのに気付いてキラが小さく苦笑を見せてから、両手を二人の頭に移動させてわしわしと撫でる。何故か昨日、この二人にやけに撫でることを強要されたなど思い返して自分はもしかして記憶が無い前はペットトレーナーか何かだったのかなとどうでもいい上に思いきり的外れのことを思いながらなおも両手を動かし続ける。

こうしていると二人はくすぐったそうに両目を瞑って頬を赤く染めるのだ。

それを見ているだけで、心の中からぽかぽかと暖かいものが身体の隅々に流れ出るのが感じられた。

「二人は朝のお散歩か何か？」

「キラが外に見えたから来たの！」

ロムが元気いっぱい笑顔でそう答えた。

「私達もお手伝い……」

ロムも胸の前で小さくガッツポーズを作ってアピールする。

しかし、キラは既に雪をすべてかき終えた庭を見回してから苦笑を禁じ得なかった。だが、この2人の心遣いとしては十分に嬉しい。2人の肩に手を置いてキラが微笑みかけながら言う。

「ありがとう。でも、もう終わっちゃったから、冷えるといけなし教会の中に戻ろうか」

「「え〜」」

少し残念そうにそう答える2人をざっと見回してキラはフツと薄く笑いながら続ける。

「次は三人でやろうね。その時は声を掛けるから」

「ホント？」

「楽しみ……」

果たして庭仕事を楽しみにするのは女の子としてどうかと思ったのだが、如何せんキラはアレなので気付かなかった。

何とも形容しがたいような苦笑を見せてからキラは二人の背を押して教会の施設の中へと踏み入る。

空調のお陰で随分と暖かい空気が中に籠もっており、それがスツとキラの頬を撫でる。

既に数人の職員の方々が己の仕事を始めており、それを横目に見て邪魔にならないように静かに教会の奥へ移動する。

職員用の食堂とはまた別室にある、教会の中でも偉い方々が食事をするらしい場所に二人を連れて行く。昨夜はここを紹介されたときは随分とキラも大袈裟なほどに驚いてしまったものだった。

それ故に中には当然ながら人はおらず、何となく寂しいような気すらした。

ざっと部屋全体を見回してから奥の方で料理をする音が聞こえる。

どうやら先客がいたらしい。

ドアを閉めると、その音に人物が気付いたらしくキッチンらしい影からひよこ顔を覗かせた。

「ああ、おはようございます」

「おはようございます、ミナさん」

につこりと笑みを浮かべてキラはミナに向かって挨拶をした。

ミナは昨日のようなパリッとした様子ではなく、エプロンを掛けていて優しそうなお母さん、といった風な感じだった。

「ミナちゃんおはよう！」

「おはよう……」

「二人とも、おはようございます。もうすぐご飯ができますから、そこに座っていてくださいね」

「はい」

二人が元氣よく返事をしてテーブルの方へ向かっていく。ミナはそれからスツとキラの方にも視線を向けて薄く微笑んで言った。

「キラさんもうぞ」

「や、でも……いいんですか？」

自分なら普通の食堂でも大丈夫なのであるが……と思いかけたキラがそんな声を上げた。しかしミナはさして気にした様子もなく笑みのままスツと右手をテーブルの方へ向けて促しているようだった。

「気にしないでください。ロムとラムの二人もきつと楽しみにしてるでしょうから」

ミナに言われてキラは視線を送る。見れば確かに二人が嬉しそうにこちらを覗いていた。苦笑を見せて頬をポリポリと搔いてからキラはゆつくりとテーブルの方に足を向けた。

どこに座ろうかと迷っていたら二人が間に椅子を空けたのでそこに座れと言うことなのだろうかとか色々と紆余曲折はあったが、とにかく食事を終えた。

さて、何をしようかと思ひ立ちミナに仕事を問うてみても、施設内の清掃は係の人がやってくれると言うし、庭掃除は今朝の内に終わらせてしまった。とはいえ、教会の仕事を自分が手伝えるとは思えないし、どうしたものだろうかと思ひ立ち往生していたところにまたし

ても二つの影が接近しつつあった。

「食堂の手伝いでもしようかな……」

「どーん！」

「どーん……」

「うえあ!？」

いきなり腰の辺りに2連撃の衝撃がぶつかり、ビククリして肩を大きく揺らして、思わずキラは変な声を上げた。

そろそろと身体を捻って背後を向く。そこには案の定というかロムとラムがキラの腰の辺りに抱きついてにっこにこと屈託のない笑顔を見せていた。

「キラ何してるのー?」

「気になる……」

「……何かお手伝いできることがないかなと思ってね」

「おてつだい……?」

こくりとロムが首を傾げる。

「そう。一応、お世話になってるわけだし、できることはやらないとね」

「でもミナちゃんはそんなことしなくてもいいのにー、って言うってたよ?」

「ミナさんは優しいからね、ここの人達も。だけど、できることは自分でやりたいし、自分に何かできることがあるのならやってみたいんだ」

今度は二人揃って小さく首を傾げる。

この二人にはまだ早い話だったかなとキラが苦笑してから「そのうち分かるよ」と言って半ば無理矢理に二人を納得させた。

まあ、それはさておき本当に何かできることはないのかなと思い始めて周囲を見回していると廊下の奥からミナがこちらに向かってきた。

ミナが短く声を上げてからキラに向かって声を掛けてくる。

「キラさん、少し頼みたいことがあるのですが……よろしいですか

？」

「はい、何でもお任せください」
ドンとキラが胸を叩いてみせる。

「実は……いつもこの後にロムとラムの二人を連れて散歩に出かけるのですが、今日は仕事が入ってしまっ行ってそうにないんです。ですから、ご一緒に貰ってよろしいでしょうか？」

「散歩……ですか。まあ、いいですけど」

何もないよりはマシかと思い、キラが二人を促して行くのを見送って、ミナは小さく笑みを見せてから仕事部屋の扉を開いた。

ミナが曇った窓ガラスを指で拭き取って外を覗けるようにする。

丁度そこから散歩に出かけた三人の姿を覗くことができた。やけに楽しそうに、二人がキラを連れ回していかにも仲のよい兄妹といった風情で、思わずミナは笑みを零した。それを覗き込んでいたフィナンシェがさぞ嬉しそうに口元に手を当てて同じくミナの視線の先を辿った。

「キラ君、すっかりあの二人に懷かれてしまいましたね」

「そうですね、嬉しい限りです……けど」

と、そこでミナが何やら不服そうに口を尖らせた。

きょんとした表情を見せてフィナンシェが視線をミナの方に戻す。

「少し嫉妬してしまいますね」

「まあ」

フィナンシェは驚きの表情で小さくそう漏らした。

こういった物言いをするミナも珍しいばかりと思いつつその話に耳を傾ける。

「あの二人……私になれてくれるのに2ヶ月もかかってしまったのに、キラさんにはたった1日であんなに懷いてしまわれて……少し残念です」

「あ、あはは……」

そう言われると確かにそうで、フィナンシェとしてはもう苦笑の限りであった。

＊

ロムとラムは先程のような制服をモチーフにした服装ではなく、コートと大きな帽子が目立つ可愛らしい姿である。色違いでまったく同じデザインの衣装を見ると、この二人がいかに仲のよい姉妹であることがよく分かった。

対してキラはジーパンにTシャツ、少し厚めのパーカーを羽織っただけという少しばかり薄手の装備だ。

どういうワケか、キラはあまり寒さを感じなかった。そのことに少し疑問を覚えつつも、もしかしたら比較的寒い地域に住んでいたのかもしれないと思うことによってその疑問は何とか掻き消した。

右手でロムと、左手でラムと手を繋ぎ街を闊歩するキラの姿は、面倒見のいいお兄さんと言った風情である。

シンシンと雪の降り注ぐ街を見ていると何だか寂しい気持ちになるのを必死に抑えつつも表情は至って平静を保とうとしていた。

「キラはもう教会には慣れた？」

ラムがふとキラに向かってそう質問を投げかけた。

下から覗き込む形に、キラの表情を窺うように嬉しそうに笑って言う。何と返事をしたものかと思い、苦笑を見せてからううむ、と小さく呻って思案する。

ぶっちゃけたところ、まだこの教会に世話になって一日しか経過していないので慣れていないと言えば慣れていないのかもしれない。が、キラのやけに柔軟な性格のお陰か慣れたと言えば慣れたのかもしれない。ややこしい。

「でも、教会の人達もすごく良くしてくれるし、悪くはないかな？」
結局、キラは言葉を濁してそんな答えを導き出した。

だが、それに満足したらしいラムは「そっかー」と言って鼻歌を歌

い出した。

それから数分歩き、いつも二人がミナと共に訪れるという公園へと向かった。

相変わらずの雪景色ではあったが、やはり公共の場と言うことである程度の清掃が為されていた。それからそこをはね回る数人の子供達の姿も見ることができた。

それを眺めつつ、休憩所へと足を向けてそこにあるベンチに腰掛ける。

それに習って二人もキラの横にぴょんと腰を置いた。

「二人は遊んでこなくていいの？」

スツとキラが公園にある遊具などを指して問うてみた。

ラムはギュツとキラの腕に抱きついて、嬉しそうな声を漏らしながら満面の笑みを浮かべて答える。

ロムもそつと頭をキラの身体に寄せてから微笑を見せて言った。

「キラがここにいるなら私もいるー」

「私も……」

何と言ったものか、とにかくこの二人といるときはやけにペースに乗せられるなと思い、キラは頬をポリポリと掻いて苦笑を見せた。

「でも、他にも子供たちがいるよ？ その子達とは遊んでこなくていいの？」

キラに言われて始めて気付いたという風に二人は公園内を駆け回る子供達を見て、暫く停止した。

何だろうと首を傾げるキラにロムがスツと顔を見合わせて言った。

「ミナちゃんが遊んじゃダメだって……」

「え？」

「他の子と遊んだらダメだって言われたの」

補足するようにラムがそう言った。

それはいったいどういう意味なのかとキラが眉根を寄せ上げる。けれど、二人は何のリアクションも起こさず、まるでそれが当たり前とでも言うようにその後は何も言わなくなってしまった。

沈黙に絶えかねたキラが二人を促して公園を後にする。
胸の内に多大な疑問を抱きながら――。

＊

教会の扉を押し開けるとロムとラムの二人はサーツと中に入っ
てしまふ。

無邪気だなどと思いつつ、キラも滑るように施設の中に入っ
て静かに扉を閉める。ホテルのロビーのようなだだっ広い空間には数人の職
員達が行き交っているだけであまり他の人達の姿が見えない。

この教会という施設は国家全体の運営を営む機関であって、様々
な情報を公開しているらしく、それならば一般の人々も出入りして
いておかしくない。だが、すっかりがらんどろのようになっ
てしまっているのはどういう事だろうか。

とりあえず色々聞きたいこともある、と思い直してキラはミナ
が仕事をしている部屋の方へと足を向けた。

一応ノックをして返事を待つ。部屋の奥から間延びしたような声
が掛かってキラはそれを確認してから入室する。

ミナ一人だけらしく、広い室内はやけに寂しげだった。

書類から視線を上げたミナがフツと一息吐いてから、ギシと椅子に
体重を乗せてからスツとキラの横にあるソファに座るように指示を
出してきた。

一瞬、逡巡を見せてからキラは仕方なくそこに腰を下ろす。それに
合わせてミナも椅子から立ち上がり、ティーセットを抱えてキラの
正面にある椅子に座った。

「紅茶でよろしいですか？」

「構いません、それより……お聞きしたいことがあるのですが」

キラはやや伏し目がちになりながらミナに対してそう言った。

ミナがティーセットから視線を外すことなく、無言で深く首肯した。
「ロムちゃんとラムちゃんに聞いたんですが、あの二人が他の子と

遊ぶことができないというのは……？」

ミナは顔を上げて、小さく口を開いて驚いたような顔つきになった。それから悲しそうに眉を下げて瞳を閉じた。

何か、重大なことを聞いてしまったのではないだろうかと今更ながらキラは口元を押さえて冷や汗を流した。

ミナが少し悲しそうな表情を見せてから眉を下げて言った。

「キラさんは、『女神』という存在についての記憶はありますか？」

突然、そんなことを言われてどきりと心臓が跳ねてしまう。

それからすっかり空白の大きくなってしまった記憶を探るように腕を組んで低く呻る。が、やはり『女神』という概念に関する知識はあったが、何故だかそれは彼女の意図することとは大きく異なっているようにも思えた。

「……それは、おとぎ話ではなく？」

「ええ……、やはり女神に関する記憶もないようですね」

ミナが傾けていたカップを置いてから、フツと息を継いだ。

「我々が言うところの女神というのはそれぞれの国を守護し、行く末を決定する——謂わば各国家のトップの方々のことです」

「……なるほど」

「その方々は、我々人間とは比べものにならない大きな力を持っています。それ故にこうして人間と隔てられた位を与えられているわけではありますが……」

今のミナの発言を噛み砕くように、キラは顎に手をやってから深く思考した。

だが、結局のところ、明確な答えを与えられていない。今の話とどう繋がるというのだろうか。

「あの二人はこのルウィーを守護する、ホワイトハート様の妹なんです」

「……そう、だったんですか」

なるほど、と呟いてキラが背もたれに寄り掛かる。

つまりは、そう言うことなのだろう。強すぎる力はやがて周囲を巻

き込んでしまう。それがあの二人のように幼いのなら尚更だ。力の制御ができず、いつ周りの子供達を巻き込んでしまうのかも分からない。

そう、理屈では理解できる。

だが、それは——それはあまりに酷ではないか。

ギュッと太股の上に置かれた拳に無意識に力が籠もり、ブルブルと大きく震えていた。

「キラさんの言いたいことは分かります」

ミナは悲しそうな声でそう告げた。

思わずバツと顔を上げる。ミナはとても寂しそうな表情をしていた。

「これは……あの二人にはあまりに酷いことかもしれません。でも、そうしてしまわないと、もっと辛いことになってしまいます。だから——」

そうしないと——あの娘達はもっと辛い現実にあづかってしまう、とそう言うことだろう。

自分たちのせいで他人が傷ついてしまう、とそんな思いを彼女らにして欲しくないのだろう。何よりも彼女たちのことを思っているからこそ、だからこそ、ミナは彼女たちにそんな判断を下したんだろう。

「それに、ホワイトハート様の命でもありました」

「え……」

「ホワイトハート様は、幼い頃にそんな経験をされて……たいへん心を痛めておいででした……。そんな自分の姿と重ねているのですよ……」

『——もう、大丈夫だよ』

「あ……?」

ビクッと大きくキラの肩が震えた。

見覚えのない光景と、知らない声がキラの脳裏に響き渡ってそれか

ら——それから？

キラは思わず額を押さえた。

その様子を不思議に思ったのか、ミナは心配そうにキラの表情を覗き込んでくる。

「大丈夫ですか？」

「え、あ、はい、大丈夫です……」

とは言うものの、やはりつい先程までのキラの様子とは大きく違っている。何と問われても答えられはしないのだが、それでも直感的に何かが違うとは言える。

どう触れてよいものか迷っている様子で、ミナが暫く俯き黙り込んでしまったが、すぐに顔を上げてから話しくそうに口を開いた。

「だから、せめて私はあの二人が苦痛を感じないように、精一杯の愛情を込めて世話をしてきたつもりです。ホワイトハート様がいなくなられて、あの二人もだいたいぶ傷心をしていましたから……」

ミナの言葉にキラは眉を寄せる。

ホワイトハートが不在というのはどうということなのだろうか、と。

この国のトップであるのなら、この地に身を置いているのが普通のハズだがとキラは浮かんだ疑問を口に出した。

「ホワイトハート様はいまどちらに？」

「……」

途端にミナが黙りこくってしまった。それに、とても悲しそうな顔をしていた。

キラは今度こそ「しまった！」と言うように口元を押さえて小さく頭を垂れる。

「す、すいません……。嫌なことを聞いてしまって」

「あ、いえ……そういうことでは」

ミナは胸の前で両手を振って気にしていないことをアピールしてみせる。

それからやけに真剣な目つきでミナがキラを見て、それがただ事ではないことをようやく悟ったキラもつられて眉を寄せる。

「この世界……我々はゲームギョウ界と呼んでいます、ここは別にもう一つの世界が我々の世界と密接に繋がっているんです」

「別の世界……」

キラはミナの言葉を咀嚼するように復唱して思案顔になる。

「そこはギョウカイ墓場と呼ばれる場所で、この世界——ゲームギョウ界で死を迎えた人々が眠る地、と公表されています」

要約するに冥界のような場所だろうか。

しかし、なおキラには疑問がある。それはミナの言い回しだ。

公表されている——とはいったいどういう意味なのだろうか。それはあくまで仮の姿であり、本当の意味は隠しておかなければならないということなのだろうか。

それを問うてよいものか、暫く考えたキラは意を決して口を開く。

「……それは、別の意味があるということですか？」

「ッ……！」

ミナの肩が震えた。

間違いない、あの場所には他にも重大な意味があるとキラはそう確信した。

「その地には犯罪神と呼ばれる、かつてゲームギョウ界を滅ぼそうと企んだ災厄の神が眠っている、と言われていました。本来、ギョウカイ墓場というのは犯罪神を封印するためだけに作られた土地ですが……2年前からそこは死人の地になってしまったのです」

「そこにホワイトハート様が？」

「ええ……。ただ、ホワイトハート様だけではなく、他の国家の女神……パープルハート様、ブラックハート様、グリーンハート様もその地に向かわれたと聞いています。それと、パープルハート様の妹である女神候補生の方も……」

キラは何故か背筋がぞくぞくと震えるような気がしてならなかった。それは、キラにはとても形容しがたいものである。けれど確実に嫌な感じがキラの胸の奥に生まれた。それは『拒絶しなければならぬもの』である——と。

キラは眉にシワを寄せてから重々しく言葉をひねり出す。

「女神様が不在なことに、教会に人が少ないことにも関係が？」

「はい……。ゲームギョウ界の人々は次第に犯罪神を信仰しつつあります。女神様の力となる信仰力——シェアも犯罪神に注がれ、今やもう犯罪神の復活を待つか、時間は残されていないのです」

キラの表情が、より一層に強張って険しくなった。

ごくりと口の中に溜まった唾液を飲み下し、キラはゆらゆらと揺れるティーカップに注がれた紅茶の水面を見つめる。

何も出来ない自分を齒がゆい、と思う。けれど、いったい自分にそれをできるだけの力があるのだろうかと思ひ悩む様子だった。

そんなキラの心情を察したかどうかは定かにはできない、しかしミナは薄く微笑んでキラの方へと視線を飛ばしてくる。

「キラさんが心配することではありません。キラさんは、せめて今は自分の記憶が戻ることを考えていてくれさえすれば……。そう思っただけで、あの娘達も、ホワイトハート様もとても喜んでいて思っています」

そんな彼女の笑顔には、どこか無理をするような、見ていられない痛々しいものであったかもしれない。

直視できなくて視線を下に向け、ゆっくりとソファから腰を上げる。ミナに二言ほど声を掛けてから扉を閉めて、そこに体重を掛ける。きゅっと唇を強く噛んでキラは表情を歪ませる。

ふと、自分の身体に影が落とされたことに気付いて、バツと顔を上げる。

黒。

そこには、それ意外に何とも例えられそうにないその存在だけが、キラの前に立ちはだかっていた。

「ッ……」

思わず絶句する。いや、言葉を出すことができなかったのだ。

ただ、その存在を前にして何も思考することができなくなってしまう

う。何の行動も、その前には生きていることすらも許されなく思えてしまうような、そんな存在がキラの前に立ち塞がっている。

「……」

「あ、あんたは……」

この人は、絶対に教会の人ではない——と、キラは直感で感じ取っていた。

だからこそ、そう問うた。

けれど、青年はグッとキラの胸倉を掴み、バツと自分の顔に思いきり近づけた。

「ッ!？」

青年の吐息が鼻に掛かる。

それは、死人を思わせる冷たい息で、キラは思わず肩を大きく震わせて両目を大きく見開いた。

そんな冷たい息を吐くその口から、言葉が紡がれた。

「……己の中にあるもう一つの存在が分かっているか？」

「……?」

キラはその言葉に眉をしかめた。けれど、青年はさして気にした様子もなくなおも低い声でキラに向かって言葉を吐く。

「……お前はいるだけで世界を壊す。それを感じているか？」

「何を……!」

「……お前は、俺と同じだ」

「!」

青年はバツと荒々しくキラを壁に叩き付けて、颯爽と教会の名が廊下を我が物顔で去っていかうとする。

「ゲホ、ゲホッ!」

首元を押さえて呼吸を整えながら、苦々しい表情で去っていかうとする青年を見据えてから喉を震わせる。

「ま、待て!」

ぴた、と青年の足が止まる。

コートの装飾が、カチャリと軽い金属音をならし、暫くの静寂が廊

下の中を染め上げようとしていた。

「お前は……俺のことを知っているのか？」

自分の存在を知る唯一の手掛かり——かもしれない男。やすやすと見捨て置くことはできないとばかりに、キラは鋭い視線を青年に向けて放っていた。

青年は暫くその場に立ちすくんでいたが、後にフツと鼻を鳴らしてからスツと横からキラのことをのぞき見た。

「どうせ、何も思い出しはできない——か」

ニツとフードの奥から覗くことができる口元が、ニツと嬉しげに——というよりは、どこか小馬鹿にしたように笑んだ。

「ただの……闇さ」

「闇……、巫山戯るな！」

「巫山戯てなんかいないさ……、信じるか信じないかもお前次第だな」

ニヤツとフードの奥の細められた蒼い瞳がキラを捕らえた。

それから青年はまたどこかに去っていくとする。

キラはグツと両足に力を入れて青年を追いかけようとする。

けれど、そこで背後から少女達の声が掛かり、驚いた表情をして背後を振り向いた。

「キラ、何してるのー？」

「探した……」

「ロムちゃん……ラムちゃん……」

何度か正面と背後を交互に見回して名残惜しそうに青年の去っていた方向を見据えてから、スツと二人の方に歩み寄り腰を落とす。

「俺を探してたのか……どうしたの？」

「一緒に遊ぼう」

「お絵かき……やりたい」

やっぱり子供か……とキラが内心で思う中で、キラは小さく背後を向きながら二人に問い掛ける。

「ねえ、この教会ってよくあんな変な人がたくさん来るの？」

キラの問い掛けにロムとラムの二人は顔を見合わせてからこくんと首を傾げた。

説明が悪かったかなとキラが後頭部をくしゃくしゃと搔いてから、暫く言葉を探してから口を開く。

「今あっちにいった人みたいに怪しい人とか」

「……いま誰かいた？」

「キラはさっきから一人で廊下にいた……」

二人の言葉にキラは眉をひそめた。

自分は確かに、今、あの黒いコートを着た怪しげな青年と話をしていたはずだ。

それなのに、この二人は誰もおらず、自分は一人廊下に立っていたという。こんな矛盾が有り得るのだろうか。

キラは二人に見えないようにぎゅっと拳を握って表情を陰しくさせる。

怖い——と。

いったい自分は何者で、いったい何をしようとしていたのか、を。

様々な思ひは、

こうしてまた交錯していく——。

「記憶を失ってくれたなら、この課題はクリアしたも同然、か——」
青年は無機質な声でそう呟いた。

EP. 26 [THE PAST RECOLLECTIONS, LIE,

『あなたはあなた——それは誇っていいことなの』

それは、本当の本当に？

『心配しないで……私はあなたの家族で、ここはあなたの『家』なの』

居場所、それは本当に俺に必要なの？

『私は絶対にあなたの前からいなくなったりしない』

嘘じゃない？

『泣かないで』

どうして？

『ごめんね……』

嘘つき

『最後のお願い——聞いてくれる?』

——『最後』だなんて言わないで

——『お姉ちゃん』は、嘘は吐いたらいけないって言ったのに

——自分は平気で嘘を吐くんだね

+

「……」

ゴトゴトと小刻みに震える車両の一角で、一人の少女が膝を抱えて眠るように俯いてしまっていた。

窓の外に見える景色は、色とりどりのものから次第に白一色の世界へと変貌しようとしていた。

けれど、そんなものは少女には関係のないことだった。いや、寧ろそんな世界を見ている方が少女にとっては苦痛でもあったのだ。何もない世界を見ていると嫌なことばかりを思い出してしまう。

いや、結局のところ、それはこうしていても同じだと言うことは十分に分かってしまっていたのだ。

けれども、少女にはもう頭を上げていられるだけの力も出すことができない。何もしたくない。異様な虚脱感だけが、少女の中にあっ

た。

ただ、低く俯いて涙が零れてしまわないように、ぎりど奥歯を噛みしめてその悲しみの波を押さえてしまうことしかできなかったのだ。

「ぎ、ギアちゃん……」

そんな少女の前に、もう一人の少女がやや腰を引け気味に声を掛けた。

涙と鼻水でべたべたになってしまった顔を小さく上げて、声の主を確認する。ふわふわと薄くウェーブの掛かった髪にカチューシャを装備した少女、コンパが彼女なりの愛くるしい笑顔で紙コップを二つ、両手に持っていた。そのうち片方を少女、ネプギアの顔の前に差し出していた。

ネプギアはコンパの顔を目の前の紙コップを交互に見据えてからおずおずとそれを受け取り、ぺこりと頭を下げる。

「ありがとうございます……」

「いいですよ」

コンパはにこりとネプギアに微笑みかけてスッとネプギアの前の座席に向かい合うようにして腰を下ろす。

ミルクココアの甘い匂いがネプギアの鼻孔を突く。そう言えば、一昨日からロクな食事もとれていなかった気がすると思うと、急速に空腹感がこみ上げてくるようだった。

けれど、いくら食べ物を目の前にしてもチラチラと一つの存在がちらついてしまう。それを思うと、腹に食物も溜まっていないのにむくむくと吐き気がこみ上げてきてしまうのだった。

両手で包むようにコップを持って口元へ運ぶ。甘い香りがやがて舌全体へと移り、特有の味が染み込んで全身にその温度が渡るようだった。

それを確認してから初めて周りの温度を寒く感じていることに気付いてしまった。

そう言えば自分の向かっているのはルウィーだった、と思い出してぶるっとネプギアは肩を抱えて震えた。ガラスを隔てて見える白い

景色、どんよりと灰色をした曇天がますますネプギアの気持ちを沈めていく。

また体育座りのように膝を抱えて額を膝に当てて俯いてしまう。

コンパは「毛布を貰ってきますね」と言って席を外した。沈黙に絶えかねたのか、気をつかつてくれたのかは分かりかねるが、ネプギアは彼女がいなくなったことで今まで張り続けてきた緊張の糸が解けていくようにも思えた。

じわりと目尻に浮かぶ涙が一滴、頬を伝って流れ落ちる。けれど、それすらも我慢してしまいそうになってしまう。今ここで涙を流してしまえば、全てを受け止めてしまうことになってしまいそうになったからだ。ここで悲しみに埋もれて涙を流すのは、それは彼の『死』を正面から受け止めてしまうということを意味していた。それだけは、憚られた。何かによって。

「ッ……」

押し殺した涙声が思わず口から零れる。

会えなくて寂しい、けれどももしかしたらもう二度と会えないのかもしれない、そんな思いが何度も何度も交錯する。

そんな思いを悶々と繰り返している内に、目の前に人の気配がして思わずバツと顔を上げた。それからごしごしと目元を擦って滲んだ涙を拭い取る。

流れるような茶髪が、身体の動きに合わせてゆらゆらと揺れて、双葉を連想させるリボンが特徴的な印象の、プラネテューヌの諜報部員を務めるアイエフだった。

アイエフ達とは昨日にラスティションで合流した。本来ならルウィーで合流するはずであったのだが、先のキラの失踪事件でネプギアのことを心配したアイエフ達が急遽に進路を変えてラスティションまで来たので、こうして3人、いや『4人』でルウィーと向かっている最中であった。

アイエフはリラックスするように身を座席の上に投げ出して、こきこきと肩をならす。どうやら随分と疲労が溜まっているように見え

たが、それが半分は自分の所為であろうと推測してネプギアは居たまれなくなってしまう肩をすくめた。

「イストワール様に一応、搜索の願いを出してきたんだけど」

ネプギアの眉がピクリと動いた。

それが彼——キラのことを指しているということはすぐに分かった。アイエフはそれを確認するように視線を飛ばしてからピンク色の携帯に視線を移した。画面にはメールも着信も入っていない。

アイエフは眉をしかめる。

「イストワール様に頼めばすぐに見つかるわ。三日もあれば十分よ」

「そう、でしょうか……」

「その筈、なんだけどね……」

アイエフは険しい顔つきになる。

いや、ならざるを得ないのだ。何故なら、アイエフはイストワールに確かに「可及的速やかに」と願いを出しているはずである。それならものの数十秒でも判明するはずなのだ。相手が『あの』イストワールであるのなら。

深く考えるのは止そうとアイエフが小さく首を横に振る。世情が悪いと思っただけ深く沈んでしまう。

それはさておき、とアイエフは窓際に肘を突きその手の上に顎を乗せてネプギアの方をチラと見た。その視線にネプギアはフツと眉を下げてきゅつと口をきつく結む。けれど、アイエフはそれを気にした風もなく淡々と口を開いた。

「ネプギア、色々と聞きたいことがあるんだけど」

「あ、はい……」

アイエフは一度、目を閉じてから何かをとり溜めるように、というよりはどこか躊躇しているようにも見えた。

それから数秒後にアイエフはその小さな唇を開く。

「ネプギア。とりあえず幾つか聞いておきたいことがあるんだけど、いい？」

「はい……答えられることなら」

「そうね……、まずは『邪神化』についてだけど、どんな感じなの？」

ネプギアは黙りこくって思案顔になる。

思い出そうとすればいくらでも思い出せる、のだが、いざ言語化しろと言われるとなかなか難しいものがある。

数分、言葉を探して思考に老け、ネプギアは何とか言葉を導き出す。

「こう……胸の奥から力が溢れて、それと一緒に判断能力、でしゅうか？　それが外れてしまうような感じ……かなあ？」

「なるほど……」

「でも、その力っていうのは……ドロドロしてて凄く気持ちが悪くて、だけどすぐにそんなことも気にならなくなって……その後はよく覚えてないんです」

ネプギアは説明を終えてはふうと息を吐く。

アイエフは小さく呻って、両腕を組んで眉間に深くシワを寄せた。

（ねぷ子や他の女神様にそんな状態は見られなかった……。『アイツ』、のは違うわよね。女神候補生だけに現れる不可解な状態だとも言えるの？）

次第にアイエフの表情が強張っていくのに、どう声を掛けたものかと思案していたネプギアだが、コンパが毛布を抱えて前の車両から帰還してきた。そしてその後ろには青い髪を揺らした少女が連なっていた。

「お、もう元気になったの？」

「日本一さん」

ネプギアが顔を上げて少女、日本一の名前を口にしてフツと無理をしたような笑顔を見せた。

「いつまでも凹んでもいられませんから」

「そっか」

日本一はぽふっとアイエフの横に腰を下ろしてからぐぐっと大きく伸びをした。

見ているこっちが寒くなってしまうようになる薄手の衣装を着込み、

首元には紅いマフラーがゆらゆら揺れている。頭には大きなバイザーを装備して、比較的に軽装備である。この日本一という少女は、ネプギアがラストイションでアイエフとコンパに合流した際には既に二人のパーティーの一員となっていたが、結局のところネプギアは何故この少女が行動を共にしているのかは分からずにいた。

「もう少しでルウィーに着くみたいだし、そろそろ準備しておいた方がよさそうじゃない？」

「ん、もうそんな時間なのね。ついさっきラストイションを発ったばかりだと思ってたんだけど」

アイエフは俯かせていた顔を上げて、横目を流して日本一を見た。それから目の前のコンパがこくりと首を傾かせて言葉を発した。

「あいちゃん、ルウィーに着いたらまずはどうするですか？」

「む……、そうね。面倒だけど、とりあえず教会に行きましょ。上手くいけばすぐにゲームキャラの居場所を教えて貰えるかもしれないし、教祖様の人が良ければ色々とおっこのお願いも聞いて貰えそうだしね」

そんな言葉をアイエフが言うと、何だかネプギアの脳裏にケイの顔が浮かんできた。何だか申し訳ない気がしてネプギアは乾いた笑いを零した。

ラストイション、中央協会――

「くしゅん」

今までの態度からは考えられないくらいに可愛らしい声を漏らして、ケイがくしゃみを発した。

ずずつと鼻をすすって、机の端にあるティッシュ箱を手繰り寄せて数枚そこから取り出し、ちーんと鼻をかむ。

「今頃、誰かが噂でもしてるのかな？」

自分なら十分に有り得るな、とケイは自嘲したような笑みを薄く浮かべて再び公務へと戻った。

「ま、ラストイションの教祖なら兎も角、ルウィーの方はあまり悪い噂も聞かないし、大丈夫でしょ」

アイエフが携帯を弄りながらそう告げてきた。ネプギアは依然として苦笑しきりであったが。

ネプギアがチラリと窓の方に視線を向けると、そこにはキラキラとまるでジオラマのような、それでいて美しい白き風景が間近に迫りつつあった――。

☆☆☆

「ッー！」

思わず、キラはバツと両目を見開いた。

全身、くまなくびっしりと大量の汗をかいているが、これはただ単に暖房が効きすぎているというワケではないだろう。

知らずの内に呼吸が荒いでいて、どことなく心地が悪い。乱れた呼吸を整え、落ち着かせるために胸に手を当てて大きく深呼吸をする。食堂から流れてきたのだろうか。仄かに芳ばしい匂いがキラの鼻孔を撫でる。目の前にある壁掛け時計に視線を向けると時計針は既に10の位置を指していた。

けれど、動くことができない。

全身を気怠い感じが襲う。けれど、風邪を引いてしまったわけではなさそうである。

これも悪夢の所為だろうか。それに、たった一言――キラの頭から離れない言葉があるのだ。

「『お姉ちゃん』、か……」

これは、記憶があった頃のことなのだろうか。キラは意図せず、怪

訝な顔つきになる。

考えていても仕方がない。キラはフツと吐息して、気怠い身体にむち打って無理矢理身体を動かした。

ミナは、ゆっくり思い出していけばいいと言った。けれど、キラとしてもこれ以上、その言葉に甘えてしまってもいいのかという思いもあった。思い出せないのなら、せめて自分の負担となっている人々の手助けをしたい、と。だから、今日も教会の仕事を手伝おうとベッドから降りた。

着替えを仕舞っている備え付けのクローゼットの取っ手を引く。中には幾つかの支給して貰えた衣服と、それからキラが初めから着ていたという衣装が仕舞われていた。

いつも通り、教会から支給された服に手を掛けようとして、ピタリとその手が止まった。

一度地面に視線を落とし、キラは深く思考する。

「これじゃ、逃げてるだけだよな……」

目を閉じて、キラはスツと伸ばしていた手を端に押しやった自分が着ていたという黒いコートをつかみ取った。

これを着るのは、何だか憚られていた。これを着てしまえば、この生活に終わりが来てしまうようで怖くなったのだ。

記憶はない。ここに住まう以前の記憶が無く、自分にとっての世界はここだけで、これを着るのはこの世界を捨ててしまうような気さえしてしまっていたのだった。

だけど、キラも言ったとおり、これはただ逃げただけなのかもしれない。記憶を取り戻したいと思う反面、この生活を捨てたくないと思ってしまう。何も、何も関係などありはしないのに。

（記憶が戻っても、俺は俺だ。何も終わるはずないじゃないか）

そう心の中で自分に言い聞かせて、キラはコートを羽織り背後の扉に手を掛けた。

通路を歩く教会の人々に挨拶を交わしながら、専用食堂の方向へと向かっていく。昨日は何となく、成り行きで食事を共にしていたの

だがあの後、結局ミナの強い押しに流されてキラもその食堂で食事をする権利を与えられた。何故か。

いくら幼くても女神様としての権限があゝの二人にはあるのだろうか。自分は随分とロムとラムの二人に気に入られているようだし、それならまあ、完全にはないが幾分か納得できるものである。

扉を押し開けて中を確認するがもちろんのこと誰もいない。ぱたんと扉を背後で閉めてざっと見回す。

テーブルの上にメモ紙が一枚、『食事は奥の冷蔵庫に入っています』と書かれているものがあつた。キラはそれを確認して奥の方の冷蔵庫の扉を開ける。トレイに乗った健康的なメニューが置いてある。それを取り出して電子レンジに入れて温める。

それで腹を満たし、食堂を出る。

大概の人々は既に職務に就いてしまったのか教会の中はひどくもの悲しい雰囲気の流れていた。その中を歩くのは何だかむず痒い感じがしてキラはポリポリと頬を掻く。

「どうしたもんかね」

思わずポツリとそう言葉を零す。

何かをしようにもできる仕事が見当たらない。昨日もこんな感じだったな、と思いながらキラはふうと息を吐く。

それからふと思ひ直す。そう言えば教会の人々はだいぶロムとラムの行動に手を焼いていた様子だった。それも二人は高い立場にあることから強くも言えず、非常に困っていた。

ならば、とキラは思う。二人は幸いにして自分の言うことは快く聞き分けてくれる。やることがないならあゝの二人の面倒を見よう、と。ミナも仕事中はあゝの二人の相手もしていられないようだし、他の方々の邪魔にもならない。

我ながら名案と心の中で自分自身に拍手喝采を送りつつ、二人の部屋がある方向へと足を向ける。

＊

「教祖様？」

フィナンシェが扉の隙間から顔を覗かせる。

ミナは呼んだ声の主の姿を探し当て、ペンを定位置に戻してから短く返事をした。

許可が下りたことを確認し、フィナンシェが静かにドアを開けて入室する。

「教祖様にお会いしたいという方々がいらっしやいましたが……」

「まあ……」

それは実に何日ぶりのことだろうかとミナが驚きを隠せない様子で、そんな表情をつくった。

何せ、ここ最近はただでさえ女神への信仰が衰え、教会を訪れるものも少なかったからだ。来客は、実に数週間ぶりとも言えた。

ミナはこくりと頷いて椅子から腰を上げた。

「お通ししてください。準備ができたら私も向かいます」

「分かりました」

フィナンシェはスツとお辞儀を返して扉を閉め、来客者達の方へと向かっていく。

――数分後、準備を終えたミナが応接室の扉を開けた。

そこには二人の少女がソファに腰を下ろしていた。ミナの姿を確認して、ソファから立ち上がりぺこりとお辞儀をする。

「初めまして。プラネテューヌの諜報部員のアイエフです」

アイエフがスツとミナに向かって右手を差し出す。ミナはそれを快く受けて、自分の右手を差し出す。

「私はナースのコンパです。よろしく願いますです」

「私はルウィーの教祖を務めさせていただいております、西沢ミナと言うものです。以後、お見知りおきを」

簡単な自己紹介を終え、三人は向かい合う形になって座る。

「プラネテューヌとは……、随分と遠方からやって来ていただいて

嬉しい限りです」

ミナが微笑みを見せると、アイエフはフツと笑みを見せる。

「いえ、これも仕事の内ですから」

そうですか……とミナは呟くと、一度小さく目を伏せてから再び口を開いた。

「……と言うことは、プラネテューヌ政府からの連絡が？」

「はいです。イストワール様から幾つかの連絡事項を預かっているです」

コンパがポケットから政府専用の携帯端末を取り出してミナの前に差し出した。パツと画面が浮き上がって幾つかの情報が多数の画面に映し出される。

それを軽く確認するように目を通してから、ミナが姿勢を戻しアイエフを見た。

皆が言いたいことを汲んだのか、アイエフは深く首肯し唇を上下させる。

「まず、第一の重要事項として……『邪神化』についての連絡です」

「『邪神化』……？」

ミナが眉をひそめる。

眼鏡の奥の、柔らかな瞳が珍しく研ぎ澄まされた。

「はい。こちらでも確認中ではありますが、『邪神化』というのは守護女神や候補生達が持つ特別な力——神力が暴走した結果だと考えられます」

「神力が暴走することがあるのですか？」

「確証はあまりありませんが……、神力は候補生の心理状態と深く結びついていると思われます」

ネプギアも、ユニも、キラが死の淵に立った場合に、無意識的にその発動を促している。それは彼女らの精神状態が極限まで不安定に陥った場合だ。

「そして、もう一つの原因は『候補生』自身にあると思われます」

「……」

ピクリとミナが眉を動かした。

「候補生はまだ女神としては未熟……神力の扱いに長けてはいません。それ故の暴走とも考えられます」

ミナは右手を顎に添えて考え込む仕草をとる。

「どちらにせよ、あまり候補生に精神的負担を与えてはならない――ということですね？」

「要約するとそういうことですう」

ミナの問いにはコンパが答えた。

「その点は我らの教会は大丈夫だと思いたいですね……。最近は随分と落ち着いてきたようですし」

「ですが、ここには候補生が二人もいらっしゃいますし、もしもの時のための対策を講じておいた方がよろしいという警告を一応しておきます」

「お心遣い、感謝します」

ミナが深く頭を下げた。

しかし、アイエフはそれを制止してから話を続ける。

「それで、こちらとしてはここからが本題ではあるのですが……」

「はい」

「ルウィーにももちろん『ゲームキャラ』はいらっしゃいますよね？」

「ええ……確かにこのルウィーには『ホワイトディスク』というゲームキャラがおりますが？」

しかし、ミナはそれがどうしたと言わんばかりに眉をひそめて言った。

「我々、プラネテューヌ政府は女神の救出を現在、計画しています」「……と、言いますと？」

「そのためにゲームキャラさんの力が必要なんですう」

コンパの言葉にミナがううむと呻ってから険しい顔つきになった。それから二人を交互に見回してから口を開く。

「ゲームキャラは各国の最重要機密事項の一つであるということに

ついでに知己は？」

「もちろんあります。その上で発言していますから」

「……残念ですが、ゲームキャラの居場所をお教えすることはできません」

ミナの言葉にアイエフはがっくりと肩を落とす。

しかし、当然と言えば当然の答えで、まったく予想をしていなかったわけではない。

「ですが、皆様が自力でゲームキャラの居場所を突き止めたのであれば、我々は何の口添えをするつもりはありません。ホワイトディスクがあなた方に付いていきたいと仰れば、連れて行って貰って構いません」

「よろしいので？」

「ええ。一時的に守護が弱まるとはいえずぐに皆様が女神様を救出していただけるのなら何の問題ありませんからね」

そう言うことか……とアイエフが苦笑を見せて頬を掻いた。何だか妙なプレッシャーを掛けられた気がする。

居場所は分からなかったものの、それでも許可は一応頂いた。それなら後はここにいても仕方がないかとアイエフは腰を上げる。

と、そこで思い出したように短く声を上げ、ミナに向かって口を開いた。

「教祖様？ 少しお訊ねしたいことがあるのですが……」

「お答えできる範囲でなら、申し上げましょう」

「……ルウィーやその周辺で少年の目撃情報がありませんでしたか？」

「少年……？」

ミナが眉をひそめる。

と言うことは人捜しだろうか。どんなご時世にもそれくらいはある。ミナは目を伏せてから言葉を紡ぐ。

「特徴は？」

「えっと、黒い髪でこれくらい長い黒いコートを着ててこれくらい

の身長の子です」

コンパが身振り手振りで説明してみせる。

それを見つつ、ミナが怪訝な顔つきになる。

そう言えば、先日、その特徴と似通った少年をこちらで保護したという心当たりがあったからだ。

「で、名前は『キラ』って言うんだけど」

「！」

そこでミナはようやく確信を得た。

「……その少年であれば、現在こちらの教会で保護しております」

「えッ……」

「じゃあ……！」

コンパだけでなく、アイエフの表情にも歓喜の色が見える。けれど、

「ですが……少々問題が」

＊

「ロムちゃん、ラムちゃん？」

キラは周囲に声を掛けながら教会の庭を走り回っていた。

ひとしきり走り回ったところで足を止めてフッと息を吐く。白く凍結した吐息がふわふわと宙に泡沫のように消えていく。

二人と共に外に出て十分程度、かくれんぼをしようと言うことでキラがもちろんのこと鬼役を選ばれたわけであるが、この二人の隠れテクが上手いこと。隅々を探し回ってみるが一向に姿が見えないのだ。

「どこに隠れたんだろ」

くしゃくしゃと後頭部を搔く。

できることなら早めに見つけてやらねば、流石に風邪を引いてしまいうだらうか。

もう少し急ごうと足を速めたところでキラの視界の端、教会と外を

隔てる塀の直ぐ傍に植え込まれている茂みがガサガサと動いた。流石にまだ子供。いくら上手い隠れ場所を見つけても、ジッと我慢していることはできないらしい。

ニヤリと笑ってキラはそつとその場所へ、足音を殺して近付く。死角からガバツと身体を乗り出して

「がおーっ！」

と、昨日にロムとラムと共に見たアニメの怪獣の鳴き真似をして飛び出してみた。

すると案の定というか

「きゃー！！！」

「きゃー……」

と悲鳴を上げて茂みから飛び出した。

それから逃げまどう二人。そんな彼女たちの背を目で追い、クスリと笑みを零す。

いつの間に鬼ごっこへとシフトしてしまったのかは分からないが、楽しいならいいやとキラは二人を追いかけ始めた。と、それから暫くして。

ロムがスツと教会の建物に沿って角を曲がる。確かそっちは正面玄関があったはずだ。

そして、何かにぶつかったようにロムが尻もちをついて地面に座り込んだ。

心配になって少し速度を上げてそっちへと向かう。

ちょうど角から顔を出し、丁度ロムが誰かに助け起こされていた。どうやらそこにいた人にぶつかったらしい。

教会を訪れる人なんて珍しい、と思いながらキラはロムの元に駆け寄る。

「大丈夫？」

「うん……」

キラは腰を下ろして、ロムの服の所々に付着した雪を払う。

どこにも怪我がないことを確認して、傍らにいる――少女の方に視

線を向ける。

キラより身長は低い。腰まである薄い桃色の髪が美しい――同年代ほどの少女がそこに立っていた。

何故だか、ひどく他人とは思えない雰囲気放つ少女だった。キラは思わず目を奪われる。

けれど、背後からラムが飛びついてきてその思考が中断させられる。はしゃぎ回ろうとする二人を宥めてからキラは少女の方に向き直った。

少女は、潤んだ瞳で、熱烈な視線をキラに向け放っていた。その瞳が、次第に水分を帯び始めて、少女はふるふると震える右手を口元へ当てた。

「きら……？」

少女の唇が僅かに揺れ、そう言葉を発した。思わず眉がピクリと揺れる。

「あの……、お会いしたことがありますか？」

「ッ……！？」

少女の瞳が驚愕を映して大きく見開かれた。それから沸々と怒りを灯していくのも見て取れた。

「『お会いしたことありますか？』って……、こっちがどれだけ心配したか……、私はずっとキラのこと――」

「あの、どうして俺の名前を知っているんですか？　確か初対面のハズでは……」

「――」

パン、と乾いた音が響き、キラはじんと左頬が熱くなるのを感じた。

一瞬、何が起こったのかが全然分からない。ただ頬に手を添えるとそこが痛みを伴い、そして目の前の少女が平手を振り終えているのが分かる。

どうして、

どうして自分がこんなことをされなければならないのだ。

そんな疑問を口に出そうとする。

「何で――」

「私は、心配で眠れなかったのに……そんな、冗談を……ッ！」

「……！」

ポロポロと少女の目尻から涙が溢れている。それを見たとき、キラは何も言えなくなってしまった。心臓が驚掴みされているような感覚だ。

「それに、そんな娘達と……ッ！」

掠れて、上手く言葉にできていない。

けれど、そんな言葉を挟むことも憚られる。それだけに、それは圧倒的だった。

「もう、いい……ッ！ キラなんて、大ッ嫌い！！」

少女は大きく声を振り絞って、脇目もふらず街の方へと駆けていってしまう。

キラはもう、何も言えなくなってしまった。

心臓の辺りがちくちくと痛む。ただ、頬に残る熱い感覚が、リアルに感じ取ることができた。

「変なの――」

「……おかしな人」

ギュッとラムが抱きついてくるが、あしらうことも抱き寄せることもできない。

ロムが心配そうにキラの表情を覗き込んでくる。

「キラ、怖い顔……」

「ッ！」

奥歯を噛んで、キラはバツと足を前に出す。

その仕草に驚いた表情になる二人。けれど、キラにはそんなことは気にも留めることはできなかった。

「二人とも！ 風邪引くと行けないから部屋に戻ってて！」

「どこ行くの？」

「追いかけてくる……！」

言うが早いのか、キラは少女の影を追ってそのまま走り出してしまった。

「ハッ……ハッ……！」

じわじわと身体が火照る。肺が、酸素が足りないと悲鳴を上げている。

けれど、キラはそんなことは気にしていられなかった。

少女の顔、それがちらつくだけで、キラは手を差し伸べなければならぬと感じてしまう。

少女の背中が見えてくる。

キラは躊躇うことなく、少女の腕を掴んだ。

「ッ！」

少女の驚愕に染まった、涙に濡れた顔がキラの視界に鮮明に映し出される。

むっとした顔になり、その手を振り解こうと少女が苦悩の表情になる。

けれど、キラは意を決して口を開く。

「俺には、記憶が無いんです」

キラの言葉を噛み砕くように、少女、ネプギアは深く肩を落としてから両目を見開いた。

「だから、俺が記憶があったときに貴女を傷つけていて……それで俺がのうのうと生きていることに怒りを覚えたのであれば、それは謝ります」

キラがスッと頭を下げた。

「だから……」

絶えられない。

「だから、そんな顔——、しないでください」

自分が言うのはおかしいと思った。

けれど、言うほかに方法はないと思った。

ネプギアが震える手をキラの頬に添える。それは、とても暖かな、懐かしい匂いのするものだった。

浮かび上がる、二人の笑顔。

それを思い出した瞬間、キラの意識はブツリと途切れた。

全てを、忘れて

EP. 27 [MEMORY]

「あ……?」

キラは薄く瞳を開けた。

真っ先に視界の中に映ったのは、天井——ではなく、ひどく整った顔立ちをしている少女の姿であった。

紫色の瞳に吸い込まれるように、キラはそこを見つめてしまう。

それに次いでようやく、キンキンとまるで冷たいアイスを一気に食べたときのように、鋭い痛みが頭を刺すようだった。

顔をしかめ、小さな呻きを発してキラはベッドの上に手を突いてのろのろと上体を起こしてからもう一度、その少女を見つめる。

「……」

とても、とても心配そうな表情をしている。

端正な顔が、ひどく歪に見えてしまうくらいに。

キラは薄く、微笑むとぽんぽんと彼女の頭を軽く撫でてから、幼い子供に語りかけるように優しく、声を発した。

「そんなに泣いてると、可愛い顔が台無しだぞ? ネプギア」

そう、言っちゃった。

その瞬間、ネプギアの目尻にじわっと涙が浮かぶ。それがネプギアの頬を伝い、ぽたっと彼女の美麗な太股に落下した瞬間、彼女はガバツとその身を思いきりキラにすり寄せて、小さく嗚咽を漏らし始めた。

キラは少し驚いた顔つきになる。だが、すぐに柔らかな表情を見せてネプギアの後頭部を優しく撫でる。

「……った」

「え?」

聞き取れないくらい小さな声でネプギアが何かを発する。

視線だけをネプギアに向けて、表情を少し歪めてキラはそんな声を漏らした。

「きら……やっ与会えた……」

ぐすぐすと鼻をすする音を交えてネプギアがそう言った。

キラはうまく確認するでもなく、深く首肯し暫くその体勢のままだった。

ただ、服越しに伝わる心地の良い微熱が、今ここに自分と、そして彼女が存在していることを静かに感覚させた――。

数分の後、ようやく泣きやんだネプギアだが依然としてキラから身体を離そうとせず、流石に頬に変な汗が流れる。

「あの……ネプギアさん……？」

視線だけを顔の横に這わせて、キラがポリポリと頬を掻き、口元をひくつかせてネプギアに向かって問いを發した。

だが、キラの位置からはネプギアの表情はまったく伺えない。

何だろう、最近ひどく女運が悪いな……とかどうでもいいことを一瞬、頭に浮かべてキラは暫くその状態で視線だけを向けていた。

ふと、キラは一度、瞳を伏せてからスッと正面へと向き直る。きつとこうなってしまうては、ネプギアは暫く動こうとはしないだろう。半ば諦めた風に、キラは聞こえないように配慮をして溜息を吐く。

そして、

「……？」

キラは眉をしかめた。

扉の前に、見覚えのない少女二人が立っていた。そして何故だか表情がどんどん鋭くなっていく。主に左にいる少女だが。

ここまで瓜二つ、という言葉がぴったりな者はこの世界に早々ないだろう。それくらい、その少女達の容姿は酷似していた。

何故だか、ひどく懐かしい感じがする。それなのに覚えがない。まるで、ネプギアと出会った当初のときのような感覚だった。

二人の少女はとととと危なっかしい足取りでキラの元へと歩み寄って、むうくと頬をぷっくりと可愛らしく膨らませた。

それに気付いたらしいネプギアがバツと振り向いて、顔を赤らめて俯いた。それを見て何とも言えず、キラは苦笑だけに留め、もう一

度、少女達の姿をまじまじと見つめる。

改めてみてもやはりそっくりである。違うところと言えば、髪の長さか服の色程度なものであり、あとは表情の差くらいなものである。髪の長い方の少女がジトーツとネプギアを睨みつけてから、すぐにパツと笑顔を見せてキラに向き直る。

「キラ、大丈夫？」

「心配した……」

「え……？」

キラはぱちくりと両目を瞬かせた。

何故、

何故、この少女達は、『自分の名を知っているのだ』、とただ単純に疑問に思ってしまったのだ。

それは当然のことである、だが、彼にとってそれは当然のことではなかった。

自然な反応、しかしそれは彼から返ってくるはずはない答えである。しかし、キラはそれを知る由もなし、またそれに対し何の異変も感じ取らないのである。それは――

「……えと」

キラはどう切り出したものか、思案顔になって目線を頭上に上げる。それから薄く笑みを見せて、申し訳なさそうに声のトーンをやや下げて優しく、優しく語りかける。

「悪いんだけど、他の『キラ』と勘違いしてないかな？ 確かに俺は『キラ』だけど、君達が探している人じゃ、ない――と、思うんだけど、ど……」

そんな言葉を紡いでいる間に、更に頭痛が増す。

だが、そうは言っても耐えられないほどの痛みではない。少し表情を歪める程度に抑えたものの、言葉を詰まらせたのにはもう一つだけ理由があった。

少女達の表情が一変して、まるで妙なものを見る目つきに、段々と替わっていくことが、手に取るように分かってしまったのだ。彼女

たちだけでなく、ネプギアまで、動揺、というより驚愕、を隠せないようにしていた。

「うー、」

「え……？」

髪が短い、青い服を着た少女が突然、くぐもった声を発し、俯いてしまう。

怪訝な表情でキラは眉をしかめ、暫く少女達の反応を待つ。

「ッ！」

ダツと、いきなり少女は向きを背後に向けて、一目散にドアを勢よく開けて、振り向きもせず走って行ってしまふ。

心配そうにそれに視線を向けていたもう一人の少女が、ジッとキラを強く睨んで潤んだ瞳で掠れた小さな声を発する。

「う、そ……だよね？」

「うん……？ よく分かんないけど、俺は君達に覚えはないかな……」

…、ゴメンね」

軽く頭を下げてキラがそう言った。

恐らく、それが決定打であっただろう。ビクッと大きく少女の両肩が震え、唇を強く噛みしめてから先程の少女の後を追うように去っていった。

反応に困る――、キラの頬につうと大粒の汗が垂れる。それからスツとネプギアに視線を当てる。両目を開き、口元に手をやって驚いた表情になっていた。

訝しげにそれを見て、何事か問おうとキラが口を開き掛けた瞬間――

「起きたのね」

「心配したです」

「少しは元気になった？」

キラが口を開き掛けた瞬間、三人の少女が軽やかな足取りで、キラが眠っていた部屋に入室してきた。

紡ぎ掛けた言葉を口の中で留め、キラが別の意図を持った言葉を発

する。

「アイエフさん、コンパちゃん、それに……？」

「日本一よ、ヨロシクね！」

ビシッと格好いい、まるでテレビでやっている戦隊モノのヒーローのようなポーズをとって少女、日本一が自己紹介をしてきた。

少女、日本一に名乗られて一瞬、度肝を抜いたキラの反応が遅れる。それからええと、と取り繕ってキラが声を発する。

「俺は、キラです」

「ま、簡単な自己紹介はそれまでにして……さっき私達の名前を呼んだところを見ると、記憶は戻ったのね？」

「……はい？」

キラは眉をしかめ、アイエフの言葉を窺うように、そう簡潔に問い返した。

アイエフは小さく声を上げ、それから確認するように口を開く。

「覚えて、ないの？」

「……まったく」

そう言われて、初めてキラは自分の記憶が大きく『欠落』していることに気が付いていた。まるで大きなクレーンで穿ったような、そう例えられるくらい心の中に物足りないモノがあった。

ラストイションでブラックディスクと会い、そこまでは覚えている。だが、それから後のことは全くと言っていいほど記憶が無い。

「ていうか、ここはどこですか？」

「ここはルウィーの教会ですよ」

「ルウィー……いつの間に」

顎に手をやって、キラがううむと小さく呻って腕を組む。

何しろ自分がルウィーに来たときの記憶が無いのだから、半分怪奇現象みたいで何これ怖いみたいな感じである。

それからさっきからネプギアが喋らないなと思い、キラが横のネプギアに視線を這わせる。ネプギアがスツとドアの方向に視線を向け、まるでとんでもない過ちを犯してしまったときのような顔つきにな

り、もう一度キラの方へ視線を向ける。

「キラ……さっきの娘達……」

「え？」

ネプギアのいうことが理解できない風で、キラが眉を寄せ上げる。
と、

「おはようございます、キラさん。御気分は如何ですか？」

にっこりと笑みを見せる、眼鏡を掛けた知的な印象を与える女性が、恐らくキラの看病に使用するつもりであったのだらう道具を、カー
トの上に載せてやって来た。

そして、どうして彼女が自分の名を知っているのか、先程の少女達
のように何故己に親しげに言葉を投げかけてくるのかが分からな
かった。

「あの……どちら様で？」

「は？ 何言ってるのよ。ルウィーの教祖様の西沢さんよ、アンタ、
世話になったんでしょ？」

アイエフがキラにそう問い掛けてくるが、当の本人はと言えば難し
い顔つきになって小さく呻っていた。

流石に不審に思ったらしいミナが眉を寄せ上げて、顎に手をやって
心配そうな声音で答えた。

「大丈夫ですか？ まだ少し記憶が混乱しているのでしょか……」
ミナがコップに緑茶を注ぎ、それをキラに手渡す。

おっかなびっくりキラはそれを受け取り、ちびちびと口を付けなが
らミナの姿をまじまじと睨めるように見据える。

大人しそうな外見の割には結構きわどい衣服を着ているな……、と
キラが思春期の男子特有の視線でミナを眺めているところ、右サイ
ドから怖いくらいのオーラを一瞬だけ感じたので邪念を捨てて再び
真剣な表情をして思考を廻らせた。

ぶるぶると首を横に振って、一度、脳内をクリアにして落ち着いて
よく考えてみる。しかし、アイエフの言うような、彼女——ルウィ
ーの教祖に世話になったという記憶が、キラには『無かった』。

「俺……本当に、ここに『居た』んですか？」

「え……？」

ミナが訝しむように眉を寄せ上げ、まるでキラの言うことが理解できないと言った風な表情になってそう問い返してきた。

「貴女は、何てお名前なんですか……？」

キラの目つきは、本物だった。

だからこそ、ミナは何も、ただ何も言えず、その場に立ちつくす。口元を両手で押さえ、驚愕の色を隠せない様子で。

ただ、キラは彼女のその様子を見ていても、何も感じることができなかった。彼女、ミナという存在が欠落してしまった以上、そこに何の感情も生まれ出ることはない。ただ、それはブラックホールのように、全ての感情を吸い込み、そして消滅させてしまう、ただ、それだけだった。

「それに……さっきどこに行った娘達も、何だったんだろう……」

「ッ、も、申し訳ありません！ 少し席を外します！」

ミナは、言うが早いかお辞儀もロクにこなせぬまま、扉を蹴破りそうな勢いで退室してしまった。状況を上手く噛み砕けないキラだけでなく、アイエフ達もかなり咄然とした様子でミナが去っていった扉を、ただ呆然と眺めつつ、厄介なものを見る目つきでスツと視線をキラに移した。

「アンタ……何したの？」

「俺が聞きたいですよ」

ジトツと視線を向けるアイエフに、キラが同じような視線を向けてそれに答える。ふと、コンパが思い出したように口を開いた言葉に一行は耳を傾ける。

「そういえば……記憶を失っていたときの記憶がなくなるって話はたまに聞くですね」

「お、流石はナースね」

「えへへ……、それ程でもです」

日本一に褒め称えられるコンパが、恥ずかしそうにはにかんで頬を

赤く染める。しかし、それらのやりとりを眺めていたキラがううむと小さく呻ってから腕を組み、難しい顔つきになって少し顔を俯かせる。

「でもそれが分かってても直す方法がないんじゃない……」

単なる眩きであつたが、グサツと嫌な音を立て、その言葉がコンパの心臓にぶつくりと突き刺さった（画像はイメージです）。

Orzな感じで項垂れるコンパが、虚ろな視線で、同じく虚ろな笑みをうふふと漏らして周囲にどす黒いオーラが発生する。

「ソウデスヨネ、ワカッテモナンニモデキナインジャイテモイミナイデスヨネ……。ヤクニタタナイナースデホントウニモウシワケガタタナイデス……」

黒コンパが発動しつつあるのを遠巻きにビクビクと見ていたネプギアが、そろそろとコンパの脇に寄り、腰を下ろしてコンパの肩に手を当てる。

「こ、コンパさんが居てくれて凄く助かりますよ!」

「そ、そうそう! ナース万歳!」

ネプギアと日本一二人がかりで立て直し作業を行う傍らで、真剣な表情をしたアイエフがキラと向き合う形になって腕を組んで口を開く。

「それはそうと、さっきの教祖様の反応も気になるわね」

「……と、言いますと?」

「アンタが言ってた子供達のことよ。その子達の話聞いた瞬間に教祖様の血相が変わったでしょ?」

「確かに……」

キラが記憶を失っているときのことを覚えていない、と分かった瞬間にもかなり動揺を見せていたようではあつたが、それにしたって動揺の仕方が尋常でなく、また比べようもなかった。

もしかしたら――、とキラの中にある仮定が浮かぶ。

彼女らと会った瞬間、肌で、直感で感じたこと。それは、ネプギアの過程を経て、そしてユニとの交流を通して持った確信とも呼べる

べきもの。

「まさか……女神候補生？」

「……アンタが見た娘達は複数なのね？」

「はい……二人、そっくりな娘達です」

「候補生が二人……、にわかには信じがたいけど」

アイエフは更に難しい顔をしてふむ……、と小さく声を漏らし、考え込んでしまう。確かにキラとしても候補生が国に二人もいるなど、考えられるような事実ではない。が、自分の直感が間違っていることはないという確証がどこにあったのだ。

（妹……、そして『その』妹は二人……、まさかこんな形で繋がっているなんて考えられる事じゃないけど……偶然とも思えないわね」

「アイエフさん？」

「え？」

「何をブツブツ言ってるんですか？」

「い……、もしかして声に出てた？」

「ええ……まあ」

アイエフが『やってしまった』というような表情を見せる対で、やりにくそうにキラが苦い表情を見せて答えた。余談だが、ブツブツと独り言を漏らすアイエフを見て、キラはなにこれ怖いと思った。どうでもいい。

暫く悶々と思考に老ける中で、扉の方からミナが覚束ないような足取りで再び入室してくる。

「教祖様？」

随分と、先程とは様子が違うことに一同は不信感を抱き、日本一が代表して様子を伺う。ミナは一度、小さく顔を俯かせ、それからぺこりと大きく頭を下げ、申し訳なさそうな声音で告げる。

「申し訳ありません……、皆様には大変ご迷惑を掛けることとなりますが、キラさんの容態が落ち着いたようであれば、こちらの教会から立ち退いていただけると助かります……。それから、暫くこちらの教会にはお立ち入りは控えていただけないでしょうか……？」

ミナがそう言い切った瞬間、キラは、まるで心臓がえぐり取られるような、そんな冷たい感覚が襲ってきた。さっきまでは、まるで親しみを込めたような呼び方であった。けれど、今、彼女のキラの呼び名はまるで冷たい、それこそ他人という立ち位置を再認識させられてしまうような、そんな声音である。何も支障はないはずであるのに、キラは心臓がちくちくと痛んだ。

「それは、候補生の方々の……？」

「はい……」

言った途端、今度はネプギアが俯いてしまった。

キラはそれを視線の端に映し、何だか自分の所為で女神救出のための作戦に大きな支障を来してしまっているようで、申し訳ない。居心地が悪くなって意図せず肩をすくめて、小さく顔を俯かせる。

「あまり候補生を刺激するのもいけないわね……今は大人しく従った方がよさそうね」

「はい……」

＊

アイエフに促され、ミナが荷物を預かっているというのでキラはその部屋へと向かう。話を聞くところ、キラがこの教会で世話になっていたときに使っていたという部屋が別にあるらしい。

異様に足音だけが響く長い廊下を、ミナに先導されながら進む。窓の外から見える白い景色がひどく懐かしく見える、見覚えはないはずなのに、だ。

前を歩くミナにふいっと視線を向けるも、見えるのは悲しげな色を帯びた彼女の背中だけであり、これまた妙に居心地が悪い。何と切り出したものだろうか、だがここで自分が変な口をきいていいものか、先程の彼女の反応を見る限りキラは自分が何かをやってしまったている、そしてその所為でミナも、ルウィーの候補生達も圧倒的に距離を置かれてしまっているわけであり、判断を間違ってしまったえば

敵対してしまうような事すらもあるような感じだ。

悶々とそんな思考を廻らせながら、長廊下を突き進み、そしてとある一室でぴたりとミナの足が止まり、キラは心臓が飛び跳ねた。

ミナは部屋の扉に掛けられたプレート、確かにキラの筆跡で書かれた『キラ』という名前の書かれたプレートを悲しそうに見つめ、いそいそとそれに手を掛けて、プレートを取り外そうとした。

その瞬間、キラの中で妙な感情が湧き出るのが分かった。

「やめてください！」

ミナが驚き、こちらを振り向く。キラも思わず口元を押さえて、表情を歪める。まるで自分の行動が信じられないというように。

「えっ……と、あの……、その、お、おかしいですよ！　こんなこと言うの……、何も、ないはず、なのに……」

キラの紡ぐ言葉が、次第に落ちていく。何だか、こんなことを言うのを憚られたような感覚だった。ただ、記憶の片隅で居場所を奪われることが悲しく思える。この瞬間は、凄く嫌だ、と。

覚えてはいない、だが、確かにそこにその感情はあった。直感的であつたが、そこに事実があつたことが、確かに感じ取れていた。

ミナの瞳に涙が溢れ、口元を押さえてふるふると小刻みに震えて、その表情を見せないように俯く。だが、それも遅かった。

「あ、の……ここ、鍵……開けたままで、いいですから……！」

ミナはそれだけを言って、キラにはもう一瞥もくれないことなく、廊下の奥へと走り去っていつてしまう。キラが声を掛けるまでもなく、じきにその姿が消えていく。薄く開かれた唇をきつく紡いで、大きく肩を落として力無く入室する。

生活感がどこか欠如したような、無機質な印象を与える部屋の中心に据えられているテーブルの上に、見覚えのある白いバッグと黒い刀が折り重なるように置いてあつた。ふらふらと覚束ない足取りでテーブルまで突き進み、バッグの中身を確認してそれを担ぎ、刀を持って部屋の中をざっと見回す。

ふと、気になるものがあつた。テレビの横、壁掛けタイプのコルク

ボード、そこに数枚の写真がピンで留められていた。

知らずの内にキラの足がそのコルクボードの前に進む。それからゆっくりと一枚一枚を確認するように覗き込む。

職員と思しき男性数名と共に笑って映っているもの、女性と話している最中に撮られたようなもの、――先程の女性、そして候補生の少女達と笑って、教会の門前で撮られた集合写真、どれもキラに見覚えはなかった。何の感慨も抱かないはずだった。

それなのに、キラの胸の内には沸々と、それらの日々を失ってしまったことに対する――これは、自責だろうか。まるで、『記憶を失っていた自分』が、別人格を形成し、己を凌駕してしまいそうな感覚。自分を責めている、しかしそこには自分という固定された人格ではなく、もう一つの人格が身体の中に起こっている。そんな、状態、だろう。

つう、と自然に涙が溢れて、頬を伝い、床の上へと流れ落ちて、弾けて消える。悲しいはずがないのに、とそれを発しかけた言葉を口の中に押し留める。

――分らない、自分の感情が。

自分は、記憶を取り戻した方が良かったのか、それとも記憶を失い何も知らないまま生きていた方が良かったのか、どちらも幸せであったのだろうか。だが、それを知る術は、今のキラには、もう、ない。

悲しいのかも、嬉しいのかも、分らない。ただ、溢れる涙を止めることはできなくて、キラはただ、こぼれ落ちる涙を必死に拭い取りながら、写真の前でただ声を殺して泣くことしかできなかった――。

☆ ☆ ☆

ルウィーの街は随分と寒い、なんて思いながら、キラは暖房の効いた部屋の中でそろそろ熱気を帯び始めた自分の身体感覚を感じながらコートを壁掛けに据えた。

ウンザリするような曇天が街の空を覆い、何だかひどく気分が沈んでしまうような感じである。ガラス越しにそれを眺め、キラは思わず眉を寄せ上げる。

ルウィーの中央協会を後にしてはや数十分が流れ、ひとまず落ち着ける空間が必要だろうとアイエフとコンパが宿を取り、一同はその部屋の一つに集まって暖をとっていた最中のことである。

そろそろ外を眺めるのも飽き始めたキラが、ふいつと室内に視線を戻し、それから一つ、気になる存在を目に付けて声を掛ける。

「あの、日本一さん……でしたよね？」

「そうだよ？」

青い髪を揺らし、日本一がビシッと格好いいポーズを決めて返事をした。

何でいちいちポーズを決めるんだろう……、とかキラは思いつつ流れた冷や汗を何とか隠して疑問を口にする。

「日本一さんはそんな格好で寒くないんですか？」

「あー、それ私も思う」

アイエフがソファにどっかりと体重を載せ、足を伸ばして完全にリラックスしたフォームを見せつつ、横から口を挟む。

「ネプギアなんて部屋に入るなり、毛布にくるまって暖房の目の前にいるのに」

くいくいとアイエフが指で指示する先には、毛布を2、3枚ほど身体の周り巻き付かせて、（（（；。D。）））みたいな顔をして必死に手足を温めていた。それを見てみると、どうにも苦笑しか浮かんでこないわけではあったが、キラはそれに一瞥をくれるだけに留め、もう一度、日本一の姿をまじまじと眺める。

それにしても幾らなんでも薄着過ぎやしないだろうか、と。ピッチピチのライダースーツ、おまけに胸元は大きく開いて軽くお腹まで

見えている始末。首元には暖かそうな紅いマフラーを装着しているものの、それにしたって気休め程度だろう。

そして、暫く眺めているところでキラは何だか妙な違和感に駆られる。

（……日本一さんの姿、見たことあるな）

臆気ではあるが、だいぶ前に似たような格好をした人物に会ったような気がする、とキラは記憶の中を模索するも、しかしどこだっただろうかと小首を捻る。

（……耳が）

ノイズのような音がキラの耳に聞こえてくる。テレビに視線を飛ばしてみると、もちろんのことテレビは点いてはいない。ならば、これは何なのかとキラの眉間にしわが寄る。そして、少女の声が頭の中に響いてきた。

『つ、つけ回すなんて失礼ね!?!』

『い、言っておくけど、私はまだ目的は達成してないんだから!』

それに次いで、頭の中に、ノイズ混じりではあるが遙か昔の映像が流れてくる。青い髪をした少女が、しきりに隣にいる黒髪の少年と口論をしている。けれど、それは怒った風ではなく、どこか楽しそうに、笑いあっている姿も――、あった。

「あの……日本一さん」

「なに?」

「俺と、日本一さんって……会ったこと、ありますか?」

――ドスッ

言った瞬間に、キラの視界がブラックアウトした。それに次いでジンジンと、まるで眼球が直接火あぶりにされているような熱さと共

に、耐え難い痛みが、キラの眼球をとめどなく襲った。

「ぎゃあああああああっ!!」

ようやく事態が飲み込めてきたキラが悲痛な叫びを周囲に撒き散らしながら、両目を押さええてゴロゴロと床をもんどり打って転げ回る。そしてその傍らで真っ黒な笑みを浮かべたネプギアが、手をチョキの形にして、背後からどす黒いオーラを放っていたものの、キラは目を潰されているので分からない。

人さし指と中指を付けたり放したり、まるでハサミでチョキチョキするジェスチャーをしながらネプギアが腰を折ってキラの顔を上から覗き込むが、キラは目を潰されているので分からない。

「ダメだよ、キラ？　いくら日本一さんが綺麗だからってナンパなんかしたら……」

うふふ……、と明らかに邪気を含んだような笑みを零して、ネプギアがそう言った。なにこれ怖いとアイエフがすっかりソファの上で縮こまって、ガタガタとネプギアに畏怖の視線を向けているが、キラは目を潰されているので分からない。

「な、ナンパとか別にそんな……!」

ようやく痛みがとれつつあるキラが、床に転がったまま呻きにも近い声で反論してくる。

「俺はただ、少し日本一さんと会ったことがあるかなー、くらいに……」

「てい☆」

「ぎゃあああああああっ!!」

キラが悲痛な叫びを周囲に撒き散らしながら、両目を押さええてゴロゴロと床をもんどり打って転げ回る。そしてその傍らで真っ黒な笑みを浮かべたネプギアが、手をチョキの形にして、背後からどす黒いオーラを放っていたものの、キラは目を潰されているので分からない。

「やだなー、それがナンパの手口なんだよ？　キラも私がナンパされてるところ見たことあるでしょ？」

「見えない……」

ネプギアとキラの会話には絶大な食い違いがあるのだが、絶妙に話が進んでいるところを見ると、運命の巡り合わせを見たような感じがするが、キラは目を潰されているので分からない。

あと、補足をする二人がプラネテューヌを発って数日、ラスティションへ向かう道のりの過程で通りかかった街で、キラが昼食を買いに少しネプギアの元を離れたところ、同じような手口でナンパをけしかけてきた男がいたのである。もちろんキラがその直後に颯爽と飛び入り、特に苦勞することもなく撃退したのではあるが。

ようやく痛みから脱しきれたキラが涙目で目元を押さえ、床から起き上がる。それからまた懲りもせずにまじまじと日本一を見る。

「会った気がするんだよね……」

「……、私もそんな気がする」

「はいはい、話が進まないからネプギアは少し黙ってなさい」

もう一度、キラの両目を潰しに掛かろうとしたネプギアを制止して、アイエフが三人の間に割って入る。

チツ、と舌打ちするネプギアに苦い視線を向け、アイエフがキラと日本一の方に向き直る。

「で、キラは日本一に会ったことがあるのね？」

「む……、確かだいたいぶ前だと思っんですけど。たぶん4年か5年くらい前だと思います」

「場所は……どこだったけ？ プラネテューヌかな」

むむむ……、と呻ってキラが深く考え込む。何かが引つかかかってうまく思い出せないような感覚。暫くそうして呻っていると、とっかかりが外れたように、ころんと記憶が転がり、蘇る。

「あの時のお姉さん！」

「あの時の男の子！」

お互いに指をさし合ってそう叫んだ。

今から5年ほど前、キラが買い物を終え、少し広場に寄ってから帰ろうと広場の門をくぐり、そしてその時に出会った少女――それが

日本一だった。それを思い出すと、様々な記憶が思い出される。ふと、キラが気になることを思い出す。

「日本一さん、彼氏さんは元気ですか？　まだ付き合っていたりとかします？」

•

「うえええええええええええええええええええええつ!!」

衝撃の聲がホテル全体に響き渡り、職員に怒られた。

さて、暫く時間をおき、落ち着きを取り戻したところでアイエフがこほんと咳払いを一つ零して、意識を落ち着かせるようにしてから口を開いた。

「日本一にも男女経験ってたのね」

「なんかもの凄くバカにされてない？」

日本一がぴくぴくと口元を引きつらせて言った。

「それに、別に付き合ってたとかそんなじゃないし……」

「違うんですか？」

ポリポリと頬を搔いて否定の色を見せる日本一ではあるが、顔は完全に真っ赤になっていたし、違うという要素が見えない。

「どんな感じだったんですか？」

飲み物を買に行っていたコンパが事情を聞いた後に w k t k といった感じで身を乗り出す風で問いつめてくる。日本一はまたも否定の言葉を発するも、もう聞き入れて貰えない様子だ。

「ど、どんな感じも何も……、私はただ知り合ったばかりだったから分かんないし……」

「何てお名前だったんですか、彼氏さんは」

「だーから！ 彼氏じゃないってば！」

ネプギアに問われた事に対し、その問いに日本一は答えることなく反論する。

これがガールズトークってヤツなのだろうか、すっかり居場所を無

くしてしまったキラがそんな彼女たちを微笑ましいものを見る目つきで眺め、ぼふっとベッドの上に身を投げた。
自分が忘れていたのは、きっと幼い頃の記憶という理由だけではないのだろうと思いつながら。

+

『ごめんね……、お姉ちゃんは行かないといけないの……』

「どーして……」

『ごめんね……』

「謝ってないで、教えてよ……」

『言えないの……』

「なんで……」

『どうしても、行かないといけない理由があるの……』

「連れて行って……」

『危ないから……』

「それでもいい……」

『貴方は、ここで生きて……』

「お姉ちゃんは、俺に生きる意味をくれた……。お姉ちゃんは俺に

居場所をくれた……。お姉ちゃんがいなくて、生
きる意味なんて……」

『生きて……。』

『生き抜いて……。』

「お姉ちゃんがいなくて、生かなくていい！」

+

EP. 28 [CONFIDENTIAL TALK] (前書き)

30,000アクセス&4500PV突破！
皆様、本当にありがとうございます！

EP. 28 [CONFIDENTIAL TALK]

ギョウカイ墓場――、

「これが先の話に出ていたものか？」

ブレイブ・ザ・ハードが、ロボットなのにどうやっているんだと問いたくなるように、両腕を胸の前で組んで、彼よりも遥かに高い、針のようなものを見上げていた。

そしてそんなブレイブの傍らに、金色の装甲を纏ったトリック・ザ・ハードが、下卑た声を漏らしつつ、ブレイブと同じくそびえる針の先端に視線を送っていた。

「ああ。これが新たなツールの一つ……、マジックがやたらと開発を急げと言うものだからなあ」

ククク……、と針を挟んで向こう側にいる女性、マジック・ザ・ハードに、やけに嫌味たらしく言う。

しかし、そんなことは気にした素振りを見せることもなく、マジックがフンと鼻を鳴らして上げていた顔を正面へと戻し、艶やかな唇を上下させる。

「これを使えば、私の指示したとおり――か？」

「そうとも。これがあれば、女神や候補生もただの人間に成り下がる……」

ブレイブが少し興味を惹かれたようで「ほう」と、感心したような口調で声を漏らす。すぐにおちやらけた風に腕を腰にやって身体を少し揺らす。その仕草はまるで人間のようである。

「ジャッジに聞かれると面倒だな。どうせ、また『娯楽が減ってしまふ』などと口走ってこれを破壊しかねん」

「フン……ジャッジにはこれが何かも理解できぬさ。せいぜい、今頃は開けた場所で武器でも振るっている頃だろう」

それもそうか、とブレイブが遠くで聞こえる轟音の方に視線を向け

て、小さく頷いた。

「で、見せたかったものというのはこれだけか？　それならば俺は早く別の仕事を終わらせたいのだが」

真剣な口調から察せられるに、このブレイブという男(?)は随分と仕事熱心な性格であるらしい。そんな彼にマジックは感心しきつたような視線を浴びせつつ、腕を組み直して重くその口を開く。

「まだ、ある」

マジックの口調が、少しだけ変化する。そんな彼女の感情の機微を、ブレイブだけでなくトリックも感じ取っていた。

ニヤッと艶めかしい笑みを見せて、マジックがついと彼女の背後の更に奥の方を顎でしゃくって指示をする。それに連られ、ブレイブが覗き込むような姿勢でその視線の先を追って見る。

「これは……」

ブレイブと同じくらいの身長、これはロボットだろう。しかし、ブレイブとは違い、どこか無骨でいかにも『機械』というのをそのまま表したような、そんな印象を与える紫色の装甲をしたロボットが、眠っているようにそこに佇んでいた。

「これがどうした？」

ズンズンと3人が、そのロボットの直ぐ傍に歩み寄って、ブレイブが物珍しそうにそのロボットの身体全体を見回してから、素っ頓狂な声で横にいるトリックにそう問い掛けた。

対して、トリックは心底面白そうにニヤニヤと笑うような仕草を見せ、ロボットの腹部をコンと腕で小突いて、まるで玩具を自慢する子供のように両手を広げて、楽しそうな口調で言った。

「第5世代『ハードブレイカー』……、その実用機だ」

「ハードブレイカー、だと？」

その言葉にブレイブは眉をひそめた。

彼の記憶が正しければ、確か3年ほど前にラステイションの技術博覧会にてその存在が明らかになったはずである。その頃に開発されたのは第4世代モデル。その時は彼らが崇拝する犯罪神マジエコン

ヌがギルドの一員である男にその技術を伝え、完成させたもので今はその製造方法も教会の名をもってして秘匿となっているはずだが、犯罪組織では秘密裏にその開発が進んでいる。その後に、第2世代、第3世代……と変遷を経ての、この第5世代という事だろうか。

ハードブレイカーは、文字通り『女神を壊す者』。その意味するところは、ずばり『女神の天敵』と成りえる者、ということだろう。『それが前にマジックが言っていた、『計画の第2段階』ということなのか?』

「まあ、そうなるな……。その昔、科学者である男が生み出した『ハードスレイヤー計画』の産物の一つでもある」
ピットとマジックが右手の人さし指を突き立てる。

「鎧というものは、もちろん分かるな?」

「? ああ……、当然の知識だが」

あまり表だってそういうことをするものではないが、ブレイブだって多少なりの戦闘の仕事は請け負う。自分の刃向かってくる者達が装備している金属製のものが多い、身を守る防具だ。それくらいはブレイブにだって当然分かる。

「その応用のようなものだ。鎧をさらに硬質化、巨大化させ、人間をまるまる包めるほどにし、そしてそれに魔力を帯びさせる。あとは起動させれば、装備した者の意志など関係はない。たった一つの目的……、『守護女神を殺す』という目的のためだけに稼働する殺戮マシンとなるわけだ」

トリックが補足のように、長々とした説明を述べる。小難しいところは、ブレイブにはよく理解はできないが、とどのつまり意志を持った鎧を人間に装備させることによってそれが起動すること、ということだよいのだろう。

「今回、これは早めにゲームギョウ界へと送るとしよう。今までのような失態はこれ以上は見せられん」

「何かあったのか?」

長らくギョウカイ墓場を開けていたブレイブは、事情が分からない

といった体できょとんと小首を傾げる。

そこでマジックがジトツと、鋭い視線をブレイブに向け、忌々しげな口調で告げる。

「お前に頼んでいた仕事に、不備があったと言うことだ」

「……なに？」

次は、ブレイブが不機嫌そうな声を上げる番であった。

「今まで作り上げたハードブレイカー……、いや全ての『HS計画』のモデルが破壊されているということだ。ゲームギョウ界へと転送した直後にな」

このギョウカイ墓場で彼女らが生み出したアイテムやツールは、ゲームギョウ界に潜んでいる犯罪組織の構成員達に渡される。しかし、こういった巨大なものは流石に持ち運べないし、仮にそうできたとしても目立ってしまう。だから、構成員達に人気のない開けたダンジョンなどで転送の術式を組ませ、そこから送り込んでいるワケなのだが――、

「俺とて、全ての転送に立ち会えるわけではないからな。不備と言われても、こちらにはどうしようもない」

「前に、お前には犯罪神様の復活を食い止めようとしている不屈き者の討伐を命じたはずだが……」

マジックがそう言うと、ブレイブが「む……」と声を漏らして、小さく顔のパーツを動かした。

「その者だと言うのか？」

「恐らくな」

「何の話だ？」

事情を知らないトリックが、横からキョトンとしたような言葉を送ってくる。マジックは説明するのが面倒という風で無言でブレイブに視線を飛ばしてきた。「やれやれ」と言葉を零し、ブレイブが事情を説明すると、トリックはふむふむと納得した風情で何度も頷いていた。

「ハードブレイカーを壊す者、か……。なかなか興味深いじゃない

か」

やはり、制作者としては何か燃えるものがあるのだろうか。楽しいにククク……と声を漏らして笑うトリックを横目にブレイブはもう一度、両腕を胸の前で組み直してお手上げといった風な口調で言葉を紡ぐ。

「そうは言うがな、こちら数ヶ月その後の追っているが、全く正体がかめん様子で困っているところだ」

「アクク……、追跡用のモンスターをいくら使役しても尻尾が掴めないところを見ると、相当逃げ足の速いへっぴり腰らしい」

全て事情は知っている、とても言いたげにトリックがニヤニヤと笑うような口調でブレイブに向かってそう言う。それは姿の見えない敵、というよりはブレイブに向けられた皮肉に近かった。

ブレイブはと言うと、そんなトリックの悪口を手で制し、不機嫌そうなマジックに向かって体裁を取り繕うように答えた。

「そうは言うが、一応できるだけのことはしている」

「成果が出ていないのなら、とても『頑張っている』とは言えんな」
「む……」

マジックの然とした口調にブレイブがたじろぎ、その背後でトリックが腹を抱えて声を殺して笑い転げている。

「……だが、まあ、お前にはあちらの世界でできる仕事の大半を任せているからな。多少のことには目を瞑ろう」

それが果たして多少のことと済ませられる事情であるかはブレイブには分かりかねるが、ひとまずは大丈夫だろうとひと息吐いた。

「それはそうと、トリック」

「む？」

自分は何ら関係のない、と置いていたらしくトリックが素っ頓狂な声を上げ、マジックの方へ顔を向ける。

「『魔剣』については、まだ何も動きはないのか？」

「動きたいのは山々だが、何せあの『魔剣』だからな……。『HS計画』のファーストモデル、中古品に見えても、最も忌むべき『剣』

、そうそう手出しはできん。それに、少しばかり面白い遊びを思いついたのでな」

「遊びだと……」

トリックの言葉を聞いて、マジックがぴくりと眉を動かした。

「あれが女神候補生共の手に渡る前に、何としてでも――」

「寧ろ渡してやるのだ」

マジックの言葉を遮り、トリックがニヤニヤとおもしろがるような声でそう言った。それを聞いて再びマジックの表情が微細化する。

「あの魔剣には、『際限がない』――。『H S 計画』の全てをつぎ込んだ、完成体だ。到底、候補生共の手に負えるような代物ではない」

ニヤニヤと笑いながらトリックが続ける。

「それにどこからかあの情報を聞き入れたとしても、あの剣を手にして絶望するのは候補生共のことだ。あの剣を手にしては、いずれ奴らも因果に導かれ、そして己達の身を滅ぼすことになる……」

「仮にあれを扱えるとしたら……？」

「グハハ！ そんな者がいるのなら是非ともお目に掛かって見たいものだ……！」

トリックは何の問題ともししていない様子で、マジックの心配を大きく笑い飛ばして見せた。マジックも妙なしこりは残るものの、それもそうかと思いい直して小さく頷き、それに返事を見せた。

☆ ☆ ☆

「ゲームキャラ……？ 残念だが聞いたことはねえなあ」

「ですよねー」

ルウィー中央ギルドにて、キラは受付をしていた見た目やや30代半ばのような、人の良さそうな男性に向かい、キラはカウンターに

肘を突いて、答えを聞いた後に苦笑を見せてそう言葉を零した。

キラが教会を出ては数日、ひとまず自分たちに必要なのは情報であると思い、こうして様々な施設やらに顔を出し、片っ端から聞いて回るのであるが、案の定というか何というかやはり返ってくる答えはワンパターンである。

というか、教会の中でもかなりの上位部しか知らないような情報を、そんじよそこらにいる人々が知り得ることなどしてそうそう無いことであるのは百も承知なのであるが、せめてそれに関連する何かの情報が得られないかと淡い希望を抱いての情報収集の最中のことであつた。

キラはひとまず男性に礼を言ってカウンターを離れる。それから迷い無くギルドのロビーの中にある据え置きベンチに腰掛けている少女達の元へと駆け寄る。

「どうだった？」

いの一番に口を開いたのはネプギア。彼女の問いにキラはふるふると首を力無く横に振ると、ネプギアはそっか、と小さく呟き返した。キラはそれに対し、お上げとばかりに両手を組んで、大仰に肩をすくめてフンと鼻を鳴らす。

「なにぶん、ゲームキャラについての情報が一般に知らされていないので探しようもないですよ……」

「そうね、……もっと確信のついた餌か何かでもあればいいんだけど」

アイエフが顎に手をやって、「ふむ……」と呻った後にそんな言葉を吐き出した。その言葉を聞き、キラはぴくりと眉を動かし、頬をぴくつかせる。

「餌って……、それでゲームキャラが寄ってくるはずないでしょう？」

「やっぱそうよね……」

我ながらアホな提案だわ……、とでも言いたげにアイエフが頭を抱えて、やれやれといった風情で首を振った。

「犯罪組織の動きも相変わらずですし……、このままじゃねぶねぶ達が助けられないですう」

「いっそのこと犯罪組織を蹴散らしちゃえば、万事解決でしょ！」
「……と半ば哀れみを含んだような視線を、4人は日本一へと浴びせた。」

「日本一、分かってないようだから言うけど……、犯罪組織には『四天王』っていう化物みたいなのが4人もいるのよ？」

「おお！ 四天王、燃える響きだね！！」

より一層、日本一の瞳に灯った炎が激しさを増して燃え上がる。

「頭痛くなってきた……」

アイエフが額を押さえて、苦虫をかみつぶしたような表情になってぼつりと力なさに眩いた。

「日本一さん、言いにくいんですけど、その四天王には俺達じゃ敵わないと思います」

「なんで？」

「……女神であるネプギアでさえ勝てなかったんです」

キラはプラネテューヌであった、ジャッジ・ザ・ハードやマジック・ザ・ハードの襲撃、そしてその時に感じた彼女らの実力についてを、かなり詳しく説明して見せた。

流星に今までのようなテンションはなく、日本一もかなり真剣に聞き入っていたようである。

「なるほど」

「やっぱり、各国の候補生の力を借りられないのは痛いわね」

「今からユニに連絡したら、合流してくれるかな……」

キラはポケットからGギアを取り出して、ユニのアドレスを確認し、メールを送ろうとしたが、何かの思いがキラの動きを阻害した。

いそいそとポケットに端末をしまい込み、うぐむと呻って腕を組む。

「仕方ないわね、私は私で少し心当たりを探ってみるわ。こんぱも手伝ってくれる？」

「了解です」

「じゃあ、二人で言ってくるから、残りは宿に戻って休んでてもいいわよ」

「お、じゃあそうしようかな」

「アイエフさん、コンパさん、よろしくお願いします」

ネプギアと日本一がギルドの扉をくぐり、それに次いでアイエフとコンパも扉を抜けていく。

自分はどうかとキラはその場に立ちつくしていたが、適当にそこら辺を歩いてみようと思いつき、ネプギアにその旨のメールを送ってギルドの扉を抜けた。

――それから数分、

ルウィーの街並みを物珍しそうに眺めるキラの視界に、一人の少女の姿が見えた。

水色の学生服のようなコートを着込み、やや少女の体軀にしては大きめの帽子を被って、そんな少女が地面に膝を突いて、必死に何かを探しているようだった。

「あの娘は……」

知らないはずではあったが、何故だか妙に気取られるものがあった。それに、何だか懐かしいような感覚もあった。

動悸が激しくなって、いやに汗が噴き出してくる。思わずぐくりと唾液を飲み下して、意を決するように唇をきゅっと紡いで、その少女の元にやや早足で駆け寄り、視線を低くさせて少女に声を掛ける。

「どうしたの？」

「ッ！」

キラの存在には目もくれなかった様子である少女が、いきなり背後から声を掛けられてビクツと大きく肩を揺らし、顔をこちらに向けてきた。

どنگりのように、ころころと大きめの瞳が驚愕で見開かれ、次第

にじわりと涙を溜めていった。

「あ……、ご、ごめん……ビックリさせたかな」

キラが穏やかな笑みを見せて、まじまじと少女の姿を見てから、キラは短く声を漏らした。

その少女は、数日前に、キラがルウィーの教会で目覚めた後に出会った少女の一人、髪の高い方の少女であったからだ。

「ッ……!？」

少女の方は、大きく息を呑み状況を理解したようで、更に目元に涙を溜め、それから一目散に駆けだしていこうとする。

だが、何か心残りがあるような、かけっこで「よいい、ドン」の「よいい」の時のポーズでチラチラと背後のキラ、それから地面を何度も見回して硬直してしまった。

訝しむように、キラが眉根を寄せ、少女の姿をまじまじと見る。するとややあって、少女はもじもじと身体を揺らし、それから帽子の端を掴んで顔を隠すように少しずらした。

そんなに怖かったかね……、とキラは心の中で思い、どうしたものかとポリポリと頬を掻いた。

少女が何かをしようとしているのは十分に見て取れるのだが、どうもこの少女は自分のことを避けているような節がある。あまり関わらないようにするのが、この娘のためだとは思っているのであるが、

「……何か探してるの？」

当然ながら、キラは目の前にいる困っているこの少女を見捨て置いておけるほど白状ではなかった。

キラの発言にビクッとまた大きく震えて、また帽子をずらした。

微かに覗く口元がぱくぱくと小さく蠢いているが、何と言っているのかが聞き取れず、キラは小首を捻る。

「……ん、を」

「へ？」

「……大事な、ペンを、失し、て……」

途切れ途切れだが、少女が確かにそう声を発した。

そういえば、まともに声を聞いたのは初めてかもしれない。教会で喋っていたのはほとんどもう一人の髪の長い方の少女だからだ。

スツとキラが手を伸ばす。ビクツと何度目かも分からない怯えを見せて少女が縮こまる。

キラがなるべく優しく少女の頭を撫で、優しく語りかける。

「俺も、探すの手伝おうか？」

ニツコリと笑みを見せる。

隠れるように少女がチラチラとキラの姿を見て、ぽおっと頬を朱く染め、どう答えたものかを悩み、葛藤しているようだった。

やがて、少女は曖昧に頷くと、満足したようにキラがうんうんと頷く。

「やっぱり、一人で探すのは大変だからな。俺もちょうどヒマしてた頃だし……えっと」

キラがふと、少女の顔を見ながらうんうんと小さく呻る。

「……、俺はキラ。君は？」

また、少女の肩が揺れる。だがそれは、さっきのような怯えの色は無く、どちらかと言えば衝撃を受けたときのそれ、に近いだろうか。少女の唇が小刻みに震え、そしてまた泣きそうな表情になる。

「わ、たし……」

「うん……？」

「ろ、む……、ロム、です」

「そっか、可愛い名前だね」

キラがそう言うのと、ロムはカァツとより一層に頬を朱くして、まるで茹でたタコのように真っ赤になる。

ぽんぽんと頭を軽く撫で、キラが立ち上がると、

「……つくしゅん」

ロムが小さなくしゃみをした。

キラが呆気にとられたようにロムに視線を向けると、もう湯気が出てしまいそうなくらいにロムが顔を真っ赤にさせた。

いったいどれほどの時間を探し回っていたのだろうか、そんなに大

事なものなのかと感心して、キラがコートを脱ぎ、ロムの肩に掛けた。

「……？」

「寒いだろ？ 俺のコート着ていいから」

あからさまにロムの身長には合わず、だぼだぼで地面を引きずっているのにキラが膝を突いて何とか長さを調節して動きやすいようにしてやる。

それを終えたところで、今度はキラがくしゃみをする番だった。

「、くしゅん」

「あ……、だい、じょうぶ……？」

「ん、へーきへーき」

キラは寒くないことをアピールしてみせるが、半袖のTシャツはどう見ても寒いだろうし、どちらかと言えば見ている方が寒くなる。心配そうに覗き込むロムだが、キラはそんなロムの手を掴んでルウイーの街の中を進んでいく。

「どこで失くしたかは分かる？」

ロムは無言で首を横に振る。

「いつ失くしたか、とかは？」

「さっき、気付い、て……失くした、のは、たぶん……きのう……」

「昨日はどこに行ったか覚えてる？」

ロムは小さく首を縦に振った。

それならば少しは希望も見えてきたかもしれない。キラは頷くとロムに昨日通ったルートを聞き出して、そちらへと向かった。

＊

「キラ、さんは……」

「ん？」

ロム達が昨日に立ち寄ったという公園、そこで突如としてロムから声を掛けられたキラが地面に視線を落としたまま答える。

「どうしたの？」

「キラさんは、……なんで、一緒に探して、くれるんですか……？」
「そのことか」

ハハッと笑って、キラはついと背後のロムに向き直り、ロムの真横に膝を突いてポンと小さな肩を叩いた。

「俺はね、ロムちゃんみたいに困ってる人はほっとけないんだ」
「それ、だけ……？」

「たったそれだけだけどね、凄く大事なことだと俺は思うよ」
ニコリと笑みを見せると、僅かだがロムも口元を少し緩めてきたように見えた。

「ロムちゃんは、女神候補生なんだよね？ もう一人のあの娘も」
ロムが少し悲しそうな表情をして、俯き加減をやや強めて小さく首肯する。

「俺の連れも候補生でさ、凄く悲しんでたんだ。自分のせいで姉が、女神様が捕まったって……。そんなことないのにさ」

「あ……」

ロムがキラの顔を覗き込むようにして顔を上げてきた。

「だから助けたいと思った。悲しんでる顔は見たくないし、女神様だって困ってる。大変な思いをしているはずだからね。女神様を無事に助けて、それでネプギアやユニ、ロムちゃんやあの娘が喜んでくれるのなら、俺は嬉しい」

キラが目を伏せ、小さく息を吸って続ける。

「例え、ちっぽけな力でも、誰かの力になってるって実感できれば、俺は『生きてる』って思えるんだ」

遙か遠い昔の思い出を懐かしむように、キラが目を細めた。

「約束だからね、『あの人』との……」

ロムは心底不思議そうな表情をして、キラのことを見ていた。

「難しいかな」

「うん……」

こくんと頷いて、ロムがそう言った。

「とにかく、俺の力で誰かが笑顔になってくれたら、それだけで俺は嬉しいんだ」

キラが視線を落とした先に、一本の白いペンが落ちていた。拾い上げてしげしげと見る。ロムに聞いていた形、色、そっくりであつた。

「ロムちゃん、もしかしてこれかな」

「あ……！」

パツと表情を明るくさせ、キラの手からひったくるようにそれを掠め取って、涙目になって口元が緩む。

「よかった……」

「そんなに大事なんだ」

ロムの安心のしように、キラが微苦笑を見せて言ってみた。ロムはこくこくと何度も頷き、それを胸に抱いてその余韻に浸るように微笑みを見せる。

「お姉ちゃんが、ラムちゃんとおそろいで買ってくれたの。だから、私にとっても、ラムちゃんにとっても、大事なものの……」

「……そっか」

二人のお姉さんということは、ルウィーの女神のホワイトハートのことだろう。それならば、必死にこの寒い中を探し回るはずだとキラはようやく彼女の、必死さの意味が分かった。

不意に、ロムがバツとキラの方を見た。

「……どうしたの？」

「……あ、の」

「うん」

「あ、……りが、とう……」

ぺこりと小さくロムが頭を下げてきた。

呆氣にとられて、キラが暫く動きを止めるが、すぐに我に返ってあたふたとした行動を見せながら曖昧に頷く。

「う、うん……どういたしまして」

「あの……」

「うん？」

ロムが言い出しにくそうに口をきゅつと嚙んで、やがてはあくつと大きく息を吐いてからバツと顔を上げた。

「わ、わた、したちのこと、……覚えて、ますか？」

「……、」

そのことか……、とキラがロムの質問の意味を理解して、聞こえないように小さく溜息を吐く。

どう答えたものだろう、キラはそう思う。が、どんな嘘を吐いたって、きつといずれはばれてしまう。隠したって意味のないことだろうとキラが口を開く。

「残念だけど……」

「、そう、ですか……」

悲しそうに俯いて、ロムがコートをいそいそと脱ぎ始め、キラに手渡してばたばたと駆けていく。

悪いことをしたか、とキラが頬を搔いてふうと吐息する。いつか、いつか思い出せる日が来るのだろうか和淡い希望、だろうか。そんな思いを抱き、また彼女が笑いかけてくれるような日が来ることに期待しつつ、コートを羽織り直して、宿への道を歩み駆けたところで、キラのポケットで着信音が鳴る。

「っと、アイエフさんからか……」

端末を操作して、耳に当てる。今回は電話のようだった。

「もしもし？」

「ちよつと、どこにいるの？」

「え、と……公園に」

「はあ？」

ワケの分らないと言った声音でアイエフが言った。それもそうかと、キラが電話口の向こうで変な顔をするアイエフを想像してから口を開く。

「それで、何か情報があったんですか？」

「確信はないけど、可能性は僅かにあるかもしれないわ」

「……、大丈夫なんですか？」

「大丈夫、問題ないわ」

そこはかかない死亡フラグが立ったような気持ちになったが、キラはそれはそれとして口を開き掛けて、アイエフが小さな声で言う。

「いい？ こっちが指示するルートでこっちまで来て。気付かれたら作戦がパーだからね」

「気付かれる……？」

底なしの不安を感じてキラがたらりと冷や汗を流した。

EP. 29 [MEETING AND SILENCE]

「餌、ってアレですか……」

「アテから情報は得られなかったけど、なかなか美味しいもの見つ
けちゃったわね。こんば様々よ」

「そう言われると照れちゃうですう……」

コンパが顔を赤らめて、後頭部に手を添えて照れている素振りを見
せる。

キラが苦笑しか出てこないといった風情で、口元をひくつかせて背
後に待機するコンパに妙なものを見る視線を浴びせつつ、もう一度、
物陰からひょっこりと顔を覗かせて、自分らがターゲットとする一
人の人物をジッと見据えた。

「はぁーい、みんなの味方、犯罪組織マジェコンヌだよー♪」

下っ端だった。

合流したネプギアと日本一がひょっこりと物陰から顔を出して、下
っ端の姿を確認するなり、ネプギアが苦笑を見せ、日本一はきよと
んと不思議そうな顔を見せた。

「下っ端さん、こんなところまで……」

「タイミングがいいというか悪いというか……」

キラとしてはもう微妙な心持ちで、やけに哀れみに満ちた視線を下
っ端へ向けて送っていたが、日本一がピッと下っ端の方を指し、小
首を捻る。

「アレが連絡にあった『アテ』なの？」

「んー……、というか完全におこぼれですけどね」

下っ端ひどい言われようである。が、それも下っ端の下っ端たる所
以なような気がしないでもないのであるが。

「あれは下っ端って言って、犯罪組織の構成員ですよ」

「変な名前ねー……」

キラが下っ端教の教祖になりかねない。

さて、下っ端が手に大量のチラシを抱えて道行く人々に、何とかそれを渡そうと奮闘しているところを見ると、どうやら布教活動らしかった。そう言う行動は、各国の協会の広報部と何ら変わるところはないように見える。

「でも、下っ端さんなんか追いかけてどうするんですか？」

小声で、ネプギアが頭上にて顔を覗かせて下っ端の様子を伺っていたアイエフに、何も分かっていない風で訊ねる。

アイエフがジロリと視線だけを下に向け、やれやれと呆れたような口調で口を開いて説明する。

「バカね、下っ端がプラネテューヌで何をやったか覚えてないの？」

「えーと……？」

ネプギアが記憶を探るように、指を口元にやって、うーむと低く呻る。

「……？」

「ゲームキャラを探してただろ……」

アイエフに次いで、キラも呆れたように眉を落として補足するように答えた。それを聞いて、ネプギアがぼむと両手を打ち、思い出したようにうんうんと頷いていた。

「そう言えば、ラストイションでも同じようなことをしてましたね」
言われないと思ひ出せない辺り、ネプギアの中での下っ端の存在は所詮、その程度であるということが手に取るように分かってしまうのだが、キラは特に何を言うでもなく、視線を外さないまま、うんうんと納得した風に頷く。

「つまり、下っ端が犯罪組織の命令でゲームキャラを狙っている可能性がある、ってことですね？」

「そういうこと」

アイエフが鷹揚に頷く。その表情は今までのように、半ば遊んでいた風なものではなく、やけに真剣なものになっていた。やはり諜報

部としての血がうずき出したのだろうか、キラがぐくりと唾を飲む。あと、どうでもいいが、今までは遊んでいたのか……とキラは思っ
て力無く苦笑したわけであるが。

「相手がゲームキャラの居場所を突き止めていないか、もしくは既に破壊した後か……可能性が無いワケじゃないけど、ルウィーに特に異常が見られていないと言うことは、恐らく後者の可能性は低いわ」

なるほど、とキラが口の中で呟いて、納得した風に頷いてみせる。イストワールに聞いた話、ゲームキャラはその地を守護する女神の身に何らかの異変が起こり、そして守護の力が働かなくなった場合に、女神の代わりにその土地を守護する存在だという。しかし、仮にそのゲームキャラまでもがいなくなったとして、ルウィーの土地に何の異変もないのは、妙な話である。つまり、この時には、まだルウィーのゲームキャラは健在であることが分かる。

「それに、下っ端がここに留まっているのも、ゲームキャラが破壊されていないという証拠にもなるしね」

「ゲームキャラを破壊し終えたなら、さっさと次の土地に向かって
いるハズですからね」

「なるほど」

日本一が、ようやく話を理解できたという風に声を漏らして、うん
うんと何度も頷いて見せた。

「ということは、下っ端さんはゲームキャラさんの居場所を探して
いるか、もしくは機会を窺っているか、ってことですね？」

「そうなるわね。流石に下っ端でも、立て続けにあんた達の妨害を
喰らってちゃ警戒もするでしょ。あんた達が街にいないことを十分
に確認した上で行動に移すんじゃないかしら？ 可能性があるとす
れば、ね……」

流石は教会でも現役の職員と言うべきか、推理にも恐るべき辻褄が
あっているし、何故だか納得させられるものもある。

キラは思わず、尊敬の意を込めてアイエフをジッと見た。すると、

その視線に気付いたらしきアイエフが肩眉を上げて、奇異の視線を向けてくる。

「何よ」

「いや、アイエフさんって凄いですね」

「一応、褒め言葉は受け取っておくとするわ」

視線を前に戻し、ジッと下っ端を監察する。キラはそれに連れられて、下っ端の方を見る。下っ端がさっきまで持っていたチラシが、半分以上くらいまで減っている。それから推測するに、犯罪組織に興味を持っている人々がまだまだいるという事になる。キラは思わず目を細めて遠巻きに下っ端を睨んだ。

「にしても、下っ端さん大変そうですね」

ひょこっとキラ達の背後で休憩していたコンパがキラの脇から顔を覗かせて、下っ端の姿をしげしげと見つめる。

確かに言われてみれば、下っ端はまだまだチラシの入った紙袋を持っていたし、恐らく空になったのであろう紙袋も幾つか周りに散乱していた。ということは、もう何時間も前からここで広報活動をしていると言うことになるだろう。ただのサークルやグループの活動なら幾分にも同情できるような状態であるのだが、いかんせん相手も犯罪組織なのでどうもその気になれない。

「ま、これも下っ端の宿命ってことかもね」

「やっぱり労働条件厳しいんだ……」

日本一のまとめるような言葉に、ネプギアが感心しきって、そんな言葉をポツリと吐き出した。

そんなやりとりにキラは冷や汗を流しつつ、下っ端が動き始めるのを待つ。

それから数十分、もうチラシを受け取る人々がなくなったのを確認して、残りを抱えて下っ端が動き始めた。

「動いたわ」

アイエフが物陰から少し身を乗り出すように下っ端の姿を視界に入れたまま、姿勢を低くしてばれないように後を尾行していく。それ

に続いてキラ、日本一、コンパ、ネプギアと列になり、見た感じ電車ごっこみたいな形になって道行く人々は『何じゃこりゃ』と思いながら顔をしかめたという。

「目立つなッ！」

アイエフが後列に、唾を飛ばすような勢いで理不尽な怒りをぶつけ始めた。下手なことを言って起こらせるのもアレだが、キラはポリポリと頬を掻いて口を開く。

「そう言われましても……」

「わざわざ真後ろに並ぶことないでしょ!？」

それもそうかと思いい直して、キラは少し間を開ける。それに習って後列も微妙に間隔を開けるが、やはり道行く人々は『何じゃこりゃ』と思いながら顔をしかめたという。

「なんかもう何を言っても無駄な気がしてきたわ……」

「何か言いました?」

ぼそつと呟いたアイエフの嘆きは、残念ながら後列のパーティに届いたはずもなく、空中へと胡散霧消していた。

寧ろこうやっている方が余計に目立つのでは、というキラの何気ない一言に満場一致で頷き、低くしていた姿勢を戻して普通に歩く。幸いか、下っ端にはまんじりとも気付かれておらず人知れず吐息したアイエフからは尋常でない苦労人臭が漂っていたが、そんな心労を余所にネプギア達は非常にまったりと和やかにしていた。

「ホント……こんなパーティで無事にねぶ子達を救出できるのかしらね」

アイエフがやれやれと首を横に振って見せる。アハハ……と乾いた笑いを見せてキラが何と返事をしようかと思ったのだが、そう言えばとキラが手を打つ。

「アイエフさんってどうしてパールハート様のことを『ねぶ子』って呼ぶんですか?」

前々から思っていた素朴な疑問をようやく聞けたとばかりに、キラがアイエフの答えを待つ。アイエフはぴくと眉を動かし、どう答え

るか迷っている様子だったが、腰に手をやって呆れ気味に返答する。
「あの子がそう呼べって言ったの。まあ、女神様だって分かったのは知り合っただいぶ後の話だったし、今更呼び方を変えるのも、ってワケよ」

「へえ……、じゃあ、コンパちゃんも同じですか？」

コンパは確か『ねぷねぷ』と呼んでいたはずだ。パープルハート様って渾名で呼ばれる方が好きなのかな、とか思いながら答えを待つ。
「ん、まあ……そう、かもね」

何とも歯切れの悪い答えが返ってきた。そこはかたない疑問を覚えることにはそうなのだが、特に追求するようなことでもなしに、キラは敢えて黙殺した。

下っ端の様子を確認するが、相変わらず自分たちに気付いている様子もなし、そして大きな動きを見せるわけでもなし。現在、下っ端は中央通りの喫茶店でブレイクタイムを楽しんでいるようだった。そしてその丁度向かい側にある、同じく喫茶店の店舗内でその行動を窺っていた。

カップに残った少量のカフェラテを飲み干し、アイエフがふうとひと息吐いて、テーブルに肘を突き、キラに向かって視線を飛ばしてきた。

何だろうか、とキラはキョトンとした風で、一度コーヒーで喉を湿らせ、アイエフが語り出すのを待つ。

「気になる話を聞いたのよ」

「……なんでしょう」

小声で話しかけてくるところを見ると、他のパーティには話しにくいことなのだろうか。キラが眉を寄せ、少し前のめりになって聞き入る。

「アンタ、ラスティションで死にかけたって聞いたわ」

「……！」

ぴくり、とキラの眉が動く。

その記憶ならある。ケイに頼まれた素材、宝玉を入手しにミッドカ

ンパニーに赴いた際に下っ端の襲撃を受け、大怪我を負い、そして死にかけた。

しかし、それがいったい何なのだろうかと問いたくなり、キラがおもむろに唇を動かす。

「……、それで何か？」

「怪我……いったい何日で治ったの？」

「……完治まで二日、ですが」

「そう……」

ギシ、とアイエフが背もたれに体重を掛けて、顎に手をやって考え込む風に眉を寄せ上げた。

（イストワール様やラステイションの教祖から大体話は聞いたけど……、到底二日で完治するような怪我じゃない、らしかったわね……）

イストワールから『まるで生中継で見ていたように』事細かな情報を聞かされ、もちろんアイエフもその情報を嘘だとは思わなかった。しかし、それが真実でもあの重傷がたかだが一日二日で治ると思えないし、信じられなかった。

どんな理由がキラにあるのか、アイエフは知らない。だが、断言できることは『あの回復力は人間ではない』ということだ。或いは女神ですらも不可能のことであるかもしれない。いや、必ずそうなのだ。女神と言っても、精々普通の人間より僅かに秀でている程度、あの回復力は女神であっても『有り得ない』。

（だとすれば……）

アイエフの中に一つの可能性が芽生える。だが、すぐにそれはないと首を横に振る。

何故なら、アイエフは確かにその瞬間を目撃しており、そしてその可能性は自分とイストワール、そしてコンパが証明しているはずだからだ。

ならば――、

と、考え直したところでアイエフの思考は、強制的に遮断されるこ

となるのである。

「あ、アイエフさん！ 動きましたよ！」

キラがガタツと椅子を後ろに引いて、アイエフに向かってそう呼びかけてきた。

思考を廻らせていたアイエフが、ビクツと大きく身体を揺らし、シーソーのように椅子を揺らしていたためガタンツと大きな音を立てて、直後に衝撃がアイエフの体中を駆けめぐる。

色々と言いたい文句はあったが、アイエフは急いで立ち上がり、会計を済ませ、未だ渋るネプギア、コンパ、日本一の三人を無理矢理立たせ、急いで喫茶店の扉を開け、去っていく下っ端の後を追った。

☆ ☆ ☆

ルウィーの街を出て三十分ほど、

北西の方向へ進んだところに、妙な遺跡のような場所があった。

——ブロックダンジョン

世界的にも珍しい、まるで遺跡とは思えない均一に揃えられた色とりどりのブロックが並べられ、巨大な砦のような場所を形成していた。

一見、遠目から見ればまるでルービックキューブのブロックを一つ一つ取り外して精巧に並べたような、ジオラマのような場所である。「こんな場所があったんですね」

「結構、歴史的にも珍しい遺跡らしいわ。こんな土地を保有しているルウィーってやっぱり凄いのね」

アイエフがキョロキョロと周囲を見回しながら、流石に感心しきった風で声を漏らしつつ答えた。

そんな一行の数百メートルほど先にいる下っ端が、キョロキョロと周囲を警戒しながら、何かを探しているようだった。

構造上、尾行するには最適の空間で物陰に隠れながらボソボソと会話を交わす。

「やっぱりゲームキャラを探してるんでしょうか……」

「それにしては挙動不審すぎるです……」

ネプギアの意見ももっともだが、やはりコンパの疑問も気になるところであれば、気になるところである。

あの態度は、何か捜し物をしているというよりは、まるで誰かに見られることをひどく怖がっている、警戒していると言った方が、だいたいぶしっくりくるような感じがする。

「案外、下っ端の目的はゲームキャラじゃないのかもしれないよ？」
日本一の言葉に、キラも小さく頷き返す。

顔を引っ込めて、胸の前で腕を組み、うゝむと低く呻って思考を廻らせる。

「確かに、もっと別の目的があるように思えますね。……まあ、どっちにしても今の下っ端を放っておけるワケじゃないですが」

「そうね、よからぬ事をしようってんならここでぶっ叩いちゃえばいい話なもの」

と、会話を交わしていると、いきなり下っ端が走り出した。

「ヤベッ！ 見失う！」

身体を隠すには最適の空間だが、死角も多岐にわたってある。少しでも目を離してしまえば見失ってしまいそうである。

キラ達はやや足を速めて、下っ端の後を追う。

バツと物陰から身体を出し、周囲を確認するも残念ながら下っ端の姿を完全に見失ってしまったようだった。

「見失ったわね……」

忌々しげにアイエフが呻いて、近くの壁をガンと叩き、ジンジンヒリヒリと痛む右手を押さえて涙目になった。

苦笑しか浮かばなかったので、キラはできるだけアイエフを視界に

入れないようにして、キョロキョロと周囲を見回すものの、やはり障害物が多くて確認することは、残念ながら不可能であった。

悔しさ紛れに、キラはふと空を仰ぐ。ここからは晴天の空を望むことはできず、幾何学的な模様が飛び交う天井を捉えるのみだった。そして、

『あなた方は……』

「え……？」

凜とした声、鈴のように小さくそして甘美な音が、キラの耳を刺すように響いてきたのである。思わず顔をしかめ、そして柔らかに自分の耳に手を添えた。

だが、幾らできうる限りの神経を聴覚に費やしても、聞こえるのは空気の抜ける音ばかりで、声など聞こえない。

『聞こえ、ますか……？』

「……はい」

「キラ？」

いきなり返事をしたキラにネプギアはなにこれ怖いと思いながら、恐る恐る声を掛けてくるが、キラはなお耳、いや頭に響いてくる声に意識を集中させる。

『私は、ホワイトディスク……、ルウイーのゲームキャラです』

「ゲームキャラ!？」

『こちらへ……』

ゲームキャラ、ホワイトディスクがそう言うと、キラの頭の中にブロックダンジョンの地図、そして恐らくホワイトディスクがいるのであろう場所が鮮明に浮かび上がり、思わず駆け出そうとする。

「ちょ、どこ行くの!？」

日本一に呼び止められ、キラが背後を向いて叫ぶ。

「ゲームキャラの声が聞こえたんです!」

「ホント?」

信用しきれない風で、アイエフがジロリとキラのことを睨む。だが、キラはやけに自身に満ち満ちた表情でこくりと大きく頷いた。

しかし、キラはアイエフの返事も待つことなくダダダッと一人、勝手に走り去っていかうとする。それを慌てて追いかけるネプギア、日本一、コンパ、仕方なさにアイエフと続いていき、そしてキラは妙に開けた場所に出てそこに、既に見慣れつつある神秘的な雰囲気放つ台座が中央に据え置かれているのを見掛ける。

そしてその上に、白っぽい色をしたディスクが鎮座していた。

「初めまして……。私が、ルウィーを守護するゲームキャラ……。ホワイトディスクです」

「私はプラネテューヌの女神候補生のネプギアです」

「存じています。こうして相見えるのは、初めてでしょうね」

ネプギアがこくりと、ホワイトディスクの言葉に頷きを見せる。

ようやく追いついたアイエフが、その状況を見て驚愕の表情を見せて、ネプギアがホワイトディスクと話をしている後ろでキラに向かってアイエフが耳打ちをしてきた。

『ホントにいたのね』

『だから言ったじゃないですか……。まあ、俺もあんまり自信はなかったんですけど』

自信はなかったが、確信はあったのだ。

乾いた笑いを見せるキラに、アイエフはジロリと睨みを見せ、それからホワイトディスクの方へと視線を向け直す。

「それで、いきなりで申し訳ないんですけど、ホワイトディスクさんに力を貸して欲しいな、って思ってたんです」

ネプギアの言葉に、ホワイトディスクは黙りこくって、何やら悩んでいる様子であった。

それから悲しそうな声音でホワイトディスクが言葉を発する。

「遂に、その時が来てしまったんですね」

「え……?」

ネプギアが、事態が読み込めない様子で、キョトンとした表情になっ
って思わずそんな声を漏らした。

「いえ……こちらの話です。女神が囚われた時点で、こうなるのは

全て運命の導きであつたのでしょうか」

キラは思わず唾を飲んだ。

何だか、このゲームキャラは今まで出会ったパープルディスクやブラックディスク達とは一線を抜いているような感覚があつたからだ。言動といい、その振る舞いといい、何故かは分からないが、とにかく彼女が、もっと遠くを見つめているような、もの悲しそうな雰囲気。キラの心臓を突いた。

「覚悟はしていました」

「じゃあ……」

「ええ、私は、あなた方と共に――」

「テメェら……こんなところで何していやがる!？」

突如、ホワイトディスクの言葉を遮って、少女の声が響いてくる。

ホワイトディスクとの会話に気取られて、背後の気配に気付くことができずに全員が後ろを勢いよく振り向く。

その声の主、それは間違いない――、

「って、その顔……、候補生のチビか!？ それにテメェも!!」

ビシ、ビシとネプギアとキラが下っ端に指さされ、やけに因縁めいたものを突きつけられたのだが、二人は苦い表情をした。

「まさか、アタシらの計画に気付いて……、ってそれはゲームキャラか!？」

キラ達の背後にいるホワイトディスクの姿を見つけて、下っ端がやや歓喜の入り交じったような声を上げた。

それに次いで、アイエフが大きく溜息を吐き、額を押さえた。

「利用するつもりが利用されたわね……。そこに意図がないにせよ、だけど」

「へへへっ、そうと分かりゃあ、好都合! 今日はずッキーな一日だぜ!」

バツと下っ端が懷からディスクを取り出し、腕を伸ばして掲げると

そこからモンスターが生まれてくる。

「厄介ね……、仕方ない、行くわよ!」

アイエフの叫びの元、全員が武器を構えて次々とモンスターを殲滅していく。

ザン、と刀でモンスターを切り伏せたキラがチラリと下っ端を盗み見ると、何故だかいつもよりも余裕を持った下っ端がニヤニヤとその状況を眺めていた。

訝しむように眉を寄せ上げ、きゅっと唇を紡ぎ、キラがバツと加速して下っ端に接近する。それに気付いた下っ端が後ろに下がるが追撃、鉄パイプを構えた下っ端がキラの刀の一撃を防ぐ。

チリチリと軽く火花が飛んで、鏢迫り合いのように互いに武器を押し合い、キラが睨みをきかせて問う。

「何を企んでる?」

「何の話だろうな?」

ニヤツと笑みを見せて下っ端がキラを焚き付ける。

むっと唇を一度、真横に結んで、グツと刀を押す力を少し強める。

「テメエが何か、よからぬことをしようとしてることくらいは分かる」

「アタシは犯罪組織だからな、当たり前じゃネエか」

バツと鉄パイプを振り、キラがそれに合わせて後ろに跳ぶ。

「そろそろか……」

チラリと下っ端がキラの遥か背後、ホワイトディスクのいる辺りに視線を向けて、ニヤリといやらしく笑う。

「そろそろいいぜ!」

直後、ズズン……と大きな地響きが鳴り、ガクガクとキラの身体が大きく揺れる。

何事だと、視線を背後に向けるとそこには、キラの身長何倍もありそうな紫色の装甲を纏ったロボットが、佇んでいた。

「行け! ハードブレイカー!!」

ブン、とロボット——『ハードブレイカー』が右手の剣の武装を振

りかぶる。

キラは直感する、アレはゲームキャラを破壊するつもりだ、と。

「ッ、ネプギア！」

「了解！！」

ネプギアがモンスターを叩き斬り、大地を蹴ってハードブレイカーに突撃しながらスッと目を閉じて女神化しようとする。

「デメエの考えは分かってんだよ！！」

バツと下っ端が左手を頭上に掲げると、ハードブレイカーの身長よりも遥かに高い身長を誇る針のような物体が10本、キラ達を囲むように立ち上がった。

そしてその先端にパリパリと電気が纏い、そして左右の針と電撃が直轄し、針が光を帯び始める。

「……、ネプギア！ 戻れ！！」

キラの怒号に、ネプギアがピタリと突撃を止め、バツと後ろに跳躍するとハードブレイカーがネプギアがいた位置に向けて左手のガトリングを放射した。

ザッとキラの真横に着地するネプギアが苦い表情をして、右手を何度も開閉し、たらりと汗を流す。

「……なんで、」

「どうしたの？」

トン、と背中を向けながらアイエフがネプギアに向けてそう問い掛けた。

ごくりとネプギアが唾を飲み下し、驚愕の色に表情を変えて眉をひそめた。

「どうして、女神化できないの……！？」

「ハアッ……！！？」

アイエフが両目を見開いて、そう叫んできた。

ハードブレイカーがキュウウウウウウ……、と機械音を鳴らし、もう一度、右手の剣の武装を振り、ホワイトディスクへ向けて振り下ろす。

「ッ！」

ダツとキラが走り、ホワイトディスクを台座から抜き取って、何とかハードブレイカーの一撃を避ける。

『ありがとうございます……』

「いいつてことよ」

カシャン、とガトリングの照準がキラに向けられ、キラは口元をひくつかせる。

「え……」

ガガガッと、巨大な弾丸がキラに向けて放射させられる。

キラが必死にそれを避ける中で、ホワイトディスクがキラの腕の中で小さく呻いて言葉を発した。

「おかしいです……、どうしてただの機械であるはずのハードブレイカーが……、いや、それ以前に、どうしてハードブレイカーがここに……！」

「おい、何をブツブツ……うわっ!!」

キラが言葉を発し掛けている途中で、キラの目の前に弾丸が着弾、爆発を起こしてキラの身体が吹き飛ぶ。

「ゲホッ……！」

のろのろと身体を起こし、キラは自分の手元にホワイトディスクがないことを感じて、バツと顔を上げる。

カラン、と乾いた音を立て、ホワイトディスクが下っ端の足下に落下する。

「ラッキイー……」

ニヤニヤと笑い、下っ端がそれを拾い上げる。

「待っ……！」

起きあがり掛けたところでキラの真横でまた大爆発が起こり、石片がキラの身体に襲い掛かる。

「デメエを壊せば、この地に眠る『HS計画』の産物、ハードブレ

イカーのファーストモデル達が復活するんだな？」

ホワイトディスクが息を呑み、何とかそれを止めようと制止の声を掛ける。

「止めてください、ハードブレイカーは貴女の手に負える代物ではありません」

「アタシら犯罪組織がゲームギョウ界を征服するには、ハードブレイカーの力が必要なんだよ」

ニヤリと笑みを見せ、下っ端がコンコンとホワイトディスクの表面を鉄パイプで軽く小突いてみせる。

「つと、そういやテメエに聞きてえことがあんだよ……。魔剣について知ってることを吐いて貰おうじゃネエか」

「魔剣……。やはり『HS計画』が、あなた方、犯罪組織の目的の一つなのですね？」

「女神を片付けるには、『ハードスレイヤー』が一番効果的らしいからな。マジック様直々の命令ってワケだ。それに、それがあれば世界を掌握するなんて容易いことらしいからな」

ホワイトディスクは息を呑むように間をおいてから、力無く下っ端に向かって呼びかけた。

「アレは誰にも扱うことはできません……。止めた方が身のためです」

「ウルセエ！ テメエはさっさと黙ってろ！！」

下っ端は荒々しくホワイトディスクを地面に叩き付け、右足を上げた。

「ッ！ ホワイトディスク！！」

下っ端の右足が容赦なく落とされた。

バキッ、と枝の折れるような音がして、ホワイトディスクが真っ二つに割られた。

「――、」

キラが言葉を発しようとした瞬間、今まで感じたこともない巨大な

揺れがダンジョンの中に響き、周囲のブロックがパズルのよう動き始め、そしてそこから、黄金色の装甲を持ったロボット達の姿が覗き、そしてキュウウウウウウウ……、と機械音と同時に轟かせ、その瞳が妖しく光った。

「『ハードブレイカー』ファーストモデル……。魔剣の意志を宿らせた、最も『生命体に近い存在』か……」

青年がフードの奥からギロリとそれらを睨みつけ、忌々しげに呻きにも似た声を喉からひねり出した。

EP. 30 **[DECIDED]** (前書き)

今日は学校のマラソン大会だったぜヒッハー……

運動能力のない俺にとって10kmは地獄だぜ……

EP. 30 [DECIDED]

「そんな……」

ハードブレイカー、その一つ、紫色の機体が一度、機械音と共に動きを止め、そして全員に現状を理解させるかのように、沈黙を呼び起こした。

「嘘でしょ……」

「ゲームキャラさんが……」

アイエフも、コンパも、驚きを隠せない様子で――いや、そうするしかないのだ。何故なら、こうなることは恐らく世界中を探しても何も、誰も予想することなど無かつただろうから。

「壊されたって言うの……?」

日本一の言葉が、全員に全てを認識させたように思えた。

そして、その直後に、下っ端の高笑いがダンジョンの中に木霊し、やけにその音を反響させていた。

「ハーハッハッハ!! ゲームキャラが壊れた以上、テメェらここで終わるんだよ!!」

と、下っ端が目を開いて、キラ達を見据えようとしたところで下っ端の目の前に、キラの怒りに燃えた顔があった。

「のわっ!？」

反射的に下っ端が頭を引いた瞬間に、ザンとキラの刀が弧閃を描いて、下っ端の鼻先を擦っていく。

トン、トンと慌てた様子で下っ端が背後に退き、たらりと冷や汗を流す。

「あ、ぶネェな!」

「……」

しかし、キラは無言で下っ端をギロリと睨むと、地面に膝を突いて真つ二つに砕けたホワイトディスクをもの悲しそうな面持ちで拾い上げる。

隙を見せたキラにハードブレイカーがガトリングを撃ち込もうと構えるが、下っ端の慌てたような言葉が掛かる。

「待て待て！ 今お前が撃ったらアタシに当たるだろが！」

どうやら、犯罪組織のメンバーの命令には忠実に従うらしく、ハードブレイカーはスツとガトリングを降ろす。

ったく……、と言葉を零して下っ端がその場を離れてハードブレイカーの肩の辺りによじ登る。

「最初からここに居ればよかったじゃネエか……」

ぶちぶちと文句を零し、下っ端が頭を掻きむしった。それから遙か下方にいるキラ達を眺め回して、ニヤツと不敵に笑う。

「女神化できネエ使えない女神、ただの人間共……、もう助かりようもネエよな？」

「チッ……！」

アイエフが舌打ちを零して、忌々しく下っ端の姿をきつく睨む。

下っ端はそれをもともしない様子で、寧ろそれを楽しむようにケラケラと笑って、周囲に立ち並ぶハードブレイカーFMの姿を眺め回す。

「テメェら、今からアタシがご主人様だ。いいな！」

バツと下っ端が鉄パイプを持った右手を頭上に掲げると、ハードブレイカーFM達もガシャンと右手に携えたハンマーを頭上に掲げ、ウォオオオオオオオオオオッ！ とまるで獣のように叫び啼いた。とてつもない騒音が、鼓膜を激しく揺さぶる。

だが、そんなものは気にしていられないという風に、キラは姿勢を変えずホワイトディスクの残骸を胸に抱いて、顔を俯かせている。ピツとやかましく思ったらしい下っ端が右手で制止すると、まるで波打ったようにハードブレイカーFM達がシーンと静まる。その様を見ると、完全にハードブレイカーFM達は下っ端をマスターと認めてしまったらしい。

「流石……トリック・ザ・ハード様の作ったハッキングシステムは高性能だな。一瞬でハードブレイカー達を懐柔しちまったんだから

よ」

ニヤリと顎に手をやりながら、下っ端がポツリと漏らした。

「女神化できないなんて……」

ネプギアが信じられないという風に、何度も両手を見交わしながら眉根を寄せ上げ、周囲を取り囲むハードブレイカー達を畏怖の念を込めた視線で見る。

「これ……本格的にヤバくない？」

日本一が辛うじての苦笑を見せつつ、ジッと目の前にある下っ端を肩に乗せたハードブレイカーを見て口元をひくつかせる。

「一体でも敵わなかったのに、こんなにくさんなんて……」

「そうよね……」

アイエフがギリッと奥歯を噛んで、ハードブレイカー達を睨み回した。

実際、アイエフのカタールや日本一の銃剣はおろか、ネプギアのオリハルコンで出来上がった白銀の剣やコンパの魔法弾すらも弾き返す、というチートの域を抜き出た装甲の持ち主なのだ。

「私が見るところ、あの針……恐らくネプギアが女神化できないように特殊な周波を発してるんだと思う。下っ端が強気なのは、その所為ね」

「じゃあ、一度ここから脱出できれば……」

コンパがぼむ、と両手を叩いて名案が出たとばかりに嬉しそうな声を上げるが、アイエフはふるふると力無く首を横に振る。

「無理よ。ネプギアが女神化できない空間が出来上がったんだもの。アイツがここから出てくると思う？ それに……」

チラリとアイエフが背後の、この開けた空間の出口を見る。そこにはハードブレイカーFMが2体、そこを立ち塞いでいた。それはつまり、完全に脱出の手口を塞がれ、そして自分らが生き残る確率は完全になくなってしまったということを意味していた。

「にしても、厄介なことになったわね……。まさかハードブレイカ

ーを再起動させるなんて……」

「知ってるの？」

日本一の問いに、アイエフが鷹揚にこくりと頷く。

「イストワール様に聞いた話だけどね、ルウィーのゲームキャラは土地の守護とは別にもう一つの重要な役割を担っている、ってね」

「重要な役割、ですか？」

コンパの反復に、アイエフは「そう」と言って、もう一度頷いてみせる。

「それがこれ、『ハードブレイカー』よ」

「ハードブレイカー……」

ネプギアが眉をひそめて、顎に手をやって俯き加減を少し大きくさせる。

「前にいーすさんから聞いたことがあります……、ルウィーの科学者が守護女神を殺すためだけに作り上げた鋼鉄の軍団……ですよね？」

「文字通り、『女神を壊す者』……ね。まったくこんなもの作ったヤツの顔が見てみたいわ」

もう笑うしかない、とでも言いたげにアイエフがフツと笑みを見せて、周囲を取り囲むハードブレイカー達をザッと見回した。

「さあて、そろそろ死ぬ準備はできたか？」

下っ端が上から見下ろして、余裕の笑みを見せる。

しかし、アイエフはスツと戦闘状態を解かず、それに対抗するように笑みを見せて答えた。

「悪いけど、棺桶の準備なんてできてないわ。今から買いに行かせてでもくれるって言うワケ？」

「棺桶なんて必要ネエよ、テメエらの身体は跡形もなく消え去るんだからな」

スツと下っ端が右手を構え、指示を下す。それと同時に周囲のハードブレイカーFM達が左手の高圧縮エネルギー砲を構え、照準を合わせる。

「……これ、本格的に終わりかもね」

「うえええええっ！ 私、まだ終わりたいくないですう！！」

コンパががっしりとアイエフに抱きついて、涙声で叫ぶ。ぎゅーつと胸をアイエフの顔に押しつけるので、大質量の肉の壁がアイエフの酸素の通り道を完全に遮断して、段々アイエフの顔色が悪くなっていく。

「こん、ぱ……くる、しい……」

しかし、既に恐怖に溺れるコンパに、アイエフの今にも死にそうな掠れた声は聞こえるはずもなく、やがてだらりとアイエフの腕が垂れる。

「アイエフさん！？」

「ちょ、こんぱ！ ストップストップ！」

死の間際だというのに何だこのやけに和んだ会話は（※全然和みきつてない）と問いたくなるが、ともかくネプギアと日本一が何とかアイエフの救出に掛かる。

「なんかトドメ刺す気失せるけど……まあいいや。撃て！！」

下っ端が指示を下し、エネルギー砲が放射されると思い、全員がバツと目を瞑る。

しかし、いつまで経っても何も来る気配がない。不思議に思い、恐る恐るネプギアが目を開ける。それからキョロキョロと周囲を見回して何事もないことに小首を捻る。

「何で……？」

キョウウウウウウウ……、と機械音がやがて停止するように静かに消えていき、がくとハードブレイカー達が停止する。

驚愕に下っ端がキョロキョロとハードブレイカー達を見回す。

「まさか、緊急停止か！？ クソ、使えネエ！！」

下っ端がそう吐き捨てるが、ネプギア達はチャンスと、気を失ったアイエフを抱え、急いでダンジョンを駆け抜けていった。

☆ ☆ ☆

「酷い目にあったわ……」

アイエフがソファにどっかりと体重を投げて、額に腕を置いてはふうと大きく溜息を吐いた。ネプギアは何とも言えない表情の後に、コンパに視線を向けてから乾いた笑いを見せて、敢えてその場は黙した。

「あいちゃん、お水ですよ」

「ありがとう……」

にっこりと笑顔で手渡してくれるコンパに曖昧な、何と言えないぎこちない笑みを見せて、アイエフがぎくしゃくとコンパの手から冷や水の入ったグラスを受け取って、もう一度ぎこちない笑みを見せた。

ごくごくと冷や水で芯から冷えるような思いにアイエフが溺れていた頃、キラはもう一つ、部屋に設えてあるソファに腰掛け、テーブルの上に置かれた二つに割られたホワイトディスクに視線を落として黙していた。

暫くそんな沈黙が続き、日本一がそれはそうと、と声を上げてテーブルに手を突いて疑問を口に出してきた。

「ねえ、結局さ、あのロボット達って何なの？」

それを聞いた瞬間にアイエフが嫌な顔をして、ジトツと日本一を軽く睨みつけた。

「アンタ……私の話聞いてなかったの？」

「聞いてはいたけど……難しかったし、それにほとんど頭に入らなかったのよ」

仕方ないでしょー、と言う日本一に、アイエフもそれもそうかと思いい直して、グラスをテーブルの上に置き、こほんと咳払いを一つ吐き出して、ピツと指を立てて、重々しく口を開く。

「あのロボットは、『ハードブレイカー』って言うものよ」

「ハードブレイカー……?」

日本一が小首を捻ってそれを復唱する。

そう、と言ってアイエフがこくと頷き、さらに言葉を続ける。

「言い伝えられてる話だけどね、あのハードブレイカーっていうのはもうだいぶ昔……、それこそギョウカイ暦の創初期まで遡るんだけど、ゲームギョウ界の創初期にある一人の科学者の男がいたらしいの」

ゲームギョウ界は世界が出来上がった直後から文明がかなり発展していたらしいので、科学者がいてもおかしくはないかと、ネプギアがこくりと頷く。

「その男は何に置いてもトップでなければ気の済まない……、言うなれば傲慢な男でね、そんな彼はいつしかある野心に取り憑かれるようになったのよ」

「野心ですか……?」

キョトンとコンパは首を捻る。

「ええ、『自分は女神すらも越える存在でありたい』という野心が、彼の心に芽生えたのよ」

「な……、それってかなり馬鹿げた話じゃない?」

日本一が頬をひくつかせて、本当の話かと確認するように問い掛けたが、アイエフはもちろんのことくりと深く頷いた。

「とにかく、その時よ。馬鹿げた計画……、『ハードスレイヤー計画』、通称『HS計画』が極秘裏に始められたのはね……」

む……、と唸り、アイエフが腕を組んで顎に手をやる。

それからコンパが、首を傾けてから口を開く。

「けど、凄い人ですね。女神様が強いなんてみんな知っているはずなのに、それを越えたいだなんて……」

「ま、当初はその科学者本人だってそう思ったでしょうね。だからこそ、生み出されたのがあの『ハードブレイカー』よ」

ハードブレイカーとは、下っ端の言っていたとおりならあのロボットの達のことだ。そして日本一がもっとも聞きたかった存在でもある。

「自分の身を傷つけることなく、そして死を恐れることのない心なき兵士……それがハードブレイカー。話じゃ、ファーストモデルには女神に対してかなり有効的な武装を搭載しているって話だけど……、ホントかしら？」

「アイエフさん……、そのファーストモデルっていうのは何なんですか？」

ネプギアの言葉に、アイエフはそこからか……と言いたげに額を押さえて、はあと大きめの溜息を吐いた。

「HS計画が始まった直後に開発された産物たちのことよ。私達を囲んでいた黄金色の機体がファーストモデルの代表的なものね」

「じゃあ、下っ端さんが連れてきたあの紫色の機体は違うんですか？」

アイエフは低く呻って腕を組み直し、頭を少し落として目を瞑る。

「たぶん、アレは私達の方でも確認がとれてない新機種……、フィフスモデルってところかしら？」

「フィフス……ってことは、5世代？」

「そうね、そうなるわ」

日本一の問いに、アイエフがまたも首肯する。

「なんだ、なら安心じゃない。先進機はたったの1機でしょ？ あとはただの旧型品でしょ、それもごく昔の」

日本一が安心した風に威勢のいい笑顔を見せて、仁王立ちになって立ち上がった。

が、アイエフは難しい顔つきになって「いや」と、日本一の言葉を否定してみせる。

「ファーストモデルほど厄介なものはないわ。第1世代は、その科学者の全ての理想を詰め込んだ究極品だもの」

「でも、それも昔の話なんですよね？」

「技術は、今のプラネテューヌのものと変わらない……、いや或いはその先まで行ってるかもしれないわ。それだけに彼の才能は秀でていた……。それが世のために使われれば、きっとゲームギョウ界

の技術は今の一步二歩先のところまで行ってたかもしれないって
て言われるくらいね」

その言葉に、ネプギア、コンパ、日本一の三人は感心しきった声を
零して、何も言葉が出ない様子だった。

それを聞き流していたかに思われたキラであつたが、ようやく重々
しく口を開いた。

「でも、それだけの処理……、コンピュータが追いつかないんじや
？」

「彼は自分専用で、今の技術をもつてしても製造できないような様
々なものを作っていたわ。それ故のことでしょうね」
と、そこで日本一がぼむと両手を打って言葉を発する。

「じゃあ、それを使ってあのロボットにハッキングしちゃえばいい
んじゃない？ それだけ性能のあるコンピュータなら簡単じゃない
？」

だが、アイエフはふるふると力無く首を横に振ってみせる。

「残念だけど、その科学者の所有していたもの……製造した作品か
ら、手記、私物に至るまで全てが抹消されてるわ。誰の手によるも
のかは分からないけどね」

キラがその言葉に眉をひそめる。

「いったいどうして？」

「そこまでは分からないわ。自分の技術が他の誰かに奪われること
が癪だったのか、或いはその技術が悪用されることを恐れた他の誰
かが全てを消したか……ね」

「なんでそんな勿体ないことしちゃうのよー」

「私に言わないで。誰も知らないわよ、少なくとも今の私達にそれ
を知る術はもうないんだから」

日本一のブーたれる声が聞こえるが、アイエフはそれを軽くあしら
って、苦い表情を見せて、額を押さえる。

ともかく、とアイエフがソファに座り直してコホンと咳払いを一つ
落とす。

「アレがあれば、ゲームギョウ界を征服するくらい簡単な話でしょうね。下っ端が言っていたとおりに、ね」

「でも、各国にも軍はいるんですよ？　そうそう落ちることはないはずです」

「守護女神は、各国の軍を一人で相手にしても勝てるんだもの。あれだけの数がいれば、ゲームギョウ界なんてあっという間に陥落よ。あれが守護女神と渡り合えるだけの力を持っているっていうならね」アイエフが、まるで『その場を目撃していた』とでも言う風に、やけに確信を持った声音で言った。

それに不信感を抱きつつも、キラは更に言葉を続けてみる。

「じゃあ、このままアイツらが攻めてくるのを待ってろってことですか？」

「こっちには何もやりようがないんだもの、そうなるでしょうね」

「それでいいんですか!？」

「今の私は感情を抜きにして、ただ結論を推測しているだけよ。内心じゃ、腸煮えくりかえってるんだから……」

ソファの上に投げ出されていたアイエフの拳に、ぎゅうと血が滲みそうになるくらいに力が込められていた。それを目撃したキラがフツと言葉を詰まらせて俯く。

それからキラはもう一度、顔を上げて問い掛けてみる。

「何とかする方法は？」

「ない、わね」

「何かはあるでしょう？」

「……ゲームキャラに再封印させる、くらいじゃないかしら？」

ソファの背もたれに深く体重を預けて、アイエフが言った。

だが、それが不可能であると言うことくらいは容易に分かる。つまり、それはもうゲームギョウ界が犯罪組織の手に落ちるという予言でもあった。

「どうすれば……」

「あとは、もうハードブレイカー達を全滅させれば事は済むわね」

「それができないから困ってるワケでしょう!? 方法は……」

「あとは、そのゲームキャラとやらを復活させるくらいですの」

部屋の中に少女……幼い少女のような声が響いた。

恐らくネプギアよりも遥かに幼い齡の少女のものであろう。その年にしてはやけに落ち着きを見せた、どこか気品すらも見えるような声。

どこからだときらが周りを見る。と、そこでコンパの後ろに、白い兎のような帽子を被った茶髪の少女が立っていた。

「えと……?」

キラが頬を掻いて苦笑を見せるが、少女の方は落ち着き払って淡々と言葉を続ける。

「どこの子……?」

アイエフがジロリと少女の全身を睨めるように見回してから、口元をひくつかせてそう言った。

少女は、しかしそれをものもしない様子でまた口を開く。

「それは今は問題じゃないんですの。それに、がすとはとつくの昔に独り立ちをしているんですの」

少女の物言いに、キラががっくりと肩を落とす傍らで、日本一が腕を組んでまじまじと少女の姿を見ている。

やがて、短く声を上げ、ピツと少女を指して言う。

「確か、3年前にプラネテューヌにいた女の子じゃない?」

「3年前……プラネテューヌの街が半壊したときの話ですの?」

「それそれ」

言うのと、アイエフとコンパの表情が少し難しくなったように思えたが、キラは見間違いだろうかと思ってそこには敢えて触れなかった。

「だけど、残念ながら貴女の顔は見たことないんですの」

「ほら……黒い髪をした男の子と一緒にお弁当買ったでしょ? ……」

…あと男の子がツケである変な薬買ってたでしょ?」

がすが「うむ……」と呻って考え込む。

キラがまじまじとガストの姿を見るが、凄い格好をしているなと感心する。巨大な帽子に、同じく巨大な手袋。そして大きなリュック。何とも不思議な出で立ちである。

と、そう考えていたところがすがが短く声を上げ、頷いた。

「テラさんと一緒にいた人ですの」

「なんでテラのことは覚えてるのよ……」

「商売相手を覚えているのは当然のことですの」

「相変わらずブラックな子供ね……」

「なんか、ケイさんを思い出すね」

ネプギアの言葉に、キラは苦笑しか出てこなかった。

ラストイション、中央協会――

「くしゅん」

今までの態度からは考えられないくらいに可愛らしい声を漏らして、ケイがくしゃみを発した。

ずずつと鼻をすすって、机の端にあるティッシュ箱を手繰り寄せて数枚そこから取り出し、ちーんと鼻をかむ。

「今頃、誰かが噂でもしてるのかな？」

自分なら十分に有り得るな、とケイは自嘲したような笑みを薄く浮かべて再び公務へと戻った。

それはそれとして、アイエフとコンパの表情が更に難しくなった。

流石に気のせいではないだろうと思ったキラが、意を決するように口を結んでから声を掛ける。

「あの……、二人とも何かあったんですか？」

「え……？」

「ふえ……？」

二人が、ほぼ同時にそう声を上げてきた。

どうやら心ここに在らずであつたらしく、アイエフが何でもない手で追求を制したので、多少しこりは残つたが、キラは突き詰められなかった。

それはそうと、とアイエフが顎に手をやってがすとに向かって問いを発する。

「それで、がすとか言ったわね。ゲームキャラを復活させるなんて、そんなことができるの？」

「がすとはざーるぶるぐでも、凄腕と言われた錬金術師ですの。相当無理なことを言われない限り、できないことなんてないんですの」やけに自信を持った物言いに、アイエフが思わずたじろいだ。

それからアイエフは、ざーるぶるぐ、と口の中で呟いて、どこかで聞いたことがあるなど、曖昧な自分の記憶を探り始める。

だが、そこでネプギアが嬉々とした声音で、瞳をキラキラさせて、胸の前で手を組み祈るような形になって、嬉しそうに語り始めた。

「ざーるぶるぐって、錬金術発祥の地って言われてるところですよね！？」

「え、ええ……そうですの」

今まで落ち着いた物腰でいたがすとだが、流石にネプギアのそのテンションには何かしら付いて行き難いものを感じたらしく、やや引き気味に頷いた。

がすとの手を放して、ネプギアが周囲に菱形のキラキラ光るヤツを発生させて、まだ見ぬ彼女のとは夢の土地、ざーるぶるぐを思い、ヘヴン状態になったので突っ込みかねるキラがそのままスルーして、がすとに問い掛ける。

「ところで、えと……、がすとさん？」

「がすと、でいいんですの」

「……じゃあ、がすと。ゲームキャラを復活させるって言うのは……？」

がすとは、キラの言葉を聞いてやれやれと言った風情で手を横に出

して、首を横に振った。それからジトツとキラを見て口を開く。

「がすとは錬金術師なんですの。壊れたものを修復させるなんて、造作もない、朝飯前のことなんですの」

そういうもののなか……とキラが呟いた。錬金術というのはあまりキラはお目に掛かったものがないから分からないが、案外魔法と同じようなものなのかもしれない。

（魔法、か……。そういえば、ロムちゃんやラムちゃんは元気かな。確かあの二人は魔法が凄く得意だって……。、）

と、そう思いかけたところで、キラはハッと目を見開いた。

どうして、どうして自分はあるの二人が、魔法が得意だと言うことを知っていたのか、そのことに疑問を抱いたからだ。面識はあまりないはずなのに、それでもひどく近しく感じてしまう、そのことにキラは恐怖した。

（ズレが、来てる……。？）

記憶のある自分と、記憶を無くしていた自分、それらの整合が段々とずれていき、そして記憶を失っていたときの自分の記憶が、流れこんできている――。

それは、

（意識を、奪おうとしているのか……。？）

あの時、写真を見ていたとき、自分は悲しくもないはずなのに、確かに涙を流していた。それは、記憶のない自分が懐かしむように、そしてあの日々に戻れないということを実感し、それを悲しんでいたのだ。それを、『記憶を持っているキラ』が表面に出ているお、だ。

自分の中に、もう一つの存在があることを実感する。そして、その意識は今も隙が在れば今のキラの意識を乗っ取ろうと、心の奥底で目を光らせている。それが、とてつもなく恐ろしいことであることを、確かにキラは感じていた。

――心の内にも、敵を抱えているということが。

（これは、俺の心なんだ……。！）

拒絶感、それがより一層に強くなる。

けれど、それを感じるほどにその意識もまた、消えまいと足？ いている。キラが願うのと呼応して、だ。

『それは、俺も同じだよ』

(ッ……！)

『これは俺の心だ』

『この思い出は、俺のものだ。お前じゃない』

『すぐに、出て行け！』

(五月蠅い、お前は俺の中に生まれた残留思念だ。とっとと消えろ……)

意識を沈めるように、胸の前に手を置いて大きく息を吐く。

途端に、その意識が眠っていくように感じて、キラは安堵しきった息を吐いた。

「――キラ？ 聞してる？」

「うえ、なに？」

ネプギアの顔が目の前にあり、キラが思わず身を反らして返事をした。

ネプギアがむう、と頬を膨らませて、ジトツとキラと目を合わせて睨んでくるので、思わずキラは視線を外した。

「がすとさんが、鍊金には材料が必要なんだって」

「そ、そうか……。それを俺達にとって来い、ってことか？」

「そうですの」

がすとが僅かに首肯してみせる。

「でも、材料がどこにあるのも分かんないのよ？」

アイエフががすとに問うと、大丈夫だ問題ないと言うようにがすとが人さし指を立て、ちっちちちと言ってから地図を広げた。

「ゲームキャラを復活させるための材料は、ルウィーの付近で全て入手できますの。皆さんが仕事を急いでくれれば、今日中にでも完成するんですの」

「ホントですか？」

「仕事があれば、ですの」

ネプギアが身を乗りだしてがすとに問うたが、がすとは落ち着き払って淡々とそう答えた。

兎にも角にも、淡い希望が見えてきたとばかりに一行は意気揚々と休憩も取れ無しにホテルを出て行った――。

☆☆☆

同時刻、

「ロムちゃん、どこ行ってたの？」

ラムが腰に手をやって、だいぶ腹を立てた様子でばたばたと駆けてきたロムに向かってそう言った。

「……ごめんなさい」

「まー、いーけど」

俯いてしょんぼりとなってしまうロムの姿を見て、ラムが半眼になってよしよしとラムの頭を撫でた。

「それはそうと、ホントにどこで何やってたの？」

ラムがこくりと首を傾げて、ロムに問い掛けた。

いつも二人で一緒にいるというのに、今日は珍しく一人でどこかに行っていたとラムが疑問に思ったのだった。

ロムは、しばらく考え込むように俯いてそれから言いにくそうに口を開いた。

「……キラとね、ペンを探してたの」

「キラと……？」

ラムの心臓がドキリと跳ねる。

それは、裏切られた相手と感ずる憎しみの感情なのか、それとも優しくしてくれたときの慕いの感情なのか、はたまたそれがラムに認識できていたかどうかは分からないが、とにかく動悸が激しくなることを確かにラムは感じていた。

「あのね、ラムちゃん……」

「……なに？」

ロムがちよんちよんと指先同士を突き合い、それから小さく唇を下させる。

「あのね……、キラは、変わってない、よ……」

「え……？」

ロムの言っていることが理解できない、きょとした表情でラムが首を捻る。

「キラはね、私達のことを覚えてないだけで……、ちゃんと優しくしてくれるの……。前みたいに、だから……」

ラムの拳がぶるぶると震える。まるで聞きたくないという風に、唇をきゅっと結んで、必死に涙が出るのを堪えている風な表情を見せている。

「だから……」

「でも、キラは……、私達のこと……」

「覚えてるかどうか、なんて関係ないよ……。私は、優しくしてくれるキラが、好きだって思ったから……」

「あ……」

ラムの小さな唇が、薄く開かれる。

ラムの記憶の中にある、キラの記憶、人物像。それは、とても優しくしてくれた、ロムとは違う、もう一つの心の拠り所。その優しさが、今もキラの中に残されている。

覚えているかどうかなんて、関係がない。大切なのは、自分が彼を慕う心がまだあるかどうか、ということ。

つう、と頬に涙が流れる。

それは止まることを知らない、ただ溢れる感情をそのままに表しているようであった。

「ラムちゃん……？」

「わ、たし……、さらに、ひどいこと、いっちゃった……」

涙声で、ラムが崩れ落ちる。

ロムが心配そうに駆け寄って、肩に手を添える。

「……許してくれるよ、キラなら、きっと」

ずっと、護られる立場であった。それはキラが相手でも何も変わらなかった。キラは自分たちの身だけではない、その心もまた、知らないうちに救ってくれていた。

護られるだけじゃない、子供ながら直感で感じていた、彼のそのすぐに壊れてしまいそうな心もまた、護ってあげたいという思いが、確かに二人の胸に芽生えつつあった。

二人の心に、淡い灯火が、沸々と燃え上がることは明白だった――。

EP. 31 [COOPRATE ATTACK]

「これでいいのね？」

アイエフがごろんと、がすとが座っているソファの前にあるテーブルに入手してきた、がすとから指示のあった材料をぞんざいに並べる。

がすとはテーブルに手を突いて、一つ一つを厳選するように注意深く全体を眺め回している。その表情たるや、歳特有の幼さは見られず、その真剣さはいっぱしの錬金術師さえも顔負けするほどに、その眼差しは鋭く、そしてプロフェッショナルを意識させるものである。

キラがほう、と声を漏らして、顎に手をやってその仕事ぶりを、やけに感心しきった風で眺める。

「ざーるぶるぐーの錬金術師だと言ってたけど、あながち嘘ってワケでもないのかな？」

キラがそう軽口を叩くが、ネプギアはカツと両目を見開いて、ズンズンとキラに詰め寄る。その気迫に押されて、キラが思わず仰け反る。

「キラ、知らないの！？　ざーるぶるぐって錬金術がもっとも発展してる村なんだよ！？」

「そ、そうなのか……？」

というか、錬金術自体あまり世間に進出していないような文化なので、キラはそんなことは知らないのだが、ネプギアがあまりに怖いので話の腰を折るのも躊躇われたので、そのままネプギアは続ける。

「そこで一番って事は、世界で一番の錬金術師って言っても過言じゃないんだよ！？　分かる！？」

「わ、分かる、けど……」

キラが仰け反ったままで、ロクに息も継げない状態で、掠れた声で曖昧に答える。

「そこ、五月蠅いんですの」

「あ、ごめんなさい……」

がすとに怒られてネプギアがしゅんとした。

ようやく体勢を戻すことができたキラが小さく息を継いで、少し乱れた呼吸を戻しながら、何やらぞろぞろと難しそうな道具を鞆から取り出すがすとをまたも眺める。

大きめの鍋のようなもの、これは恐らく鍊金釜だろうか。それから、かき混ぜるためと思われるお玉のような道具、すり鉢やら何やらと細かな道具が次々と取り出される。

「まずはこれとこれを合わせて……、あ、そこにゲームキャラの破片を置いておいて欲しいんですの」

がすとがテーブルの端を指して言うので、キラが変な顔をしつつゲームキャラをそつと衝撃を与えないようにそこに置く。

それからキラ達が集めてきた材料を次々と調合し、ボトボトと釜の中に入れてぐるぐるとかき混ぜ始めた。

「ねえ……なんか異臭がしてきたんだけど、大丈夫なの？」

日本一が鼻を押さえ、少し表情を歪めて口元をひくつかせながら、がすと手元を背後から覗き込んでみる。

しかし、がすとはマスクをしていたためにあまり異臭に関しては動じることもなく、かき混ぜる腕を止めない。

「異臭がするのは、材料に不備があるからですの」

「え？　じゃあ、もう一回採りに行かないといけないわけ？」

アイエフが凄く嫌そうな顔をして、半眼になってがすとを見る。だが、がすとは小さく首を横に振る。

「別に、異臭がするだけで性質に問題はないんですの。少しの間、我慢するんですの」

「だからって、これはちよつとキツイですう……」

コンパが泣きそうな声で言う。

キラも、流石にこの匂いはキツイなと思い、鼻を覆って顔をしかめる。なんか煙が出てきたし、こんなんでホントに大丈夫か、と問い

たくなる。

さて、かき混ぜ始めてだいぶ時間が経ち、ネプギアが釜の中身を恐る恐る覗き込んでみる。何やら緑色の液体、と言っても半スライム状態の物質が釜の中で踊っていた。

失神するんじゃないかというくらいのも臭がネプギアを襲い、意識を奪われかけたが精神の力で何とか耐えて、冷や汗を垂らしながらネプギアが指して言う。

「もういいんじゃないですか？」

「ダメですよ、錬金術は分量とタイミングが命ですよ。曖昧な感性で発言して貰っては困るんですよ」

妙に職人気質だな……、とネプギアが苦笑の裏でそう思ったのだが、如何せん表に出ていたのが苦笑だったので、隠しきれていないとも言えた。

直後、くわつとがすとの両瞳が見開かれ、しゅぼつと横に据えてあるホワイトディスクを引っ掴み、そして容赦なく釜の中にぶち込んだ。

「「「……」」」」

5人が一斉に沈黙し、暫く釜の中を見つめる。

まさか、がすとがそんな思い切った行動に出るとは思っても見なかったらしく、口を半開きにさせて暫くその行く末を黙って、というかも知何も発せないでいて、それを眺めているしかできなかった。それからまた暫くぐると釜の中の物質X十元ホワイトディスクの複合した何とも言えない物体Xバージョン2が、次第に釜の中で、青白い光を発し始めていた。ホワイトディスクバージョン2かもしれない。

そして、更に光の度合いが強くなって、見た感じギャグアニメとかで爆発する直前みたいな感じに光り出したので、キラが少し冷や汗を流した。

「あの……、これ大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ」

「ちょ、全然大丈夫な気がしないんだけど」

アイエフが口元をひくつかせて、半歩後ろに下がって、もうだいたい諦めたような表情になった。

がすがすが、アイエフに身体を向けないまま、淡々と告げる。

「ここはギャグパートだから、爆発しても死ぬことはないんですの」「そういう問題——か!!」

ドオオオオオオオオオオオオオオオ……、

ホテルの一室で大爆発が起こった。

道行く人々はそこを見ながらなんだなんだと騒ぎ立てていたが、ギャグ小説よろしく、数分後には何の問題もなく修復されていたが、ここでは割愛とさせていただきます。

☆ ☆ ☆

数時間後、ブロックダンジョン——

数十分前まで、ギャグ小説のように爆発に巻き込まれたときのように頭がアフロになっていた一行であったが、ダンジョンに移動してくる途中にそれは見る影もなく、すっきりと全治していた。

それはそれとして、キラは自分の手の内に収まっている白っぽい色をしたホワイトディスクに視線を落として訊ねる。

「ホワイトディスク、気分はどうだ？」

「少し、変な感じはしますが……、問題ありません」

「それは良かった」

にっこりと笑みを見せて、キラがほっと胸をなで下ろす。

にしても、がすとは本当に凄い錬金術師だなと完全に感心し、感心しすぎてもう呆氣にとられてしまうくらいになりつつあるキラが『傍らにいる』がすとにチラリと視線を向ける。それに気付いたがすとがクイと顔を上げて、首を傾げる。

「どうかしたんですの？」

色々と聞きたいことはあるのだが、とりあえずキラが今一番気に掛かっている疑問を、いの一番に口に出す。

「何で付いて来てんの？」

ようやく聞けたとばかりにアイエフやコンパもこくこくと、それに同意する感じに何度も頷いていた。

がすとは、心底不思議そうに顎に手をやってキョトンとした表情で逆にキラに対して訊ね返す。

「付いてきたらいけないんですの？」

「いや、いけないって事はないんだろうけど……」

ここまで曖昧な答えを提示するということは、キラの優柔不断度を大きく示しているようにも思えたが、ともかくとがすとは強引に付いてきていた。

「もし、ここでゲームキャラに不備があったら錬金術師、がすとの名折れですの。そんなことは断じて認めないんですの」

心強いんだか、何なんだかよく分からない感じで、キラが微苦笑でそれに答えた。答えられたかどうかは疑問なのだが。

しかし、そんなことは気にしていられないと言った風でアイエフが腕を組んで、ホワイトディスクへ向けて視線を飛ばす。

「それで、ホワイトディスク様？ ハードブレイカーの封印についての手順は出来上がっているんですか？」

「……ええ。あとは、現場で最終構築を組み上げれば、ハードブレイカー達は再封印が可能です」

なるほど……、とアイエフが小さく零すが、コンパが間を置いてようやく事情を理解できたというようにバタバタと手を振って割って

はいる。

「ま、待ってくださいです！　っていうことは、ゲームキャラさんがハードブレイカーさんを封印するまで無防備になっちゃうです！」
「そういうことよ、こんば気付いてなかったの？」

いくら勘の悪いコンパでも、流石に分かっていただろうとたかをくくっていたアイエフが、厄介なものを見る目つきでコンパを見た。一方、勘の悪いコンパはそんな視線にも当然ながら気付く気配も素振りも見せず、あわあわと慌てていた。

「そ、それじゃあどうするですか？」

「簡単な話だよ？　ホワイトディスクの封印が出来上がるまで、誰かが持って逃げ回ってればいい話なんだから」

キラが補足するようにそう言ったが、コンパはうえうと小さく悲鳴のような言葉を零して少し泣きそうになっていた。

しかし、キラはそんなコンパの不安諸共吹き飛ばすように、ニコリと笑い飛ばしてみようとした。

「そんなに心配しなくても、油断しなければ何も――」

『目標、補足。ロック――』

機械的な音声が頭上から発せられ、直後、大きな地響きが轟き、それに次いでズウウウウウウン……と音がして、キラの身体に影が掛かった。

ギギギ……とゆっくりと背後に視線を向けると、そこにはついさっきまでに見た黄金色の装甲を纏った、ハードブレイカーFMの1機がキラの背後に威風堂々とした佇まいで、そこにいた。

ブン、とハードブレイカーFMが、右手の武装を振りかぶり、キラに向かって叩き落とそうとする。

「キラ――！――」

ネプギアが走り、キラの身体を護るように剣を構えて衝撃を待つ。

「ネプギア、無茶だ！　女神化もできてないんじゃない――！――」

あと、数センチ――

ネプギアの剣とハードブレイカーFMの武装が交わり駆けた瞬間に、

バチンツとまるでブレーカーが落ちたときのような大きな音を立てて、直後、ハードブレイカーFMの武装が右腕ごと叩き斬られていた。

思わず瞑っていた瞳を、ネプギアが恐る恐る開き、そして目の前に広がる――奇跡とも呼べるべき現象に言葉を失くす。

音もなく、ハードブレイカーFMの腕、足、胴体、全てが鮮やかな斬り口でバラバラに切断されていた。

「あ……」

ネプギアが声を発したのと同時、今まで無重力空間に浮遊していたのではないかと思えるようなパーツが、ズズズ……と大きな音を立て、まるで力が途絶えたように次々と地面に落下していく。

それに次いで、最後の一パーツが地面に落下するのと同時に、ネプギアの真横に音もなく着地する一人の人物の姿があった。

『誰も見覚えのない』黒いコートを纏った人物。

深く被ったフードの所為で、その表情を覗くことはできないが体格を見るところ、比較的若い男性……青年期ほどの年齢であることが分かる。

何もものを発しない、『人形』のように立っていた青年がスツと息を吸って、盛大に息を吐き出す。

そして、彼の右手に携えられていた闇色の霧を纏った剣が、空気に溶けていくように姿を消した。恐らくその剣でハードブレイカーFMを切り刻んだのだろう。

鮮やかな手口に、全員の敬意を秘めたような視線が、青年に向かって集まる。

しかし、そんな中でキラはその青年を、たった一人だけ、睨むようにまじまじと眺め見ていた。

青年は、その視線に気付いたらしく、半身傾けて、横目で流すようにキラの姿を同じように眺めている。それからフードの隙間から薄く覗く口元がフツと弛み、まるで嘲笑ったかのような笑みを見せた。

「な……、何がおかしい!？」

いきなり叫んだキラに、残ったパーティのメンバー全員が妙なものを見る目付きで視線を送った。

だが、そんなことは気にせずジッとキラは青年を睨む。

「お前は正しい……」

「は……？」

いきなり何を言っているんだと、キラが眉を寄せ上げて素っ頓狂な声を上げて、もう一度、青年を睨む。

邪悪な雰囲気纏っているクセに、のらりくらりとした態度を見え隠れさせる青年の行動が、いちいちキラの癪に障るのだ。

しかし、そんなキラの感情などまるで無視して青年が口を開く。

「怪しいヤツはまず疑え……、それが賢い生き方ってもんだ」

直後、力無く垂れ下げていた青年の右手がスツと、目にもとまらない早さで掲げられ、黒い霧を発生させ、それが細身の剣の形になり、その切っ先がネプギアの喉元にひた、と当てられる。

「ッ……」

ごくりと唾を飲み、キラの刀の柄に伸ばされた腕がだらりと力無く降ろされる。それを満足そうに眺めていた青年がクスリと笑みを零し、スツと右手を降ろして黒い剣を消滅させる。

「冗談だよ、『今回は』互いに利害が一致している……。協力しようじゃないか」

「……協力？」

アイエフが片眉を上げ、素っ頓狂な声で問い掛けた。

そうだと青年は頷き、ついと視線をホワイトディスクがいた広場とは逆方向、まるで警備員のようにそこら中を闊歩しているハードブレイカーFM達に視線を飛ばして、ニヤリと笑む。

「俺がアイツらを倒す。その間に、お前達は封印の間に行って術式を組み上げて来い」

「ちよっと……、倒すって自分が何言ってるか分かってるの？　アイツら、並の人間じゃ敵わないわよ？」

日本一の制止の声も聞かず、青年はバツと両手を広げ、そこから再

び闇色をした剣、今度はかなり太幅の刀身を持ったそれが、長さを増し、やがて青年がそれを横薙ぎに振るい、それに次いで爆発音が幾つも鳴り響き、爆風が起きる。

ビリビリと鼓膜を揺らし、目を開けていることができず、キラは思わず腕で顔を覆った。そして次の瞬間、さっきまで周囲にいたハードブレイカーFM数十機が、跡形もなく消し飛んでいたのだ。

「な……！」

驚愕に言葉も出ない、しかし青年は愉快そうに口元をつり上げ、腰に手を当てて、ゆらゆらとコートの裾を靡かせてまたも不敵に笑む。
「俺、強いから」

「……あながち、嘘ってわけでもなさそうね」

アイエフが大粒の冷や汗を頬に流し、畏怖の念を込めて青年を見た。それに気付いたらしく、青年がアイエフにフツと微笑みかけ、そして口元に人さし指を当て、まるで何かについて『黙っている』、というようなジェスチャーをして見せるも、アイエフは顔をしかめるのみだった。

「いいか、お前らとの共同戦線はこれが最初で最後だ。次に会うときは、互いに敵……。なんなら、後ろからズドンとやっちまってもいいぜ？俺抜きでここを突破できるのなら、って話だがな」

「……」

キツとキラが青年を睨む。

意も知れぬ青年、だが協力する気があるということとは間違いでもないらしい。が、青年の言う『次に会うときは互いに敵』というのもまた、キラとしては間違いと言うことにも思えなかった。

力を借りるのは癪で仕方がない、とキラが奥歯を噛む。もう一度、青年の姿を見てみると、ニヤニヤと、まるでこれからキラが何と答えるかも分かっているように、嫌味たらしく笑っていた。

「……分かりました」

「……、ネプギア。いいのか？」

キラよりも先に、答えたのはネプギアだった。

ぴくりと眉を動かし、キラが確認するようにネプギアに問い掛けるが、ネプギアは深く首肯する。

「この場、お願いしてもよろしいですか？」

「……フン、最初からそのつもりだ。とっとと行け」

スツと青年は正面に向き直り、もう一度、霧状の剣を顕現させて、ハードブレイカー達の群れに突っ込む。

それを見送って、ネプギアがくると向きを変える。

「行きましょう」

「そうね……、アイツが何なのかは分かんないけど、早く封印してやらないとヤバイかもしれないわね」

ネプギアの後続き、アイエフやコンパ、日本一、がすとも駆けていく。チラチラと青年が気に掛かるキラが、背後を気にしながらパーティの後を追っていく。

ようやく去っていった一行を眺めて、青年がフツと笑む。

「やっと邪魔者が去ったな……。にしてもハードブレイカー、『女神を壊す者』……。案外、そんなことは『ない』のかもしれないな……」

そう呟き、また一機ハードブレイカーFMを切り伏せ、照準を合わせたガトリングの迫撃を同じく闇色の障壁を発生させて弾く。

跳弾した弾丸が、取り囲むハードブレイカーFMにヒットしてダメージを与え、ニヤリと笑い、青年が地面に腕を突き立てる。直後、地響きがして、ブロックとブロックの隙間から淡い光が漏れ、そこから黒と白の？が、まるで槍のように、意志を持ったように地面から突き出た。

その場を離れるも、空しく串刺しにされるハードブレイカー、刹那、火花を撒き散らして、爆発音を周囲に轟かせて、その姿が爆散する。ひとしきり、周囲の敵を殲滅したところで青年がフツと息を継ぎ、次の目標を探すために周囲を見回す。

それから、青年は『気になるもの』を見つけた。

「『アイツら』は……」

青年は思わず、眉をひそめた。

＊

「ハードブレイカーは全部出払ってるのか……」

キラが周囲を確認し、その静寂に眉をひそめながらも、駆ける足を止めずにポツリと零した。

ほんの数時間前、周囲にはあちらこちらに停止したものではあったが、ハードブレイカーがところ狭しと並べられていたのだが、恐らく入り口付近の、青年の迎撃にあたっているのだろうか。数十体はあるようにも思えた機体は何一つ姿を見せなかった。

そんなキラの腕の中に収まるホワイトディスクが、暫くそれを眺めていた様子で、それから小さく言葉を漏らす。

「おかしいですね……」

「何がですか？」

その声を拾ったネプギアが、きよとした表情でホワイトディスクに問い掛ける。

「ハードブレイカーは全機合わせて数百体にのぼるはずですが……、それだけの数が見当たらないのは、何か裏があると思いませんか？」

「数百……、冗談にしても笑えないわね」

その途方もない数に、アイエフが口元をひくつかせて言った。

「流石にそんな相手……あの人でも無理じゃない？」

日本一が、不安げな表情になって遙か、もう見ることはできない後方で戦闘を繰り広げているであろう青年に向けて視線を飛ばした。

だが、アイエフは「む……」と小さく呻り、チラリと後方のホワイトディスクを見て言葉を掛ける。

「ホワイトディスク様、少し聞いてもいいですか？」

「……伺いましょう」

「ハードブレイカーの位置情報を確認することは可能ですか？」

ホワイトディスクは暫く沈黙を放った後、申し訳なさそうに言葉を発する。

「ファーストモデルにはGPS機能が搭載されていません。正確なものは、残念ながら……」

「そうですか……」

アイエフがやりにくそうに表情を歪め、クイと顔を上げると、

「――、伏せて！」

叫んだ。

見ると、前方からハードブレイカーの一機が、エネルギー砲を構え、キラ達に向けて放射しようとしていた。

最後、キラが頭を抱えて蹲ると同時に、間一髪でキラの頭上を掠めてエネルギー弾が跳び、ズンと後方の壁に着弾する。

『目標、存在を確認。追撃、します』

機械的な音声でハードブレイカーがもう一度、エネルギー砲に収束する。

先程の砲弾よりも遥かに巨大な球状のエネルギー弾、それが的確にキラ達の方へと照準が合わせられている。

思わず唾を飲み、そしてそれに釘付けになる。

そして、それが、何の躊躇いも見せず、放たれた。

刹那、

「「エターナルフォースブリザード！」」

二人の少女の同時の叫び、それが空中から響いてきたかと思うと、キラ達とハードブレイカーの丁度真ん中の位置に、巨大な氷山が二つ並んで形成される。がりがりと、かき氷のように削られる氷山、一つ目の氷山を突破し、エネルギー弾がもう一つの氷山の掘削へとシフトする。それが半分まで届いたところで、エネルギーに限界が来たらしく、光球の姿がフツと消え失せる。

そんな事態を、目瞋っていたために気付けなかったキラが恐る恐る両目を開き、そして自分の目の前に形成される巨大な氷山に度肝を

抜く。

「な、何じゃこりゃ……」

スマ○ラXでアイスク○イマーがス○ツシュボールを発動させたときのような氷山が、キラの目の前に威風堂々とした様で、城壁のようにそこに立ち、圧倒的な存在感を見せていた。

ピピッと音を立ててハードブレイカーの頭部、カメラに当たる部分が緑色の光を見せる。

『未確認の物体を確認。破壊、します』

ブン、と剣の武装を振り上げてハードブレイカーが上段にその氷の塊に向かって一撃を叩き込む、氷山には剣の軌道が刻み込まれるのみでビクともしないが、ハードブレイカーはそれでも剣を何度も叩き落とす。

学習型AIを搭載したハードブレイカーはこれ以上はエネルギーを消耗するだけと悟ったらしく、ブースターを前回にして後方へ跳び、両肩の付け根に装備されているミサイルポッドから数十に満ちる魔填甲ミサイルを発射し、氷山を爆撃、巨大な衝撃を受けた氷山がバラバラと碎け落ちる。

もくもくと上がる爆煙の中、キラが咳き込み灰色の視界の脇を、二人の少女と思しき影が通り抜けていくのを確認した。

ボフッ、と煙を裂いて、二人の幼い少女が、スクール水着のような白い装甲を纏い、ハードブレイカーに向かって抜けていくのが見える。二人が構えた杖が宙に掲げられ、地面に白い冷氣が集まり、氷を形成する。ボコボコと沸騰しているように表面が泡を作り、円錐型の槍がハードブレイカーの装甲を貫く。

「勝った勝った、私達ってばさいきょーね！」

ブンと少女の一人、ピンク色の髪を揺らして杖を振り、地面を突いた。

「この程度、私達には敵わない」

もう一人、青い髪をした少女も杖を振り、それからおもむろに背後のキラに向かって顔を覗かせた。

その美貌、幼さを残しながらも妖艶さを垣間見せるような、そんな少女達が揃ってキラを見ていた。思わずごとりと喉を鳴らし、息を呑む。

それから、少女達を見た瞬間からずっと感じていた違和感を、ようやく確信にすることができたとキラが顎を引いて、唇をきゅつと一の字に結ぶと意を決し、唇を上下させる。

「ロムちゃんに、ラムちゃん……だよな？ どうしてここに？」

キラの言葉に、虚を突かれたような表情になる二人の少女。無論、それはキラの背後にいる少女達も同様である。

それから互いに顔を見合わせ、ピンク色の髪をした少女——ラムがついと背を向けて答える。

「べ、別に何でもいいでしょー……」

と、言いかけてラムがハッと口元を押さえる。強がってみせたかったのだろう、しかしその声音はまるで幼い子供が甘えるように、というかそのもののようにキラはフツと苦笑をみせる。

「ルウィーが危ないから、居ても立ってもいられない、ってこと？」

「そう、それ！」

ビシッとキラを指して、ラムが言う。

その態度にまたしても苦笑しか出てこないキラが、ポリポリと頬を掻いてから、きゅつと唇を紡ぐ。

「協力してくれる、ってことでいいの？」

「うん……」

ロムがこくりと静かに頷き、肯定してみせた。

「そっか」

ニコッとキラが笑みをみせると、ぽんっとロムの頬が大きく赤らむ。あまりよく見えないがラムの方もそれを盗み見て、同様のリアクションをとっていた。

ぞわり、とキラの背中に悪寒が走るものの、『???』と首を傾げてキラが冷や汗を垂らす。その間、背後ではネプギアが邪悪なオーラを発して、髪が浮き上がって若干メデューサみたいになっていた

が、実際の映像とは大きく異なります。

二人の姿を見納めるように、薄く笑みを作ったキラが向きを変えて走り出す。

と、

+

キラは走っている。

確かにそう感じるが、だが、それは身体が勝手に動いているような気分で、自分の意志はそこに停留しているままのような感覚である。幻想的、と言ってもその様を言い表すことはできないような、神秘的とも言えるその光景の中に、キラは立っていた。

そして、キラが立っていき真正面、何もない空間だと思っていた場所に、突如として水を落とした水面のようにゆらゆらと空間が歪む。

傍目から見れば、明らかにおかしい状況である、だがキラはこの世界では何が起こっても不思議ではないという風に、達観したような態度でそこに棒立ちになって、暫くその様を眺めていた。

そして、空間が更に大きく歪み、そこからコンと音がして、その姿が明らかに変わった。

——キラだった。

まるで鏡で映したように、そっくりそのまま、キラの形をしたものが、空間から颯爽と歩いてきた。それを見て、初めてキラは表情を少し歪めた。

もう一人のキラは、クイツと伸びかけた髪をかき上げて、それからジロリとキラのことを睨みつけてきた。その様に、キラの心臓が跳ねる。

『——邪魔なんだよ』

憎しみを込めた低い声音で、目の前のキラがキラに向かって、文句を言ってみせた。

『俺は、あの生活が幸せだったんだ』

ぎゅっと拳を胸の前で握って、キラが言う。

『それを、横取りされた俺の気持ち分かるか？』

「……分かるよ」

キラがそう答えると、キラはくわっと瞳を見開いて、バツと右手を振って叫ぶ。

『お前に分かるか！』

「俺だって今の生活は楽しいよ。だから、その気持ちは分かる。お前だって、俺と同じなんだ」

『同じにするな！ お前の所為で、俺は、もう——！』

グツと言葉を詰まらせ、キラががっくりとその場に崩れ落ちた。

腰を折って、キラがそっとキラの肩に手を添える。それに驚いたキラがバツと顔を上げてキラの顔を見る。

「ずっと怖かったんだ、お前という存在が」

『何を……』

「でも、怖がる必要なんてなかったんだ。俺はお前で、お前も俺で、拒絶する必要なんて何もなかった。ただの事故だったんだ、お前が生まれたのも」

慈しむように、キラが薄く笑みをみせて、語りかけるように唇を下させる。

「それは悲しい事じゃない。こうやって見えないものが見えてくるんだ。だから、俺はそれに憤慨したりしない」

キラは確信を持った口調で、『自分』に向かって、言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

「お前は消えるんじゃない、生きるんだ。俺と、一つになって——」

『……ああ、そうだな』

キラが頷きを見せ、そう言った。

『なあ、これが終わったらロムちゃんとラムちゃんに謝っておいてくれ——』

「それは、」

キラの言葉を遮って、続ける。

「『俺』が言うこと、だろ……？」

『……そう、だな』

そう言っただけで目を閉じた瞬間、その姿はなくなっていた――。

十

いつの間にか、ホワイトディスクが居たあの広場の手前まで来ていたらしい。

キラは思わず、こめかみに手をやって、今し方流れこんできた記憶を簡単に眺めて、フツと口元をつり上げた。

二人とも、とてもいい子だった。教会の人々も、とても優しくしてくれていた。『自分』が言っていた、謝らなければならぬと言う言葉、案外、嘘でもないのかもしれない。申し訳なさく思っただけを落とす。

と、背後でアイエフが指示を出しているのによく気付いたキラがとっとアイエフの傍らにより、物陰から広場の様子を見る。

そこでは、下っ端がまだ起動を済ませていないハードブレイカーにエネルギーパックの交換と、起動に必要な簡単なプログラムを打ち込んでいたようだった。そして、巨体に似つかわしくない精密な動きで、下っ端の仕事を補助しているハードブレイカーが一体いる。なるほど、とキラは小さく呟く。流石にこれだけの数の起動準備には相当な時間があるだろう。あまり数が見られなかったのにも納得がいった。

ともなると、少しばかり新郎が軽くなったように思える。恐らくあちらがキラ達の相手をするとなればハードブレイカーの起動はいったん止まるだろう。そうなれば、相手にするのは下っ端、そしてハードブレイカーのファーストモデル一機に、フィフスモデルが一機ということになる。計算を終えて、キラが嫌そうな顔をした。

「なんか……、敵いそうにないんですけど」

「せめてネプギアが女神化できれば、もう少し戦況も変わってくる

だけど」

チツと舌打ちして、アイエフが苦い表情を見せる。

「うう……すいません」

キラの横でネプギアがしゅんと項垂れる。

「別にあんたが謝る事じゃないけど……せめてあの針がどうにかできれば」

憎らしげにアイエフが広場の周りを囲うように、高台に設置されている10本の針を睨みつける。

「どれか一本、試しに撃ち落としてみる？」

日本一がそう言うが、アイエフは首を横に振る。

「一つだけ破壊してもし効果が見られなかったら、こっちがいつきに不利になるのよ？ やるなら全部、同時に叩き落とさない」と

とは言うものの、それが無茶なことであるというのはアイエフだっ
て十分に分かっている。今、遠距離に対応し、もっとも火力のある
のはネプギアかコンパだ。だが、例えばこの位置から狙撃するにして
もこのフィールドを通過しなければならない、この中で女神の力を
纏った攻撃が通用するかは疑問である。とは言うが、コンパの威力
では不十分、一つの針を壊して終わりである。

刹那、ピシッと10本の針すべてに横薙ぎの切れこみが入り、ズズ
ズと音を立てて半分から上の部分が崩れ落ちる。

異変に気付いた下っ端がキョロキョロと周囲を見回し、冷や汗を垂
らす。流石にこんな攻撃は予想していなかったらしい。次いで、待
機していた起動されていないハードブレイカー達も爆発を起こして
姿を消す。

コンパが何事だろうかと頭上を見ると、高台に立った、あの黒いコ
ートを纏った青年がキラ達に向かって叫んでいた。

「援護はこれで終まいだ！ あとはテメエらでやりな！！」

「……上出来ね」

ニヤッとアイエフが笑み、カタールを構えて広場に躍り出る。

その姿を捉えた下っ端が目を剥き、そしてピシッと指を突きつけて

唾を飛ばす勢いでまくし立てる。

「またテメエらか！ 相変わらず懲りねえ野郎共だな！」

「それはこっちの台詞よ！」

同じく、ビシッと下っ端へ向けて指を突きつける日本一が叫んだ。しかし、下っ端はにやりと笑って見せ、パチンと指を鳴らす。

「まあいい。テメエらはすぐに冥土へと送られることになる。ハードブレイカーによってな！」

下っ端が叫んで数分の後、

シーンと静まりかえったままの広場で、下っ端が「んな！」とか叫んでキョロキョロと辺りを見回す。

「な、なんで来ねえんだ!?!」

「悪いけどよ」

キラがスツとホワイトディスクを手に載せて、その姿を見せつける。それを確認した下っ端があんぐりと口を開けて半歩後退った。

「ハードブレイカー達は既に封印させていただきました」

「て、テメエ……!」

ブルブルと怒りに震える拳を握って、下っ端が忌々しげに呻いた。

「……まだ、やるつもりですか？」

いつの間にか女神化したネプギアが、武器を構え、下っ端のことを睨んでいた。

流石にこれまでネプギアの相手をして、勝ち目がないことを十分に悟っている下っ端は低く呻って、バツと背を向けると

「覚えてろ！」

と、お決まりの捨て台詞を吐き、一目散に駆け出していった。

フツと息を吐き、キラは相も変わらず幾何学的な模様が飛び交う天井を眺め、満足そうに笑みを浮かべた。

EP. 32 何モカモガ分カラナイ

「そうですか……、キラさんには何とお礼を申し上げたらよいか、分かりませんね」

ルウィー中央協会、応接室――

そこで、やんわりと笑みを見せるミナ、それぞれに向かい合ってソファに座るキラ。もしかしたら、こんな光景は二度と拝むことはできなかったのかもしれない。

キラ達がブロックダンジョンで、ハードブレイカーを再封印し終えた日の更に二日後、キラは教会へと赴き、そして事の顛末を詳しくミナに説明し終え、一息ついたときのことであつた。

「キラさんはルウィーの危機を救って頂いて、感謝してもしきれません」

既にホワイトディスクから事は聞いているはずだが、ミナは兎に角もう頭を何度も下げて感謝の言葉を述べていた。

「やめて下さいよ……。俺だけの力じゃないですし、それに封印したのはホワイトディスクですよ？」

苦笑を見せて、コーヒークップを喉に流し込んで水分を取り込む。

キラの言葉で何とか顔を上げたミナが、息を継いで不安げな表情を見せ、俯き加減を少し大きくさせた。

「ゲームキャラの居場所が犯罪組織にばれてしまうなんて……。もう少し警戒態勢を強化するべきでした」

「仕方ないですよ、まさかあんなところにゲームキャラがいるなんて夢にも思わないですから。たればの話はなしにしましょうよ」

キラの言葉を聞いて、ミナがこくりと鷹揚に頷いてみせる。

それはそれとして、とミナがゆったりと笑む。それは数日前から見慣れていたはずの、安心できる笑顔である。

心がゆとりを持って静まっていくことを確かに感じつつ、ミナが思い出したように短く声を発する。

「そう言えば、ホワイトディスクからは……」

「あ、それはもちろん。随分と協力的でしたので、言ったらすぐに力を貸してくれましたよ」

キラがバッグから白色の薄いディスクを取り出し、ヒラヒラと振ってみせる。

それはよかった、とミナがほっと胸をなで下ろし、納得するように何度も頷く。

その視線からは、キラとこうして話をしていられることが心から望んだことであるというのが、手にとって見て取れるようだった。

「俺、ミナさんに酷いこといいましたよね……」

ふと、キラが視線をやや下方へと落とし、自嘲するような笑みを見せた後に、声のトーンとやや低くしてそう言った。自責の念をも感じ取れ、ひどくミナの心に揺さぶりを掛け、その様は打ち砕かれた後のようでもある。

「ロムちゃんにもラムちゃんにも、取り返しの付かないようなことをしたかもしれないですし……」

キラの悲しげな表情に、ミナが声もなく呻きスツと視線をやや下方に落として、俯いてしまう。

「でも、感謝しています」

「え……?」

ミナが耳を疑うように、少し両瞳を見開いて、こくんと首を小さく傾げて、そう声を零した。キラの表情は先程とは違う、何かを吹っ切れたようなそんな表情を見せて、港向き合っていた。

「二人は辛いはずなのに、それでも俺のために加勢してくれました。だから、そのことはとても感謝してもしきれないんです。いや……」
そこまで言って、一度、キラは息を継いで、取り留めるように言葉を口の中に溜め込み、もう一度、言葉を吐き出す。

「そんな遠回しな事じゃないんです。ただ、あの娘達がもう一度、

俺と向き合ってくれるって事が嬉しかったんです」

「……そうですね」

ミナは一度スツと瞳を閉じ、胸に手を当て今この場にいない少女達の姿を鮮明に思い浮かべて小さく頷く。ミナは確かに感じていたのだ、あの二人に劇的な変化が現れつつあるということを。かつて、あの少女達は互い、そしてホワイトハート以外のすべての存在を否定し続けていた。ミナに心を開いたのだって、本当にここ数年の話である。そうと分かれば、彼女たちの変化には、確実にキラという存在が関わっているということがよく分かってしまう。

「次は、どちらへ？」

「……、リーンボックスへ行こうと思っています。あとはあそこのゲームキャラだけですから」

その答えを聞いて、ミナが無言で頷き、しゅんと悲しそうな表情を見せている。

何か言いたげな態度であったが、しかしミナはきゅつと唇を紡ぐと、精一杯の作った笑顔を見せて、柔らかな声で言う。

「御武運を」

「ありがとうございます」

キラが礼を言くと、ミナは少し頬を朱に染めて、両手で顔を隠してしまった。頭上の疑問符が軽快なリズムで踊るキラが、キョトンとした表情になって苦笑を見せる。

その後に、ミナがようやく落ち着きを見せ、もう大丈夫だろうと様子を見たキラが腰を上げる。

「ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ」

ミナが握手を求めてくる。キラもそれに答えて右手を差し出す。本当に、本当に世話になったと、今更ながら実感してそして深く心に刻み込む。このことは絶対に忘れないように、と。

何度も礼を言って応接室の扉を押し開ける。

フツと前方に視線を向けると、そこには幼い少女達——ロムとラムがまるでキラが出てくることをずっと待っていたように、壁に体重を預けて地面に腰を落ち着かせ、こっくりこっくりと船を漕いでいるようだった。

その様に小さく笑みが零れるのを感じながら、流石にここで寝かせておくのは外聞も悪いものだろうと思い直し、静かに二人の元へ歩み寄ってそっと肩に手を当て、小さくその身体を揺さぶる。

「ん……」

「みゅ……」

同時に二人が呻きにも似た声を発して、それから互いに身を寄せ合うように擦り寄って再び寝息を立て始めようとしたので、もう一度揺すり起こそうと試みた。

ようやく、己のみに異変があることを感じたらしい二人がゆったりと緩慢な動作で壁から身を離し、ごしごしと目元を擦ってキョロキョロと周囲を見回し、ぴたっとキラに視線が行ってぱちくりと何度も瞬きを繰り返す。

「……おはよう」

柔らかな笑みを見せると、スーッと次第に二人の頬に朱が射し、それからラムがぽかぽかとキラの胸板を叩きに掛かってきた。

「な、なんているのよっ!」

「え、いや……なんて言うか、ね?」

心の準備ができていなかったらしく、恥ずかしさ紛れにラムがそんなことを言ってくる。しかし、そんな勢いに気圧されつつキラが曖昧な笑みを見せて宥めるように言ったので、ラムが何とか落ち着き払ってぽかぽか殴ってくるのは止まった。それなりに鍛えていたつもりなのだが地味に痛かったのは、やはり女神たる所以なのか或いはキラが弱いだけなのかは神のみぞ知るところである。

「キラ、お話終わった……?」

ロムがこくりと首を傾げ、待ち望んでいたとばかりに、少し声を弾ませて問い掛ける。その答えとばかりにキラは深く首肯し、ぼん

ぽんとロムの頭に自分の手を添え、はにかむロムの姿を見てから答える。

「待っててくれたんだね、ありがとう」

それを横から気にくわない様子で眺めていたラムが、ずいっと顔をキラの顔に近づけてぷうぷうと頬を膨らませ、怒っていることをアピールしてみせる。

苦笑のまま、開いた右手をラムの頭上へと持っていていき、ロムと同じように軽く撫でてみせる。まるで、あの時に二人の相手をしていたように。

戸惑った表情を見せるも、ほにゃーと表情を崩すラム。

機嫌がなおったことを見計らって、とは言うがキラとしてはそういう情緒にはあまり無頓着なので自分のタイミングで切り出しただけなのだが、それにしたってこういうところでタイミングは抜群である。

「二人はいい子だね」

「当然でしょ！」

「うん……」

キラの言葉に、ビシッとラムが答え反響のようにロムも頷く。名残惜しそうに二人に伸ばしていた手をキラが引っ込め、それから表情を引き締める。その態度が二人にも伝わったらしく、どこか物憂げな表情をしてキラの言葉を待った。

「俺ね、もうルウィーを出て行かないといけないんだ」

恐らくこの二人には予想にもできないことだったのだろう、全くと言っているほどに驚きを隠せない、口を大きく開いてそして次第にしゅんと表情に悲しみの色が滲んでくるのが見て取れる、

沸々と湧き出る罪悪感を感じつつ、それでもこれだけは言っておかなければと思う言葉を思い浮かべて口を開く。

「二人には、すぐく救われたんだ」

「え……？」

その言葉の真意を理解できないと言った風でロムが首を傾げるが、

キラは一度、言葉を口の中に溜め込むように一の字に結んで、重々しく語り出す。

「俺には、ルウィーに來たときに記憶が無かったんだ」

「それは知ってるよ？」

ラムが、それは分かっている。だけど、それがいったい何だと言うんだ、とでも言いたげに視線を送る。

「俺はあの時、何もかもに押しつぶされそうになっていたんだ。物理的にじゃない、精神的にね」

二人が短く息を漏らして、次のキラの言葉を待つように小さく拳を握って頷いてみせた。

「だから、そんな時に俺の存在を認めてくれたロムちゃんやラムちゃんには凄く感謝してるんだ。もちろん、ミナさんや教会の人達にも。俺っていう存在、あの時俺は『記憶を何もかもなくして意味のない』自分だと思ってたんだ。でも、そんなことを気にしないでそのままの俺を見てくれる二人のことが好きだった」

二人が息を呑むのが分かる。それがどんな感情の色を帯びていたのか、キラには理解しかねたが。

「だから、ちゃんとお礼が言いたいって思ったんだ。――ありがとう、二人とも」

ニコツと柔らかな笑みを見せて小さく頭を下げるキラの姿に、何か思うものがあつたのだろうか。ロムとラムの二人が互いに顔を見合わせて、それからラムが強がつた風に腕を組んで言う。

「ま、まあ、当たり前よね！」

「私達の方こそ、ありがとうだよ……」

「え？」

キラが首を傾げる。

「私達もキラと一緒にいられて楽しかったもん……」

「だから、その……」

ラムが照れくさそうに頬を掻きながら明後日の方向に視線を向け、それからもう一度隣にいるロムと視線を交わし、スッと二人が顔を

キラの顔に近づけてくる。

「う、え……？」

一度、キラの頭の中が真っ白なクリーニングしたみたいになってから、そしてふと頬に当たるしつとりと水分を含んだような柔らかで心地のいい感触が、脳に行き渡る。甘くとろけてしまうような甘美な心地。これはシャンプーの匂いなのか、それとも女の子の特有の匂いなのかとか、もうそんなこともワケが分からなくなってしまいそうにごちゃ混ぜになって、ただ二人が自分の頬に『キス』をしているという事実だけが分かっているというような感覚である。

程なくして、息が掛かるほどにすぐ傍、ゼロ距離にあった二人の顔が離れ、しかし未だ頬に残る熱くリアルな感触にキラの頬に朱が射す。

「と、特別なんだからね！」

「私達のキス、どうだった……？」

子供ながら直球というか、そういわれると余計に気恥ずかしくなっていてキラが思わず腕で顔を覆った。そしてその中でもごもごと口を動かしながら曖昧に頷き返す。

「い、いい、と思う……」

そんな言葉しか出なかった。

ぶっちゃけ、もうキラの頭の中ではこんな感覚初めてだよ、もうヤバイとか何とか半暴走状態まで陥っていたが、そんな答えを出したのはある意味で上出来とも言えた。

キラの答えを聞いて満足したらしい二人が、急に恥ずかしくなったのか顔を真っ赤にして、ばたばたと走り去っていく。

その背中を眺めながら、そっと両頬に手を当て、もう一度事態を咀嚼するように深く思考を廻らせた。

「……」

静寂が支配しきっている廊下のだ真ん中で、キラはただ力無く頬に手を添えて佇み、二人が去っていった方向をジッと眺めていた。

「っと、そういやネプギア達待たせたまんまだったっけ……」

取り繕うように、誰がいるでもない廊下の真ん中でキラが上ずった声でそう言って、くるっと背後に向けて歩みを進めようとしたところでぴたりと足が止まる。

「……」

キラの頬に汗が流れる。

当然だろう、何故ならそこには半眼になって腕を組み、仁王立ちのようにキラの行く手を阻むようにして立っている一人の少女がいたのだから。

「ね、ネプギア……」

キラの言葉にネプギアはゆっくりと頷き、一步、足を出してキラに接近を仕掛けてくる。何故だか、ひどく威圧感を発していてキラは何も言葉を発することができずに、ただ口元をひくつかせてネプギアが接近してくるのを待つことしかできなかった。

それから、ちょうど息が掛かりそうな位置までネプギアが歩み寄ってきて、ジッとキラの瞳を覗き込むように睨みつけ、口を開く。

「みなさんとの話は終わった？」

切り出しがそれか……とキラが思いかけたが、何かものを発することもままならないまま、キラがこくりと頷く。

「そっか……」

「あの、何か……？」

敬語になったキラが恐る恐るネプギアの顔色を覗いて問うてみる。

顎に手をやって深く何かを考え込むような仕草を見せたネプギアが、バツと顔を上げて

「キラ！」

「はいい！」

ネプギアの叫びに、完全に萎縮してしまったキラが返事をする。ネプギアは言うが早いか、軽くつま先立ちになってその唇をキラの唇に躊躇いなく重ねてきた。

もう何度目かも分からない感触、だが未だにこれは慣れないとかそんなことは何も思えずに、キラはもう、さっきの感触とたった今の

感触で頭がショートしてしまうのではないかと言うほどに瞳をぐるぐるさせて、身じろぎもせずに唇に当たる暖かい感触にただ溺れていた。

ややあって、ネプギアが「ぷはっ」と言って、息を継ぐように唇をそつと放した。キラの心臓はもうばっくんばっくんと早鐘のように、激しいビートを刻んでいても何が何だか分からないといった風情であった。

「わ、私は……キラのこと、すっ……、好き、なんだからね！」

「え……」

「だから、その……女の子に優しくしないで、とか意地悪なことは言わないけど……」

ネプギアがスツと息を吸って、おもむろに口を開いた。

「も、もう少し自覚を持ってよね……」

上目遣いでそう言うってくるネプギアに、キラの心臓がまたしても跳ね上がって更に早いリズムで鼓動を打っていた。

キラはもう、ほとんど使い物にならなくなっている頭で指令を下し、緩慢に、曖昧に、頷いて見せてしまった。

＊

それから、キラはどうやってここまで歩んできたかは分からない。ただ、気が付いたときには教会の前で待っているアイエフ達と、既に合流し終えていたのである。

ようやく来たかという表情を見せたアイエフが、体重を預けていた教会の塀から身体を離し、腰に手を当てて問うてくる。

「もう、話は終わったの？」

「え、ええ……」

半ばいきなりのところで声を掛けられて、キラがドギマギしつつそれに答える。キラの挙動が不自然であることにアイエフが半眼になってジロリと頭頂から足先を睨めるように見回すも特に怪しい点が

見られなかったらしく、「まあいいわ」と言って手で制したのでキラがほっと胸をなで下ろす。

「さ、ルウィーにも色々と未練はあるでしょうけど、そうも言っていられないわ。早くリーンボックスに行ってゲームキャラの力を借りなきゃ」

「そうですね」

コンパが頷き、スツと教会の門をくぐりセントラルステーションへ向かおうとしたとき、キラの視界の端に一人の少女を見つける。がすどだった。

「探したんですの」

先日、ブロックダンジョンから帰還した一行から一時パーティを離脱していたがすとが、今のこの時になって姿を見せたことに一行が首を捻る。おまけに『探していた』とはどういうことだろうか、しかしそんな疑問を発する前にがすとととと一行の元まで歩み寄りついと見上げてきた。

「どこに行くんですの？」

「私達はこれからリーンボックスに行くのよ」

日本一が答えると、がすとはふむ……と小さく呻り、顎に手をやって何やら考え込む素振りを見せる。

「がすとは結構、役に立つんですの？」

「へ？」

いきなりそんなことを言われて、ネプギアがキョトンとした表情になるが、がすとはそれをものもしない様子で告げてくる。

「だいたい事情は、この前に聞いたとおり……ゲームギョウ界を救うために、旅をしているんですの？」

「まあ、そうなるけど……」

ゆくゆく目標はそうだろうかとアイエフが冷や汗を垂らしながら答える。

「がすとも連れて行って欲しいんですの」

「」「え!?!」「」

全員が驚愕の声を上げた。

あまりに急展開すぎる事象のために、そんな驚きの声が漏れたように思える。

「がすとだって、ゲームギョウ界の危機なんて黙っておけるはずがないんですの」

「でも、危ないんだよ？」

キラが両手を前に出して、宥めるような口調でがすと言っただけに見せたが、がすとはそれをものとしないうにこくりと頷く。

「そんなことはあのダンジョンに行ったときに十分に分かったことですよ」

それもそうか……、とキラが額に手を当て、大きく溜息を吐く。

「それに、皆さんは世界中を旅することになるんですの。そうすれば、おのずと未知なる素材に出会うこともできますの」

「……ああ、そういうこと」

アイエフが、もう半ば諦めた風な声音で言った。

つまるところ、自分一人では危険で行けなさそうな場所でも、キラ達が一緒ならば行けるというわけで、半分利用されていると言ってもいい。

「こうなっては意地でも付いて行くんですの」

がすとの言葉からは確固とした意志が見られる。

何を言っても無駄だろうかと、キラ達が互いに顔を見合わせて大きく息を吐く。

それからくしゃくしゃと頭を掻きむしって、キラが代表して、薄く笑みを浮かべてがすと言った。

「了解、じゃあ今日から俺達はパーティーだから、よろしく」

「よろしくですよ」

「どんどん賑やかになっていくですね」

コンパがマイペースにそう言った。

ホントだよ、とキラが内心で思いつつ、すっかり大所帯になってしまったパーティーの一同を眺め回して、それもいいかとフツと息を継

いで、教会の方を振り向く。

それから、ふとキラはとある一室に目がいく。いや、部屋と言うよりは廊下に設えてある窓から見える空間であるのだが。

『……己の中にあるもう一つの存在が分かっているか？』

『……お前はいるだけで世界を壊す。それを感じているか？』

『……お前は、俺と同じだ』

あの青年が言っていたことが、キラの頭の中で繰り返される。それが、一体どういった意味を秘めているのかは、今のキラには到底、理解できそうもないことである。

自然と眉根にしわが寄り、睨みつけるようにその窓を眺めていた。

そんな思いが交錯する中、キラはネプギアに促され、ゆっくりと歩みを進め、ルウィーの街並みを眺め回し、ゆっくりとその場を立ち去った――。

☆ ☆ ☆

ギョウカイ墓場の意味――、

それは追想。

或いは眠りをもたらず地。

或いは始まりの地。

或いは戒めの地。

或いは贖罪の地。

或いは神が眠る永遠の終局の地。

そして、究極の幻想。

『エターナル・ヘイヴン
永遠の楽園』

「やっと決まったよ……」

少年は、ふっとすっかり土色に近くなった肌を、疼くように揺らし、スッと傍らにいる少女達に視線を向けた。

皆、目尻に涙を溜め、必死に彼の姿を取り留めようと、切実に願っているような表情である。

だが、少年は何もかもを悟ってしまったかのように力無く、その場に横たわって、腹に滲む血も、ものもしない様子でいた。

「ずっと悩んでいたんだ……、この場所」

ゆっくりと、腕が天に向かって伸ばされ、そしてその指先から淡い光が球状になり、宙へ向かって放たれ、やがて光を撒き散らして周囲に花を咲かせた。

「花……?」

少女の一人が周囲を見回して、そう零した。

少年はこくりと頷き、一つ咳をしてまた宙を眺める。

「『永遠の楽園』……、皮肉だろ？ 楽園と呼ばれたこの地で、僕が死ぬことになるんだから」

ハハッと乾いた笑いを零し、少年が口元をつり上げる。

それから、4人の少女達を順々に眺め回し、満足そうに笑みを見せるとおもむろに口を開く。

「後のことは、全てイストワールに任せてある。きっと、あの子なら大陸を、僕よりもずっと……」

少年は一度、目を伏せ、そして少女達の影に隠れるようにして立っている少年に向けて、言葉を発した。

「きっと、きっとゲームギョウ界を……幸せに、して……。理想論だって、分かっている……。でも、僕はこのゲームギョウ界と、そこに住む人達が大好きなんだ……。みんなには、例え僕がいなくなっただとしても、幸せになって、ほしいから……」

だから、と既に掠れて上手く聞き取れない声で、少年が言う。

「きっと、元の、君の世界、で――」

最後まで言葉が続かず、少年の首がかくんと落ちる。

穏やかな笑みを浮かべたまま、咲き誇る花畑の中で、少年は楽園の名の通り、幸せの中で眠るように――死んでいった。

少女達の号泣する声が、楽園の中に響く。

その中で、少年は一人、既に息絶えた少年の手を握り、目尻に涙を浮かべたまま叫ぶように、呼びかけるように言った。

『お前の願い、確かに受け取った……！ 例え、俺が何百年生きることになったとしても、必ず、必ずゲームギョウ界を、お前が望んだ幸せの世界にしてみせる！』

息を呑み、少年がごしごしと目元に浮かんだ涙を乱暴に拭い取って、少年の手を包むように両手で握る。

『だから——、安心して眠ってくれ………？ ＊♪▽＃”！！！！』

ギョウカイ墓場の意味――、

それは追想。

或いは眠りをもたらず地。

或いは始まりの地。

或いは戒めの地。

或いは贖罪の地。

或いは神が眠る、永遠の終局の地。

そして、究極の幻想。

『永遠の樂園』

少年にとってそれは苦しみと、約束の地。

そして、それは世界にとって破滅の地。

そして、悲しみが始まった――。

EP. 32 何モカモガ分カラナイ（後書き）

ついにルウィー編が終了！

残すところあと一つ！ とうとうリーンボックスです！

次章のリーンボックスでは皆様が待ち望んだ（？）あの人が…？

EP. 33 「THE ONE WAY TICKET TO HELL」

リーンボックス編、結構短めです

EP. 33 [THE ONE WAY TICKET TO HELL]

ラストイション――

その南方に位置するフェリー発着港、

港の中にはフェリーの到着を待つ人々を退屈させることがないようにと様々な店舗やら遊技場がある。手ごろな価格でそれなりに美味の食事を提供してくれるレストランが数種、簡単なお茶を振る舞ってくれる小洒落たカフェ、少し小さめだがそれでも流行を先取りしたものが多々ある衣服店やアクセサリーショップ、ゲームセンターや小さめの映画館、本屋やサロン、雑貨店に食料品店舗、シャワールームといった設備が備えてあり、最早そこら辺のデパートすらも超越しているような豪華な設備の港の建物の中で、一人の少年が自分の目の前にいる少女二人を交互に見回して、玉のような汗をつうと流して苦笑を浮かべた。とは言うが、少年の心持ちと言えば、それはもう気の毒なほどでこうして突っ立っているだけでも、彼の精神力というかそういうった類のものがガンガンと労働基準法を違反しているくらいにまで掘削作業が続けられていて、その苦笑も時間が経つほどにケタケタと妙に虚無的な、目が笑っていないくらいにまでなりつつあったが、それでも少年の目の前にいる少女達は、少年のそんな心持ちなど知ったことかと言うほどにそこに存在しており、もう少年としては自我が崩壊し掛けているとも言えた。

片方は、桃色の髪を腰まで伸ばし、アメジストのような輝きを放つ大きめの瞳でむっと頬を膨らませている。

対するは、漆黒にも似た髪をツインテールが肩まで伸ばされ、ルビーのように真っ赤に燃える瞳をした少女が、ふふんとやや誇らしげに立ち、目の前の少女を睨んでいた。

そして、その間に立つ少年は、紺の混ざったような髪が耳元まで伸ばされ、やや頼りなさげに細められたブラウンの瞳で、少女達を無

言で交互に眺め回して口元をひくつかせて、挟まれるようにそこにいた。

そして、それを遠巻きに眺め、一人の少女はもう何もかもを諦めきった風に半眼を作り、一人はきよとした表情でそれをピタリと沈黙したまま眺め、一人はまるで状況自体が読み込めていないという風に何でもない表情をして、一人は既にその現場の事情を悟っている風に落ち着き払って、そして4人が同情的な視線を間に挟まれる哀れな男に向けて送ると同時に厄介者を見る色を帯びさせ、それを何とか直感で感じ取った少年が「どうしたらええねん」とでも言いたげな視線を送り返してきたのだが、少女達は一斉に首を横に振って、非協力的な態度を見せた。

死刑の確定申告を受けたときのようにな少年がぐわっと口を開き、その表情に影が掛かっていよいよ笑えなくなってきた。心なしか両足もガクガクブルブルと震えてきているようにも見えた。

(どうしてこんなことになったんだっけ――?)

既視感デジャヴのような感覚を覚えつつ、とつくに働きを見せなくなりつつある脳味噌でキラが物憂げな表情をして記憶を探り始めた。現実逃避成功。

*

時は遡ること、数時間前――

無事、とは言い難いものの何とかルウイーのゲームキャラ、ホワイトディスクよりゲームキャラの力を授かり、ルウイーの教会陣と何とか和解も成し遂げ、半ば無理矢理と言った風味だがパーティヘと加わり、そしてルウイー南方にある駅より、ラストイション

へと航路を戻した列車の中、のことである。

列車の最後車、その一角の向かい合った席には何とも近寄りがたい雰囲気纏わりついており、乗客はおろか切符の確認に巡回してきた車掌でさえも少し距離を置いたところで何とも言えない苦い表情をしてそこを見つめていた。

「だから、結局あの変なヤツの正体は何だって聞いてるの！」

「私に聞かれても知らないですよ……、第一、初対面ですよ？　いきなり敵視するのもどうかと思いませんか？」

アイエフの轟々とした怒りの滲み出たヤケクソ気味の問いに、ネプギアはその人の良さも伺えるような返答をする。

「いやいや……、思いきり宣戦布告されてただろ？　『次にあったときは敵』とか言ってたんだぞ？」

キラの言葉に「む……」とネプギアが低く呻り、反論する言葉を失う。と、ここで同じく穏健派であるコンパが横から口を挟む。

「でも、ただの冗談かもしれないですよ？　見た目に反してひょうきんな人だったですし、その一環かも、です」

そこでがすがいやいやとコンパの言葉に反論し、首を横に振ってから発言する。

「でもあの感じはやるときはやるような人に見えたんですの。がすと達に隙があれば、容赦なくやられても不思議じゃないんですの」

「でもさー、無闇に敵を作るのはこっちにとっても美味しくないでしょ？　話せば案外分かって、仲間になってくれるかもよ？」

敵視したい派のキラ、アイエフ、がすと。

戦いたくない派のネプギア、コンパ、日本一。

今回、彼女らが互いに衝突し合っている理由とは、ホワイトデイスクと共にハードブレイカーを封印に行った際に接触した謎の男についてである。

ことのキツカケはほんの些細なこと、ふとその時のことを思い返したキラ、そしてじわじわと彼の言動が頭に思い浮かんできた一同が、その捉え方によって衝突したと言うわけである。

かれこれ、ルウィーの街を発って三十分近くが経過しようとしていたが、相変わらず一行の白熱した議論は収まることを知らず、寧ろヒートアップしているような気がしないでもなかった。

「そもそも、彼が何者なのかって事を議論する方が先なのよ！ 敵か味方か、なんてそれから判明することでしょう！」

と、しびれを切らしたアイエフが窓際に座っていたので、ちょうど手頃な位置にある窓の下の方からほんのちよびっと出ている、ジュースなどが置ける便利なようで邪魔な小さなテーブルを叩いて叫ぶと、それを聞き終えてアイエフを除いた全員がジーツとアイエフを見た。『敵か味方か』の議論はアイエフが始めたも同然であったのだが、何とも言い難かったので苦い表情を見せて視線を送るに留め、一行がとりあえず一時の落ち着きを見せた。

ようやく話しかけられると少しご満悦な表情を見せる車掌に全員が奇異の視線を浴びせて、車掌が打ち碎かれたように死んだ魚のような目をして運転車両に戻ったところ、同僚から同情的な言葉を掛けられて車両の隅っこで体育座りの格好をしてしまったのだがあまり深く掘り下げるようなことでもないのでこれ以上は語らない方がよいだろう。

さて、一度落ち着いたはいいいものの、ふと思いついてみると誰一人として彼に関するこれといった確証を持った情報がないのである。ふとそこでキラが「うむ……」と短く呻り、それからずっと感じていた違和感を思い返して首を捻る。

「……そもそも、本当に初対面なのか？」

「……どういう意味？」

それを聞いていたネプギアがこくりと小さく首を傾げて見せる。

キラはネプギアに問いに一度、深く頷いてから記憶を整理して発言する。

「これは俺の直感なので、信じられないのなら聞き流して貰っても結構です。もしかしたら俺は何らかの場合にあの男と会っているような気がするんです」

「つまり、ずっと前に会ってそのまま覚えていないってこと？」
日本一の言葉にキラが首肯し、日本一が前に乗り出していた体勢を戻して腕を組み、難しい顔をした。

アイエフも顎に手を当て、眉間にシワを寄せて小さく何度も頷く。
「確かに、顔も隠れていたから既に誰かと面識があったとしても気付かれる事じゃないわね……。仮にそうだとしたら、いったい誰かしら？」

アイエフが言うと、がすとが発言する。

「まあ、仮に敵対する意志があるとするのならがすと達の中の誰かに恨みがある、っていうのが一番可能性が高いんですの」

「でも、それじゃあ俺達をわざわざ助ける意味がないよね？ 恨みがあるのならあの時に見捨てておけばよかった話だし」

キラが言うと、がすとは納得するように頷いて黙りこくった。

「もしかして、私達と同じ目的があるんじゃないですか？」

コンパが言うと、日本一が首を横に振って反論してくる。

「それこそ敵対する意味がないでしょ？ それに私達と知り合いだっという話からズレてるし」

「そもそも、私達とあの人って顔見知りなんですかね？」

などと、ぐだぐだも事こまで及ぶと感動すら覚える、と本来なら近所迷惑であろう周囲の乗客達が妙な者を見る視線を向けていた。とても立ち聞きするような危害はなかったにしろ、ここまで大声を張り上げられると嫌でも耳に入ってくると苦笑を見せる。果敢な乗客ならば注意をしに立ち上がりそうなものだが、ここには果敢な乗客はおらず、また会話の内容があまりにも物騒だったのでそこに関しては黙っていた。

と、これ以上の議論は体力と知恵の無駄の水掛け論、そして見え透いた安い結果だと思い直したアイエフが保留の指示を下し、窓の外にタイミング良く見えてきたラスティションの街を一瞥して、ふう

と小さく嘆息した。

それから数分の後、列車がラステーションの中央ターミナルへと到着し、一行が再びラステーションの地に降り立つ。

キョロキョロとネプギアが周囲を見回して、キョトンと首を傾げる。

「あれ？ リーンボックス行きの列車は、今日は出てないんでしょうか？」

「何言ってるのよ、リーンボックスは列車じゃなくて船よ」

アイエフがフツと息を継いでそう説明した。

大陸変動で、確かに4つの大陸は前と比べものにならないほど接近し、そして移動にもかなり便利になったが、リーンボックスは何故か繋がることはなく離島のままであった。とはいえ、移動にもさして時間はかからない。定期便のフェリーでせいぜい二時間程度と言ったところだ。

アイエフが手元の携帯でラステーションの定期便の情報をチェックする。今から港まで約二十分程度だとしても、それまで一時間ほど時間に余裕がある。どこかで暇を潰しておいた方がいいだろうかと考え込むアイエフの横からキラが声を掛ける。

「時間があるなら港の方で潰しませんか？ アソコ、結構施設とか充実してますし、暇にはならないと思いますけど」

「そう？ なら行きましようか」

アイエフがぽこんと携帯を閉じ、一行は連れだって港の方へと向かう。

それから二十分後、無事に港へと到着した一行、アイエフとコンパが搭乗券を購入してくるとパーティを一時離脱、日本一とがすとは各々そこらの興味をそそる店舗へと散らばっていったので、何となく自由時間的な雰囲気が流れ始めたのでキラとネプギアが互いにチラリと視線を交わしてから苦笑を見せる。

「と、とりあえず飯でも食いに行くか……？」

「あー、うん。そうだね、そうしよっか」

二人きりになると途端にぴったりと静かになって、キラの心臓の音

が響いているようにも感じられて、キラは思わず顔を背けながら言う。

ネプギアはこくりと鷹揚に頷き、キヨロキヨロと周囲のレストラン等の飲食店の店舗を探す。

ネプギアがその一角にある洒落た外装のレストランを指し、そこに行こうと言うのでキラもそれに頷いてそちらへ歩いていこうとする。と、

「……ッ!？」

ネプギアがおもむろにキラの右手をはしつと掴まえて彼女の身体の方に引き寄せてくる、ビクツと肩が震えて思わずキラがそっちへと目をやる。

ネプギアがその場から動かずに、ジッとキラの方を見つめてくる。段々と頬が火照ってくるのを感じながら、キラがその場に立ち尽くした。

「……」

威圧感とも言えるネプギアの視線、それにキラが釘付けにされる。思わず喉を鳴らして唾を飲み込み、恐る恐る口を開いてみる。

「あのさ、ネプギア……」

「……なに？」

と、ネプギアの名前を呼び、そして彼女が返事をしたところでキラの心臓が再び大きく跳ねる。

そう言えば――と、その言葉を口の中に押しとどめて、言葉を探してキラがフツと息を吐いてから口を開く。

「ルウィーで言ってたこと……」

「うん……」

もう一度、ネプギアが頷いてみせる。

ルウィーの教会で聞いた、ネプギアの言葉……なんだかんだ言っただけとキラの心に駐留していた曖昧な感情。

キラの心臓はどつきんばつくと最高潮の動きを見せており、心なしか唇も震えているようにも思えたが、ともかくキラは心を落ち着

かせるように一度目を伏せってから頬に流れた汗を拭って口を開――こうとしたところでがくと身体が大きく揺れた。

「う、ええ!？」

背中に大きな衝撃を受けて、キラは身体のバランスを取ろうとしたところで足を踏み外した。

そして、そのまま前のめりに倒れ――

「え……?」

正面に立っていたネプギアを押し倒し、

「どわっ!!」

地面へと、ネプギア諸共ダイブした。

それから暫く、ジンジンと額が痛んだ。どうやら倒れ込んだときに地面に打ち付けたらしく、鈍い痛みがキラに襲い掛かっていた。

痛みに表情を歪め、ジンジンと痛む額を左手で押さえながら、何とか身体を起こそうと右手を地面に突こうとする。

だが、そこでキラの右手の平にむに、と異常に柔らかい感触が触れる。

ようやく痛みが薄れてきたとキラが恐る恐る両瞳を開いて現状を確認しようとして、そこでキラが大きく目を見開いた。

「……」

ネプギアがうつすらと両頬を朱く染め、仰向けになって倒れている。そして、キラが伸ばした右手は迷うことなくまっすぐに彼女の胸に伸びていた。

「……ひっ!」

ようやく事態を悟ったキラが急いで身体をどけようとして、そこでもようやく自分の腰に何かが掴みかかってきていることに気付く。

狼狽を隠せないまま、キラがそのままの体勢で顔を背後に向ける。

そこには――

「久しぶりね、キラ!」

屈託のない、眩しいくらい笑顔を浮かべた少女。

肩まで伸びる黒い髪、印象的にまとめ上げられたツインテール、ブ

レザーを模したような衣服を身に纏った、そして何より幼さを少し残したような、気の強そうな表情をした少女がキリツとキラの顔を覗き込んでいた。

「ゆ、ユニ……?」

キラが確認するように名前を呼ぶと、ユニが大仰に頷いてようやくキラの腰に回していた腕を解除して地面に座り込むようにして話を続けてきた。

「久しぶりね!」

「お、おう……。二週間ぶりくらいか」

と、そこで『挨拶してる場合か!!』と思い直したキラが急いで体勢を立て直して、ネプギアの横にどっかりと身体を移動させて、腰を地面に落とす。

ようやく視界が開けたネプギア、そしてキラの身体の所為で姿の見えなかったユニが互いにばっちりと目を合わす。

暫くヘブン状態にあったと思われるネプギアが、スツと静かに上体を起こし、まじまじとユニの姿を眺め取ってから、次にキラの方に視線を向ける。

対するユニもジロジロとネプギアの全身を見取ってから、流れるようにキラに視線を向けてきた。

その動作の様は、まったくと言っていいほど同時に為され、キラはその仕草にどうにも嫌な予感がしてならなかった。

「なんで、ここに?」

ユニがむっとしたような声で言う。

その言葉が発せられ、キラの肩がビクーツと大きく震えて全身がくまなく汗だくになった気分であった。

「私がいたらダメなの?」

「ダメじゃ、ないけど……」

とは言うが、確実にこの雰囲気は一触即発。

この二人はこんなに仲が悪かっただろうかとキラがそう思う。だが、二人がこんなに不機嫌なのはもちろんのことキラに理由があるので

ある。

いい雰囲気邪魔しやがって、と思うネプギア。抜け駆けしやがって、と思うユニ。

互いに唾棄するような素振りを見せた後、スッと無言で立ち上がった。

＊

――そして、冒頭に至る。

思えば、少し前にラステイションを訪れたときだってこんな感じだったなと思い直したが、ネプギアもユニもいったんの落ち着きを見せていたのでキラが油断していたと言えそうとも言えなくもない。と、そこで流石にこの雰囲気はよくないと思ったキラが、半ばヤケクソ気味に上ずった声でピッと指を立てる。

「そ、そういやさ、ユニは何でここにいるんだ？」

思えば、キラの疑問も最もだっただろう。

何せユニは候補生とは言え、ここラステイションの女神であり、本来ならこちらの教会に身を置いているはずである。ましてや、他国へと繋がる港にいる、いくらここが使い勝手の良さそうな施設であったとしても郊外のこの場所にいるというのはかなり気の惹かれる状況でもあった。

ユニは「ああ……」と、キラの方に視線を向けてこくりと小さく頷く。

「リーンボックスに用があって、少し出るのよ。そういうアンタ達はどうなの？」

ピッとキラとネプギアのちょうど中心あたりを指さしてユニが問うた。

「私達もリーンボックスに行くんだ。あとはそこにいるゲームキャラクターさんだけだからね」

「ふうん……？」

ユニがジロリとネプギアを見てから疑問そうな呻きを漏らした。

ゲームキャラのことならユニも知っていそうなものなのだが、そんな反応が見られないと言うことは、ユニは恐らく別の目的でリーンボックスまで行くのだろうかとかキラが疑問を抱く。

「ユニはどうしてリーンボックスに行くんだ？」

キラが両手を広げて、おどけた調子で問い掛けてみる。

ユニがジロツとキラを一睨みしてからフツと息を継いで、腰に手を当て呆れたような物腰で告げる。

「政府の重要機密事項よ。やすやすと他人に話せないわ」

「そうか……」

キラが珍しくショボーンとしたのでユニがグツと言葉を詰まらせて、キラの姿をジロジロと眺めて何かを葛藤している様子だったが大きく溜息を吐き、それから髪をかき上げてから半眼になって言う。

「ま、まあ……問題ない程度なら話してあげるわ」

「マジでか!」

パツとキラの顔が明るくなる。

次いで、キラの尻の辺りに激痛が走る。

「いつ……!?!」

声にならない悲鳴が漏れ、ユニが首を傾げる。

それもそのはず、ユニから見えない位置でネプギアがぎゅうううううううううう、と万力の如き力でキラの尻の頬を抓っており、少し女神の力も解放しているようにも見えたのでキラはもう涙目である。

「ツ~~~~!」

そんな反応を見せるキラにユニが奇異の視線を送るが特に気にした素振りも見せないでユニが重々しい表情になる。

「ケイからの指示でね、リーンボックスのシェアを集めてくるのよ」

『『『は……?』』』

ユニの言葉を半ば聞き流そうとし掛けていた後方陣も思わずユニの言葉に耳を疑ってそんな言葉を零した。

次いで上擦ったアイエフの言葉がユニに降りかかる。

「あ、アンタ……自分が何言ってるか分かってるの？」

「……まあ、ね」

アイエフに向けてユニがジッと睨む。そう言えば、ユニはまだアイエフ達とは会ったことがなかったかとキラが思い直したが、しかし今はそんなことはさしたる問題でもなかったのである。

「シエアは女神の力の根源……、それがなくなることが何を意味するのか分かってるの？」

「そりゃあ、私だって一応は女神だもの……、それくらい分かってるわよ」

と、そこでキラがはたと思い直す。

そう言えば、女神へのシエアがなくなるとどうなるのか――、それはキラはよく分かっていなかった。女神への信仰がなくなると、女神が力を発揮できなくなる。すると、どうなるのか、それは結局、有耶無耶のままである。

難しい顔をして小さく呻ったキラが恐る恐る口を挟む。

「そう言えば、女神様への信仰がなくなったらどうなるんですか？」

「ん……、そう言えばアンタにはまだ説明してなかったわね」

アイエフがこほんと咳払いをし、重々しく語り始める。

「シエアが女神の力の根源、ってことはもちろん分かるわね？」

「それはもちろん」

ネプギアからさんざ聞かされた話なのでキラはもちろん分かっている。ゆっくりと頷き、アイエフはそれに満足したのか更に言葉を続ける。

「女神って言うのは、それぞれの国家そしてその地を守護する任がある……。けれど、女神がそれを全うできないとしたら？」

「えーと……」

「辿るは破滅……、ですの」

「正解」

ピツとアイエフががすとを指して、何の事も無げに言った。その言葉にキラは思わず息を呑み、目を見張る。それもそうだろう、

何せ今まで生きていた世界、それは破滅とは何の縁もないと思っていた世界であるからだ。

いや、もしかしたら認めたくないだけなのかもしれない。形あるものはいつか壊れゆくもの、それは大陸とて同じ事だろう。だが――

「そんなこと、現実味がないですよ……！」

「でも、それだって既に証明されていることなのよ？　今更、私達がどうこう言っただって変わる結果でもないわ」

「ゲームギョウ界は女神様の守護の力で形状を保っているです、それがなくなったら……がすちゃん言うとおり、待つのは破滅だけなんです」

心なしか、コンパの声も沈んでいるように思えた。いや、きっとそうなのだろう。

「考えるだけでもぞっとする話ね……」

日本一も怖気を振るうように肩を抱いてぶるりと大きく震えて顔を青ざめさせた。

だが、問題とするのはそこではなく、話を戻すようにアイエフがジロツとユニを睨んでから半眼を作る。

「で、リーンボックスのシェアを集める、とか言ったわね……。そんなことを命じるなんてラストেশヨンの教祖様は正気なの？」

アイエフが皮肉たっぷりにそう言うのと、ユニがむぐぐと喉に息を詰まらせたように呻いてから頬に冷や汗を垂らす。

「正気……、であるとは思うけど」

ユニがふいと自信なさげに顔を背けて言った。

何せあの性格である。自分の目的のためならば多少の犠牲なものともしない様子であつたし、キラはいささか不安になる。

顎に手をやり、宙を眺めて小さく呻った後にキラが難しい顔つきになる。

「とにかく」

ビツとアイエフがユニに向けて人さし指を突きつけて腰に手を当て

て、真剣な眼差しをしてジロリと睨む。

「いくら他国のこととはいえ、関与しないわけにはいかないわ。いくら私でもそんな横暴は認めないわ」

「私に言わないでよ、文句ならケイに直接言ってよね！」

負けじとユニがビツと指を突きつけて言う。

アイエフが目を細め、いやーな笑みを見せると偉そうに腕を組み、口の端をつり上げて顔に影を作り、鋭く目を光らせる。

「いいわ、そこまで言うなら……ラストেশヨンの教会に行きましようか？」

「ええー……」

キラが凄く嫌そうな顔になる。それと同時にユニとアイエフは何か相性が悪い様子であることがキラの脳裏の片隅に思い至ったのだが、思ってもどうにもならないし、今は何を言っても聞いて貰えそうになかったので黙した。

と、ぐだぐだと遠回りな思考をしていて忘れていたが、キラはハッとなって制止する。

「だ、ダメですよ！ もうすぐ船が来るんですよ？」

「む……」

アイエフが携帯の時刻に目を落とし、キラの言うとおりに船が来る時間が既にそこまで迫っていることを改めて確認してから、微妙な表情になって眉をしかめた。

暫く逡巡のようなものを見せてからアイエフが「あー！」と奇声を張り上げて後頭部をくしゃくしゃと掻きむしり、頭を抱えるようにして身体を反らせた。

「仕方ないわね……、この件については後回しよ。今は一刻も早くリーンボックスに向かわないといけないし」

と、アイエフがそれを言うと同時に発着場からボォーッと船の汽笛の音が響いてくるのであった。

急いでチケットを購入し、船に乗り込む一行。

何故かユニが同行してきたのでキラがユニの方を振り返って苦笑い

をしてみせる。

「どした？」

「だから、私もリーンボックスに行くんだってば！　行き先が同じなんだから仕方ないでしょ！？」

寧ろ聞きたかったことはそういうことではなかったのだが、ユニのあまりの剣幕にキラがたじろいでそれ以上の追求はやめた。

兎にも角にも、これから二時間はゆったりと船に揺られての気楽な旅である。思わずキラの口から笑みが零れる――が。

「ねえねえ、キラ。そのカフェでお茶しようよ」

ネプギアがするりとキラの右腕に絡まって、そう言ってくる。

それを目撃したユニが「はっ！」とか呻ってから、閃光の如きスピードでキラの開いている左腕に身を寄せてくる。

「き、キラは私とお茶するのよ！」

ユニの言葉にネプギアがむっと頬を膨らませて視線を鋭くさせる。

「キラは私の方がいいよね？」

「へっ？」

「キラ、私とお茶するのよ！」

「うえ？」

両方向からの鋭い問い掛けに、キラが思わず冷や汗を流す。

「えっ、と……」

苦笑に留まっていた表情が次第に困惑に満ちていく。

チラと残るパーティの一同に視線を向けると、アイエフが首を横に振ってから各々が自由行動と言って散らばっていつてしまっていた。完全孤立、四面楚歌、キラは泣きそうになった。

そして、そんなキラの悲鳴を掻き消すように、船の汽笛は無情にも出発の合図を鳴らして旅立つのである――。

「どうしてこうなるんだあ――――――ツ！！」

しかし、これも自業自得というか何というか、ともかく他人が口を挟めた状況でないと言うことだけはどこの誰が見ても明白であるのだった。

だが、そんなことを知らない人々は、美少女二人にお茶をせがめるキラの姿を親の敵のように睨みつけていた。

——死刑確定である。

EP. 34 [MEET AGAIN]

——ラストイションを発ち、約2時間後

ここでは色々とムフイベントがあったようななかったようなやっぱりあったと見せかけてのなかった感じのようなものだったのでここでは割愛とさせて頂く。

リンボックスの港にフェリーが辿り着き、そろそろと降船する人々の群れの中にその一行の姿はあった。

と、その中の少女の一人——アイエフがジロツと背後のたった一人の少年——キラに向けて同情的な、悲哀に満ちたような、余計なものを見るような何とも言えない曖昧な色を含んだ視線で睨んだ。

しかし、キラはその視線に気付くこともなく、というかも周りなんて見ていないんじゃないかと言えるくらいにフラフラになっていて、瞳も何だか虚ろだった。

だが、それも無理からぬものであったかもしれない。

それを証明するのは彼の背後にまるで死神のように、はたまたは付き人のように、そしては守護霊のようにも思える動きでびったりとくっついて船から下りてくる二人の少女のお陰でもあった。

結局のところ、二人のキラを巻き込んだ小競り合いがこの二時間、隙なく続けられておりキラの鍛えられた精神力であってもガンガンと削り取っていったためだ。

だが、もちろんのことアイエフはそんなことは知らないし、例え知ったとしても彼の自業自得なのでどうということもないのであるが、ハア、と大きめの溜息を零してアイエフが腰に手をやり、港のロビーで集合を掛けてからジロツと再びキラを睨んだが、それには先程とは違い冷たい温度を帯びていたので流石にキラも復帰して背筋を張った。

「ホント、しっかりしてよね。いくらアンタでも死なせたら責任問題なんだからね」

「はい……」

そういう問題か……とキラが内心でぐったりしつつ、アイエフの言うとおりで自分も気を引き締めねばと思い直して、気持ちを入れ替えるように大きく息を吐いてから二時間ぶりに瞳に火を灯した。

それを見て、「まあいいわ」と発したアイエフが小さく呻った後にロビーの端に据えられているリーンボックス全体と港周辺の街の地図を覗き、教会の場所をしっかりと確認してからふむ……、と言葉を漏らす。

「やっぱり、ゲームキャラさんの居場所を聞くには教祖様の方がいいですか？」

コンパが問うと、アイエフは深くゆっくり首肯する。

「そうね……。まあ、ゲームキャラの居場所を知っているのは各国の女神様と教祖様くらいだし、それが一番確実に手っ取り早いかもしれないわ」

アイエフが顎をしゃくって言い、それに呼応して日本一も言葉を発する。

「じゃあ、これから教会に行くの？」

「ん……。まあ教会の都合とかもあるから、情報が得られるとは確定できないけど行くだけ行ってみましょ？」

ピツとアイエフが施設の出口の方を指しながら言った。

キラもそれに首肯して、ふと背後のユニの方に向き直り、飛びつこうとするユニを邪魔するネプギアのひとしきりの小競り合いを見届けてから問う。

「それはそうと、ユニ？ お前は自分の仕事はしなくていいのか？」

「……あ」

今まで成り行きで付いてきていただけだったのだが、それにしても己の仕事の本文を忘れていたらしく、短くそんな声を漏らす。

「恋は盲目、ですよ」

がすが補足をするようにそう言ってきたが、案の定というかキラは頭上に疑問符を浮かべて首を捻るのみに留まった。

まあ、それにしても施設を出るという目的は同じわけであり、そこまですぐに進んでいく。

外に出てまずは他の国とは陽気が違うことが、肌で感じ取ることができた。

照らす日光も何だか他にはない暖かみを感じたし、パツと街並みを見てみれば街路樹もきっちりと整備されていて、まさに理想の街並みを描いたような場所である。

それからキヨロキヨロと周囲を見回せば、近代的な建物のまわりにも青々とした樹林が広がっているとところも見られる。地図にもあったが、ここリーンボックスは都心やその周りに街が広がっているのみであとは森林地帯など自然の姿を残した場所が多く、かつて『雄大なる緑の大地』と呼ばれただけのことはあるかとキラは感心した風な声を零してから腕を組んだ。

そんなキラの横でアイエフが大きく深呼吸。

「んー、やっぱりいつ来てもリーンボックスは心地がいいわね。流石、グリーンハート様が守護してるだけあるわ」

「へ？ 守護とそういうことに関連があるんですか？」

キラが疑問を口に出すと、アイエフにしては珍しくビクーツと大きく身体を揺らしてからアハハ……と乾いた笑いを見せる。

「い、いや……その、何というか、ね？」

「はあ……」

その挙動不審っぷりにコンパ除く全員が不審感たっぷりの眼差しを浴びせたが、ともかくとアイエフが仕切り直したのでそのことについてにはもう忘れた。

「今は教会に行くことが先決よ、こんな無駄な話をしている暇はないわ」

ということ、一行が教会へ向けて足を向けたところで――

「うおおおおおおおっ！ どけどけえ！！」

などという怒号にも似た叫び声が、キラ達のちょうど右サイドの方から駆け込んできた。

何事だと全員がそちらの方向へと視線を飛ばして、そして目を見張った。

何故なら――。

「下っ端!?!」

「だから下っ端って呼ぶんじゃネエ!!」

下っ端は走りすぎ様にネプギアへ向けてそうツツコミを入れると、一瞬だけ一行を眺めてから迷った風な表情になった後に遙か後方へと向き直ってから舌打ちをして再び走り去っていく。

それを呆然と眺めていたユニ含む一行。

それに次いで

「ツ――!」

「へ?」

キラの背後から、女性のものと思しき呻きにも聞こえる声が降りかかる。キラが思わず背後にゆっくりと振り返り、直後に全身を襲う痛みとアイエフよりも少し年上程度だと思われるような女性の姿を視界に入れた後にキラは仰向けに地面に叩き付けられた。

「ツ……!」

閉じていた瞳を恐る恐る開き、現状を確認しようと試みたものの、はつきり言ってしまうえばキラの視界には何も映っていなかった。

「……?」

眉根を寄せ上げ、もぞもぞと真っ暗な視界の中で左右に眼球だけを動かしてみる。

すると、視界の端に肌色の太めの棒のようなものが映っていた。

キラはますます混乱したような表情になって、それからようやく自分の身体が重たいことに気付いた。

ただ単純に、身体が怠いだとかそういうわけではなく、寧ろ何かが上に乗っているようなそんな感覚である。

「んなっ……」

「ふわあ……」

「へえ……」

「あー……」

アイエフ、コンパ、日本一、がすとの呆けたような言葉が順々にキラの耳に入り、それからピシとまるで電気が弾けたような音が鳴る。
(これは……)

恐る恐るまた眼球だけを上に向ける。

そこにはいやゝに爽やかな笑顔を見せ、そしていつの間になら女神化し、プロセッサユニットを纏わせた奇跡、パープルシスターとブラックスターが武器を構えてキラを見ていたのである。

やはり、何度も女神化に立ち会ってきていたキラにとって、この肌を刺すようなそれでいて心地の良い感覚は覚えているものであった。だが、どうして彼女たちは女神化をし、そして自分に向かって武器を構えているのが、キラにとっては理解できない事象である。

「うう……」

ふと、キラの足下の方で女性と思しき声がある。

落ち着きを持った、クールな声。それがキラの見えない位置から発せられたかと思うと、不意にその言葉が途切れる。

そして――

「むぐっ!？」

キラの目の前にあった漆黒の物体が更にキラの顔に接近、あわよくば接触してきたのでキラは流石に呼吸が困難になる。

と、それと同時に柔らかな感触が顔全体に広がってくる。

その事態に、キラは脳味噌がぐるぐると溶けて、スープになってしまふのではないかという感覚になってくる。

「ん……?」

と、キラの頭上で女性の声が聞こえ、次いでキラの視界がクリアになっていき、ようやく外の世界を確認することが可能になった。

そこには、キラの顔を挟むように足を立てた一人の赤毛の綺麗な女性、キラのことを見下ろしていた。

暫くキラが女性を真下から見つめ（決して比喩的表現ではない）、そしてキラの顔がぼんつと真っ赤になる。

「な、なななななななななな……！」

状況を悟ったキラが赤面したまま、ずざざつとその場を脱してから女性へと指をさしつけて口をパクパクと開閉させ、それからギギギ……と背後を振り返って冷や汗を流した。

「キラ……？」

「召される準備は、できたかしら……？」

「ま、待て！ これは不可抗力というか、完全にじk——ぼごあつ！？」

キラの言葉も聞かず、ネプギアとユニが同時にキラに向けて拳を叩き込み、キラの華奢な身体が吹っ飛ぶ。

女性はぽんぽんと服や身体に付着した砂などの汚れを払い落とし、全身を確認してから目の前に起こる惨劇をぼうつと眺めて口を開いた。

「ご免なさい。私が前を確認していなかったから……、怪我とかはなかった？」

「はい……」

ぐったりとした様子でキラが女性の問いに答えた。

既に制裁を受けた直後で、喋る気力もないように見えたがそんなことはなかったらしい。

というか、現在のキラは絶賛ボロボロなのだが、これは彼女とぶつかったのではなく、ネプギアとユニにボコボコにされた所為であった。

数分してようやくダメージが薄れてきたキラがヨロヨロと覚束ない様子で身体を起こそうとしたのだが頭の上からネプギアに足蹴にされて蛙が潰れたときのような声を上げながら地面に突っ伏した。

「随分と急いでるみたいだったけど、何かあったの？」

キラが何もものを言える様子ではなかったため、アイエフがそれに代わって女性に何かを問い掛ける。

女性は相変わらず表情を変えず、チラと先程に下っ端が掛けていった方向を見やってから腕を組む。その際、彼女の胸元の巨大な柔肉の塊が腕に乗って、ものの見事にバストが強調されていたが女性はそれを気にしていないのかはたまた気付いていないのかは分からないが、キラが朱い顔をしてそれをぼうつと眺めていたらユニによって両目を潰されてもんどり打っていた。

「犯罪組織の構成員を追っていたの。見かけた以上、こちらとしても捨てておくワケにもいかなかったから」

「構成員……、ってさっきの下っ端？」

「下っ端って言うのね……、変な名前だわ」

女性は疑ることもなく、ぽつりとそんな感想を零した。

それはそうと、暫くゴロゴロと転がってようやくダメージが抜けてきたようなキラが涙目で目元を押さえながら立ち上がる。特に彼女たちを咎めようとしめない辺りキラらしいと言うか何というかというところだろうが、今は特に気に留めた様子もなく遥か下っ端が去っていった方を見やって肩を落とす。

「でも、逃げられちゃいましたね。俺の所為で……、スイマセン」
しょんぼりしつつ、キラが深々と頭を下げる。

女性はややあって小さく首を横に振ってから、薄くキラに向かって微笑みかけて気にしていないと言うような表情を見せる。

「いえ、元はと言えば私の前方不注意から始まった事故だし、貴方が気にすることではないわ」

「でも……」

キラがしょんぼりすると、女性はスッと右手をキラの頭の上にまで持ってきて、まるで小さな子供を相手にするようによしと撫でてくる。

その行為にキラの心臓がドキリと跳ね、自分でも分かってしまうくらいに顔が真っ赤になっていた。

一頻りそうした後、女性は手を引っ込めてから微笑みを見せ、それから引っ込めた右手を胸元に当てゆっくりと抑揚のない声で唇を上

下させる。

「そう言えば、自己紹介がまだだったわね。私はケイブ。リーンボックス特命課の一員よ」

「あ……、私はアイエフ。一応、プラネテューヌの諜報部員をやっているわ」

「プラネテューヌの……。遠いところからわざわざご苦勞様」

そう言ってアイエフとケイブが握手を交わす。

「私はコンパですう」

「私は日本一よ！　よろしくね！」

「がすとですの」

各々挨拶をしたところでキラもきゅっと口を噤んで、動悸を沈めるように大きく吐息してから口を開く。

「俺はキラです。よろしくお願いします」

「私はネプギアです」

「ユニ、よ」

全員が挨拶を終え、それからケイブが「ふむ……」と呻ってから顎に手をやり、何やら考え込むような様子になる。

それからピツと人さし指を一本立てて、意外そうな表情をする。

「思ったのだけれど、どうしてプラネテューヌの政府の人達がリーンボックスにいるのかしら？」

「え？　え、えーと……」

アイエフはそう言って頬を掻き、明後日の方向を見やる。

流石にそんな質問をされるとは思っていなかったらしく、また状況を説明するのも何だか気が引ける。

そんな悶々とした感情の中に一同が浸っていると、それを察してくれたのかケイブが声のトーンをやや下げ、神妙な面持ちで訊ねてくる。

「もしかして、政府首脳の間的重要な話があるのかしら？」

「そ、そんなところですよ」

よき解釈をしてくれたとコンパが大仰に頷いてみせる。

まあ、ケイブの言うところは本当のことなのでどうこうという話でもなかったのではあるが。

それからまたケイブは低く呻り、チラとリーンボックスの街並みの中心にあるテーブル状の建物を見やってから首を小さく傾げて言うてくる。

「もし、急ぎの用であれば私が話を通しましょうか？」

「……いいの？」

日本一が問うと、ケイブは薄く笑んでこくりと頷いた。

「一応、教祖様や教院長達とも見知った顔ではあるし、外交的な会議であればすぐに設けてくれると思うわ」

一同は一度、互いに顔を見合わせる。

だが、この話に乗らない手はないだろうと思い直してケイブの申し出を快く受けさせて頂いた。

☆ ☆ ☆

ユニとはこの間に別れ、一行は教会の方へと出向く。

教会の建物は外観こそ違うものの、中の作りはまったく変わっていないので何となく懐かしい感じがする。

「それじゃあ私はちよつと奥の方で話をしてくるから、少しの間だけ待っていて貰えるかしら」

「あ、助かります」

ケイブはそれに小さく言葉を返すと、受付の横に立て付けられている職員用の扉から奥の方へと消えていく。

だいぶ歩いたので軽く疲れでも溜まっていたコンパとネプギアがロビーのベンチに腰掛け、リラックスした雰囲気が一同の間に流れる。

「ん、他の国ではトラブルに巻き込まれて大変だったけど、リーンボックスでは意外とスムーズに事が運ぶかもしれないわね」

主にトラブルの主であるキラやネプギアに向かって皮肉っぽく言ってみせるアイエフにトラブルの原因達がうっと呻ってから肩をすくめる。

その反応を見てさぞ愉快そうに笑ったアイエフが「冗談よ」と言っ
て一蹴して見せたが、あんまり目は笑っていなかったのでキラとネ
プギアが揃って背筋を凍らせた。

「ともかく、一刻も早くリーンボックスのゲームキャラの力を借り
て女神様を救出するんですの」

がすとの言葉に全員がこくりと頷く。

――と、

「皆様、大変お待たせいたしました」

いつの間に背後にいたのか、男性の声が降りかかって全員がそちら
の方向へ向き直る。

パツと見た感じ四、五十代くらいだろうか。厳格な雰囲気醸し出
す表情に、神官のような格好をした男性が恭しくキラ達に向かって
頭を垂れていた。

それからスツと男性が顔を上げ、にこりとその厳格な顔つきとは裏
腹に人の良さそうな笑みを見せて男性が口を開く。

「私は、こちらの教会で教院長を務めさせて頂いております。イヴ
オワールと言う者です。以後、お見知りおきを」

「はぁ……どうも」

簡単な自己紹介を互いに済ませ、するとアイエフが腕を組んで偉そ
うにフフンと鼻を鳴らして笑った。

「お久しぶり……、って言うべきかもね」

「そうでしょうな。かれこれ三年ぶり、といったところでしょう」

「三年前は随分と世話になったわね」

皮肉を込めたような口ぶりでアイエフが言うと、イヴオワールは大
仰に肩をすくめ、嘆息のように息を零して苦笑を見せる。

二人の間に随分とギクシャクした関係があることが見て取れる。

思わずキラだけでなく、ネプギアや日本一までもがこくりと息を吞

んでその状況を見守っていた。

それからイヴォワールはフツと笑みを見せ、スツと奥へ続く扉を指して言う。

「昔話はこの程度にして……、教祖様がお待ちです。どうぞ、こちらへ」

アイエフはそれに頷いてずんずんと大手を振ってロビーを横断し、その扉まで歩んでいく。それに連なってキラ達も慌てて彼女の後を追う。

それから豪勢な装飾の付いた廊下を進んでいき、暫く行ったところで先程に見たケイブの姿があった。

「こっちよ」

ケイブは一同が自分の手前まで来たことを確認してから、手招きをしてスツスツと教会の廊下を慣れた調子で進んでいく。

それからケイブが半身をやや後方に向けて、苦い表情のまま言うてくる。

「一応、最初に言っておくけれど……あまり驚かないでね」

「へ……？」

ケイブの予想だになかった言葉を受けて、キラが意図せずそんな素っ頓狂な声を上げ、目を丸くする。

ワケが分からないと言った風情で一同が揃って首を傾げると、ケイブは苦い表情のままもう何も言わなかった。

そこはかとなく嫌な予感しかしなくなった一同を余所に、教祖がいるという一室が見えてくる。それからキラはむつと眉をひそめた。

「医務室……？」

とてもじゃないが、教祖がいるとは思にくい部屋。

キラと同じようなことを思ったらしく、その横でネプギアも困惑に満ちたような表情をして扉の脇に掲げられているプレートに向かって熱烈な視線を送っていた。

ケイブが扉の前に立ち、コンコンとノックをして何事かを言う

『どうぞ』

と、扉越しにくぐもった声が聞こえてくる。

ケイブが目配せをして入っていいことを指示したので、キラがごくりと息を吞んでからノブに手を伸ばし、一思いに押し開けた。

そして――

「うわっ……」

小さく悲鳴を零した。

パツと部屋全体を見回し、ベッドは一つしかないところを見るとどうやら個室のようだったが、それにしたってこれはヒドイ。キラの感想はそれしか出てこなかった。

それもそのはず、壁全体には幾つものポスターが飾られ、それに留まらず掛け布団も、抱き枕も、あわよくばカーテンも、天井から、何もかもが一人の女性のグッズで埋め尽くされていた。

そして、もつと言うなら目を引くのは何よりベッドの上で抱き枕を抱えて絶賛恍惚とした表情を浮かべている一人の女性の方がキラとしては気になった。

そういうことか……、とキラは今、ここまで来てようやくケイブが言っていた『驚かないで』という言葉の意味が分かったような気がして、頭痛を抑えるように額を押さえた。

チラリと扉の前にいるケイブを盗みやって見ると、ケイブは何もかもを諦めたような表情になって首を横に振っていたのでそういうことなのだろう。

眉をひそめてキラがもう一度、ベッドの上にいる女性に視線を向けた。

薄く緑がかった膝までありそうな長い髪をベッドの上に無造作に投げ出して、よくよく見てみると恍惚とした表情に裏に悲しみを秘めているようなそんな曖昧な表情、それを映しているのはやけに整った大人びた雰囲気誇張させる美麗な顔立ち、軽く着崩れた衣服も気にならないくらい、女性のその行為はあまりに目立つものである。

「ううー、お姉様あ……」

と、女性が不意にそんな呟きを漏らして、まるでキスをするように

抱き枕にプリントされた女性の唇に自分の唇を近づけようとして――
「いい加減になさい」

ポカッ、といつの間に彼女の脇に歩み寄ったのか、ケイブが呆れた表情で女性の頭を小突いた。

女性がまるで気付かなかったという風に意外そうな表情をし、ケイブに小突かれた部分を涙目で押さえながら、扉の前に居並び呆然とする一同の姿をゆっくりと確認してからハッとした表情になって口元を押さえた。

「は、初めまして！ リーンボックスの教祖の箱崎チカよ」

「はあ……」

そう自己紹介されたのであるが、キラとしては先程の奇行が尾ヒレを引いているのでどうリアクションを取ろうにもできなかった。
ふと、キラの脇をアイエフがスツとすり抜けて慣れた調子で胸元に手を当て、姿勢を崩して言う。

「私はプラネテューヌ政府のアイエフと言う者です」

「え、ええ……話は聞いているわ。少し事情があって、こんな姿で申し訳ないけれど」

チカがフフツと苦笑して言う。

「チカは身体が弱いのだ。昨日も倒れたばかりだから……これで許してあげて」

ケイブが補足するようにそう言ってきたので、日本一がようやく納得した風で何度も頷いた。

話が反れ掛かったのだ、というか完全に反れたので引き戻すようにアイエフがやや強めな咳払いを零したところでチカがハツとなる。

「ど、どうでもいい話をしたわね。話を戻しましょう」

チカが苦笑を見せると、アイエフはそれに気にした様子を見せることなく淡々と質問を述べる。

「それで単刀直入に質問しますけれど……、私達は今、女神様の救出を計画しています」

「お姉様!？」

チカががばつと身を乗りだして、目の色を変えてそう叫んできたので全員がビクツとなり、チカがコホンと息を整える。

「い、いえ……お氣になさらず」

「はあ……？ まあいいです。それではそのためにはゲームキャラの力を借りる必要があるんです。この国のゲームキャラの居場所を教えていただけないでしょうか？」

「ゲームキャラの……？」

今までどこか心ここに在らずな雰囲気だったチカが眉をひそめてその言葉を復唱する。

それからケイブと何事かをごによごによと話し込んで、それからケイブが颯爽と扉の方から退室していく。

「地図を用意させるから、少し待っていて」

「どうも」

アイエフは慣れた調子で礼を言う。

それから暫くしてケイブがリーンボックスの地図を持って再び入室してくる。

ベッドに装着したテーブルの上にバサツと地図を広げて、チカが赤いペンでリーンボックス市街地からやや南方にあるダンジョンをグリグリとマークし、それからまた別の恐らくダンジョンのマップであろう方の地図にまたグリグリと赤いマークを付けて、コンパに手渡した。

コンパが地図を広げ、それをアイエフと日本一が横から覗き込む。

「ゲームキャラには事情を話せばすぐに協力してくれると思うから、何も問題はないと思うわ」

「いいんですか？」

「一応、プラネテューヌの教祖からも連絡は受けているから……。それにおね……。女神様が救出されるというのなら協力を惜しむつもりはないわ」

この国の教祖は他と違ってだいたい協力的だなとキラが内心で胸をなで下ろす。

これ以上はチカの身体に触るというので一同は礼を言っていそいそと病室を退室していった。

＊

教会から暫く歩いた市街地の中心部。

その一角にある小洒落た喫茶店の手前にある席についてアイエフがううむと小さく呻る。

「ここからだと……、だいたい歩いて一時間前後かしら？　そう考えると今日向かうのは得策じゃないわね」

チラと携帯の時刻表示に目をやってアイエフが言った。

現在、時刻は4…30。確かに今から一時間後ではすっかり日も暮れてしまっている頃だろう。そうなるこちらにも分が悪い。

幸い、ゲイムキャラの居場所はとくに分かっているし目と鼻の先なのだ。そうそう急ぐこともないだろう。

そう思ってキラがコーヒーを啜り、地図を覗き込もうとしたところで――

「よう」

背後から声を掛けられて、キラがゆっくりと振り向いた。

キラはその姿を瞳に映して、全身の毛が総毛立つような不思議な感覚が襲い掛かってきた。

「神妙な顔して、何やってるんだ？」

一見するだけで、もう一生の内ですれを忘れることができなくなっ
てしまいそうな、男生徒は思えない美麗な、それでいて剛健な顔つき。

漆黒にもよく似た髪色を薄く靡かせて、何より柔らかで頼りがいのある強く優しい笑みを浮かべて。

右手を力無く振って、フレンドリーに一人の青年が微笑みかけてきていた。

キラがごくりと息を呑み、そしてそれと同時にキラの向かい側――

アイエフとコンパががたつと椅子を大きく音を立てさせて、大きく目を見開いて青年の姿をまじまじと眺めていた。

それに気付いた様子の青年がフレンドリーな笑顔をより一層に柔らかくして、懐かしそうに目を細めて青年が言う。

「久しぶりだな……、アイエフ、コンパ」

アイエフの唇がわなわなと震え、大きく左右に揺れた声で言葉を紡ぐ。

「て、ら……？」

アイエフとコンパ、二人の中にある鮮烈な記憶。

青年は、あの頃とまったく変わらないまま、まるで我が子を慈しむような微笑を浮かべて右手を腰にやり、フツと息を継いでから大きく深く頷く。

「また会えて、嬉しいよ……」

『テラ』がそう言葉を紡いだ瞬間、アイエフとコンパはほぼ同時に彼の胸元へと飛び込んでいった――。

EP. 34 [MEET AGAIN] (後書き)

やゝ、遂にテラが出せました(悦)

というか、予想以上にテラ株が多いもんで『これは登場させねば!』
というわけで

次回からは更に波乱の予感? です!

EP. 35 [CORROBORATION]

「な、なんだよ……いきなり」

青年、テラが今し方、自分の胸元に飛び込んできてはいきなりわんわんと泣き始めたアイエフやコンパを交互に見回してそんな言葉を零して苦笑した。

それを聞き入れたアイエフがキツと視線を鋭くさせて、テラに向かって睨みつかってきたが如何せん目尻に涙を溜め、口元は弱々しくへの字に曲げられているのであまり怖いという印象は見受けられなかった。

「わ、私が……私達がどれだけ、心配したか……、分かってるの……！」

涙声ながら、途切れ途切れになりながらそう言ってくるアイエフを見やって、テラがポリポリと頬を搔いてからわしわしとアイエフの頭を撫でる。

「悪い……」

そう言った後、キラは今度はコンパの方に視線を飛ばしてからフツと口元をつり上げて笑む。

「コンパも、随分と立派になったじゃないか。聞いたぞ、プラネテユーマで看護師やってるんだって？」

「はいです……」

コンパは今にも再度泣き出してしまいそうな表情で、大仰に頷いた。その反応に満足したのかテラが大きく頷いて言う。

「そうか……、順調か？」

そう言われると、コンパが少し縮こまって声を小さくして答える。

「少し失敗しちゃうことはある、ですけど……」

「そうか。まあ、それくらいがコンパらしいよ」

コンパはまたも泣きそうな表情になって『どういう意味ですかあ……』と言ったが、その表情は今にも崩れそうで、やや歓喜を帯びて

いるようにも見えた。

そんな二人、いや三人をポカンとした表情で見入っているキラ、ネプギア、日本一、がすとの4人。

そんな一行を視野に入れて、テラが一瞬だけ悲しそうな、怒りを見せたような複雑な表情になった後、どこか無理をしているような笑みを見せる。

「こんな状態で済まない。俺は、テラ——まあ世界を旅する放浪者ってところだ。ついでに、アイエフとコンパ……日本一やがすとも顔見知りだな」

テラがヒラヒラと右手を振ってみせると、日本一が「むっ」と妙ちきりんな声を上げた後にカァツと耳まで赤くなっていくのを見ながらキラがキョトンとした表情になる。

だが、特にキラはそれに対して何を思うでもなく、ふいっとキラ達の目の前にいる、やや幼さを残したような顔つきが特徴の青年を見やってから小さく息を吐いた。

(……何だろう)

キラは小さく呻って顎に手をやって低く呻る。

何が理由かは解らなかったが、何だかテラの姿を見ているとどうにもキラの中にある感情の一部と形容すればいいのだろうか、そんな訝しげなものの抑えが効かなくなってくるような感覚が生まれてくるのだった。

暫くジロジロとテラの姿を眺めていると、ふと一つの襟章にキラは目を向けた。

(士官生……？ それにあのマーク……、プラネテューヌの……？)

テラの纏っている衣服の襟元には、赤く鈍く光沢を放つプラネテューヌの士官生である証の襟章が輝いていた。

それで少し疑問に思い、キラが恐る恐る訊ねてみる。

「あの……、少々お伺いしたいことがあるのですが」

「一応聞いておこう」

悠然とした態度で、テラがアイエフとコンパを特に気にした様子も

ないまま、無表情でそう返してくる。

その立ち振る舞いに少し萎縮しつつ、何故か急に背筋をピンと張った。

「その襟章……、プラネテューヌの士官生のものですよね？」

「……ああ」

キラがそう訊ねると、少しだけキラの表情がきつくなったような気がした。

「まあ、身を置いていたのはほんの数年ほどだ。鍛錬が辛くて、途中で辞めたがな」

どこか悲しそうな表情をして、乾いた笑いを零しつつテラがそう言った。

キラには何となく分かってしまったのだが、今の言葉は恐らく本当ではないだろう。

確証はなかったが、キラの中にある何かが『それは嘘だ』という強い否定を主張していて、キラも何となくそれを本当だと思えるような自信があったのだ。

キラがそれ以上の言葉をなくし、俯いているとようやくテラの胸元からようやく顔を上げたアイエフがずっと鼻をすすってジロリとテラを睨んだ。

「で、アンタはこの3年間……何をしてたの？」

「ん、おお……」

アイエフにそう言われて、テラが気付いたようにそう声を零す。

それから小さく呻り、顎に手をやって何やら思案するような難しい顔つきになって、数回瞬きを繰り返した後に笑ってみせる。

「まあいいや。それより『よくないわよ』あ、やっぱりか？」

より一層に眼力を強くして、アイエフが至近距離でテラを睨みつけたのでそれから逃れるようにテラが背を反らしてまた笑う。

それからそんなアイエフを宥めながらテラがそろそろ背中中の筋肉が酷使しすぎて悲鳴を上げていたので姿勢を戻して腕を組む。

「まあ、行くアテのない放浪の旅——って感じだ」

そう言って何を特に気にした風もなく言ってみせるテラに、アイエフはジロリと怪訝そうな視線を向ける。

「アンタ……知らないの？」

「何を？」

キョトンとした表情になるテラ、それから腰に手をやって小さく小首を捻ってみせるとアイエフはますます眉をひそめて表情が歪む。

「何、って……女神様——ねぷ子のことよ」

「……ああ」

テラがようやく理解できたという風に何度か頷いて、低くそう答えた。

その表情は先程とは違い、のりくらりとしたような態度ではなく、歴戦の武人のようなそんな風格さえも漂わせるような気品すらも滲み浮かぶ様である。

「そちらについての情報は得ている。こちらも、動けるだけのことはしているつもりだ」

「じゃあ……？」

日本一が問うと、テラは深く首肯する。

「ゲームキャラの力を借りることができれば、或いは女神救出に役立つかもしれないと思って教祖に居場所を聞いて行っってはみたが……、ゲームキャラが忽然と姿を消していてな」

「えっ……」

「まあ、こんな馬鹿げたことをするのは十中八九犯罪組織の仕業だろう。ただ、どうしてゲームキャラを破壊したのではなく、連れ去ったのかは謎だが……」

テラの言葉に、キラはそれもそうかと思う。

今まで、恐らく犯罪組織の命でゲームキャラの破壊の仕事をしていたと思われる下っ端は幾度と泣くゲームキャラを破壊しようと、命令通りに事を進めてきたようである。

だが、そうなる今回のこととはまた色々と辻褄が合わなくなってくる。

犯罪組織のやることは、キラ達には理解しかねる――が、連れ去ったと言うことは、何かしらの悪巧み、いや或いはもっと想像も付かないような計画の一步なのかもしれない。そう考えるとゾツとする話である。

「なるほど……じゃあ、もうこの地図は使えないわね」

アイエフが面倒くさそうにテーブルの上に広げられた地図を見やつてから大きく嘆息をした。

それを見て、テラがフツと息を継いで笑むと右手を差し出した。

「その地図は、後で俺が処分しておいてやる。それに、もうゲームキャラの場所の目処はたっているしな」

「そうなんですか？ 流石はテラさんです」

コンパが崇敬の目でテラを見る。

テラはそれに苦笑しきつて、それから一同を見回してから最後にネプギアをジロツとややきつめの視線で見た。

それにビクツとネプギアの肩が震え、やや慌てたような挙動を取るネプギアから視線を外さないまま言う。

「候補生……、プラネテューヌのだな？」

「えっ……と、はい……」

「そう怖がることもないさ……。そうか、お前がな……」

目を細めてテラがそんな言葉を漏らす。

だが、ネプギアが萎縮するのも無理からぬ事であるかもしれない。

現に、テラは口先ではそう言っているがただならぬ雰囲気というか、まるで静かな憤怒を沸々と取り溜めているようなそんな感じだ。

まるで自分自身を欺瞞で包んでいるような、嘘偽りしか見受けられないようなそんな態度でテラはまじまじとネプギアを眺めていたが、やがて興味なさげに視線をそらしてここから南方にある方向を見つめ直して顎でしゃくってみせる。

「リーンボックスの街から南に活火山がある。そこの地下に犯罪組織のアジトがある、って噂だ」

「地下？」

日本一が眉をひそめるとテラが深く頷き返す。

「ああ。随分前から念入りに作業していたようだったが……、よくもまあ政府に気付かれないうえにあんな立派なアジトを作ったもんだ」
テラが何やら飄々とした態度で、後頭部をくしゃくしゃと掻きむしりながらああ……と大きく深く嘆息した。

「アジト、ねえ……」

アイエフがジロジロと胡散臭そうに睨むと、テラは両手を左右に広げてからぐるりと楕円のような形を宙に作ってみせる。

「元来、あそこの地下には巨大な大空洞があつてな。そこを補強して人間が使用できるだけの施設を作ったようだ」

犯罪組織の勢力――犯罪組織のシェアは今現在までに止まることを知らない。こうして話をしている間にも着々とゲームギョウ界に住まう人々は、その傘下に下っている状況なのだ。ましてや女神が囚われているこの状況では政府も動きにくい。恐らくその時を狙っての計画というのなら、これは以前から計算されていたことなのかもしれない。

そう考えると、胸騒ぎがしてならない。熱く激しく震える心臓の動悸を押さえようとキラが胸に手を当てて小さく吐息する。

それからテラの言葉の意味をゆっくりと咀嚼して、それからとはたき付く。

「と言うことは……、下っ端もそのアジトに向かったんでしょか？」

「ああ……、その可能性はあるね」

ネプギアがキラの言葉に同意して頷く。

が、その横でテラが怪訝な表情になって眉間に深いシワを刻んでいた。

「下っ端？」

「犯罪組織の構成員ですよ。何でも、ゲームキャラの破壊が目的みたいですけど」

「ふうん……」

何か腑に落ちないようなものがあるような表情をしながら、テラが顎に手をやりながらそう低く呻った。

何故、テラがそんな表情をしているのかというのは言わずもがなであるのだが。

「どうする？ 襲撃、仕掛けてみるか？」

悪戯っぽく、口元をつり上げて言うテラに全員がこくりと頷く。

その反応を、まるで分かっていたとでも言いたげに笑み、テラもそれに頷き返す。

「その前に」
と。

いざ向かおうとしたところでふと、がすとがそう声を掛けた。
気になって全員が声の主であるがすとの方に向き直ってキョトンとした表情になっている。もちろんのこと、テラも同様である。

ピツとがすとが両手を胸の前につき出して、屈託のないような明るい笑顔で小さく首を傾ける。

「テラさんにはツケを払って欲しいんですの♪」

『『『……え』』』

テラはもの凄く嫌そうな顔をした。

除く他全員は苦い表情のまま、テラに向き直った。

☆ ☆ ☆

キラ達が犯罪組織のアジトの情報を得て、少し時間が経った頃。
少女は熱く照りつける日光をものともしない様子で、リーンボック

スの市街地に立ち並ぶ高層ビルの柵を越えた先から足をだらりと宙に投げ出して、ゆらゆらと上半身を揺らしながら下方を眺めていた。肩を撫でるくらいの薄い色素の髪が風に靡いて神秘的な雰囲気を感じ、やや幼めの顔立ちに無機質な色を映した瞳、タイの締められた襟元が特徴的なやや質素な印象を受けるドレスのような衣装、何より少女が放つ異彩きつたその神秘的なオーラがこの世界の中ですらも際だたせているような印象を受ける少女である。まるでリズムに乗るように小さく身体を揺らし、唇が微かに動いているようにも見える。

『思いをのせた、星一つ』

華麗な音声で、少女が旋律を奏ながら歌声を響かせる。

『そこにあるのは4つの煌めき』

下方を眺めるために俯かせられていた顔がふいっと上げられて、空を仰ぐようにしてから、少女が薄く笑む。

『それを目指すは儚き泡沫』

少女の力無く垂れ下げられていた両手がすると青く広がる天まで伸びて、まるで水をすくい取るように両手を合わせる。

『7つの光は一つになって』

やがてそれらを散りばめるように、少女は両手を宙へと投げ出して身体を一際大きく揺らして更に口元をつり上げる。

『やがて、二つの歪みが生まれ落ちるだろう』

少女は一層に目を細めて、うつすらと頭上に輝く昼の月を睨んだ――ようにも見えた。

そして、少女が歌い終わったのと同時に、少女の髪を大きく揺らしてまるで淡き間奏のようにも聞こえてきた。

フツと少女が息を継いで、再び唇を上下させようとしたところで「こんなところで何をしている」

背後から、そう低く声を掛けられたと思しき少女が、ゆったりとしたペースでくびをもたげて振り返る。

そこにはこんな真夏日とも思えるような陽光の中で、やたらと暑そ

うな黒いコートを着て、フードで顔を隠した怪しさ120%の男だった。

しかし、少女は特に気にした様を見せることもなく首をもたげたまま桜色の唇を艶めかしく上下させる。

「彼らの未来を、唄っていたの」

彼女の外見のものは思えないくらいの落ち着いた様を見せつけて少女が青年に向かっていった。

それに対して青年は興味がなさそうに視線をそらしつつ、柵を越えて少女の隣に居並んで、先程の少女の様と同じようにリーンボックスの街並みを睨みつけた。

「どうせ何も有りはしない」

「そうでもないわ」

少女はそれに物怖じをしてみせることなく、淡々と、青年のその言を確実に否定してみせる。

むっとしたように口をへの字に結んで、青年が傍らの少女を睨む。

「俺はアイツらを許すつもりはない」

不機嫌そうにそう言ってみせる青年のことを嘲笑い――いや、寧ろ微笑ましいものを見るような目つきで少女が青年を見据える。

「そうだとしても、貴方もあの子も運命にあらがえる術は、ない」

「……」

青年は深く黙りこくって、右足に体重を掛けた。

「それでも」

そして、次の瞬間にきつく紡がれた唇から、決意を秘めたような口調で青年が言葉を続けた。

それは予想していなかったことなのか、少女がキョトンとした表情をして青年を脇から覗き見る。

「俺は、この運命から逃れられる術がある、と思っている」

「……」

今度は少女が沈黙を守る立場であるようだった。

「もし、俺という存在が因果な運命に導かれた星の元の、既に定め

られた事項であるとするのなら」

下方に落としていた視線を上に向け、頬に流れる風の感触を最大限に感じながら、青年が両手を大きく広げて、世界の全てを睨むような仕草を見せる。

「この世界はとうの昔に狂い落ちていただろうさ」

広げた両手の、だらしなく天に向かっていた平手がギュツと握られて、強き拳となる。

しかし、少女はそれにコメントを返すことはなく、青年と同じように遥か彼方に視線を向けてみる。

「そう、かもしれないですね……」

物憂げな表情で、少女がそう呟いた。

その横で、青年がだらりと両手を力無く落としてやや上がってきたフードの端を元の位置に戻して、踵を帰す。

そんな背中を見守って、少女が悲しそうな声音で告げる。

「もう、行ってしまうんですか？」

「ここでのんびりとしていられるほど、暇もないさ」

青年は言っただけ、ビルの屋上に備えてある転落防止の柵を楽々と乗り越えて、コートの装飾を僅かに揺らして屋上の出口へと向かうとする。

コッソ、と青年が一步、足音を鳴らして歩んだところで少女もようやく腰を上げて、宙を一度仰いでから大きく息を吐いた。

「そうですね……、私も」

瞳を閉じ、すうつと少女が大きく深呼吸してそれから下腹部に手を当てると、少女の足下に多重式の魔法陣が描かれて水色の淡い光が舞う。

そして、光と同じ色の水色の美しい鳥のような羽が、少女の背中から生え、そして少女の頭上に水色の光輪が踊る。

「まさに『天使』か……」

青年が皮肉めいたような言葉を、少女に向けて送る。

少女が肩越しから青年を見つめて、フツと自嘲したような笑みを見

せてから小さく頷く。

「それは我が戒め、かもしれませぬ……」

それから少女は青年に一瞥をすることもなく、迷いも躊躇いもなくスツとその身をビルの屋上から軽々しく投げた。

そしてその瞬間、重力がなくなってしまったかのように少女の華奢で小柄な身体は宙を羽根のように舞い、その姿が天空へと消えて失くなっていくように見えた。

それを眺めながら、青年が鼻で笑うような声を漏らす。

やがて、興味の失せたように青年が確信とした足取りで屋上の出口からその姿を忽然と消していく。

「全ては、遙か昔より定められた悲しきシナリオ、誰が予想できたでしょうか……？　そうでしょう、キラさん……」

少女は、悲しそうな、憂鬱なような複雑な表情で、ここにはいない、いるはずのない少年に向かってそう問い掛けた――。

☆ ☆ ☆

ゲームギョウ界でも火山の見られる土地はなかなか珍しい。しかも、それが活火山となると尚更である。

それが、かつてリーンボックスが『雄大なる緑の大地』と呼ばれた所以でもあった。火山の大地は肥沃で、そして何より美しい。自然という創造物の主は、人間の興味を引きつける不思議な魔力がある――などと誰かが言っていたような気がしたが、そんなものは全く分からないと言っても過言ではない現代っ子達は興味なさげに天に伸びる山頂を仰いでから、またフツと視線を手前に戻していた。

ゴツゴツとした岩肌が大気にさらされて、多少劣化している部分も

多く触るだけでボロボロと崩れる箇所も少なくなき、時折足を踏み外しそうになりながらも一行は道ではない道を進んでいた。決して道なき道ではなく、道ではない道である。

登山道からやや外れた位置にあるこの場所は、当然ながら整備もされておらず非常に足場が悪く、また高低差もかなりある。昇って下ってを繰り返しておりさながら一行はキラとテラの二人の男性を除いて半ばグロッキー状態であった。

「おーい、大丈夫か？」

そんな一団よりも遙か先に行くテラが、流石に後に続かなくなってきた少女達を気遣わしげに眺めやってそう言った。

が、当然というか少女達にそれに答えられるだけの余力が余っていたかと言えばそれは断じてNOであり、何も答えないところを見ると大丈夫なんだろうと勝手に結論づけたテラがまたずいずいと一人で先行していくのをアイエフが恨めしげに睨んで、頭上で憎ましげに爛々と輝く太陽を見やってか細い声で愚痴る。

「なんでアイツはあんなに元気なのよ……」

すぐそばの岩に手を突いて、その岩肌がボロボロと崩れ体勢を崩しかけたのを何とか引き戻して、額を流れる汗を袖で拭ってアイエフがジロツと先を見やる。

そんな一団の中で、アイエフの言葉に同意するように頷いた後に苦笑を見せたキラが、岩から飛び降りようとするコンパに力を貸しながら遙か上の方を仰いでみる。

「結構下ってきたんですね……、まだ着かないんでしょうか」
犯罪組織のアジトと言うくらいだから、そうそう目に付くところにあるとはキラでも思わなかったのだが、これは流石に苦行過ぎやしないかとも思う。あくまで『アジト』である。隠れ家の意味もあるはずなのに、こんなに苦労してまでアジトにたどり着くことができないうちになると相当手の込んだことだなあとキラがマイペースに思いつつ、今度はがすとの手助けをしてやろうと手を伸ばす。

「がすと、大丈夫？」

「だい、じょうぶ……ですの」

何とか着地して、がすとはふうと大きく息を吐く。がすとはこのメンバーの中でも最年少だし、何より体力がない。キラがおぶってやろうかと提案したのだが、がすの方が頑として聞き入れなかった。キラは少し心配であった。

「にゃっ!？」

「え……おぶっ!」

背後から聞こえたネプギアの短い悲鳴。そしてそれと同時にキラの視界がブラックアウトして背中に軽痛が走る。

当然、キラの後頭部は岩肌に強かに叩き付けられたワケであって、キラの視界にちかちかと青白い光のようなものが舞い、後頭部だけがジンジンと鈍く熱く痛んでいたのだが、何より目の前にあるピンクと白の縞々の模様を目に入れたとき、キラは顔が熱く火照っているのがよく分かった。

「のわああああああああああっ!？」

キラが絶叫したことによって、ネプギアもようやく気付いたらしく閃光の如き素早さでキラの上から身を退けた後、カァッと赤面した。

「うう……キラのえっち」

「待て、これは完全な事故だ」

と、そんなやりとりをするキラとネプギアの二人にすらも興味を示していない様子でアイエフがそれを横目に眺めてからがっくりと肩を落とす。

「にしても、いい加減に到着してもいい頃だと思っただけどね……」

「もうくたくたです……」

コンパががっくりと地面に腰を下ろしてしまう。

その後に続いてきた日本一、女子メンバーの中では結構体力のある方の日本一ではあったが、流石に彼女もここまできては疲労の色を隠せない様子でいた。

「いくら見つからないように、って言ってもこれは疲れるわね……」

」

元氣が取り柄と言っても過言ではない日本一がこれだけ元氣がないのだから、他の者の状態は推して知るべしであろう。

そして、そんな彼女らの心情を思いやったかどうかは分からないし、寧ろその可能性は限りなく低いような気がしないでもなかったが、彼女たちのやや先の方でテラが両手をブンブンと振って呼びかけていた。

それから十分ほどして、ようやく一団がテラの元へと追いつき、何やら神妙な顔つきで地面と睨み合っているテラを見ながら、コンパがぜいぜい言いながら問い掛けた。

「何を、するんですか……？」

「ん、ちょっとな」

それからテラは地面に膝を突き、コンコンと拳でテラ自身が現在乗っている岩肌を叩いてみると、岩とは思えない何かプラスチックのような音が響いていた。

「ここか」

「もしかして、入り口？」

日本一が首を傾げると、テラは苦笑してから立ち上がった。それから腰に手をやって、首筋をポリポリと搔く。

「まあ、正規の入り口じゃないがな。ここから侵入できる」

などと言うなり、テラはだらりと左右に下げていた両手をバツと正面に突き出して、それから瞳を閉じて何やら呪文のような言葉を呟き始める。

次いで、テラの足下に魔法陣が浮かび、そこから微風が流れてテラの黒い髪がさらさらと小さく揺れる。

それから、まるで女性のような唇が大きく開き、音を発しながら息が発せられる。

「危ないから、少し下がっている」

力強い口調でテラが言う。有無を言わさぬ口調であったため、全員がその言葉に従ってすごすごと2mほど後ろに下がる。

それを確認したテラが、正面に突き出していた両手を伸ばしたまま、右手の手の甲と左手の掌をぴったりと合わせて、それに呼応するようにテラの足下から起こっていた風が強さを増し、ビリビリと空気が揺れた。

開かれていた口から、更に大きく息が吐かれやがてそれが青白い色になってテラの頭上を舞い、それが人の形となってゆらゆらと手を繋ぎ合って身体を揺らしていた。

刹那、その薄い色をした人の影達が、繋ぎ合っていた両手をバツと勢いよく頭上に掲げ、そしてその繋がれた手の上に花火のような橙色の光が現れる。

何だろうか、その現象にキラは恐ろしく嫌な感じがした。

「あの……何を？」

「ここは、アジトの周りを囲う装甲が最も薄い場所だ」

テラが足下の岩から視線を外さないままですう言った。

キラが口元をぴくぴくと引きつらせて、額に大きな汗粒を流しながら恐る恐るだが問うてみる。

「あの、まさかとは思いますが……、爆破したりなんかは――」

「よく分かったな。爆発、結構ハデだから伏せてた方がいいぞ」

などと、テラが言い終わらない内にテラを中心にして激しい光が起こり、キラは咄嗟にネプギアとがすとの頭を押さえつけて、キラ自身も頭を伏せた。

直後、激しい音が周囲に鳴り響いてキラの身体にパラパラと石片が飛び当たる。

それから程なくして、キラがゆっくりと顔を上げるとテラがさっきまで立っていた場所に大きな穴が開いていた。

「これは……」

「さて、さっさと侵入するか」

よっこいしょ、とテラが淵に手を掛けようとしたところでキラの後ろでアイエフが視線を鋭くさせてズンズンとテラの元に歩み寄っていく。

「もうちょつとマシな方法はなかったワケ……?」

静かに凄味を込めて言ってくるアイエフに、テラは特に何も気にした様子を見せることなくおどけた調子で、腰に手をやってニカツと笑ってみせる。

「体裁を気にしちゃ、いつまで経っても侵入できないと思ったんでな」

と、そこで下方、アジト内部からバタバタと数名の駆け足の音が聞こえて、気になってそちらの方向を見やるとそこには爆音を聞きつけてきたらしい犯罪組織の構成員数名が、天井に開いた穴、そしてそこから覗くテラやアイエフを指している。

「お、おい！ 侵入者だ!」

「迎撃だ、迎撃準備!」

テラは興味のなさそうに首を傾げ、それから目を瞑って右手の人さし指と中指を立て、そこから黒い二つの光球を生み出す。やがてそれが目にもとまらないスピードでアジト内に侵入し、そして爆発するように無数の黒い針を突き出して、そこに集っていた構成員達を次々と串刺しにしていく。次いで、針の中心にある黒い球にヒビが走り、そこから青白い光が漏れて巨大な爆発を起こし、そこにいた全てのものを消滅させた。

アイエフやコンパ達が呆然とした表情を見せたまま突っ立っていたが、テラはそこからぴょんと飛び降りて、頭上にいる一同に目をやる。

「おい、もう大丈夫そうだ。降りてきてもいいぞ」

「ッ……、アンタ何したか分かってるの?」

テラにそう声を掛けられて、一度だけ逡巡を見せたようなアイエフがまるで怒りを込めたような口調でテラに問い掛けた。それから覚束ないような足取りで穴に近付いて、トンとアジトの中に着地し、ジロリとテラを睨む。

次々と降下してくるメンバーを眺め、最後にキラが降りてきたのを見計らってか、テラが腕を胸の前で組んで、無機質な表情になる。

「何か問題でもあったか？」

自分の行いに寸分の間違いもなかった、とでも言いたげな目をしてテラがそう低い声音で言ってくる。

テラの無機質な視線が突き刺さったように、アイエフがビクツと大きく身体を揺らして黙りこくった。それを満足そうに眺め、小さく頷いてテラが歩み出そうとするが、その肩がガシツと日本一に掴まれる。

「あ、なんだよ？」

面倒くさそうにテラが首から上だけを振り向かせて、気怠げな声を上げて不機嫌にそう問い掛ける。

「いくら犯罪組織に組してる人だって人間なのよ？　それをこうも簡単に……」

そうか、とキラは思う。

以前にアイエフに聞いた話だが、この日本一という少女はやたらと正義感が強くてこう見えても他人のことを重んじる性格である。それを、こうして目の前でいとも簡単に反してしまえば、彼女の癪に障るのも無理からぬ事なのかもしれない。

キツとテラを睨みつける日本一、姿勢を変えぬまま無言で次を待つテラ。

やがて、テラが半身を後ろに向けてかくんと身体を大きく揺らす。

「強いて言うのなら、これは俺の『覚悟』だ」

ギロツとでも言う風に、鋭い視線が身体を貫いていくような、そんな感覚に見舞われるような感覚に、キラはぞくりと背筋が凍るような思いでもしたかのようにだった。

「そう言うことだよ」

ふふんと鼻を鳴らしてテラが言った。

そんな、無然としたような態度にキラ達はもう何も言えなくなる。それから暫く無言で廊下を歩いて、それからテラが一つの扉の前に立ち、テンキーを操作してロックが外れて扉が勢いよく開く。

「この中にゲームキャラがいる。とっとと回収するぞ」

テラの言葉に一同がおっかなびっくり中に入っていく。

そこは薄暗い比較的広めの空間で、床は強化素材のようである。密閉された空間のために一同の歩む音が異様によく響いていた。

「暗くて見えないなあ……、どこかに電気は……？」

ネプギアがぺたぺたと壁づたいに電気の電源を探そうとするが、どこにも発見できない様子で首を傾げる。

それを見ながらアイエフが不機嫌そうな声を上げながら言う。

「別にわざわざ電気なんか使わなくても、随分と目が慣れてきて――」

と、そこまで言ってアイエフが息を呑んだ。

何故なら

「ククク……くははは！　こうも簡単に上手くいくなんて……、愉快を通り過ぎてお前達の行く末が心配になってくるな」

漆黒のコートのフードを深く被りなおした、ルウィーでキラ達の手助けをしたあの謎の男が、さっきまでテラがいた場所に立っていた。そして、右手に漆黒のオーラを纏わせてアイエフ、コンパ、日本一、がすとの4人に向けて放つ。

「ッ！？」

何も言えぬまま、4人の身体が大きな力で後方へと吹き飛んで、壁に強打される。

「まずは、4体……」

意識を失った4人の身体がずるずると落ちて、ようやく事態を悟ったキラとネプギアの二人が武器を構えて青年を睨みつける。

「お前は……！」

「俺は言ったよな……、『次にあったときは敵だ』ってな」

ニヤリと不敵に笑みを見せる、フードの奥から覗く唇がキラの全身を総毛立たせた。

EP. 35 [CORROBORATION] (後書き)

正直、みなさんから送られてきた感想を見るとニヤニヤが止まりませんでした

キラ「性格悪いなー…」

ぐふふ

キラ「『ブレイドアーツ』！」ブシャアアアアアアアアツ

ギャース！

キラ「ていうか、お前試験期間じゃねーのか」

知らぬ！

キラ「勉強しろ」

だが断る！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2700w/>

超次元ゲーム ネプテューヌmk2 OG

2011年11月23日15時55分発行